岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)

# 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

2

1973

岡山県教育委員会

# 序

岡山県教育委員会は，昭和４８年１１月，中国縦貫自動車道建設事業にともなう発掘調査のうち，第一分冊として押入西，下市瀬等７遺跡を収録した埋蔵文化財発掘調査報告書を既に発表いたしました。

このたび第２分冊として，宮尾・久米廃寺等５遺跡の報告書を発行する運びとなりました。

新しい遺跡の発掘調査に従事しながらの執筆であるため，内容的にも意に満たぬ点が多多ありますことは，十分承知いたしております。

本分冊に収録しました久米廃寺の埋蔵文化財の保護対策については最初土盛りであった設計を高架橋に変更して，遺跡の保存ができましたことは関係各方面の深いご理解とご協力のたまものと深く感謝いたしております。なお調査にあたって，日本道路公団津山工事事務所並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめとして，地元教育委員会，岡山県遺跡保護調査団，地元作業員の方々，その他関係各位のあたたかいご協力とご指導に対し，厚くお礼申しあげます。

昭和４９年３月

岡山県教育委員会

教育次長（文化課長事務取扱）

岡　田　政　敏

# 例　　言

1. 本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した。中国縦貫高速自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2. 調査は，第一次整備区間内の２５地点で，昭和４４年３月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和４８年６月３０日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，じつに４年３ケ月を要した。この間整備期間は皆無であって膨大な資料は整理ができていないため，報告書は５分冊に分けて逐次刊行してゆくことになった。本調査報告書はその第二分冊である。なお第二次整備区間は現在発掘調査が進行中である。

3. 中国縦貫道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和４２年５月，岡山県考古学研究者の会から申し入れに基づいて，対策委員に下記の諸氏を委託した。

| | | |
|---|---|---|
| 勝央中学校教諭 | 浅野克己 | （昭和４７年１１月～　　） |
| 津山市教育委員会主事 | 今井　堯 | （昭和４４年　４月～昭和４６年５月） |
| 旭第三小学校教諭 | 神原英朗 | （昭和４４年　４月～昭和４４年９月） |
| 岡山大学教授 | 近藤義郎 | （昭和４７年１１月～　　） |
| 津山みのり学園 | 植月壮介 | （昭和４４年　４月～　　） |
| 院庄小学校教諭 | 土居　徹 | （昭和４４年　４月～　　） |
| 津山高等学校教諭 | 宗森英之 | （昭和４７年１１月～　　） |
| 美作考古学研究会会長 | 渡辺健治 | （昭和４４年　４月～　　） |

4. 調査は，岡山県教育委員会文化課（昭和４４年度は社会教育課）が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる。なお，担当調査員は津山教育事務所兼務であるため，諸般にわたり，津山教育事務所の多大のご支援ご協力を得た。

昭和４４年度

| | | | 調査遺跡名 |
|---|---|---|---|
| 社会教育課長 | 富張　昇 | | |
| 主幹 | 神野　力 | | |
| 課長補佐 | 花房芳忠 | | |
| 〃 | 谷口　伶 | | |
| 管理係長 | 光嶋尚之 | | |
| 文化係長 | 桐野嘉雄 | | |
| 文化財保護主事 | 森　忠彦 | 高橋　護 | |
| 指導主事 | 神原英朗 | | 久米廃寺（第一次） |
| 主事 | 河本　清 | | |
| | 葛原克人 | 枝川　陽 | 西原遺跡 |
| | 泉本知秀 | 栗野克己 | 美作国府（第一次） |

津山教育事務所

| | | | |
|---|---|---|---|
| 所長 | 福島祐一 | | |
| 庶務課長 | 西口秀俊 | | |
| 庶務係長 | 小西一成 | | |
| 主事 | 山本剛 | | |

昭和４５年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育次長 | | | |
| 文化課長 | 三村克一 | | |
| 主幹 | 萩原一郎 | | 西原遺跡 |
| 〃 | 神野力 | | 久米廃寺跡（第二次） |
| 文化財係長 | 森忠彦 | | 二宮大東遺跡（第一次） |
| 文化財保護主事 | 高橋護 | | 押入飯綱神社古墳 |
| 主事 | 河本清 | 中力昭 | 押入西遺跡（第一次） |
| | 橋本惣司 | 伊藤晃 | 穴塚古墳 |
| | 泉本知秀 | 栗野克己 | 天神原遺跡（第一次） |
| | 柳瀬昭彦 | | 野介代遺跡 |
| | | | 美作国府跡（第二次） |

津山教育事務所

| | | | |
|---|---|---|---|
| 所長 | 福島祐一 | | |
| 次長 | 平井克己 | | |
| 庶務係長 | 本郷恵津夫 | | |
| 主事 | 山本剛 | | |

昭和４６年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 文化課長 | 神野力 | | |
| 参事 | 萩原一郎 | | |
| 文化主幹 | 光嶋尚之 | | |
| 文化財係長 | 森忠彦 | | |
| 文化財保護主査 | 高橋護 | | 領家遺跡 |
| 主任 | 大山行正 | | 二宮大東遺跡 |
| 文化財保護主事 | 河本清 | | 美作国府 |
| 主事 | 橋本惣司 | 伊藤晃 | 天神原遺跡 |
| 〃 | 栗野克己 | 泉本知秀 | 沼古墳 |
| 〃 | 柳瀬昭彦 | 下沢公明 | 押入西遺跡 |
| 〃 | 山磨康平 | 井上弘 | 宮尾遺跡（第一次） |
| 〃 | 岡田博 | 池畑耕一 | 赤野遺跡（第一次） |

津山教育事務所

| | | | |
|---|---|---|---|
| 所長 | 福島祐一 | | |
| 次長 | 平井克己 | | |
| 係長 | 田中篤周 | | |
| 主事 | 春名勝 | 難波友広 | |

昭和４７年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育次長 | | | |
| 文化課長 | 大原利貞 | | |
| 参事 | 萩原一郎 | | |
| 文化財主幹 | 富岡敬之 | | 赤野遺跡 |
| 文化主幹 | 原田道明 | | 下市瀬跡 |
| 文化財二係長 | 岡本明郎 | | 宮尾遺跡 |
| 主任 | 大山行正 | | 梶原遺跡 |
| 文化財保護主事 | 河本清 | | 平遺跡 |
| 〃 | 橋本惣司 | | 小中遺跡 |
| 主事 | 田仲満雄 | 栗野克己 | 小中古墳群 |
| | 泉本知秀 | 井上弘 | 上相遺跡 |
| | 松本和男 | 山磨康平 | 北山古墳群 |
| | 岡田博 | 高畑知功 | 狼谷遺跡 |
| | 二宮治夫 | | 高本遺跡 |

岡山県開発公社

| | | |
|---|---|---|
| 技師補 | 太田整 | 戸川孝二 |
| | 大賀秋秀 | 林徹也 |
| | 小林泰利 | 小倉辰之 |
| | 森安広之 | 寺坂伸生 |

津山教育事務所

| | | |
|---|---|---|
| 所長 | 福島祐一 | |
| 次長 | 赤木茂 | |
| 庶務係長 | 田中篤周 | |
| 主事 | 春名勝 | 難波友広 |

昭和４８年度

| | | |
|---|---|---|
| 教育次長 | | |
| 文化課長 | 岡田政敏 | |
| 参事 | 富岡敬之 | |
| 課長補佐 | 水川冨貴男 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 文化財主幹 | 浅原　健 | | |
| 文化係長 | 守屋　明 | | |
| 主任 | 渡辺武彦 | | |
| 文化財二係長 | 岡本明郎 | | |
| 主任 | 大山行正 | | |
| 文化財保護主事 | 橋本惣司 | | |
| 主事 | 栗野克己 | 岡田　博 | 小中遺跡 |
| | 松本和男 | 高畑知功 | 高本遺跡 |
| | 田仲満雄 | 浅倉秀昭 | 下市瀬遺跡 |
| | 井上　弘 | | 宮の前遺跡 |
| | 山磨康平 | | 且原遺跡 |
| | 二宮治夫 | | 須内遺跡 |
| | | | 平遺跡 |
| | | | 谷尻遺跡（第一次） |
| | | | 桃山遺跡（第一次） |
| | | | 植木遺跡 |

津山教育事務所

| | |
|---|---|
| 所長 | 宮島久夫 |
| 次長 | 赤木　茂 |
| 庶務係長 | 田中篤周 |
| 主事 | 清補修身 |
| | 難波友広 |

協　力　者

各遺跡調査地周辺の地元の方々，また，津山市，作東町，美作町，勝央町，久米町，落合町の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

久米廃寺，美作国府，宮尾遺跡については文化庁，田中琢，奈良国立文化財研究所，沢村仁，町田章，横田拓美，佐藤興治，下市瀬遺跡の銅鐸については，三木文雄，二・三，の遺跡から出土した鍛冶炉，鉱滓については広島大学助教授潮見浩，住田正男，芹沢正雄から有益なご教示と，助言を得た。宮尾遺跡の種子分析は，岡山大学農学部教授笠原安夫，木材鑑定は岡山大学農学部教授畔柳鎮，石器の材質鑑定は，岡山県教育センター上野等氏をわずらわした。記して感謝の意を表したい。

5. 本書に用いたレベル数値は，海抜高である。
6. 本書に用いた地形図は，国土地理院承認済である。$\frac{1}{1000}$ の地形図は，日本道路公団の ExprEss Plan をトレースしたものである。
7. 本報告書で用いる時代区分は一般的な政治区分に準拠し，それに補うために文化史区分と世紀を併用する。

# 報告書作成の経過

1） 報告書作成にいたる概要

昭和４１年に中国縦貫自動車道路（以下中国道とする）建設推進本部が岡山県に設置される。昭和４０年から開発関係の官庁，公団と文化庁（当時の文化財保護委員会）との間で，文化財の取り扱いに関する「覚書」が交換され，事前協議が制度化された。岡山県教育庁文化課（当時の社会教育課）は，昭和４０年来の道路公団と文化庁の「覚書」にもとずき，昭和４４年２月１日より，久米町宮尾「久米廃寺」の緊急発掘を開始した。そして「中国道」に伴う埋蔵文化財の発掘調査は，昭和４９年３月で５ケ年と１ケ月を迎えた。

その間，第１次整備区間（作東町より落合インターチェンジに至る５２.３Km）内に存在した２５遺跡（付表２）の発掘調査を終了し，第２次整備区間（落合インターチェンジより西に延び広島県境に至る６２.４Km）内に存在する遺跡の発掘調査と並行し，田邑収蔵庫において第１次整備区間内の２５遺跡の整理，報告書作成（付図１）を行っている。第１分冊（１１遺跡）を昭和４８年８月３１日，第２分冊（４遺跡）を１２月３１日，第３分冊（６遺跡）を昭和４９年２月２８日〆切りと予定し，発掘調査と報告書作成を３ケ月交代で行う基本方針を立て昭和４８年７月１日より開始した。そして第１分冊が予定をオーバーして印刷にかかったため，期間の関係等から第１分冊製本状態を検討できないままに，第２分冊の整理，報告書作成を開始し現在に至っている。

2） 整理の状態（付図１，２）

発掘調査に伴う出土遺物は，調査を実施した関係市町の教育施設等に保管を願ったり，発掘現場の倉庫等に保管していた。又写真，図面等の記録保存資料は各担当者が，新しい現場に持ちこみ保管するという状態であった。そのような折，昭和４７年発掘調査事務所の遺物盗難事件があいついで発生し，県議会でも遺物の管理について問題になった。そして，出土遺物の莫大な量に伴う写真，図面等の集中管理の望ましいこと等を含めて，調査開始後４年目にあたる昭和４７年１２月に収蔵庫が建設された。旧田邑小学校内（７５０$m^2$）の敷地を市より借用し，とりあえずプレハブ２棟（４００.９８$m^2$）を建て，遺物，写真，図面等の搬入がおこなわれ現在も２，３の遺跡は搬入中である。そして，一棟に遺物を保管し，他１棟内を２部屋にしきり整理，報告書作成場所と遺物写真等の保管とに割りあてている。

整理作業は，調査員４～５名，作業員３～７名にて進められた。しかし，昭和４４年２月～昭和４９年３月までの間に２０名の調査員が発掘調査を担当してきたが，転勤，移動等により作成段階では１０名となり，その半分５名が発掘調査を担当し，残り５名があたるという状態であった。

3） 第１次整備区間の報告書作成と第２次整備区間の発掘調査の現状

付図１－第１分冊及び第２分冊作成に関する調査員の実動

付図２－昭和４４年２月より昭和４８年６月３０日までの発掘調査のおおよその具体性と報告書作成の関係比較

これらの付図より，５年間発掘調査に終始し，整理・報告を行えなかった現実と，さらにその傾向をそのまま延長してしまった第２次整備区間の発掘調査，報告書作成より生じた問題点

① 5年間の未整理と，その間の調査担当者の異動等による，残る担当者への負担（１人１遺跡の報告書作成）と担当遺構の具体性の欠損

② １遺跡３名の担当者体制から１遺跡１名の担当者が発掘調査を行う体制

③ 第２次整備区間の発掘調査を担当しながら第１次整備区間の整理報告書作成を現場で同時に行う

④ 遺跡の規模と報告書作成の期間，人員等のバランスの不均衡（報告書作成の具体性の欠如）

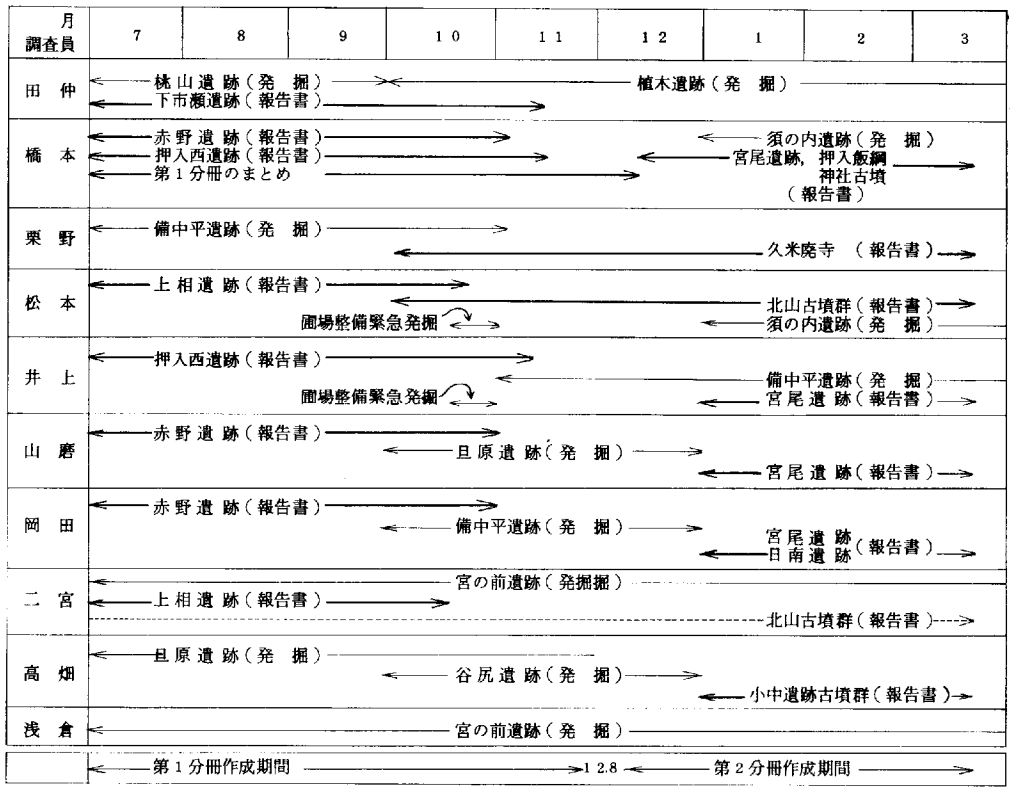
※ 報告書作成にたずさわった人（第１，２分冊）

今井比登美，草苅寛子，杉原美左子，橋本雅子，日笠栄，
日笠月子，日笠愛美，水島千春，水島規子

4）おわりに

報告書は本来どのような報告書を作るかという作成者の意識を原点として計画されるべきものであると考える。しかし，現実は従来の習慣・予算の不足・期限の制約・人手不足等の経済的要因が報告書作成を規制する大きな役割を占めている。このような状況の中で，われわれは『考古学は遺跡・遺物を研究し，これによって過去の人類の文化内容や生活様式・その背景とする社会構造等を究明する学問である』という本来の目的との間にある大きなへだたりを感じている。今後，この現状を打破するあらゆる努力を払わなければならない。

第１，２分冊作成関係一覧表（作図１）




（昭和49.3.13）

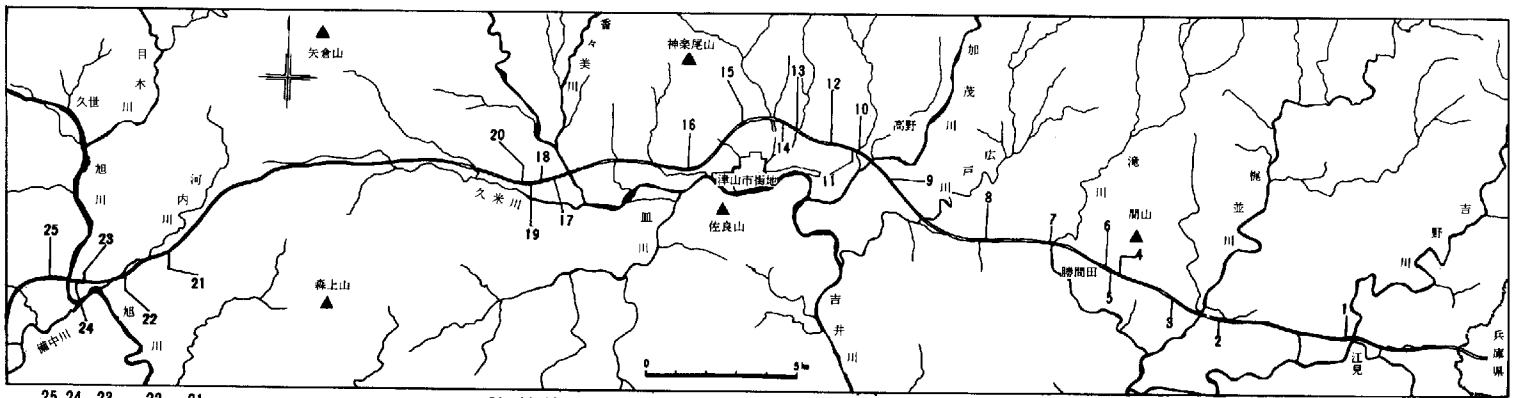
中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査，報告書作成一覧表（付図２）

| | | 発掘調査 | | | | | | | 整理・報告書 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 遺跡名 | 契約<br>調査期間 | 月数 | 契約<br>面積 | 路線<br>延長 | 遺構数 | 遺物<br>(40×70)<br>×15cm | 調査員 | 報告書<br>作成期間 | 収蔵庫にて整理 | 報告書<br>作成者 | 備考 |
| | | | | $m^2$ | m | | 箱 | | | (月) | | |
| 第1分冊 | 下市瀬遺跡 | 47. 8.20<br>48. 5.31 | 9 | 4,000 | 230 | 19 | 140 | 岡本・河本<br>田仲・新東 | 48. 6.28<br>48.11. | $\frac{2}{3}$ | 田仲・新東 | ○第２次整備区間の発掘調査と並行して現場で作成（田仲）<br>○昭和４８年６月３０日鹿児島県庁文化課へ転勤し鹿児島より原稿郵送（新東） |
| | 赤野遺跡 | 47. 1.20<br>47. 2.19<br>47. 4. 1<br>47. 6.21 | 3 | 960 | 70 | 6 | 10 | 河本・橋本<br>柳瀬・岡田<br>山磨 | 48. 7. 1<br>48.10.31 | 3 | 橋本・山磨<br>岡田 | ○昭和４８年７月１日岡山県津山市教育委員会へ出向した（河本）<br>○昭和４７年４月１日兼務をとかれ山陽新幹線発掘調査報告書作成に従事（柳瀬） |
| | 野介代遺跡 | 46. 2.26<br>46. 3.31 | 1 | 270 | 約100 | 4 | 2 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢 | 48.<br>48. | $\frac{1}{3}$ | 河本・橋本<br>柳瀬 | ○昭和４７年４月１日兼務をとかれ本庁勤務（下沢）<br>○本庁より出張し整理作成（柳瀬） |
| | 梶原遺跡 | 47. 7.18<br>47. 8.11 | 2 | 100 | 140 | 1 | 5 | 田中・井上 | 48. 7. 1<br>48. 9.30 | $\frac{1}{3}$ | 田仲・井上 | ○第２次整備区間の発掘調査と並行して現場で作成（田仲）<br>○田邑収蔵庫にて作成（井上） |
| | 志戸部調査区 | 46.12. 1<br>46.12.10 | 1 | 464 | | 0 | 0 | 井上・伊藤 | 48. 7. 1<br>48.11. | $\frac{1}{30}$ | 井上 | ○押入西遺跡と同時作成（井上） |
| | 上相遺跡 | 47. 7. 1<br>47. 8.31 | 2 | 500 | 70 | 5 | 5 | 松本・二宮<br>泉本 | 48. 7. 1<br>48.10.15 | $3\frac{1}{2}$ | 松本・二宮 | ○田邑収蔵庫にて作成（松本）<br>○第２次整備区間の発掘調査と並行して現場で作成（二宮）<br>○昭和４７年８月４日大阪府文化財保護課へ転勤（泉本） |
| | 押入西遺跡 | 45. 9. 5<br>45.11.30<br>47. 1. 7<br>47. 3.31 | 8 | 1,470 | 約100 | 15 | 50 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢<br>井上 | 48. 7. 1<br>48.11.22 | 3 | 橋本・柳瀬<br>井上 | ○田邑収蔵庫にて作成（橋本・井上） |
| 第2分冊 | 久米廃寺 | 44. 2. 1<br>45. 1.31<br>45. 4. 1<br>46. 3.31 | 24 | 5,232 | 約150 | 15 | 1,800<br>(このうち<br>瓦1,700) | 河本・葛原<br>枝川・栗野<br>泉本・山磨 | 48.10. 1<br>49. 3. | 6 | 栗野 | ○昭和４８年６月３０日県立博物館へ転勤(葛原)<br>○昭和４５年４月１日本庁山陽団地発掘調査（枝川）<br>○宮尾遺跡報告書作成中（山磨）<br>○収蔵庫にて作成（栗野） |
| | 宮尾遺跡 | 46. 9.20<br>46.12.11<br>47. 4. 1<br>48. 1.31 | 12 | 7,922 | 300 | 30 | 71 | 橋本・岡田<br>山磨・井上 | 48. 2.16<br>49. 3.31 | 5 | 橋本・山磨<br>岡田・井上 | ○第２次整備区間の発掘調査と並行して現場で作成中（井上・橋本）<br>○田邑収蔵庫にて作成中（岡田・山磨） |
| | 北山古墳群 | 47. 4. 1<br>47.11.30 | 4 | 800 | 80 | 6 | 30 | 松本・二宮<br>泉本 | 48. 9. 6<br>49. 3.31 | $3\frac{1}{2}$ | 松本・二宮 | ○２ヶ月収蔵庫にて整理，途中甫場整備の緊急発掘調査に２週間（松本）<br>○第２次整備区間の発掘調査と並行して作成中（松本・二宮） |
| | 押入飯綱神社古墳群 | 45. 4. 1<br>45. 9.10 | 2 | 693 | | 3 | 1 | 橋本・柳瀬 | 49. 1. 1<br>49. 3.31 | $\frac{1}{3}$ | 橋本 | ○第２次整備区間の発掘調査と並行して作成（橋本） |
| | 日南遺跡 | 47.11. 1<br>47.11.30 | 1 | 230 | 30 | 2 | 1 | 橋本・山磨<br>岡田 | 49. 1. 4<br>49. 3.31 | $\frac{1}{6}$ | 岡田 | ○田邑収蔵庫にて作成（岡田） |
| 第3分冊 | 西原遺跡 | 44.10<br>45. 3.31 | 6 | 1,530 | | 23 | 120 | 神原・河本<br>枝川・柳瀬<br>栗野・橋本<br>中力・伊藤<br>新東・松本 | 48.<br>48.10.31 | $\frac{1}{7.5}$ | 橋本・栗野 | |
| | 美作国府 | 45. 3. 5<br>45. 3.31<br>46. 3. 9<br>47. 3.31 | 14 | 8,167 | 約300 | 22 | 350 | 高橋・河本<br>橋本・伊藤<br>泉本・井上<br>柳瀬・岡田<br>池畑 | 48. 4.14<br>48.12.27 | 1 | 井上・岡田 | ○出土遺物注記（作業員） |
| | 天神原遺跡 | 45.11.24<br>47. 6.10 | 20 | 4,908 | 約250 | 47 | 93 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢<br>新東 | 48. 2.14<br>48.12.18 | 2 | 橋本 | ○出土遺物水洗い注記（作業員） |
| | 二宮大東古墳 | 46. 2. 4<br>46. 2.20 | 1 | 600 | 約150 | 13 | 60 | 栗野・泉本<br>山磨 | 48. 7.13 | $\frac{1}{30}$ | 栗野・山磨 | ○写真整理（栗野） |
| | 狼谷遺跡 | 47. 4. 1<br>48. 3.31 | 6 | 2,500 | 500 | 51 | 27 | 松本・二宮<br>泉本 | 48. 4.19<br>48. 6.18 | $\frac{1}{3}$ | 松本・二宮 | ○出土遺物注記（作業員） |
| | 穴塚古墳 | 45. 7.27<br>45. 9.25 | 2 | 157 | | 1 | 2 | 中力・伊藤 | | 0 | | ○第１分冊出版予定がのび第３分冊へ |
| | 沼古墳群 | 46.12. 1<br>46.12. 9 | 1 | 464 | | 4 | 1 | 伊藤・井上 | | | 井上 | ○第１分冊出版予定がのび第３分冊へ |
| 第4分冊 | 平遺跡 | 47. 4. 1<br>48. 3.31 | 10 | 3,000 | 260 | 25 | 270<br>(このうち<br>瓦 72) | 田仲・井上 | 48. 2.15<br>49. 1.14 | 1 | 田仲・井上 | ○出土遺物水洗い注記（作業員） |
| | 下河内遺跡 | 47. 1.20<br>47. 2. 7 | 1 | 120 | | 0 | 2 | 河本・橋本<br>柳瀬 | | | 橋本 | ○第１分冊出版予定がのび第４分冊へ |
| | 小中遺跡 | 47. 4. 1<br>〃 | 12 | 4,500 | 280 | (このうち<br>近世墓103)<br>217 | 140 | 栗野・高畑 | 48. 7. 4<br>〃 | 4 | 高畑 | ○田邑収蔵庫にて久米廃寺報告書作成中（栗野） |
| | 小中古墳群 | 48. 6.30 | 3 | 1,300 | 80 | 27 | 20 | 栗野・高畑 | 49. 3.31 | | 高畑 | ○田邑収蔵庫にて作成中（高畑）<br>○田邑収蔵庫にて久米廃寺報告書作成中（栗野） |
| | 高本遺跡 | 47. 4. 1<br>48. 6.30 | 8 | 4,000 | 300 | 35 | 180<br>(このうち<br>金くそ54) | 井上・松本<br>泉本・岡田<br>山磨 | 48. 7.11<br>48. 7.18 | $\frac{1}{4}$ | 井上・松本<br>岡田・山磨 | ○水洗いと注記を行う（作業員） |
| 第5分冊 | 領家遺跡 | 46. 4. 1<br>47. 3.31 | 12 | 2,90 | 約150 | 65 | 250 | 栗野・山磨 | 48.10.29 | $\frac{1}{30}$ | 栗野・山磨 | ○写真焼増し（栗野） |
| 計 | ２５遺跡 | | 165 | 58,223 | | 626 | 3,628 | ８９ | | | | |

○なおこの資料は昭和４９年３月現在なので，その後に追加補正されます。

○第３分冊以降の報告書作成者名は予定である。

（昭和４９年３月１３日）




1 高本遺跡
2 狼谷遺跡
3 北山古墳群
4 上相遺跡
5 小中古墳群
6 小中遺跡
7 平遺跡
8 梶原遺跡
9 天神原遺跡
10 押入飯綱神社古墳群
11 押入西遺跡
12 野介代遺跡
13 志戸部調査区
14 沼古墳群
15 美作国府跡
16 二宮大東遺跡
17 日南古墳
18 宮尾遺跡
19 久米廃寺
20 領家遺跡
21 下河内調査区
22 赤野遺跡
23 穴塚古墳
24 西原遺跡
25 下市瀬遺跡

第1図　遺跡の位置　（作成　橋本）

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表①　（昭和44年～48年６月）

| | 遺跡名 | 所在地 | 契約調査期間 開始年月日 終了年月日 | 月数 | 契約面積 | 主な調査員 | 概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高本遺跡 | 作東町川北 | 47.4.1<br>48.6.30 | 8 | 4,000㎡ | 井上・松本<br>泉本・岡田<br>山磨 | ①弥生時代中期中葉～後期，住居址３・貯蔵穴状ピット・土器・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石鏃・石庖丁・磨製石剣・サヌカイト製砥石　②古墳時代終末期，須恵器　③奈良～平安時代，掘立柱建物８・鍛冶炉・炉壁・鉄滓・焼土・木炭片・須恵器・土師器・円面硯２・墨書土器１（郡）④中世～近世，備前焼・青磁・陶器 |
| 2 | 狼谷遺跡 | 美作町楢原 | 47.4.1<br>48.3.31 | 6 | 2,500 | 松本・二宮<br>泉本 | ①弥生時代中期～後期包含層・住居址６・土器・土器片紡錘・太型蛤刃石斧・台石　②古墳時代後期，掘立柱建物６・土壙墓？28・古墳６・溝４・須恵器・土師器　③平安時代以降，土壙墓１・土師器・備前焼 |
| 3 | 北山古墳群 | 美作町北山 | 47.4.1<br>47.11.30 | 4 | 800 | 松本・二宮<br>泉本 | ①弥生時代中期中葉，住居址２・土器・石斧・石鏃・石錐・石錐・石庖丁・サヌカイト破片　②古墳時代後期，円墳４・木棺直葬・須恵器（装飾付壺）・土師器・埴輪（土師質・須恵質・円筒・ヒレ付・朝顔・人物）・勾玉・管玉・ガラス玉・土玉・直刀・刀子・鎌・鋸・馬具（轡・辻金具・鉸具）・鏡　③鎌倉山地区米弥生時代終末期～古墳時代前期，住居址42・袋状ピット・土器・石庖丁・石錐・砥石・磨石・たたき石・敲・勾玉米古墳時代後期，住居址・須恵器・土師器米鉄滓 |
| 4 | 上相遺跡 | 美作町上相 | 47.7.1<br>47.8.31 | 2 | 500 | 松本・二宮<br>泉本 | ①古墳時代後期，住居址２（竈付）・掘立柱建物３・須恵器・土師器・砥石・鉄滓・炉壁・砥石 |
| 5 | 小中古墳群 | 勝央町岡 | 47.4.1<br>48.6.30 | 3 | 1,300 | 栗野・高畑 | ①弥生時代終末期，住居址８～10・土器・石皿・たたき石・石庖丁・砥石・敲　②古墳時代後期，円墳４（木棺直葬？）土壙墓３・須恵器・土師器・金環・刀子・馬具（轡）鉸具・鉄鏃　③奈良～平安時代，古道・須恵器・土師器 |
| 6 | 小中遺跡 | 勝央町岡 | | 12 | 4,500 | 栗野・高畑<br>松本 | ①弥生時代中期中葉～後期終末期～古墳時代前期？，住居址30・掘立柱建物・柵列・掘・土壙墓14・壺棺１・土器・土器片紡錘・土師器・管玉・石庖丁・太型蛤刃石斧・石鏃・石槍・砥石・たたき石・台石　②古墳時代後期，土壙１・鎌　③奈良～平安時代，古道・掘立柱建物・須恵器・土師器・瓦質土器・鉱滓　④中世後半～近世，墓・土製品（人形・魚・鈴）・古銭・鎌・包丁・釘・キセル・火打鎌・カンザシ |
| 7 | 平遺跡 | 勝央町平 | 47.4.1<br>48.3.31 | 10 | 3,000 | 田仲・井上 | ①勝田郡の郡家の一部？，奈良・平安時代，礎石建物１・掘立柱建物８・柵列１・溝・井戸・鍛冶炉７・須恵器・土師器・瓦器・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青磁・文字土器（印・ヘラ書き・墨書）・硯（蹄脚硯・円面硯・風字硯・風字二面硯・坏蓋硯）・瓦（軒丸瓦２種・軒平瓦２種・平瓦・丸瓦）・管状土錘・鉄滓・ふいごの羽口・刀・刀子・釘・木の葉　②中世，建物６・墳墓・備前焼骨壺・人骨・土師器近世陶磁器 |
| 8 | 梶原遺跡 | 勝央町福吉<br>津山市梶原 | 47.7.18<br>47.8.11 | 2 | 1,000 | 田仲・井上 | ①弥生時代後期，包含層・柱穴・土器<br>②中世，墳墓・備前焼骨壺・人骨<br>③近世墓・陶磁器・古銭・硯・キセル |
| 9 | 天神原遺跡 | 津山市河辺 | 45.11.24<br>47.6.10 | 20 | 4,908 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢<br>新東 | ①先土器時代，切出状ナイフ形石器１　②弥生時代前期末・後期・終末期・住居址25・掘立柱建物７・溝・土壙５・貯蔵穴・土器・石斧・石鏃・たたき石・石皿・砥石・敲・刀子・鉄鏃炭化材　③古墳時代後期，円墳７（木棺直葬・箱式石棺・）・土壙墓・住居址２（鍛冶炉付？）・須恵器・土師器・陶棺・鏡・鉄滓　④奈良時代・須恵器・円面硯 |
| 10 | 押入飯綱神社古墳 | 津山市押入 | 45.4.1<br>45.9.10 | 2 | 693 | 橋本・柳瀬 | ①古墳時代後期，方墳１（葺石・箱式石棺）・円墳１・土壙１・配石遺構・須恵器・土師器・刀子 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 押入西遺跡 | 津山市押入 | 45.9.5<br>45.11.30<br>47.1.7<br>47.3.31 | 8 | 1,470 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢<br>井上 | ①弥生時代中期後半，住居址９・掘立柱建物３・段状遺構・土器・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁（未製品も）・石鏃・砥石・炭化米　②古墳時代後期，円墳２（木棺直葬）・鹿角装刀子・素環頭太刀・鉸具・銙板・帯先金具・鉄斧・鎌・鑿・釘・須恵器・土師器　③奈良時代，墳墓・須恵器骨壺２・人骨 |
| 12 | 野介代遺跡 | 津山市<br>野介代 | 46.2.26<br>46.3.31 | 8 | 270 | 河本・橋本<br>柳瀬・下沢 | ①弥生時代中期後半，住居址３・土器・扁平片刃石斧・石鏃・炭化材 |
| 13 | 水田遺構 | 津山市<br>志戸部 | 46.12.1<br>46.12.10 | 1 | 446 | 井上・伊藤 | 遺構なし |
| 14 | 沼古墳群 | 津山市沼 | 46.12.1<br>46.12.9 | 1 | | 伊藤・井上 | ①古墳時代，箱式石棺４？・人骨 |
| 15 | 美作国府址 | 津山市総社 | 45.3.5<br>45.3.31<br>46.3.9<br>47.3.31 | 14 | 8,167 | 高橋・河本<br>橋本・伊藤<br>泉本・井上<br>柳瀬・岡田<br>池畑 | ①弥生時代中期～後期，土壙・集石土壙・溝・土器・太型蛤刃石斧・石庖丁・石鏃・砥石・織具・ヒョウタンの皮種子・桃の種子・カヤ　②古墳時代後期，土師器・須恵器　③美作国府（西北部）・建物６・築地跡・溝・井戸５・井戸状ピット５・瓦（軒丸瓦３種・軒平瓦３種平瓦３種・丸瓦）・硯（蹄脚硯・円面硯・風字硯・坏蓋硯）・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青白磁・須恵器・土師器・馬形土製品・墨書土器・竈形土器・瓦器・斎串状木簡・斎串・曲物・つるべ桶・籠・桃・栗・櫛・銅製刀子・刀子・釘・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・牛の鼻輪 |
| 16 | 二宮大東<br>遺跡 | 津山市二宮 | 46.2.4<br>46.2.20 | 1 | 600 | 栗野・泉本<br>山磨 | ①弥生時代中期・後期・終末期，住居址３・溝・ピット・炉跡・土器・鉈・たたき石・石庖丁・炭化材　②古墳時代後期，住居址・円墳（横穴式石室）・陶棺３・須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・金銅透彫鍔・馬具（鞍・杏葉）・勾玉・切子玉・ガラス玉・土玉　③飛鳥様式単弁軒丸瓦　④平安末～中世，ピット３・建物２・須恵器・土師器・備前焼・古銭・鉄滓 |
| 17 | 日南古墳群 | 久米町宮尾 | 47.11.1<br>47.11.30 | 1 | 230 | 橋本・山磨<br>岡田 | ①古墳時代，箱式石棺１<br>②平安時代・古道・土師器・須恵器 |
| 18 | 宮尾遺跡 | 久米町宮尾 | 46.9.20<br>46.12.11<br>47.4.1<br>48.1.31 | 12 | 7,922 | 橋本・岡田<br>山磨・井上 | ①縄文時代晩期，土器・石鏃　②弥生時代中期初頭～中葉・後期，水路・土器・扁平片刃石斧・石庖丁・石鏃・炭化米・管玉③古墳時代後期，須恵器　④久米郡の郡家跡，白鳳時代～奈良・平安時代，掘立柱建物20・柵列・門・溝・井戸１・土壙・瓦少量・須恵器・土師器・瓦器・硯（円面硯・坏転用硯）・竈形土器・緑釉・青白磁・鉄滓・ふいごの羽口・古銭・漆膜付須恵器・植物種子・藁・板材　⑤野辺地区，白鳳～奈良時代，竪穴状遺構３・鍛冶炉３・井戸状ピット・構状遺構・須恵器・土師器・釘・鎹・円板状鉄器・釘・鉄滓・砥石・平瓦 |
| 19 | 久米廃寺 | 久米町宮尾 | 44.2.1<br>44.3.31<br>44.4.1<br>45.1.31<br>45.4.1<br>46.3.31 | 24 | 5,232 | 河本・葛原<br>枝川・栗野<br>泉本・山磨 | ①弥生時代中期・後期，土器・環状石斧・サヌカイト原石　②古墳時代後期，住居址？・須恵器・土師器・鉱滓　③白鳳時代創建寺院趾・奈良～平安時代，塔・金堂・講堂・僧坊？等（礎石建物５・掘立柱建物３），回廊・築地・溝・円形ピット・瓦（軒丸瓦４種・軒平瓦５種・丸瓦２種・平瓦６種・隅切瓦・熨斗瓦）・須恵器・土師器・緑釉・仏像（塑像仏は如来・菩薩・天部など・塼仏３）・円面硯・墨書土器・文字瓦・水晶・金箔・相輪・鉄鏃・釘・鎹・刀子・鉄滓・掘立柱柱根・流木・壁土・種子（くるみ・もも・とち）・石製銙帯 |
| 20 | 領家遺跡 | 久米町領家 | 46.4.1<br>47.3.31 | 12 | 2,900 | 栗野・山磨 | ①先土器時代，丸のみ片刃石斧　②弥生時代中期～後期，住居址13・土壙２・集石遺構１・土器・石庖丁・太型蛤刃石斧・扁平片刃斧・石鏃・敲石・凹石・紡錘車・ガラス玉・炭化米・炭化材・カヤ　③古墳時代前期～後期，住居址19（竈付４）・時期未決住居址９・鍛冶炉１・土壙１・合口甕棺１・土師器・須恵器・土製支脚・竈形土器・金環・鉄滓・ふいごの羽口・鉄斧・砥石・ガラス玉・桃の種子・炭化材　④奈良～平安時代，掘立柱建物16・礎石建物１・井戸１（曲物の井戸枠）・溝・土師器・須恵器・花文壺・緑釉・灰釉・青磁・刀子・鉄鏃・釘・鉄製紡錘・クサビ・鉄滓・石錘・管状土錘・瓦（軒丸瓦・軒平瓦）・石製銙帯 |
| 21 | 下河内遺跡 | 落合町<br>下河内 | 47.1.20<br>47.2.7 | 1 | 120 | 河本・橋本<br>柳瀬 | ①遺構なし，弥生式土器・須恵器・土師器・古銭 |

| | 遺跡名 | 所在地 | 契約調査期間<br>開始年月日<br>終了年月日 | 月数 | 契約面積 | 主な調査員 | 概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 22 | 赤野遺跡 | 落合町赤野 | 47.1.20<br>47.2.19<br>47.4.1<br>47.6.21 | 3 | 960 | 河本・橋本<br>柳瀬・岡田<br>山磨 | ①縄文時代早朝・後期・晩期，土器片・サヌカイト石鏃・すり石・黒曜石片　②古墳時代前期・後期，住居址2・土師器・須恵器　③中世（鎌倉～室町時代），館跡・建物3・L字状掘によって区画・ピット・土師器・瓦器・灯明皿・灰釉・備前焼（擂鉢・壺）・青磁碗・中世陶器・漆器片・鉄鏃・釘 |
| 23 | 穴塚古墳 | 落合町西原 | 45.7.27<br>45.9.25 | 2 | 157 | 中力・伊藤 | ①古墳時代後期，円墳1（横穴式石室）須恵器馬具（鞍）・刀子・鉄鏃・鉄斧 |
| 24 | 西原遺跡 | 落合町西原 | 44.10.1<br>45.3.31 | 6 | 1,530 | 神原・河本<br>枝川・栗野<br>橋本・中力<br>伊藤・新東<br>松本・柳瀬 | ①縄文時代中期・後期・晩期，土器片・御物石器　②弥生時代中期・後期～終末期，住居址12土壙10・すり鉢状ピット1・土器・石庖丁・太型蛤刃石斧・両刃石斧・石鏃・砥石・鉇・分銅型土製品　③古墳時代，奈良時代以降，須恵器・土師器・管状土錘・紡錘状土製品 |
| 25 | 下市瀬遺跡 | 落合町<br>下市瀬 | 47.8.20<br>48.5.31 | 9 | 4,000 | 岡本・河本<br>田仲・新東 | ①弥生時代中期末・後期～終末期・住居址1・壺棺1・井戸1・水路・土器（特殊壺・絵画土器・スタンプ施文土器）・石庖丁・石皿・たたき石・石錘・太型蛤刃石斧・土玉・銅鐸・フォーク状木器・櫂状木器・槽・田下駄？・スプーン状木器・建築材・種子（桃・どんぐり・かんぴょう）　②古墳時代後期，水路・須恵器　③奈良～平安時代，焼石建物1・掘立柱建物5・井戸3・須恵器（多首壺・蓮弁付高坏）・土師器・瓦器・墨書土器・緑釉（須恵質）・青磁・管状土錘・瓦（軒丸瓦2種・軒平瓦5種）・坏転用硯（朱墨あり）・舟形木器・人形・斎串・木皿・櫛状木器・ヘラ状木製品・種子（桃）・鉄滓　④中世～近世，建物3・備前焼・近世陶磁器 |

(3)

- このうち久米廃寺は一部建物を高架橋にて保存，宮尾遺跡は盛土下に一部遺構埋没，他は調査後破壊。
- この表は昭和48年12月現在です。資料整理中なので今後も追加補正されるものもあります。また落合インターチェンジ以西は現在発掘調査中です。
- この資料の作成にあたり，各調査員の協力と助言を得ました。
- 遺跡の番号は以後の報告書に共通する。
- 資料2に発掘調査前の状況が書かれているので参照されたい。

（栗野　克巳）

# 総　目　次

1　北山古墳群(3) …… 1

2　押入飯綱神社古墳群(10) …… 83

3　宮尾遺跡(18) …… 105

4　日南遺跡(17) …… 257

5　久米廃寺(19) …… 267

# 1 北山古墳群(3)

# 目　　次


1. 調　査　経　過　　（文……二　宮　治　夫）…… 11

2. 日　誌　抄　（まとめ……二　宮　治　夫）…… 12

3. 北山古墳群の立地と環境（文……松　本　和　男）…… 13

4. 1　号　墳　　（〃　　〃　　）…… 19

5. 2　号　墳　　（文……二　宮　治　夫）…… 64

6. 3　号　墳　　（〃　　〃　　）…… 70

7. 4　号　墳　　（文……松　本　和　男）…… 77

8. まとめにかえて　（〃　　〃　　）…… 81

# 図　目　次


第 1 図　北山古墳群周辺地形図　作成…松本 …… 7
第 2 図　中国縦貫道に伴なう分布調査地図　作成…遺跡保護調査団，県教委 …… 8
第 3 図　北山古墳群地形図　実測…太田・戸川・二宮・松本　製図…松本 …… 9
第 4 図　1号墳墳丘実測図　実測…太田・戸川・二宮・松本　製図…松本 …… 15
第 5 図　1号墳断面図　実測…太田・寺坂・松本・製図…松本 …… 17
第 6 図　1号墳墳頂部出土の備前焼　実測・製図…松本 …… 19
第 7 図　1号墳出土の古銭　拓本…松本 …… 19
第 8 図　1号墳墳頂部出土の灯明皿　実測・製図…松本 …… 20
第 9 図　1号墳盛土内出土弥生式土器　実測・製図　松本 …… 20
第10図　1号墳下出土甕棺　実測・製図…松本 …… 21
第11図　1号墳表採，攪乱層，周溝内出土須恵器実測図　実測・製図…松本 …… 22
第12図　1号墳表採，攪乱層，周溝内出土須恵器実測図　実測・製図…松本 …… 23
第13図　1号墳出土大甕　実測・製図…松本 …… 26
第14図　1号墳第1主体平面図　実測…二宮　製図…松本 …… 27
第15図　1号墳第1主体出土遺物実測図　実測・製図…松本 …… 28
第16図　1号墳第1，第2主体出土直刀実測図　実測・製図…松本 …… 29
第17図　1号墳第2主体平面図　実測…二宮　製図…松本 …… 31
第18図　1号墳第2主体出土の勾玉，管玉実測図　実測・製図…松本 …… 33
第19図　第2主体出土鏃，不明鉄器実測図　実測・製図…松本 …… 33
第20図　1号墳出土鉄鏃実測図　実測・製図…松本 …… 35
第21図　1号墳第2主体出土鉄器実測図　実測・製図…松本 …… 36
第22図　1号墳第2主体及び攪乱層出土刀子　実測・製図 …松本 …… 37
第23図　1号墳第2主体出土須恵器実測図　実測・製図…松本 …… 38
第24図　1号墳第2主体出土須恵器実測図　実測・製図…松本 …… 39
第25図　1号墳第2主体出土提瓶実測図　実測・製図…松本 …… 40
第26図　1号墳埴輪マーク拓本　拓本…松本 …… 42
第27図　1号墳埴輪マーク拓本　拓本…松本 …… 43
第28図　1号墳円筒埴輪列平面図（出土状態）　実測…寺坂　製図…松本 …… 43
第29図　1号墳出土動物土製品，人物埴輪，不明形象埴輪　実測・製図…松本 …… 44
第30図　1号墳出土人物埴輪，動物埴輪(?)　実測・製図…松本 …… 45
第31図　1号墳出土人物埴輪　実測・製図…松本 …… 46
第32図　1号墳埴輪実測図　実測・製図…松本 …… 49
第33図　1号墳埴輪実測図　実測・製図…松本 …… 50
第34図　1号墳埴輪実測図　実測・製図…松本 …… 51
第35図　1号墳埴輪実測図　実測・製図…松本 …… 52

第３６図　１号墳埴輪実測図　実測・製図…松本 …… 53
第３７図　２号墳墳丘実測図　実測…太田・戸川・二宮　製図…二宮 …… 55
第３８図　２号墳断面図　実測…太田・戸川・二宮・松本　製図…二宮 …… 57
第３９図　２号墳内部主体実測図　実測…二宮・松本　製図…二宮 …… 59
第４０図　２号墳出土遺物実測図　実測・製図…二宮 …… 61
第４１図　２号墳出土遺物実測図　実測・製図…二宮 …… 62
第４２図　２号墳出土遺物（鉄器）実測図　実測・製図…二宮 …… 63
第４３図　２号墳埴輪実測図　実測・製図…二宮 …… 65
第４４図　２号墳出土轡実測図　実測・製図…松本 …… 68
第４５図　２号墳墳丘下住居址実測図　実測…太田・寺坂・二宮　製図…二宮 …… 69
第４６図　２号墳盛土内出土遺物実測図　実測・製図…二宮 …… 70
第４７図　３号墳墳丘実測図　実測…太田・戸川・二宮　製図…二宮 …… 71
第４８図　３号墳内部主体実測図　実測…泉本・二宮　製図…二宮 …… 72
第４９図　３号墳断面図　実測…松本・二宮　製図…二宮 …… 73
第５０図　３号墳出土遺物（須恵器，土師器，鉄製品）実測図　実測・製図…二宮 …… 73
第５１図　３号墳盛土内出土遺物（弥生）実測図　実測・製図…松本 …… 76
第５２図　４号墳墳丘実測図　実測…太田・戸川・二宮・松本　製図…松本 …… 77
第５３図　４号墳内部主体実測図　実測…太田・戸川・二宮　製図…松本 …… 78
第５４図　４号墳断面図　実測…太田・戸川・二宮　製図…松本 …… 79
第５５図　４号墳下出土の石器実測図　実測・製図…松本 …… 80
第５６図　４号墳下出土弥生式土器実測図　実測・製図…松本 …… 80

## 図　版　目　次

第１図(1)　北山古墳群全景写真（東より望む）　撮影…松本
(2)　北山古墳群全景写真（北より望む）　撮影…松本
第２図(1)　北山古墳群全景写真（西より望む）　撮影…二宮
(2)　１号墳全景（南西より）　撮影…二宮
第３図(1)　１号墳表土除去後の全景（南西より）　撮影…二宮
(2)　１号墳第１主体（南より）　撮影…二宮
第４図(1)　第１主体（東より）　撮影…二宮
(2)　第１主体出土の直刀（北より）　撮影…二宮
第５図(1)　円筒埴輪列出土状態（西から）　撮影…松本
(2)　１号墳第２主体（北から）　撮影…松本
第６図(1)　第２主体遺物出土状況（南から）　撮影…松本
(2)　第２主体の遺物出土状態（杯，刀子，鏃，鉄鏃，短頸壺）　撮影…松本
第７図(1)　第２主体の遺物出土状態　撮影…松本

(2)　第２主体の遺物出土状態　撮影…松本

第８図(1)　第２主体の遺物出土状態　撮影…松本

(2)　直刀の出土状態（第２主体内）　撮影…松本

第９図(1)　１号墳断面図（北西より）　撮影…松本

(2)　２号墳全景（南より）　撮影…二宮

第１０図(1)　２号墳表土除去後の全景　撮影…二宮

(2)　内部主体断面図（北より）　撮影…二宮

第１１図(1)　２号墳内部主体（西から）　撮影…松本

(2)　２号墳内部主体（南から）　撮影…松本

第１２図(1)　内部主体の遺物出土状況　撮影…松本

(2)　内部主体の遺物出土状況　撮影…松本

第１３図(1)　仿製鏡の出土状態　撮影…松本

(2)　馬具の出土状態　撮影…松本

第１４図(1)　遺物の出土状態　撮影…松本

(2)　直刀の出土状態　撮影…松本

第１５図(1)　遺物の出土状態（小口部）（北から）　撮影…松本

(2)　遺物の出土状態（小口部）（東から）　撮影…松本

第１６図(1)　遺物の出土状態（小口部）（西から）　撮影…松本

(2)　２号墳断面図（北東から）　撮影…二宮

第１７図(1)　２号墳断面及び住居址（南から）　撮影…二宮

(2)　２号墳下の弥生時代住居址（南東から）　撮影…二宮

第１８図(1)　３号墳全景（南から）　撮影…二宮

(2)　内部主体検出状態（東から）　撮影…二宮

(3)　刀子の出土状態　撮影…二宮

第１９図(1)　遺物出土状態（北東から）　撮影…二宮

(2)　内部主体全景（東から）　撮影…二宮

第２０図(1)　３号墳の全景写真（南西から）　撮影…二宮

(2)　３号墳断面図（北東から）　撮影…二宮

第２１図(1)　４号墳全景（南西から）　撮影…松本

(2)　４号墳内部主体検出状態（南から）　撮影…二宮

第２２図　　１号墳周溝内，攪乱層，表採遺物写真　撮影…松本

第２３図　　１号墳第１主体出土遺物，第２主体出土遺物写真　撮影…松本

第２４図　　１号墳第１主体出土直刀，１号墳第２主体出土直刀，２号墳内部主体出土直刀，
１号墳第２主体出土鏨，不明鉄器，１号墳第２主体出土須恵器　撮影…松本

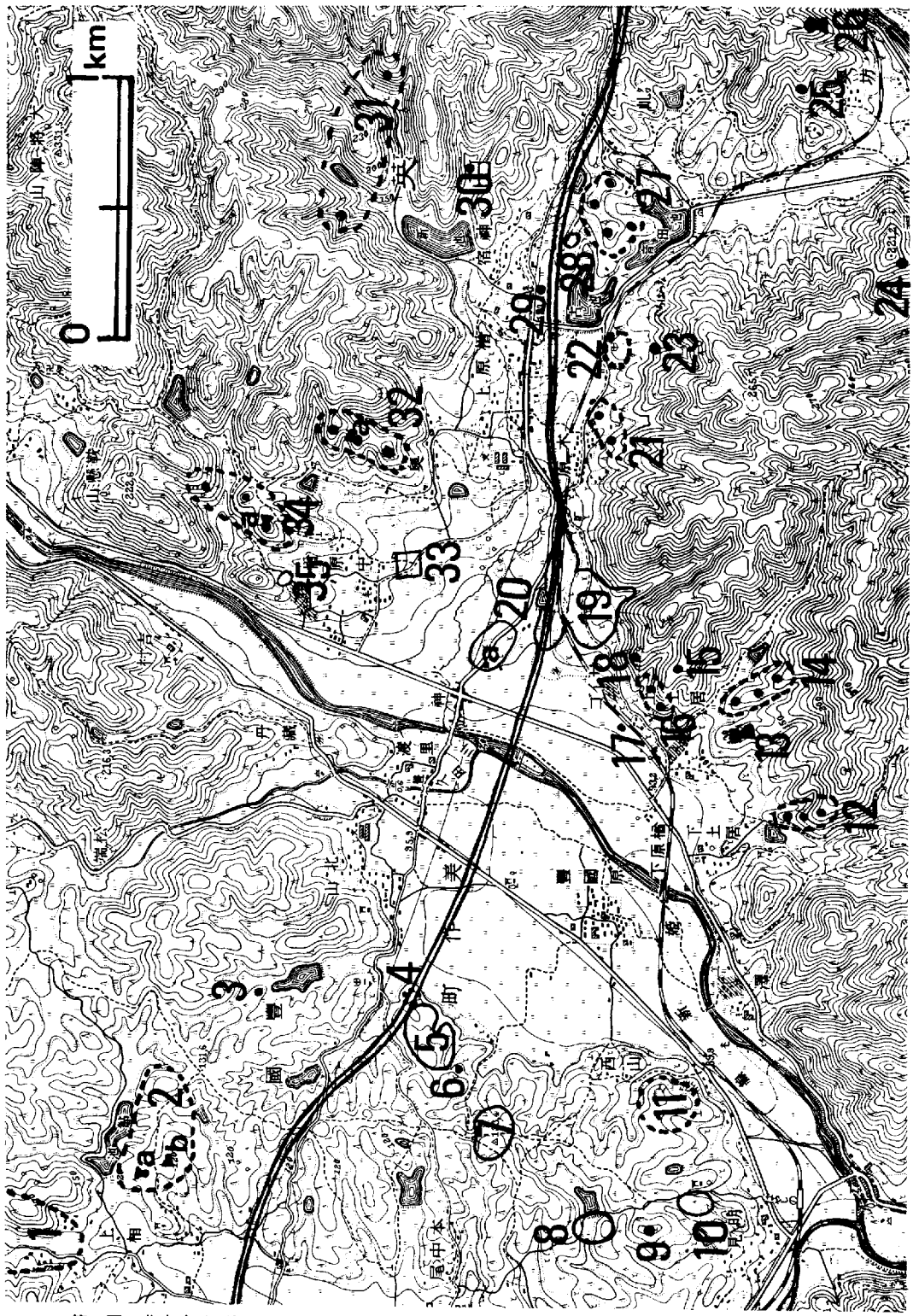
第２５図　　１号墳第１主体出土遺物，攪乱層出土，第２主体出土遺物　撮影…井上

第２６図　　１号墳第２主体出土鉄鏃　撮影…井上

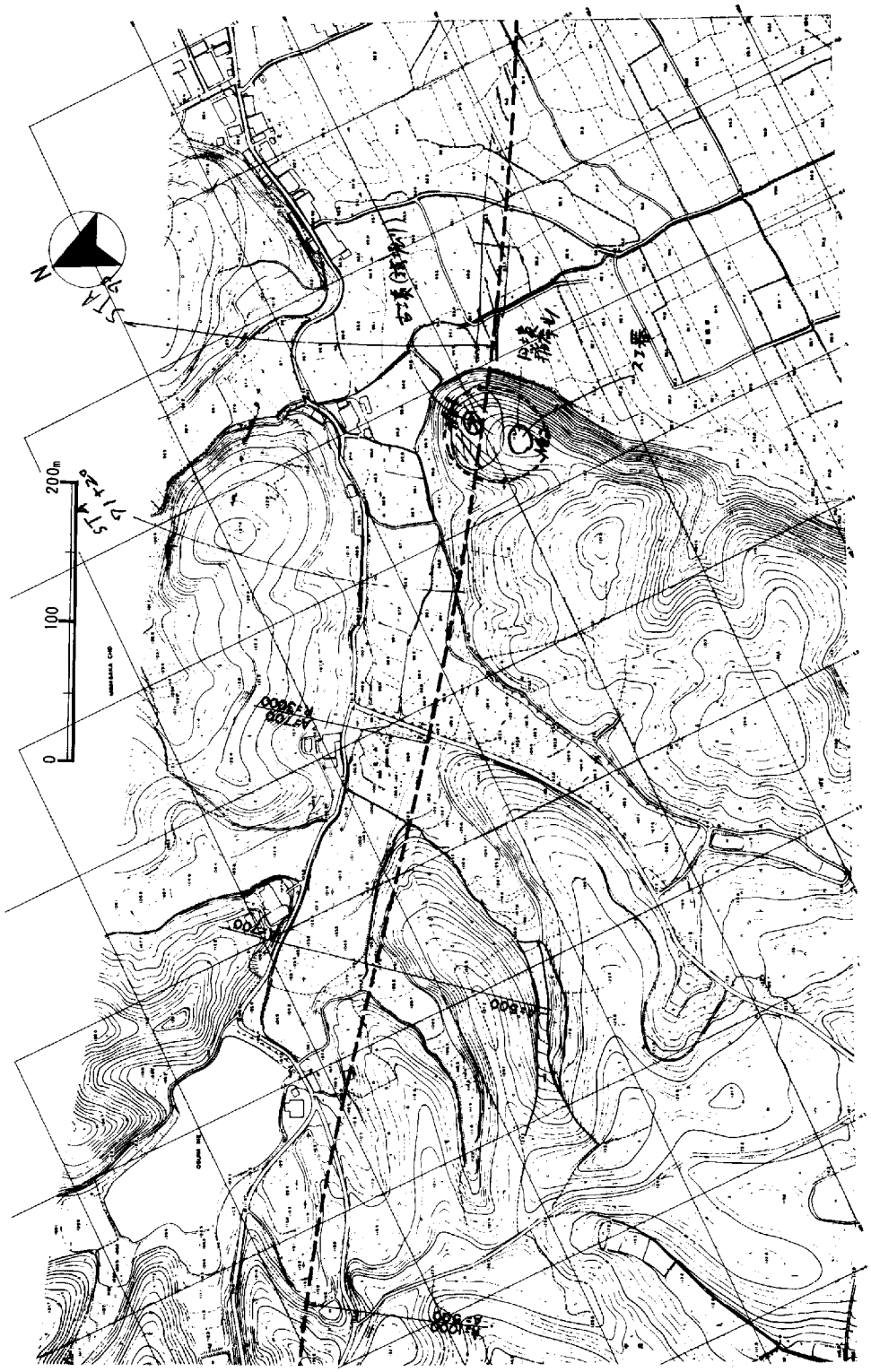
第２７図　１号墳出土埴輪　撮影…松本
第２８図　１号墳出土人物埴輪，形象埴輪　撮影…松本
第２９図　２号墳出土の須恵器　撮影…二宮
第３０図　２号墳出土仿製鏡，馬具　撮影…二宮
第３１図　２号墳内部主体出土遺物　撮影…井上
第３２図　２号墳内部主体出土鉄鏃　撮影…井上
第３３図　３号墳出土遺物，４号墳墳丘下出土石器　撮影…（１　２）井上
（３，６）松本

## 一　覧　表　目　次

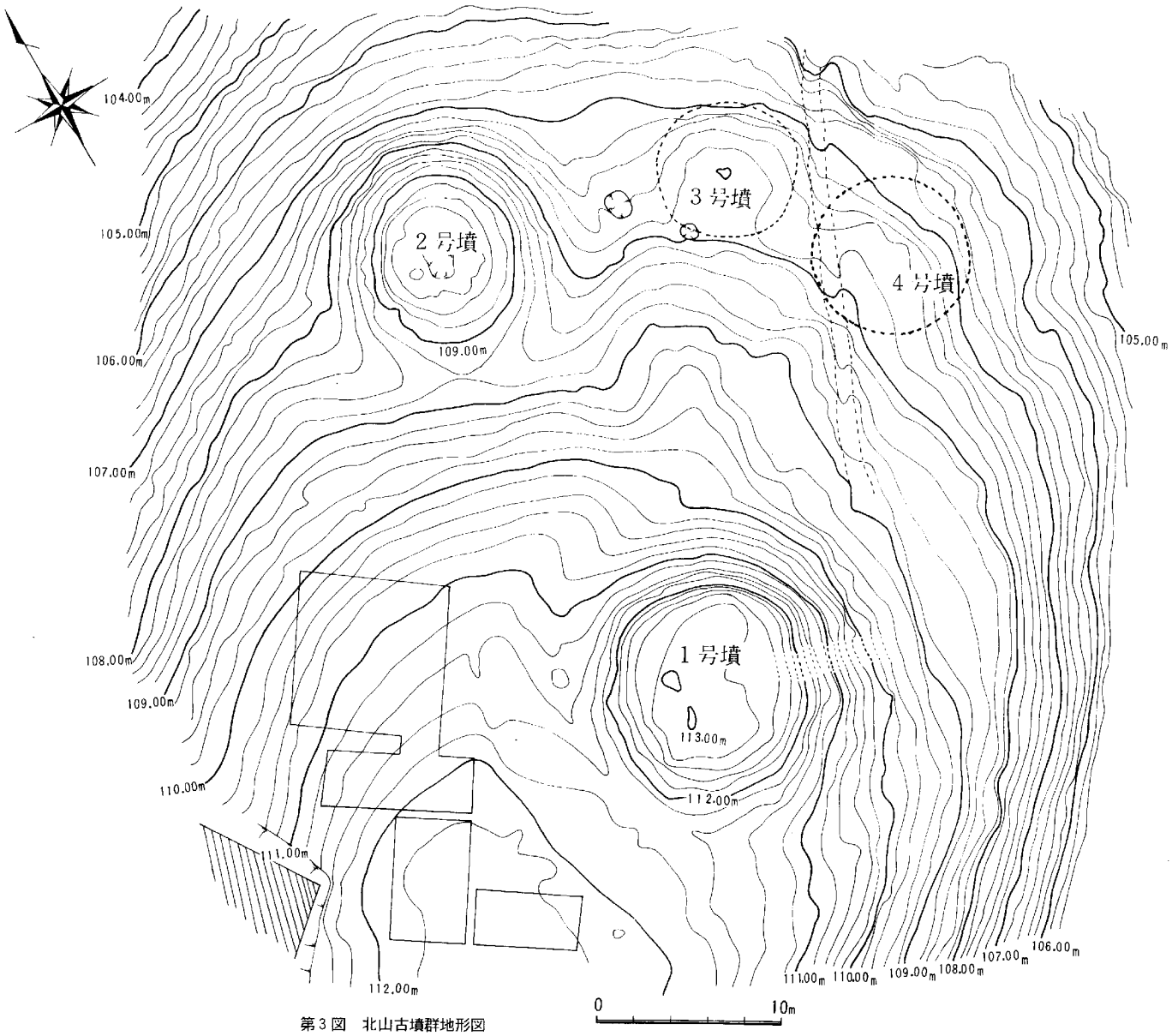
第１表　分布図対照表　作成…松本 …… １２
第２表　１号墳表採，攪乱層，周濠内出土土器一覧表　作成…松本 …… ２５
第３表　１号墳第１主体出土須恵器計測値表　作成…松本 …… ２９
第４表　勾玉，管玉計測値表　作成…松本 …… ３３
第５表　１号墳出土ガラス玉計測値表　作成…松本 …… ３４
第６表　１号墳第２主体出土須恵器計測値表　作成…松本 …… ４１
第７表　２号墳出土遺物計測値表　作成…二宮 …… ６６
第８表　２号墳出土遺物計測値表　作成…二宮 …… ６７
第９表　３号墳出土遺物計測値表　作成…二宮 …… ７６




第1図　北山古墳群周辺地図




第2図　中国縦貫道に伴なう分布調査




第3図　北山古墳群地形図

# 1. 調　査　経　過

北山古墳群の発掘調査は，中国縦貫自動車道路に伴なう埋蔵文化財発掘調査で昭和４７年４月１０日から，６月２９日までと同年１１月３０日までの期間にわたって実施したものである。途中で一時中止の期間も含まれている。

なお，本古墳群は当初より全国遺跡分布地図に記されている周知の遺跡であるにもかかわらず，何の保存対策もなされないまま縦貫道路によって消される事となったのである。

発掘調査は，まず３号墳から着手したが，東のインターチェンジ（以下ＩＣと記す）の工事と併行して行なわれる事となった。

調査中に新たに１基の古墳が確認され（工事用道路）他の遺跡との関係もあり，時間的に大きな負担を余儀なくされたのであったが，工事の関係上３号墳の調査途中で上相遺跡の発掘調査を行なう事となり，北山古墳郡の調査は一時中止せざるをえなかったのである。なお７月中旬で，調査員が他県に転出する。昭和４７年８月１６日より再開され，上相遺跡の調査と併行して２号墳の表土排除作業を行なうという進行状況であった。８月２９日からは３号墳墳丘解体，並びに４号墳表土排除も合わせて行ない，現地表面下わずかで主体部の確認がされ，掘り上げ，写真，実測と進み，短期間で墳丘解体，断面写真，実測，それに併行して１号墳表土排除，並びに２号墳盗掘坑，全体清掃後写真，主体部確認で掘り下げ，掘り方が検出された時点で断面の写真，実測の後ち，取り除き，掘り方掘り下げ，主体部写真実測，遺物取り上げ，なお１号墳周溝確認も行なった。以下土層断面観察のため墳丘掘り下げ，地山面で住居址が確認された。写真，実測の完了，住居址も終了し，残った調査範囲は１号墳１基で墳頂は稲荷社築造とキツネの穴によって攪乱されていたのと，多数の木根で苦労したもののハニワ基底部が検出確認されえた。（なおハニワ列検出中工事用道路の着工となり，２，３，４号墳は空なしく消え去ってしまったのである。）

主体部検出に移り，攪乱のため掘り方の検出はされえなかったが，直刀，直刃片，ガラス玉の確認がされ，全体を清掃し，全体，部分写真撮影，主体部実測，遺物取り上げ，さらに掘り下げ，新たに主体部が検出され，土層断面写真，実測，主体掘り上げ，写真実測，遺物取り上げ，さらに掘り下げにかかり，旧地表面（黒色有機土層面）で弥生時代の壺棺と考えられる土器片がかなりまとまった形で出土した。以下の層においては何らの遺構，遺物は検出されなかった。

なお，１号墳発掘調査中（１０月１７日）工事用道路着工ブルドーザー進入し，２，３，４号墳は無残にも跡形もなく消えさってしまったのである。

以上１号墳から４号墳までの個々にではあるが表層排除の後ち写真，地形測量も行なっている。なお，調査は１号，２号，４号墳を松本，二宮で，３号墳を泉本（前職員），松本，二宮が担当し，地形測量等は岡山県開発公社職員（太田，戸川，小林，寺坂）の助力を得て合同で行なった。

（文，二宮治夫）

## 2. 日誌抄

第１表　分布図対照表

| 番号 | 遺跡名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 金尿古墳群 | 19 | 狼谷遺跡 |
| 2 | 鮎池南古墳群 | 20 | 散布地 |
| 2a | 上相中塚 | 20a | 楢原大塚 |
| 2b | 上相東塚 | 21 | 楢原上古墳群 |
| 3 | 古墳 | 22 | 古墳群 |
| 4 | 北山古墳群 | 23 | 上向山古墳 |
| 5 | 鎌倉山遺跡 | 24 | 別所古墳 |
| 6 | 古墳 | 25 | 平福狐塚古墳 |
| 7 | 散布地 | 26 | 緑青塚古墳 |
| 8 | 散布地 | 27 | 中山古墳群 |
| 9 | 古墳 | 28 | 散布地 |
| 10 | 散布地 | 29 | 古墳 |
| 11 | 宮谷古墳群 | 30 | 古墳 |
| 12 | 古墳群 | 31 | 神宿古墳群 |
| 13 | 寺山古墳 | 32 | 経塚古墳群 |
| 14 | 寺山東北古墳群 | 32a | 上経塚古墳 |
| 15 | 古墳 | 33 | 楢原廃寺跡 |
| 16 | 坂本塚古墳群 | 34 | 金焼山古墳群 |
| 17 | 古墳 | 34a | 金焼山古墳 |
| 18 | 古墳 | 35 | 散布地 |

本古墳群の発掘調査は，昭和４７年４月１０日から同年１１月３０日までの期間内において行なわれたものである。

4月10日～4月13日　仮設小屋建設，雑木の伐採作業を行なった。

4月14日～5月14日　狼谷遺跡の第１次発掘調査を行なった。

5月15日～5月28日　雑木の伐採作業，グリッド設定，全・遠景写真撮影，地形測量を行なう。

5月29日～6月11日　地形測量，２，３号墳表土排除，３号墳周溝の一部分の掘り下げを行なう。

6月12日～6月25日　３号墳表土排除，トレンチ設定発掘，３号墳内部主体の確認及び掘り下げ，実測，周溝確認掘り下げ

6月26日～6月29日　周溝掘り下げ，主体部掘り下げ写真撮影

6月30日～7月16日　梅雨時期のため作業は一時中止

7月17日　北山古墳の製図，作業工程表の作成

7月18日～8月15日　上相遺跡発掘調査につき作業中止

8月16日～8月29日　２号墳表土排除，３号墳清掃及び全景写真並びに墳丘解体作業を行なう。４号墳表土排除。

8月30日～9月12日　４号墳表土排除，３号墳墳丘解体，断面観察及び写真撮影並びに断面実測，４号墳主体部確認し，掘り上げ，写真，実測完了

9月13日～9月26日　４号墳墳丘解体断面観察及び写真撮影並びに実測，２号墳周湟掘り下げ，盗掘坑清掃，全体写真撮影，地形測量，ハニワ片の取り上げ，主体部確認の為掘り下げをし，土層断面の写真，実測の実施，１号墳表土排除を行なう。

9月27日～10月10日　２号墳主体部掘り方確認掘り下げ，埋葬遺物検出，写真撮影及び実測，遺物取り上げ再び掘り方を掘り下げ，写真撮影を行ない，墳丘解体作業に移り，断面写真及び実測を行なう。地山面より住居址が発見された。１号墳周湟検出，墳頂の攪乱土層の排除を行なう。

10月11日～10月24日　２号墳墳丘断面の写真，実測並びに住居址の写真，実測を行なう。１号墳墳頂攪乱土排除及び散在ハニワ片の取り上げ，確認されたハニワ列の検出作業並びに周湟掘り上げを行なう。

| | |
|---|---|
| 10月25日～11月7日 | ハニワ例の検出並びに墳丘全体の清掃及び写真，地形測量を行ない，そののち主体部検出作業を行なう。 |
| 11月8日～11月21日 | 主体部検出作業，確認し清掃，写真撮影並びに実測及び遺物の取り上げ，さらに掘り下げを行ない，２０日第２主体が検出された。なお東西南北土層断面の写真，実測がなされ，なおも$\frac{1}{4}$区画の部分の解体作業を行なった。 |
| 11月22日～ | 第２主体全景及び接近写真並びに実測，遺物取り上げ，掘り方の写真撮影，墳丘解体作業並びに土層断面写真，実測，さらに墳丘外の石積の実測，なお盛土内より弥生時代の壺棺片と思われるものがかなりまとまって出土した。 |
| 昭和48年3月17日～3月18日 | 現地（美作町農協センター）において展示説明会を行ない，多数の見学者があった。 |

（文，二宮治夫）

## 3. 北山古墳群の立地と環境

北山古墳群は岡山県の北東部に位置する英田郡美作町大字北山に所在する。吉井川の１上流，梶並川によって形成された沖積平野の豊国原を東に望む南西から北東に延びる標高１０７mから１１２mの低丘陵上に北山古墳群が営造されている。当初円墳２基で北山古墳群と呼称されていたが,(1)中国縦貫自動車道建設に伴なう分布調査と緊急発掘調査の結果,新たに２基が追加確認された。第３図に見るごとく，古墳群は丘陵端部から末端傾斜面にかけて円墳４基で営造されていることが明らかとなった。

この地域には弥生時代中期になって始めて人々が生活を開始した所である。梶並川を境として東では狼谷遺跡(2)西では北山古墳群の周辺や明見地域(3)に生活の痕跡をみることができる。古墳の分布は東には前半期古墳と後期古墳群が西より多く集中している。寺山古墳(4)，上経塚古墳(5)，金焼山古墳(6)，緑青塚古墳(7)など４世紀～５世紀末にかけての前方後方墳，前方後円墳が楢原の平野を望む丘陵上に位置している。また楢原には白鳳時代から平安時代末にかけての瓦を出土する寺院址(8)も確認されている。

以上が豊国原を中心とする考古学的環境である。いずれにせよ古代の楢原郷は英田郡における重要な位置をなすものであったと予想される地域である。

（文　松本和男）

〔 註 〕

(1) a 「全国遺跡地図（岡山県）」　文化財保護委員会　昭和４２年

b 「美作町史編纂中間報告」 今井 堯著

美作町史編纂委員会　昭和３９年

(2) 註(1)に同じ

(3) 〃

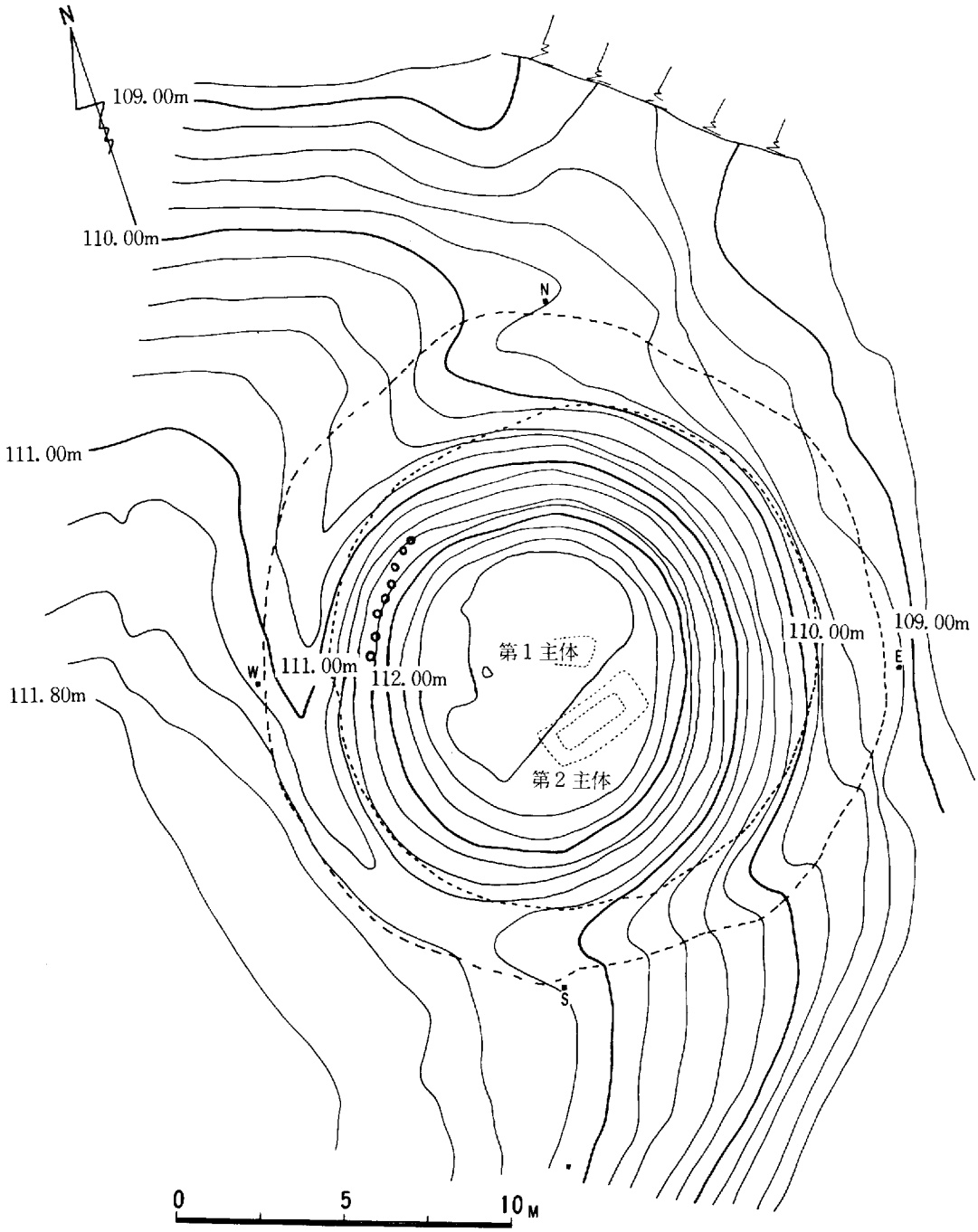
(4) 〃

(5) 〃

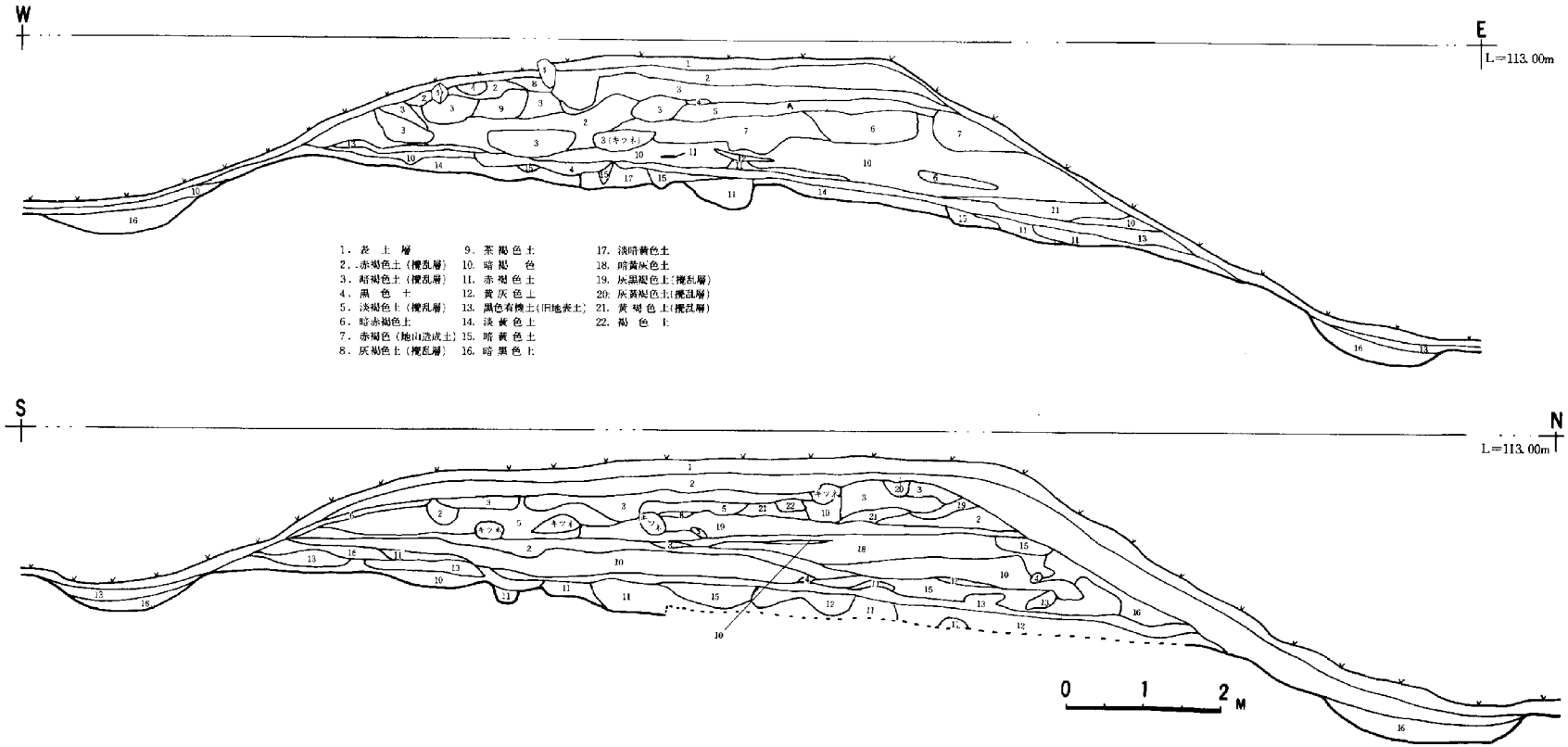
(6) 〃

(7) 〃

(8) 〃




第4図　1号墳墳丘実測図


W
E
L=113.00m
S
N
L=113.00m
1．表　土　層
2．赤褐色土（攪乱層）
3．暗褐色土（攪乱層）
4．黒　色　土
5．淡褐色土（攪乱層）
6．暗赤褐色土
7．赤褐色（地山造成土）
8．灰褐色土（攪乱層）
9．茶褐色土
10．暗　褐　色
11．赤　褐　色　土
12．黄　灰　色　土
13．黒色有機土（旧地表土）
14．淡　黄　色　土
15．暗　黄　色　土
16．暗　黒　色　土
17．淡暗黄色土
18．暗黄灰色土
19．灰黒褐色土（攪乱層）
20．灰黄褐色土（攪乱層）
21．黄　褐　色　土（攪乱層）
22．褐　色　土
キツネ
0　1　2 M

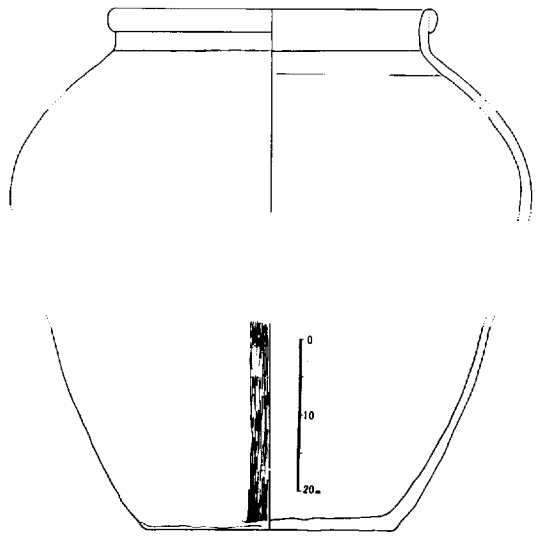
第5図　1号墳断面図

# 4. 1号墳（第4図，第58図(2)～第65図(1)）

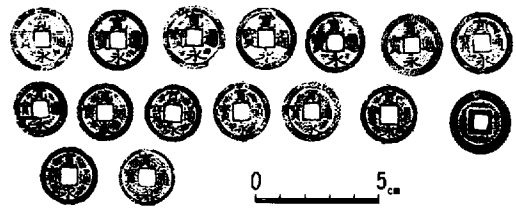
1号墳は北山古墳群内では最も南に位置し，一番高い所にある最大の円墳である。この古墳は江戸時代に稲荷社を建築する際に墳頂部の再造成が行なわれたために平坦となっていた。そしてキツネ，タヌキの巣があったため無数の穴が盛土内を走り，墳丘はかなり攪乱をうけ，部分的に内部主体を破壊していたが2基の木棺直葬墓を検出した。そして1号墳では次のような計測値を得た。

| 古墳直径 | 墳丘高 | 周溝幅 | 周溝深 |
|---|---|---|---|
| SN…19.2m<br>WE…18.3m | 1.5m～<br>（旧地表面から） | 2～<br>3m | 30～<br>40cm |

墳頂部削平のため，表土層，攪乱層には多数の埴輪，須恵器破片，近世の遺物が多数出土した。墳丘断面図（第5図）にみる如く表土から70～120cmの深さまで攪乱を受けており，第1主体，第2主体はかろうじて攪乱を最少限免れた個所であった。




第6図　1号墳墳頂部出土　備前焼実測図




等7図　1号墳墳頂部出土

## (a) 備前焼（第6図）（第59図(2)，60図(1)）

この備前焼は墳頂部の表土下3cmの所で底部のみ第59図(2)のような状態で出土した。底部以外の破片は墳丘，墳頂，周溝内に散乱した状態で出土したものである。口縁径は43cm，器高は推定68cmである。口縁はほぼ直立し，口縁端部を約2cm折りまげ玉縁をつくっている。底部は直径33cmあり，どっしりとした安定感をもつ大甕である。外面は7本の刷毛で上から下にむけて撫でている。内面はヘラにて横撫の仕上げがされている。室町時代のものと考えられる。

## (b) 寛永通宝（第7図）

表土層，攪乱層より15枚出土した。恐らくお稲荷様に関係する遺物と考えられる。

## (c) 墳頂部出土の灯明皿（第8図）

灯明皿は盛土攪乱層，墳頂部より出土した。これらの大部分は使用しており，口縁の内外面にスス

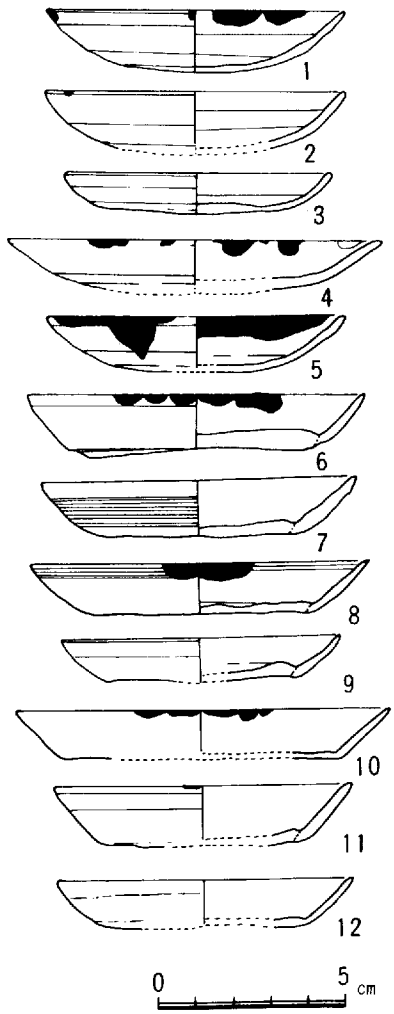
が附着していた。(1)～(5)は赤褐色を呈し，非常に焼成の良好なものである。(6)～(12)は灰白色ないし黄褐色を呈し焼成はやわらかい。底部は糸切りによる成形技法がみられる。時代はいづれも備前焼などと同じ時期のものであろう。

### (d)　1号墳出土の弥生式土器(第9図)

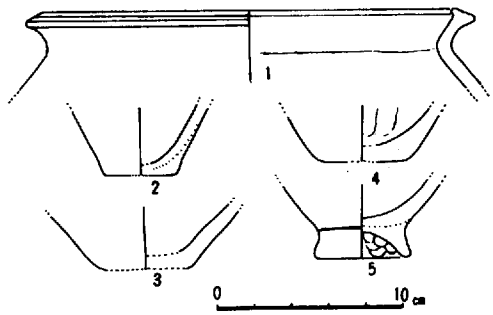
墳丘盛土，周溝内より少量の弥生式土器片が出土した。このことは1号墳を造成する際に周囲の弥生時代の遺構を破壊して古墳を造成したことを意味し，2号墳下で住居址が検出されたことからも想像できる。出土した弥生式土器片は少量であり図示できるものは全て実測した。(1)は甕の口縁部で(2)～(5)は底部である。これらの土器は形態からみて弥生時代中期に編年されるものである。

### (e)　1号墳下出土の甕棺(第10図)(78図(1))

1号墳の墳丘解体作業中，旧地表土層（黒色有機土）より甕棺を検出した。これらの土器は破片となって散乱しており，注意深く遺構の検出を試みたが何ら遺構は検出することができなかった。甕棺の蓋と身はいずれも甕を使用している。蓋は口縁径28.5㎝，高さ26.5㎝を測る。左右に把手をもつ。把手は器面に直径約2㎝の孔をあけ，把手を差し込みその上に粘土をはりつけている。口縁部には一条の浅い沈線がみられる。色調は赤褐色である。外面は化粧土が剝離しているが，ヘラで仕上げている。内面はヘラにて横撫の仕上げを行なっている。一方身の方は口縁径は18㎝，高さ37.5㎝を測る。口縁部には沈線が3本施文され，頸部にはヘラによる刺突文の施文が行なわれている。胴部のハリは左右少し異なるが，$\frac{2}{3}$ほど上に最大径がある。仕上げは胴部から底部にかけてハケによる




第8図　1号墳墳頂部出土　灯明皿

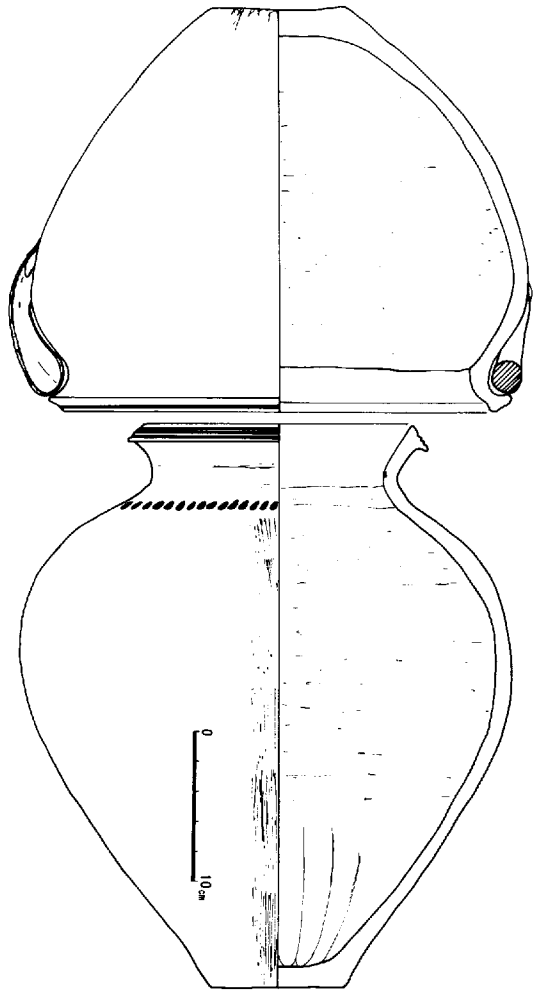



第9図　1号墳盛土内出土　弥生式土器

縦撫が行なわれ，内面にはヘラによる横撫の仕上げを行なっていた。この甕棺は弥生時代後期のものである。

### (f)　大甕（第１３図）

墳頂部，墳丘，周溝内に散乱していたものを推定復元したものである。口縁径４２㎝，推定器高は１００㎝ある。頸部は３段に区切られ，２段に３つの波状文が施文されている。胴部外面にはハケ状工具による施文がなされ，内面には青海波が所々指で消されているが認められる。
この大甕は墳頂部ないし墳丘に置いていたものと考えられる。



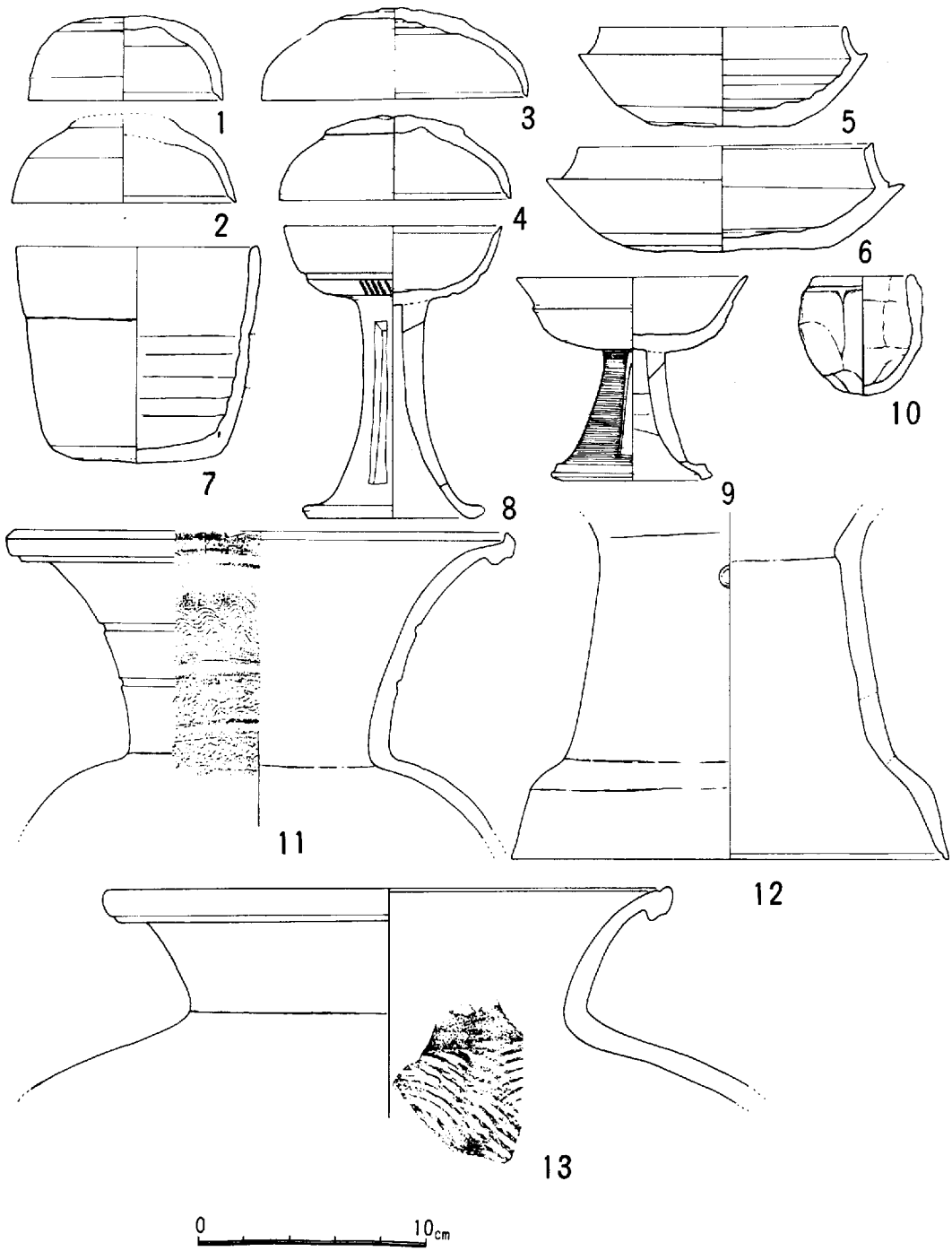

第10図　１号墳下出土　カメ棺

(1)　第１主体（第１４図，第５９図(2)，第６０図(1)）

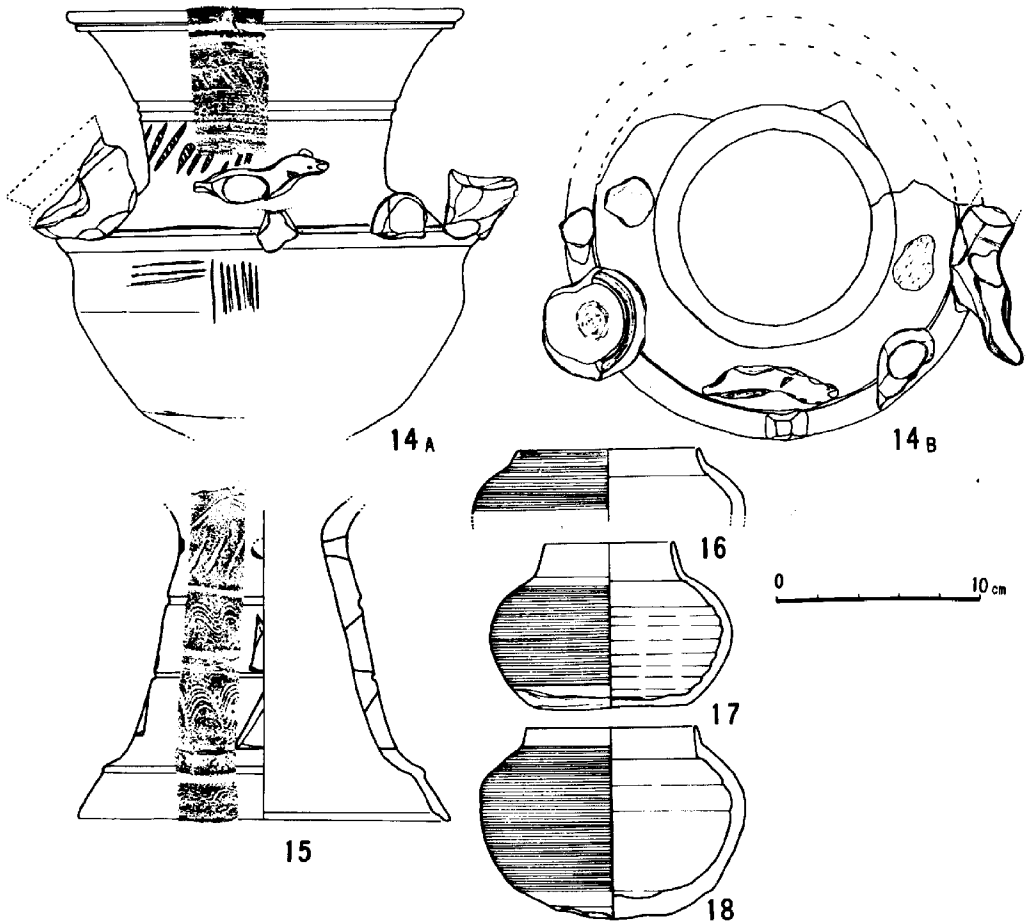
Ｅ－７５°－Ｓの方位で検出された。表土層，攪乱層を除去するとすぐに直刀，ガラス玉を検出した。棺底まで攪乱をうけていたため掘り方は判然とせず，かろうじて東側部分で幅８０～９０㎝，長さ１００㎝まで確認できた。木棺痕跡は確認できなかったが，直刀，ガラス玉などが棺内遺物と考えられることから，幅４０～５０㎝，（長さは不明）の木棺直葬墓と推定される。
遺物は棺内に直刀２口，ガラス玉２０個があり，棺外には短頸壺２個，提瓶１個，杯身３個があった。

(a)　直刀（第１５図(8)，第１６図(1)，第６０図(2)，第８０図(12)，８１図(1)）

(8)は棺内と推定できる所より出土した。刀の$\frac{2}{3}$近くは欠損している。残存長は２９.２㎝である。刀幅は2.6㎝，背厚は0.6㎝ある。なお刀身には木質が附着していた。(1)は棺底のガラス玉近より出




第11図　1号墳表採，攪乱層，周溝内出土須恵器実測図

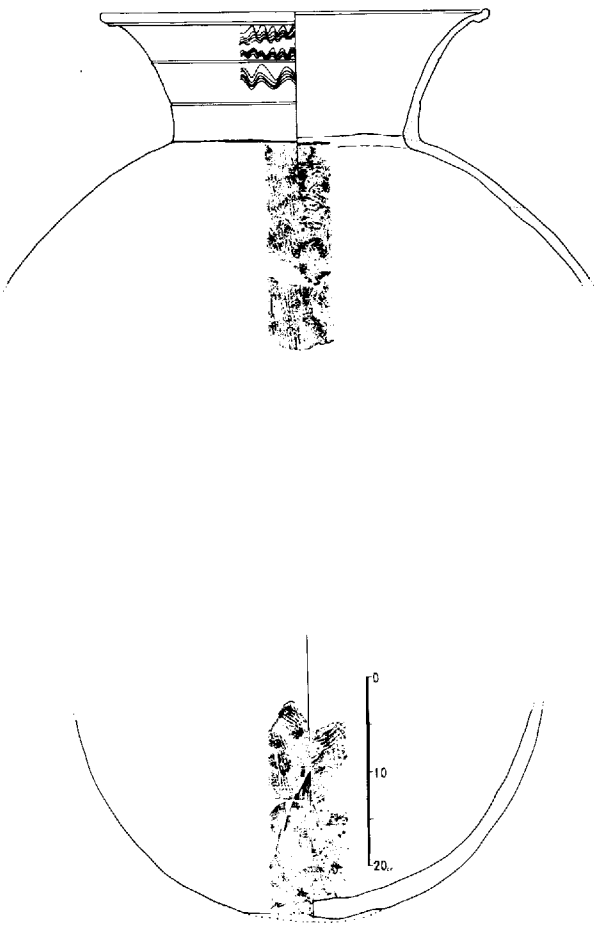



第12図　1号墳表採，撹乱層，周溝内出土須恵器実測図

第２表　１号墳表採，攪乱，周溝内出土土器

（単位　cm）

| 図版番号 | 種類 | 形態 | 器高 | 口縁径 | 胴幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第１１図　1 | 須恵器 | 壺蓋 | 3.7 | 8.6 | | 精製粘土（砂ふくむ） | 普通 | 灰色 | 周溝内より出土 |
| 〃　2 | 〃 | 〃 | (4.0) | 9.9 | | 〃（砂，長石ふくむ） | 〃 | 黒灰色 | 表採，器高は推定 |
| 〃　3 | 〃 | 〃 | 4.0 | 11.8 | | 〃（雲母，長石ふくむ） | 〃 | 淡灰緑色 | 周溝内より出土 |
| 〃　4 | 〃 | 〃 | 3.7 | 10.3 | | 〃（砂ふくむ） | 〃 | 黄灰色 | 周溝土層より出土 |
| 〃　5 | 〃 | 杯身 | 4.4 | 10.8 | | 〃（砂，長石ふくむ） | 〃 | 淡灰色 | 周溝内より出土 |
| 〃　6 | 〃 | 〃 | 4.7 | 13.0 | | 不良な粘土使用 | 〃 | 茶黒色 | 内面に朱が附着している。墳頂部表採 |
| 〃　7 | 〃 | 把手付コップ形土器 | 9.6 | 10.7 | | 精製粘土 | 良 | 濃緑色 | 焼成前に把手が剝離している。墳丘，周溝内より出土。外面に釉がかかっている。 |
| 〃　8 | 〃 | 無蓋高杯 | 13.0 | 9.6 | | 〃 | 普通 | 灰茶色 | 四角透孔が３つある。墳丘攪乱層より出土。 |
| 〃　9 | 〃 | 〃 | 9.0 | 10.1 | | 〃 | 良 | 灰色 | 四角透孔が３つある。墳丘にて表採。 |
| 〃　10 | 土師器 | 手捏土器 | 5.3 | 4.4 | 5.4 | 円筒ハニワと同じ胎土 | 普通 | 赤褐色 | 周溝内より出土。 |
| 〃　11 | 須恵器 | 壺 | 不明 | 22.0 | 不明 | 精製粘土 | 良 | 緑灰色 | 頸部は３段に区切られ，波状文が描かれている。表土層攪乱層より出土。 |
| 〃　12 | 〃 | 装飾付壺の台脚 | 〃 | 不明 | | 〃 | 〃 | 灰緑色 | 円形，三角透孔の痕跡あり。墳頂，攪乱層より出土。 |
| 〃　13 | 〃 | 甕 | 〃 | 24.8 | | 〃 | 〃 | 暗緑色 | 内面に青海波あり。墳丘より出土。 |
| 第１２図１４ | 〃 | 装飾付子持壺 | 〃 | 19.4 | 19.1 | 〃 | 〃 | 灰緑色 | 肩部に小壺が２個と動物が２ひきとりつけてある。墳頂，墳丘，周溝内より出土。 |
| 〃　15 | 〃 | 装飾付壺の胎土 | 〃 | 不明 | 不明 | 〃 | 〃 | 灰色 | 脚台には三角透孔が２段につけられている。１４と同一土器と考えられる。 |
| 〃　16 | 〃 | 壺 | 〃 | 8.8 | 〃 | 〃（砂，長石ふくむ） | 普通 | 灰黄色 | 周溝内より出土。 |
| 〃　17 | 〃 | 〃 | 8.0 | 6.4 | 12.0 | 〃 | 〃 | 灰色 | 墳頂，攪乱層より出土。 |
| 〃　18 | 〃 | 〃 | 9.4 | 8.3 | 13.0 | 〃（砂ふくむ） | 〃 | 灰黒色 | 墳頂，表土層より出土。 |
| 第１３図 | 〃 | 甕 | (83.0) | 31.8 | 不明 | 精製粘土 | 良 | 〃 | 頸部は３段に区切られ，２段に波状文が描れている。内面の青海波は所々指で消している。 |




第13図　1号墳出土大甕

土した直刀である。完形で全長89.6㎝，刀身長74.8㎝，刀幅3.7㎝，背厚0.8㎝を測る。茎部には目釘穴が1個だけみとめられた。なお刀身には木質が附着している。

(b)　玉類（第5表）

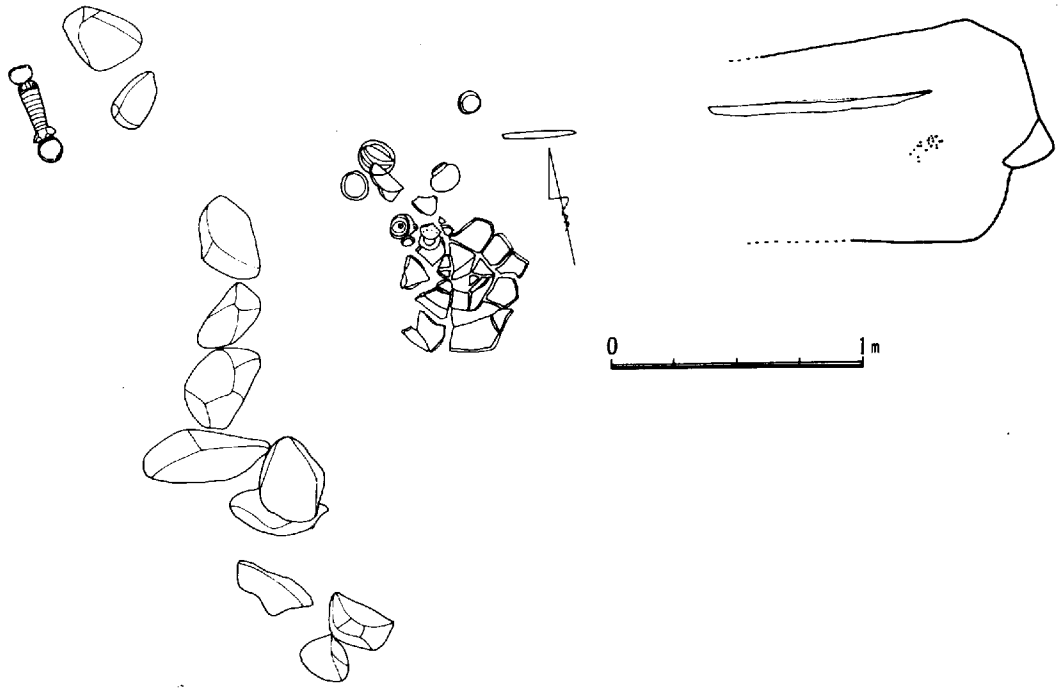
第1主体から出土した玉類はガラス製小玉20個のみである。すべて一括して棺の東側部分で出土しているため，これらは相連らねて副葬されていたものと思われる。小玉は大部分が半透明で濃いブルー13個，明るいブルー5個，薄いブルー2個の色調に分類される。なお形は一定ではなく，長さ8.3㎜，径8.2㎜の玉が最大で，長さ4㎜，径7.2㎜の玉が最少である。

(2)　第2主体（第17図，第61図(2)～第64図）

第2主体は木棺直葬墓でN－64°－Eの方位で検出された。掘り方上面は攪乱のため不明であったが，幅130～140㎝，長さ320㎝を確認した。木棺痕跡は幅が東側で60㎝，西側で75㎝を測り，長さは210㎝であった。

出土遺物は棺の内外に副葬されており，特に頭位置と推定される所に短頸壺が蓋とセットで置かれ，この壺内より勾玉6個，ガラス玉64個，管玉20個が一括して入れていた事実である。そして脚部には杯のセット，鉄鎌が副葬されていた。なお棺内遺物には直刀一口，鉄鏃37本，刀子6個，鉄鎌1個，鉄鋸，勾玉，管玉，ガラス玉67個，杯（蓋，身）3セット，杯蓋2個，鑿1個があった。棺外には杯蓋2個，杯（蓋，身）1セット，無蓋高杯1個，長頸壺2個，瑞2個，提瓶2個があった。

この第2主体と第1主体との前後関係は攪乱が著るしいためセクションでは確認できなかったが，棺底レベル高が第1主体と比較して約30㎝も低いことから第1主体より先に埋葬されたものと考えられる。




第14図　1号墳第1主体平面図

(a)　直刀（第16図(2)，第80図(13)）

棺内より出土した。茎部が欠損しているが，残存部で8 7.2㎝，刀身長は7 5.8㎝，刀幅は3.6㎝，背厚は0.7㎝を測る。切先部はやや上がっている。茎部には木質が残っているため目釘孔が確認できなかった。なお刀身には木質が附着している。

(b)　玉類（第18図，第4表，第5表）

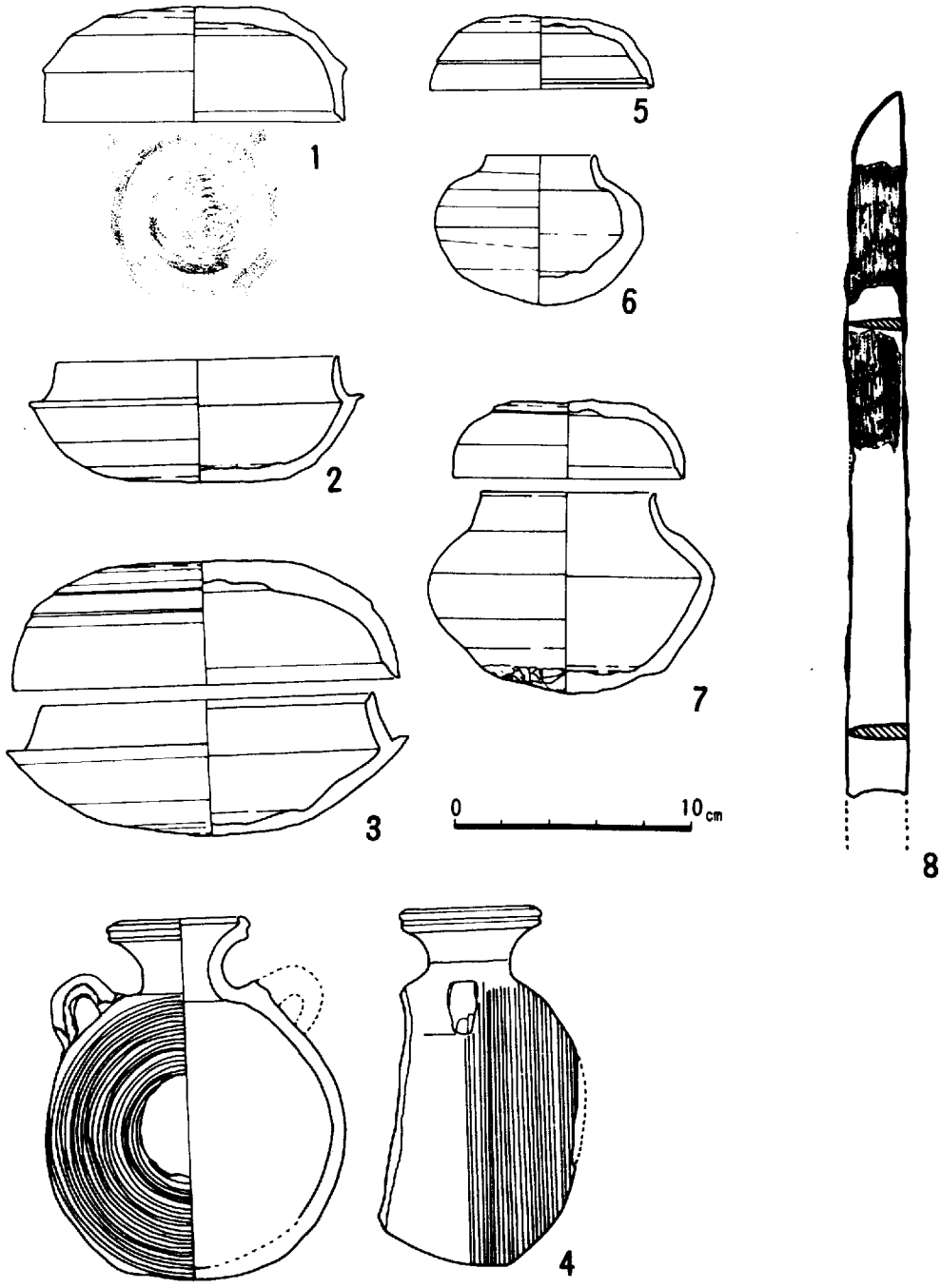
第2主体から勾玉7個，管玉22個，ガラス玉69個出土した。

(イ)　勾　玉

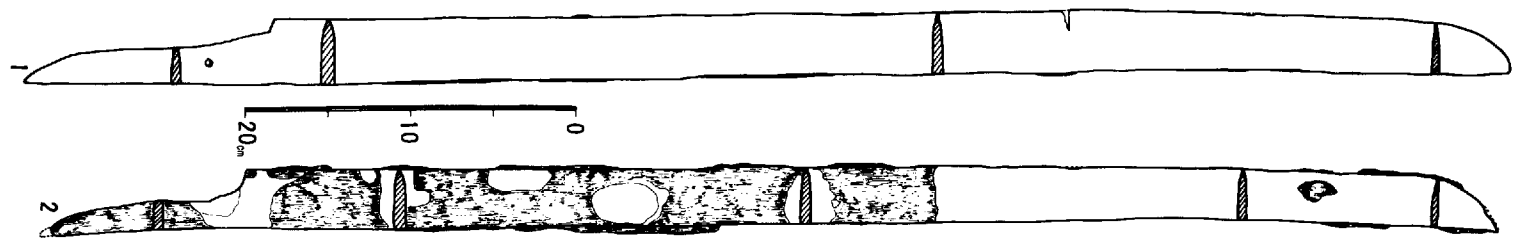
(1)～(6)は頭部位置に副葬された短頸壺（第24図(16)）に管玉（(1)～(21)）とガラス玉64個が一括して入れられていた。勾玉は(1)～(3)が碧玉製，(4)はメノウ，(5)は白色のガラス（水晶？），(6)はブルーのガラス製である。(7)はメノウ製で埋葬当時に首にかけていたものと考えられる位置に出土した。なお，この勾玉は尾部が折れたものを磨いで使用している。

(ロ)　管玉（第18図，第4表）

第2主体より出土した管玉は22個ある。それらの全ては碧玉製である。なお(1)～(21)は短頸壺内に一括して入れられていたものであり，(22)は棺内より出土したものである。




第15図　1号墳第1主体出土遺物実測図

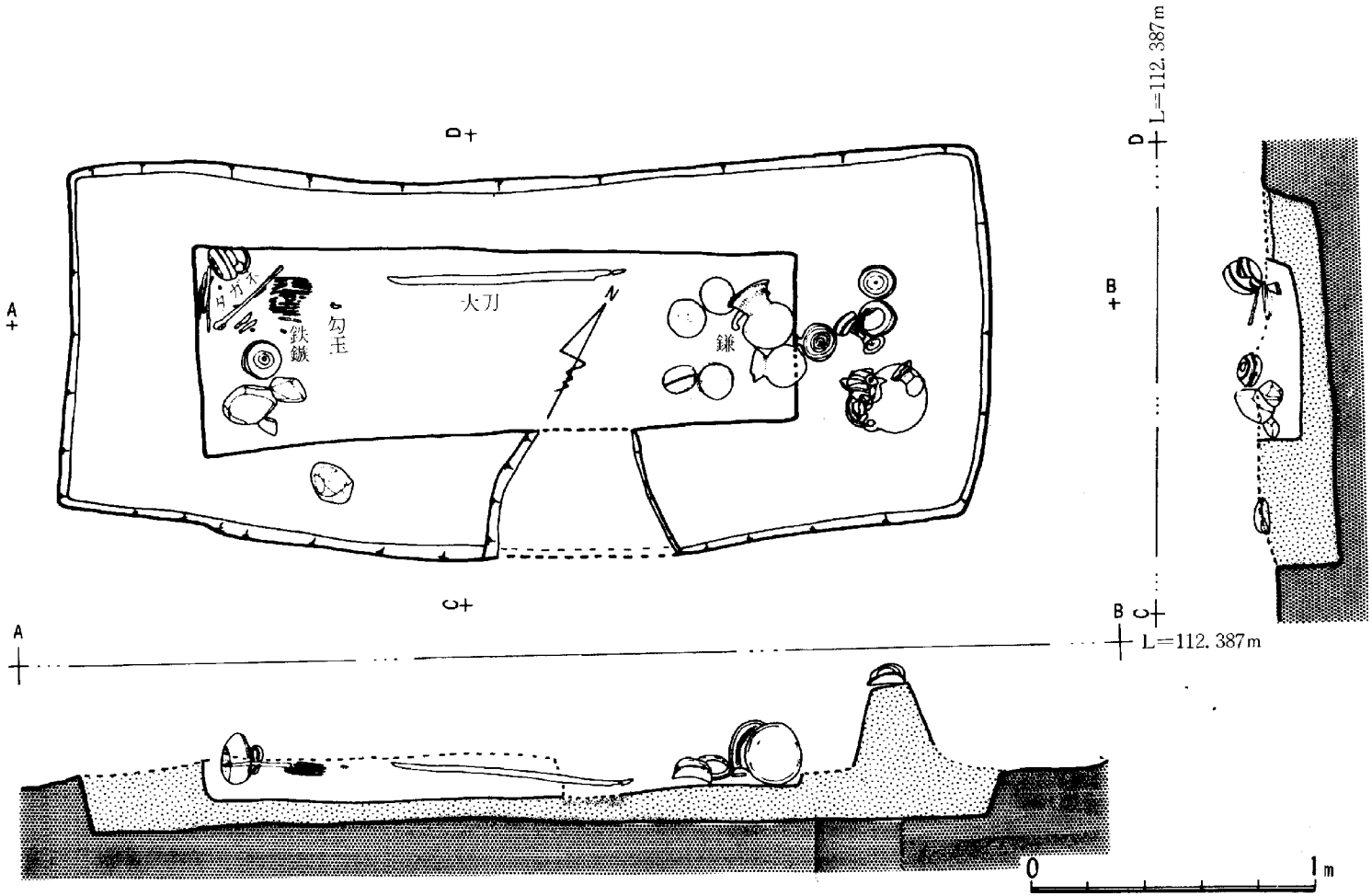



第15図 (1) 1号墳第1主体出土須恵器 (2) 1号墳第1主体出土

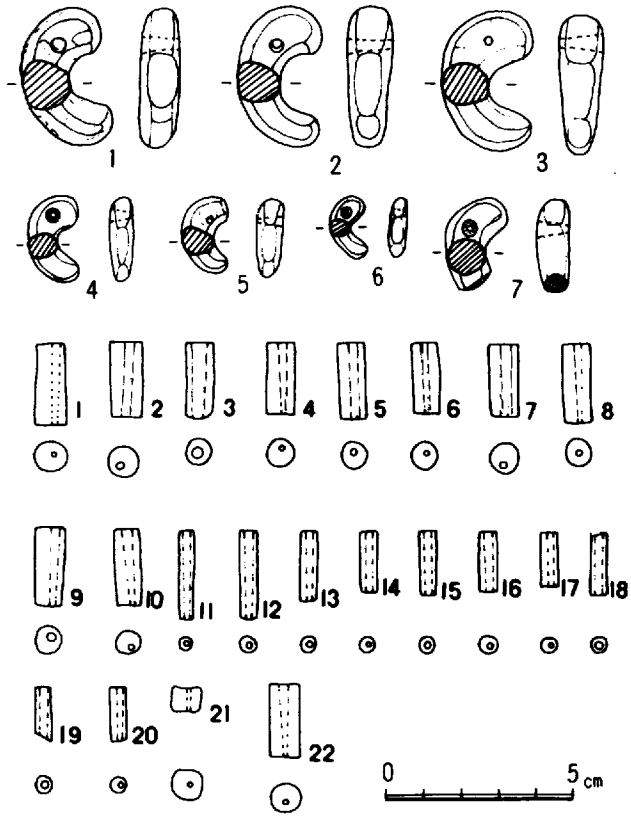


第3表　1号墳第1主体出土須恵器　　（単位　cm）

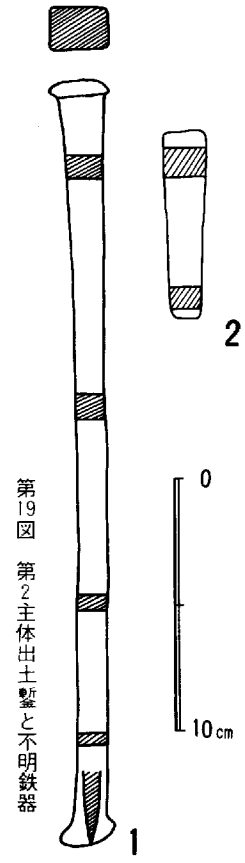
| 図版番号 | 種類 | 形態 | 器高 | 口縁径 | 胴幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第15図 1 | 須恵器 | 杯蓋 | 4.8 | 12.7 | | 精製粘土 | 普通 | 灰白色 | 内面に同心円文あり |
| 〃 2 | 〃 | 杯身 | 5.2 | 12.0 | | 〃 | 良 | 灰色 | |
| 〃 3 | 〃 | 杯蓋 | 5.1 | 16.2 | | 石英ふくむ | 普通 | 茶褐色 | |
| 〃 3 | 〃 | 杯身 | 6.6 | 14.0 | | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 〃 4 | 〃 | 提瓶 | 15.0 | 5.7 | 12.6 | 精製粘土 | 〃 | 〃 | 胴部の粘土が剝離したので，ヘラで削り整形している。 |
| 〃 5 | 〃 | 壺蓋 | 3.0 | 9.4 | | | 〃 | 灰色 | 表面に自然釉がかかっている。 |
| 〃 6 | 〃 | 壺 | 6.1 | 4.7 | 8.7 | | 〃 | 灰黒色 | 内面に朱がついている。 |
| 〃 7 | 〃 | 壺蓋 | 3.2 | 9.8 | | | 〃 | 灰黄色 | |
| 〃 7 | 〃 | 壺 | 8.3 | 7.4 | 12.0 | | 〃 | 灰黒色 | 底部の粘土が剝離したため，ヘラで整形している。 |




第17図　1号墳第2主体平面、断面実測図




第18図　1号墳第2主体出土勾玉、管玉、実測図




第19図　第2主体出土鏨と不明鉄器

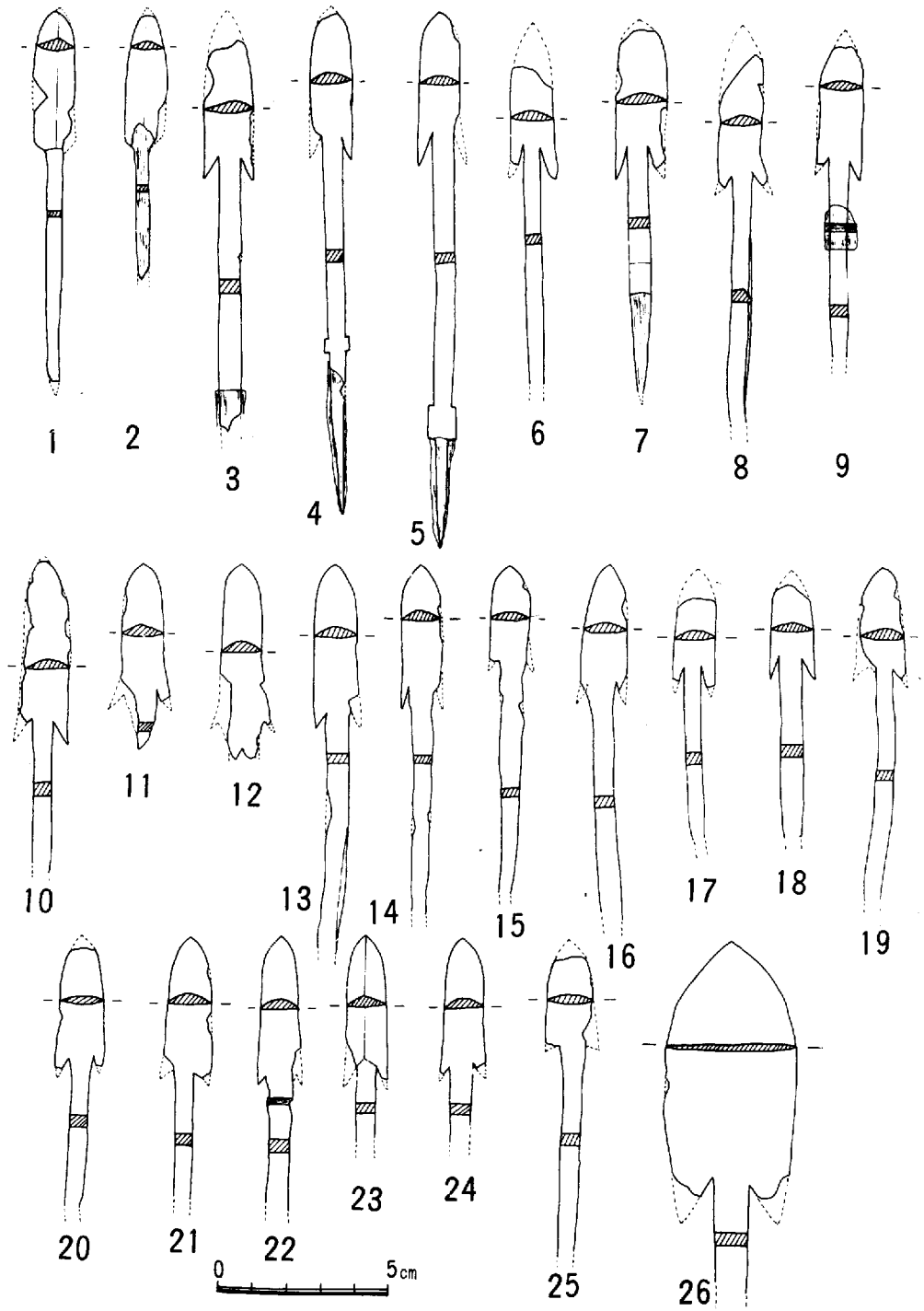
第4表　1号墳，第2主体出土碧玉製管玉計測値表　　（単位 mm）

| 番号 | 長さ | 幅 | 孔径 | 備考 | 番号 | 長さ | 幅 | 孔径 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 218 | 75 | 21 | 片刳穿孔 | 12 | 230 | 46 | 22 | 両刳穿孔 |
| 2 | 205 | 87 | 28 | 〃 | 13 | 185 | 50 | 15 | 〃 |
| 3 | 198 | 73 | 31 | 〃 | 14 | 165 | 46 | 17 | 〃 |
| 4 | 178 | 72 | 24 | 〃 | 15 | 170 | 45 | 18 | 〃 |
| 5 | 208 | 70 | 23 | 〃 | 16 | 165 | 48 | 18 | 〃 |
| 6 | 180 | 72 | 19 | 〃 | 17 | 151 | 46 | 20 | 片刳穿孔 |
| 7 | 197 | 78 | 28 | 〃 | 18 | 162 | 42 | 80 | 〃 |
| 8 | 205 | 75 | 20 | 〃 | 19 | 130 | 41 | 12 | 〃 |
| 9 | 210 | 80 | 22 | 〃 | 20 | 145 | 42 | 13 | 両刳穿孔 |
| 10 | 194 | 72 | 28 | 〃 | 21 | 65 | 81 | 90 | 片刳穿孔 |
| 11 | 240 | 40 | 21 | 〃 | 22 | 198 | 78 | 20 | 〃 |

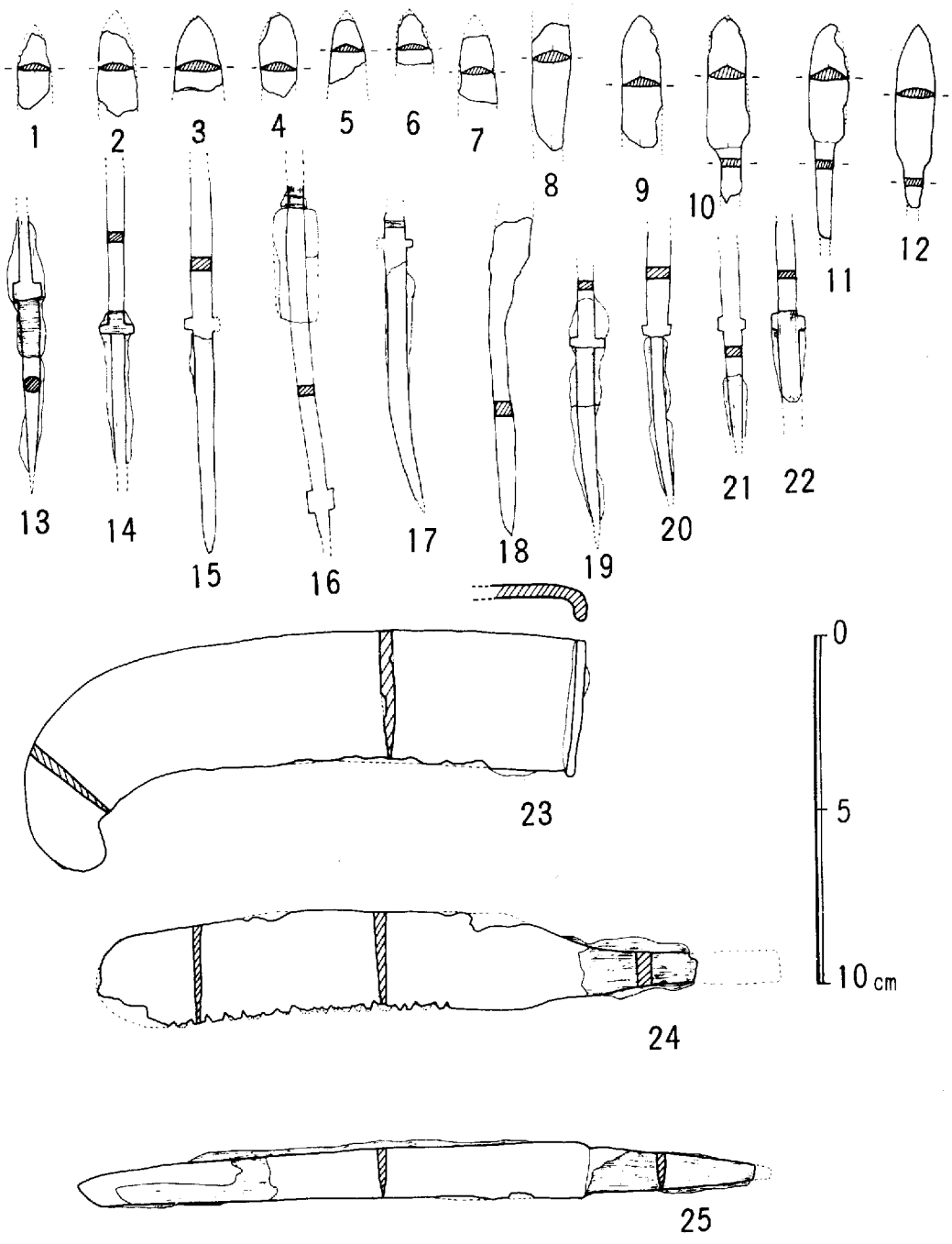
第5表　1号墳第1，第2主体内出土ガラス玉計測値表

（単位 mm）

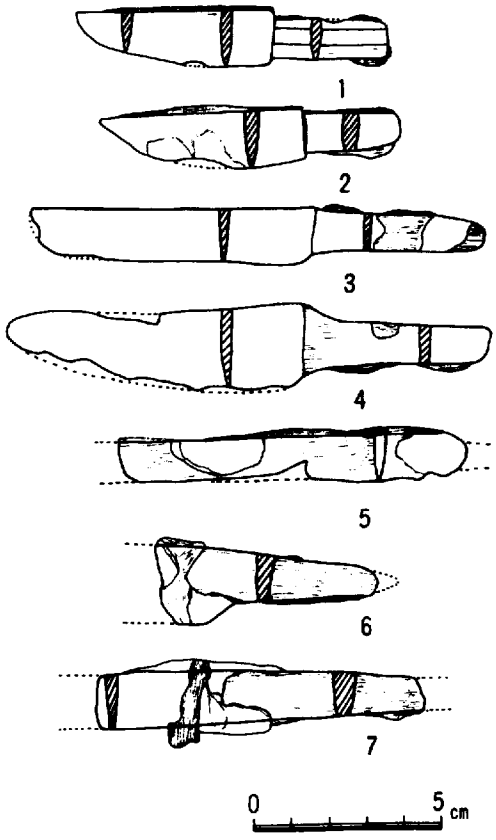
| 内部主体 | ナンバー | 長さ | 直径 | 孔径 | 色調 | 内部主体 | ナンバー | 長さ | 直径 | 孔径 | 色調 | 内部主体 | ナンバー | 長さ | 直径 | 孔径 | 色調 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1主体 | №－3 | 5.1 | 8.0 | 2.2 | 濃いブルー | 第2主体 | №－15 | 3.8 | 5.2 | 1.3 | 薄いブルー | 第2主体 | №－15 | 3.7 | 4.1 | 0.8 | 濃いブルー |
| 〃 | 〃 | 6.0 | 8.2 | 2.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.9 | 3.0 | 1.5 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.2 | 6.8 | 1.9 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6.2 | 8.1 | 2.0 | 明るいブルー | 〃 | 〃 | 6.0 | 7.5 | 1.3 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 5.0 | 6.7 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 4.0 | 7.2 | 2.0 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 3.4 | 3.0 | 1.4 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.1 | 5.8 | 1.1 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 5.0 | 7.0 | 1.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.7 | 6.9 | 1.9 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.5 | 8.1 | 1.9 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6.1 | 7.2 | 2.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.1 | 3.8 | 1.5 | 薄いブルー | 〃 | 〃 | 6.2 | 6.5 | 1.3 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6.0 | 8.0 | 2.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.1 | 6.8 | 1.0 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 5.8 | 6.2 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 5.0 | 7.2 | 2.0 | 明るいブルー | 〃 | 〃 | 4.7 | 7.1 | 1.7 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.8 | 6.3 | 1.4 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 4.0 | 8.0 | 2.0 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 2.8 | 5.2 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 7.1 | 7.2 | 2.0 | 薄いブルー |
| 〃 | 〃 | 5.0 | 7.0 | 2.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 2.9 | 4.2 | 2.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.3 | 6.1 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 7.0 | 8.0 | 1.0 | 薄いブルー | 〃 | 〃 | 2.0 | 3.1 | 1.3 | 薄いブルー | 〃 | 〃 | 2.3 | 4.9 | 1.5 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 5.0 | 7.0 | 2.0 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 2.9 | 3.8 | 1.1 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 3.9 | 4.2 | 0.8 | 濃いブルー |
| 〃 | 〃 | 6.2 | 6.3 | 2.2 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.5 | 7.2 | 1.9 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.9 | 6.6 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6.1 | 7.4 | 2.1 | 明るいブルー | 〃 | 〃 | 7.5 | 6.0 | 1.6 | 〃 | 〃 | 〃 | 2.7 | 4.5 | 1.8 | 薄いブルー |
| 〃 | 〃 | 6.3 | 7.2 | 2.2 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.8 | 5.0 | 1.7 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.1 | 6.2 | 1.2 | 濃いブルー |
| 〃 | 〃 | 5.3 | 7.2 | 1.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.2 | 6.2 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.3 | 6.3 | 1.8 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 7.4 | 6.2 | 2.3 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 5.2 | 6.2 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 7.6 | 7.2 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 8.3 | 8.2 | 1.3 | 薄いブルー | 〃 | 〃 | 3.0 | 4.2 | 1.3 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.2 | 6.2 | 1.0 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 5.2 | 8.3 | 1.2 | 濃いブルー | 〃 | 〃 | 3.8 | 3.9 | 1.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.5 | 4.2 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6.3 | 7.4 | 1.3 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.0 | 3.5 | 1.2 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.9 | 6.0 | 1.8 | 〃 |
| 第2主体 | №－15 | 6.1 | 7.2 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.1 | 4.0 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.9 | 6.1 | 1.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 4.0 | 4.1 | 1.5 | 〃 | 〃 | 〃 | 4.8 | 7.6 | 1.2 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.8 | 5.0 | 1.7 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2.3 | 4.5 | 1.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.0 | 6.8 | 1.5 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.9 | 7.8 | 2.0 | 薄いブルー |
| 〃 | 〃 | 5.0 | 3.6 | 2.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.1 | 6.2 | 1.3 | 〃 | 〃 | 〃 | 6.8 | 6.8 | 1.3 | 濃いブルー |
| 〃 | 〃 | 4.2 | 4.5 | 1.5 | 〃 | 〃 | 〃 | 5.8 | 7.5 | 0.8 | 〃 | 〃 | №－16 | 8.1 | 10.0 | 2.1 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 4.3 | 6.2 | 2.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.0 | 4.0 | 0.9 | 〃 | 〃 | №－17 | 4.1 | 7.1 | 3.2 | 明るいブルー |
| 〃 | 〃 | 5.6 | 5.1 | 1.0 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.0 | 4.2 | 1.2 | 薄いブルー | 〃 | 棺内a | 5.2 | 8.3 | 2.3 | 濃いブルー |
| 〃 | 〃 | 3.2 | 2.1 | 1.1 | 〃 | 〃 | 〃 | 3.1 | 4.0 | 0.9 | 濃いブルー | 〃 | 棺内b | 6.1 | 6.3 | 2.4 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 3.4 | 4.3 | 1.3 | 〃 | 〃 | 〃 | 1.8 | 4.1 | 1.1 | 〃 | 〃 | 棺内c | 6.0 | 7.1 | 2.2 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 3.0 | 3.8 | 1.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 2.9 | 3.9 | 0.9 | 〃 | | | | | | |




第20図　1号墳第2主体出土鉄鏃実測図




第21図　1号墳第2主体出土鉄器実測図




第22図　1号墳第2主体及び撹乱層出土刀子

(ｲ)　ガラス玉（第5表）

総数69個出土した。うち64個は勾玉，管玉と一緒に短頸壺に入れられていた。残り5個は棺内にて出土した。色調は濃いブルーが58個，薄いブルーが10個，明るいブルーが1個あった。形は一定でなく，最少で長さ1.8㎜，直径が4.1㎜であり，最大のものは長さ8.1㎜，直径が10㎜であった。

(c)　鑿と不明鉄器（第19図）（第80図10，11）

(1)は長さ30㎝を測る。先端部は丸のみ形である。後端部はハンマーを受ける部分らしく，平らになっている。鑿もしくは「ノミ」と考えられる。(2)は(1)と一緒に出土した。当初鑿の一部分と思われたが接合する個所がないため，この鉄器だけで単独に使われたらしい。用途は不明である。

(d)　鉄鏃（第20図，第21図(1)～(22)，81図(5)，(6)，82図）

1号墳より出土した鉄鏃は大別すると6種類ある。第2主体内より出土した鉄鏃は頭位置と推定される所に一束にした状態で出土した。なお第2主体内より出土した鉄鏃は5種類に大別された。

Ⅰ類……広鋒両丸造棘箆被腸抉柳葉式

第20図(3)，(4)，(6)～(9)，(15)～(20)，(25)

Ⅱ類……広鋒片丸造棘箆被腸抉柳葉式

第20図(5)，(10)，(12)～(14)，(21)，(22)，(24)

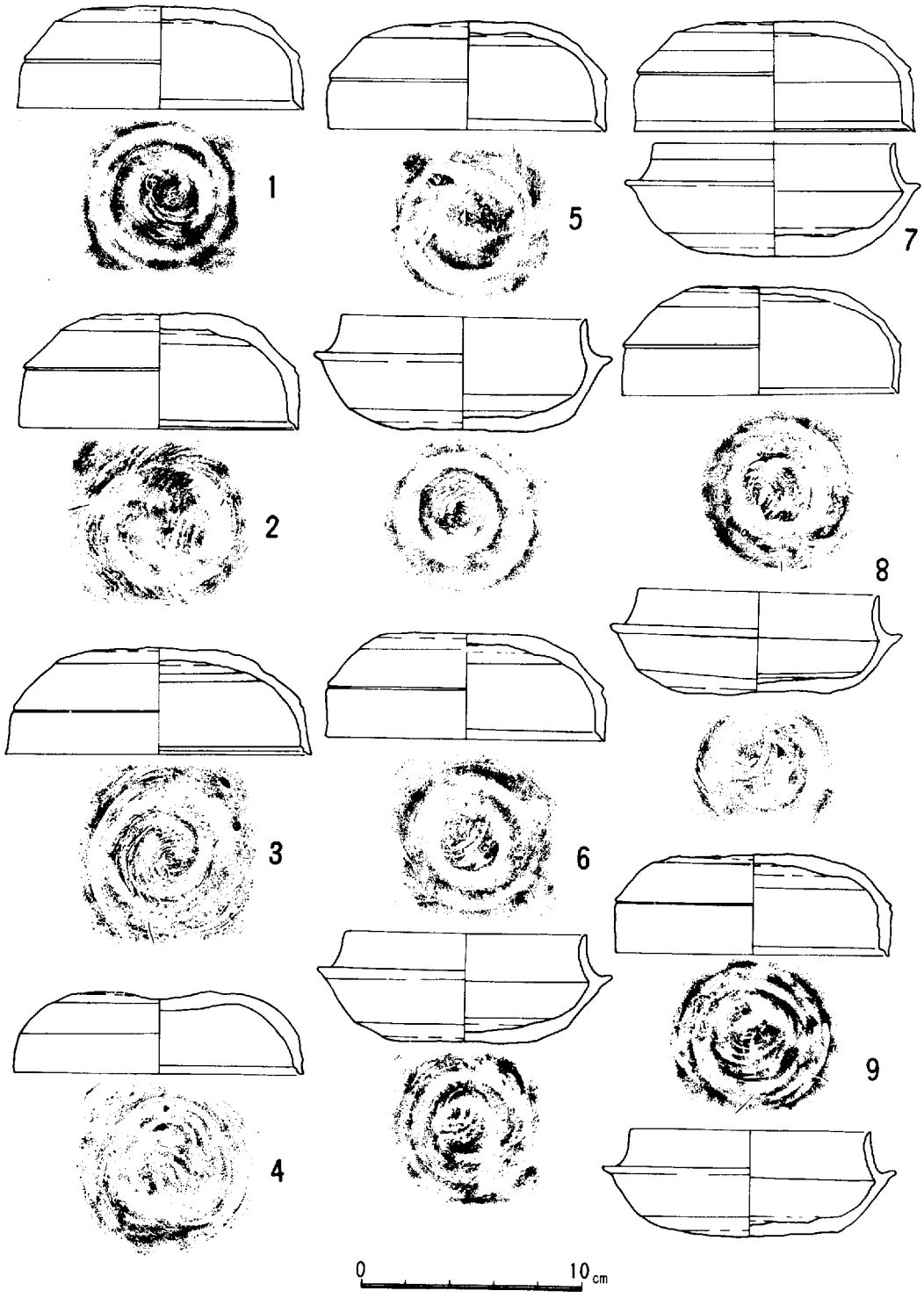
Ⅲ類……両丸造箆被柳葉式　　第21図(12)

Ⅳ類……鏑造腸抉柳葉式　　第21図(23)

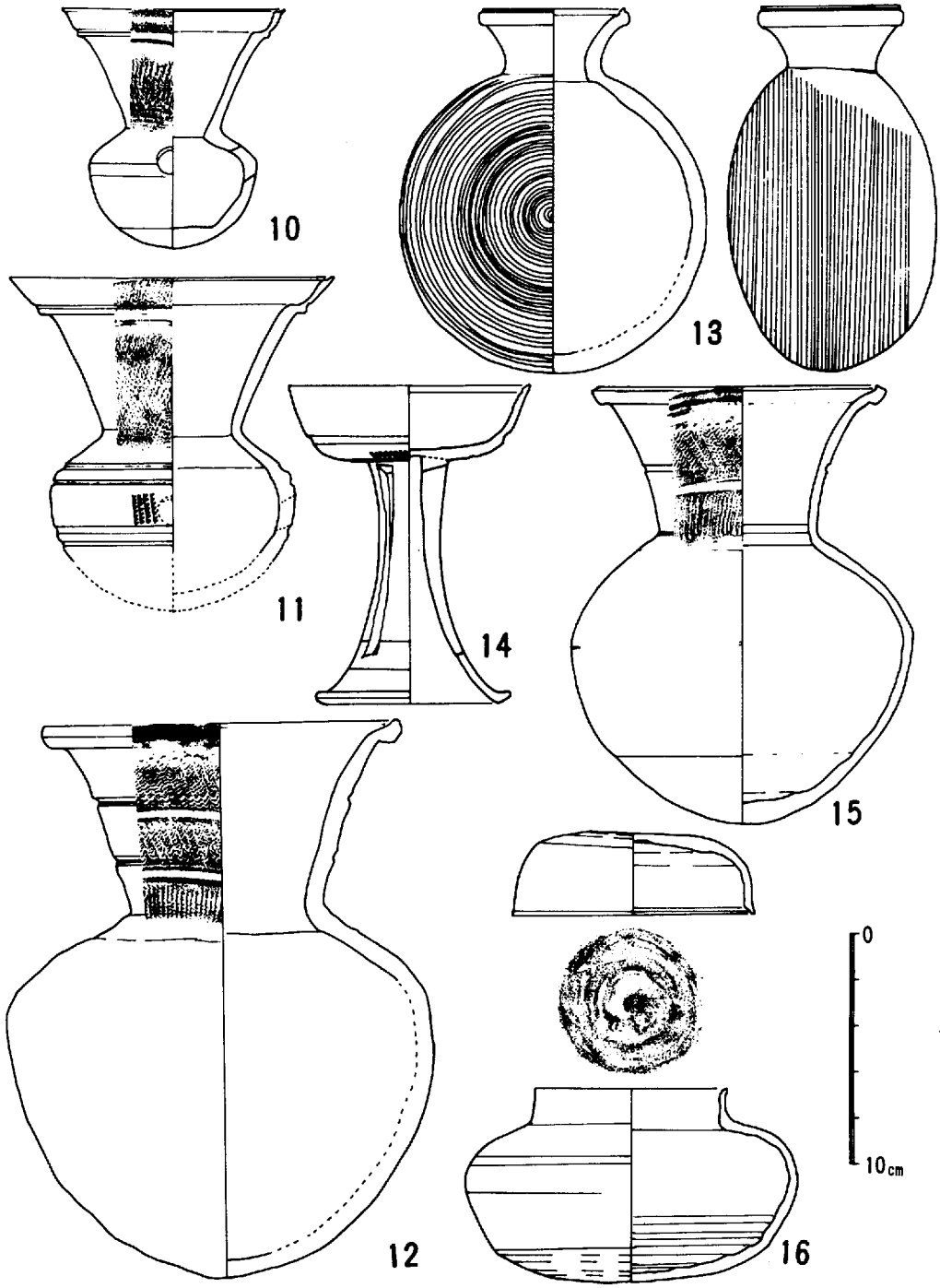
Ⅴ類……鏑造柳葉式

第20図(1)，(2)　　第21図(9)～(11)

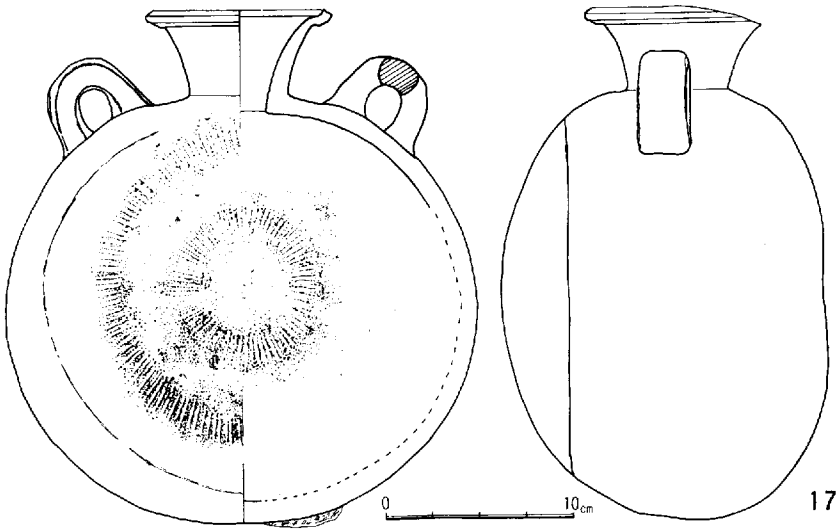
なお，8区撹乱層より第20図(26)が出土したが，これをⅥ類とした。箆被平造腸抉柳葉式である。




第23図　Ⅰ号墳第２主体出土須恵器実測図




第24図　1号墳第2主体出土須恵器実測図




第25図　1号墳第2主体出土提瓶実測図

(e)　鉄鎌（第21図㉓，81図(2)）

鎌は棺内の脚部位置より出土した。長さは16㎝，幅0.4㎝の薄いつくりである。先端を内湾させ，基部をほぼ直角に折り曲げた曲刃鎌である。

(f)　鉄鋸（第21図㉔，81図(3)）

鋸は棺内の頭部位置に鑿，刀子などと一緒に織物に包まれた状態で出土した。身の一方に茎をもち，柄をつけて引くものである。現存長は17.5㎝，鋸歯は約9㎝，幅は約2.8㎝を測る。断面は二等辺三角形をしている。なお裏側には織物痕がみとめられた。茎部には目釘孔を確認できなかった。

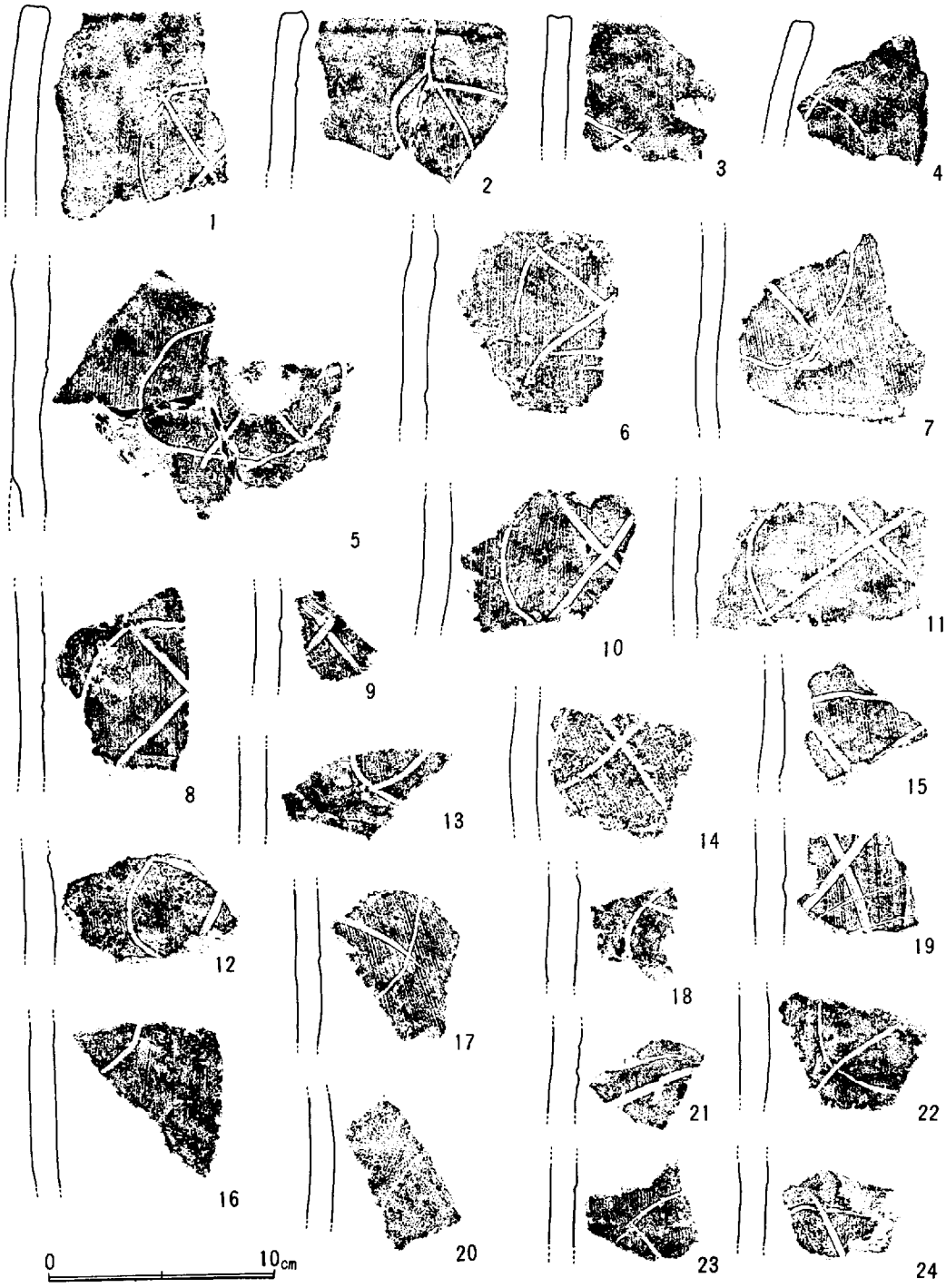
(g)　刀子（第21図㉕，第22図，81図(4)）

第2主体内より第21図㉕と第22図(1)～(5)が出土した。うち5本はほぼ完形である。第21図㉕は茎部末端が欠損しているが，全長は20.5㎝と推定される。刀身長は15㎝，刀幅は0.3㎝ある。茎部には木質が残り，刀身にも木質が附着している。第22図(1)は全長8.3㎝，刀身長は5.3㎝，刀幅は関の部分で1.5㎝を測る。茎部，刀身には木質が残っている。(2)は全長8㎝，刀身長は5.5㎝，刀幅は関の部分で1.4㎝を測る。茎部，刀身には木質が残っている。(3)は全長12㎝，刀身長は7.4㎝，刀幅は関の部分で1.5㎝を測る。茎部には木質が残っている。(4)は全長12㎝，刀身長は7.8㎝，刀幅は関の部分で2.2㎝を測る。茎部には木質が残っている。(5)は残存部が9.2㎝ある。切先と茎部を欠損している。なお刀身には木質が残っている。(6)，(7)は1号墳の墳頂部攪乱層にて出土したものであり，木質の残る茎部である。(7)の茎部と関の間には桜皮を巻いた痕跡がみられる。

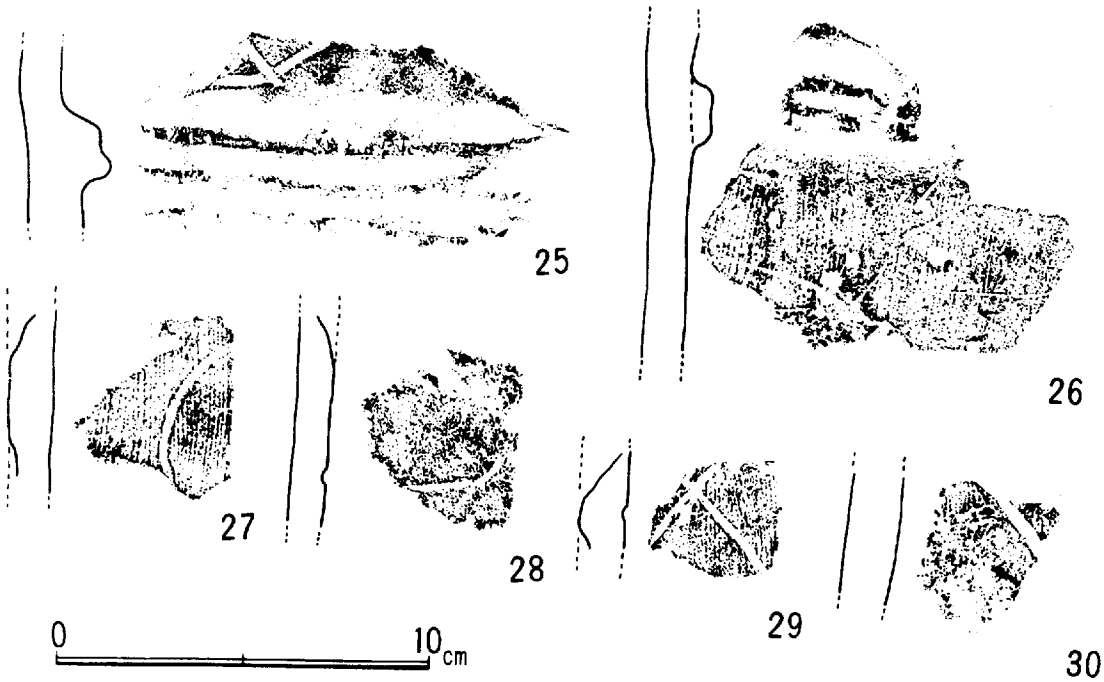
第６表　１号墳第２主体出土須恵器　　（単位　cm）

| 図版番号 | 種類 | 形態 | 器高 | 口縁径 | 胴幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第２３図　１ | 須恵器 | 杯蓋 | 4.7 | １３.０ | | 精製粘土（石英ふくむ） | 良 | 灰色 | 内面に同心円文あり |
| 〃　２ | 〃 | 〃 | 5.2 | １２.６ | | 〃 | 不良 | 灰白色 | 〃 |
| 〃　３ | 〃 | 〃 | 4.8 | １３.９ | | 〃 | 普通 | 灰黒色 | 〃 |
| 〃　４ | 〃 | 〃 | 3.3 | １３.０ | | （砂，雲母，石英ふくむ） | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃　５ | 〃 | 〃 | 4.9 | １２.６ | | 精製粘土 | 良 | 〃 | 〃 |
| 〃　５ | 〃 | 杯身 | 5.1 | １１.１ | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃　６ | 〃 | 杯蓋 | 4.8 | １２.７ | | 〃（石英ふくむ） | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃　６ | 〃 | 杯身 | 4.9 | １１.０ | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃　７ | 〃 | 杯蓋 | 5.0 | １２.８ | | 〃（石英，雲母ふくむ） | 〃 | 灰色 | |
| 〃　７ | 〃 | 杯身 | 5.1 | １１.０ | | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 〃　８ | 〃 | 杯蓋 | 4.9 | １２.６ | | 精製粘土 | 〃 | 〃 | 内面に同心円文あり |
| 〃　８ | 〃 | 杯身 | 4.5 | １１.０ | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃　９ | 〃 | 杯蓋 | 4.5 | １２.４ | | 〃（石英ふくむ） | 〃 | 灰青色 | 内面に同心円文あり。また朱が附着している。 |
| 〃　９ | 〃 | 杯身 | 4.9 | １１.０ | | 〃 | 〃 | 〃 | 内面に朱が附着している。 |
| 第２４図１０ | 〃 | 瓶 | １０.４ | 9.6 | 7.2 | 〃 | 〃 | 灰緑色 | 頸部に７本の波状文，内外面に自然釉がかかっている。 |
| １１ | 〃 | 〃 | (１４.４) | １４.０ | １０.６ | 〃（雲母ふくむ） | 〃 | 灰青色 | 口縁と頸部に波状文が描かれ，所々指で消している。 |
| １２ | 〃 | 壺 | ２４.０ | １５.３ | １８.３ | 〃 | 〃 | 灰色 | 頸部は３段に区切られ，上から２段までに波状文が描かれている。 |
| １３ | 〃 | 提瓶 | １５.３ | 6.0 | １３.３ | 〃 | 普通 | 灰黒色 | 全面にかき目がみられる。 |
| １４ | 〃 | 無蓋高杯 | １３.８ | １０.５ | | 〃（雲母ふくむ） | 良 | 〃 | 四角透孔が３つある。 |
| １５ | 〃 | 壺 | １８.９ | １２.１ | １４.８ | 〃 | 〃 | 灰色 | １３本の波状文あり |
| １６ | 〃 | 壺蓋 | 3.5 | １０.５ | | 〃 | 〃 | 灰青色 | 内面に同心円文あり |
| １６ | 〃 | 壺 | 8.4 | 8.3 | １４.４ | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 第２５図 | 〃 | 提瓶 | ２７.４ | 9.2 | ２５.２ | 〃（砂，長英石ふくむ） | 普通 | 緑灰色 | 作成時に壊れたためか，ヘラで口縁端部を切って整形した後焼成している。 |

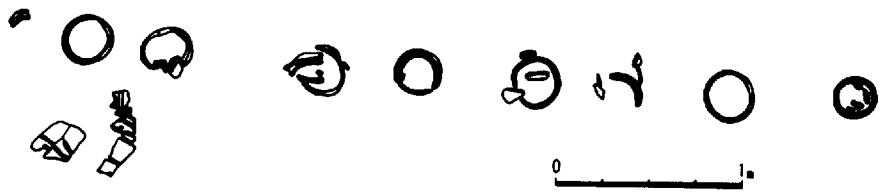
※（　）内は推定計測値である。




第26図　1号墳埴輪マーク拓本




第27図　1号墳埴輪マーク拓本




第28図　1号墳円筒埴輪列平面図

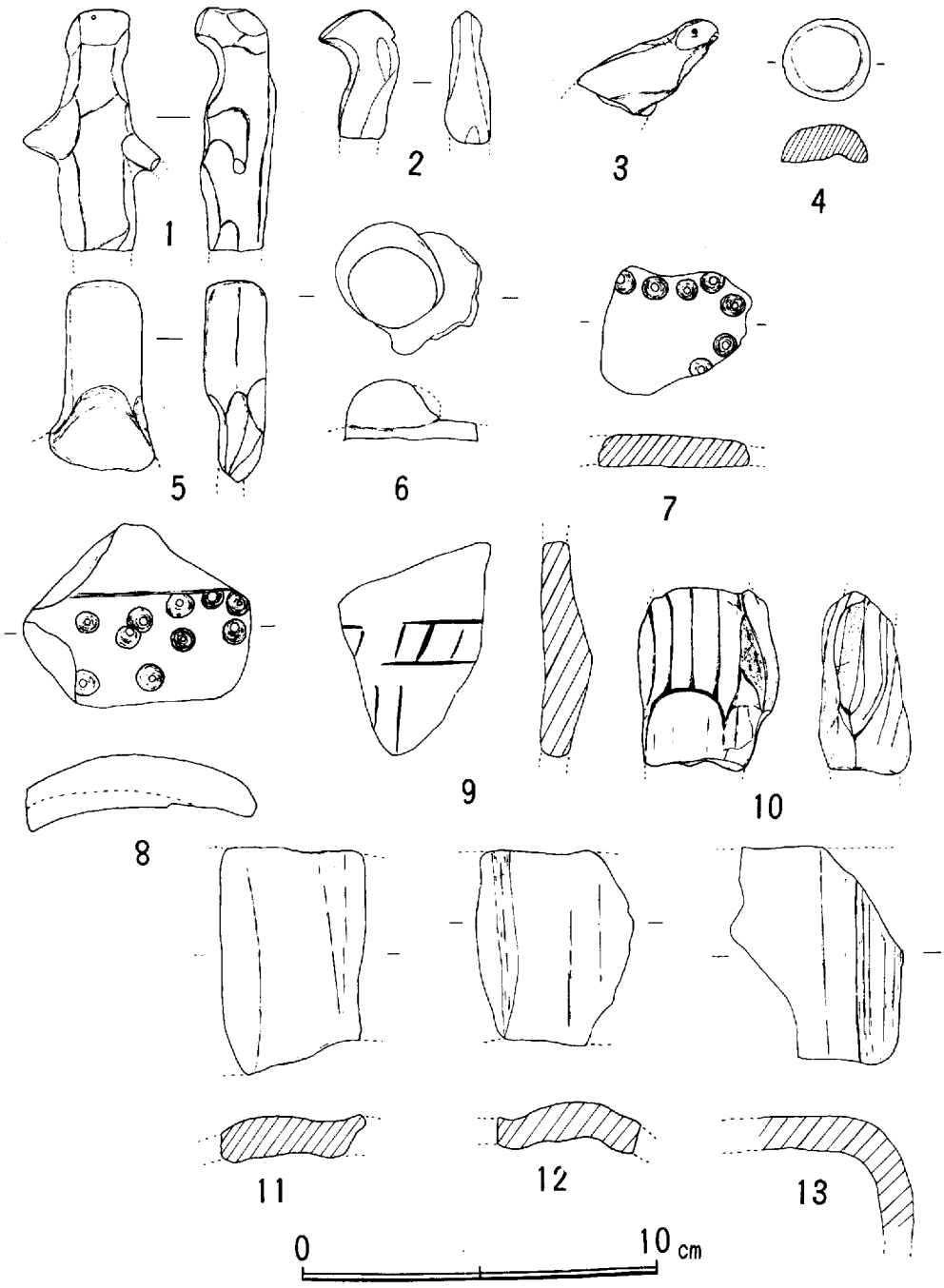
(h)　埴輪（第26図～36図，83図，84図）

埴輪の大部分は円筒埴輪であり，僅かに人物埴輪，動物埴輪片(?)が含まれていた。出土埴輪の大部分が墳頂部，墳丘，周濠内に破片の状態で落ち込んでおりその保存状態は極めて悪るく，原位置に基底部をもつ埴輪列は墳丘北西部中段盛土にやや深く埋められた状態（約5～8cm）で15～45cmの間隔で8個検出されたにすぎなかった。（第4図，第28図，第61図(1)）

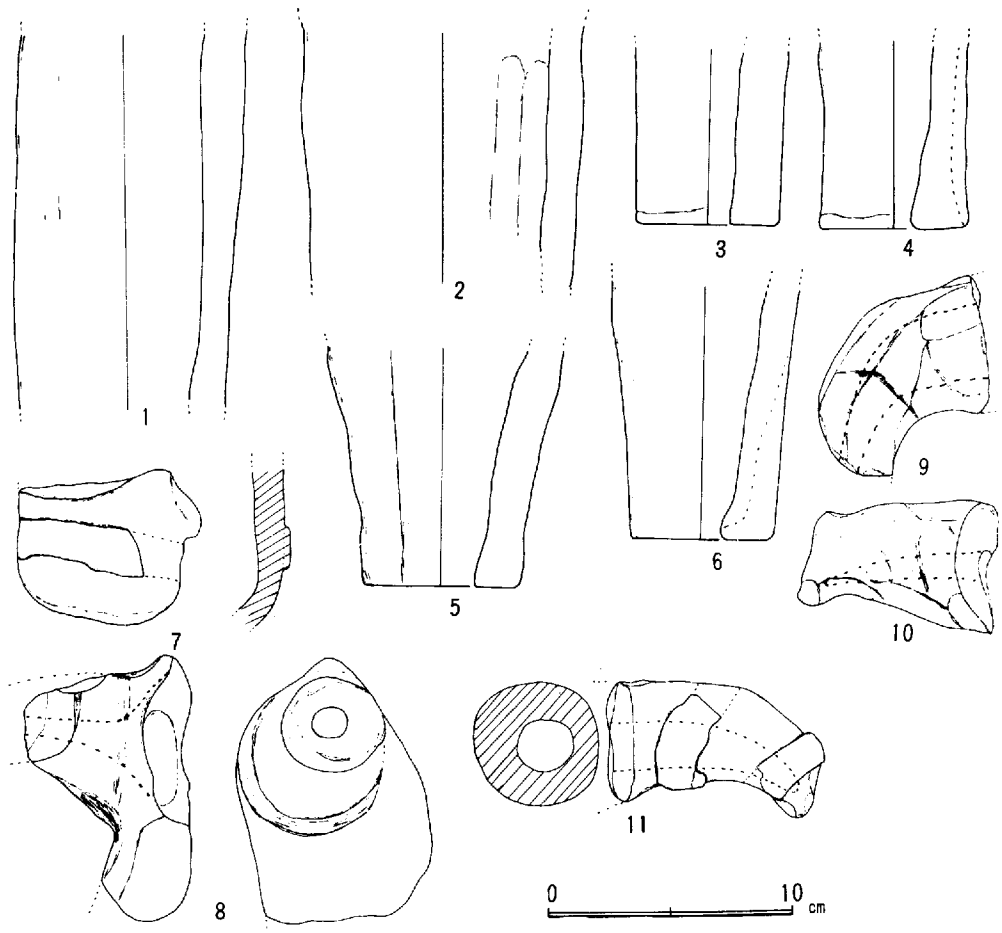
埴輪の完形品はなくその全体を知ることができなかったが，ある程度の分類は可能であった。

(i)　不明形象埴輪（第29図(4)～(9)，84図(6)～(9)，(12)，(13)，(15)）

人物ハニワ片の一部分と思われる。(4)，(6)はボタンのように思われる。(7)，(8)は竹管文を施文している。




第29図　1号墳出土動物土製品、人物埴輪実測図

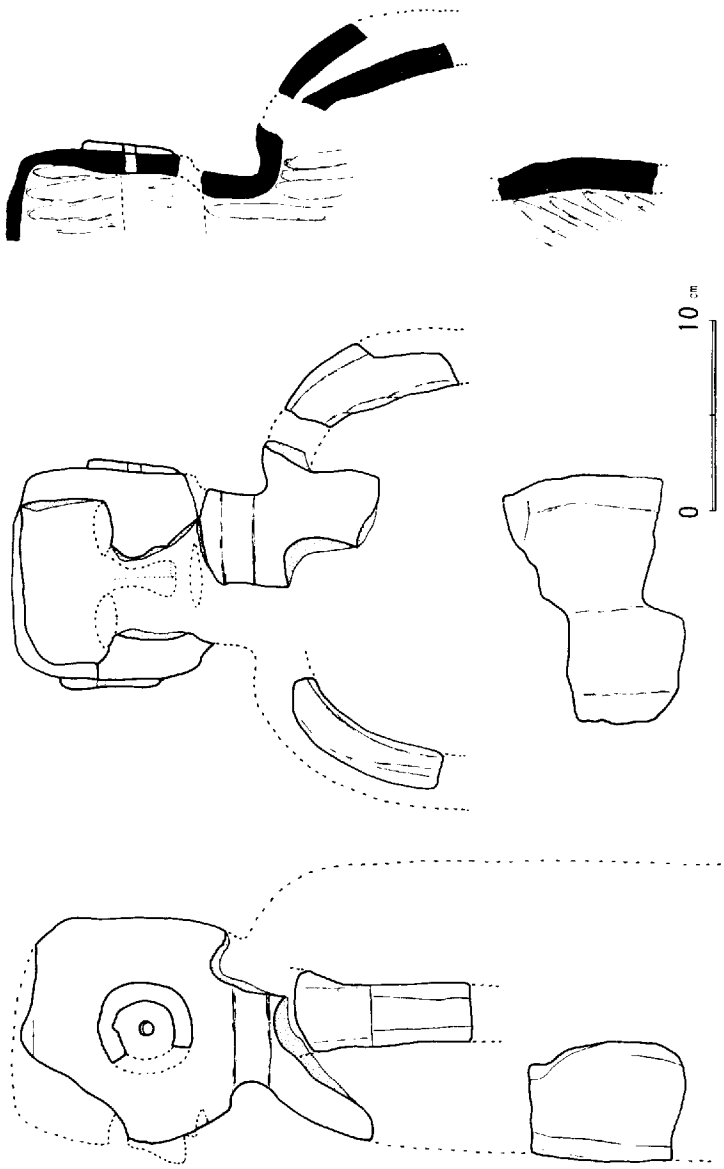



第30図　1号墳人物埴輪、動物埴輪(?)実測図

(j)　人物埴輪(第29図，31図，84図(4)～(27))

人物埴輪には男性と女性の両方の破片が出土している。女性人物像は(第29図，31図，84図(14)，(16)～(21))墳丘，周溝内に散乱していたものを復元したものである。その結果，上半身のみ復元できたが下半身は不明である。

頭頂部は欠けているが，平らな島田髷がおちたものと考えられる。目は切れ長である。耳は孔のあいた円板を貼りつけている。鼻や口は欠けているため，その全体像は不明であるが極めて無表情な顔をした女性と思われる。顔面には赤色の塗料はみとめられなかった。第29図(11)～(13)は恐らく島田髷の上の丈長の破片と考えられ，第31図と同一埴輪と考えられる。なお，この人物埴輪は精製粘土を使用しており円筒埴輪のものとは異なっている。色調は赤褐色ないし灰褐色を呈し須恵質である。




第31図　1号墳出土の人物埴輪

（ｊ－１）　手　（第２９図⑩，第８４図⑲）

精製粘土を使用した灰茶色の須恵質人物埴輪片である。指先は全て欠損しているが，何かを両手ではさんでいる印象を与える埴輪である。なおこの手は第３１図の手の可能性がある。

（ｊ－２） 男性埴輪片 （第３０図(7)～(11)，第８４図(4)，(5)，(10)，(11)）

腕の部分と思われるものが４点出土している。（７，９～１１）。特に(11)は皮ヒモを模した粘土帯が腕に巻かれている。直径は５㎝である。(8)は右肩の部分である。腕は欠損している。これらの胎土は女性人物埴輪と異なり，円筒埴輪と同じ胎土で赤褐色を呈し，焼成はあまり良くないものである。

（ｊ－３） 脚部 （第３０図(1)～(6)，第８４図(22)～(27)）

小破片を含めると総計２９片出土した。これらは周濠や墳丘より出土したものである。人物埴輪の脚部か動物埴輪（馬その他の動物）のいづれかと考えられる。断面は円柱状をなす。動物埴輪片が出土していないことから人物埴輪の脚部とも考えられる。

(k) 円筒埴輪（第２６図，２７図，３２図～３６図，８３図１～５）

口縁部がほぼ直立するものと外反するものの２種類に大別される。口縁部が直立するものは径が小さく２４㎝前後のものが多い。口縁部の外反するものは直立するものに比べて径が大きく，開き気味に直立する壺形のものと（第３２図(14)，(17)，(20)，(26)，第３３図(3)，(4)，(8)），朝顔形に大きく開くもの（第３３図(2)，(5)～(7)）の２つの形態に細分できる。

外面の仕上げは，(1)指による撫仕上げ，(2)ハケ撫のもの，(3)ハケ撫した後，指で消しているものの３種類がある。(2)のハケ撫には(a)指による撫仕上げの後にハケで縦撫したもの，(b)ハケの横撫後に縦撫したもの（第３３図(7)）の２種類がある。内面の仕上げは指による撫仕上げのものと，ハケによる横あるいは斜めの撫仕上げの２種類がある。（第３２図(22)，(23)，(26)，第３３図(1)，(7)），胴部から基底部における内面は指ナデと指ケズリによるものと上部から基底部にむけてかき上げているものやかき下げているものが大部分である。

器面全体の仕上げについては完形のものがないため不明な点が多いが，ハケ撫のものと，指撫仕上げの２種類がある。ハケ撫の大部分は縦あるいは右傾するハケ撫が行なわれているが，横撫のものも１点みられる。（第３５図(2)）

突帯はM字型と梯形の断面を示すものが大部分で第３６図(6)のように突帯をつけた後，親指と人差指でつまんでいるものもある。

円形透しは２個を１対として上段の透しと下段の透しが直角になるように配しており，この透しはヘラ状の工具で切り込まれている。

基底部外径は１７㎝～２１㎝の間にあり，最も多いものは１８㎝と２０㎝であった。基底部外面は(1)ハケ撫のもの，(2)ヘラでカットした後ハケ撫したもの，(3)ハケ撫後指で消しているもの，(4)ハケ撫後ヘラでカットしているもの，(5)不規則な沈線文を施文しているもの，(6)指撫だけのものに細分できる。

また口縁部や胴部にヘラによるマークが描かれていた。（第２６図，２７図）

以上記述した如く円筒埴輪には数種類の成形技法がみとめられた。

出土埴輪口縁は総数３５個体，基底部は５３個体を確認した。このことから，１号墳は墳丘中段のみ円筒埴輪をめぐらしていたものと考えられる。

(l) 不明埴輪（第３３図(10)，８３図(6)）

ひれつき円筒埴輪の可能性はあるが不明である。一応底部とした部分には不規則ながら二列に竹管の刺突文がみられる。ひれ状の部分はほとんど終わっているようであり，器形の推察については今後

の資料増加を待ちたい。なおこの資料がひれつき円筒埴輪ならば上下が逆になると思われる。

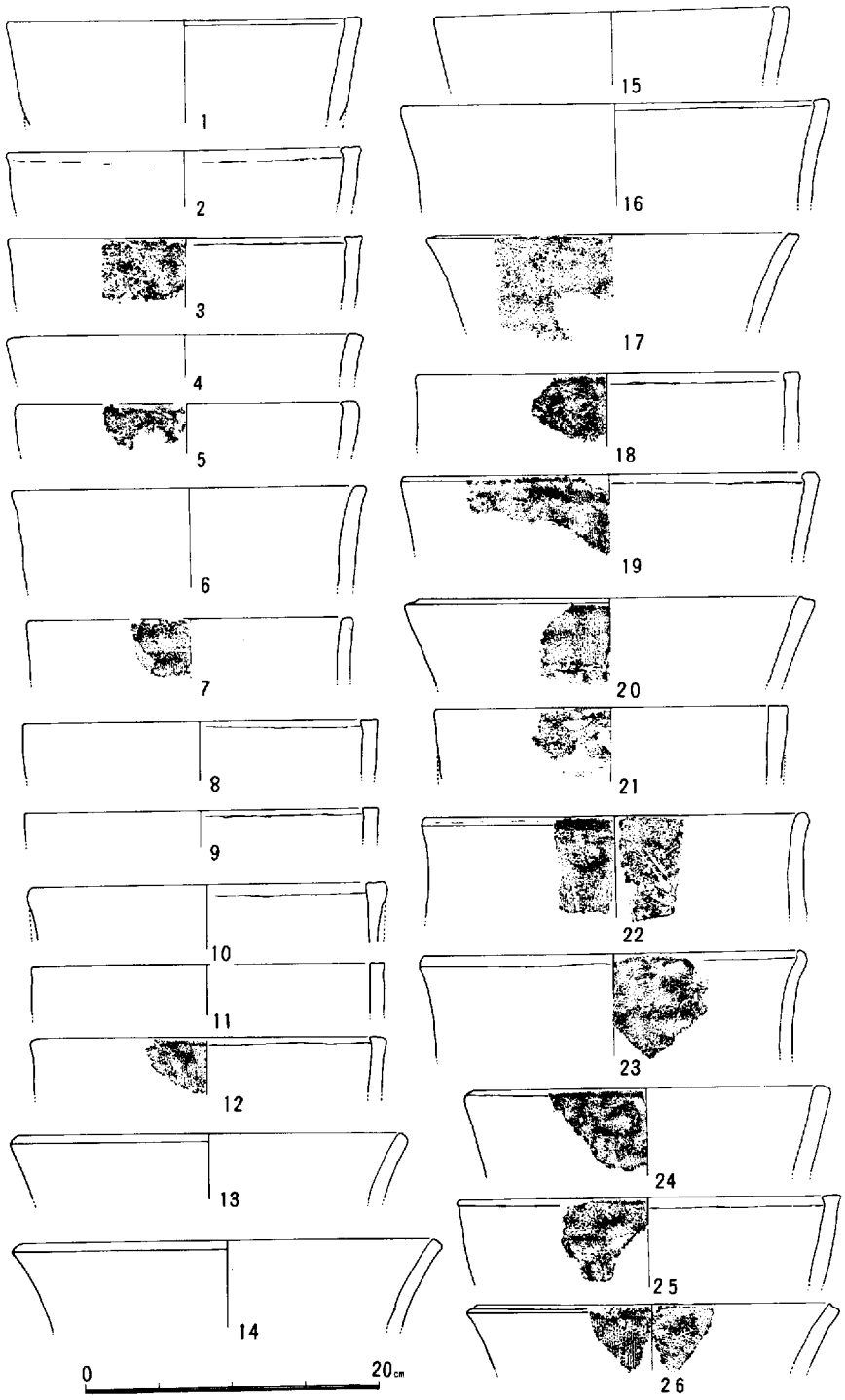
(m) 泥像（装飾付子持壺）（第２９図(1), (2), ８４図(2), (3)）

(1)は第１２図１４ａの装飾付子持壺の肩部にとりつけていた動物と考えられる。(2)も同様のものと考えられるがどのような形であるか不明である。

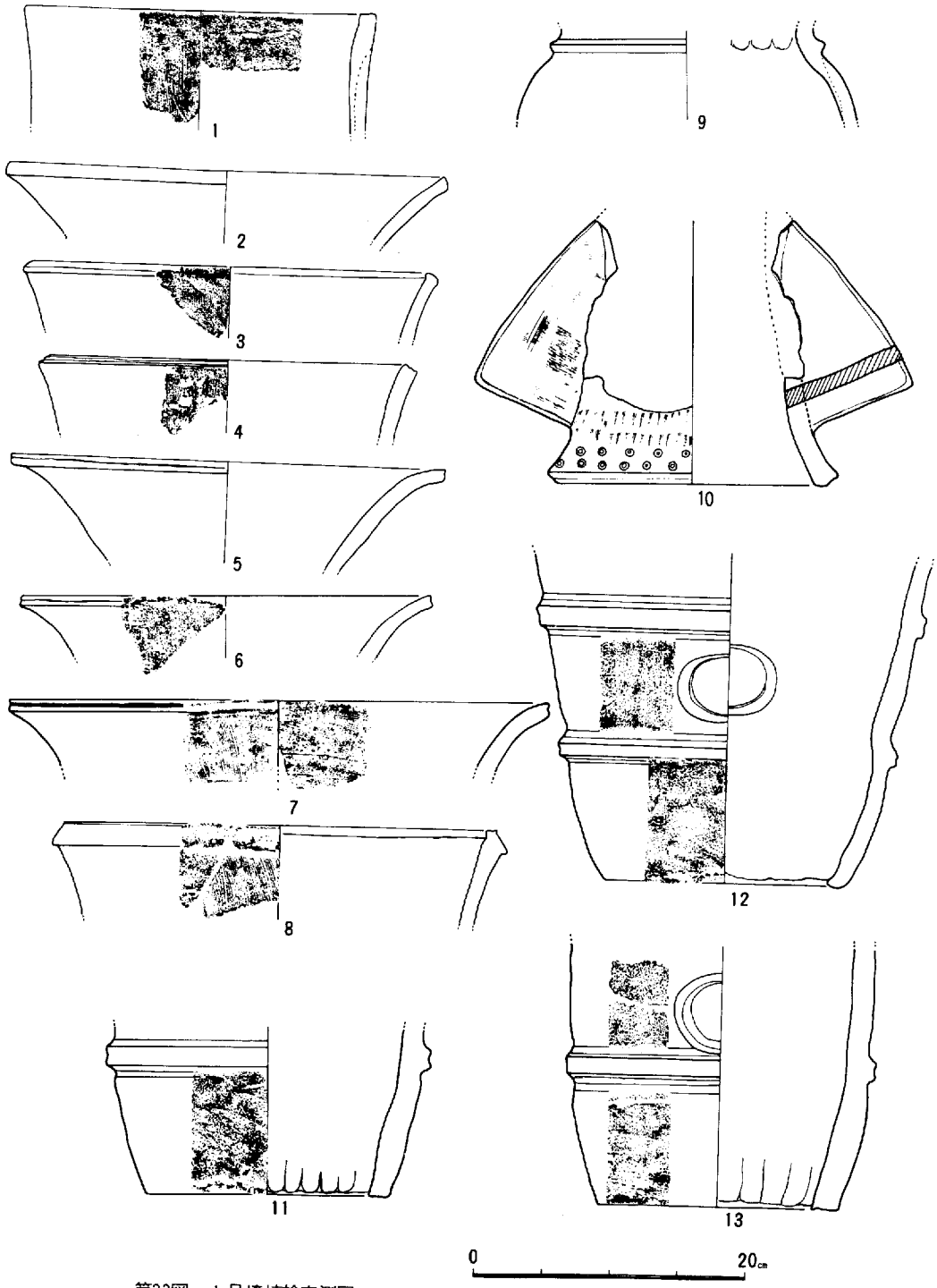
(n) 動物土製品（第２９図(3), ８４図(1)）

色調は灰青色を呈し，下半身が不明である。恐らくオットセイと考えられる。動物埴輪とも考えられる。

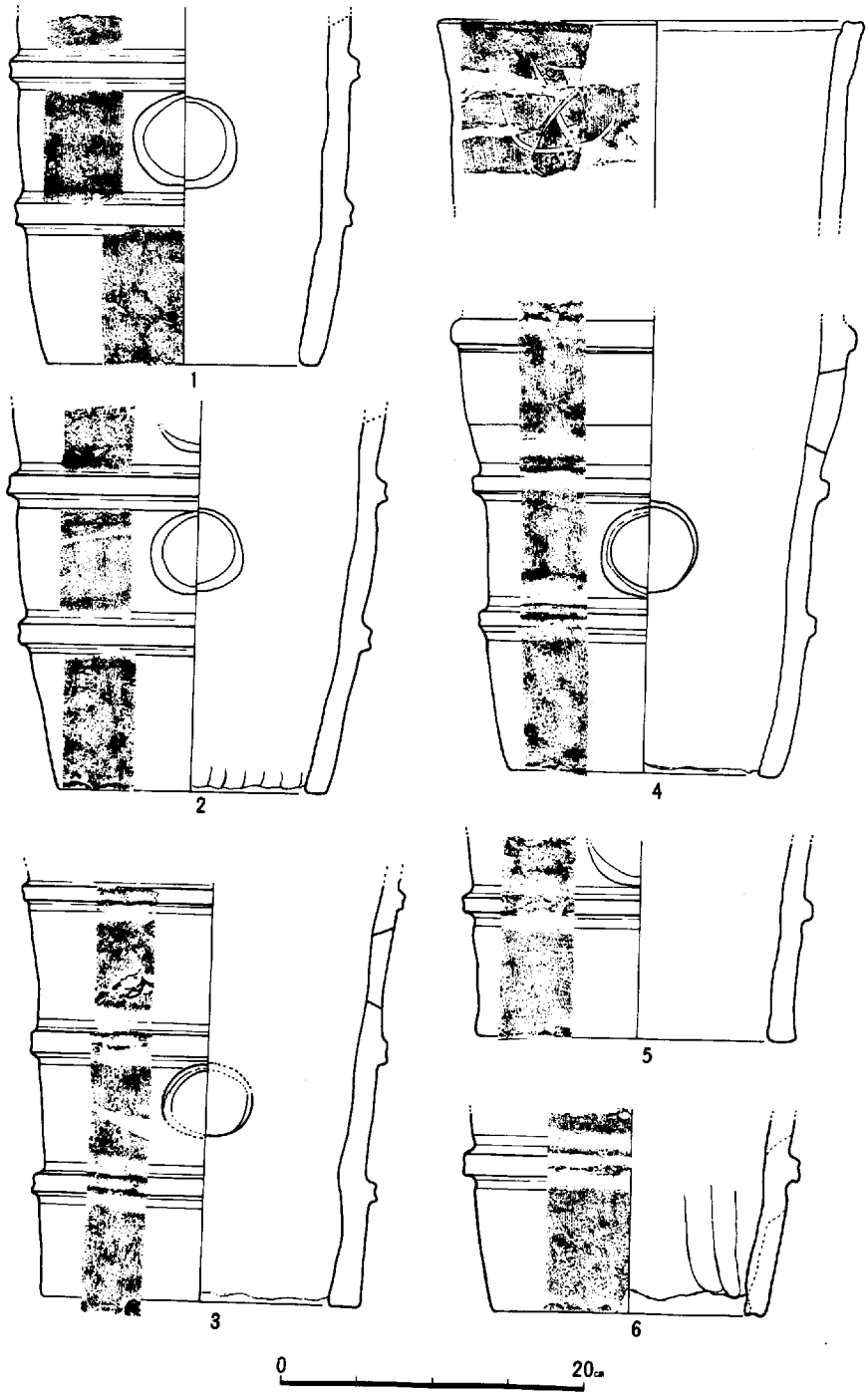
（文　松本和男）



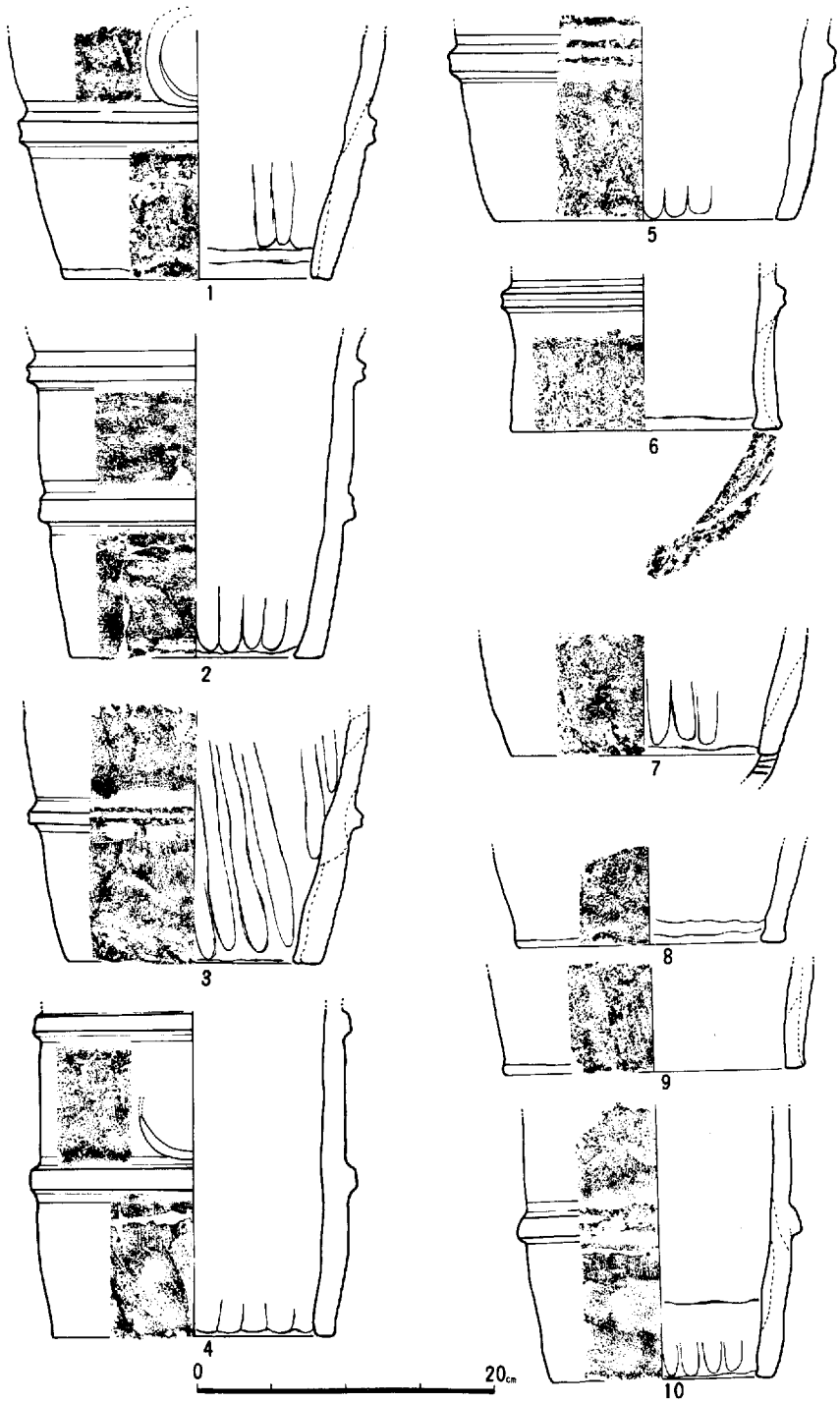

第32図　1号墳埴輪実測図



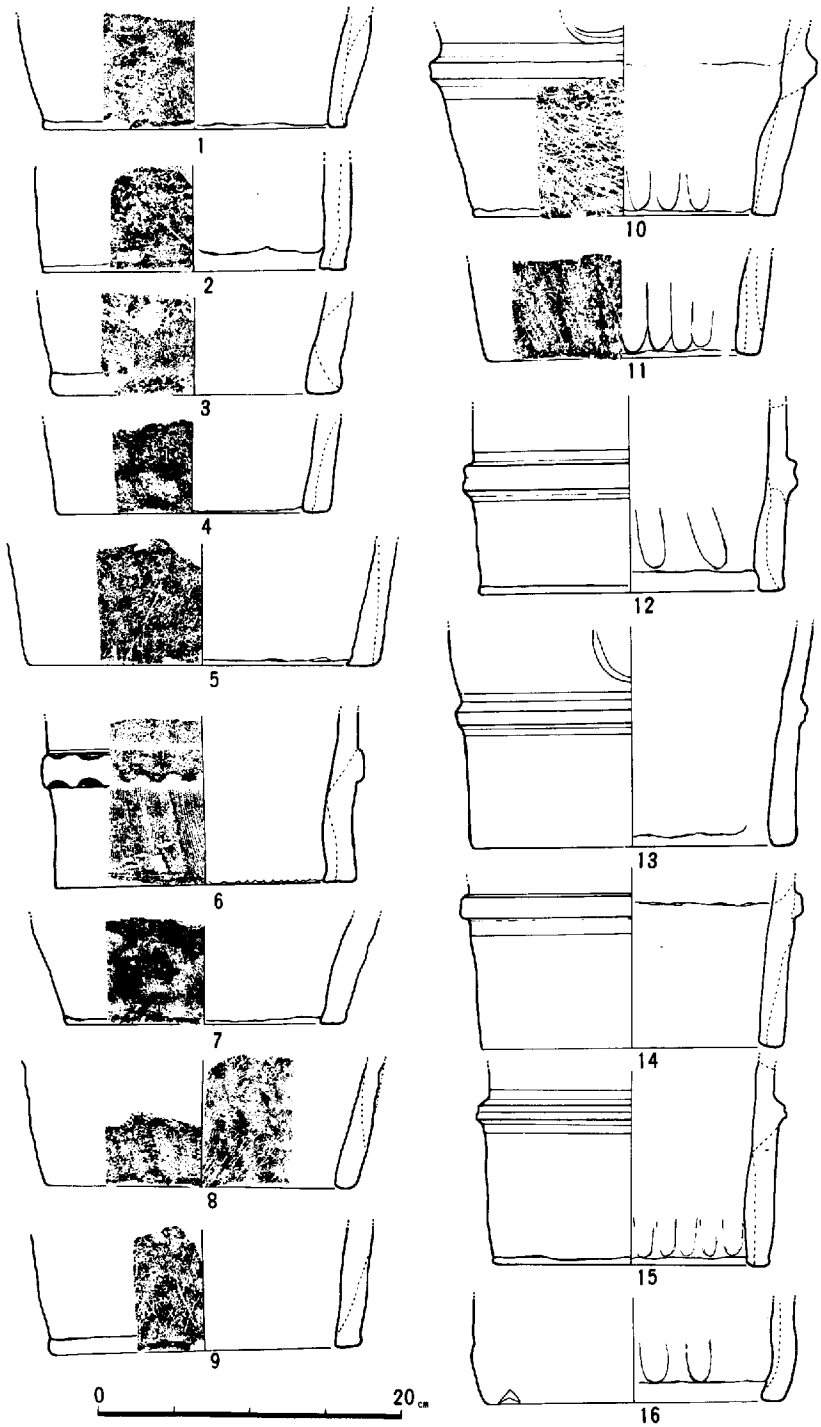

第33図　1号墳埴輪実測図



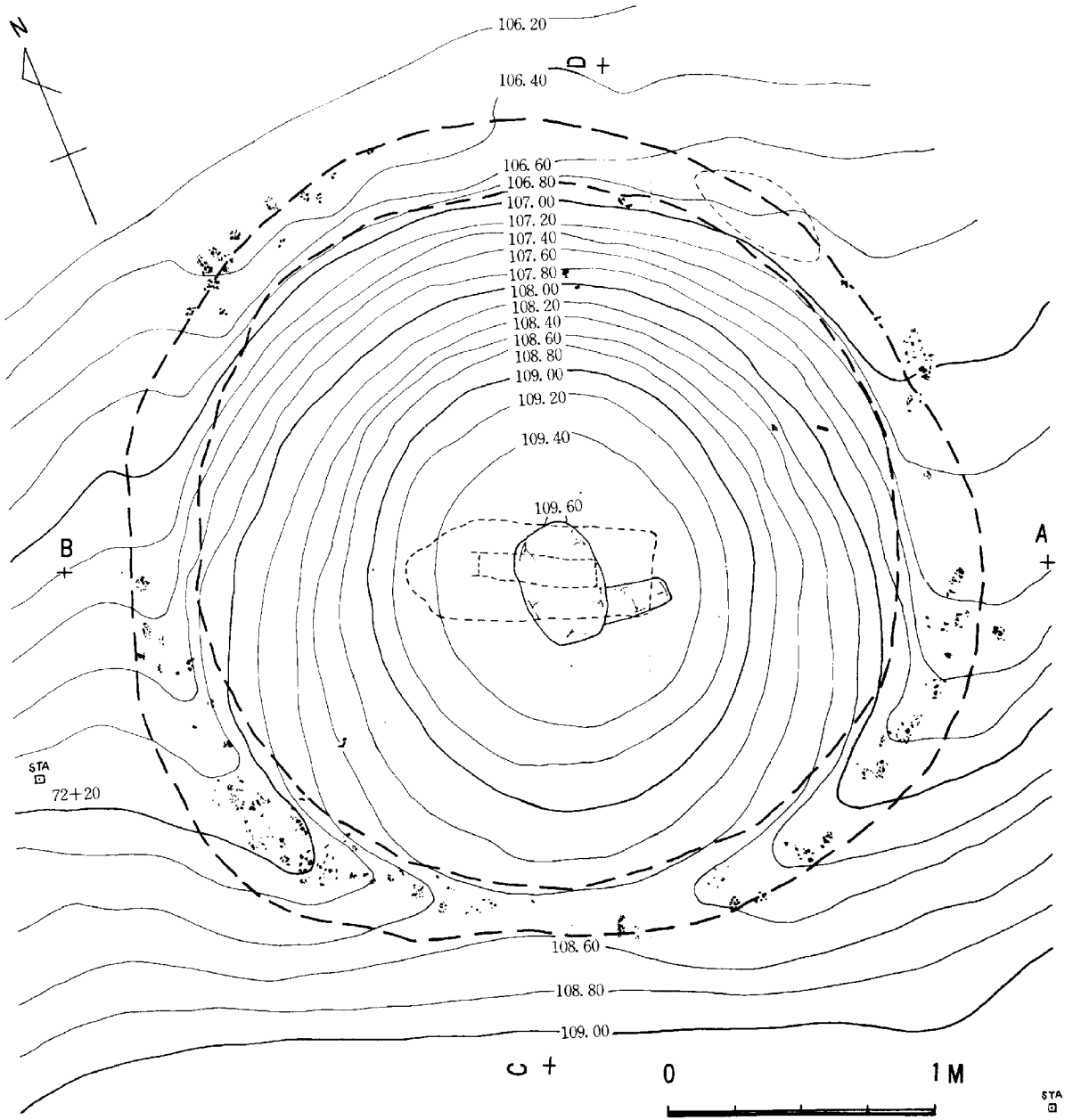

第34図　1号墳埴輪実測図



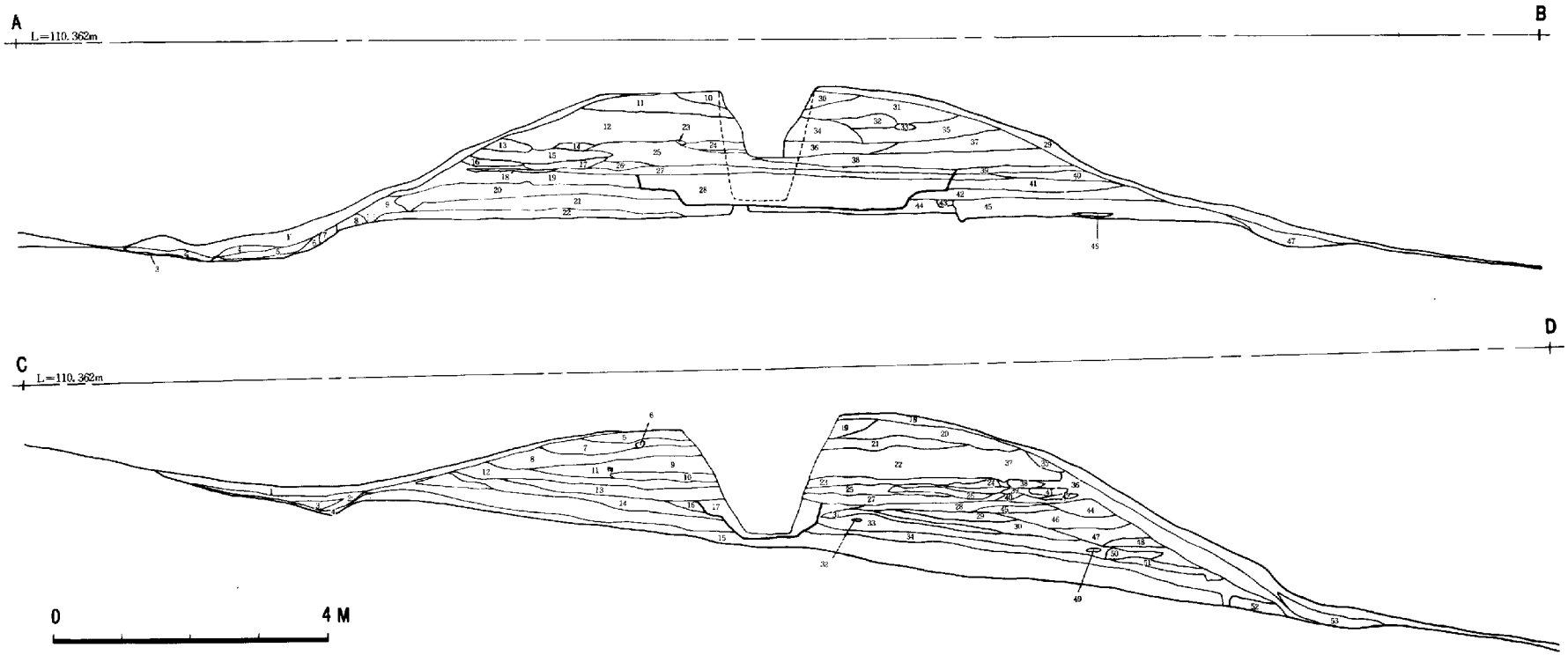

第35図　1号墳埴輪実測図




第36図　1号墳埴輪実測図



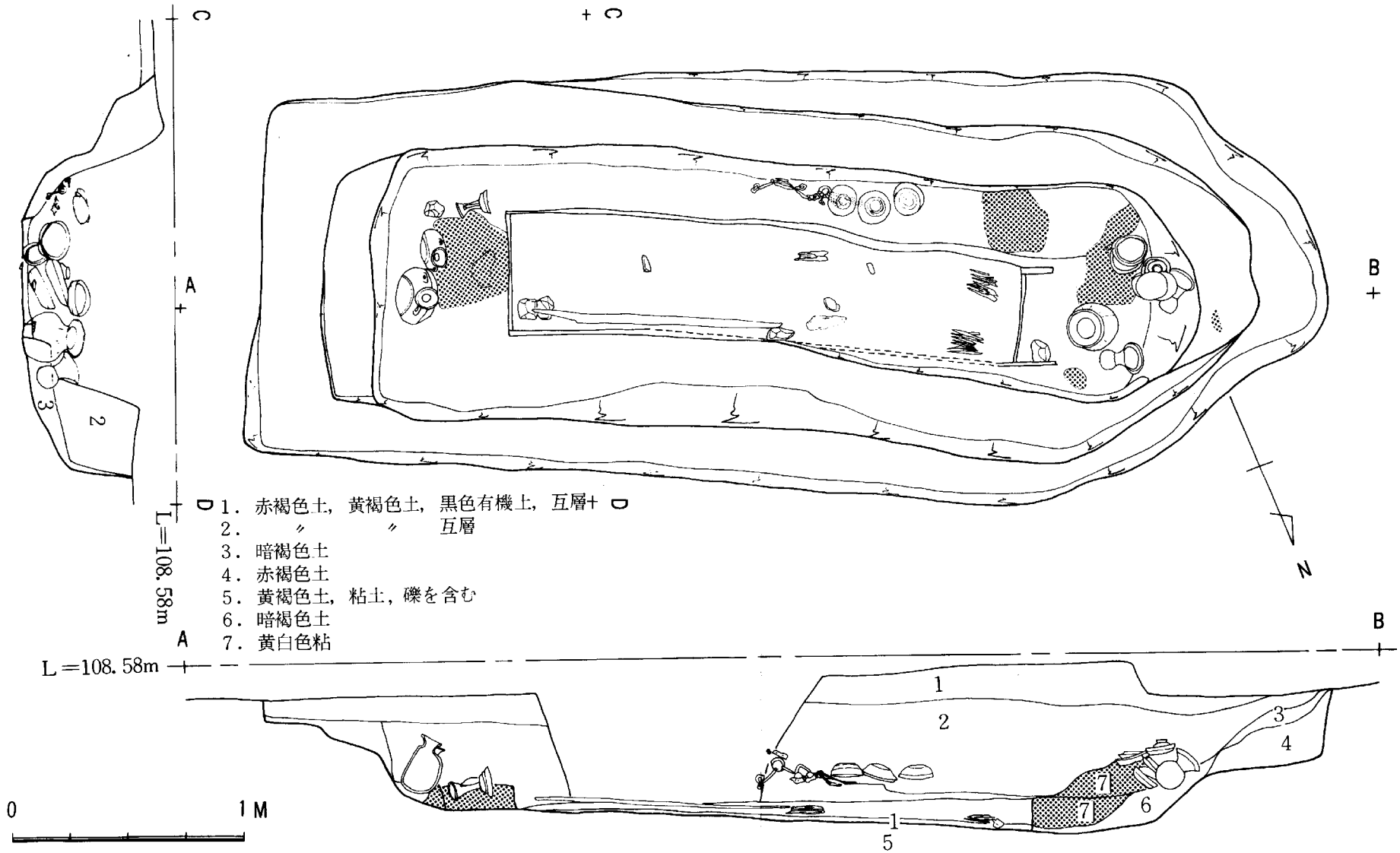

第37図　2号墳墳丘実測図



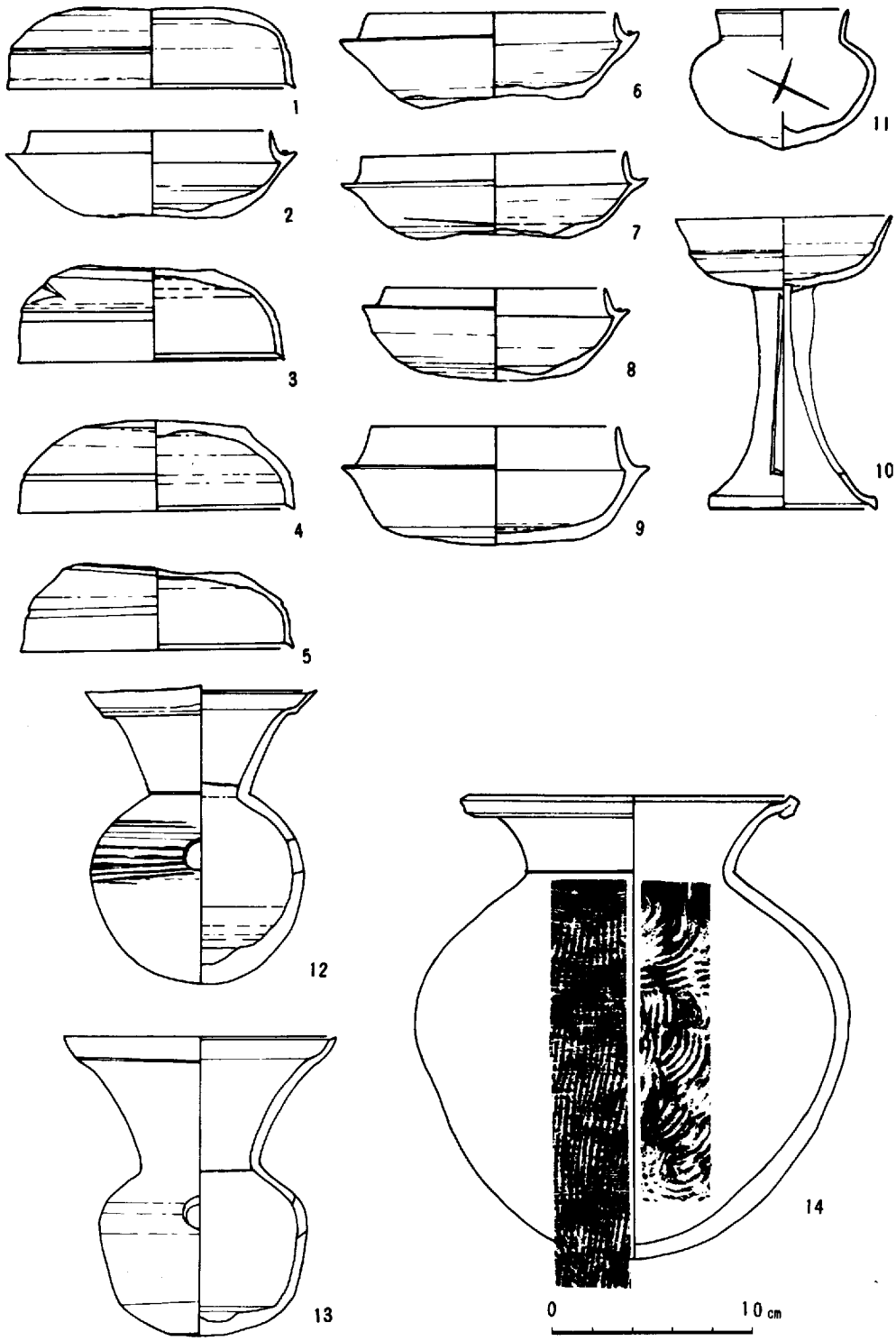

第38図　2号墳断面図

1. 暗褐色土
2. 灰黒色有機土
3. 赤褐色土
4. 灰黒色有機土
5. 黒色有機土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 柱根?
9. 柱根?
10. 赤褐礫混入(地山盛土)
11. 赤褐色土(やや黄色である)
12. 赤褐色土(地山土まじり粘土)
13. 暗黄色土
14. 暗黄色土
15. 暗赤褐色土(やや黒色土が少ない)
16. 黒色有機土
17. 暗茶色土
18. 黒色有機土(バンド)
19. 暗赤褐色土(やや赤色粘土ブロック多い)
20. 黒色有機土
21. 黄褐色土
22. 黄色土
23. 黒色ブロック
24. 赤褐色土(地山土)
25. 暗赤褐色土(粘土まじり)
26. 暗黄褐色土
27. 赤褐色土(粘土まじり)
28. 主体部
29. 表土層
30. 赤褐色礫混入土(地山盛土)
31. 暗赤褐色土(やや黒色土多い)
32. 赤褐色土
33. 黒色ブロック
34. 暗赤褐色土 粒子が細い 汚れた地山土
35. 赤褐色 礫混入地山盛土
36. 暗赤褐色土(やや粒子が大きい)
37. 赤褐色土(地山盛土)
38. 褐色土
39. 赤褐色土
40. 淡赤褐色土
41. 黒色土・褐色土互層
42. 黒有機土
43. 赤褐色
44. 黄褐色 粘土まじり
45. 黄褐色土
46. 炭化層
47. 黒色有機土層

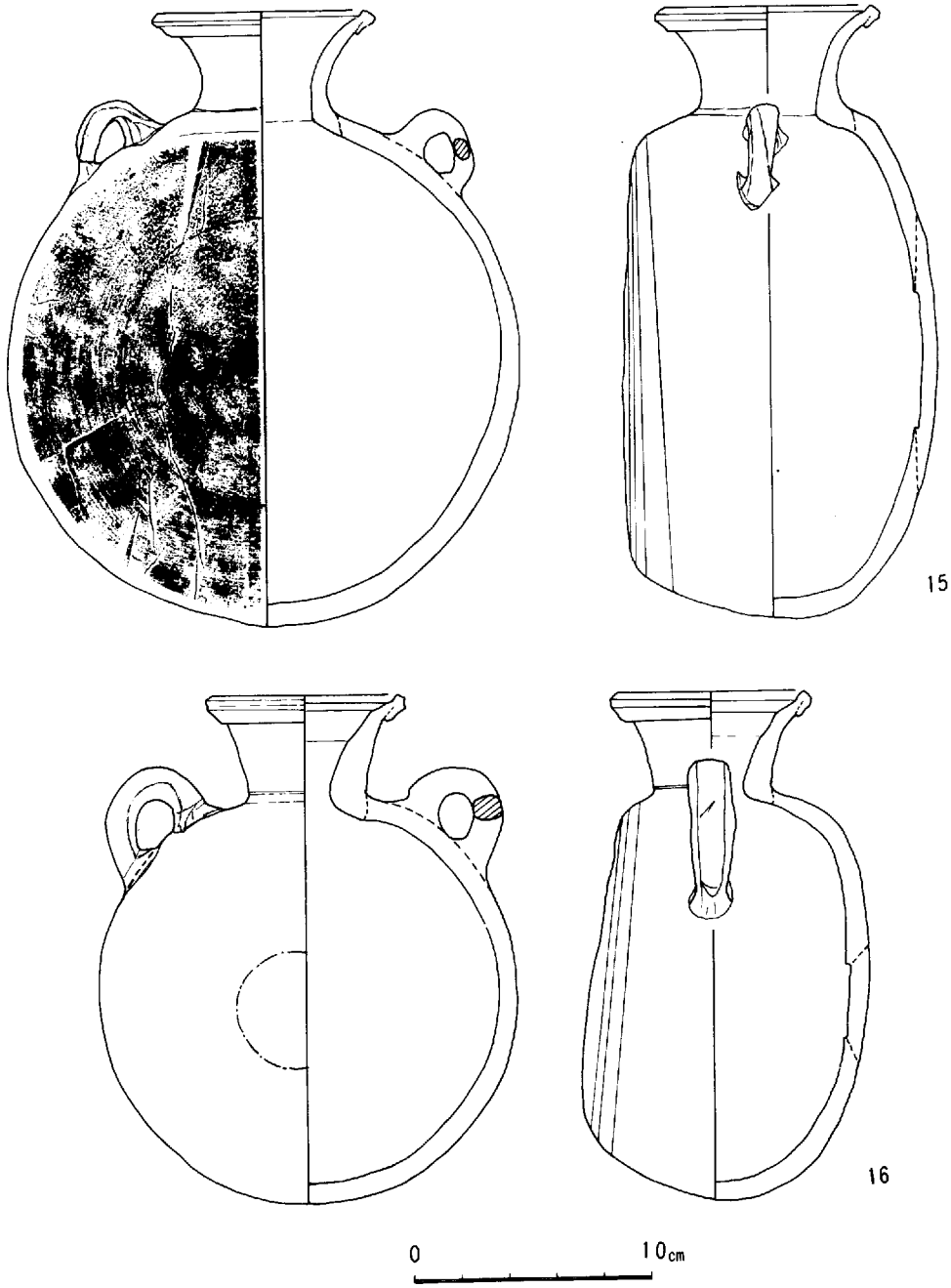
1. 表土層
2. 暗褐色土
3. 黒有機土
4. 赤黒色土
5. 赤褐色土 地山盛山
6. 黒色ブロック
7. 暗赤褐色(汚れている)
8. 赤褐色土
9. 赤茶褐色土
10. 赤褐色土(黒色土を含む)
11. 石
12. 暗灰色土
13. 暗赤褐色土
14. 黒色有機土
15. 黄褐色土
16. 褐色土
17. 主体部
18. 表土
19. 赤褐色
20. 茶褐色土
21. 暗赤褐色土
22. 暗灰褐色
23. 暗灰色
24. 黒色有機
25. 暗赤褐色
26. 黒色有機土, 褐色土互層
27. 暗灰色土
28. 褐色土
29. 黒色有機土, 褐色土互層
30. 褐色土
31. 黒色有機, 褐色土の互層
32. 黒色有機土
33. 褐色土
34. 黒有機土
35. 赤褐色
36. 暗灰色土
37. 赤褐色
38. 黒色有機
39. 灰黒色土
40. 黒色有機
41. 赤褐色土
42. 黒色有機土
44. 灰黒色, 褐色土互層
45. 暗黄褐色土
46. 淡黄褐色土
47. 黒色有機土, 黄褐色土互層
48. 淡黄褐色土
49. 黒色有機土ブロック
50. 赤褐色土
51. 黒色有機土, 黄色土の互層
52. 黄褐色土
53. 黒色有機土



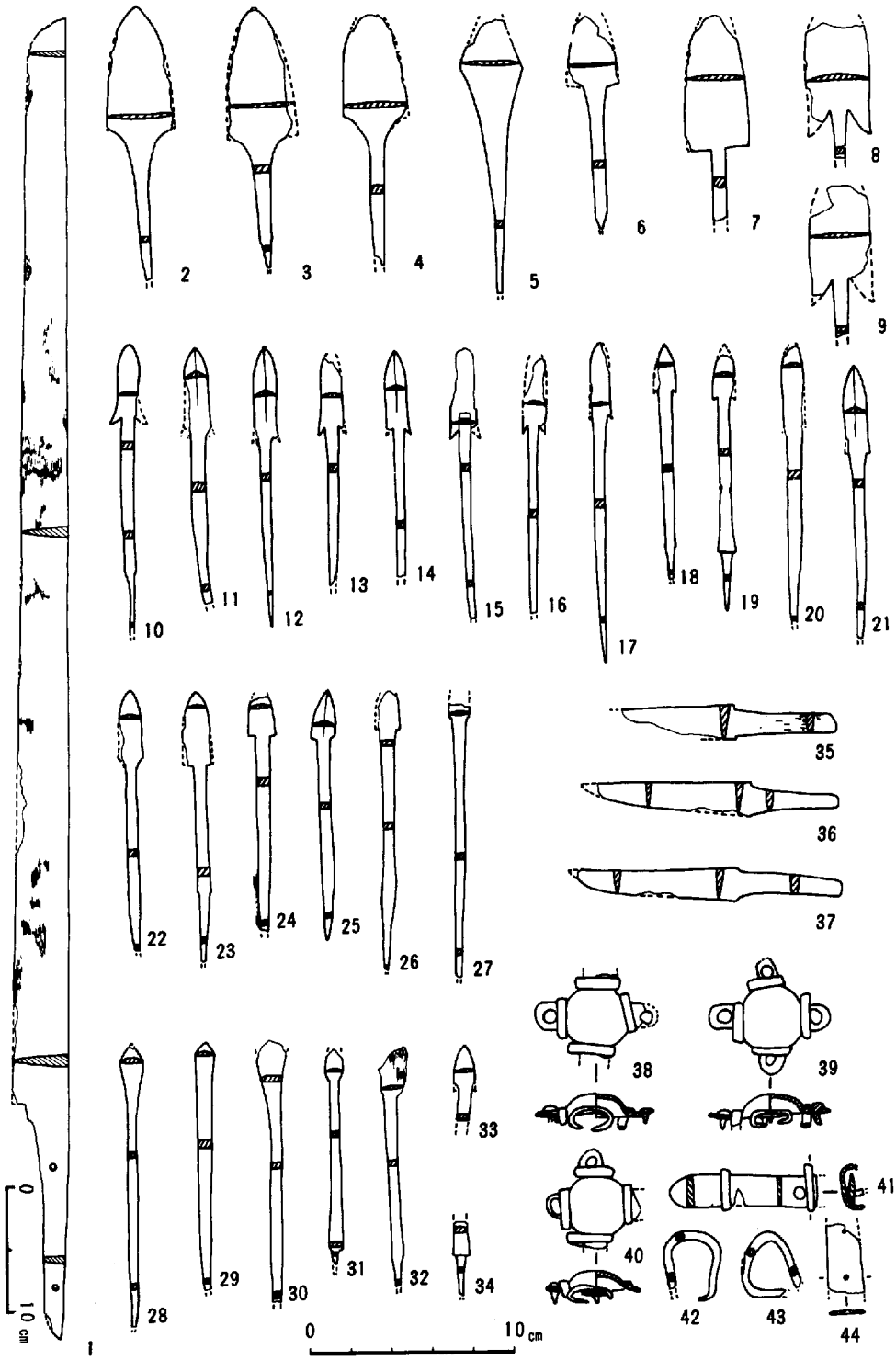

第39図　2号墳内部主体実測図




第40図　2号墳出土遺物(須恵器)




第41図　2号墳出土遺物実測図




第42図　2号墳出土 鉄器

## 5. 2号墳（第37図，第65図(2)～第73図）

本古墳の封土の流失はわずかのようで，外形はかなり明確にとらえることができ，さらに，二次堆積の被覆土はあったが，発掘調査前の地形測量の段階で，円墳で，しかも，周湟の存在することも認められた。（第３７図，６６図(1)）

調査の結果，次のような数値を得た。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| NNE－SSW | 12.8 m | | | |
| 周湟巾 | NNE | 1.10 m | SSW | 0.85 m |
| 周湟深さ | NNE | 0.30 m | SSW | 0.40 m |
| WNW－ESE | 12.95 m | | | |
| 周湟巾 | WNW | 1.25 m | ESE | 1.60 m |
| 周湟深さ | WNW | 0.30 m | ESE | 35 cm |

墳丘盛土（旧地表面より）約1.30 m

周湟内には埴輪片（朝顔形円筒埴輪片も含む）が散在しており，墳丘の中段の位置あたりには，埴輪が並べられていたのであろうが，発掘調査の時点では現位置に基底部の存在するものは１個も遺存していなかったのである。また，周湟内の埴輪片の数からみても，墳丘全体にめぐらしていたものとは思われない。

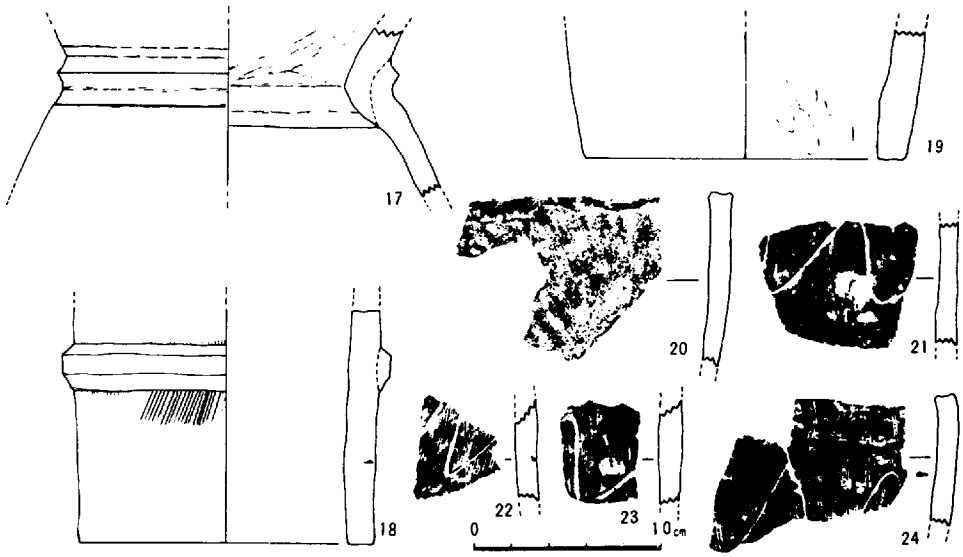
なお，本古墳は，近年心ない人の手によって２回にもわたって盗掘されたが，幸いにも主体部の一部が破壊を受けていただけでとどまっていた。

本古墳の内部主体は木棺直葬である。墳丘のほぼ中央部に，現墳頂部より約1.16 m下で，掘り方が確認され，N－68°50′－Wに長軸をおいて構築されていた。木棺の深さは，現存墳頂より棺底まで約1.74 mあった。（第３８図，６７図）

主体部は西北西に向いてやや広い底部が舟型を呈した掘り方で，舟先より$\frac{3}{4}$までが３段，それより後は２段で地山面をも掘り下げられていた。棺底には少量の礫の存在があったが，意識的に置いたものとは思われず，地山面にあったものの残りと考えられる。主体部の木棺痕跡は部分的であるが確認され，棺の東西の小口粘土（東側は定位置，西側もほぼ定位置と考えられる）と側面にも粘土がわずかに確認された。掘り方，木棺痕跡の数値は次に示す。

調査の際，西側の小口粘土はわずかにくずれて発見されたがこれは木棺の崩壊時に動いたものと考えられる。掘り方の長さ約4.58 m，巾約1.68 m，深さは断面図の交点の付近で約0.5 mで西方に向って低くなっている。木棺痕跡長は約2.22 m，巾約0.54 mとなっている。なお，これらの数値はいずれも断面図の位置で計測したものである。（第３９図２号墳主体部実測図）木棺はN－67°50′－Wの方向を向いていた。出土遺物（第４０，４１，４２，４４図），鏡等（練り玉（第７表は除く）から見ても西北方向に，頭部が向いていたものと推測される。さらに盛土中には第４６図のような弥生式土器片，また地山面においては第４５図のような円形住居址の確認もなされたわけである。

本古墳の築造は屋根のゆるやかな斜面を利用し盛土により高い墳丘を築いたものである。内部主体も地山面を掘り込んで構築されている（第３８図）から造成過程を想定してみると，一度中ほど位い




第43図　2号墳出土埴輪

まで盛土を行ない平らな面を作り，次にそのほぼ中央部に前記した方位でもって土壙を掘り上がった土壙内に木棺を安置し，それから木棺の小口，並びに周囲を粘土で被い，遺物を埋葬し，周湟掘り上げの土と付近から掘り取った土を用いて墳丘を盛り上び整形をする。

最後に主体部を取り囲むように，墳丘中段の位置あたりに埴輪列を並べ古墳の構築が完了したのである。なお，この古墳に伴う他の遺構の確認はできなかった。

(a) 遺　物　（第４０図，４１図，８５図，８７図(1)）

本古墳の副葬遺物は，盗掘の際に攪乱破壊されていなかったため，すべての原位置を保っていたものである。須恵器は全く完形品であり，練り玉と共に個数並びに数値を示してある（表７）。

小口粘土下より出土の鏡（第６９図の(1)，(2)）は径 6.１６糎の仿製三角縁変形獣文鏡で鈕には紐が残存している。なお内区の一部分が破損しているが，かなり良く遺存していた縁の内側に鋸歯文帯が二重にまわっている。鈕は径1.３６糎を測り，縁は 0.２２糎，内区は約0.０５糎，鈕下の中心部には穴があいている。さらに，縁の一部には朱が付いている　，主体，並びに近辺にはそのようなものは見あたらなかった。

鉄　鏃　（第４２図，第８７図(4)，８８図）

鉄鏃は以下のように分類が可能であった。

| | |
|---|---|
| 1 類　2, 3, 4, 5 | 6 類　20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 30, 33 |
| 2 類　6, 7 | 7 類　28, 29 |
| 3 類　8, 9 | 不 明　30, 32, 34 |
| 4 類　10, 11, 12, 13, 14 | |
| 5 類　15, 16, 17, 18, 19 | |

第７表　２号墳出土玉類遺物計測値表

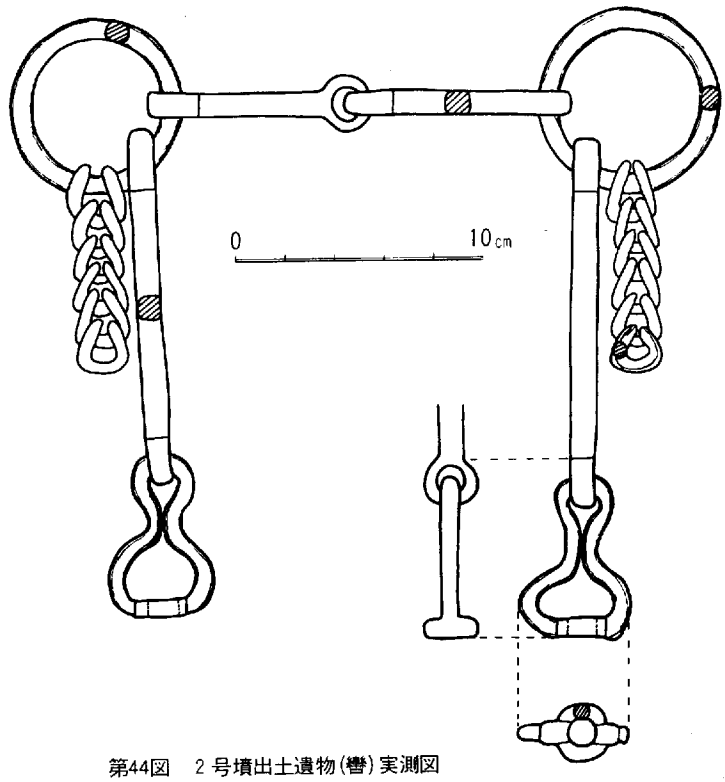
| | 直径 | 高さ | 穴径 | 備　考 | | 直径 | 高さ | 穴径 | 備　考 | | 直径 | 高さ | 穴径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 0.76 | 0.73 | 0.17 | 黒灰色 | 50 | 0.70 | 0.69 | 0.18 | 灰黒色 | 99 | 0.79 | 0.62 | 0.20 | 黒灰色 |
| 2 | 0.87 | 0.63 | 0.15 | 〃 | 51 | 0.89 | 0.61 | 0.17 | 黒灰色 | 100 | 0.79 | 0.67 | 0.20 | 〃 |
| 3 | 0.88 | 0.64 | 0.15 | 〃 | 52 | 0.79 | 0.74 | 0.17 | 〃 | 101 | 0.74 | 0.70 | 0.15 | 〃 |
| 4 | 0.78 | 0.65 | 0.18 | 〃 | 53 | 0.82 | 0.79 | 0.18 | 〃 | 102 | 0.83 | 0.71 | 0.20 | 〃 |
| 5 | 0.88 | 0.65 | 0.15 | 灰黒色 | 54 | 0.81 | 0.70 | 0.20 | 灰黒色 | 103 | 0.81 | 0.71 | 0.20 | 灰黒色 |
| 6 | | | 0.20 | 灰黒色・内面(白灰色) | 55 | 0.83 | 0.70 | 0.16 | 黒灰色 | 104 | 0.81 | 0.66 | 0.18 | 〃 |
| 7 | 0.78 | 0.70 | 0.17 | 黒灰色 | 56 | 0.69 | 0.67 | 0.17 | 灰黒色 | 105 | 0.80 | 0.63 | 0.21 | 〃 |
| 8 | 0.88 | 0.85 | 0.16 | 灰黒色 | 57 | 0.74 | 0.63 | 0.16 | 〃 | 106 | 0.80 | 0.61 | 0.19 | 〃 |
| 9 | 0.76 | 0.70 | 0.17 | 〃 | 58 | 0.77 | 0.65 | 0.16 | 〃 | 107 | 0.82 | 0.76 | 0.18 | 〃 |
| 10 | 0.83 | 0.66 | 0.18 | 〃 | 59 | 0.86 | 0.68 | 0.20 | 〃 | 108 | 0.77 | 0.74 | 0.19 | 〃 |
| 11 | 0.76 | 0.61 | 0.17 | 〃 | 60 | 0.83 | 0.74 | 0.13 | 〃 | 109 | 0.81 | 0.72 | 0.16 | 黒灰色 |
| 12 | 0.79 | 0.61 | 0.14 | 〃 | 61 | 0.80 | 0.63 | 0.19 | 〃 | 110 | 0.80 | 0.61 | 0.18 | 灰黒色 |
| 13 | 0.76 | 0.62 | 0.14 | 黒灰色 | 62 | 0.77 | 0.64 | 0.16 | 黒灰色 | 111 | 0.80 | 0.71 | 0.18 | 〃 |
| 14 | 0.85 | 0.68 | 0.17 | 〃 | 63 | 0.82 | 0.68 | 0.14 | 〃 | 112 | 0.80 | 0.60 | 0.14 | 黒灰色 |
| 15 | 0.83 | 0.55 | 0.17 | 〃 | 64 | 0.83 | 0.72 | 0.14 | 〃 | 113 | 0.78 | 0.69 | 0.14 | 〃 |
| 16 | 0.78 | 0.68 | 0.16 | 灰黒色 | 65 | 0.73 | 0.60 | 0.20 | 灰黒色 | 114 | | | 0.15 | 灰黒色・内面(白灰色) |
| 17 | 0.76 | 0.68 | 0.20 | 〃 | 66 | 0.80 | 0.73 | 0.20 | 〃 | 115 | 0.81 | 0.70 | 0.18 | 灰黒色 |
| 18 | 0.83 | 0.63 | 0.16 | 黒灰色 | 67 | 0.75 | 0.68 | 0.14 | 〃 | 116 | 0.81 | 0.67 | 0.14 | 〃 |
| 19 | 0.78 | 0.73 | 0.16 | 〃 | 68 | 0.75 | 0.62 | 0.22 | 〃 | 117 | 0.83 | 0.75 | 0.17 | 〃 |
| 20 | 0.87 | 0.69 | 0.15 | 〃 | 69 | 0.78 | 0.61 | 0.13 | 〃 | 118 | 0.88 | 0.70 | 0.15 | 〃 |
| 21 | 0.77 | 0.58 | 0.15 | 〃 | 70 | 0.84 | 0.71 | 0.16 | 黒灰色 | 119 | 0.88 | 0.64 | 0.14 | 〃 |
| 22 | 0.82 | 0.66 | 0.15 | 〃 | 71 | 0.84 | 0.73 | 0.19 | 灰黒色 | 120 | 0.81 | 0.67 | 0.16 | 黒灰色 |
| 23 | 0.75 | 0.69 | 0.15 | 〃 | 72 | 0.80 | 0.66 | 0.12 | 〃 | 121 | 0.81 | 0.52 | 0.23 | 灰黒色 |
| 24 | 0.82 | 0.60 | 0.14 | 〃 | 73 | 0.76 | 0.62 | 0.14 | 黒灰色 | 122 | 0.84 | 0.69 | 0.18 | 〃 |
| 25 | 0.77 | 0.64 | 0.17 | 灰黒色 | 74 | 0.81 | 0.66 | 0.18 | 〃 | 123 | 0.79 | 0.70 | 0.18 | 〃 |
| 26 | 0.82 | 0.67 | 0.17 | 黒灰色 | 75 | 0.67 | 0.60 | 0.14 | 〃 | 124 | | | 0.24 | 灰黒色・内面(白灰色) |
| 27 | 0.78 | 0.61 | 0.18 | 〃 | 76 | 0.77 | 0.57 | 0.16 | 〃 | 125 | 0.80 | 0.58 | 0.23 | 黒灰色 |
| 28 | 0.80 | 0.63 | 0.18 | 〃 | 77 | 0.78 | 0.71 | 0.16 | 灰黒色 | 126 | 0.85 | 0.71 | 0.18 | 〃 |
| 29 | 0.86 | 0.71 | 0.16 | 〃 | 78 | 0.77 | 0.62 | 0.17 | 黒灰色 | 127 | 0.79 | 0.72 | 0.16 | 〃 |
| 30 | 0.82 | 0.65 | 0.15 | 〃 | 79 | 0.84 | 0.66 | 0.13 | 〃 | 128 | 0.80 | 0.70 | 0.18 | 〃 |
| 31 | 0.82 | 0.76 | 0.18 | 〃 | 80 | 0.77 | 0.70 | 0.20 | 灰黒色 | 129 | 0.83 | 0.62 | 0.15 | 〃 |
| 32 | 0.85 | 0.57 | 0.15 | 〃 | 81 | 0.73 | 0.65 | 0.15 | 〃 | 130 | 0.80 | 0.70 | 0.13 | 〃 |
| 33 | 0.82 | 0.66 | 0.15 | 〃 | 82 | 0.73 | 0.63 | 0.20 | 黒灰色 | 131 | 0.77 | 0.61 | 0.14 | 〃 |
| 34 | 0.79 | 0.76 | 0.19 | 〃 | 83 | 0.84 | 0.73 | 0.16 | 灰黒色 | 132 | 0.75 | 0.65 | 0.18 | 灰黒色 |
| 35 | 0.71 | 0.61 | 0.23 | 〃 | 84 | 0.91 | 0.69 | 0.19 | 黒灰色 | 133 | 0.82 | 0.60 | 0.15 | 黒灰色 |
| 36 | 0.81 | 0.62 | 0.22 | 〃 | 85 | 0.89 | 0.71 | 0.18 | 灰黒色 | 134 | 0.82 | 0.64 | 0.18 | 〃 |
| 37 | 0.75 | 0.63 | 0.21 | 灰黒色 | 86 | 0.83 | 0.67 | 0.18 | 黒灰色 | 135 | 0.80 | 0.59 | 0.17 | 〃 |
| 38 | 0.80 | 0.70 | 0.18 | 黒灰色 | 87 | 0.82 | 0.88 | 0.16 | 〃 | 136 | 0.75 | 0.57 | 0.17 | 〃 |
| 39 | 0.83 | 0.73 | 0.18 | 〃 | 88 | 0.86 | 0.78 | 0.21 | 〃 | 137 | 0.89 | 0.51 | 0.20 | 灰黒色 |
| 40 | 0.82 | 0.54 | 0.15 | 〃 | 89 | 0.80 | 0.76 | 0.16 | 灰黒色 | 138 | 0.83 | 0.70 | 0.19 | 〃 |
| 41 | 0.75 | 0.68 | 0.20 | 〃 | 90 | 0.81 | 0.74 | 0.21 | 〃 | 139 | 0.80 | 0.63 | 0.19 | 〃 |
| 42 | 0.82 | 0.61 | 0.12 | 〃 | 91 | 0.76 | 0.71 | 0.18 | 〃 | 140 | 0.86 | 0.72 | 0.20 | 黒灰色 |
| 43 | 0.83 | 0.71 | 0.17 | 〃 | 92 | 0.81 | 0.60 | 0.16 | 黒灰色 | 141 | 0.74 | 0.71 | 0.20 | 灰黒色 |
| 44 | 0.82 | 0.69 | 0.17 | 〃 | 93 | 0.78 | 0.56 | 0.17 | 〃 | 142 | 0.83 | 0.75 | 0.25 | 黒灰色 |
| 45 | 0.81 | 0.66 | 0.17 | 〃 | 94 | 0.89 | 0.76 | 0.16 | 〃 | 143 | 0.78 | 0.66 | 0.17 | 〃 |
| 46 | 0.80 | 0.71 | 0.18 | 灰黒色 | 95 | 0.82 | 0.76 | 0.16 | 〃 | 144 | 0.81 | 0.71 | 0.15 | 灰黒色 |
| 47 | 0.80 | 0.65 | 0.17 | 黒灰色 | 96 | 0.76 | 0.69 | 0.20 | 灰黒色 | | | | | |
| 48 | 0.79 | 0.68 | 0.17 | 〃 | 97 | 0.79 | 0.60 | 0.17 | 〃 | | その他に７片の破片も出ている。 | | | |
| 49 | 0.79 | 0.67 | 0.18 | 灰黒色 | 98 | 0.81 | 0.71 | 0.14 | 黒灰色 | | | | | |

第８表　２号墳出土遺物計測値表

（単位　cm）

| 図版番号 | 種類 | 形態 | 器高 | 口縁外径 | 胴幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40－1 | 須恵器 | 杯蓋 | 4. | 14.25 | | 良 | 良 | 黒灰色<br>灰色（内） | 一部自然釉あり<br>）セット |
| 2 | 〃 | 杯身 | 4.3 | 11.9 | | 〃 | 〃 | 灰色 | 底部には自然釉（全体） |
| 3 | 〃 | 杯蓋 | 4.25 | 13.2 | | 〃 | 〃 | 黒灰色<br>灰黒色（内） | |
| 4 | 〃 | 〃 | 4.4 | 13.6 | | 〃 | 〃 | 灰色 | |
| 5 | 〃 | 〃 | 4.2 | 13.45 | | 〃 | 〃 | 灰色<br>黒灰色 | |
| 6 | 〃 | 杯身 | 4.7 | 12.3 | | 〃 | 〃 | 黒灰色 | |
| 7 | 〃 | 〃 | 4.15 | 13.15 | | 〃 | 〃 | 灰色 | 部分的に自然釉あり　（約半分） |
| 8 | 〃 | 〃 | 4.5 | 10.95 | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃　〃<br>（濃緑色の自然釉） |
| 9 | 〃 | 〃 | 5.7 | 12.35 | | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 10 | 〃 | 高杯 | 14.15 | 10.85 | 脚外径下（8.4） | 〃 | 〃 | 〃<br>黒灰色 | |
| 11 | 〃 | 短頸壺 | 6.8 | 6.5 | 9.2 | 〃 | 〃 | 黒灰色 | |
| 12 | 〃 | 瓶 | 14.3 | 11.4 | 10.6 | 〃 | 〃 | 黒色<br>灰黒色 | |
| 13 | 〃 | 〃 | 14.5 | 13.4 | 10.3 | 〃 | 〃 | 灰黒色 | 口縁内部に胎土内の成分がとけている |
| 14 | 〃 | 広口壺 | 22.4 | 15.9 | 21.45 | 〃 | 〃 | 灰茶褐色 | 外，全体に多キ，後ちクシ下部は格子目 |
| 41－15 | 〃 | 提瓶 | 25.2 | 8.59 | 21.4 | 〃 | 〃 | 黒灰色<br>青灰色 | |
| 16 | 〃 | 〃 | 20.85 | 7.7 | 17.4 | 〃 | 〃 | 灰色<br>黒灰色 | |
| 43－17 | 土師器 | 埴輪 | | | 茎外径 18.15 | 〃 | 〃 | 灰黒褐色 | 朝顔型円筒埴輪片 |
| 18 | 〃 | 〃 | | | 基底部径 15.6 | 〃 | 〃 | 赤黄褐色 | 円筒埴輪片 |
| 19 | 〃 | 〃 | | | 〃 16.8 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 20 | 〃 | 〃 | | | | 〃 | 〃 | 〃 | 埴輪片の文様 |
| 21 | 〃 | 〃 | | | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃　中心は黒灰色 |
| 22 | 〃 | 〃 | | | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 23 | 〃 | 〃 | | | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 24 | 〃 | 〃 | | | | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 46－25 | 弥生 | 壺（頸より上） | | 22.1 | | 粗 | 粗 | 黄褐色 | 弥生式土器　中期前葉<br>破片 |
| 26 | 〃 | 壺（胴部分） | | | | 〃 | 〃（上） | 外 灰褐色<br>内 黒灰色 | 〃<br>〃 |
| 27 | 〃 | 蓋 | 3.9 | 7.6 | | 良 | 良 | 暗赤褐色 | 〃<br>一部が破損している |
| 28 | 〃 | 高杯 | 現存 7 | | | やや粗 | やや粗 | 赤黄褐色 | 〃<br>高杯脚部のみ |

1～16の胎土内には少量の細砂，小石が含まれている。



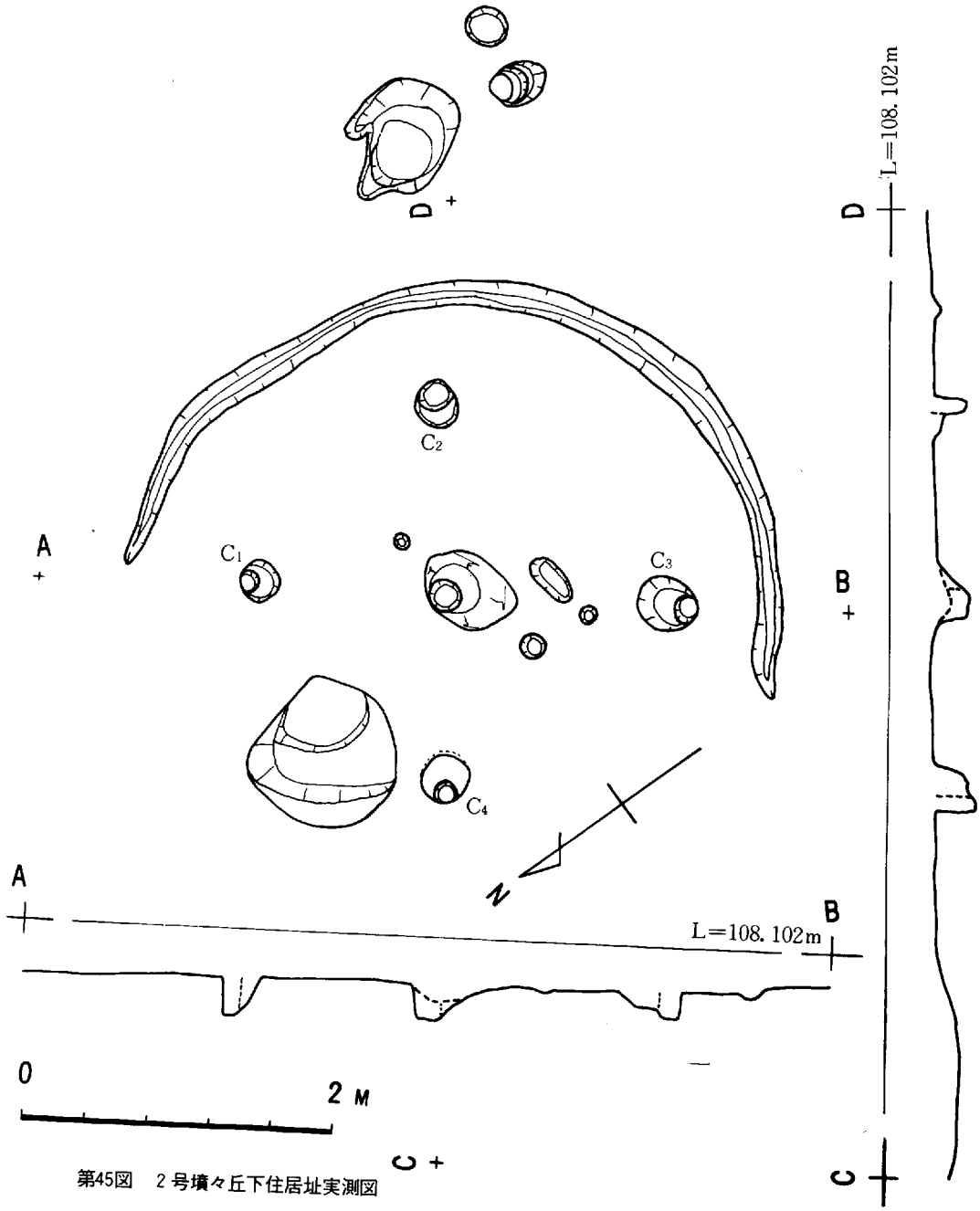

第44図　2号墳出土遺物(轡)実測図

以上分類した鉄鏃はすべて有茎式のものである。1～3類は平根式で，3と6には茎が見られ，8と9は逆刺を有しその他のものには見られなかった。さらに断面形の上からみても，2，3，6は平造，4，5，7，9は両丸造，8は片丸造のものである。4～7類とその他は尖根式で10，11，18，19，22，23，26，31，32，34は茎を有している。10，11，12，13，14，15，16，17，18，19には逆刺がある。断面形は10，16，17，19，20，22，23，29，31が片丸，13，18，24，27，28，32，33が両丸，11，12，14，21，25が三角形を呈し，15は身に箆被を付けているように思われる。その他26は不明。

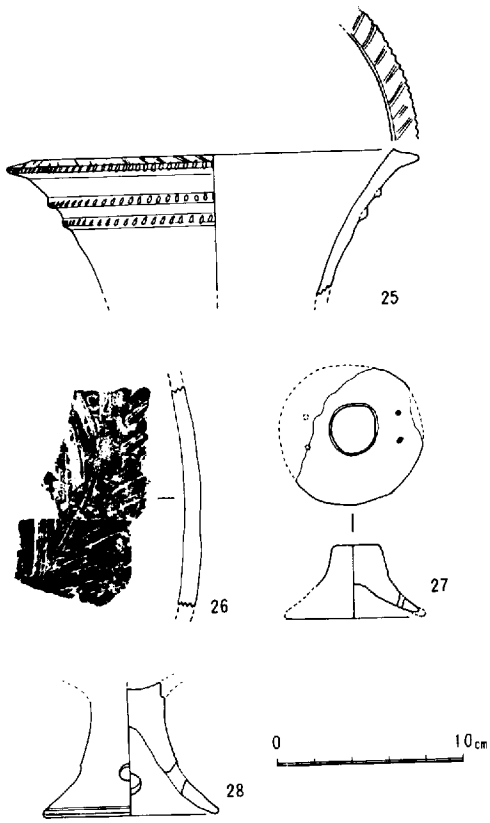
刀子35～37で，35はかなり破損を受けており現存長10.6糎，茎4.9糎，刃巾1.7糎，37の存長12.9糎，茎5.3糎，刃巾1.6糎，36，37は先端がわずかに破損している。次に38～40は辻金具でどれも部分がかけている。41～44も辻金具と同じ馬具の一部分である。　（文　二宮治夫）

轡　（第44図）（第87図(3)）

轡は棺外より出土した。銜は棒状の鉄環を2つつないだもので長さ17㎝ある。鎖は6個で構成される兵庫鎖であり，鏡板付ではない。なお，引手金具は右が14.6㎝，左が14.1㎝と長さが異なっている。なお引手には引手壺がある。　（文　松本和男）




第45図　2号墳々丘下住居址実測図




第46図　2号墳盛土内出土(弥生)

(b)　2号墳々丘下住居址

（第45図，第73図(1)(2)）

この住居址は墳丘下（墳丘の西方下の地山面）より確認され，小形の円形竪穴式住居址である。古墳構築の際北西側半分が削られて消えさっていた。（第45図）現存状況はきわめて悪く，周溝，柱穴，炉址，穴状遺構，その他の柱穴等が遺存したのみであった。（炉址は住居址築造以前に柱穴として使用されていた。）住居址は径4.3 m，柱間$C_1$～$C_2$ 1.7 m，$C_2$～$C_3$ 2.1 m，$C_3$～$C_4$ 2.0m，$C_4$～$C_1$ 1.9 m，なお埋土中からの伴出遺物は1個の破片も検出されなかった。

古墳構築盛土内出土の弥生式土器片（第46図）に伴う時代のものと推定されうる。

（文　二宮治夫）

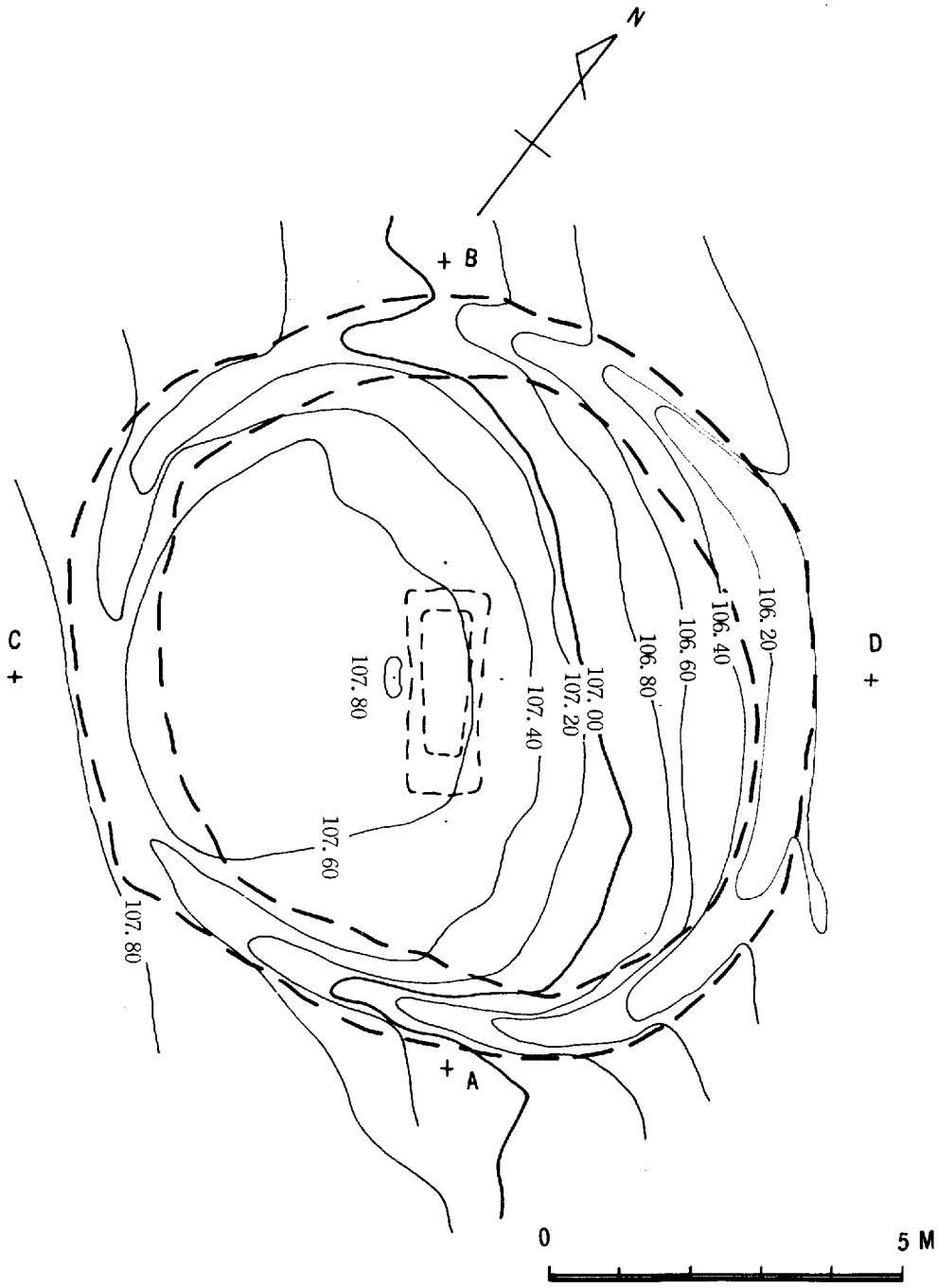
## 6.　3号墳（第47図，第74図～76図）

この古墳の封土の流失が著しく，外形を明確におさえることはできなかった。地形の低い中央部から北東側は土取によって削られ，一段下がっていた。発掘調査前の地形測量においては，約8.3米×8.3米の円形を示しており，高さは約30糎前後の円墳と推定された（第47図　3号墳丘実測図）。

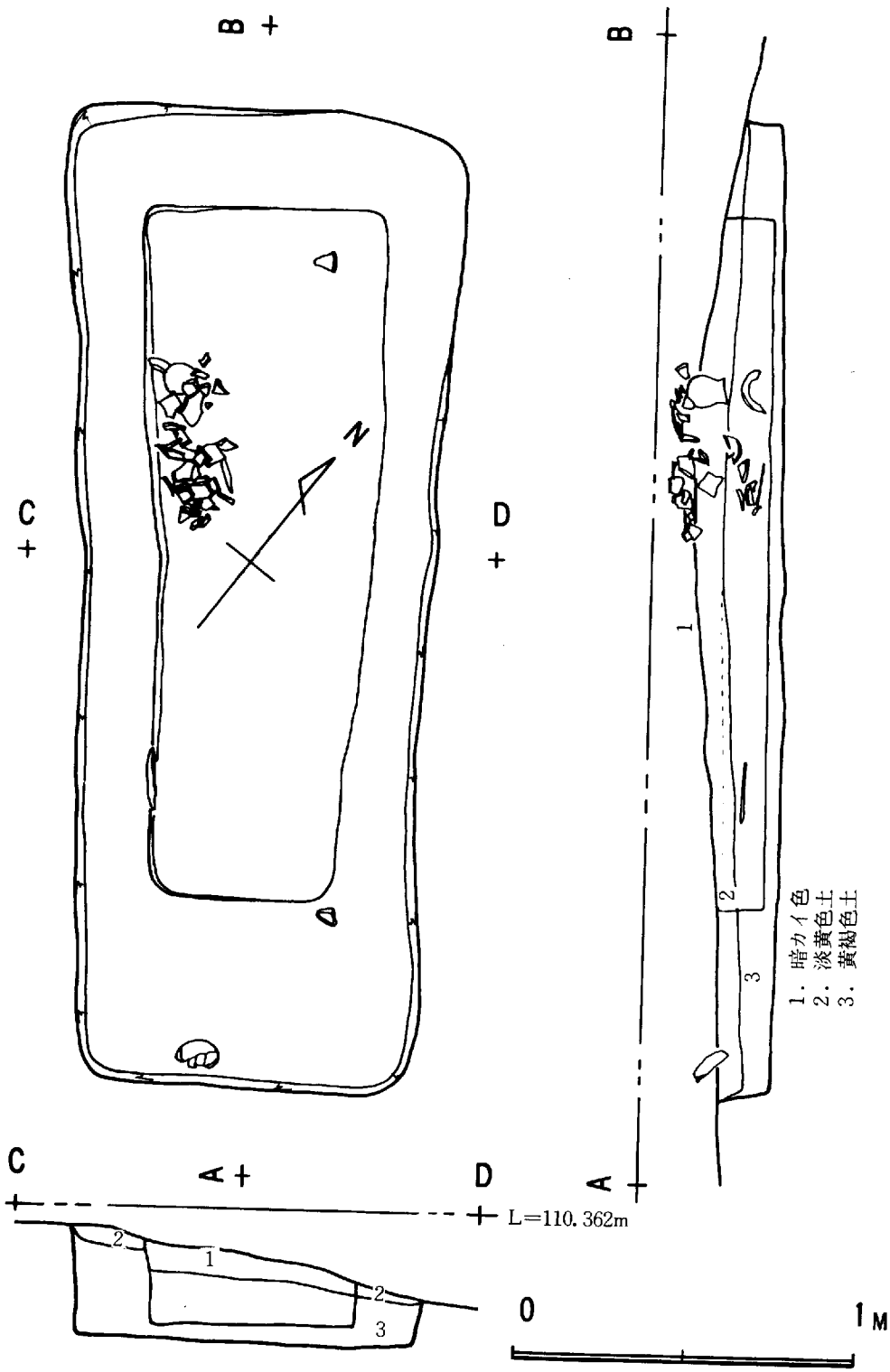
調査の結果，断面図（第49図　3号墳断面図）に示されているように周溝が確認された。数値は以下に示す通りである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| NW－ES | 8.26 m | | | |
| 周溝の巾 | NW | 1.16 m | ES | 1.16 m |
| 周溝の深さ | NW | 0.24 m | ES | 0.60 m |
| NE－SW | 8.34 m | | | |
| 周溝の巾 | NE | 0.86 m | SW | 1.20 m |
| 周溝の深さ | NE | 0.30 m | SW | 0.45 m |

墳丘盛土（旧地表面より）　約0.32 m（中央付近）



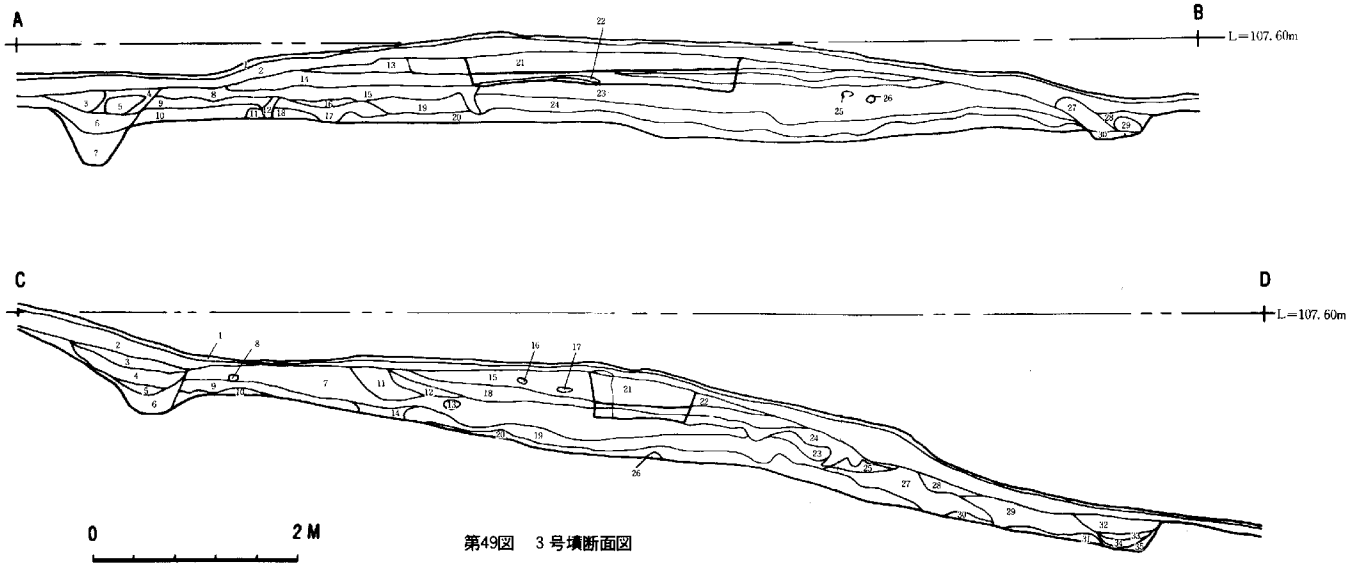

第47図　3号墳墳丘実測図



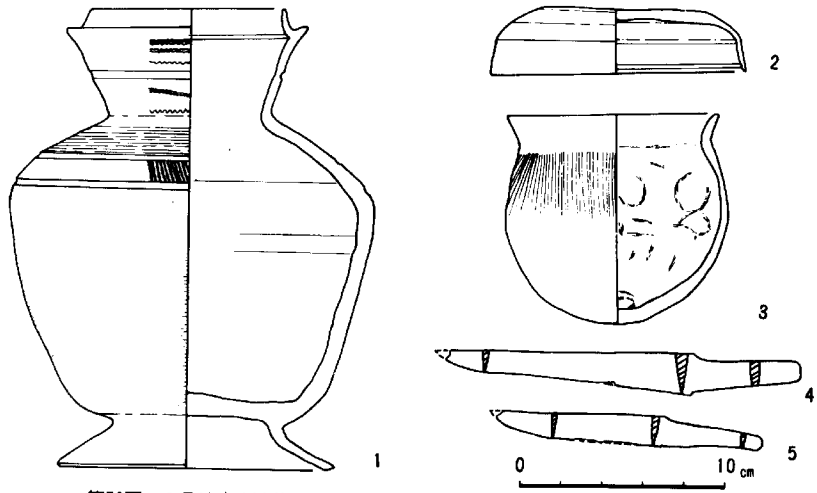

第48図　3号墳内部主体実測図

1．表　土　層
2．黄 褐 色 土
3．黒 色 有 機 土
4．淡黒色有機土
5．黒 色 有 機 土
6．淡黒褐色有機土
7．黄褐色，淡黒色有機土互層
8．黄 黒 色 土
9．黄 褐 色 土
10．黄 灰 色 土
11．赤 色 粘 土
12．暗 黄 色 土
13．黄 褐 色 土
14．黒色有機土(旧地表面)
15．黄 黒 色 土
16．黄 褐 色 土
17．黄 灰 色 土
18．赤 色 粘 土
19．茶 褐 色 土
20．黄 灰 色 土
21．淡 黄 色 土
22．黄 黒 色 土
23．黄 褐 色 土
24．黄赤褐色土
25．黒色土ブロック
26．黒色土ブロック
27．黄褐色土，淡黒色有機土互層
28．淡黒色有機土
29．黒 色 有 機 土
30．赤 褐 色 土

1．表　土　層
2．黄 褐 色 土
3．黄褐色土，淡黒色有機土互層
4．黒 色 有 機 土
5．淡黒色有機土
6．黄褐色土，淡黒色有機土互層
7．黄 褐 色 土
8．黒色土ブロック
9．黄　色　土
10．明 黄 色 土
11．黒 褐 色 土
12．黄 黒 色 土
13．黒色土ブロック
14．赤 褐 色 土
15．黄 褐 色 土
16．黒色土ブロック
17．黒色土ブロック
18．黒 色 有 機 土
19．黄色土（粘土）
20．赤 褐 色 土
21．赤 黄 褐 色 土
22．黄 褐 色 土
23．赤 褐 色 土
24．淡 黒 色 土
25．黄 褐 色 土
26．黄　色　土
27．黄 黒 色 土
28．黒　色　土
29．黄 褐 色 土
30．赤 褐 色 土
31．赤 褐 色 土
32．＝3
33．＝4
34．＝5
35．＝6




第49図　3号墳断面図




第50図　3号墳出土遺物

本古墳の内部主体は木棺直葬である。墳丘のほぼ中央部に，尾根に沿ってN 37°50′ Wに長軸をおいて構築されており，一度掘り下げた後ちに埋めもどし，そしてその上に木棺を置いて埋葬されたものであった。木棺の深さは，場所によって多少は異なるが，平均して現存墳頂より床面まで約３６糎で，埋めもどす前の深さは約４８糎を測る。（第４９図）

主体部は掘り方の長さ2.89米，巾1.04米，木棺長は2.04米，巾0.63米でいずれもほぼ中央部において計測をしたものであり，いずれも北西の方向が広くなっていた。

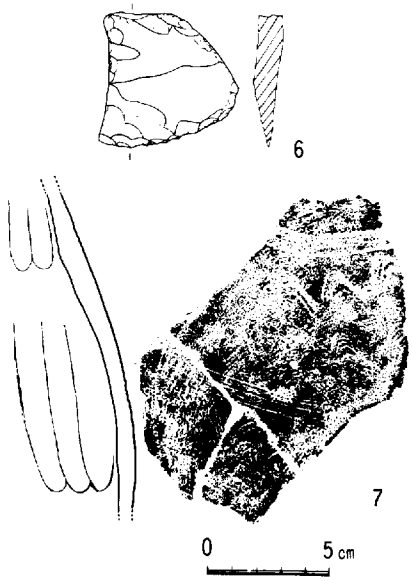
なお，出土遺物は第４８図のように散在した形で遺存していることからみても北西方向に頭部があったものと推定される。これらの遺物は，木棺埋葬後投入されたもののように見うけられる。さらに，盛土，周構流入土内においても第５１図の弥生式土器片，石器片の出土もある。

本古墳の築造は盛土によって高くしたものではなくて尾根のゆるやかな斜面を利用して周溝の掘り上げた土，それより内側の削り取った土の盛り上げによって墳丘を造り，次に土壙を掘り込み，土壙内に木棺を安置して，さらにその上を掘り上げた土で覆い込むと共に墳丘全体を整形して本古墳が完成したものであろう。なお，この古墳に伴う他の遺構の確認はできなかった。

(a) 遺　物　（第５０図，５１図，８９図(1)～(5)）

本古墳の副葬遺物は，第５０図に示されているものである。この遺物は木棺が安置されたのち，棺上に置かれたものであろうが，散在した状態での出土（第７５図(1)）という形は何か不自然と思われるが，このような出土状態は今後さらに検討する必要があろう。その中でも土師器壺，刀子（２本），坏蓋は完形のままで出土している。その内，棺の中央より東側で刀子（１本），坏蓋が出土しているが，これらは前記のものとは別に棺上でこわされずに置かれていたものではないかと考えられる。しかし，坏蓋のみの副葬というのではなくて，身と一緒に埋められたものであろうが，封土流失の際に紛失したものと考えられるが近辺にはそれらしき遺物は見当らなかった。さらに盛土内よりの出土遺物（第５１図）は本古墳々丘構築の際に混入したものであろうが，それらしき遺構等は検出，確認されなかった。なお本古墳の出土遺物は一括して表９のように表わしてある。

（文　二宮治夫）

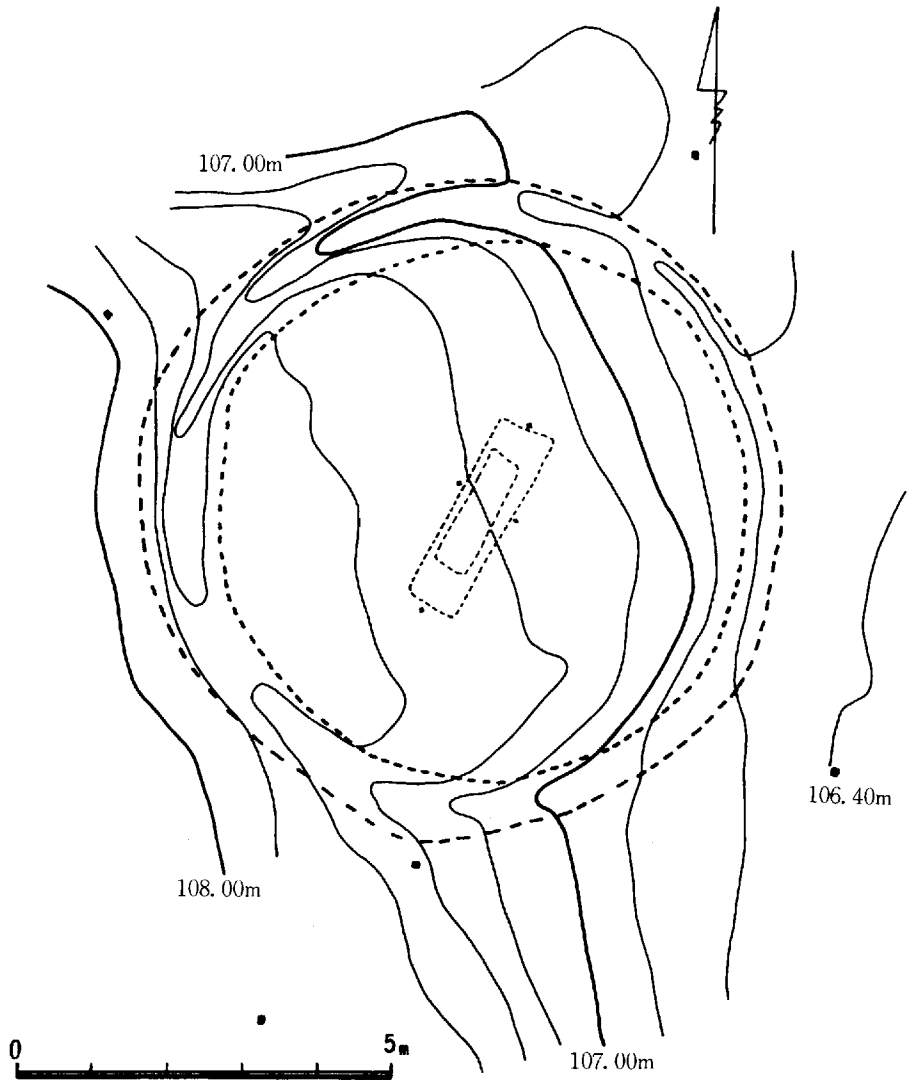



第51図　3号墳盛土内出土遺物実測図

第9表　3号墳出土遺物（石製品，鉄製品を含む）

（単位　cm）

| 図版番号 | 種類 | 形態 | 器高 | 口縁外径 | 胴幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50－1 | 須恵器 | 台付有蓋壺 | 2 2.4 | 9.4 | 1 7.7 | 良 | 良 | 灰色 | 蓋無し<br>外面に自然釉の部分がある（一部） |
| 2 | 〃 | 坏　蓋 | 3.3 5 | 1 2.4 | | やや粗 | やや粗 | 灰色 | 内面にベンガラの付着が見られる<br>細砂多し |
| 3 | 土師器 | 小型丸底壺 | 1 0.3 | 1 0.3 | 1 0.8 | 良 | 良 | 黄褐色 | 完形品 |
| 4 | 鉄製品 | 刀　子 | 現存長<br>1 7.2 | 刃長<br>1 1.9 | 茎<br>5.3 | 刃巾<br>2.2 | | | 先がわずかにかけている |
| 5 | 〃 | 〃 | 1 2.9 | 8.1 | 4.8 | 1.5 | | | 〃 |
| 51－6 | 石製品 | 打製<br>石包丁 | | | | | | | 石材，サヌカイト<br>破片，周溝流入土内より出土 |
| 7 | 弥生式土器 | 壺 | | | | | | | 胴部の一部分のみ |



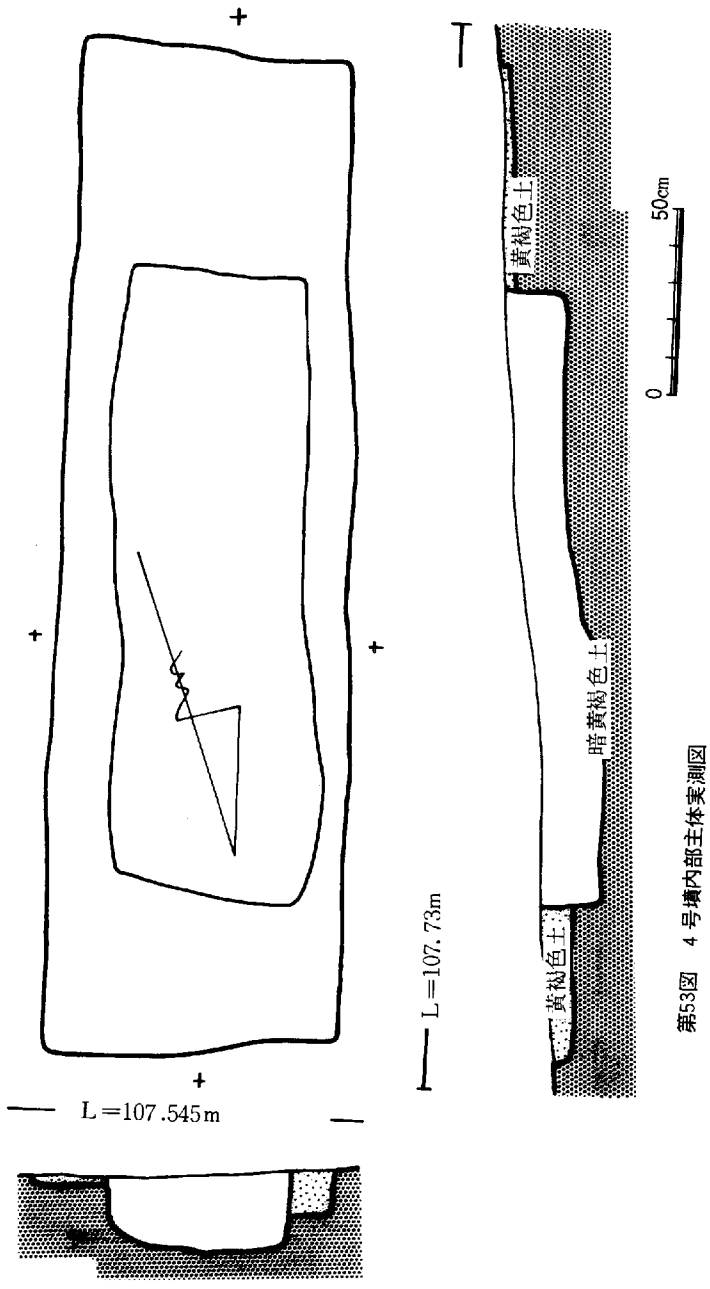

第52図　4号墳墳丘実測図

## 7.　4号墳（第52図，第77図）

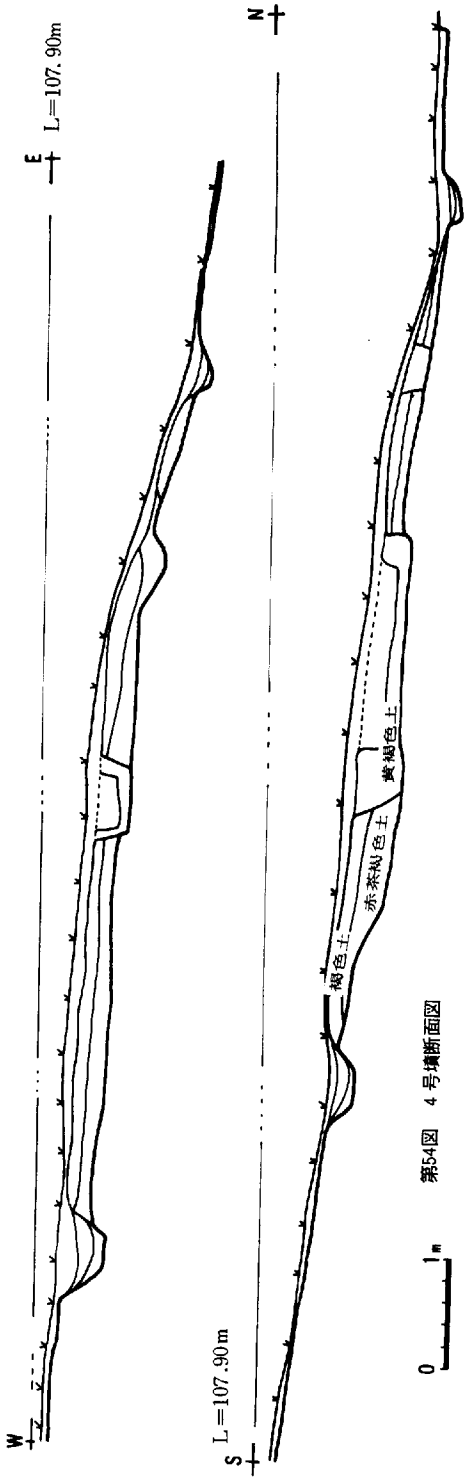
この古墳は3号墳の東隣りにある。最初から発見されていない古墳で，3号墳の発掘で周堤を確認中に発見された古墳である。封土はほとんど流失しており，表土層を除去するとすぐに主体部を確認した。主体の上部はほとんどなくなっており，保存のわるい円墳であった。

(a)　内部主体について（第53図）（77図(2)）

表土下約10cmで木棺直葬の主体部を検出した。主体部はN－31.5°－Eの方位にあり，ほぼ古墳




第53図　4号墳内部主体実測図



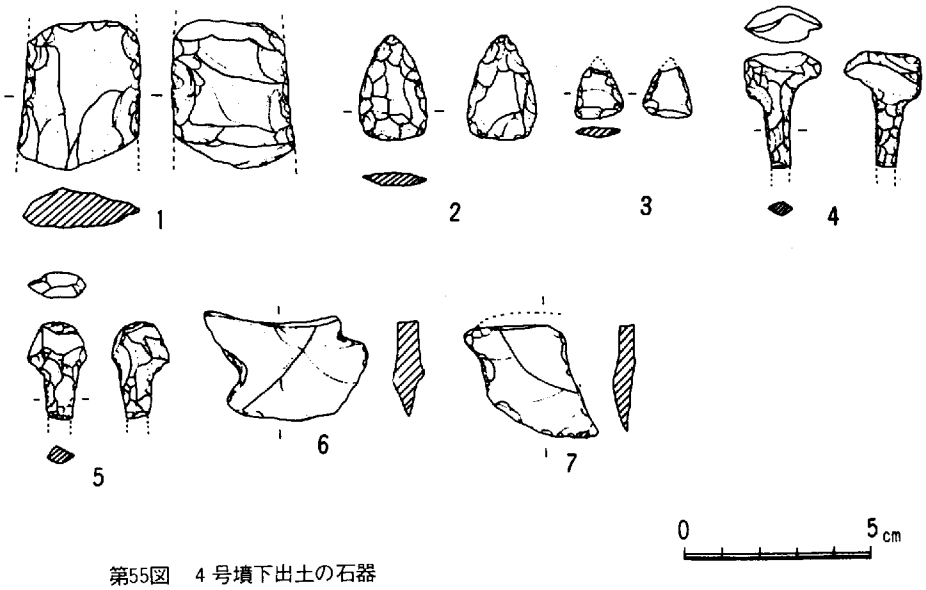

第54図　4号墳断面図

中央部にあった。主体部掘り方は幅８０㎝，長さ２６０㎝であった。木棺痕跡は短軸で４７～５５㎝，長軸で１６５㎝あり，棺底は北に向ってかすかに傾斜していた。断面図にみるごとく，主体部掘り方は１度地山土まで掘られ，その上に１０㎝ほど土を置き木棺を納めたものと思われる。４号墳にはハニワを伴わず棺内，外にも遺物が全く存在しなかったため，正確な時期を推定することができない。

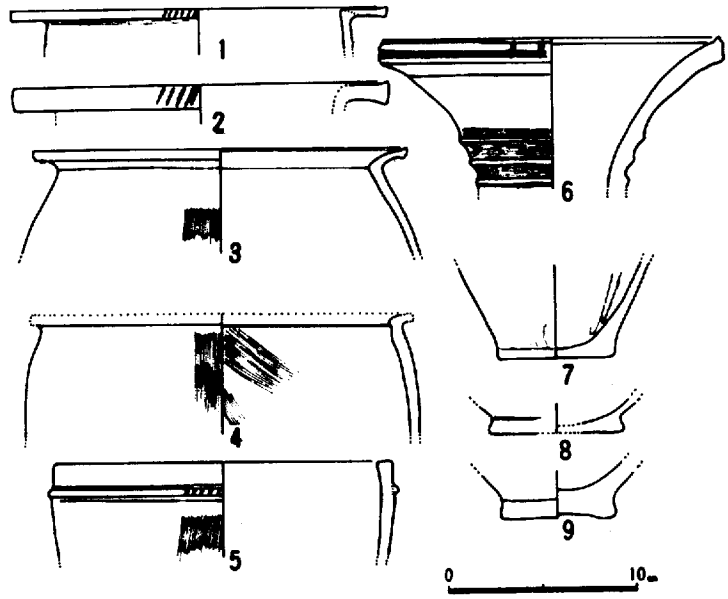
| 古墳直径 | 墳丘高 | 周溝幅 | 周溝深 |
|---|---|---|---|
| S–N–8.6m<br>W–E–8.5m | ８０㎝ | ５０～１００㎝<br>（東側が狭い） | １５～３０㎝ |

(b)　４号墳下出土の石器（第５５図，８９図(6)）

出土した石器は石槍，ドリル，石鏃，不定形石器，石包丁破片である。これらはいずれも炉と思われる炭のつまったピット内より出土した。(1)は両端が欠損しており全長は不明である。周辺には，ていねいな仕上げが行なわれ，中央部には擦痕がみとめられる。石質はサヌカイト，重量は14.5ｇであった。(2)，(3)はサヌカイトの無茎石鏃である。重量は(2)が2.2ｇ，(3)は1.2ｇの剝片鏃であった。(4)，(5)は断面が菱形に近いドリルである。重量は(4)が2.2ｇ，(5)は２ｇであった。(6)は不定形石器で重量は6.8ｇであった。(7)は石包丁の破片で重量は4.9ｇあった。




第55図　4号墳下出土の石器




第56図　4号墳下出土の弥生式土器

(c)　4号墳下出土の弥生式土器（第５６図）

古墳下より甕，壺の口縁部と底部が出土した。甕の口縁部はＬ字形を呈し，器面にはハケ撫が行われている。内面にはハケもしくはヘラにて仕上げられ，時期は弥生時代中期の所産のものである。

（文…松本和男）

# 8. まとめにかえて

北山古墳群は小形の円墳4基で構成されている。本古墳群は以前より楢原寺山古墳，土経塚古墳，金焼山古墳，緑青塚古墳に続く後期群集墳の中でも比較的古式に編年される古墳群と認識されていた。

このたび，[註(1)] 中国縦貫道建設によって北山古墳群が完全に破壊されることとなり，岡山県教育委員会は緊急発掘調査を実施した。その結果，本古墳群において数々の事実を知り得た。

発掘調査の結果，1号墳，2号墳から埴輪を出土した。埴輪は原位置を保つものが少なく，かろうじて1号墳の北西部中段で整然と配置されていた8個を確認したにすぎない。

1号墳においては円筒埴輪だけでなく人物埴輪も見出されているが，2号墳においては人物埴輪や形象埴輪は全く認められなかった。一方，3号墳，4号墳においては表土層，墳丘，周濠内より1片の埴輪すら出土しなかったことから，初めから埴輪が置かれていなかったものと考えられる。このことから，北山古墳群は埴輪をもつ2基の古墳と全く埴輪をもたない2基の古墳とされていたと云えよう。

被葬者を埋葬する内部主体はいずれも組み合せの木棺直葬の形態をとっている。1号墳の第1主体，第2主体は盛土の攪乱が著るしく，掘り方上面を確認することが出来なかったが，2号墳においては特異な舟形土壙を呈し，小口部と木棺の周囲に粘土を巻いていることが確認され，他の古墳に比べて最もていねいな埋葬形態をとっている。

北山古墳群の内部主体は同じ形態をとりながら，各古墳によって副葬品の内容も大きく異なっていることである。（副葬品の詳細については第4，5，6，7章に記述している。）

1号墳，2号墳は墳丘の大きさに差が認められないが，内部主体の数，埴輪の出土量，種類，副葬品に差異がみられた。1号墳第2主体では勾玉，管玉，ガラス玉など装飾品が多量に副葬されており，また鉄鎌，鉄鋸，鑿など農工具が副葬されていたことである。2号墳では勾玉，管玉の出土はみられないが，ガラス玉にかわる練り玉（土玉），仿製鏡を出土した。また1号墳には全くみられなかった馬具（轡，辻金具）など戦闘用具が出土したことである。すなわち，本古墳群においては1号墳，3号墳，4号墳などのように馬具をもたないものと，2号墳のように馬具を持つものに分けることができる。馬具を持つ2号墳は棺内に3束の鉄鏃と本古墳群中で最大の直刀を副葬しており，被葬者の性格の一端をうかがわせていると云えよう。

最後に本古墳群の築造年代であるが，副葬品に近似がみられることから全体的に後期古墳群に編年される。

1号墳第2主体出土の杯身は口縁径が平均11.0cm，杯蓋が12.95cmである。2号墳の杯身は口縁径が平均12.13cm，杯蓋が13.62cmある。このように1号墳第2主体の須恵器は2号墳に比べて小形であり，内面に同心円文を残していることが特徴的であり，形態的にも本古墳群の中では時代の上るものであり，第2主体は6世紀初頭～前葉にかけての時期に埋葬された可能性がある。

2号墳，3号墳は1号墳より若干降る可能性をもち6世紀前葉～中葉にかけて築造されたものであろう。いずれにしても1号墳は他の古墳に比べて若干古い様相をもっているようである。

4号墳は出土遺物が無いため，築造年代を知ることができないが，他の古墳と同様に後期古墳に編

年されるものと思われる。　　（文…松本和男）

註

(1)　「美作町史編纂中間報告」　　今井堯著

美作町史編纂委員会　　昭和３９年

(1) 北山古墳群全景写真　(東より望む)

(2) 北山古墳群全景写真　(北より望む)

図版２

(1)　北山古墳群全景　（西より望む）

(2)　１号墳全景　（南西より）

(1)　１号墳表土除去後の全景写真　（南西より）

(2)　１号墳第１主体　（南より）

図版４

(1) 第１主体　（東から）

(2) 第１主体出土の直刀　（北から）

(1)　円筒埴輪列出土状態　（西から）

(2)　１号墳第２主体　（北から）

図版６

(1)　第２主体全景　（南から）

(2)　第２主体の遺物出土状態　（杯，刀子，鑿，鉄鏃，短頸壷）

(1) 第 2 主体の遺物出土状態

(2) 第 2 主体の遺物出土状態

図版８

(1)　第２主体遺物出土状態

(2)　直刀の出土状態　（第２主体内）

(1)　１号墳断面図　（北西より）

(2)　２号墳全景　（南より）

図版10

(1)　2号墳表土除去後の全景　（南より）

(2)　内部主体断面図　（北より）

(1)　2号墳内部主体　（西から）

(2)　2号墳内部主体　（南から）

図版12

(1)　内部主体の遺物出土状況

(2)　内部主体の遺物出土状況

(1) 仿製鏡の出土状態

(2) 馬具の出土状態

図版14

(1) 遺物の出土状態

(2) 直刀の出土状態

(1) 遺物の出土状態（小口部）　（北から）

(2) 遺物の出土状態（小口部）　（東から）

図版16

（1） 遺物の出土状態（小口部）　（西から）

（2） 2号墳断面図（北東から）

(1)　2号墳断面及び住居址　（南から）

(2)　2号墳下の弥生時代住居址　（南東から）

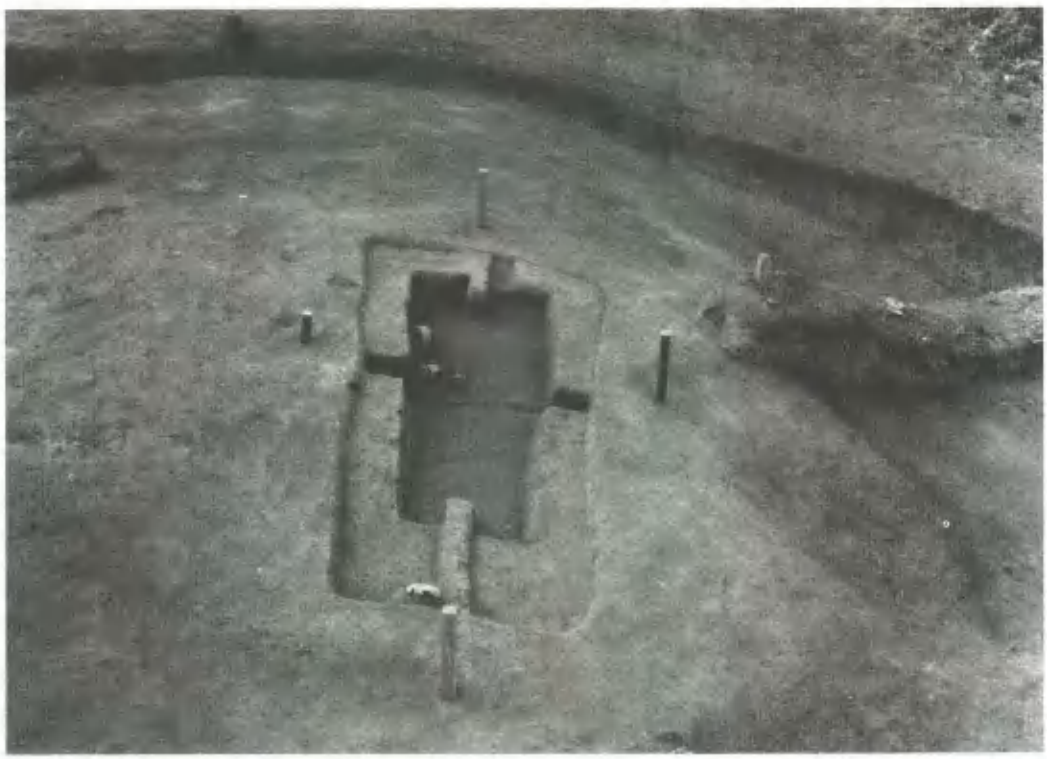
図版18

(1) 3号墳全景 (南から)

(2) 内部主体検出状態 (東から)

(3) 刀子の出土状態

(1) 遺物出土状態　（北東から）



(2) 内部主体全景　（東から）

図版20

(1)　3号墳の全景写真　（南西から）

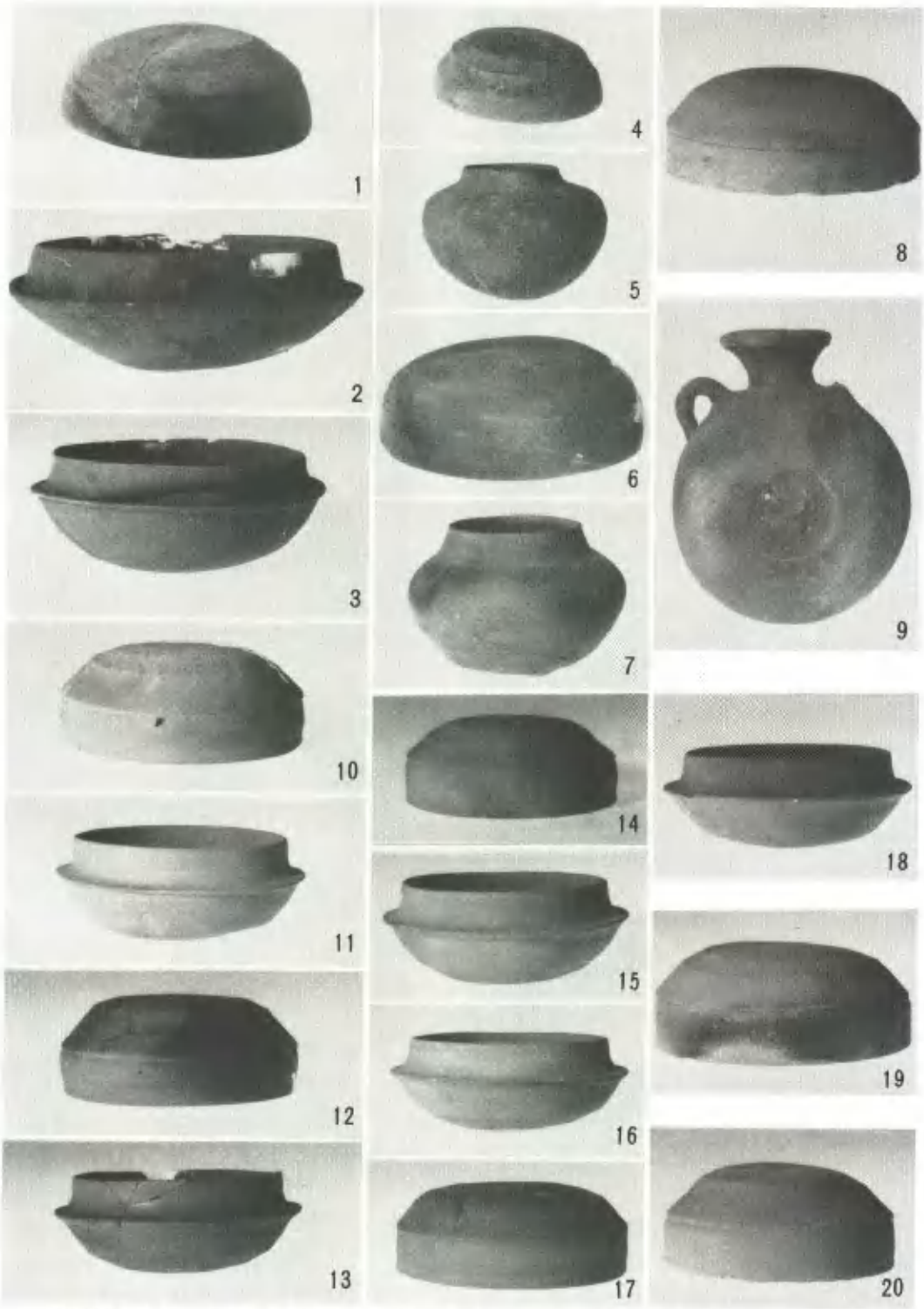
(2)　3号墳断面図　（北東から）

(1) 4号墳全景 (南西から)

(2) 4号墳内部主体検出状態 (南から)

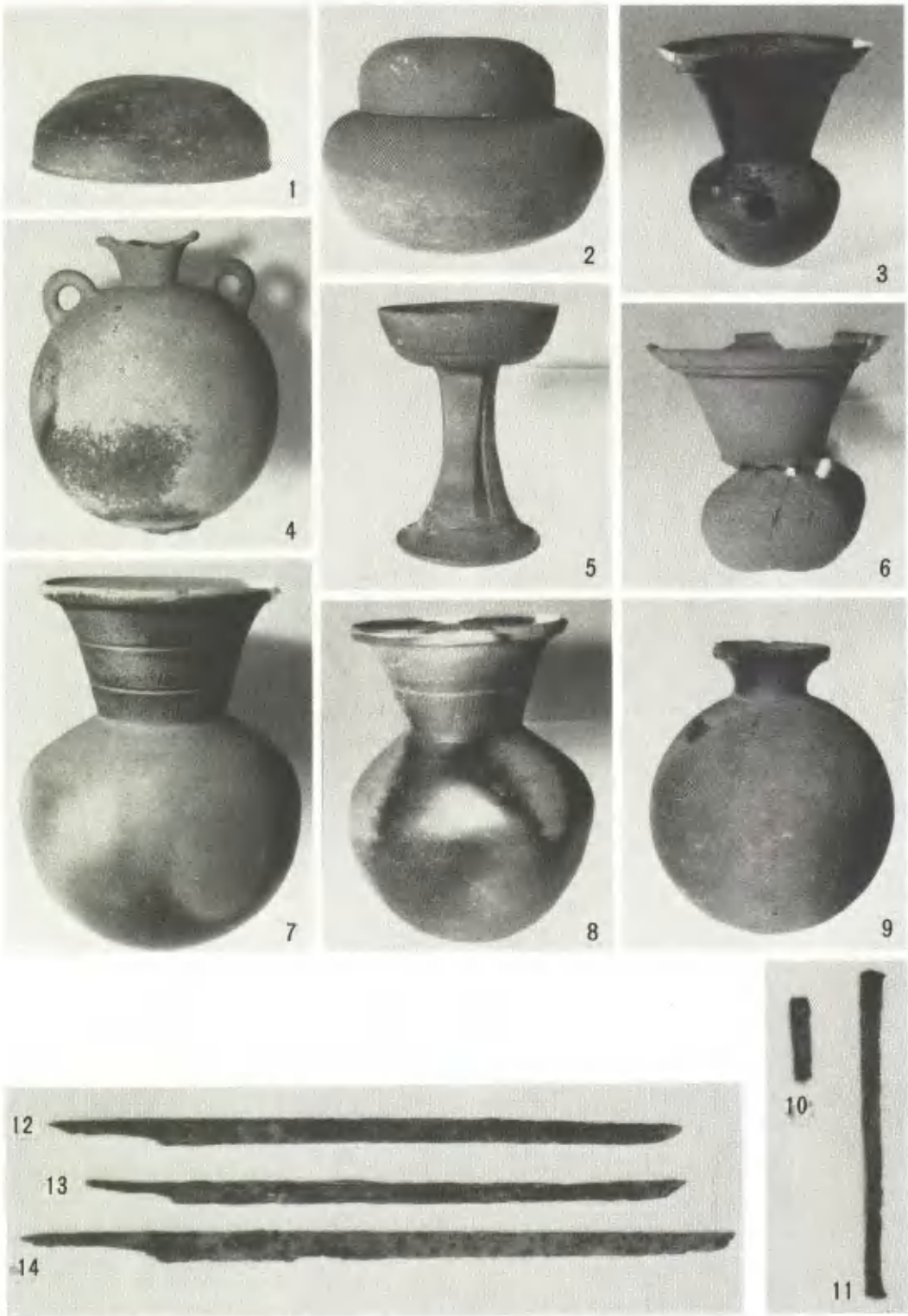
図版22

1 号墳周溝内，撹乱層，表採遺物

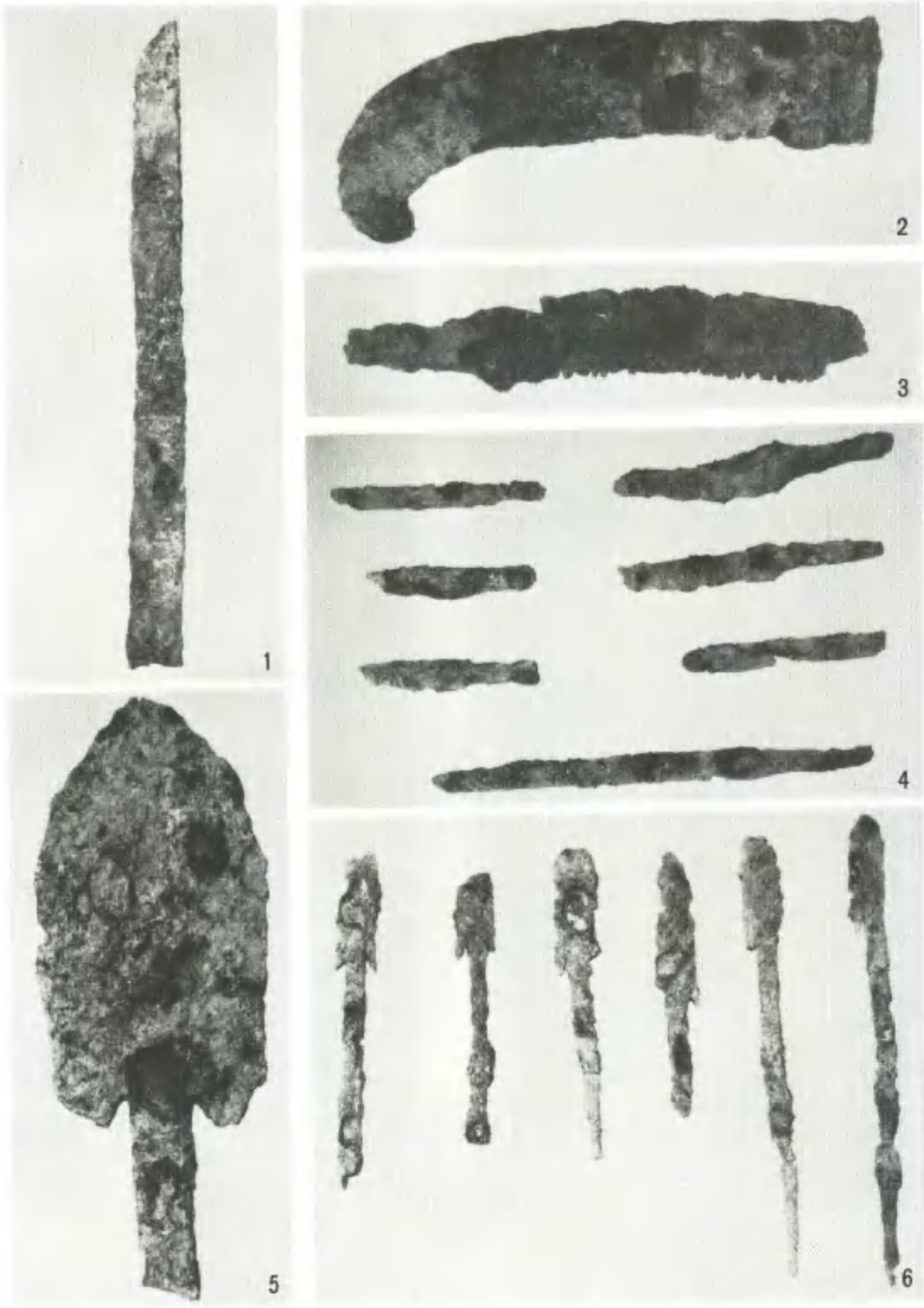



1号墳第1主体　出土遺物（1～9），第2主体　出土遺物（10～20）

図版24

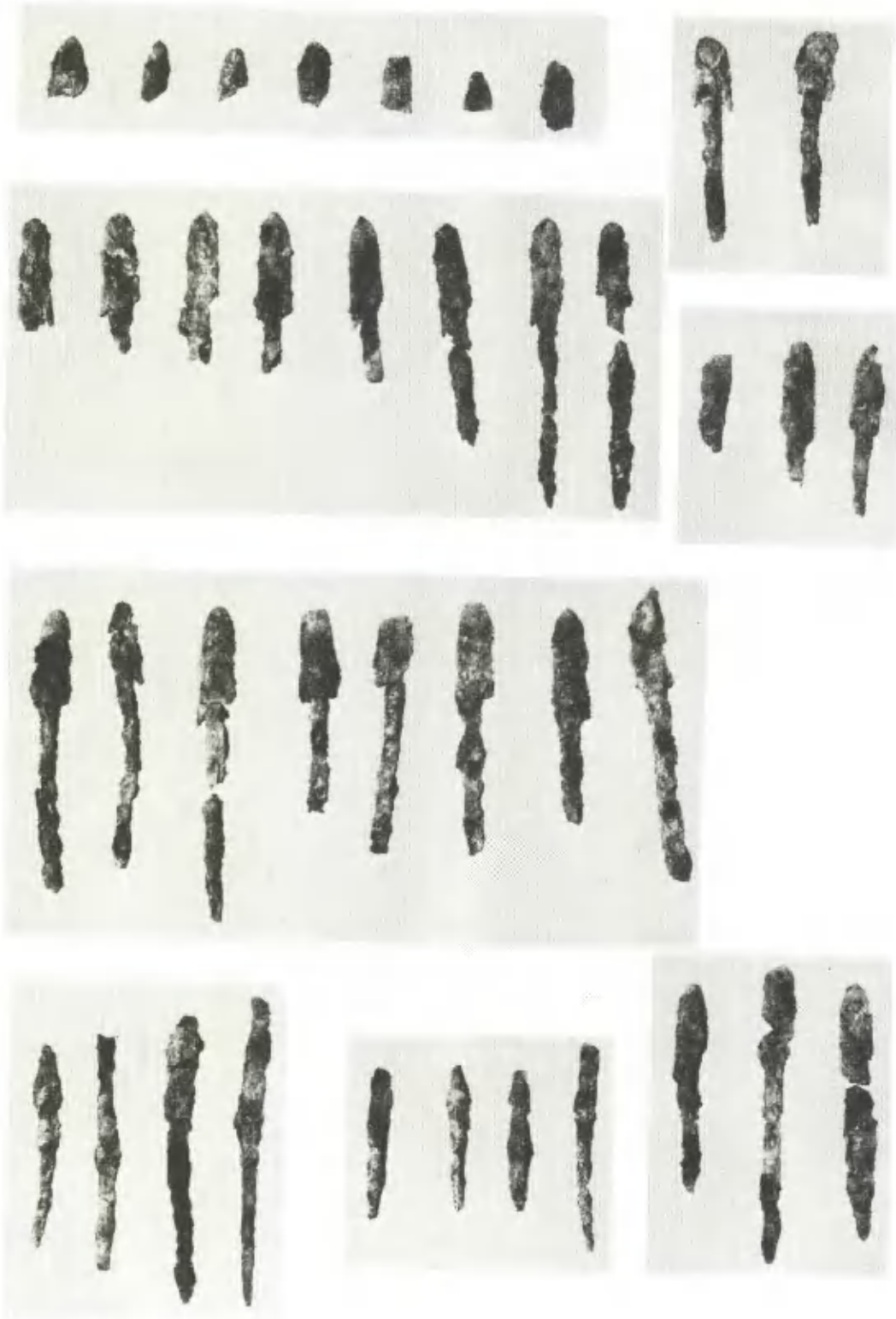



1号墳第2主体出土須恵器（1～9）
1号墳第2主体出土鑿，不明鉄器（10，11）
1号墳第1主体出土直刀（12）
1号墳第2主体出土直刀（13）
2号墳内部主体出土直刀（14）




1号墳第1主体出土遺物（1）　撹乱層出土（5）　第2主体出土遺物（4，6）

図版26



1 号墳第 2 主体出土鉄鏃

1

2

3

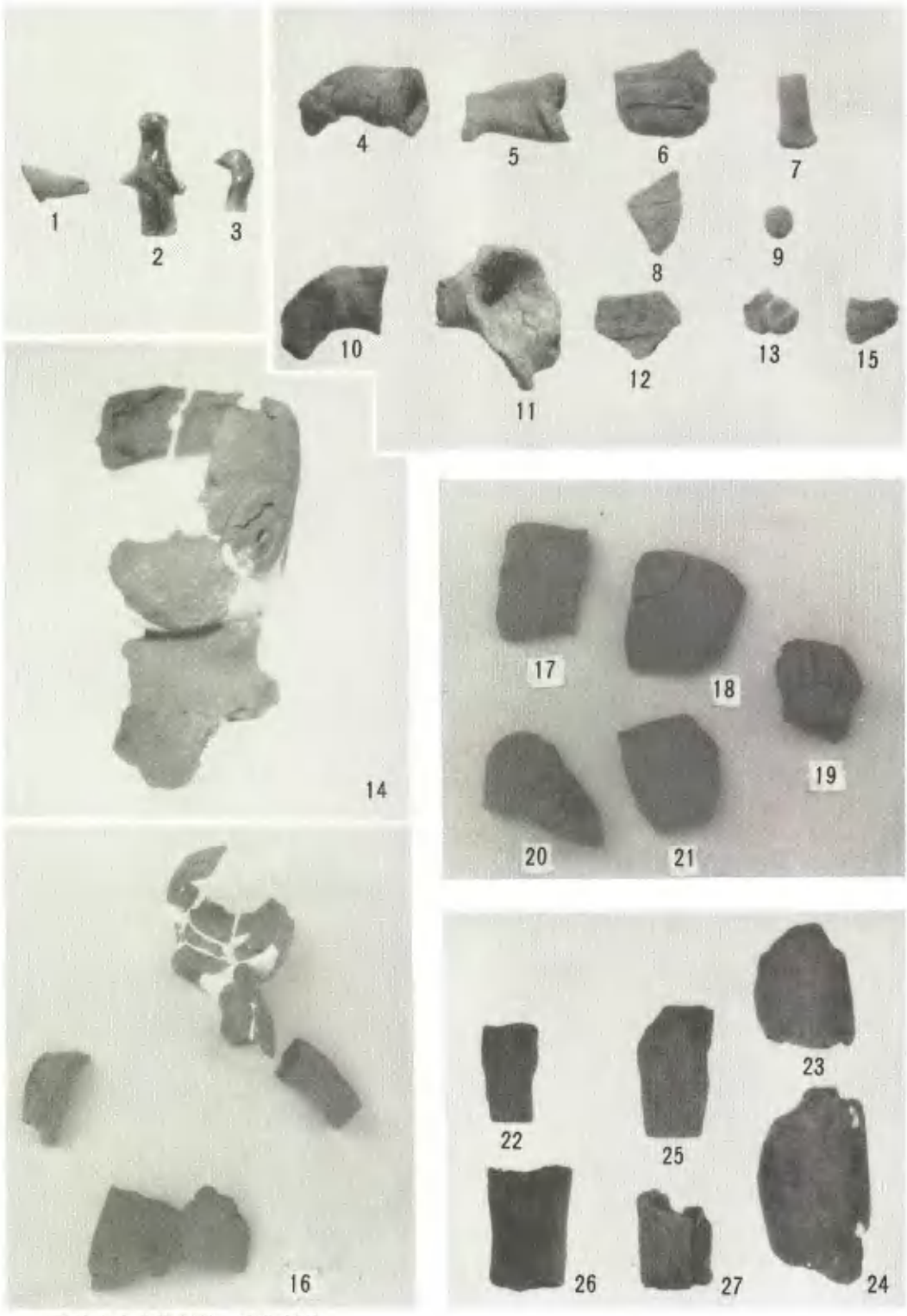
4

5

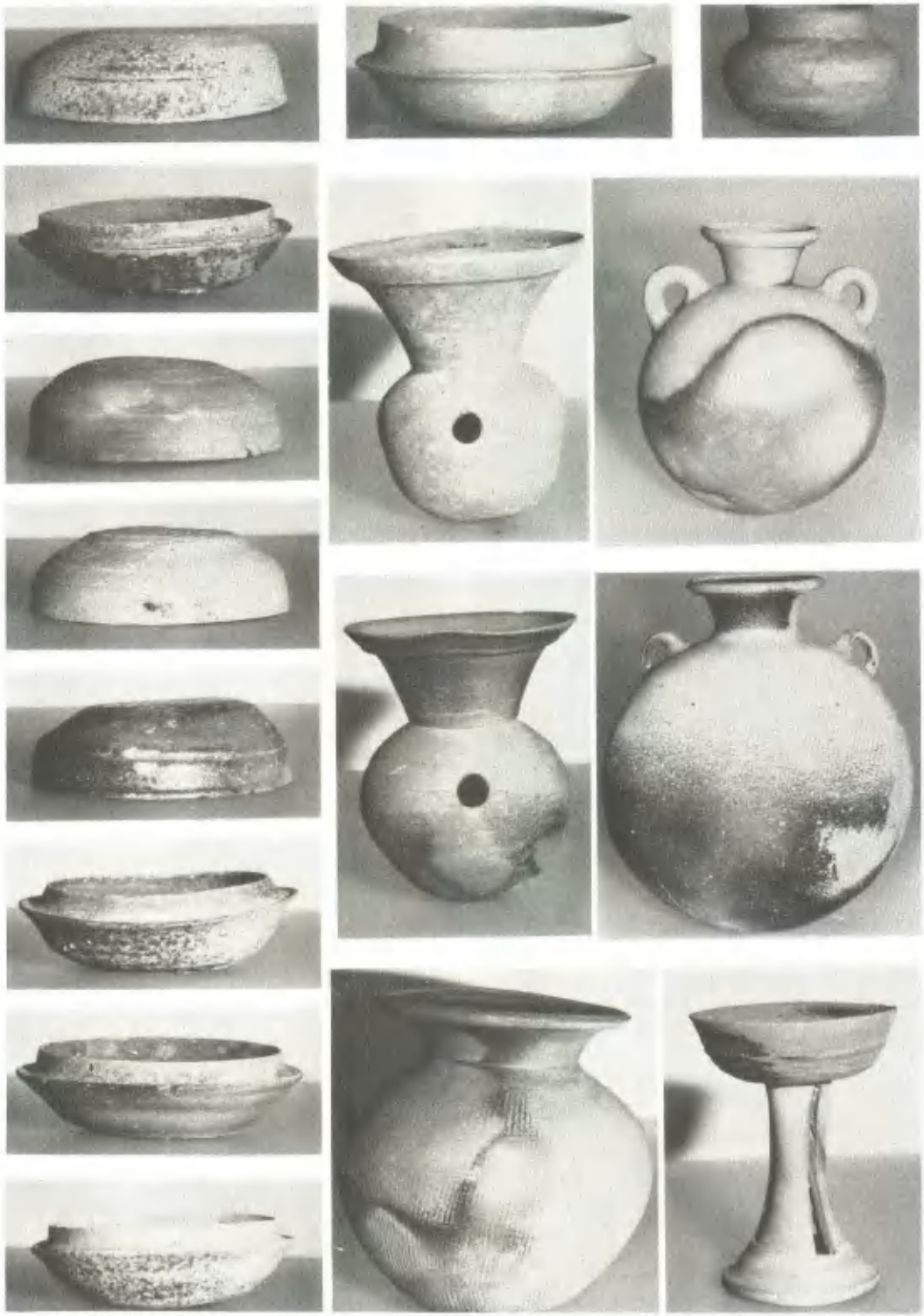
6

1号墳出土埴輪

図版28

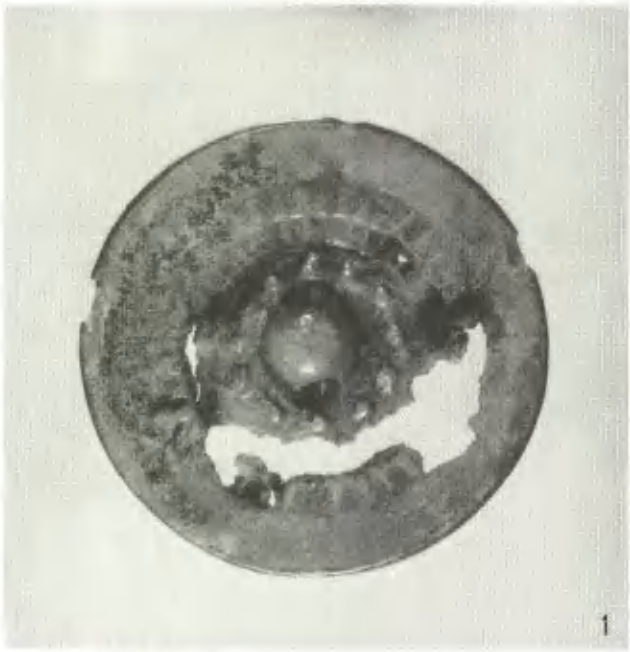


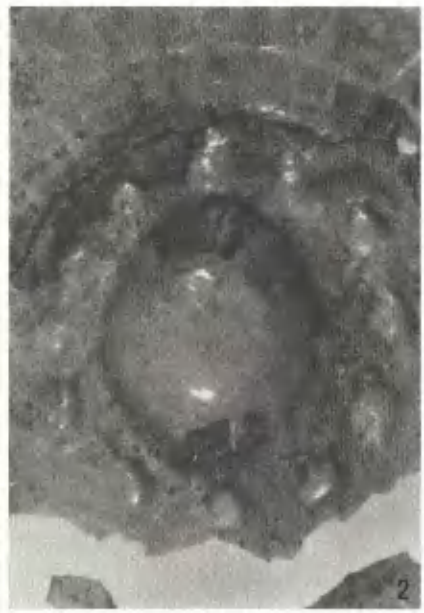

1号墳出土人物埴輪、形像埴輪



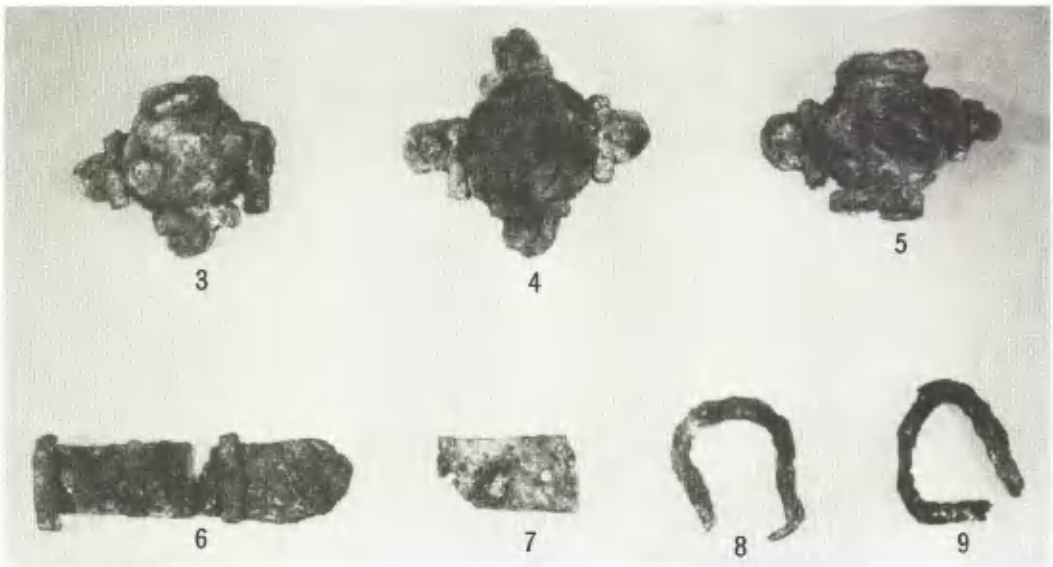
2号墳出土の須恵器

図版30




2号墳出土仿製鏡

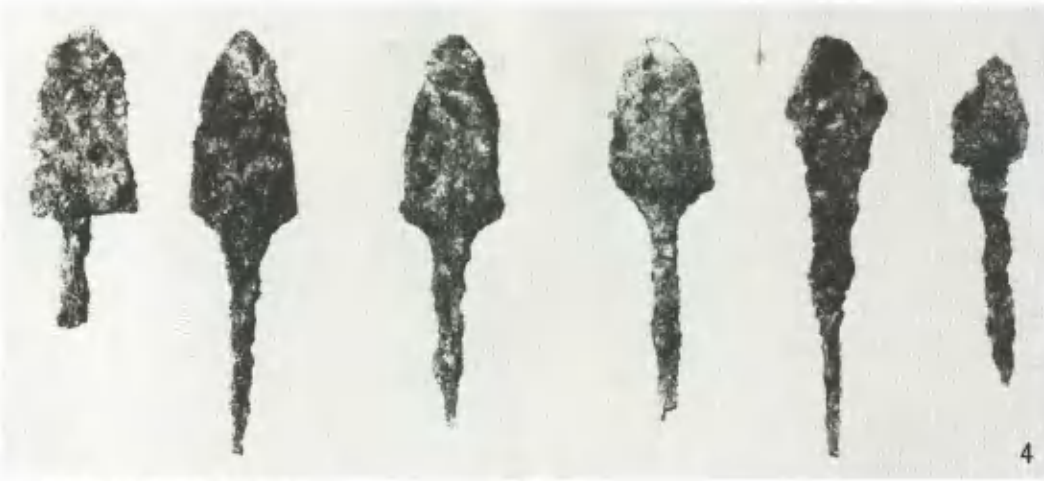



2号墳出土の馬具

練り玉

刀子

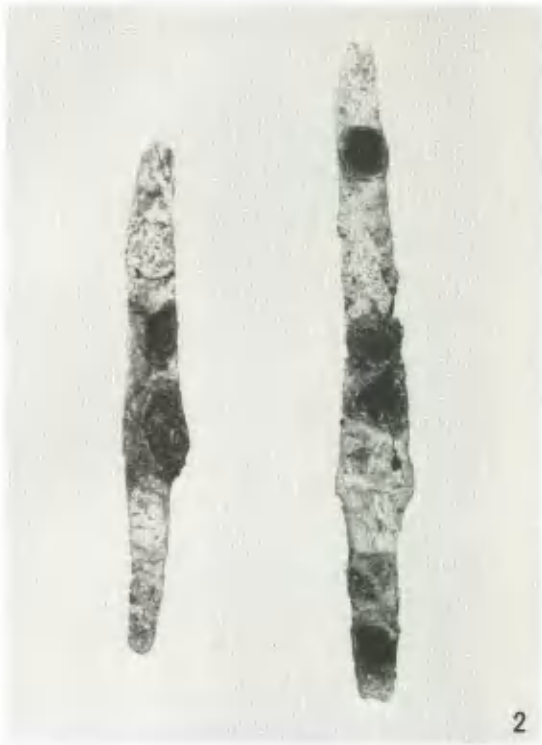
馬具　(轡)

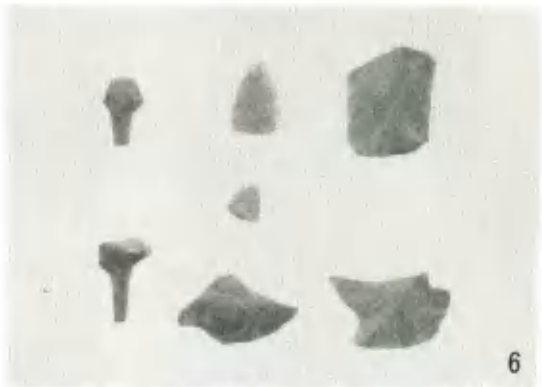


2号墳内部主体出土遺物　　鉄鏃

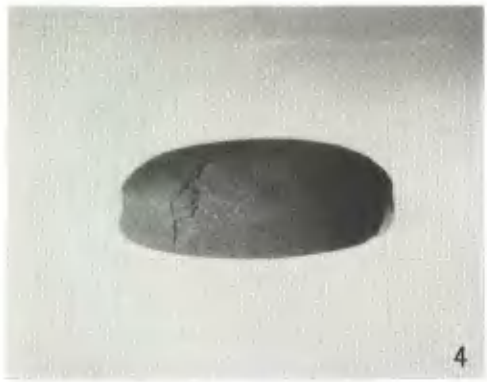
図版32

2号墳内部主体出土鉄鏃




3号墳出土遺物　（1－5）



4号墳墳丘下出土石器　（6）

# 押入飯網神社古墳群(10)

# 本　文　目　次

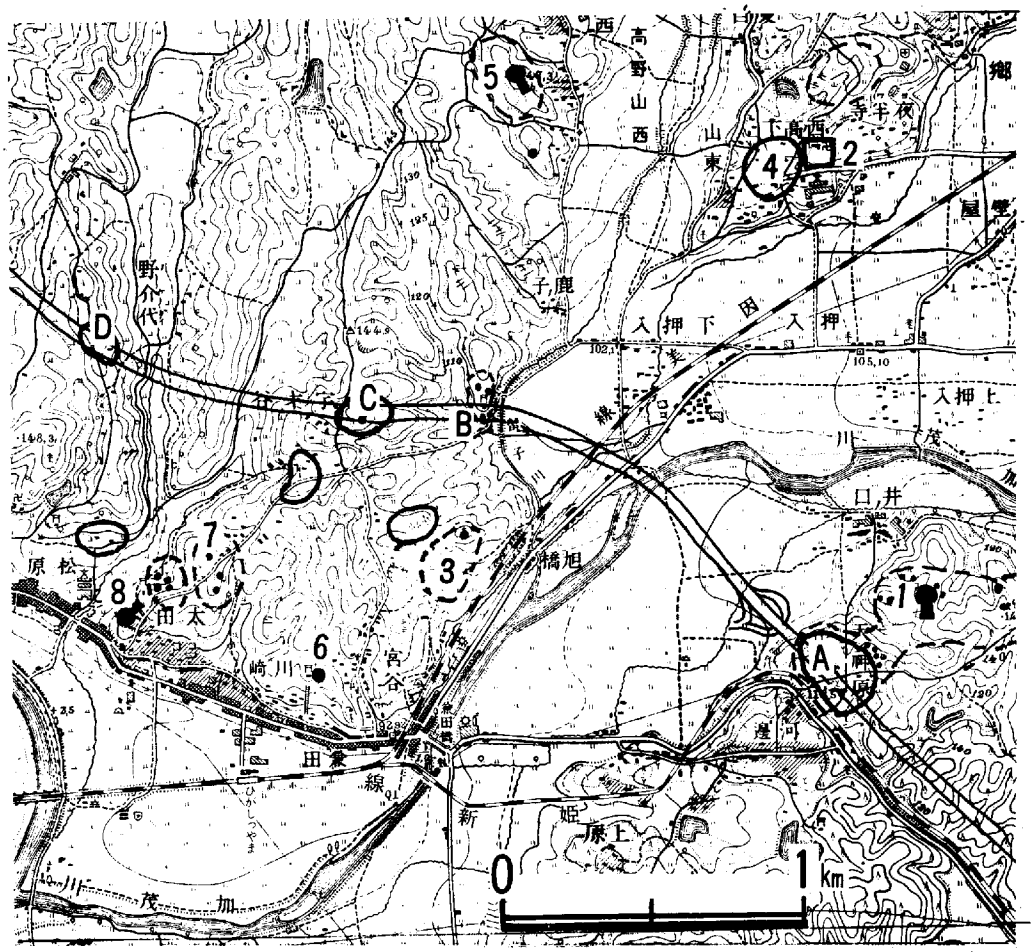

1. 古墳群の立地と状況 …… 85
2. 調査の経過 …… 87
3. 3号墳 …… 89
4. 4号墳 …… 102
5. まとめにかえて …… 102


# 図　　目　　次


第1図　地形図（5万分の一）　作製　橋本 …… 85
第2図　墳丘地形図（実測　栗野，泉本，柳瀬，橋本　製図　橋本）…… 86
第3図　3号墳平面図（実測　柳瀬，橋本　〃　）…… 91
第4図　3号墳葺石側面図（実測　河本，柳瀬，橋本　製図　橋本）…… 95
第5図　〃　断面図（　〃　〃　）…… 97
第6図　〃第一主体実測図（実測　橋本　製図　橋本）…… 99
第7図　〃第二主体実測図（実測　河本，橋本　製図　橋本）…… 100
第8図　〃配石遺構（実測　柳瀬　製図　橋本）…… 101
第9図　出土遺物（実測　柳瀬，橋本　製図　橋本）…… 102
第10図　4号墳　墳丘断面図（実測　柳瀬，橋本　製図　橋本）…… 103


# 図　版　目　次


図版1－1　遠景　西より（撮影　柳瀬）
図版1－2　3号墳　北西より（撮影　橋本）
図版1－3　3号墳　西より（撮影　橋本）
図版2－1　3号墳　葺石（北より）（撮影　柳瀬）
図版2－2　3号墳　転石を除去した状況（撮影　柳瀬）
図版3－1　3号墳　墳丘断面　N－S（撮影　柳瀬）
図版3－2　3号墳　墳丘断面　W－E（撮影　柳瀬）
図版3－3　3号墳　墳丘断面　$P_1$－$P_2$（撮影　柳瀬）
図版4－1　3号墳　第一主体（撮影　橋本）
図版4－2　3号墳　第一主体（撮影　橋本）
図版4－3　3号墳　第一主体（撮影　橋本）
図版4－4　3号墳　出土遺物（撮影　橋本）
図版4－5　3号墳　出土遺物（撮影　橋本）
図版5－1　3号墳　第二主体（撮影　橋本）
図版5－2　3号墳　第二主体（撮影　橋本）
図版6－1　3号墳　配石遺構（東より）（撮影　河本）
図版6－2　3号墳　配石遺構土師器出土状況（撮影　河本）
図版7－1　4号墳　調査前　西より（撮影　橋本）
図版7－2　4号墳　北より（撮影　橋本）




第1図　遺跡の周辺

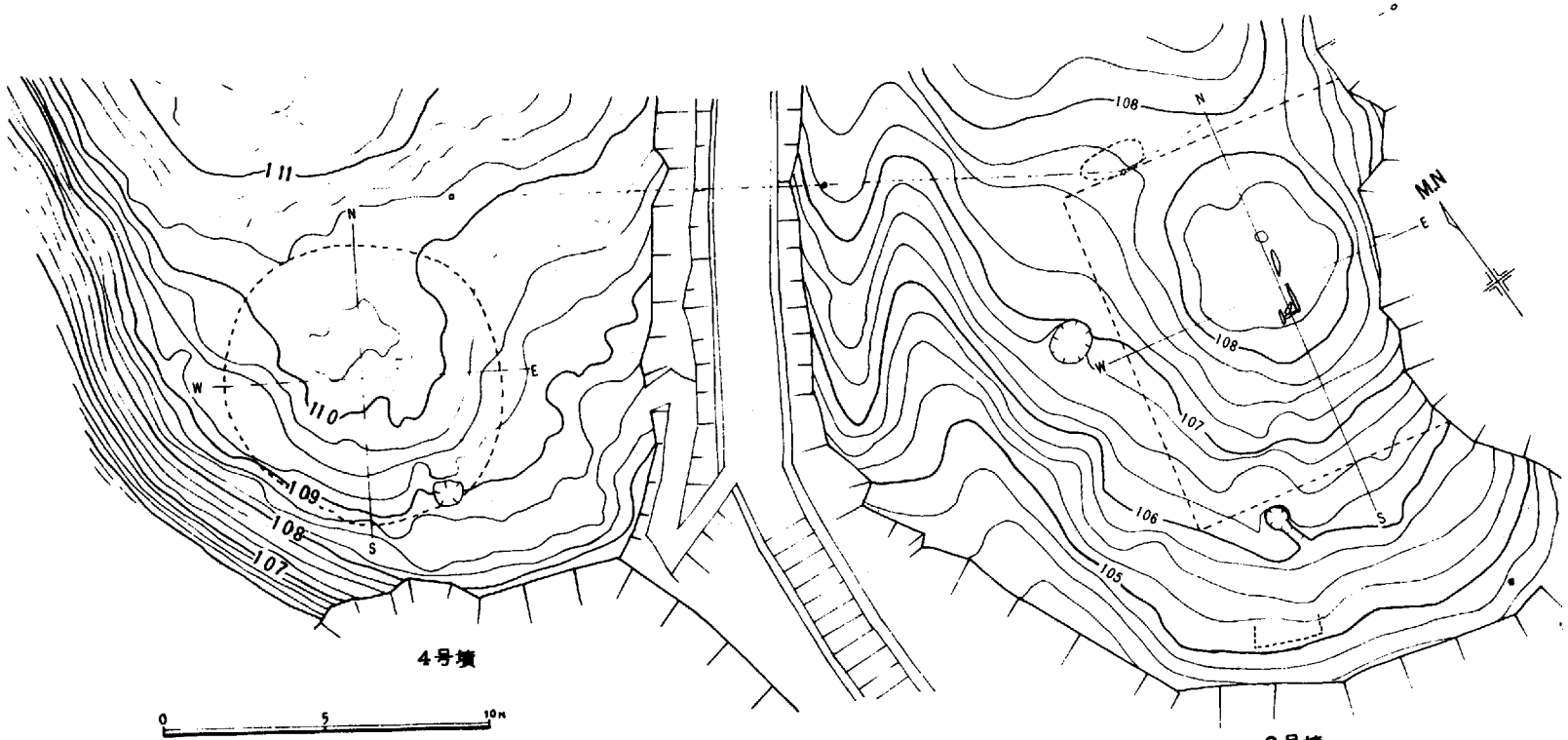
A　天神原遺跡　　B　押入飯綱神社古墳群　　C　押入西遺跡　　D　野介代遺跡
1.　井口車塚　　2.　夜半廃寺　　3.　能満寺古墳群　　4.　地山遺跡
5.　正仙塚　　6.　兼田丸山古墳　　7.　六ツ塚古墳群　　8.　玉林大塚

# 1.　古墳群の立地と状況

加茂川が吉井川に合流する付近に高野の低地が広がつている。この低地をなだらかな第三紀丘陵がめぐつている。その西に位置する押入丘陵は樹枝状に開析され，谷頭は丘陵深く入り込んでいる。本古墳群は南にのびる細長い丘陵に位置する小古墳群である。4基の古墳で構成されており，1，2号墳は神社裏に，3，4号墳は丘陵の末端に東西に並んで存在する。

1号墳は直径約12m，高さ1mの円墳，2号墳は破壊されており規模不明，3号墳は直径12m，高さ1.5mの円墳（表土除去して方墳であることが明らかになつた）で墳頂に組み合せ石棺が露出している。4号墳は直径約9m，高さ0.7mの円墳である。

本古墳群の北には前方後円墳の正仙塚，南には能満寺古墳群があり，押入丘陵の末端には玉林大塚をはじめ，古墳群が存在する。西の丘陵上には押入西遺跡（既刊第一分冊）がある。




第2図　墳丘実測図

# 2　調査の経過

本調査は昭和４５年６月６日から９月８日まで実施した。柳瀬昭彦，橋本惣司が担当し，鈴木重信氏，秋山芳輝氏の協力を得た。図面整理は橋本が行なつた。

○　日　誌　抄

６月　６日　器材搬入

８日　３号墳　墳丘の清掃，シスト露出，地形実測 $S=\frac{1}{50}$，２５cmコンター

９日　４号墳の清掃，３号墳の地形測量（昨日のつづき）完了

１０日　３号・４号墳写真撮影，押入西２号墳清掃

１２日　４号墳，地形測量，押入西２号墳清掃

１３日　４号墳地形測量完了，押入西２号墳清掃

１５日～２２日（月）　梅雨で作業休み

２３日　押入西１号墳清掃，神社３・４号トレンチ設定，３号－N15°E，４号N２０°E，久米寺への器材点検

２４日　押入西，１号の清掃，１号の地形測量完了

２５日　対策委員会の資料作成

２６日　押入西２号墳清掃，押入西２号墳写真撮影，地形測量

２７日　地形測量，午後対策委員会

２９日　３号墳，１区・２区・３区葺石検出，南北１０.８ m，東西 8.8 m の方墳考えられる。葺石は墳丘の下端部に巾約1.２ mの帯状にめぐつている。

北片には上巾 1.３ m 下巾 0.５ m² の逆台形の周溝をみとめた。

７月　２日　葺石の検出，１区の北西部にトレンチを拡張，１区の西側は平たんな地山を検出

３日　葺石の検出，１区の拡張，葺石の清掃（１，２，３，４区），３区・４区のがケ面の清掃

６日　葺石の清掃，写真撮影，東側のガケ清掃，４号の墳丘清掃

７日　３号，１区の西拡張，写真撮影，東ガケ断面撮影，４号清掃，３号主体部掘り方確認

９日～１０日　３号墳，葺石清掃

３号墳，葺石清掃

１４日　３号墳，写真撮影，３号墳葺石平面図割り付け，実測，４号墳清掃，北側より光順通宝（完形）土師器，須恵器（糸切り）の破片出土

１６日　対策委員会，３号葺石実測，４号清掃

１８日　３号墳，葺石実測，３区完了，４号墳清掃，北に散布する土師，須恵器片（糸切り底）は盛土と思われる墳丘上に見られる。

７月２０日　３号墳，葺石実測（浮いた石の除去，３号墳，南墳端部の拡張，４号墳，Ⅳトレン

チ，Ⅳ－1，Ⅲ－2トレンチ，1－1，1－2トレンチを入れる。

7月21日　1区・4区の転石を除去し，築造時の葺石面を清掃，墳丘の南側の地山面の検出，主体部内（石棺）の清掃，写真撮影，1段目の根石（立石）が検出された墳丘外の地山直上から土師器の壷が出土した。これは送葬儀礼に関係する遺構かもしれない。第一主体の石棺内にあつた板石は，西側の側石の1つであることがわかつた。床面は判然としない。

22日　主体部写真撮影，3号墳，南側墳端部遺構検出（配石）遺構とする。

23日　西側遺構，平面図，断面図実測，写真撮影，西側墳端部，地山追求

24日　3号墳，西側下段根石検出，主体部平面と縦断面図実測，配石遺構の平面図縦横断面実測，遺物（坩，壷，鉄器）とり上げ

25日　転石を除去して，北，西，南辺の下段を検出，主体部，妻石裏の粘土写真撮影，北の断面実測，葺石の北西部に主体検出，北辺の下段根石に平行に東西1.5 m，南北0.3 mを計り，河原石を使つている。第二主体とする。

27日　3号墳葺石清掃，主体部側面図実測，西側葺石断面図

28日　3号墳，第2主体部発掘，3号墳葺石の状態で写真撮影，4号墳周溝発掘，3号墳葺石実測割付け

29日　3号墳－第2主体部平面図実測，葺石，平面図，南側，西側，平面図実測，4号墳－主体部検出作業（Ⅰ区，Ⅳ区の墳頂部周溝発掘）

30日　3号墳－第2主体部縦横断面実測，葺石側面図実測（西側一部），4号墳－周溝検出，全体写真撮影，3号墳－主体部の追求，4区の上層から刀子1出土，1区，4区から須恵器片出土，これらの平面実測

8月　1日　3号墳，2区のトレンチの掘り下げ，配石遺構の掘り下げ→刀子出土，1区西の葺石側面実測，写真撮影，第一主体の掘り方の粘土，第二主体の掘り方，3区トレンチの盛土

3日　3号墳，主体石棺ぬき取り後の写真撮影一区トレンチ，第2主体ぬき取りと掘り方検出と写真撮影，配石遺構の掘り下げ

4日　連絡会議

5日　3号墳，第2主体の写真撮影平面実測，1区トレンチの清掃，配石遺構の地山面追求，西側に拡大，黒色土層は南西に傾斜しているが，旧地表面とも考えられる，地山面から木炭片が出ておること，3区トレンチでは黒色土層と地山とが相接しており一区トレンチの場合（黒色土は地山より30 m～50 m上位にある）と異ることなどから地山面を削平していると考えられる。

8日　3号第二主体断面図，一区葺石の平面図，二区南拡大トレンチ掘り下げ4号主体追求

10日　3号墳，1区葺石側面図，4区トレンチ，南側拡大トレンチ（配石遺構の下に方形隅丸のピット検出（第3紀層を掘り込んでいる），4号墳，主体追求すれども不明，

黒色土層より河原石検出

8月11日　3号墳，1区葺石側面，実測1区トレンチ掘り下げ床面まで（隅丸方形ピット）

12日　3号墳，Ⅲ区葺石側面図，Ⅰ区トレンチ，Ⅳ区トレンチ

17日　連絡会議

18日　4号墳，主体部検出作業，3号墳，Ⅲ区マウンド解体，Ⅱ区マウンド解体，Ⅳ区葺石平面実測図

19日　3号墳，1区・2区・3区・4区の壁面清掃，2区トレンチ内石組検出，4区O－NE面断面実測，4号墳，南北断面1部（上層のみ）実測

20日　3号，配石遺構断面図実測，北側第2主体部写真撮影，Ⅳ区墳丘掘り下げ，Ⅳ区葺石，側面図実測完了

21日　雨のため休み

22日　3号墳，2区平面図割り付け葺石上段平面図作成

24日　3号，O－N，O－S，O－E断面図写真，Ⅳ区石写真撮影，O－N断面図作成，4号，掘り下げ

25日　3号墳，O－Nセクション（完了），O－Wセクション，O－Sセクション，土層記入

26日　3号墳，OW断面図完了，2区，上段葺石側面図完了，下段葺石平面図トレンチ掘り下げ，4号墳，Ⅰ～Ⅳ区掘り下げ（遺物なし），平面プラン測量

27日　3号墳，2区葺石1段平面実測，ピット1の平面，断面実測完了，4号墳，1～4区墳丘掘り下げ，黒色土層は南に傾斜し徐々に厚土をます

28日　3号墳，2区南側葺石側面図完了，2区西側葺石平面図完了，4号墳，墳丘掘り下げ（地山面まで）

29日　3号墳，Ⅰ区葺石側面図，ピットⅠ写真撮影，4号墳，掘り下げ，午後対策委員会

31日　3号墳，Ⅰ区葺石側面図，4号墳，盛土断面写真撮影

9月　2日　3号墳，Ⅱ区葺石側図実測完了，断面清掃

3日　3号墳，Ⅱ－OW－1の写真撮影

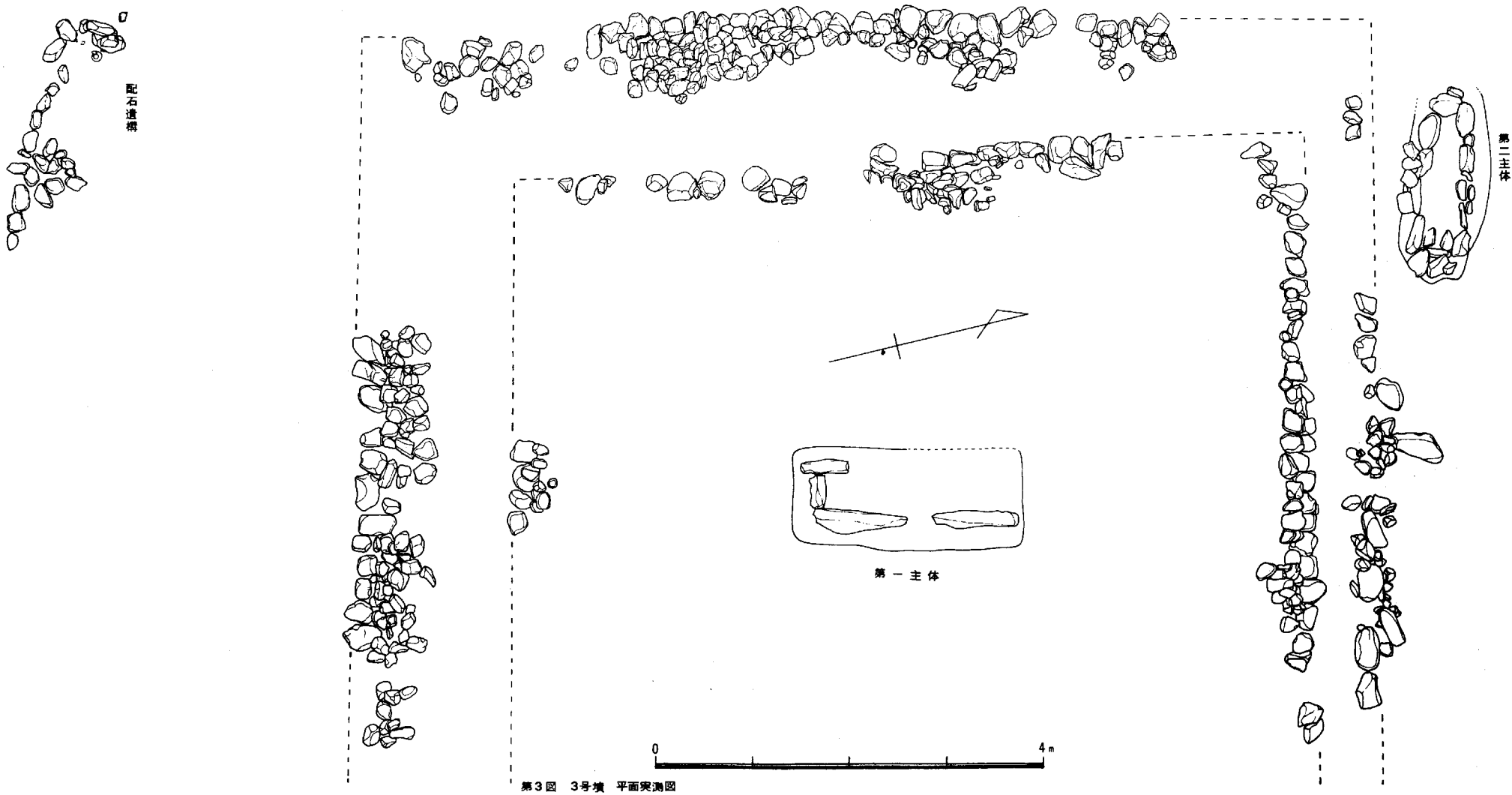
4日　3号墳，Ⅱ－OW－1断面図実測，OW断面清掃，4号墳，N－S断面実測

8日　3号墳，EW断面写真撮影

# 3.　3　号　墳

## 墳　丘

3号墳は分布調査では円墳と考えられていたが表土除去の段階で葺石をもつ方墳であることが明らかになつた。葺石は二段築造され，下段で1辺約10.7m×約10mの方形をなし上段は1辺8mの方形をなしているが，葺石の積みあげが特徴的である。長さ30cm前後の根石を立てならべて，




第3図　3号墳　平面実測図

その上に児頭大の石を小口積みにしている。保存状態の最も良好な西辺では下段の葺石上面と上段の根石の下面がほぼ同レベルをなし，犬走り状をなしていたと思われる。また上段の葺石は墳頂半担部以外をすべておおつてたようである。

葺石に使用した石はすべて河原石であり，丘陵のすぐ東を流れる蟹子川の河床から運んだことがほぼ確認できた。これは葺石のうち，児頭大のものと根石と現河床の石を任意に１００個を摘出し，石質の比率を比べてみた結果，近似値を得たことによる。

墳丘の構築では傾斜地に位置しているため周溝はみられず，北側をカットして，墳丘の北限を決定している。また傾斜地の構築は葺石にも影響があり，下段の根石の南北の高低差は約１ｍもあり，側面図で見るように傾斜している。上段の根石の場合もその差が６０㎝となつている。また第一主体部は１辺８ｍの上段根石区域の中央に位置するが，下段根石区域は中央より北にずれている。

墳丘の縦横断面から墳丘盛土の状況を考えてみると，旧地表（黒色土層）は南に傾斜しているが北側をカットして墳域を決め，下段葺石の掘り方で南側の墳域が決まり，墳丘の規模は決定し，盛土が行われるとき，中央部は薄く，末端部に厚く積み，墳丘の整形をしながら崩土防止の方法がとられている。根石は掘り入んで立てならべ裏ごめの土を入れながら小口積みによつて墳丘斜面をおおつたと考えられる。第一主体部は墳丘完成後掘り込まれたようである。

## 第一主体

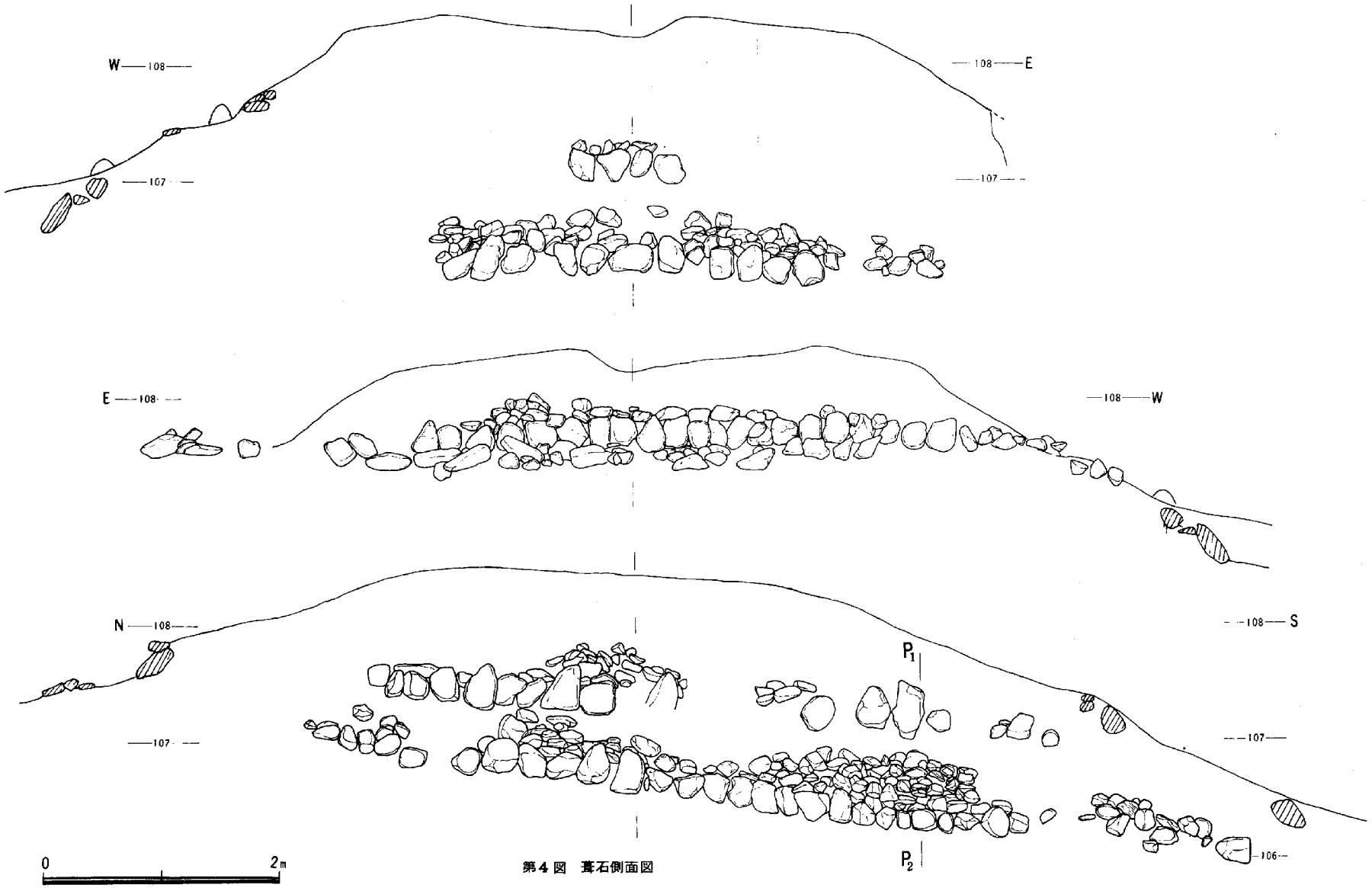
墳頂部に位置する組み合せ石棺で主軸はＮＥ１４°である。棺材は津山市街地の南に分布する角礫凝灰岩である。破壊をうけ，４枚の板石が現位置を保ち，１枚の側石が盗掘孔に落ち込んで検出された。石棺の接合部はえぐりによつて密着させている。石棺の外側は小円礫を混ぜた土でかため，上部には粗砂まじりの青灰色粘土を貼つている。棺内は盗掘によつて荒らされ，遺物は皆無であつた。

## 第二主体

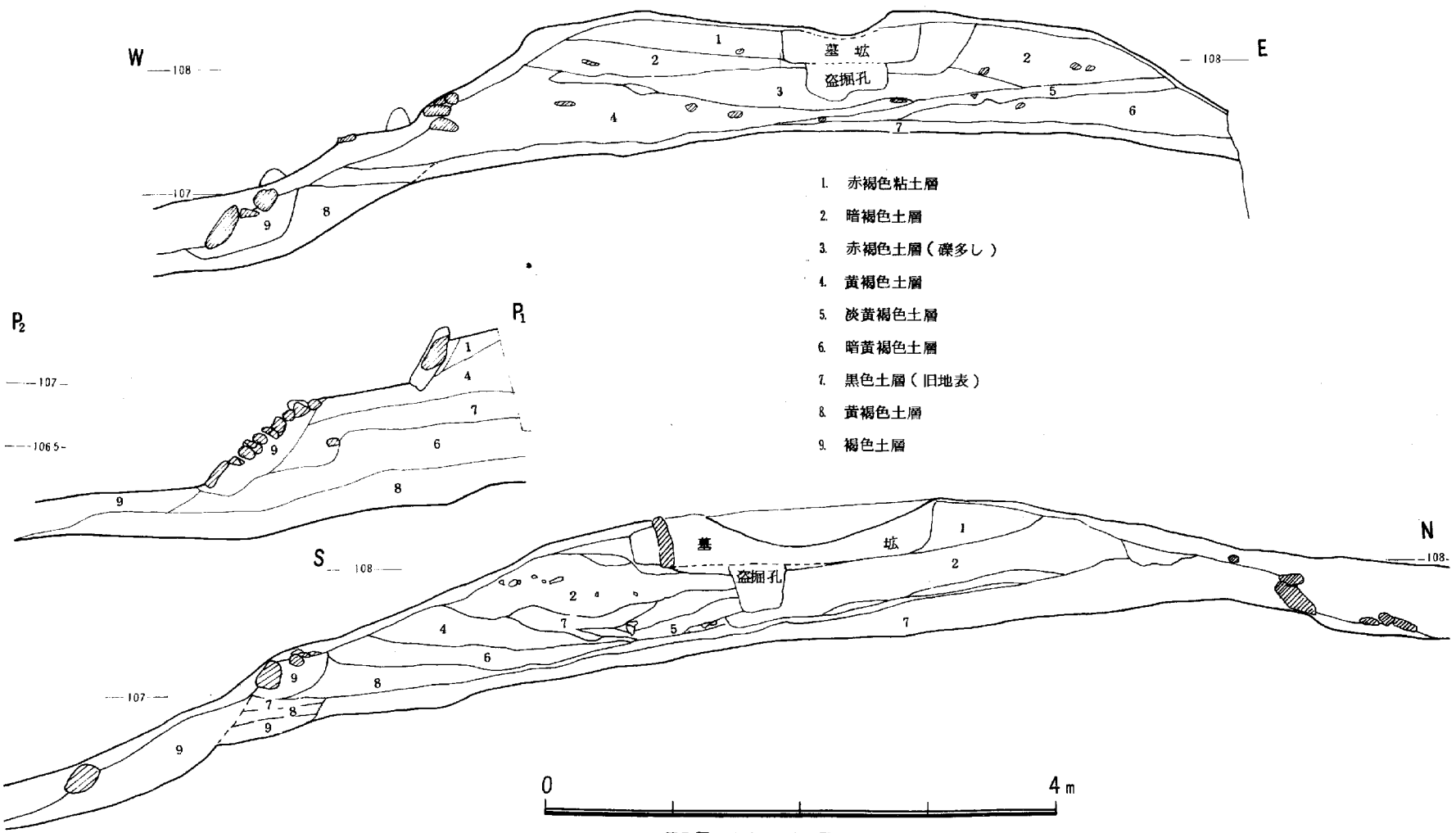
墳丘北側の葺石に接して検出された埋葬施設で，第二主体とした。長径２ｍ，巾０.８ｍ，深さ０.１ｍの浅い長楕円形の掘り込みの中に，さらに長さ１.７ｍ，巾０.４～０.５ｍ，深さ０.３５ｍの長楕円形の土拡を掘り，東端に石を立て枕石を２個置いている。浅い掘り込みには河原石１９個をめぐらし，組み合せ石棺の様相を呈している。蓋石はなく板などで蓋をしたものと考えられる。墳丘完成後，埋葬が行われたと考えられる。遺物なし。

## 配石遺構

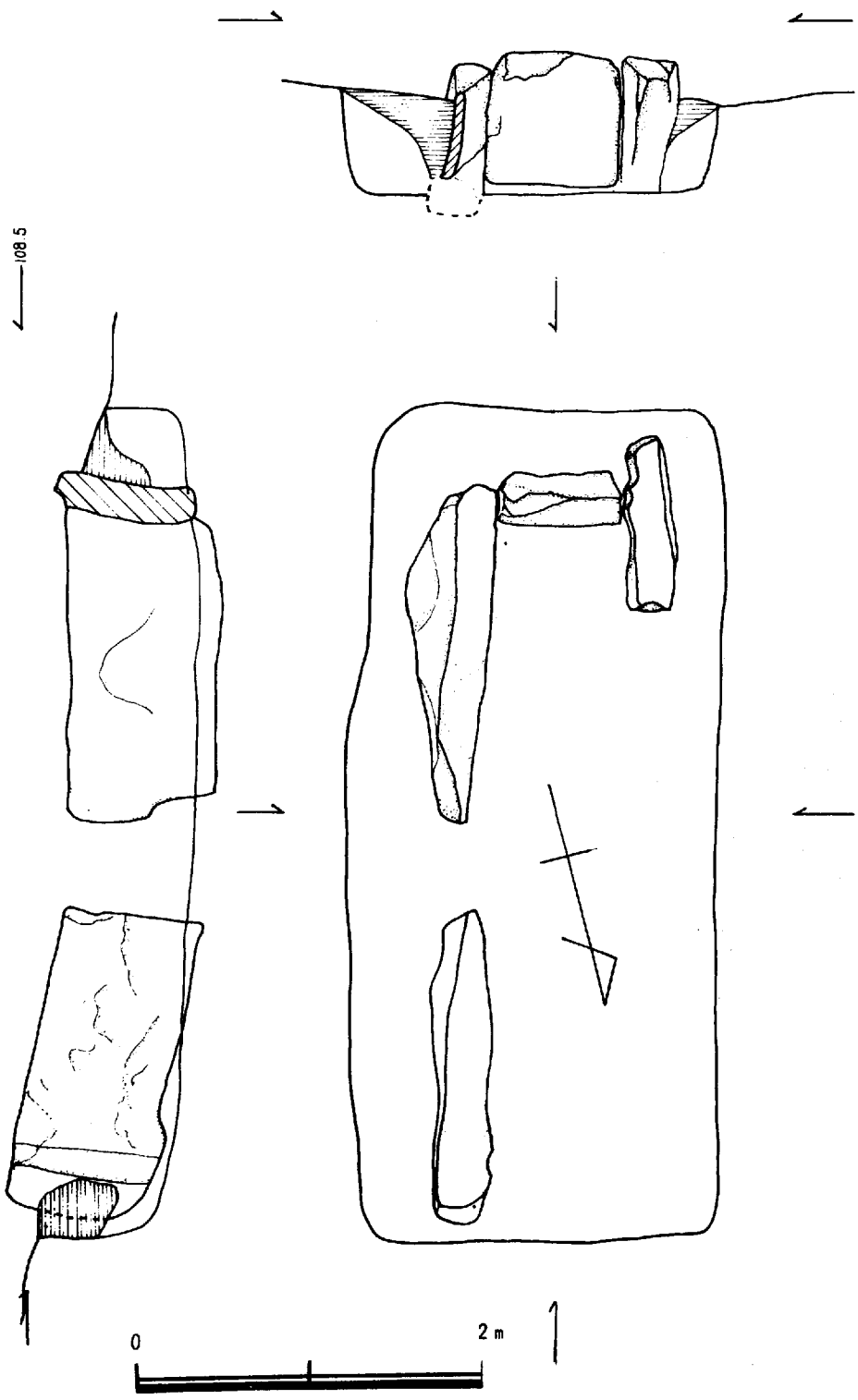
西側の下段葺石の南の延長線上，４ｍに第一主体に向つてコの字形の配石が検出された。長軸１.５ｍ，巾０.６ｍを測る。小型の土師器片，鉄片６，中央に刀子１が出土した。完形に近い土師器坩は口径８.１㎝，腹径８.７㎝，器高８.５㎝で底部はヘラ削りである。胎土は水こしされ，内面はヘラ削り，器面はヘラ磨きでていねいな仕上げである。刀子は長さ１５.５㎝，刀部１０.８㎝，巾１.３㎝を測り，柄には本木質が残る。鉄片は不整形で用途不明である。土師器片は採集できなかつた。この遺構はすべて河原石が使われているが，北側には石がなく，埋葬施設とは考えられない，むしろ３号墳の第一主体の送葬儀礼の遺構と考えたい。



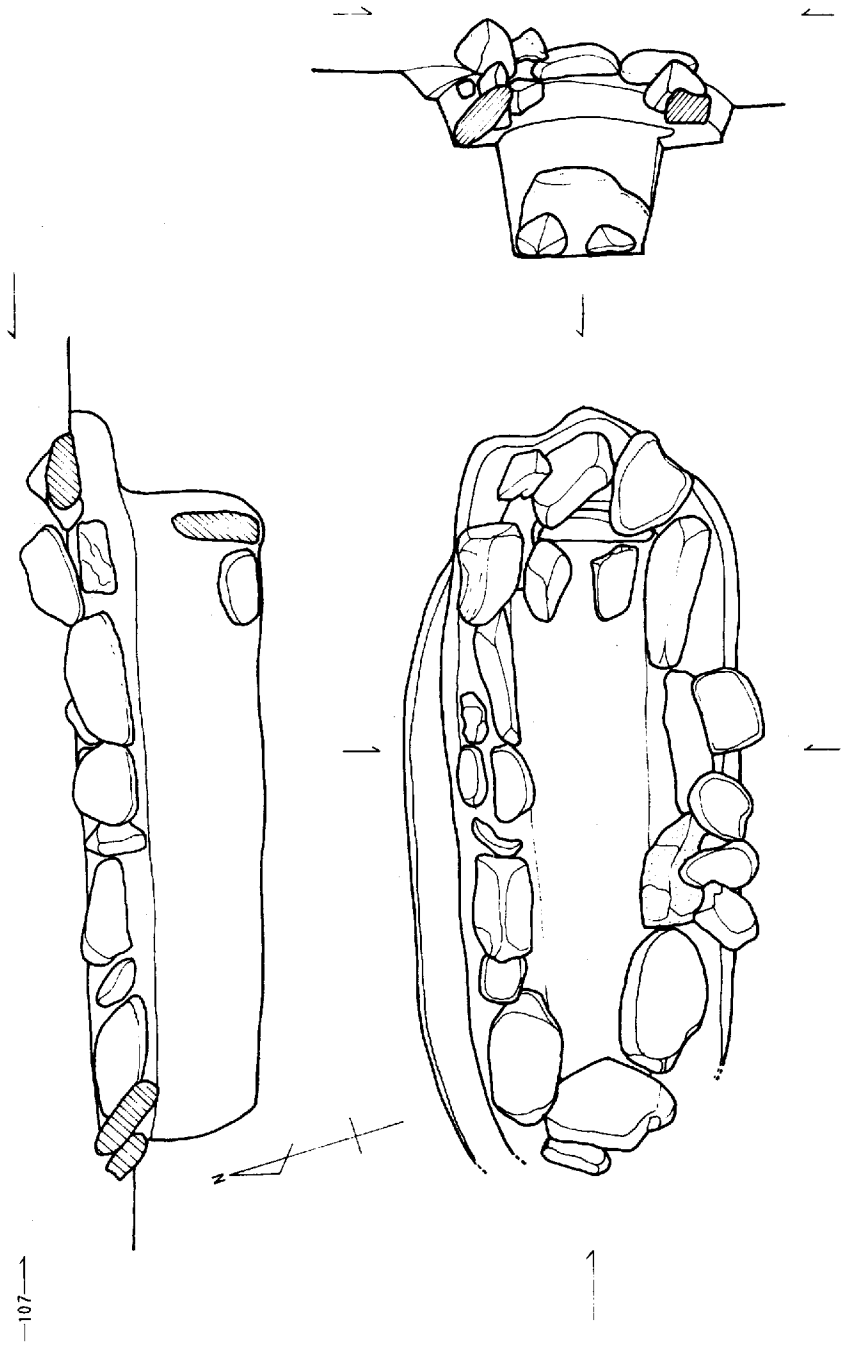

第4図　葺石側面図


W
E
108
107
墓 坑
盗掘孔
P2
P1
106.5
S
N
0
4 m
1. 赤褐色粘土層
2. 暗褐色土層
3. 赤褐色土層（礫多し）
4. 黄褐色土層
5. 淡黄褐色土層
6. 暗黄褐色土層
7. 黒色土層（旧地表）
8. 黄褐色土層
9. 褐色土層

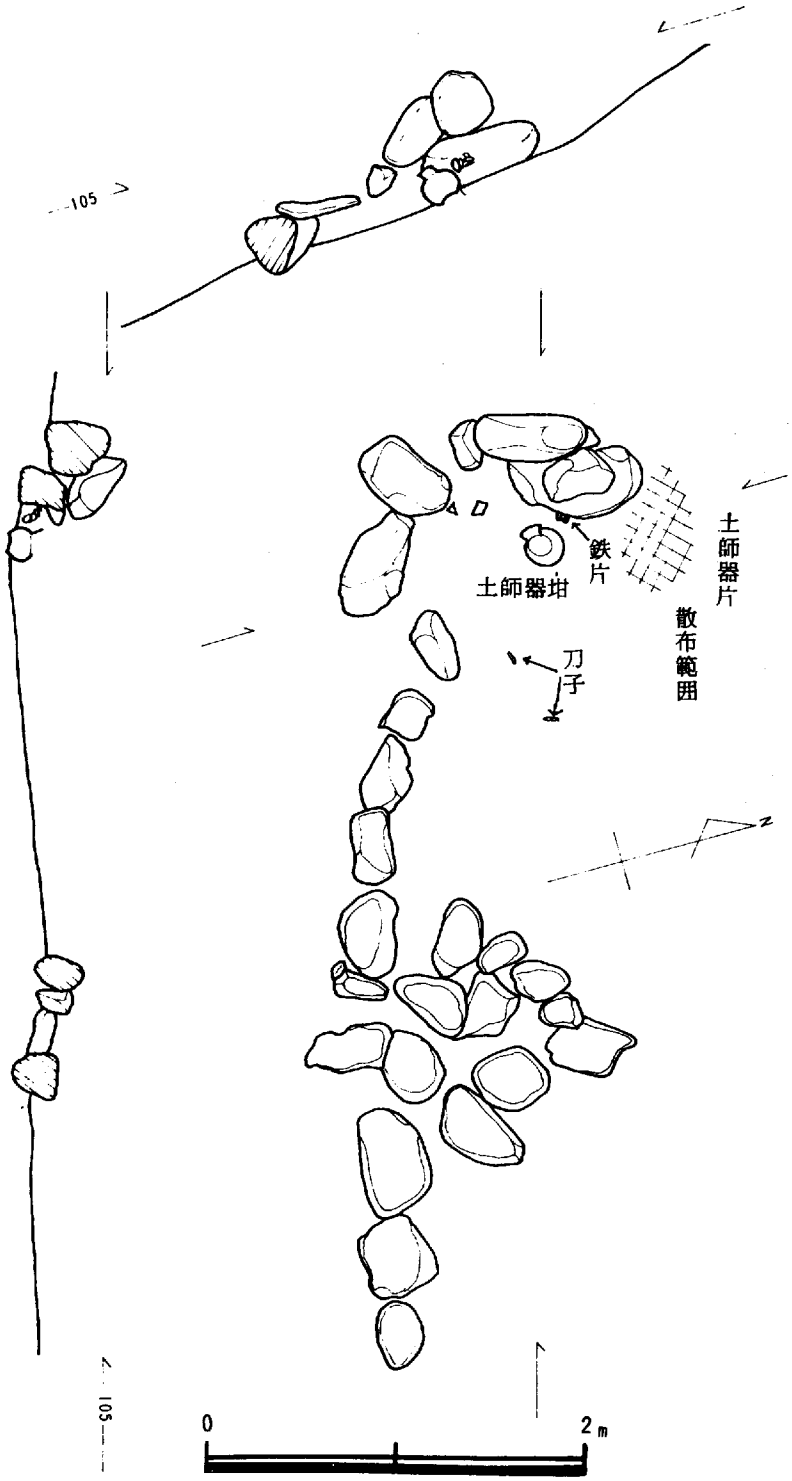
第5図　墳丘断面実測図




第6図　第1主体実測図




第7図　第2主体実測図




第８図　配石遺構実測図

## 4. 4 号 墳

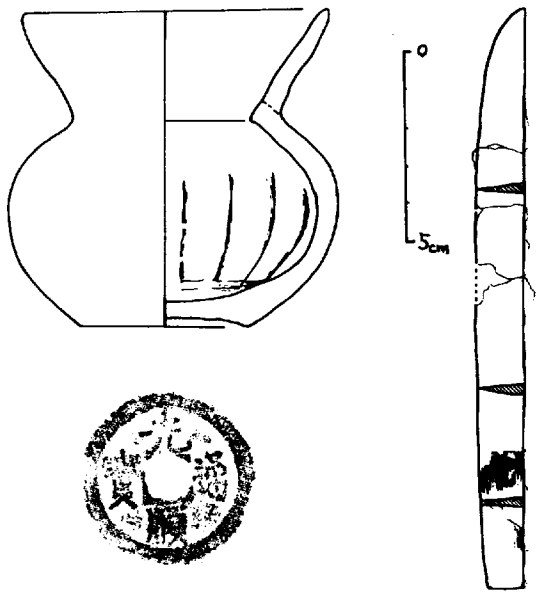
墳丘の規模は直径約９ｍ，高さ0.７ｍの円墳である。３号墳と同じく緩傾斜面に築造されており，北側をカットして巾１ｍ，深さ0.５ｍの溝を生じている。周溝と思われ，墳丘の北半に残つている。しかし墳丘は土層断面図で見るように赤褐色，黒色土が著るしく攪乱されており，古く盗掘をうけた可能性があるが刀子２，須恵器片が出土したが主体部の検出はできなかつた。須恵器は６世紀中頃と思われる。北側斜面から糸切底の土師器坏，光順通宝が出土した。

## 5. まとめにかえて

押入飯綱神社３号墳は東側が崩壊しているが１辺１０，の高さ1.５ｍの方墳で二段の葺石をめぐらして，その葺き方も根石を立て，児頭大の河原石を小口積みにしている点に特徴がある。主体部は盗掘，破壊をうけて，遺物は出土しなかつたが，墳丘の南にある配石遺構から刀子１土師器の小型壷１が出土し，時期決定の１資料となりうる。しかしこの配石遺構が３号墳の送葬儀礼跡であると断言することに問題があるかもしれないが，コの字形に開いた方向に第一主体があること，河原石を意識的に積みあげていること，河原石は葺石に用いられているものと同じであることに同時性が考えられることなどから３号墳に伴う送葬儀礼の遺構と考えて大過はないと思われる。

美作に存在する方墳は約７０基を数えるが[注1]，発掘されたものは津山市沼６号墳，河面丸山１号墳と本古墳の三例にすぎない。昭和３８年３月発掘調査が実施された沼６号墳は１辺１３.８ｍ，高さ1.５ｍの方墳で児頭大の河原石を使用した葺石が墳端部と墳斜面の上部にめぐつていた。墳頂平坦部の中央やや北寄りに粘土槨，やや南寄りに組合式石棺がいづれも主軸を東西において平行して検出された。石棺からは二体の人骨と短剣１が出土した。箱式棺を内部主体としていること，須恵器をともなわないこと，美作において小型古墳での葺石の終末が５世紀末～６世紀初頭であることなどから５世紀末～６世紀初頭に年代想定をしている。

本古墳についても配石遺構出土の土師器は５世紀後半の時期と考えられるし，葺石のあり方，主体は同じ角礫凝灰岩の箱式棺であるなど，沼６号墳と同時期と考えて大過ないと思われる。



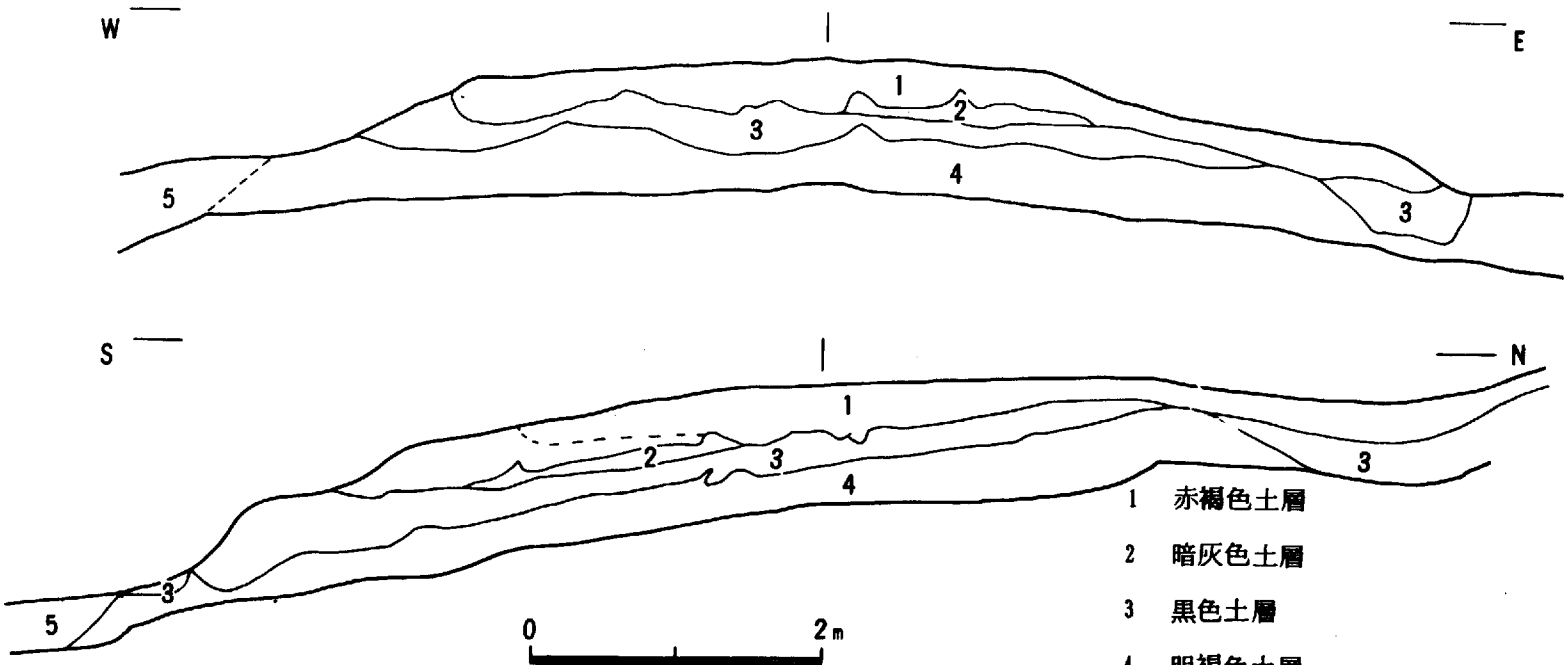

第９図　出土遺物

注１．河本清氏のご教示による。

参考文献

「美作国津山市沼六号墳調査報告」
『古代吉備』第６集　１９６９
今井堯，渡辺健治，神原英朗，河本清

『津山市史』第１巻（原始古代）
第１章　１９７２　今井堯




第10図　4号墳　墳丘断面図

1－1　遠景　（西より）

1－2　3号墳　（西より）

1－3　3号墳　（北西より）

図版2

2－1　　3号墳　葺石　（北より）

2－2　　3号墳　転石を除去した状況

3－1　　3号墳　墳丘断面N－S

3－2　　3号墳　墳丘断面W－E

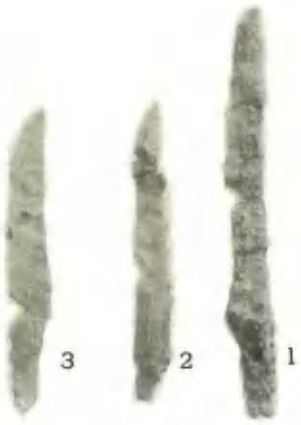
3－3　　3号墳　$P_1-P_2$断面

図版4

4－1

4－2

4－3



4－4　3号墳

1　配石遺構

2　4号墳出土

3　4号墳　〃

4　配石遺構

4－5　配石遺構

第一主体と3．4号墳　出土遺物

5－1　第二主体　（北より）

5－2　第二主体　土坑

図版6

6－1　配石遺構（東より）

6－2　土師器出土状況

7－1　4号墳（調査前）

7－2　4号墳（北より）

# 宮尾遺跡 (18)

# 目　　次

第１章　調査の経緯 …… 113
第２章　遺跡の地理的歴史的環境 …… 124
第３章　第一次調査の成果 …… 126
第４章　遺跡の立地と調査方法 …… 153
第５章　遺　　構 …… 154
第６章　各地区の遺構と遺物 …… 210
第７章　種子分析と木材鑑定 …… 232
第８章　建物と遺物からみた宮尾遺跡の時期 …… 243
第９章　結　　語 …… 251

# 図　目　次

第１図　宮尾遺跡付近地形図（作成：橋本惣司） …… 125
第２図　久米郡郷名（作成・製図：橋本） …… 125
第３図　第１次調査トレンチ設定図（作成・製図：井上弘） …… 129
第４図　Ⅰ区実測図（実測：橋本，井上，製図：井上） …… 131
第５図　Ⅰ区第１トレンチ土層断面図（実測：橋本，井上：製図：井上） …… 133
第６図　Ⅰ区遺物実測図(1)（実測：橋本，井上，製図：井上） …… 135
第７図　Ⅰ区遺物実測図(2)（実測：橋本，井上，製図：井上） …… 136
第８図　遺跡の区分図（作成：橋本，岡田） …… 137
第９図　グリッド，トレンチ及び整地面の分布図（作成・製図：岡田，橋本） …… 139
第10図　遺構配置図（作成・製図：岡田） …… 141
第11図　Ⅱ区実測図(1)（実測：橋本，山磨康平，岡田，アジア航測KK，製図：山磨） …… 143
第12図　Ⅱ区実測図(2)（実測：橋本，山磨，岡田，アジア航測KK，製図：山磨） …… 145
第13図　Ⅲ区実測図（実測：橋本，山磨，岡田，小林，小倉，森安，寺坂，
岡本，アジア航測KK，製図：山磨） …… 147
第14図　Ⅳ区実測図（実測：山磨，アジア航測KK，製図：山磨） …… 149
第15図　Ⅴ区実測図（実測・製図，岡田） …… 151
第16図　Ⅱ区建物１実測図（実測：橋本，岡田，アジア航測KK，製図：橋本） …… 159
第17図　Ⅱ区建物１柱穴断面図（実測・製図：橋本） …… 161
第18図　Ⅲ区建物２実測図（実測：橋本，山磨，製図：山磨） …… 162
第19図　Ⅲ区建物３実測図（実測：橋本，アジア航測KK，製図：橋本） …… 163
第20図　Ⅱ区建物４実測図（実測：橋本，岡田，製図：岡田） …… 165
第21図　Ⅱ区建物５実測図（実測：山磨，アジア航測KK，製図：山磨） …… 167

第22図　Ⅱ区建物６実測図（実測・製図：橋本）…… 169
第23図　Ⅱ区建物７実測図（実測・製図：橋本）…… 178
第24図　Ⅱ区建物８実測図（実測・製図：橋本）…… 170
第25図　Ⅲ区建物１０実測図（実測・製図：山磨）…… 171
第26図　Ⅲ区建物１１実測図（実測：山磨，小林，寺坂，アジア航測KK，製図：山磨）…… 173
第27図　Ⅲ区建物１１・２柱穴断面図（実測・製図：山磨）…… 175
第28図　Ⅳ区建物１２実測図（実測・製図：山磨）…… 176
第29図　Ⅳ区建物１２の柱穴断面図（実測・製図：山磨）…… 177
第30図　Ⅱ区建物１３・１４平面図（実測：アジア航測KK，製図：岡田）…… 178
第31図　Ⅱ区建物１３・１４断面図（実測：橋本，製図：岡田）…… 179
第32図　Ⅲ区建物１５実測図（実測：橋本，山磨，岡本，製図：山磨）…… 180
第33図　Ⅲ区建物１６付近実測図（実測：橋本，山磨，製図：橋本）…… 181
第34図　Ⅲ区建物17・18・19・20付近平面図（実測：橋本，山磨，製図：岡田）…… 182
第35図　建物17・18・19・20 断面図（実測・製図：岡田）…… 183
第36図　Ⅳ区建物２１・２２及び土壙３平面図（実測・製図：岡田）…… 185
第37図　A・B区画断面位置図（作成・実測：岡田）…… 187
第38図　Ⅲ区A溝曲折部付近実測図（実測・製図：岡田）…… 189
第39図　Ⅲ区A溝曲折部付近柱穴断面図（実測・製図：岡田）…… 190
第40図　南北トレンチ実測図（実測・製図：岡田）…… 192
第41図　Ⅱ・Ⅲ区A溝土層断面図(1)（実測・製図：岡田）…… 193
第42図　Ⅱ区A溝土層断面図(2)（実測・製図：岡田，山磨）…… 194
第43図　Ⅲ区A・B溝土層断面図(3)（実測・製図：岡田，山磨）…… 195
第44図　Ⅲ区A・B溝土層断面図(4)（実測・製図：岡田，山磨）…… 197
第45図　Ⅱ・Ⅲ区A溝土層断面図(5)（実測：田仲，山磨，製図：山磨）…… 199
第46図　Ⅲ区B溝土層断面図(6)（実測・製図：山磨）…… 200
第47図　Ⅲ区B溝土層断面図(7)（実測：井上，岡田，製図：岡田）…… 201
第48図　Ⅱ・Ⅲ区柵断面図（実測：橋本，山磨，製図：山磨）…… 205
第49図　A溝出土遺物実測図（実測・製図：岡田）…… 207
第50図　A溝出土遺物実測図（実測・製図：岡田）…… 208
第51図　B溝出土遺物実測図（実測・製図：山磨）…… 209
第52図　Ⅱ・Ⅲ区東西土層断面図（実測：橋本，山磨，製図：山磨）…… 211
第53図　Ⅲ区南北土層断面図（実測：橋本，山磨，岡田，製図：山磨）…… 213
第54図　Ⅲ区グリッド土層断面図（実測・製図：岡田）…… 215
第55図　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区グリッド土層断面図（実測：橋本，山磨，岡田，製図：山磨，岡田）…… 217
第56図　Ⅲ区井戸実測図（実測・製図　山磨）…… 225

第57図　Ⅲ区竪穴住居址実測図（実測・製図：山磨）…… 221
第58図　V区C地点実測図（実測・製図：岡田）…… 225
第59図　V区B地点実測図（実測・製図：岡田）…… 227
第60図　V区C地点実測図（実測・製図：岡田）…… 228
第61図　V区C地点鍛冶炉・柱穴実測図（実測・製図：岡田）…… 228
第62図　A地点遺物実測図（実測：製図：岡田）…… 229
第63図　B地点遺物実測図（実測・製図：岡田）…… 230
第64図　美作地方出土の須恵器（実測・製図：岡田）…… 231
第65図　B溝区画配列図（作成・製図：山磨）…… 245

## 表　目　次

第１図　建物規模一覧表 …… 186
第２図　建物寸法表 …… 236
第３図　出土木材一覧表 …… 244

## 図　版　目　次

図版１　宮尾遺跡全景（航空写真）（撮影：アジア航測）
図版２－１　宮尾遺跡全景（手前久米廃寺）(西より)(撮影：橋本)
図版２－２　宮尾遺跡全景（東より)(撮影：橋本)
図版３－１　宮尾遺跡全景（南東より)(撮影：橋本)
図版３－２　宮尾遺跡全景（南西より)(撮影：岡田)
図版４－１　宮尾遺跡全景（南西より)(撮影：橋本)
図版４－２　宮尾遺跡Ⅲ・Ⅳ区全景（南より)(撮影：岡田)
図版５－１　宮尾遺跡Ⅰ・Ⅱ区（航空写真)(撮影：アジア航測)
図版５－２　Ⅱ区，建物１・５付近（航空写真)(撮影・アジア航測)
図版６－１　宮尾遺跡Ⅲ・Ⅳ区（航空写真)(撮影：アジア航測)
図版６－２　宮尾遺跡Ⅲ区（航空写真)(撮影：アジア航測)
図版７－１　Ⅰ区，第１トレンチ，弥生時代中期水路（撮影：井上)
図版７－２　Ⅰ区，第１トレンチ，弥生時代中期水路（撮影：井上)
図版８－１　Ⅰ区，第４トレンチ，弥生時代水路（撮影：橋本)
図版８－２　Ⅱ区，建物１，検出状態（撮影：橋本)
図版９　Ⅰ区出土遺物(1)（撮影：井上，橋本)
図版10　Ⅰ区出土遺物(2)（撮影：井上)
図版11－１　Ⅱ区，建物１検出状況（北より)(撮影：岡田)
図版11－２　Ⅱ区，建物１付近（北より)(撮影：山磨)

図版12　建物１柱穴断面（撮影：橋本）
図版13－１　Ⅱ区　西端建物４付近検出状況（北より)(撮影：山磨)
図版13－２　Ⅱ区　建物４（北より)(撮影：岡田)
図版14－１　Ⅱ区　建物５検出状況（西より)(撮影：山磨)
図版14－２　Ⅱ区　建物６（北より)(撮影：橋本)
図版15－１　Ⅱ区　建物８（南より)(撮影：橋本)
図版15－２　Ⅱ区　建物７（北より)(撮影：橋本)
図版16－１　Ⅱ区　建物６・７付近全景（北西より)(撮影：橋本)
図版16－２　Ⅱ区　A溝，柵（北より)(撮影：山磨)
図版17－１　Ⅱ区　西端溝状遺構（撮影：山磨)
図版17－２　Ⅱ区　西端土壙（撮影：岡田)
図版17－３　Ⅱ区　建物１３（南東より)(撮影：橋本)
図版17－４　Ⅱ区　建物１４（北西より)(撮影：橋本)
図版18－１　Ⅲ区　建物１１付近（西より)(撮影：山磨)
図版18－２　Ⅲ区　全景（西より)(撮影：山磨)
図版19－１　Ⅲ区　建物２・３・１０検出状況（北より)(撮影：橋本)
図版19－２　Ⅲ区　建物２（北より)(撮影：橋本)
図版20－１　Ⅲ区　建物２・３付近（航空写真)(撮影：アジア航測)
図版20－２　Ⅲ区　建物１１（航空写真）（撮影：アジア航測)
図版21－１　Ⅲ区　建物３（西より)(撮影：橋本)
図版21－２　Ⅲ区　建物１１検出状況（東より)(撮影：橋本)
図版22　建物２柱穴（撮影：橋本)
図版23　建物３柱穴（撮影：橋本)
図版24　建物１１断面（撮影：橋本，山磨)
図版25－１　Ⅲ区　建物１５（北より)(撮影：橋本)
図版25－２　Ⅲ区　建物１５南端（西より)(撮影：山磨)
図版26－１　Ⅲ区　井戸状遺構検出状況（北より)(撮影：山磨)
図版26－２　Ⅲ区　井戸状遺構（北より)(撮影：山磨)
図版27－１　Ⅲ区　D溝付近（北西より)(撮影：橋本)
図版27－２　Ⅲ区　B溝断面（北より)(撮影：橋本)
図版27－３　Ⅲ区　D溝断面（東より)(撮影：橋本)
図版28－１　Ⅲ区　A溝および柵列（東より)(撮影：山磨)
図版28－２　Ⅲ区　A溝および柵列・門状遺構（西より)(撮影：山磨)
図版29－１　Ⅲ区　A溝コーナー（東より)(撮影：岡田)
図版29－２　Ⅲ区　A溝コーナー・仕切り掘りの部分（北より)(撮影：岡田)

図版30－1　Ⅲ区　A溝コーナー（北東より）(撮影：岡田)

図版30－2　Ⅲ区　A溝コーナー渡し状腐触材木片（南より）(撮影：岡田)

図版31－1　Ⅲ区　B溝・A溝柵検出状況（西より）(撮影：岡田)

図版31－2　Ⅱ区　A溝発掘状況（北より）（撮影：岡田)

図版32－1　Ⅲ区　A溝上面炭層面・B溝およびA溝柵（西より）(撮影：山磨)

図版32－2　Ⅲ区　A溝・B溝掘り上げ状態およびA溝柵（南西より）(撮影：山磨)

図版33－1　Ⅲ区　A溝断面（A－A′）(北より)(撮影：岡田)

図版33－2　Ⅲ区　A溝断面（B－B′）(北より)(撮影：岡田)

図版34－1　Ⅲ区　A溝断面（C－C′）(西より)(撮影：岡田)

図版34－2　Ⅲ区　A溝断面（D－D′）(東より)(撮影：岡田)

図版35－1　Ⅲ区　A溝・B溝断面・A溝柵（E－E′）(東より)(撮影：岡田)

図版35－2　Ⅲ区　B溝断面（E－E′）(東より)(撮影：岡田)

図版36－1　Ⅲ区　A溝断面・左は整地土断面（F－F′）(西より)(撮影：岡田)

図版36－2　Ⅲ区　B溝断面（F－F′）(西より)(撮影：岡田)

図版37－1　Ⅲ区　A溝・B溝断面（H－H′）(西より）（撮影：岡田)

図版37－2　Ⅲ区　A溝断面（H－H′）(西より)(撮影：岡田)

図版38－1　Ⅲ区　B溝断面（H－H′）(西より)(撮影：岡田)

図版38－2　Ⅲ区　A溝断面（I－I′）(西より)(撮影：山磨)

図版39－1　Ⅲ区　B溝断面（J－J′）(西より)(撮影：山磨)

図版39－2　Ⅲ区　A溝断面（K－K′）(西より)(撮影：山磨)

図版40－1　Ⅲ区　A溝断面（L－L′）(西より)(撮影：山磨)

図版40－2　Ⅲ区　A溝断面（M－M′）(西より)(撮影：山磨)

図版41－1　Ⅲ区　A溝断面（N－N′）(東より)(撮影：山磨)

図版41－2　Ⅱ区　A溝断面（R－R′）(南より)(撮影：岡田)

図版42－1　Ⅲ区　A溝・B溝周辺の検出状況（東より)(撮影：山磨)

図版42－2　Ⅲ区　A溝（S－S′）断面および杭列（北より)(撮影：山磨)

図版43－1　Ⅲ区　EⅤNⅡ南北トレンチA溝（右）B溝（左）柵検出状態
（西より)(撮影：岡田)

図版43－2　Ⅲ区　EⅤNⅡ南北トレンチA溝・B溝（手前）
柵検出状態（南より)(撮影：岡田)

図版44－1　Ⅲ区　北端A溝・柵・溝検出状況（南東より)(撮影：橋本)

図版44－2　Ⅲ区　門址付近（北より)(撮影：橋本)

図版45　A溝柵柱穴断面（撮影：山磨，岡田)

図版46－1　Ⅲ区　EⅤNⅡ南半グリッドB溝検出状態（南より)(撮影：岡田)

図版46－2　Ⅲ区　EⅤNⅡ南半グリッド整地（造成）面（北より)(撮影：岡田)

図版47－1　Ⅲ区　A溝およびB溝西側曲折部分（南東より）(撮影：山磨)

図版47－2　Ⅲ区　B溝西側曲折部より南直線部分（北より）(撮影：橋本)

図版48－1　Ⅱ区　A溝瓦（上層）出土状態（撮影：岡田）

図版48－2　Ⅱ区　A溝須恵器（中層）出土状態（撮影：岡田）

図版48－3　Ⅱ区　A溝須恵器（上層）出土状態（撮影：岡田）

図版48－4　Ⅱ区　A溝土師器（上層）出土状態（撮影：岡田）

図版49－1　Ⅲ区　EⅣNⅡ西端部A溝下層木器出土状態（南より）（撮影：岡田）

図版49－2　Ⅲ区　EⅣNⅡA溝最下層杯身転用硯出土状態（南東より）(撮影：山磨)

図版50－1　Ⅲ区　A溝土師器出土状態（撮影：山磨）

図版50－2　Ⅲ区　A溝上層須恵器出土状態（撮影：橋本）

図版50－3　Ⅳ区　EⅣNⅡ北西コーナーA溝北側凹地土師器出土状態（撮影：岡田）

図版50－4　Ⅲ区　A溝上層須恵器出土状態（撮影：岡田）

図版51－1　Ⅲ区東　A溝上層須恵器出土状態（撮影：岡田）

図版51－2　Ⅲ区　A溝北側谷部造成面円面硯片出土状態（撮影：岡田）

図版52－1　Ⅲ区　B溝中層須恵器出土状態（撮影：岡田）

図版52－2　Ⅲ区　B溝下層須恵器出土状態（撮影：岡田）

図版52－3・4　Ⅲ区C溝上面杯蓋出土状態（撮影：岡田）

図版53－1　Ⅲ区　竪穴住居址検出状況（南西より）(撮影：山磨)

図版53－2　Ⅲ区　土壙（西より）(撮影：山磨)

図版53－3　Ⅲ区　建物２・３・１０重復状況（撮影：山磨）

図版53－4　Ⅲ区　溝状遺構（撮影：岡田）

図版54－1　Ⅳ区　北端土壙検出状況（南東より）(撮影：岡田)

図版54－2　Ⅳ区　建物１２（南より）(撮影：山磨)

図版55－1　Ⅳ区　建物１２発掘状況（東より）(撮影：橋本)

図版55－2　Ⅲ区　B溝検出グリッド発掘状況（北より）(撮影：岡田)

図版56－1　Ⅴ区　A地点全景（左－竪穴・右－溝）(西より)(撮影：岡田)

図版56－2　Ⅴ区　A地点竪穴遺構発掘状況（南西より）(撮影：岡田)

図版57－1　Ⅴ区　A地点竪穴遺構遺物出土状態（撮影：岡田）

図版57－2　Ⅴ区　A地点竪穴遺構及び溝（撮影：岡田）

図版58－1　Ⅴ区　A地点竪穴掘り上げ状態（東より）(撮影：岡田)

図版58－2　Ⅴ区　A地点溝断面（撮影：岡田）

図版59－1　Ⅴ区　A地点竪穴遺溝内須恵器高杯出土状態（撮影：岡田）

図版59－2　Ⅴ区　A地点竪穴遺溝内土師器出土状態（撮影：岡田）

図版60－1　Ⅴ区　B地点全景（南より）(撮影：岡田)

図版60－2　Ⅴ区　B地点掘り上げ状態（南より）(撮影：岡田)

図版61－1　V区　B地点方形ピット（撮影：岡田）

図版61－2　V区　B地点鉄器出土状態（撮影：岡田）

図版62－1　V区　B地点方形ピット掘り上げ状態（北より）(撮影：岡田)

図版62－2　V区　B地点円形ピット（撮影：岡田）

図版63－1　V区　C地点全景（撮影：岡田）

図版63－2　V区　C地点竪穴遺構・溝・柱穴（撮影：岡田）

図版64－1　V区　C地点鍛冶炉断面（撮影：岡田）

図版64－2　V区　C地点柱穴検出状態（撮影：岡田）

図版65　A溝出土遺物（撮影：橋本）

図版66　A・D・C溝・土壙3・出土遺物円面硯（撮影：橋本）

図版67　B溝出土遺物（撮影：橋本）

図版68　建物11の柱根（撮影：橋本）

図版69　建物2・11・A溝柵の柱根（撮影：橋本）

図版70　V区出土遺物（撮影：橋本）

図版71－1　現地説明会（建物12付近)(津山朝日新聞社提供)

図版71－2　現地説明会（建物1付近)(撮影：岡田)

# 第１章　調査の経緯

久米郡久米町宮尾に所在する久米廃寺は昭和４４年２月から中断しながらも，昭和４６年８月まで発掘調査が実施され，白鳳期創建の塔，講堂，金堂を配置した古代寺院であることが，明らかになった。地方における古代寺院として岡山県教委は日本道路公団にその保存を要望し協議を重ねた結果，主要な部分については設計変更し，高架橋で保存する方針がうち出されたが高架橋の長さで話し合いがつかず，久米廃寺の東台地の第一次調査後協議することにした。

久米廃寺の東限は谷の中央部に検出された溝と考えられているが，それより東の部分さらに東にひろがる比高２～３ｍの広い台地上は須恵器布目瓦の散布が知られ，久米廃寺に関連する遺跡の存在が予想されていた。したがって久米寺東遺跡と呼称した。

昭和４６年９月２０日第一次調査を開始した。調査員は天神原遺跡，美作国府跡から１名づつが派遣された。調査対象地域には収穫直前の稲が穂首を垂れていたが，久米町がこれを補償して刈りとって調査を開始した。

谷の部分（Ｉ区）は久米廃寺に関連した遺構は検出できなかったが，弥生時代の水路と考えられる浅い溝が検出された。また縄文時代後期，晩期の土器片も出土した。台地上から大規模な掘立柱建物が検出された。トレンチ調査ではあったが建物Ｉは１２間×２間の南北棟で方形の掘り方であった。これより東約６５ｍに南北棟の建物２を検出した。また浅い谷にあたる部分では造成土がみられ出土遺物から奈良時代の久米郡衙の可能性が考えられた。そこで新たに，字名に因んで宮尾遺跡と改称した。

第一次調査は１１月３０日に終了し，岡山県教委はその結果に基づき日本道路公団に久米廃寺から宮尾遺跡にかけての高架橋による保存を要望した……この間４ヶ月経過……

昭和４７年４月久米廃寺から宮尾遺跡のうちＩ区の谷部分までの１７４ｍの高架橋による保存が決定，宮尾遺跡の主要な台地部分については

① 設計変更して高架橋にしても橋脚が低く保存しても活用できない。

② それ以上高くすることは勾配等で問題がある。

③ 文化庁も宮尾遺跡部分の盛土はやむを得ないという態度である。

ということから調査期間８ヶ月，すなわち１１月末日調査を終了し，明け渡すという行程が調査員に知らされた。さらに落合町赤野遺跡の第二次調査と日南古墳の調査もこの期間内に終了させることであった。

津山市天神原遺跡は５月末日まで延長されており，調査員１名がこれを終了させて６月から宮尾遺跡の調査に合流するという強行軍であった。調査対象面積１万$m^2$で調査期間は悠に１７ヶ月を超す積算が出ていたのだが……。

岡山県教委は日本道路公団に調査期限の延長を強く要望し，１２月末日明け渡しにこぎつけた。４.５月はトレンチによって遺跡の範囲を確実につかむことを目的にトレンチ，グリッドを掘る方法をとった。このことは同時に調査員が約２０Km西にある赤野遺跡の調査のため常時観察できなかったことに起因する方法でもあった。また調査地内を横断する用排水路は確保しなければならず実質的な調査

は進行しなかった。

6月から領家遺跡の西に古墳らしい地形の確認調査を領家遺跡出土の炭化米の水洗も併用して行い宮尾遺跡の調査を本格的に開始したのは7月中旬からであった。

8月上旬にはⅠ区の表土除去を完了し，掘立柱建物5棟，溝2を検出した。ひきつづいて排土の場所を探がす目的で3区の東（ＥⅤＮⅡ）にグリット（6m×6m）トレンチを設定したところ東西に走る溝を検出した（A溝）。この溝はＥⅣＮⅡで鈍角に南に折れることを確認した。

9月1日調査予定の日南古墳がブルドーザーによって破壊されていることを発見した。8月17日道路公団，鉄建建設，県教委の立ち合いで綱張りをしていたにもかかわらず……ただちに道路公団，業者に抗議を申し入れ業者は陳謝して，有刺鉄線をめぐらし立入禁止の立札をたてた。

9月からは3区（ＥⅡＳⅠ付近）の表土除去を開始しＥⅣＮⅠに排土した。

9月12日瀬戸警察署より調査事務所に収納していた久米廃寺などの出土品の窃盗犯人を逮捕したので盗品リストを出すよう連絡があった。久米廃寺出土の軒平瓦1，軒丸瓦1，塑造仏片などが盗難にあっていることが明らかになった。

8月15日に物色した状態があったので駐在所に届出ていた。収蔵施設のない現状では危険いっぱいである。

10月中旬までにⅢ区はほぼ表土除去をおえ建物2，10，11，溝C，Dを検出した。

11月，ＥⅧＮⅢで建物12検出，3間×4間ですべて束柱をもち倉庫と考えられた。

11月19日，調査事務所裏でブルドーザーが表土を除去し始めた。当地域は須恵器等を表採しており，住居址らしい掘り込みと，多数の須恵器，土師器が出土した。直ちに工事の中止を申し入れ，縄張りをして日本道路公団・鉄建建設・県教委は協議した……その結果……日南遺跡については11月末日を期限とし，この地点（Ⅴ区）は宮尾遺跡の1部分と考え，1月末日を明け渡し期限とするということになった。11月末Ⅱ区はすべて完了，日南遺跡の調査も完了した。

12月9日，宮尾遺跡の現地説明会を実施し100数十名の見学者があった。A溝は西へのびて用地外に出る。B溝は南北部分は東へ曲がることが明らかになり，建物2・建物11をめぐることが予想された。またA溝に平行して柵が存在することも明らかになった。

建物3を検出，井戸の調査完了。12月20日，宮尾遺跡はきわめて計画的に造営され，官衙的な遺跡の可能性が強くなり，奈良国立文化財研究所，沢村仁先生，町田章先生を招いて指導を願った。

この頃から宮尾遺跡の航空測量が計画されはじめた。調査員の中で意見のちがいがあったが，1月上旬実施の方向で準備をすすめることになった。そして雪のため1日延期された1月11日中国縦貫道関係の発掘調査では始めて，ヘリコプターによる航空写真撮影が行れた。1月末日の期限はあわただしい。調査はⅢ区とA溝の調査のみである。D溝の南に柵，建物16が存在し建物群は用地外にひろがることが明らかである。A溝は柵と平行して西へのび用地外へ出る。用地外の用水路で確認した結果，Ⅱ区の南北溝につながることがわかった。A溝は南にやや広がったコ字形をなすこと，内側には柵が平行しており部分的に建てかえられていること。北辺の中央やや西よりで溝が途切れる部分があり，門が存在することなどが明らかになった。

ついに調査期限の1月31日が来た。調査もほとんど終了し，補足調査のみが残っている。2月6日

から撤収作業が開始された。そして２月８日すべての作業が終了し，調査員は英田郡作東町の高本遺跡の調査にひきつづき入った。なお，建物１５付近の排土を除去したという知らせをうけて３月１７日から３月２０日まで調査した。

第一次調査以来，奈良国立文化財研究所，沢村仁先生，町田章生先，横田拓実先生，文化庁，田中琢先生，鉱滓については和鋼記念館，住田正男先生，対策委員の先生方にはご指導，ご助言を賜わった。記して謝意を表したい。また，深いご理解を示して下さった地元久米町の方々特に久米町教育委員会，文化財保護委員会，第一次調査以後作業にたずさわった地元の方々の氏名を記して謝意を表したい。

青瀬解逸・青瀬只四・安藤侍郎・安藤克己・池田竹夫・池田　登・池田　恵・飛山照一・野条克己野条志一・広島海三・真名子栄一・山崎武四郎・赤木美興志・池田峰子・池田糸代・池田富子・池田啓子　池田　末・池田節子・石賀芳子・岩野勢津子・太田すみ子・尾埒知津子・岸川藤子・小林清子高下弘代・徳本糸子・野条とし子・野条静枝・早瀬幸子・灰原保子・灰原泰子・灰原輝代子・藤森多喜恵・真名子育世・三船安江・三船春江・山田艶子・山本　訓・故池田子市（敬称略　アイウエオ順）

なお，アジア航測株式会社には航空測量に多大な協力を得たし，担当の斉藤洋彦氏には整図，写真でご迷惑をかけた，衷心より感謝したい。　（橋　本）

## 第一次調査　日　誌　抄

昭和４６年９月２０日　宮尾遺跡（久米東遺跡）第一次調査開始。調査区域には収穫まぢかの稲が穂を垂れているが刈り取る。テント設営，谷の中央の用水路は条里制地割を残すと考え，これを南北の基準線とし２ｍのトレンチを７ｍ間隔に５本設定した。

９月２１日　第１トレンチ掘り下げ開始。津山教育事務所，平井次長，森本社教課長，来訪，対策委員会。

９月２２日～２８日　第１トレンチ掘り下げ，地表下1.５ｍ以下は青色粘土，砂礫層であることがわかった。

９月２９日～１０月２日　第１トレンチでは奈良時代の遺構面なし，第３トレンチ掘り下げ。

１０月５日～１０月１０日　第３トレンチ２０ｍ付近で弥生式土器出土，青灰色砂礫層から縄文式土器出土。３５ｍ付近で弥生時代の溝検出，第４トレンチ掘り下げ，３０ｍ付近で溝検出。

１０月１１日～１０月２０日　第４トレンチ２５ｍ付近で杭列検出。溝から高坏など出土。杭列は溝の土留め用の杭の可能性がある。写真撮影。第２トレンチ最下層の砂礫層から縄文時代後期～晩期の土器出土。第３，第４トレンチ壁面実測。

１０月２１日～１０月２４日　農繁期になり作業員０

１０月２５日～１１月５日　台地上にトレンチ設定北より$D_1$～$D_5$とする。$D_1$トレンチで１辺６５cmの掘り方検出，$D_2$トレンチ６０ｍ付近柱穴溝検出，岡山大学，笠原安夫教授，土壌サンプル採取。

11月9日～11月15日　$D_1$ $D_2$ $D_3$ に溝検出，奈文研町田，横田枝官来訪。

11月16日～19日　台地上トレンチ平板測量，$D_4$ $D_5$ 掘り下げ，$D_6$ 1辺1m以上の掘り方検出。2間×5間以上の南北棟検出。

11月20日～23日　建物検出，2間×12間の南北棟，円面硯破片出土，高橋主査，大山主任見学，柳瀬，下沢応援

11月25日　建物Iとし平板測量，建物Iより65m東に建物検出（建物2）

11月26日　建物2，2間×3間以上の南北棟と思われる，平板測量，津山教育事務所長来訪。

11月27日　対策委員会見学

11月28日　範囲確認のため東へ二本のトレンチ設定，掘り下げ，建物1の掘り方半掘，ぬきとり痕，東のトレンチには造成土，検出，奈良時代の須恵器他出土　　（橋　本）

## 第二次調査　日　誌　抄

昭和47年4月1日～4月8日　領家遺跡の器材，休憩小屋の解体，器材運搬作業。

4月1日～6月10日　この間，落合町赤野遺跡の調査と掛持ちして行う。

4月9日～4月19日　宮尾遺跡に器材，休憩小屋の建設，器材運搬作業ほぼ終了

4月20日　ベルコン移動，日南古墳群付近踏査

4月21日～4月26日　西端部（Ⅱ区）の表土除去。比較的大きな柱穴を確認。

5月2日～5月4日　西端部（Ⅱ区）の検出作業。Ⅳ区トレンチ掘り下げ。

5月8日～5月16日　Ⅱ区西端の遺構検出，Ⅳ区トレンチ掘り下げ，台地上に18m基本グリッド杭打ち。

5月17日～5月27日　水田の畦畔と用水路の補強作業，Ⅳ区トレンチ掘り下げ。

5月30日～6月2日　領家遺跡より炭化米混入土の運搬。

6月6日～6月17日　炭化米混入土の処理作業。

6月18日～6月22日　領家遺跡西方の古墳3基の調査に着手トレンチ掘り下げの結果，2基とも古墳とは認められず終了

6月26日～7月14日　遺物整理期間。

7月20日～7月25日　西端のWⅤSⅠ～SⅡ建物4，検出，周辺写真撮影，WⅣNⅠ・WⅡNⅠ付近で建物5を検出，WⅢ・Ⅳ南半表土除去作業。

7月26日～7月27日　西端のWⅣ・Ⅲ・SⅢ付近にて建物6・7・8及び，南北溝を検出・写真撮影，建物4，柱穴掘り下げ。

7月28日～7月31日　建物1，周辺表土除去作業，建物4，プラン実測。

8月1日～8月2日　建物1，柱穴検出・WⅡSⅠ，表土除去作業，建物4を含むⅡ区西端部の平板実測。

8月3日～8月5日　Ⅱ・Ⅲ区の間の谷部のWⅠSⅡ・EⅠSⅠ～SⅡにトレンチ・グリッドの設定，掘り下げ，WⅠSⅡに3mグリド2箇所設定，西側は出水のため弥生包土上面で放棄，

9月5日　EⅣNⅡ，東西溝，東確認，トレンチ部分清掃，柱穴2確認，南側拡張，表土除去中，EⅣNⅠ東西トレンチ№2掘り下げ清掃，写真終了，地山面遺構なし，東西トレンチ№3表土除去中，EⅡSⅠ，EⅢSⅠ NⅠ（建物2，周辺），表土除去中，日南古墳にてシストらしき遺構確認，EⅥNⅡ－1.4掘り下げ，柱穴検出作業→遺物取り上げ，EⅣNⅠ№3トレンチ表土除去，遺構検出中，EⅢSⅠ表土除去。

9月7日　EⅥNⅡ－4，東西土層断面図，S＝ $\frac{1}{20}$

9月8日　降雨のため，作業は10時まで，後室内にて土器洗い，国府緑釉，整理，赤野土器註記。

9月9日～12日　トレンチ水抜き，EⅢNⅠ表土除去，EⅥNⅡ 1.4，溝検出状況清掃，建物3周辺拡張，遺構のないところは地山面のレベルをとる。遺物点検，盗品リストをつくる。

9月13日　EⅥNⅡ大型写真，木片出土状態溝上層より，フタ坏完形品出土，瓦片完形片出土，建物3周辺（東部分），柱穴検出（地山ほりこみ，地山土が入っている。EⅢNⅠ～EⅢSⅠ東側南北断面実測。

9月14日～9月17日　降雨のため室内作業，トレンチ水抜き。

9月18日　係会議（宮尾にて）

9月19日　EⅢNⅠ表土除去，平安中期（糸切り，瓦器撹乱されている）。領家土器洗い。

9月20日　EⅢNⅠ表土除去，EⅢ（原点の東西線）東西断面実測S＝ $\frac{1}{20}$ 赤野土器注記，新聞切り抜き。

9月21日　EⅢNⅠ写真撮影終了，遺構の検出，EⅥNⅡ－4溝東西セクション実測，写真済み，EⅤNⅡ－1南北セクション発掘開始（溝を含む），EⅥNⅡ溝，遺物取り上げ終了。

9月22日　EⅥNⅡ－4溝東西土手分層発掘（上中下層）終了，EⅥNⅡ－4溝南端部，セクション終了（黒色土初見），EⅤNⅡ－1（溝を含む南北断面及び，プラン終了），以上写真終了，遺物全部取り上げ済み。

9月23日　久米廃寺遺物搬出→旧格致中学校体育館跡に，EⅥNⅡ溝を含む。東西セクション実測済み，EⅤNⅡ溝を含む，南北セクション実測済み，S＝ $\frac{1}{20}$，EⅤNⅡ－1平板見通しポイント設定，EⅥNⅡ－1WSグリッドポイント（平板）

9月26日　EⅢNⅠ西側南北土層断面図，EⅢNⅠ北側東西断面図，EⅥNⅡ区－溝断面写真撮影（全部終了）。

9月27日　EⅥNⅡ～EⅤNⅡ平板実測（S＝ $\frac{1}{500}$）東半分終了，EⅥNⅠトレンチ設定（溝の南端を押えるため黒色土上面まで終了），柱穴断面設定，EⅢSⅠ柱穴検出中，建物10とする現在2間×5間1回の建直し確認，建物8割り付け，実測開始。

9月28日　EⅥNⅠ溝，検出，木片多し，EⅥNⅡ平板（柱穴，グリッド設定ポイント），柱穴全部，掘り上げ，EⅢSⅠ柱穴検出中，EⅢNⅡ表土掘り下げ中，建物8，実測。

9月29日　EⅥNⅡ区，EⅤNⅡ区溝全部，清掃，柱穴ほり上げ。

9月30日　EⅥNⅡ溝全景（掘り上げ）写真終了，EⅥNⅠ溝続き検出，トレンチ，EⅢNⅠ溝続き検出，トレンチ，EⅢNⅠ建物10柱穴検出，EⅢNⅡ表土除去，EⅢSⅠ西の南北断面実測。

１０月２日　連絡会議，博物館。

１０月３日　ＥⅥＮⅡ溝に関する写真すべて終了，ＡＭ，溝平板（Ｓ＝ $\frac{1}{500}$ ）ＰＭ，東の新設トレンチ延長，ＥⅥＮⅠトレンチ終了。

１０月４日　ＥⅤＳⅢ発掘，ＥⅥＮⅡ溝のプランレベリング全部終了。

１０月５日　ＥⅥＮⅠトレンチ西側をセクションのため削る，ＥⅤＮⅢ除土，柱穴，検出，ＥⅢＮⅠ・Ⅱ遺物全部取り上げ，ＥⅢＮⅡ遺物は東西溝，北と南に分ける，ＥⅢＮⅡ溝南側削り，検出作業。

１０月６日　ＥⅤＮⅢ～ＥⅥＮⅢ発掘を進める（円面硯片出土）東西セクションを設定，柱穴，合計６本，ＥⅤＮⅡ整地面の状況セクションレベルポイント設定，ＥⅥＮⅠ～ＥⅧＮⅡの状況の平板測量 $\frac{1}{100}$，ＥⅢＮⅡ遺構検出，中央部，東西に溝あり，この溝はＥⅤＮⅡより続くものであろう。建物１１の東追求，ＥⅢＳⅠ－建物１０の西追求，１８時より調査員会議。

１０月７日　ＥⅤＮⅢ掘り下げ中，ＥⅧＮⅡトレンチセクション実測終了，図面グリッド線誤差修正，ＥⅢＳⅠ建物１０の西端確認（柱穴確認）２間×８間，ＥⅢＮⅡ建物１１東側柱穴検出中，現在２間×８間，ＥⅢＮⅡ東西溝，検出状態写真，溝周辺赤外線写真。

１０月１１日　ＥⅢＮⅠ建物２検出，ＥⅤＮⅡ建物１１東追求，ＥⅥＮⅢ柱穴検出。

１０月１２日　ＥⅥＮⅢ柱穴群－写真撮影，北半分遺構検出，ＥⅡＮⅠ南側東西セクション実測，西へ１０*cm*まで，建物２全面検出－南の用地へのびる。現在２間×６間，ＥⅣＮⅠ－建物１１，東へ追求，２間×１０間，写真のためにパイプヤグラ移転，４段づみ，遺構の $\frac{1}{500}$ 記入。

１０月１３日　建物２，南へ追求，７間以上の可能性あり，写真撮影，建物１１，写真撮影，ＥⅢＮⅡ溝の南側，遺構検出，ＥⅣＮⅠ～Ⅱ南北トレンチ清掃，ＥⅥＮⅢ遺構検出，須恵器土師器片多し。

１０月１４日　ＥⅣＮⅠ～Ⅱの南北トレンチ壁面清掃，溝，検出，ＥⅥＮⅢ遺構検出，一部トレンチ。

１０月１６日　南北トレンチプラン清掃，溝，検出，土器片多量検出，瓦片青海波文残存。

１０月１７日　ＥⅣＮⅡ，南北トレンチ，溝検出清掃柱が残存している柱穴，半断掘り下げ，写真済み，溝二条，掘り上げ開始。

１０月１８日　ＥⅣＮⅢ区斜面，北側遺物所見，土師器（煮沸用具）片が多い。７世紀代の須恵器が多い（口縁部に特徴をもつ須恵器（杯）あり，南北トレンチの二条の溝を掘り下げた所見，①北側の溝は従来の東西溝と考えられる。鉄滓，土師器，木片を出土している(鉄滓とは別に軽石状になったものが出土している）木片はいずれも板状でなく，加工痕も認められない。北側の肩は黒褐色土を切って地山まで遠し，検出し易いか南側の肩の下部の形状はつかみにくい。②南側の溝は浅い溝でＥⅣ区南グリッドで検出した黄色土ブロックおちこみの溝につらなるものと考えられる。マンガンが多い，暗褐色土が底面になっている。今のところ肩の部分は灰褐色土マンガンを含む，暗灰褐土（底面）となっている。遺物は須恵器片の７世紀のものがある。

東側で弥生包土下層まで掘り下げ土層断面写真実測ＥＩＳＩ～ＳⅡに２×６ｍトレンチ掘り下げ，地山混入の整地面確認，宮尾遺跡月報創刊号作成。

８月８日～８月１１日　ＷⅡＳＩの表土除去作業，遺構検出，全景写真。

８月１６日　ＥⅤＮＩトレンチ及びグリッド設定，掘り下げ中。領家遺跡遺物運搬。遺物棚作成，建物６～８の周辺のグリッド割り付け。

８月１７日　ＥⅤＮＩグリッドトレンチ（南北），３か所，遺構面まで清掃，西の２か所のトレンチでは造成面らしきもの及び柱穴らしきもの検出。一番東側のトレンチでは造成面は確認できず，遺構もなし，弥生包含層上面まで掘り下げ清掃。ＥⅤＮⅡ，東西トレンチ巾２ｍ，長さ１２ｍ表土除去中。

８月１８日　ＥⅤＮⅡ北トレンチ掘り下げ中　国府本器処理。

８月１９日　ＥⅤＮⅡ（東西トレンチ），地山が南傾斜し南に谷があると思われる。ＥⅤＮⅡ中央部に６ｍ×６ｍグリッド設定，南北トレンチ，北半分の地山が検出され南に傾斜している。

８月２１日　係　会　議

８月２２日　ＥⅤＮⅡグリッド掘り下げ中。ＥⅤＮⅡ南北トレンチ北部分掘り下げ中。

８月２５日　ＥⅤＮⅡ北グリッド（６ｍ×６ｍ）。ＥⅤＮⅡ南グリッド。黄色土まぢり茶褐色上面まで掘り下げ，東部分は落ち込むらしく，暗灰褐色土が続いている。（実測）平板（$\frac{1}{100}$）第一次調査，本調査設定トレンチ，グリッドを入れる。ＥⅤＮＩ－３の蛇行溝を記入。ＥⅤＮⅡ－３の柱穴東西溝の一部。

８月２６日　ＥⅤＮⅡ北グリッド西南北セクション清掃。写真撮影，実測完了。

８月２８日　ＥⅤＮⅡ北グリッド内溝検出，南北トレンチ断面清掃，掘り下げ（東半分），南グリッド北壁掘り下げ，ＷⅡＮＩ表土除去。

８月２９日　ＥⅤＮⅡ南グリッドのプラン，溝状遺構の写真撮影，北側，東西の壁の写真，実測，ＥⅤＮⅡ北グリッド，溝掘り下げ，ＥⅤＮⅡ南北トレンチ，東側の南北壁写真，実測，ＥⅤＮＩ－３，蛇行溝状遺構，掘り上げ状態写真，ＥⅣＮⅡ南北トレンチ清掃開始，ＷⅡＮＩ表土除去，東側南北トレンチ設定，黒褐色土まで掘り下げて保留。

８月３０日　ＥⅤＮⅡ北グリッド，溝掘り上げ清掃，写真撮影，ＥⅣＮⅡ南北トレンチ清掃，ＥⅣＮＩ部分は地山黄色粘土層，遺構なし。ＥⅣＮⅡ部分は厚さ１０数cmの造成面，ＥⅤＮⅡ南グリッド西，南壁清掃，ＥⅥＮⅡ溝追求トレンチ５ｍ×３ｍ。

９月１日　建物３付近の表土除去，ＥⅡＳＩ表土除去，ＥⅣＮＩ３×１５ｍのトレンチ３本，２ｍ間隔，ＥⅣＮＩ南北トレンチ，西半分掘り下げ，ＥⅥＮⅡ溝追求，トレンチ拡張，ＥⅤＮⅡ北グリッド溝，写真撮影。

９月２日　ＥⅣＮＩ・Ⅱ南北トレンチ西半分掘り下げ，（造成面まで）。ＥⅣＮＩ第一トレンチ掘り上げ，遺構なし，第二トレンチ，第三トレンチ設定，$\frac{1}{100}$　平面実測。ＥⅡＳＩ建物２付近の表土除去，ＥⅢＳＩ表土除去，ＥⅥＮⅡ溝追求トレンチ拡張，部分掘り上げ，溝は浅くなり消滅，柱穴径６０cm位３検出，ＥⅤＮⅡ南グリッド南壁断面実測。

９月４日　係会議，上東遺跡，川入遺跡見学，会議，日南古墳群について協議。

＜ ま と め ＞

以上２つの溝の提起する問題は，宮尾遺跡の企画性の推移と時期の前係関係を把握するということである。北側の溝の全容はほぼつかめかけているが，ＥⅣ区の地状を成した，区切りの意味はつかめていない。従来の溝として，扱われていた遺構が単なる排水，防御区画といったものに限定されていたのに比べると，ここの遺構を囲繞する溝はもっと他の性格を帯びているようである。

１０月１９日～２１日　室内で遺物整理。

１０月２３日　ＷⅢ・ＳⅡⅢ建物６清掃，写真撮影，建物７，９清掃。

１０月２４日　ＷⅢＳⅢ建物７清掃，写真撮影，ＥⅢ南北トレンチ，溝，掘り下げ中。

１０月２５日　ＷⅢＳⅡⅢ建物６，全景写真，南から水糸はり，ＷⅣＳⅡⅢ建物８，全景写真，南と北から清掃，建物４の部分の用水の除去，ＥⅣＮⅡ南北トレンチ溝掘り上げ，写真撮影。

１０月２６日　ＷⅢＳⅡⅢ建物１南側，ＷⅡＳⅡⅢ旧建物９周辺。

１０月２７日　ＷⅢＳⅢ建物７実測，建物４実測補足終了，写真撮影準備，ＷⅢ・ＳⅡ・Ⅲ，ＷⅡＳⅡ・Ⅲ建物９周辺実測，柱穴列断面，ＥⅢ・ＮⅡ北東隅６×６トレンチ掘り上げ中，ＥⅣ・ＮⅡ溝の部分６×６グリッド設定，ＥⅤ，ＮⅢトレンチ設定。

１０月２８日　建物６平面実測，建物９周辺レベリング遺物取り上げ，蛇行溝，断面実測，小溝，断面実測，建物４補足調査，南と北から写真撮影完了。

１０月２９日　建物７断面実測，建物５西端土手はずし，遺構検出，南北トレンチ遺物検出４×５写真，土器洗い。

１０月３１日　建物６周辺プラン補足レベリング遺物取り上げをもち南半分全て終了，ＥⅢＮⅡ北東端６×６トレンチ掘り下げ中

１１月１日　狩猟解禁，第２トレンチ遺構検出中，ＥⅢＮⅡ北東端６×６グリッド清掃，円面硯破片出土，南壁実測，南北トレンチ溝割り付け。

１１月２日　ＥⅤⅢＮⅢ第２トレンチ遺構検出建物１２とする。写真，小型。

１１月３日　土器洗い，領家，宮尾の遺物，図面整理

１１月４日　ＥⅧＮⅢ第２トレンチ遺構検出のため，拡張。

１１月５日　ＥⅧＮⅢ建物１２遺構検出のため掘り上げ中，柱穴一段掘り下げ，３間×４間と見られる。

１１月６日　ＥⅧＮⅢ建物１２遺構検出，柱穴１段掘り下げ，北側トレンチ（２×５$m$）設定，西側グリッド（３×４$m$）掘り上げ。

１１月７日　ＥⅧＮⅢ建物１２北端の柱穴，確認検出，４分法で柱穴を掘り下げ，建物１２の北側，東西トレンチの掘り下げ（地山面まで），柱穴１，確認（深さ約５０～８０$cm$）建物12の西側トレンチ，地山まで掘り下げ中，建物１１の北端の周辺，グリッド及びトレンチ水替え。

１１月８日　ＥⅧＮⅢ建物１・２，柱穴掘り下げ割付中，平面プラン$\frac{1}{4}$終了，ＥⅣＮⅡプラン実測（南北トレンチ）国府まげもの洗い，国府土器洗い。

１１月９日　ＥⅧＮⅢ建物１２，柱穴掘り下げ完了，プラン完了，建物１遺構検出，ＥⅣＮⅡ南北トレンチ，平面プラン終了，遺物取り上げ。

１１月１０日　ＷⅢ～ＷⅡＮＩＳＩ建物１テントはり，ＥⅧＮⅢ建物１２，柱穴の水かえ，レベリング設定，遺物取り上げ。

１１月１１日　建物１遺構検出状態，全景写真北より，建物２全景写真，断面実測。

１１月１２日　建物１北溝掘上げ終了，建物１の東の小規模建物を２棟検出，南１棟は掘り下げ写真撮影済み，建物１２レベル設定，断面実測中。

１１月１４日　ＶⅢ，ＳＩ，南北溝，$\frac{3}{4}$掘り上げ終了，ＷⅢ，ＳＩ，平板 $\frac{1}{100}$，建物Ⅰ，割り付けの為の柱根確認，南北溝，遺物出土状態のポイントを平板に入れる。ＥⅢＮⅡ－２，グリッド，掘り下げ，建物１２，断面，実測完了，柱穴写真，全景写真。

１１月１５日　ＷⅢ，ＳＩ，南北溝，遺物出土状態写真，ＷⅢ，ＳＩ，南北溝，掘り上げ終了，建物Ⅰ，断面設定，柱穴掘り下げ開始，ＥⅣＮⅡ－１，掘り下げ中。

１１月１６日　建物Ⅰ，柱穴掘り下げ中，ＥⅣＮⅡ－１，掘り下げ中。

１１月１７日　建物Ⅰ，柱穴掘り下げ中，柱穴写真撮影中，ＥⅣＮⅡ－１グリッド掘り下げ中。

１１月１８日　建物Ⅰ，柱穴掘り下げ，平板（$\frac{1}{100}$）実測中，建物，１３，１４，柱穴掘り下げ完了，南北溝，段のきわをボーリング，建物１０北水かえ，ＥⅣＮⅡ－４，グリッド掘り下げ中，ＥⅢＮⅡ－６，黒色包土まで掘り下げ完了。

１１月１９日　建物Ⅰ，南北に遣り作成，建物５，検出，ＥⅣ，ＮⅡ，グリッド，野辺遺跡，遺構検出。

１１月２０日　建物１，建物５，清掃，遺構検出状態，全景写真，柱穴掘り下げ，野辺遺跡，遺構検出中。

１１月２２日　Ｂ，溝，掘り上げ，野辺遺跡，全面表土はぎ，日南古墳，トレンチ掘り。

１１月２３日　建物５，断面実測完了，ＥⅡＮＩ，表土除去中，石組，遺構検出，ＥⅢＮＩ，東西溝掘り上げ，１号住居，Ｂ溝掘り下げ，日南古墳　。

１１月２４日　建物５，実測中（柱穴）遺物取り上げ，ＥⅡＮＩ，表土除去中，スライド整理，新聞切り抜き。

１１月２５日～１１月２８日　建物１，５の実測，ＥⅡＮＩ表土除去，井戸状の石垣検出。

１１月２９日～１２月２日　東西の基線に沿う中央トレンチを設定。掘り下げ，巾３ｍ。日南遺跡の調査完了。

１２月５日～１２月８日　東西トレンチ土層断面の実測。造成土を切った柱穴を断面に検出。建物３の西側束柱）。ＥⅡＳＩの表土除去，Ｂ溝は南へのび，これを切る，東西溝（Ｄ溝）検出。ＥⅡＮＩ，井戸の掘り下げ，青灰色粘土から杭，板検出。ＥⅣＮⅡ，表土除去。

１２月９日　午後から宮尾遺跡現地説明会を催す。資料を作成配布，１５０数名が見学。

１２月１０日～１２月１３日　井戸の調査完了。ＥＩＮＩ・ＮⅡ，表土除去，Ａ溝は西へのびて用地外に出る。Ｂ溝は井戸の西をかすめ，ＥⅡＮⅡから東に折れることを確認した。

１２月１４日～１２月１７日　ＥⅡＮＩ，表土除去，建物３を検出，ＥＩＮＩの南を表土除去。建物

3の西半部検出。EⅡNⅡ，A溝検出。B溝は方向を東に向けて，A溝の南に平行している。したがってB溝で区画された地域に建物２，建物１１が柵でつながり，建物２に平行する建物が東に存在することが予想される。

１２月１８日～１２月２２日　建物１０の柱穴掘り下げ完了，建物２，３を検出完了し，写真撮影。建物１１の柱穴掘り下げ，C溝は東西にのび建物３より新しい。D溝の掘り下げ。南側の建物検出始める。

１２月２３日～１２月２７日　建物２に平行する建物が，EⅣNⅠ～EⅤNⅠに存在すると考え，用地巾杭に沿って巾２ｍのトレンチを設定した。EⅣNⅠのグリッドは排土の場所としており，３ｍ近く排土を盛っていたため，トレンチによる以外には方法がなかった。柱穴３を検出し，建物１５とした。建物１１の柱穴掘り下げと断面実測。

１２月２８日～１２月３０日　公官庁御用納めであるが，１月上旬航空測量の実施が計画されており調査を継続した。建物１１の柱穴断面実測，建物１５平板実測，柱穴掘り下げ，３０日器材を整理し，御用納めとした。

昭和４８年１月５日～９日　D溝の掘り下げ，A溝の検出。

１月１０日　積雪１０cmのため航空測量明日に延期。

１月１１日　航空測量実施。

１月１２日～１月１６日　建物２，柱穴掘り下げ，建物１０実測，EⅡSⅠ，E溝掘り下げ，建物１６掘り下げ。

１月１７日～１月１９日　建物２・３，掘り下げ完了，B溝掘り下げ，建物１１，柱穴掘り下げ。

１月２０日～１月２５日　建物１実測完了，B溝掘り下げを終了し清掃，全景写真撮影，A溝柵の柱穴掘り下げ，A溝の掘り下げ。

１月２６日～１月２８日　EⅡNⅠ・EⅡSⅠレベリング完了，建物２，全景写真，柱穴，EⅡNⅡ，A溝掘り下げ中，EⅠNⅠ～Ⅱ，門と思われるところ表土除去。

１月２９日　建物３，平板実測$\frac{1}{20}$，建物２，断面実測ほぼ完了，A溝掘り下げ中，WⅠNⅡ，A溝掘り下げ，EⅡNⅡ，EⅢNⅡ，A溝掘り下げ，EⅢNⅡ，E溝（B溝）掘り下げ，EⅠNⅡ，A溝柱穴列掘り下げ。

１月３０日　建物３，平板実測$\frac{1}{20}$終了，建物３，断面実測中，建物２，柱穴断面，補足，終了，EⅡNⅡ，A溝（東）下層掘り下げ中，須恵出土，EⅢNⅡ，A溝掘り下げ中，EⅢNⅡ，E溝（B溝）西半分，整地土除去後，下層掘り下げ中，高杯２点出土，WⅠNⅡ，A溝中層まで掘り下げ中，EⅠNⅠ，A溝柱穴列とその周辺の柱穴掘り下げ中，EⅠNⅡ，A溝断面２本実測ほぼ終了。

１月３１日　建物３，断面実測完了$\frac{1}{20}$，EⅤNⅢ，井戸状遺構平板実測$\frac{1}{50}$，EⅠNⅡ，EⅡNⅡ，A溝平板実測$\frac{1}{20}$，EⅠNⅡ，A溝断面実測。

２月１日　EⅡNⅡ，A溝断面，写真，EⅡNⅡ，B溝断面２本残りあと１本，断面（EⅡSⅠ），EⅠNⅡ，EⅡNⅡ，A溝平板実測，WⅠNⅡ，A溝柱穴列（柵列）トレンチ拡張，EⅠNⅠ～Ⅱ，柱穴掘り下げ（門の付近），建物３，写真撮影完了，断面実測，A溝は西

へのび南北溝とつながるかどうか？建物Ⅰの北の現在の水路でA溝を確認する。ＥＩＮⅠ～ⅡでA溝が途切れる部分に門があるかどうか，現在3間1戸ぐらいの門か想定できそう。ＥⅡＳⅠでD溝が途切れる部分がある一通路？，D溝と建物3は同時期か，D溝の南側に柵列がある。D溝と建物１６は同時期か，D溝とA溝の時期差は？，A溝の南側の柵列は部分的に建て替えがあるらしい。ＷＩＮⅠは円形掘り方の建物群が存在する。建物2の柱根は残っているが建物３，１０，C・D溝の掘り下げ時にぬきとられたと思われる。C溝は西へのび建物1束柱を切る溝とつながるか，建物４・５と４に対応する，南北棟があるか？，ＥⅣＮⅡのE溝は掘り下げ以前の造成土を切っている。

2月2日　ＥⅠＮⅡ，ＥⅡＮⅡ，A溝平板実測$\frac{1}{20}$終了，ＥⅡＮⅡ，B溝コーナー断面写真実測，ＥⅢＮⅡ，B溝掘り下げ，清掃中，写真撮影，柱穴列，掘り下げ中，建物1の北，用地外，A溝の直進部分の溝さらえ，A溝は南北溝とつながる。

2月3日　ＥⅢＮⅠ，B溝，断面実測，ＷⅡＮⅠ，南北溝断面実測，ＷⅠ～ＥⅢまでの柱穴列，柱穴写真，ＷⅡＮⅠ，北端，清掃中，ＷⅡＮⅠ，C溝の延長部分と思われる溝掘り下げ中，ＥⅠＥⅡ～ＮⅠ，C溝周辺レベリング，ＥⅡＮⅡ，A溝レベリング，ＥⅠＮⅡ，門と思われる部分柱穴再度検出中，平板実測，ＥⅣＮⅡ，B溝，A溝掘り下げ中，写真撮影。

2月4日　ＥⅢＮⅡ，A溝，東から掘り下げ（下層），ＥⅣＮⅡ，B溝，A溝掘り下げ，ＷⅠ～ＥⅠ，柵列実測，B溝断面（ＥＩＳⅠ），ＷⅡＮⅠ，東西溝掘り上げ，糸切り底の須恵器を含む，褐色土層が溝を被っている。建物１３・１４も褐色土層より下からの掘り込みである。ＷⅢＮⅠ，南北溝断面実測，ＥⅢＮⅡ，A溝，B溝断面写真撮影，南北溝に伴う。柵列を確認。

2月5日　ＥⅢＮⅡ，平板，A溝B溝，柵列断面，ＷＩＮⅠ，A溝柵列断面，ＥⅢＮⅡ，土壙№－1レベリング，ＥⅡＮⅠ，C溝レベリング，西端よりA溝全景写真，ＷⅡＮⅠ，C溝と思われる溝の平均$\frac{1}{20}$グリッド杭打ち。

2月6日　ＷＩＮⅠ～ＷⅡＮⅡ，レベリング，ＥⅠＮⅡ・ＥⅡＮⅡ・ＥⅢＮⅡ，レベリング，ＥⅢＮⅡ・ＥⅣＮⅡ，平板実測$\frac{1}{20}$，A溝全景写真，西から，A溝，B溝共通断面２本，実測，全体の遺物取り上げ，B溝北西コーナー写真，建物１１，西，柱穴列，レベリング，柵列柱の取り上げ。

2月7日　遺物運搬，発掘用具，ベルコン運搬。

2月8日　撤去作業，器材，休憩小屋，取りこわし作業。

（橋本・山磨・岡田）

# 第2章　遺跡の地理的歴史的環境

行政的には久米郡久米町宮尾に属し津山盆地の西部に位置する。津山盆地の西部は主流吉井川に加々美川・久米川が合流して古川から院庄にかけて広い沖積低地を出現させている。

津山盆地を特徴づける第三紀層よりなる低丘陵は妙見山（標高５６７ｍ）から南東にのびる領家丘（仮称）をもって西限となっている。領家丘陵は標高175ｍを最高部とし，北側は変成岩よりなり，南側は主に第三紀層（中新統）となっている。領家付近には，変成岩がみられる。領家丘陵の南を東流する久米川は全長約１２Kmの河川であるが下流域には，比高２～３ｍ（標高１２４ｍ）の河岸段丘を形成している。右岸の中畝，久米川南，山背，足山，左岸の宮尾，日南にその分布があり，吉井川左岸の古川，戸島，山西のそれに比定できる。

久米川の低地には美作を縦断する国鉄姫新線と国道１８０号線が走っており，吉井川との合流点中須賀は高瀬舟の舟着場として栄え，出雲街道の要衝であった。

集落は宿場町として街村をなす中須賀を除いては山背・日南・久米中・中畝・領家など農業を基盤とする塊村をなし，低地の中央から縁辺部山麓の谷頭部まで水田化されている。

宮尾遺跡は領家丘陵の南端が久米川の低地と，接する標高１２４ｍ前後の段丘上にある。

周辺の遺跡を概観してみると，本遺跡の西に接して久米廃寺が存在する。久米廃寺は領家丘陵の南にのびる変成岩部分の南端に位置する白鳳期建立の古代寺院址である（後述）。久米廃寺の東限は台地の侵食谷の中央やや西よりの溝と南北の柵と考えられ，谷の中央に南北にみられる現在の用水路をもって本遺跡との境としている。

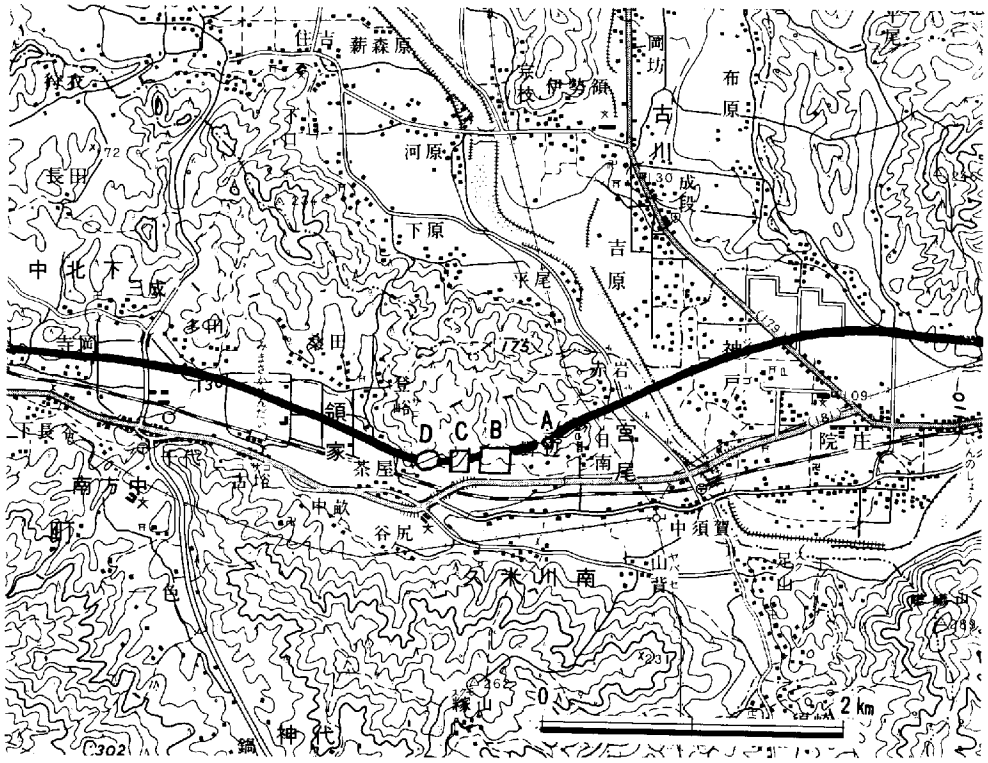
久米廃寺に西接して，領家遺跡がある。昭和４６年中国縦貫道建設にともない，岡山県教委が発掘調査を実施し，弥生時代中期から奈良時代にわたる複合遺跡であることかが明らかになり，報告書の刊行が予定されている。本遺跡の東にほぼ接して，日南古墳群がある。一辺４０ｍの方墳・大日古墳を中心に横穴式石室墳を含めて，約8基で構成されている。また日南集落では弥生時代後期の土器が採集されており弥生時代の集落を想定させている。

背後の領家丘陵には弥生土器散布地や古墳が数多く分布している。丘陵の分水界が久米郡と苫田郡の境となっている。久米川の低地には条里制地割が遺存している。また久米川の南に標高２６０ｍの糠山塊があり，近年開発が計画され，分布調査が実施された結果，７０余基の古墳が確認されている。南斜面では，１０余基のカンナ流しの跡が発見された。金鋳場池などの地名も残っており，鉱滓も採集されている。北斜面では山背に全長６０ｍの前方後円墳狐塚，谷尻の古墳群，昭和４７年久米町教委が調査した中畝遺跡は弥生時代中期の土器片が多数採集された。

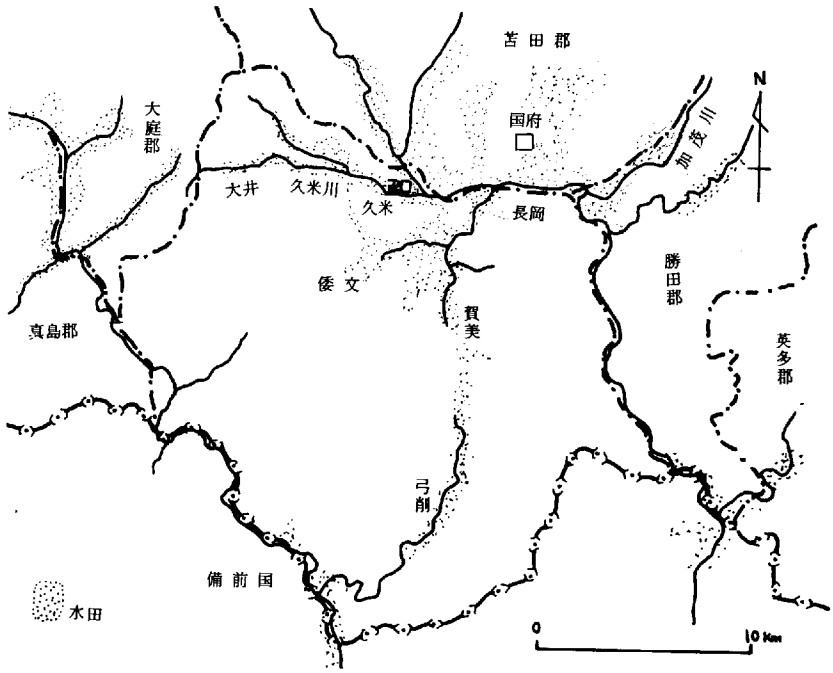
久米郡について概略をのべておこう。

久米郡は続日本紀，元明天皇和銅6年4月の条に『備前国，英多，勝田，苫田，久米，大庭，真島の六郡を割いて始めて美作国を置く』記され西暦７１３年備前国に属していた久米郡が新説の美作国に入ったことがわかる。和名抄には，大井・倭文・錦織・長岡・賀美・弓削・久米の，7郷より構成されており，現在それらの郷名は遺存しているものもある。（第２図）宮尾遺跡は久米郷に属するが久米郡において，久米郷は最も北に位置し，前述のように，本遺跡の背後丘陵で苫田郡と境している。

（橋　本）




第1図　宮尾遺跡付近地形図　A日南遺跡 B宮尾遺跡 C久米廃寺 D領家遺跡




第2図　久米郡の郷名図

# 第３章　第一次調査の成果

○　Ⅰ　　区

Ⅰ区は水田であるが，久米廃寺の寺域内ではこの部分からも雑舎（僧房か）が検出されており，Ⅰ区の水田下にも奈良時代の遺構を想定していた。この谷の中央部を南北に走る用水路は条里に起源を発するものと考えられ，トレンチはこの南北線を基準としそれに直交する巾２ｍを７ｍ間隔に４本設定し，北より，第１～第４とした。第１トレンチは５６ｍ，第２トレンチは５２ｍ第３トレンチは４７ｍ，第４トレンチは４６ｍでそれぞれ台地の崖下に接した。各トレンチとも土層からは須恵器が多数出土した。暗褐色の砂質粘土層は奈良時代の堆積と思われ遺構は確認できなかった。この堆積層は久米廃寺と同時期と思われるが谷の中央部にはなく，台地から２０～３０ｍ付近までになくなっている。これは，谷の中央部がその後氾濫したことを示しており，暗灰色粘土層にかわっている。暗褐色砂質粘土層の下には黄色粘土があり，かなり安定した面をなしている。谷中央部では，暗褐色粘土層の下は灰色粘土と砂利層があり，弥生式土器片を含んでいる。第１，第２，第３，第４トレンチでは，黄色粘土層を切って巾1.25ｍ深さ0.45ｍのU字形の溝が検出された。かなり蛇行しており，イネワラ，アシの根などの植物遺体を含む黒色粘土層が充填している。微量の土器片から速断はできぬが，弥生時代後期～古墳時代のものと思われる。また，この溝より古い時期の溝が西側に検出された。これは，黄色粘土層の堆積以前のもので，第２トレンチを除く第１，第３，第４トレンチで確認した。巾1.6ｍ深さ0.25ｍの皿状の浅い溝で，かなり蛇行しているが溝の肩には杭が打ち込まれ，杭の外には丸太を置いて土留めをした状態を観察できた。第１トレンチでは，溝の東側に約１０cm間隔に杭列が平行して打ち込まれていた。この溝からは高杯の完形品１，石包丁，玄米６粒，土器片多数が出土した。土器形式から弥生中期に比定できる。第２，第３，第４トレンチの２０ｍ付近では青灰色，砂利層から縄文後，晩期の土器片が出土した。

○　Ⅱ　　区（台　地）

Ⅰ区のトレンチを台地上に延長した。

建　物１

台地中央部に桁行１２間×梁間２間の建物が検出された。建物は真北をさしており，Ⅰ区の南北線より約１町の地点にある。掘り方は一辺約１３０cm四方の方形をなし，ぬきとりにより形がくずれているものもある。掘り方の深さは１３０cmで柱根は径約４０cmを測る（Ｐ２）

建　物２

建物１の東約半町に建物Ⅱが検出された。建物は２間×３間しか検出していないが，さらに南へのびると思われる。方位は，真北より約３度西にふっており，掘り方も建物Ⅰのそれよりやや小さく一辺約1.1ｍである。

建　物３

建物２の西約５４ｍに一辺1.1ｍの方形の掘り方が三個検出された。この建物の規模については不明である。建物３は浅い谷の斜面を造成して建てられている。

溝Ⅰ（Ⅱ区溝状遺構）

台地の西端にほぼ南北に走る溝を検出した。

溝Ⅱ（A溝）

溝Ⅰから約36m東でほぼ南北に走る溝を検出した。溝は用地巾一ぱいに検出し建物1の西側にほぼ接している。しかし，建物1に伴うものか否かは不明である。溝Ⅱは，溝Ⅰとほぼ平行しているものと思える。溝は巾約1m深さは35cmあった。

溝Ⅲ（B溝）

建物2と建物3の中間に一本の溝を検出した溝の断面は逆台形をなし，その方向はやや西に振っていた。溝の巾は，上面で2m，底部で1mあった。

○ 小　　結

Ⅰ 区

蛇行した自然流路に杭を打ち込み用水路または排水路として利用したと思われ弥生時代中期の水田址の存在が考えられる。美作地方における弥生前期の遺跡は希薄であるが，中期になると爆発的に増加する。例えば，沼遺跡，野介代遺跡，押入西遺跡，野田遺跡，国府遺跡などの集落が形成されている。これらの集落はいづれも立地から考えて生産地は谷水田に依存していたと思われる。当該遺跡も谷水田依存の傾向をもつ遺跡と考えられる。第一次調査では生活址は検出されなかったが東北の台地上に存在することが考えられる。

Ⅱ 区

宮尾遺跡を特徴づける掘立柱建物が三棟あるがこれらの建物の性格についてはいまなお不明である。しかし，計画的に造営されていることがうかがえるしこのような建築遺構は福岡県小郡遺跡の遺構（注1）と同類のものである。また，遺物は多くの須恵器片，土師器片が検出されており，未整理ではあるが8世紀～9世紀に位置づけることができるもので，ほかに建物1の包含層から円面硯片が出土している。なお，昭和47年4月より第二次調査が計画されている。　　（橋　本）

〔注1〕福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報1971　　福岡県教育委員会

出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は，縄文式土器，弥生式土器，須恵器，石鏃，石包丁等である。それ等について，簡単な説明を加えたい。

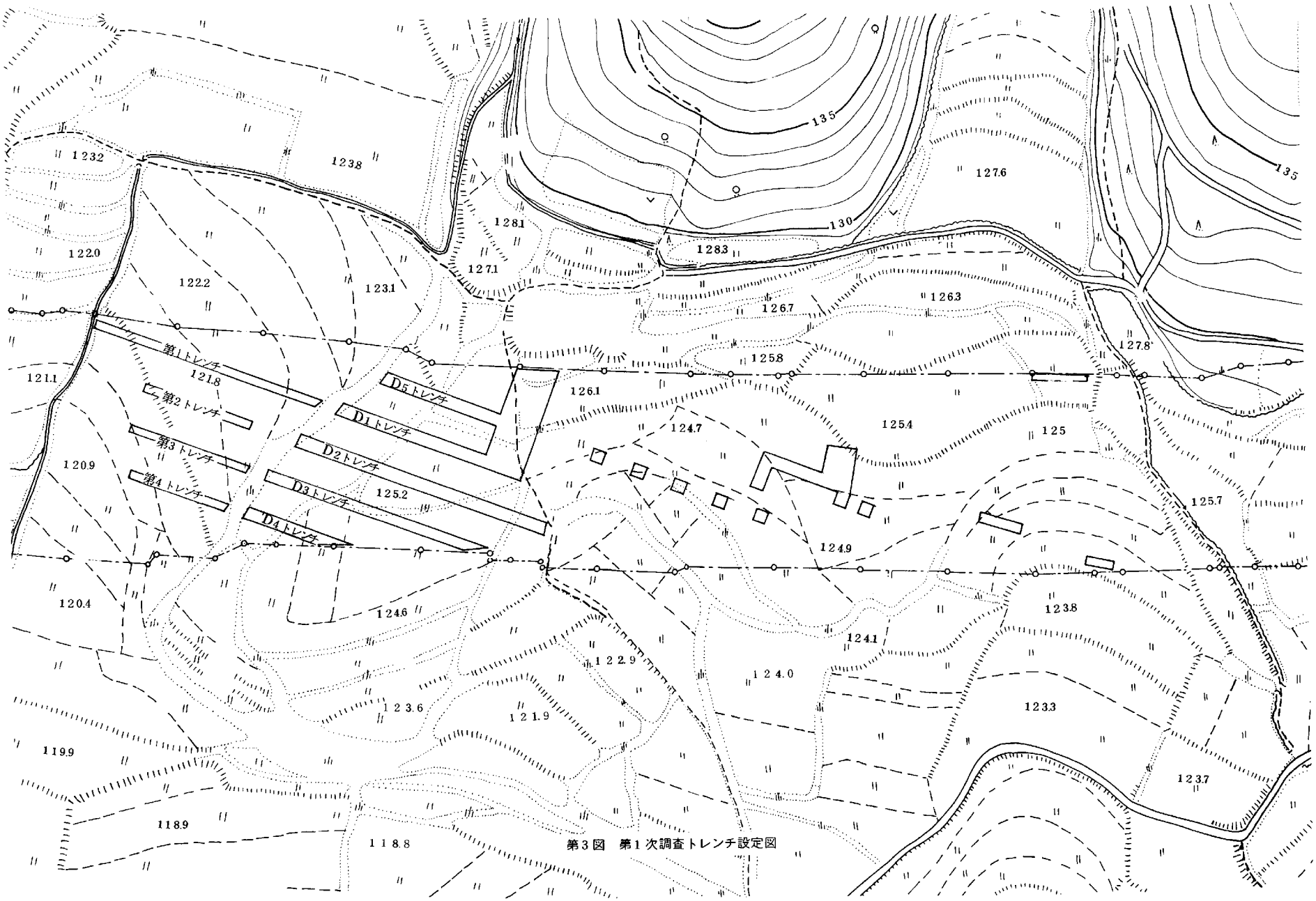
縄文式土器（第9図1～6）1は，縄文地のみ見られるものである。2は，縄文地に，2本の沈線が見られるものである。ともに石英粒が多く，雲母が見られる。色調は暗褐色である。3は，口縁部直下に圧痕文のある突帯をめぐらすもので，口縁部には刻み目が施されている。胎土には石英粒が多く，色調は褐色を呈している。4は，条痕のみられるものである。色調は乳褐色で，胎土には石英粒が多く含まれている。5は，口縁部に圧痕のある突帯をめぐらすものである。色調は褐色である。6は，口縁部が，やや「く」の字状に曲るもので，口縁端部には刻み目が施されている。色調は乳褐色を呈し，胎土には石英粒が多くみられる。時期は，縄文時代後期，晩期に比定しうるものであると考える。7は，弥生式土器片を加工した紡錘車で，周縁は，打ち欠くことにより整形している。8・9は，弥生式土器の甕の口縁部で，逆L字状を呈するものである。唇縁部には刻み目が施されており，口縁直下には，沈線がみられ，8は線が太く，9は細く多条化するものがみられる。時期は，弥生時

代前期に比定しうるものと考える。１０は，石包丁の破片であり，石材は千枚岩である。１１～１４は，打製の石鏃で，凹基無茎式と平基無茎式がある。石材はサヌカイトである。１５は，ドリルである。先端は破損している。石材はサヌカイトである。

弥生式土器（第１０図１～５）１は，壺の頸部である。漏斗状に開いた口頸部の先端が，やや肥厚するもので，端部上面に斜行する沈線文がみられる。頸部には，貼付突帯があり，指頭圧痕文で飾る。２も壺の口縁部である。漏斗状に開く口縁部端部が肥厚したもので，端部外面に，縦の凹線文を施した後に，円形浮文で飾るものである。３は，土器の底部で，外面にヘラ磨きがみられる。４・５は，高坏である。４は，口縁部が水平に拡張するもので，坏部は丸みをもち，脚は裾に向けてやや開き，端部の変化は見られない。５も口縁部が水平に拡張するもので，坏部は逆三角形状に，直線的である。脚部は，裾に向けて開き，端部にやや発達したものがみられる。外面はヘラ磨きによる仕上がみられ，脚部内面には絞込みの痕跡がみられる。口縁部には，２孔一対の小孔がみられる。時期は，弥生時代中期に比定しうるものであろう。

須恵器（第１０図６～１０）６は，壺の頸部である。やや長めの頸部は，ほぼ垂直に立ち上り，口縁部近くでやや開くものである。７は，壺の口縁部である。「く」の字状に外方に開く口縁部は，その端部は丸く厚みをもっている。仕上げは入念で，焼成も良好である。８は坩である。口縁部はやや内傾して立ち上がり，端部は丸い。仕上は入念であり，焼成は良好であるが，胎土に石英粒が多い。９は，高台の付く坏である。１０は，碗の底部である。高台は貼付である。外面にはヘラケズリが見られ，内面には灰釉がみられる。仕上げは入念であり，焼成は良好である。

（井　上）

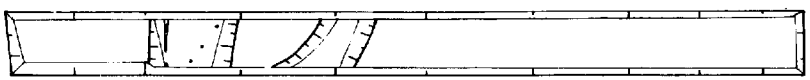



第3図　第1次調査トレンチ設定図

第1トレンチ

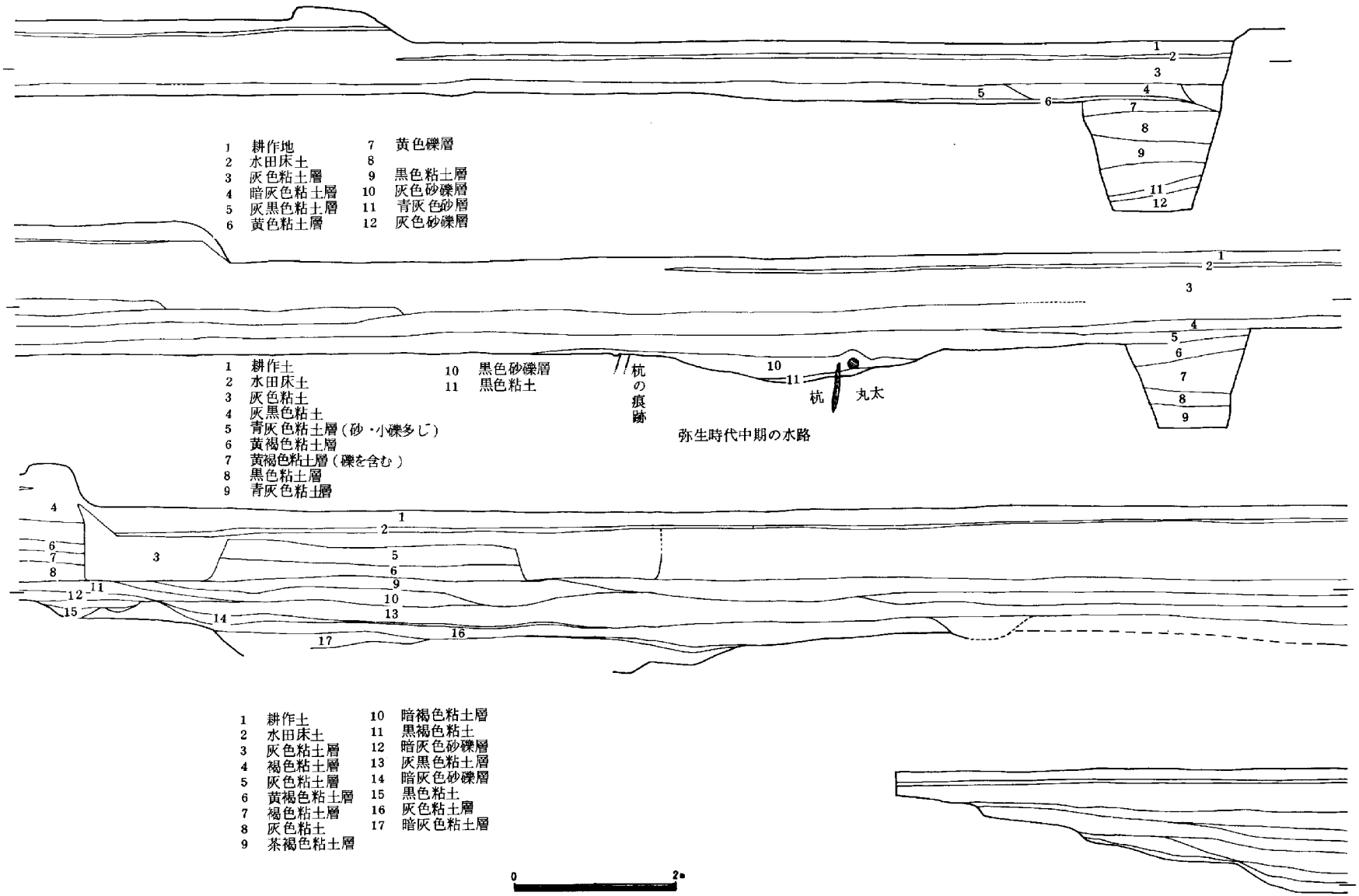
第2トレンチ

第3トレンチ

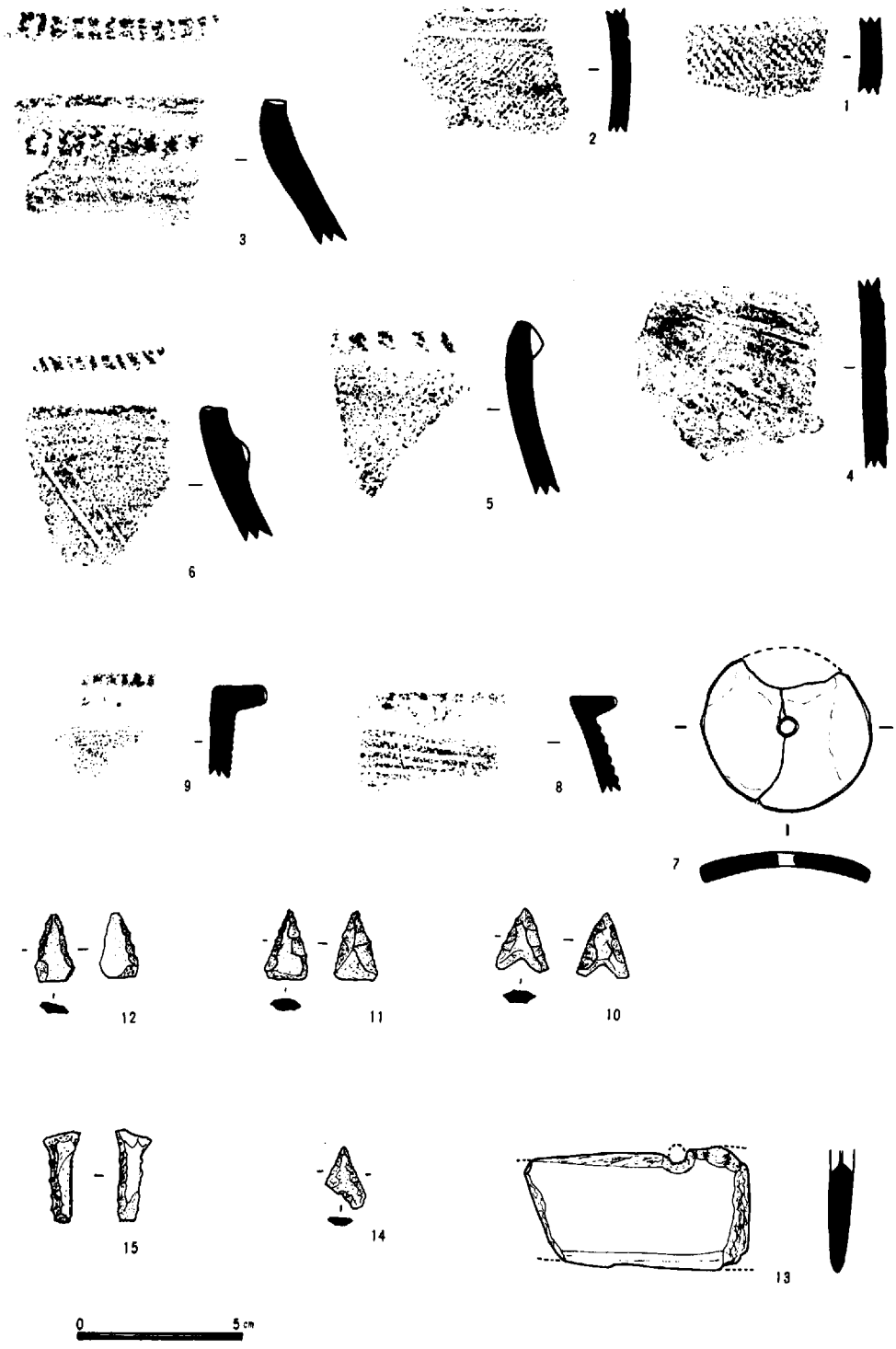


第4トレンチ

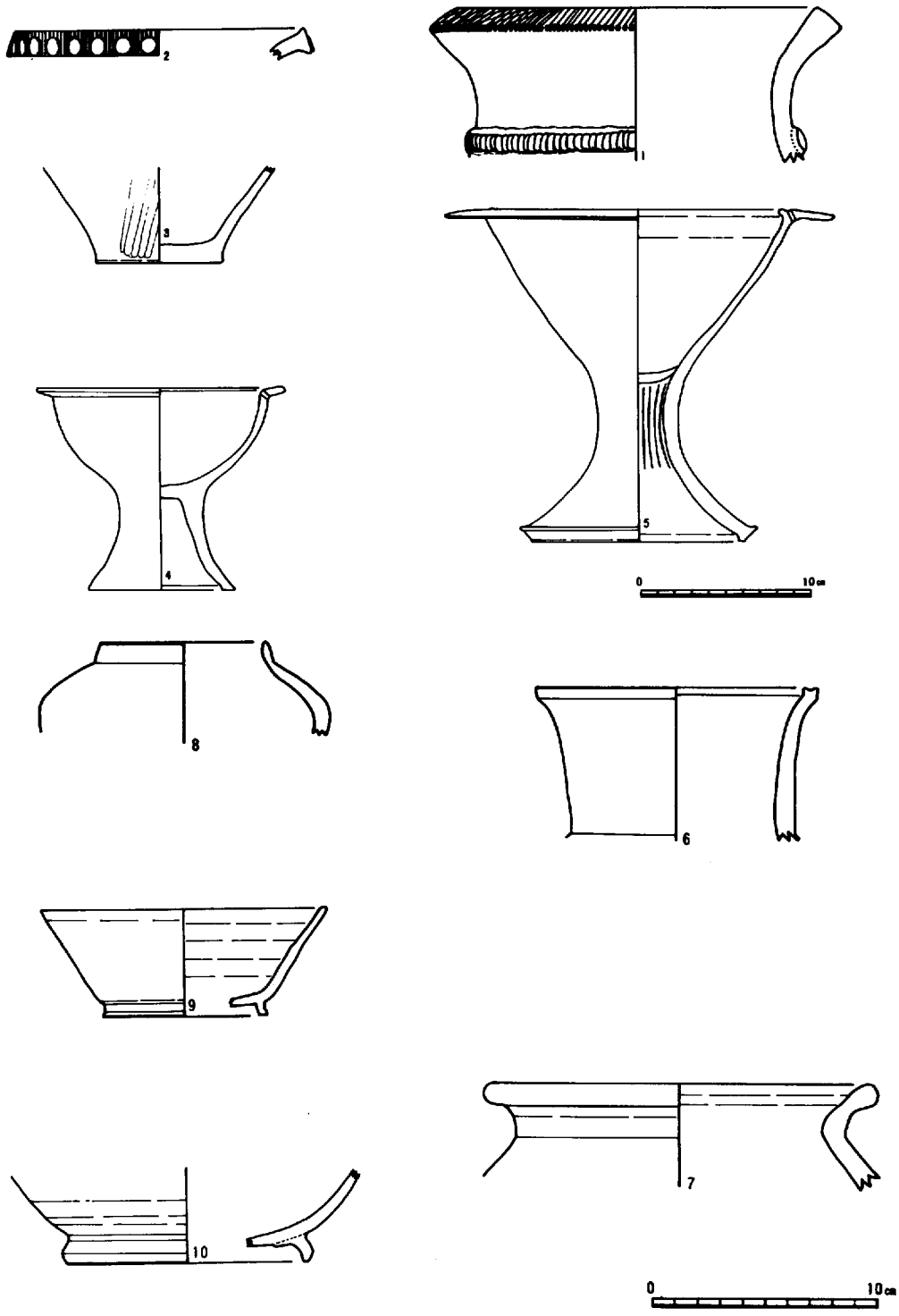
第4図　I区実測図



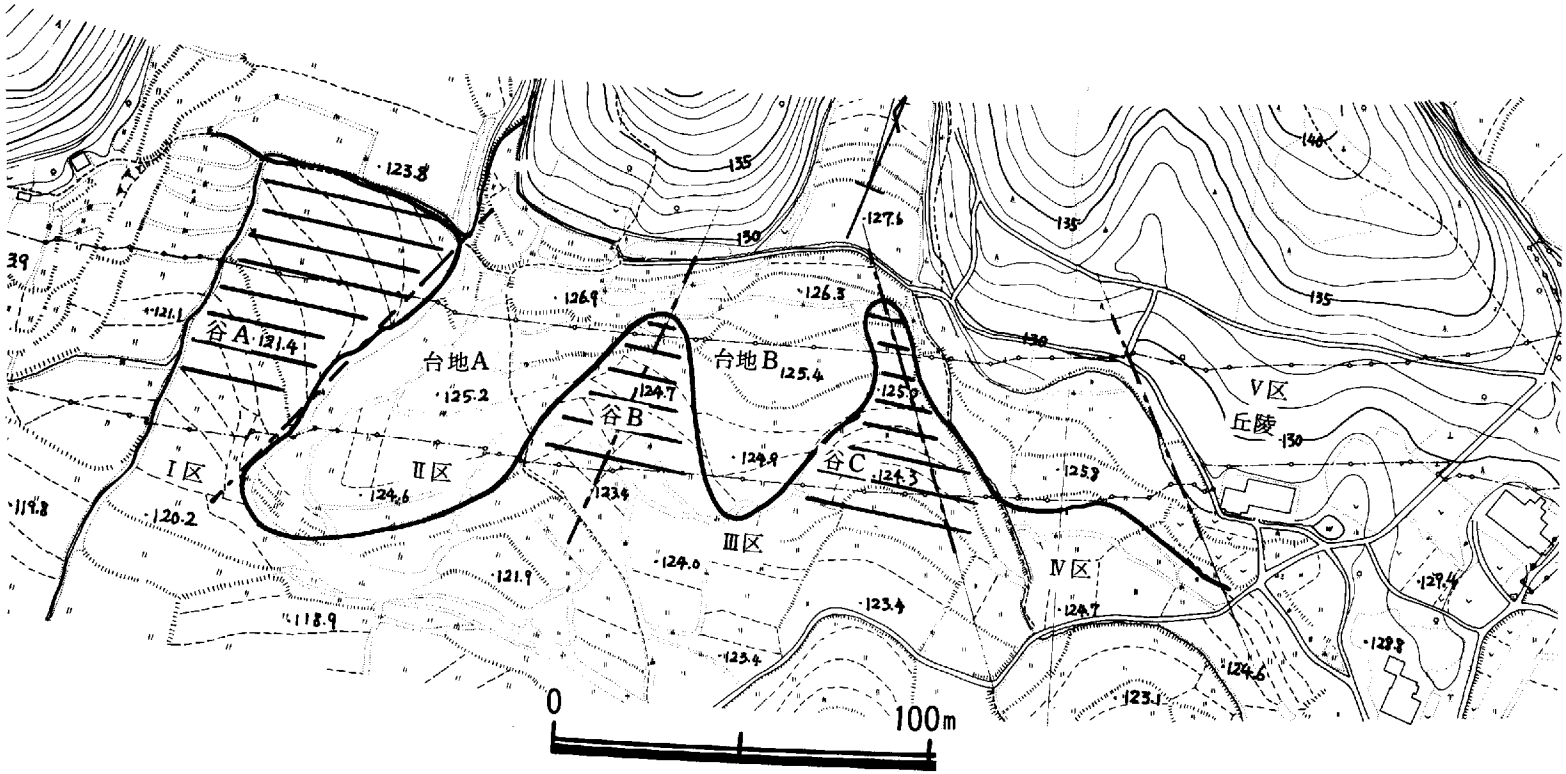

第５図　Ｉ区第１トレンチ土層断面図




第6図　Ⅰ区出土遺物実測図

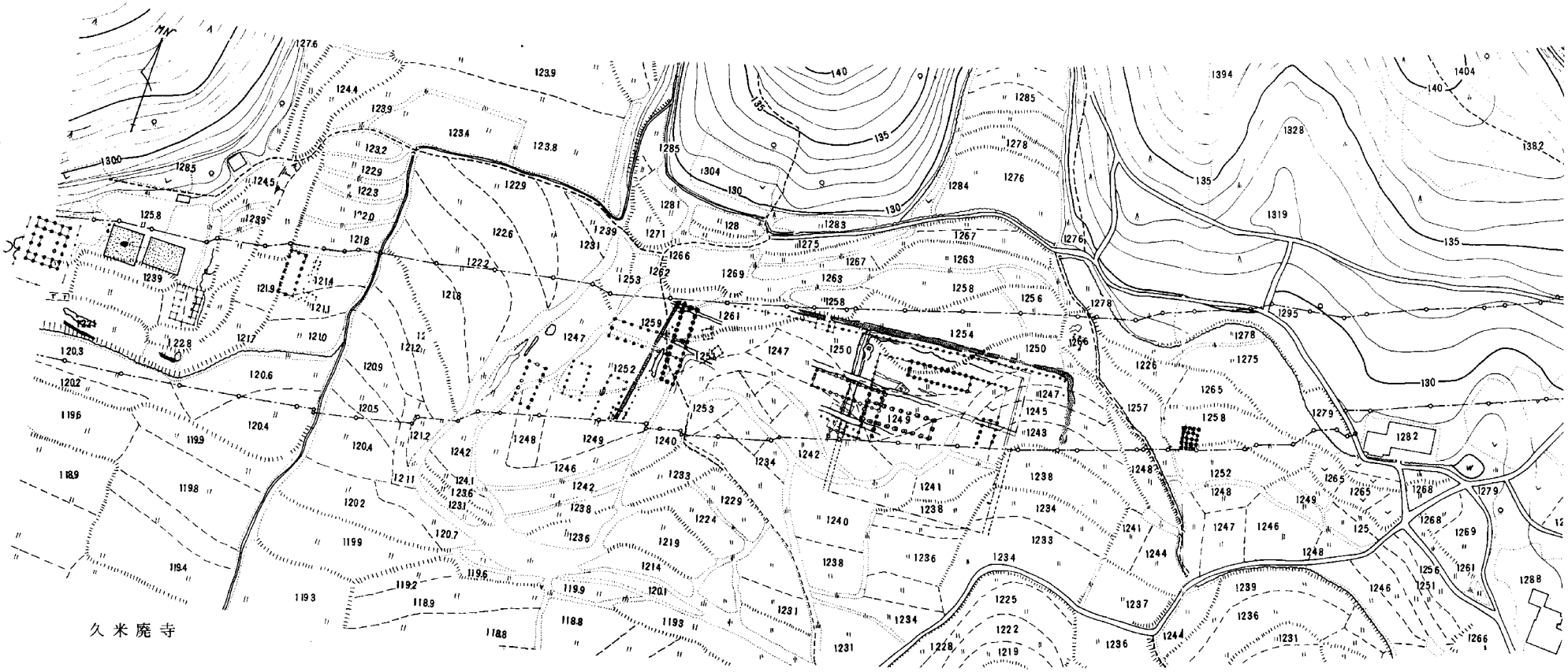



第7図　I区出土遺物実測図



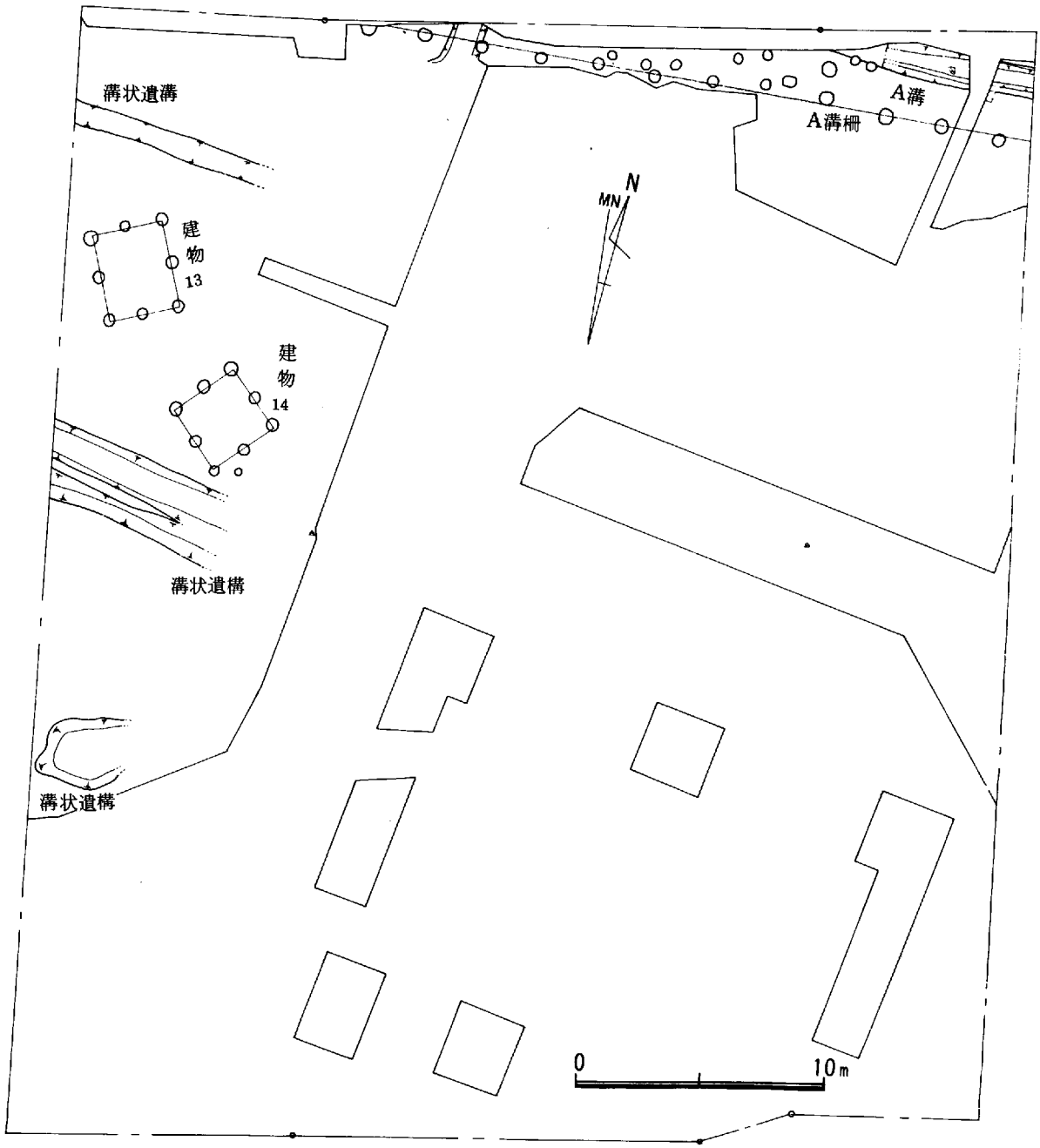

第8図　遺跡の区分図

第９図　グリット設定図と整地面の分布

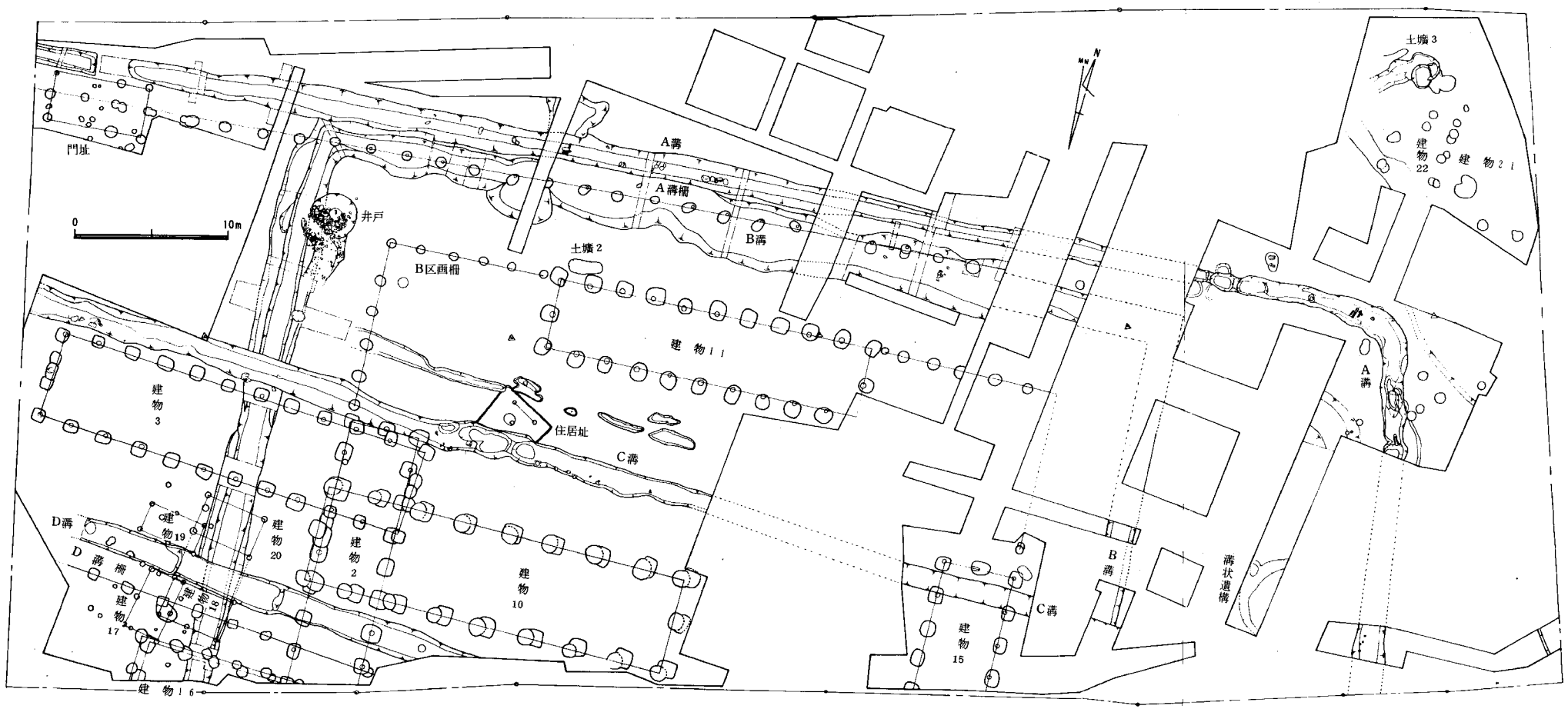



第10図　地形図及び遺構配置図

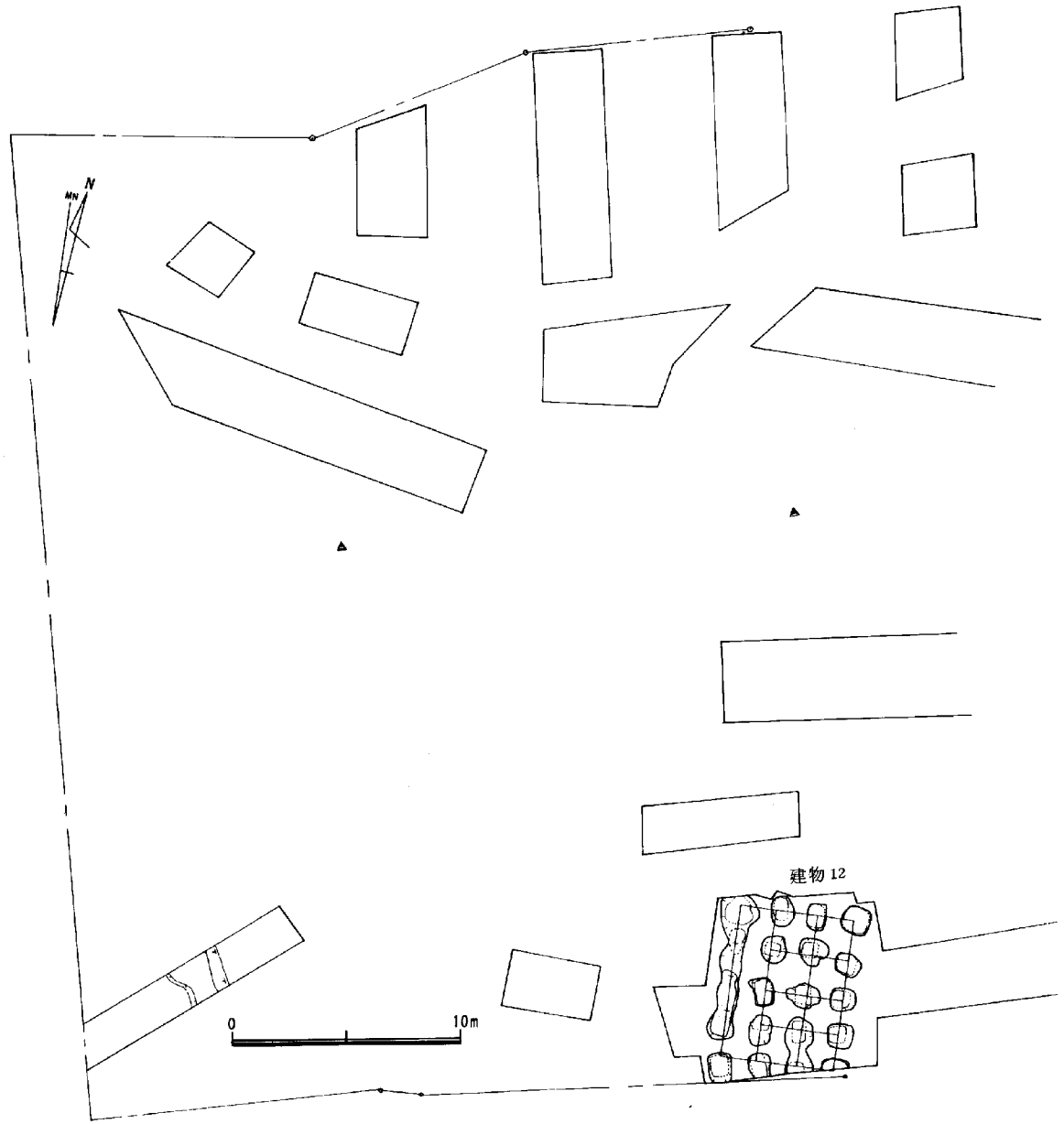
第11図　宮尾遺跡Ⅱ区実測図(1)




第12図　宮尾遺跡Ⅱ区実測図一(2)




第13図　宮尾遺跡Ⅲ区実測図




第14図　宮尾遺跡第Ⅳ区実測図

第15図　V区実測図

# 第４章　遺跡の立地と調査の方法

宮尾遺跡の立地する台地は東西約３００ｍ，南北約１５０ｍの広がりをもつが小起伏がある。台地は背後丘陵との傾斜変換線からしだいに南へ下がり，今回調査した部分は標高１２５.５～１２３.５ｍを測り，台地の中央よりやや北に寄る部分である。台地の末端は標高１２２ｍ前後で急崖をなして久米川の低地に落ちる。南側で比高３～４ｍである。台地の西は打田池の谷と崖をなして接し，第一次調査で弥生時代の溝を検出した谷でもある。（１区）　台地は西端で１２４ｍ，谷からの比高も３～４ｍである。この台地上に二本の浅い侵食谷が形成されている。西側のそれは谷頭が丘陵まで達しておらず，調査対象地域に谷頭があり，わずかに高低差を生じさせている。東側のそれは背後丘陵まで谷頭をのばし，やや深い。これら二谷によって分断された台地を便宜上，台地Ａ，台地Ｂ，台地Ｃとし，谷も西から谷Ａ，谷Ｂ，谷Ｃ，と呼称した。台地Ｃの北から東にかけて丘陵の低位部が南へのび，台地の東を画する。このように宮尾遺跡の地形的区分をすると，西の谷，台地Ａ，谷Ｂ，台地Ｂ，谷Ｃ，台地Ｃ，丘陵となる。この微地形は宮尾遺跡を考えるうえで重要な意味をもつと考え，整理の段階で区分した。すなわち，西の谷ＡをⅠ区，台地Ａと谷Ｂの中央までをⅡ区，谷Ｂの中央から台地Ｂと谷Ｃの中央までをⅢ区，谷Ｃの中央から台地ＣをⅣ区，丘陵をⅤ区とし，本報告ではこれを用いた。発堀調査においては歴史時代の遺構を予想して，１８ｍのグリットを設定した。第一次調査でⅠ区に現存する条里地割の用水路の巾杭を基点に南北線を基線とし，それに直交する東西線を東の台地上までのばし，２０ｍ毎に杭を打った。第二次調査では対象地域のほぼ中央と思われる第一次調査の杭を原点とした。Ｎ－Ｓ線，Ｅ－Ｗ線を直交させ，１８ｍの方眼のグリットを設定した。グリットは原点からそれぞれの方向へ数を増すごとに方位を示す頭文字と数字でＮⅠＥⅡ，ＳⅡＷⅡと表現した。表土，包含層から出土する遺物はグリットごとにまとめ，遺物は第一次調査からひきつづいて検出順に番号を付した。溝は北から南へアルファベットであらわした。対象面積は台地Ｃまで約１０,０００㎡であった。調査員の積算で３名で１７ヶ月の調査期間が出ていた。しかし，調査開始の４月，本遺跡のⅠ区を高架橋で保存する他は，保存の対象になり得ないことを知らされ，同時に８ヶ月の調査期間が示された。本遺跡部分は設計通り土盛工法が実施されることから建物の柱穴は半堀することを原則とした。

また，調査期間が短かく，全域調査が不可能となり，トレンチで遺構が確認できなかった部分は排土の場所とした。そのため結果的には重要な遺構の存在が確実であっても断片的な調査しかできなかった部分もできた。

表土の薄い台地部分は全面排土することとし谷はトレンチ．グリットを設定し，必要に応じて拡張する方法をとった。遺構の平面，断面は $\frac{1}{20}$ で実測し，高低差のある建物１，１２は遣り方を使った。全体の遺構図は航空測量による部分が多いが，航空測量が調査の途中であり，その後は $\frac{1}{20}$ で実測した。なお，調査で使用したグリットは復元できる引照点を残した。（橋　本）

# 第５章　遺　　構

建物１　（第１６，１７図，図版１１，１２）

宮尾遺跡最大の規模の掘立柱建物で2間×１２間である。方位は真北を示し，堀り方は一辺約１１０～１５０cmの方形をなし，最も削平の少ない北側では深さ１１０～１４０cm　を測るが全体的に深さや形にばらつきがある。建物は南にやや傾斜した場所に建てられたと思われる。柱はすべて抜き取られており，多くの堀り方には，図のように，抜き取り痕に明褐色土が入った状態が観察できる。柱は直径２０～４０cmの円柱であったと考えられる。黄色土，褐色土，黒色土を版築状に埋めて柱を立てている。石を礎石やうち込めに使ったものもある。柱間は桁行１８０～２４４cm，梁間２３８～252cmとかなり差があるが平均値は桁２１８cm梁２４４～２４６cmとなり建物の北西隅にＬ形の堀り込みがあるが建物と共存した可能性があるがその性格は明らかでない。建物５と，二条の溝はいずれも建物１を切っている。Ａ溝，柵列については前後関係は明らかでない。遺物はきわめて少ないが，検出時に円面硯の破片が出土している。堀り方の裏込め土から須恵器が出土している。

建物２　（第１８図，図版１９－２，２２）

Ⅲ区Ｂ溝区画内に位置する。２間×８間以上の南北棟で方位は真北より２度４０分東にふっており，掘り方は１辺約１００～１２０cmの方形をなす。深さ５０～７０cmで掘り方の深さ形にはあまり大差がない。柱は地表面で切断されたらしく，柱根が遺存していた。直径２０～３０cmの円柱でヒノキが用いられている。平斧の痕も明らかに観察できる。掘り方内は黒色土・黄色土が互層をなし版築状である。柱間は桁２０４～２３４cm平均値２１８cm，梁２３０cmを測る。建物２付近は複雑に切り合っているが他の遺構より最も古い遺構である。建物２，建物３，建物１０の順である。また建物２，建物３，Ｃ溝の順である。Ｄ溝，柵列，建物１６は建物２を切っている。したがって，新しい遺構が建物２と重なる部分では柱根がぬきとられている。

建物３　（第１９図　図版２１－１・２３）

Ⅱ区の台地部分から西の浅い谷頭部を造成して建てられた東西棟で２間×１１間である。方位は真東西を示し，掘り方は方形を基調としているが，不定形のものも目立つ。１辺８０～１２０cmで，深さ２０～６０cmとかなり削平をうけている。全体的にはやや西に傾斜した場所に立てられたらしいが西半は造成土が観察できる。柱は立ちぐされており，痕跡をととめる。柱間は桁２０５～２３５cm，平均値２２１～２２２cm，梁は初め３間であったものを２間に建てなおしており，１８１cmを272cmに広げている。建物２，Ｂ溝より新しいが建物１０，Ｃ溝に先行する建物である。柱穴№２８より須恵器甕の破片が出土した。内面に青海波，外面格子の叩き目を施こしている。　（橋　本）

建物４　（第２０図，図版１３－１・１３－２）

Ⅱ区西端，すなわち本遺跡の最西端の台地Ａに位置する掘立柱建物である。棟方向は南北で真北に対してＮ７°１５′Ｅである。柱穴掘方は方形プランを基調としているが，中には円形のものもみられる。柱穴の残存度は比較的悪く，西側桁行のうち２本，北側真束１本あわせて３本の柱穴を欠いている。各柱穴の深浅の度合いは差異があり，かろうじてプランを検出し得たものもある。

建物４とＡ溝・Ｂ溝区画との時期的関連は不明である。また，柱穴掘方内の遺物も明らかな時期を

示すものではない。

A溝区画外に存在することから，外郭的建物すなわち主要建物に対する雑舎と考えるべきであろうが，桁行偶数間の建物であること，桁行２ｍ４０cm（８尺）を基調としていることなどから単なる雑舎ではなく重要な位置を占める建物であったことが推察される。久米廃寺に最も近く，見下ろす位置を占めるという点も看過できない。（岡　田）

建物５　（第２１図　図版１４－１　表１）

Ⅱ区　中央部に位置し，建物１，A溝と重複している。桁行８間以上×梁行２間の掘立柱建物である。A溝重複部では攪乱により，前後関係は確認できなかった。又，建物１との柱穴の重複では建物５が建物１を切っており前後関係が確認できた。柱穴掘方は一辺８０～１１０cmの方形を呈し深さ４０～６０cmを測る。柱穴埋土は黒褐色と黄褐色の混土が主体である。柱間寸法は桁行で２７２～３３３cmとやや差がみられるが，梁行は，３ｍであり，おそらく桁行，梁行ともに１０尺等間の設計とみられる。遺物は柱穴内より少量の須恵器，土師器，鉄滓が出土した。（山　磨）

建物６　（第２２図　図版１４－２）

Ⅱ区A溝の西にある，２間×７間以上の南北棟で，方位は真北より東に４度３０分になっている。掘り方は直径６０cmの円形で深さ２５～４０cmで底の高さはほぼ同一である。柱間は桁２３０～２７０cm　梁は北柱で２６０cmと３１０cmで５７０cm，中間の梁間は６４０cmである。建物７と重なるが前後関係は不明である。A溝と共存するが否かも不明である。柱穴より平瓦，須恵器坏が出土している。平瓦は久米廃寺のものと考えられる。

建物７　（第２３図　図版１５－２）

Ⅱ区　３間×２間以上の南北棟と思われる。真北より東偏４度３０分の方位を示す。掘り方は直径６０cmの円形で，深さ１５～３０cmを測り削平が著るしい。桁は２０５～２２０cm　梁は１５０cmでA溝より新しいが建物６との前後関係は不明である。

建物８　（第２４図　図版１５－１）

Ⅱ区　２間×５間の南北棟で真北の方位を示す。掘り方は直径約６０cmの円形で，深さ１５～３０cmを測り削平が著るしい。桁は２２６～２５０cm，平均値２４０～２４１cm，　梁６２０～６３８cmである。（橋　本）

建物１０　（第２５図）

Ⅲ区中央部の南よりに検出した桁行８間×梁行２間の掘立柱建物である。桁行方向は真北に対し９１度２０分東に偏よっている東西棟である。建物は１回の建替えにより柱穴掘方が方形より円形にかわっており，又建物２・３と重複関係にある。３棟の切り合いによる前後関係は建物２が最も古く，建物３，建物１０の順である。

柱穴掘方は旧建物で一辺１１０～１３０cmの方形を呈し，新建物では径９０～１２０cmの円形を呈し，ともに深さ３０～９０cm前後を測る。柱間寸法は新旧ともに同一柱間寸法とみられ桁行で２７８～３１９cm，梁行で６２０～６３０cm前後とほぼ１０尺等間で計画されたと考えられる。

出土遺物は柱穴内より須恵器片土師器片・鉄滓が出土した。須恵器甕片には外面に平行叩目，内面

に同心円叩目を施している。坏蓋片の内面には墨が付着し，磨滅しており，転用硯とみられるものが出土している。

建物１１　（第２６図　図版２０－２，２１－２）

Ⅲ区中央部のB溝区画内に位置する桁行１０間×梁行２間の掘立柱建物である。建物両端より柱列が建物２と建物１５へとL状に連なっており，宮尾遺跡の最も中心的な建物である。桁行方向は真北より９２度５０分東に偏よる東西棟である。柱穴掘り方は一辺１００～１２０cmの方形～隅丸方形を呈し，深さ８０～１１０cmを測る。柱穴断面にはほとんど柱痕が認められ，その内５個の柱穴には径２０cm前後の面取りのある丸柱が残存していた。遺構面は，建築時にかなり削平に　よる整地が行なわれたとみられ，柱穴埋土には腐植土が少なく黄色～黄褐色の粘質土が主体である。柱間寸法は桁行で１８８～２１４cmを測り，一尺２９.６cm前後の７尺等間の設計とみられる。梁行柱間寸法は桁行寸法に対しやや長く，４４５～４７０cmを測り，おそらく梁行１５尺の$\frac{1}{2}$，７尺半等間に計画されたものと考えられる。

遺物は柱穴内より，体部内外面に叩目の施された須恵器片，土師器片，炉壁片が出土した。

建物１２（Ⅳ区）　（第２８，２９図，図版５４－２）

第２次調査初期のトレンチにより，第Ⅳ区中央部南端の東斜面上に検出した掘立柱建物である。その後，調査工程上の諸問題により第Ⅳ区全面発掘は不可能となり，検出遺構面の拡張及び周辺のトレンチによる調査を行った。

規模は基本的には桁４間（４間以上は用地外），梁行３間の束柱を有す倉庫と考えられる建物である。梁行方向は真北より７度３０分西に偏よる南北棟である。柱穴掘方は隅丸方形に近く一辺９０～１３０cmで，深さ４０～１００cmを測る。柱間寸法は梁行で１６５～１６７cmとほぼ均一であるが，桁行は１５２～２０４cmとかなりの差が認められる。特に西端南北柱列の土層断面からは１回の建直しが認められ，又柱間寸法が他の南北柱列とは異なり南側の一間が非常に広く造られており上部構造のなんらかの変化が考えられる。出土遺物は柱穴埋土より須恵器，（甕・坏・高坏），土師器，(甕)，弥生式土器，鉄滓が出土している。全て小破片であり，図化不可能なものである。須恵器甕片は外面に平行，内面に同心円の叩目を施したもので，坏身片は，古墳時代後半の口縁部立上りのある器形である。土師器は甕片，取手片がみられる。鉄滓は径３～４cm大のものが１０数点出土している。

（山　磨）

建物１３・１４　（第３０・３１図　図版１７－３・４）

建物１の東約１０mに位置する２間×２間の掘立柱建物２棟である。Ⅱ区では最も北東よりに寄った部分で台地Aが谷Bに下降する肩にあたる部分である。建物は暗褐色包含層（時期は不明。しかし，掘立柱建物群造営以前は明らかである。）面より検出された。

建物１３は棟方向N２６°W柱間1.4と1.7m建物１４は棟方向N５０°W柱間1.4 mを基調としている。時期は，柱穴掘方内の遺物が少量かつ貧弱であるため明らかにすることができない。雑舎・倉庫というべきものである。

（岡　田）

建物１５　（第３２図　図版２５）

Ⅲ区，B溝区画内に位置し，建物２に対応する。桁行４間以上×梁行２間の掘立柱建物である。

建物１５付近のトレンチ調査では遺構を充分確認できず，調査終了後の追加調査により残り部分の遺構の検出を行った。桁行方向は真北より３度西に偏よっている南北棟である。建物１１とは一部未掘であるがL字状柱列により連っていると考えられる。又，建物２と同様に桁行８間以上の建物と考えられる。柱穴掘方は一辺８０～１１０cmの方形を呈し深さは南端の一部ではあるが４０～６０cmを測りそのうち一つの柱穴では丸柱が残存していた。柱穴埋土は黄褐色～黄色粘質土である。柱間寸法は桁行で平均２１８cmを測り，ほぼ７尺等間と考えられる。梁行は桁行に対しやや長く４６０cmを測り建物１１，建物２と同様におそらく７尺半等間に計画されたものと考えられる。遺物は柱穴内より土師器片が少量出土したのみである。（山　磨）

建物１６　（第３３図　図版２７－１）

Ⅲ区　２間以上×５間以上の東西棟で，方位はＮ９０°Ｅを示す。建てなおしており，円形の掘り方が北西にずれて重なっている。桁は２００～２３５cm，梁２５０cmを測る。B溝，建物２より新しく，D溝，柵列に平行している。（橋　本）

建物１７・１８・１９・２０　（第１３・３４図　図版２７－１）

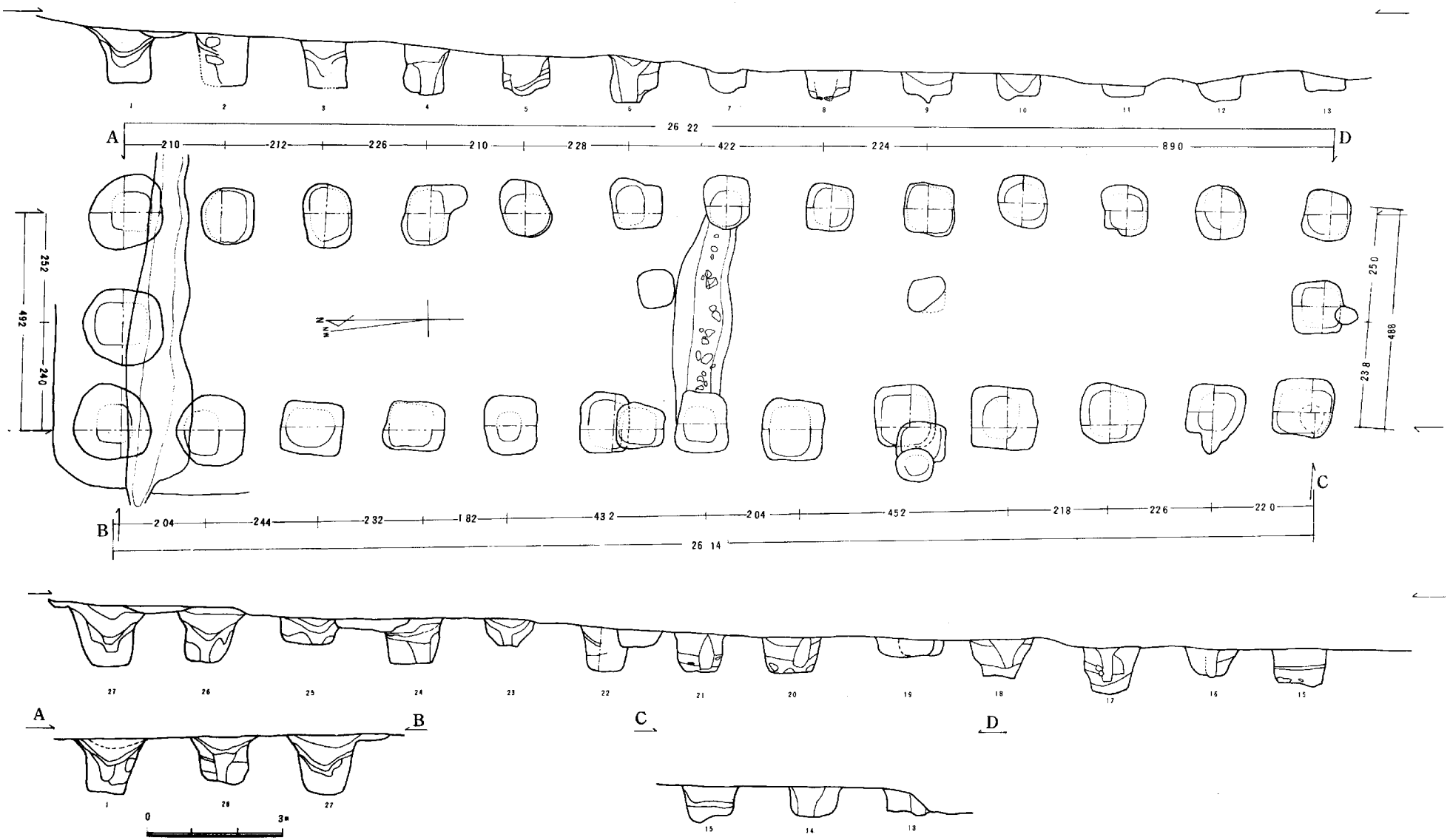
Ⅲ区の南西，B溝西側南北線とD溝の交点付近に集中して検出した。いずれも小規模な掘立柱建物である。建物１７は１間×２間の南北棟，建物１８は１間×２間の東西棟，建物１９は１間×２間の東西棟，建物２０は１間の東西棟としてそれぞれ検出した。検出時においては以上の４棟として認識していたが，後に建物２０と建物１８は同一建物ではないかと考えられ，第３４図・第１表にはその双方のデータをふまえている。つまり２間×３間の間仕切りのある小規模な建物，それも一般住居的なものではないかと推察される。建物１９と建物１７も類似するが，柱穴が欠けていることや桁行方向の差異が甚だ大き過ぎるため，同一建物と断定するに及ばなかった。これらの建物はほとんど相前後する同時期のものである。B溝・D溝のいずれよりも新しく，柱穴掘方内に埋没していた瓦器より推察すれば，平安～鎌倉時代という時期を与えることができよう。

建物２１・２２　（第１３・３６図）

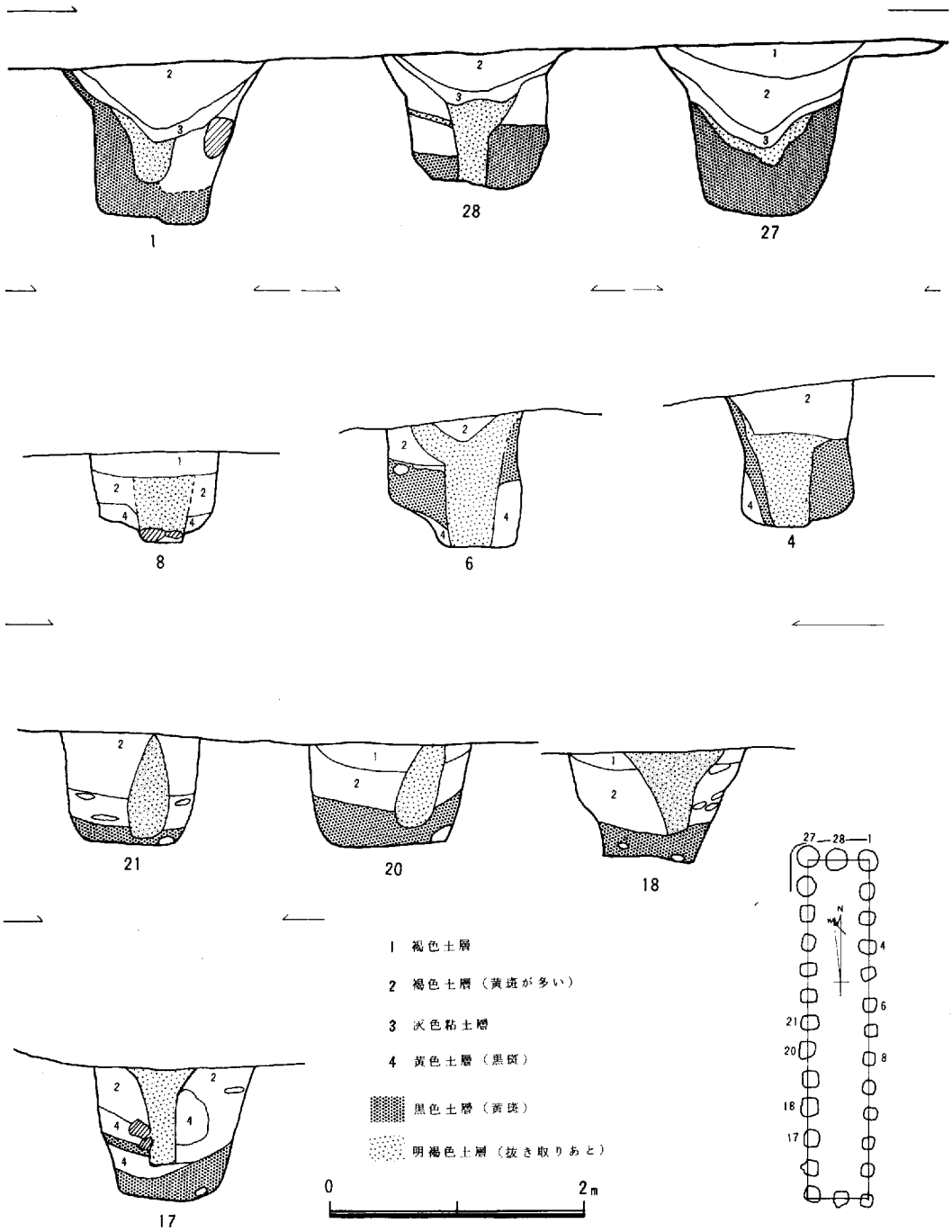
Ⅳ区北西端，ＥＶＮⅢ区に位置する。つまりA溝東曲折部の北約８mの台地Cの縁辺の西側に位置する。いずれも南北棟の掘立柱建物で，建物２１は棟方向Ｎ２°Ｅで２間×２間以上，建物２２は棟方向Ｎ９°Ｅで２間×２間以上である。この建物２１・２２を検出した面は，剥離性に富む第３紀層の黄色地山面でⅢ区B溝区画周辺の地山面より約１m高い位置を占めている。第９図でも理解できるように，谷部の埋めたて造成・整地のみならず丘陵およびその縁辺部の削平（カッティング）が行なわれたことがわかる。それによって得られた平担面・緩斜面に掘立柱建物が建てられることは十分あり得ることであろう。

この建物２１・２２がB溝区画・A溝区画のいずれにも含まれぬ外郭に位置すること，梁間の狭い建物であることを考えあわせると雑舎棟のような性格を推察することができる。柱穴掘方中より土師器片が混入していたがいずれも時期不明である。周辺からは須恵器片・土師器片の出土をみるが，土壙３の時期と同一時期すなわち７世紀前半～中葉の時期を示している。この時期が建物２１・２２の時期に結びつくのか否かは，明らかではない。なお，建物２２の棟方向（Ｎ９°Ｅ）は建物４（Ｎ７°１５′Ｅ）に最も近い値である。

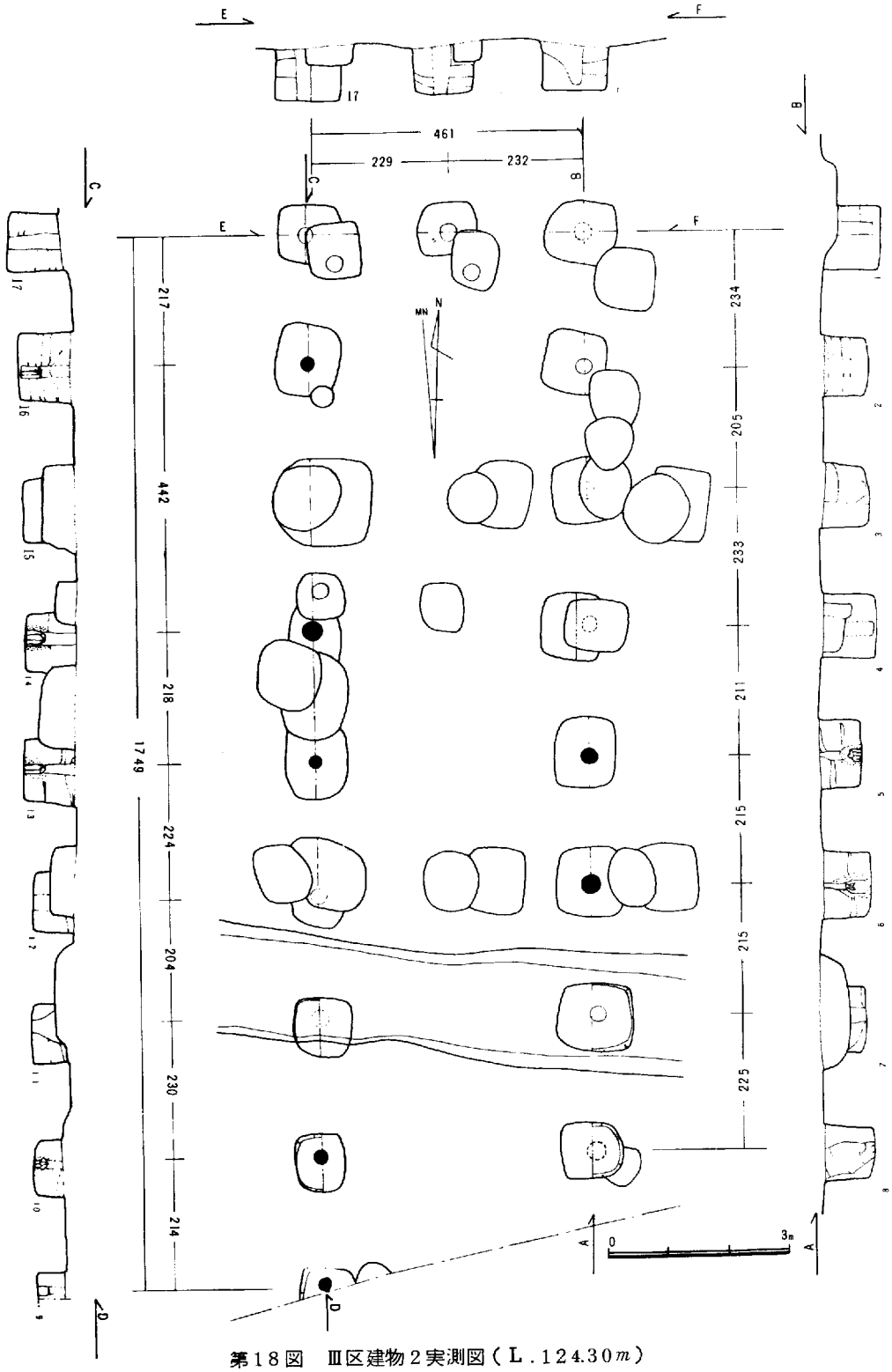
（岡　田）



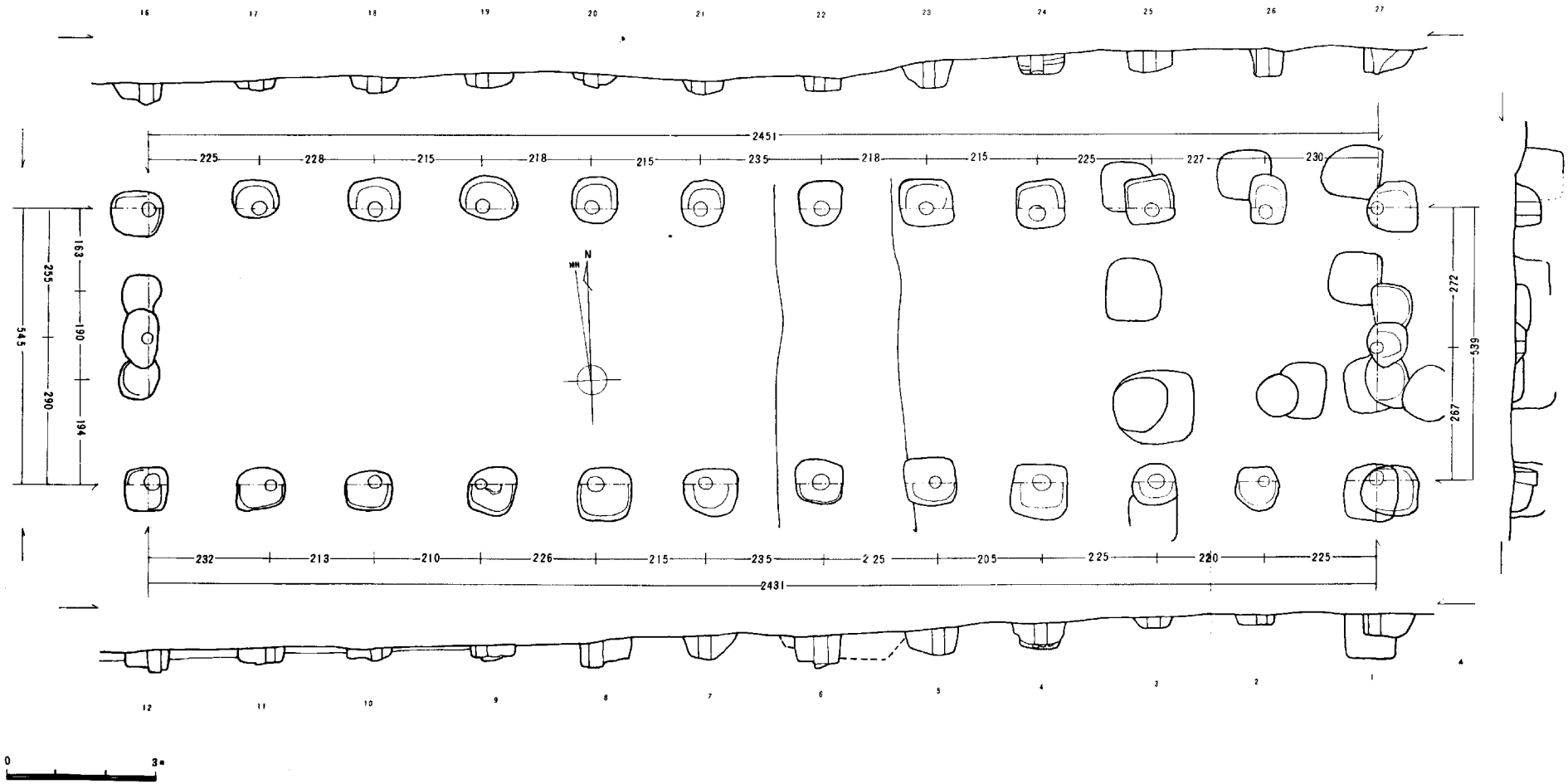

第16図　Ⅱ区建物1実測図（L　125.5m）


1
28
27
8
6
4
21
20
18
17
1 褐色土層
2 褐色土層（黄斑が多い）
3 灰色粘土層
4 黄色土層（黒斑）
黒色土層（黄斑）
明褐色土層（抜き取りあと）
0
2m
27
28
1
4
6
8
21
20
18
17
N

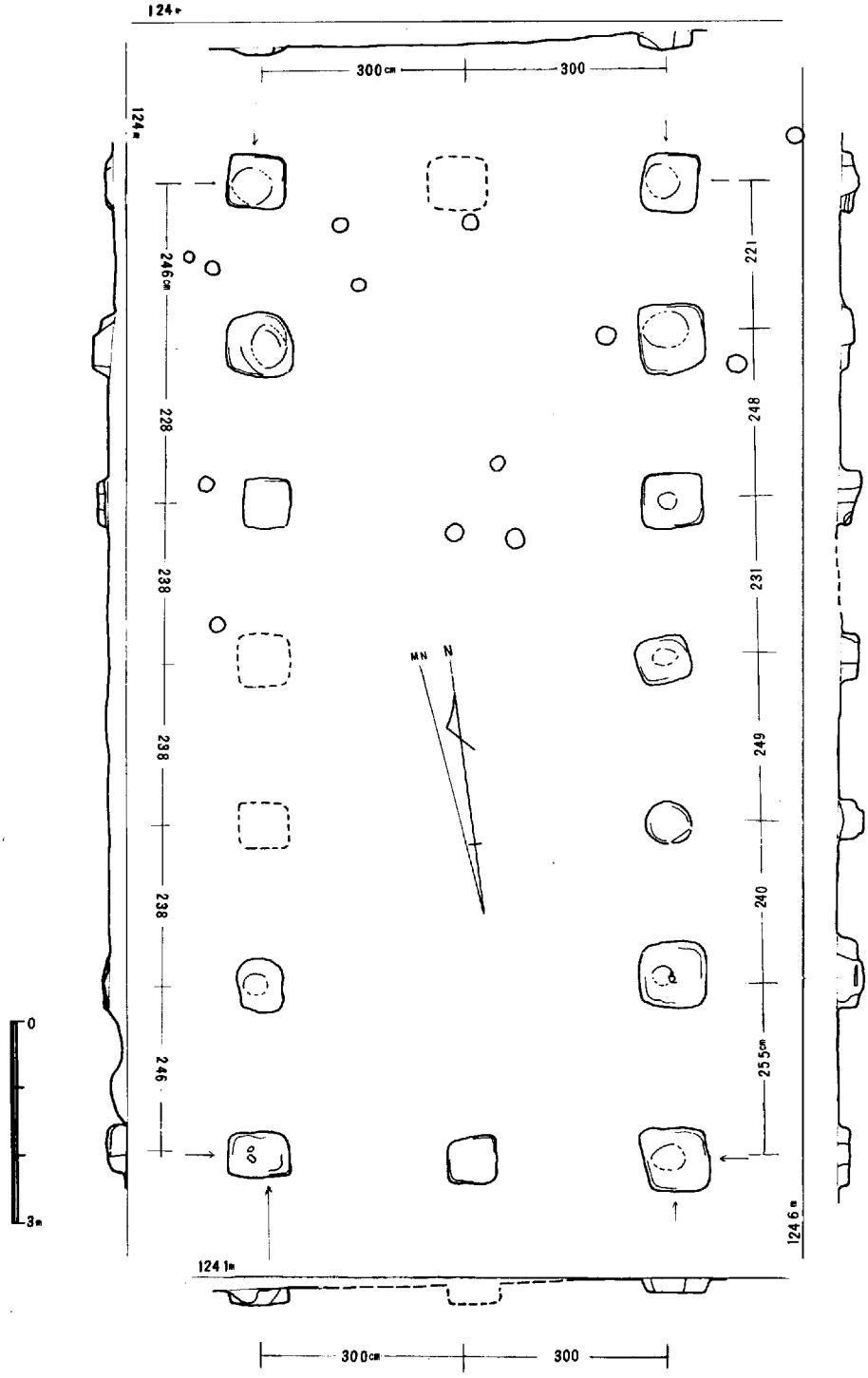
第17図　建物柱穴断面



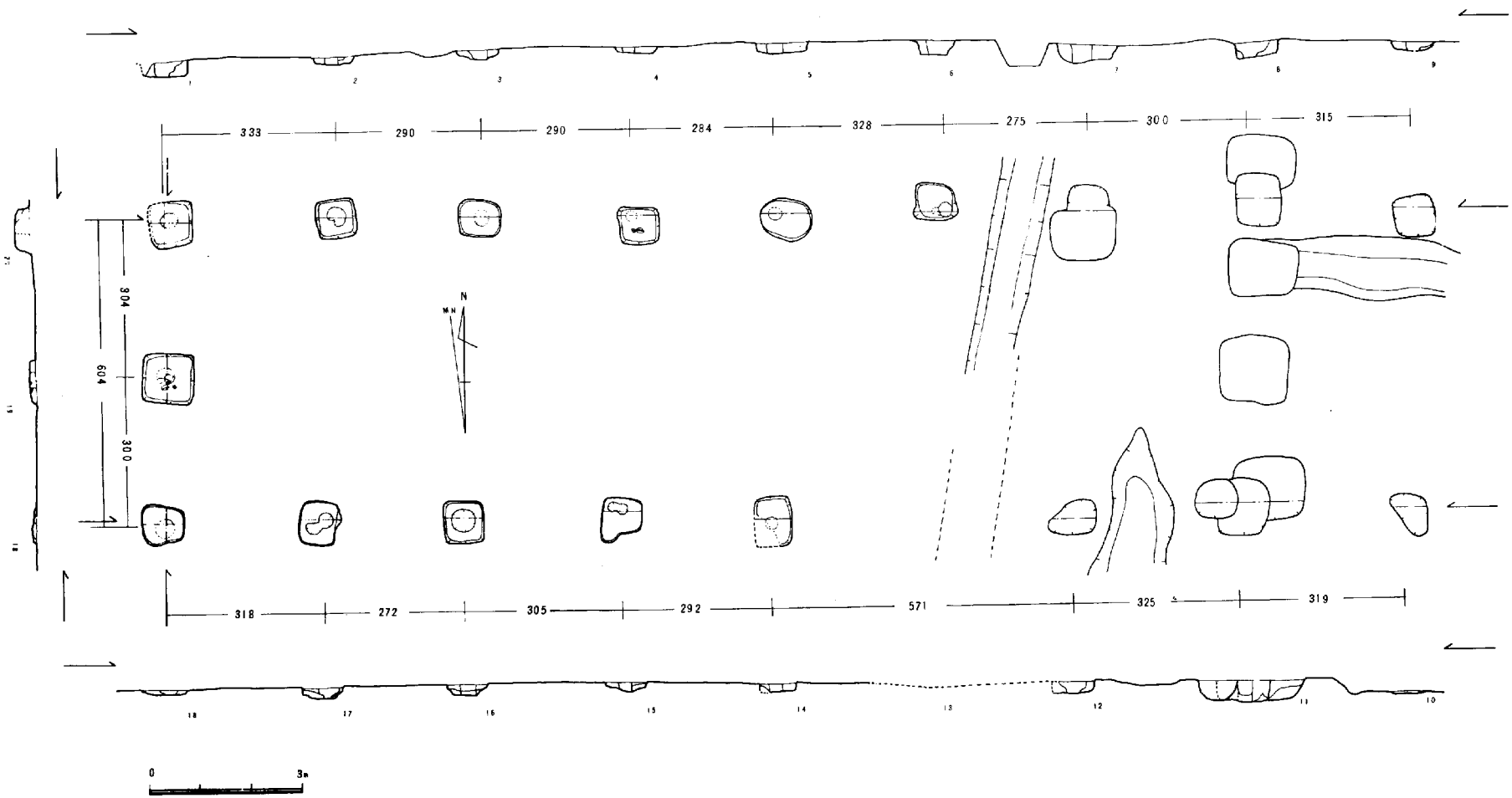

第18図　Ⅲ区建物２実測図（L.124.30m）



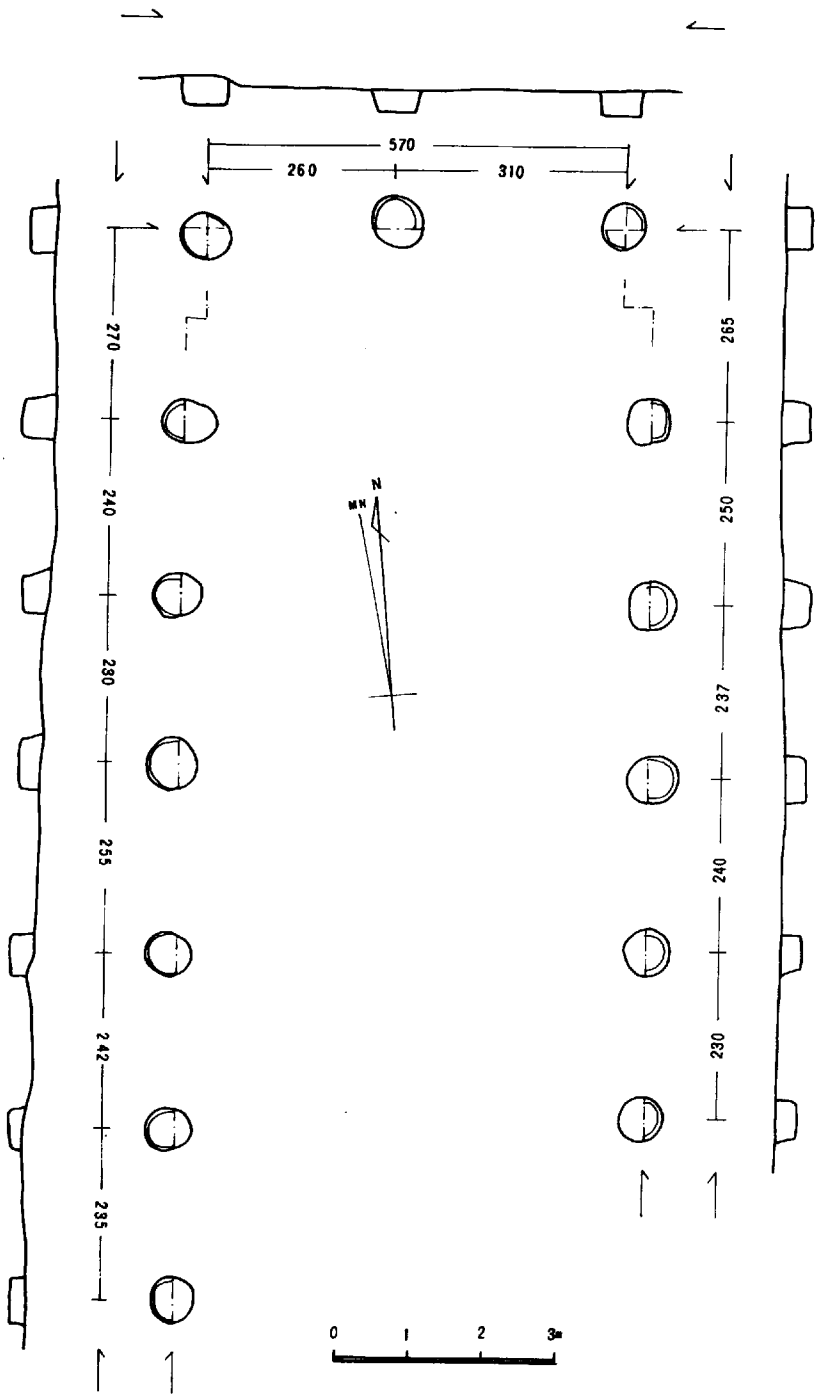

第19図　Ⅲ区建物3実測図（L=124.30m）



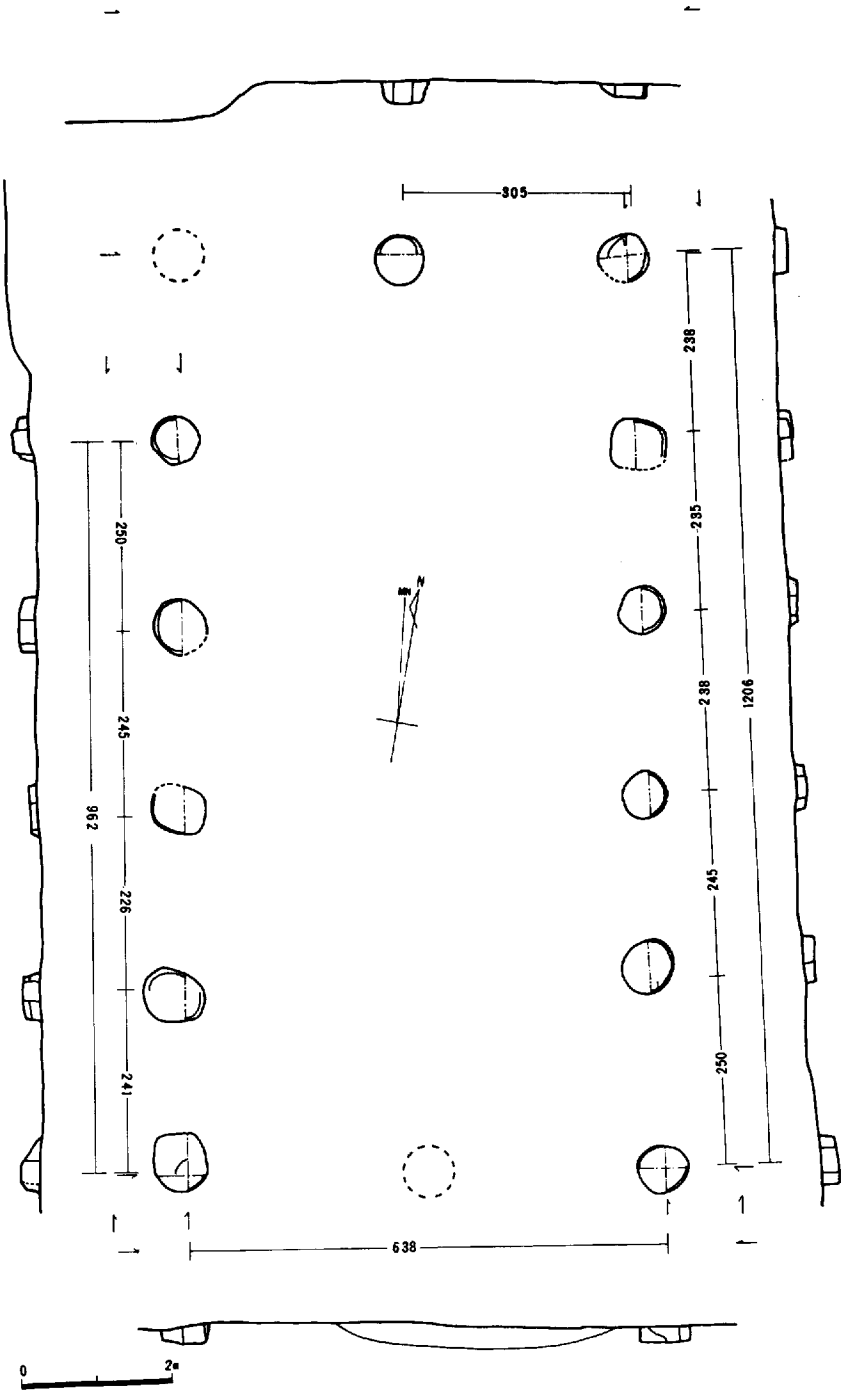

第２０図　Ⅱ区建物４実測図



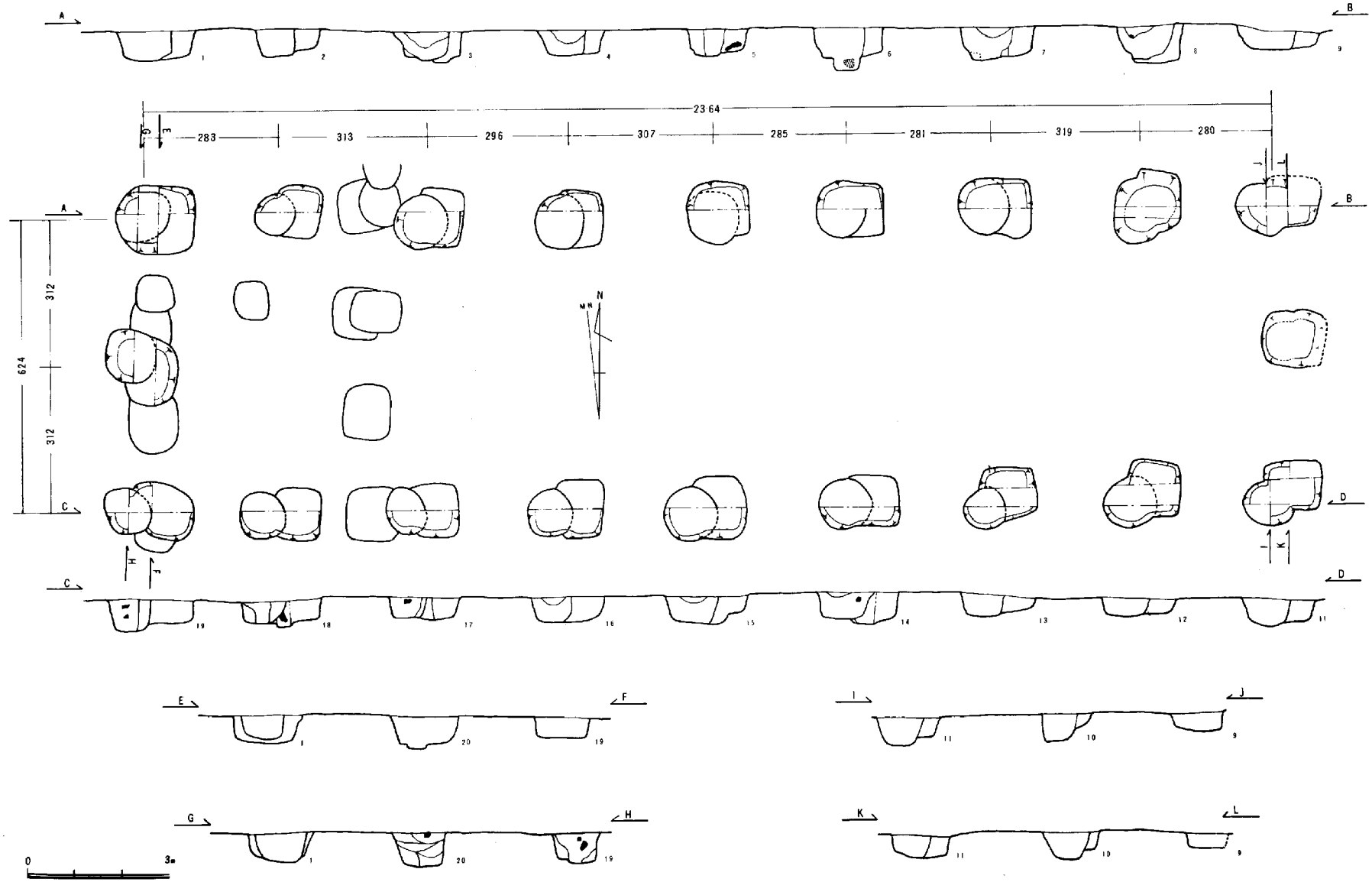

第２１図　Ⅱ区建物５実測図（L　１２５.００m）



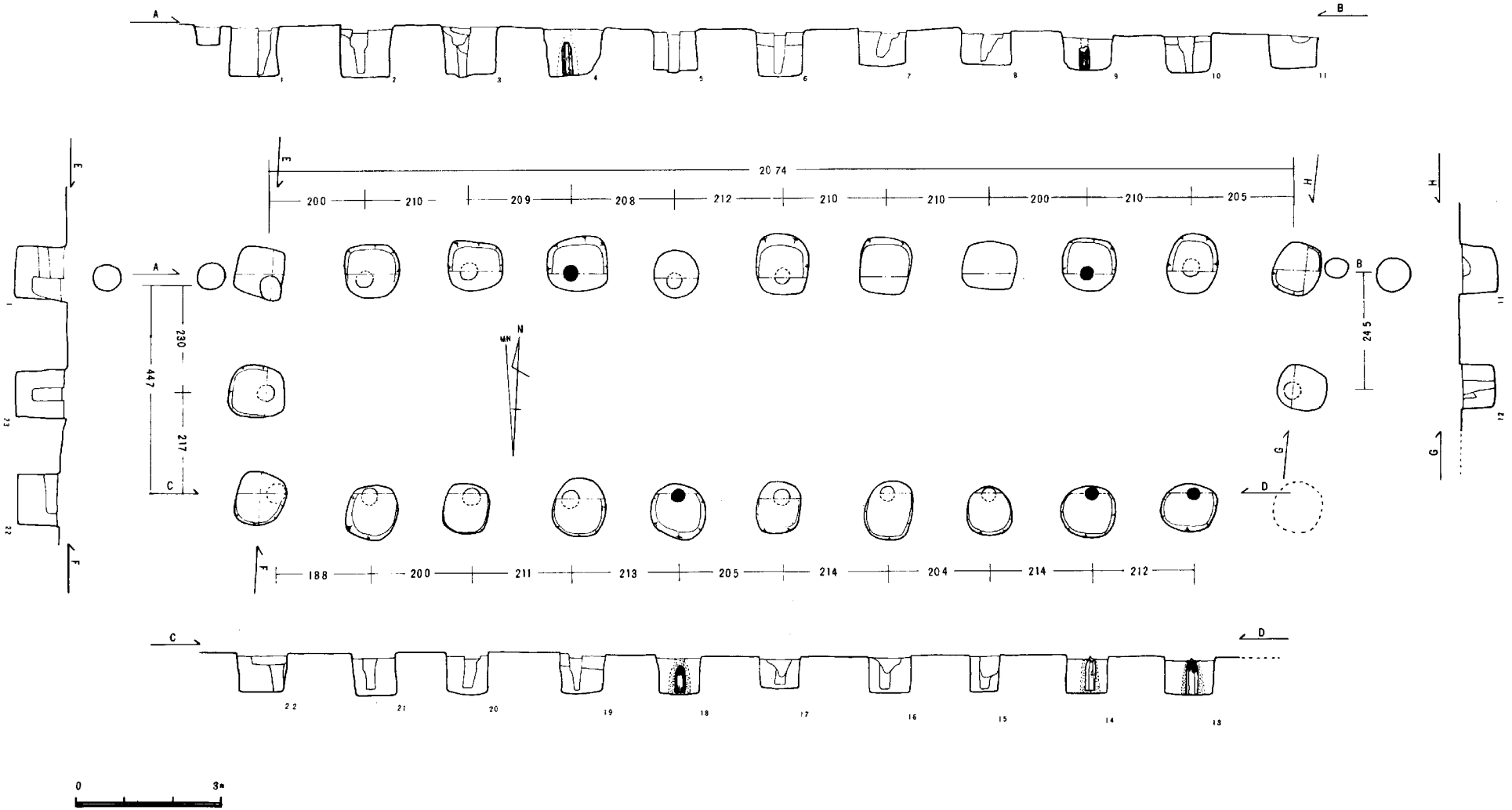

第22図　Ⅱ区建物6実測図（L.124.90m）



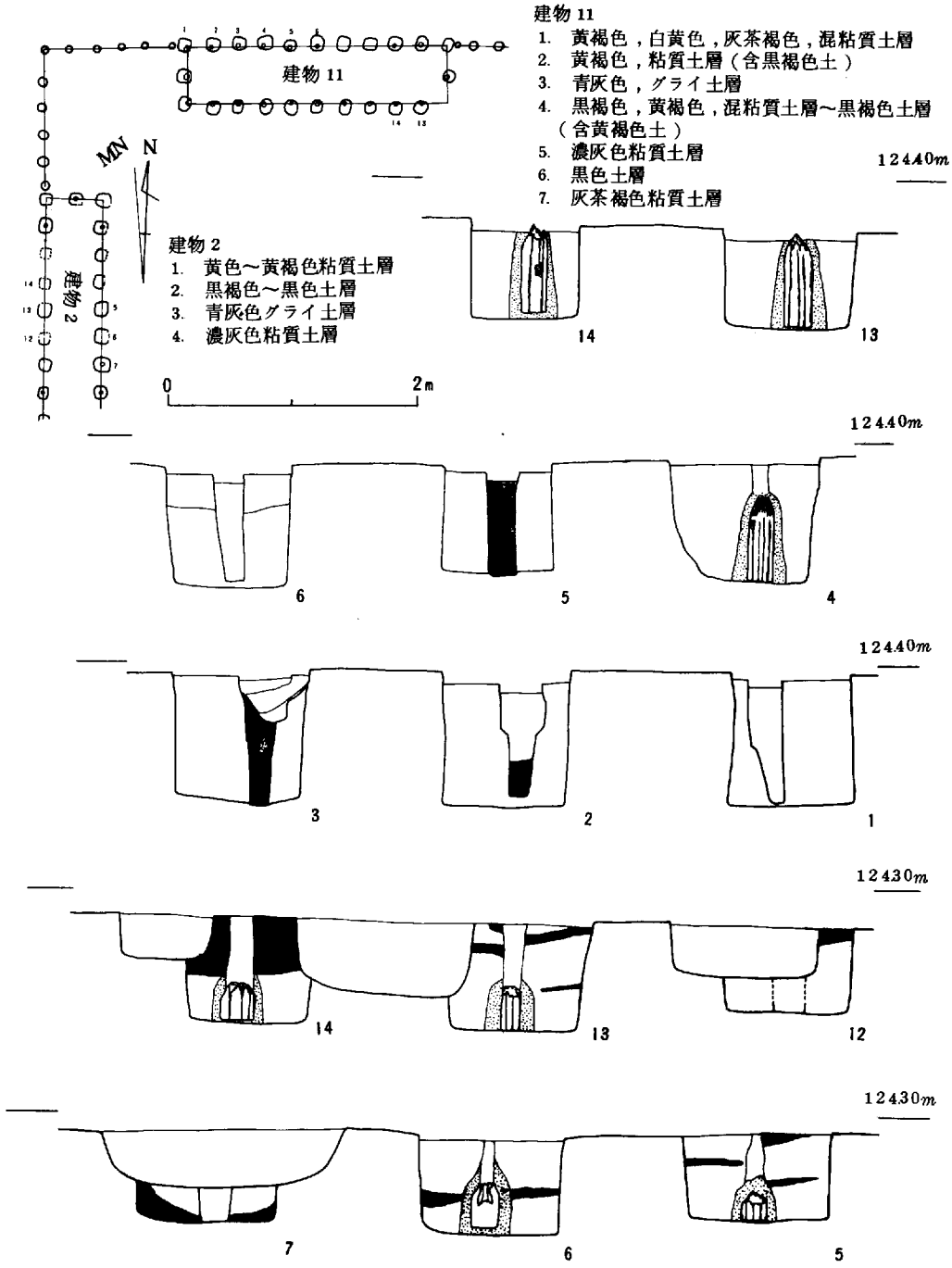

第24図　Ⅱ区建物8実測図（L.125m）



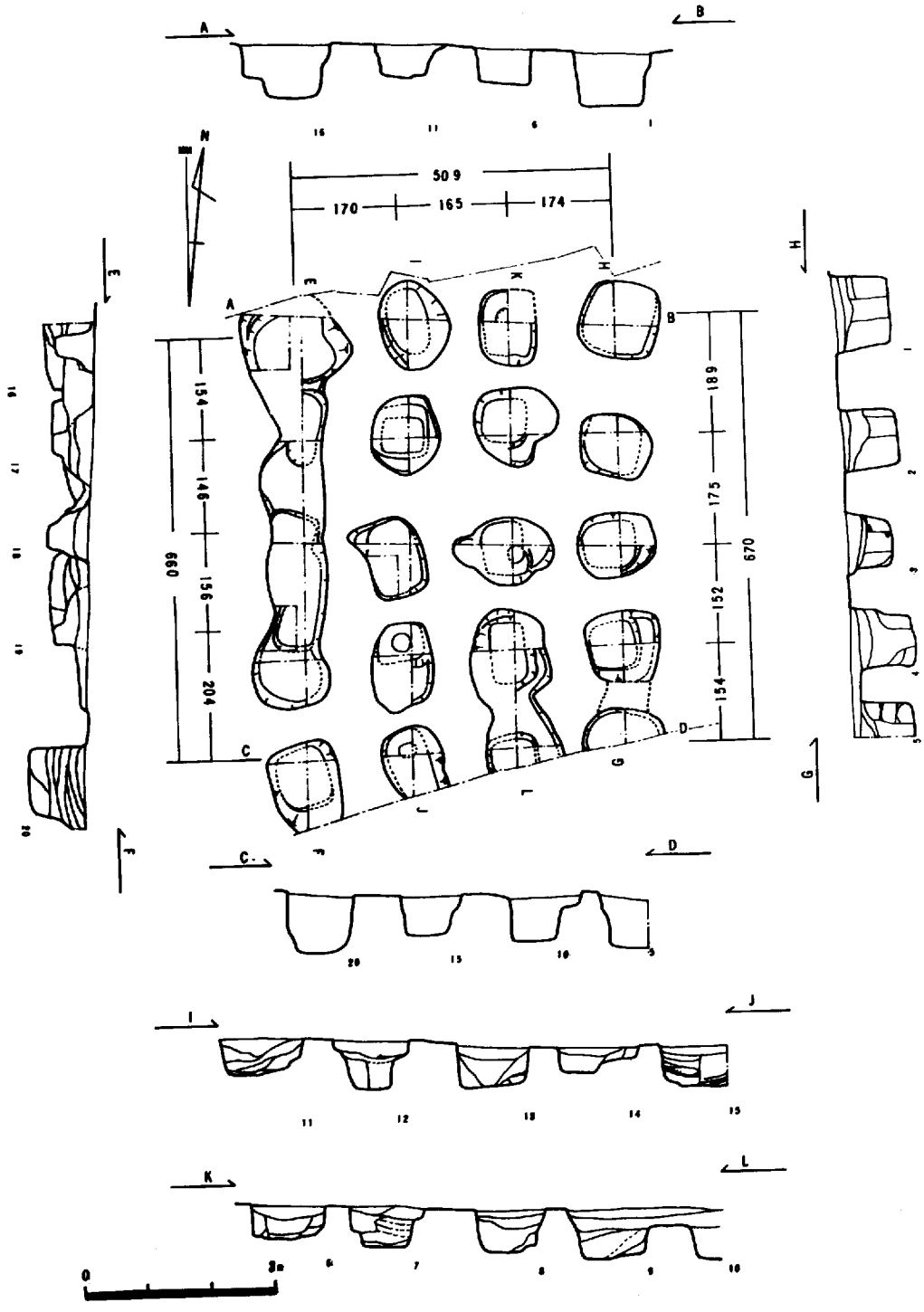

第２５図　Ⅲ区建物１０実測図（L＝１２４.３０m）



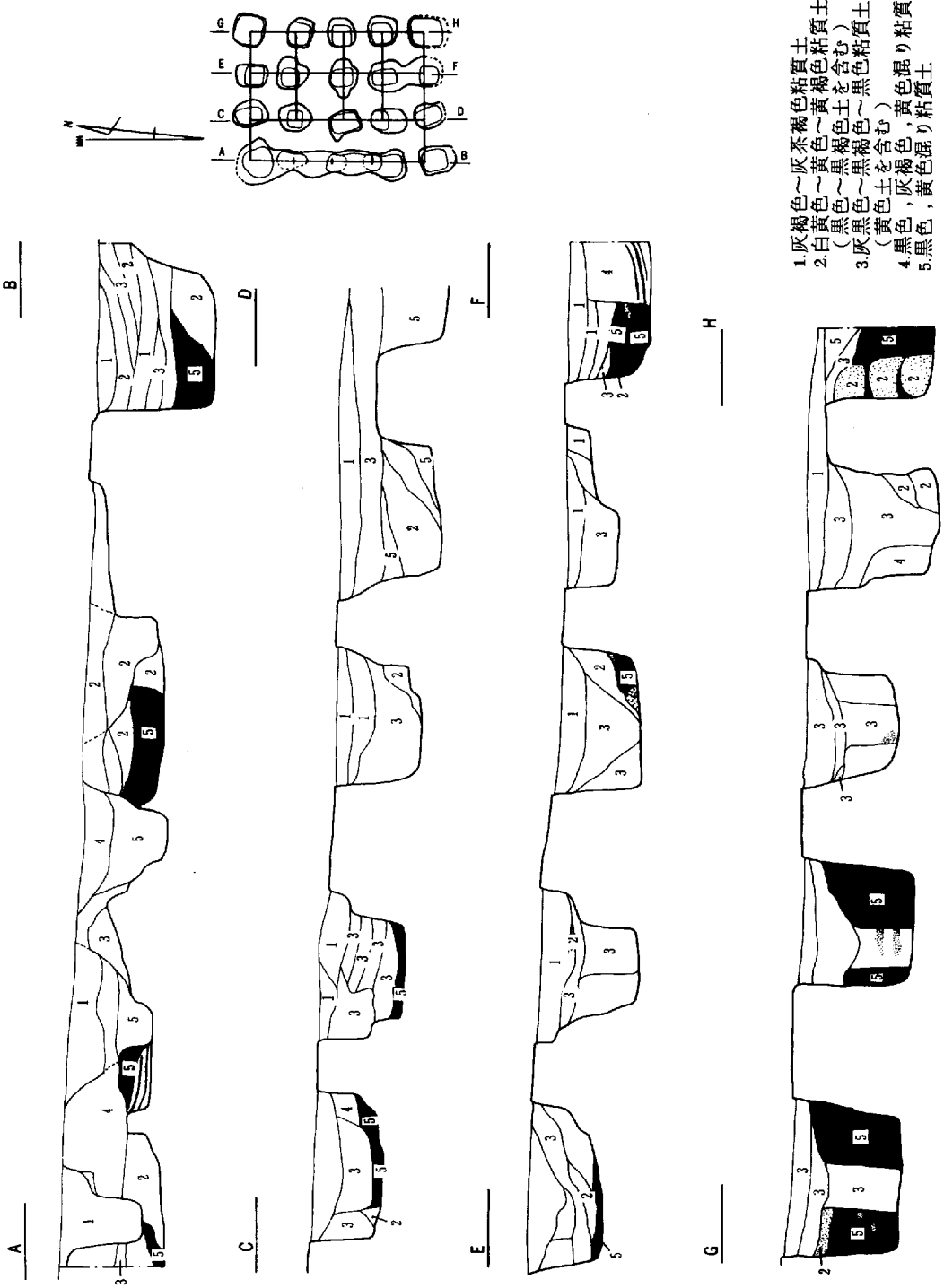

第２６図　Ⅲ区建物１１実測図（L　１２４.４０m）



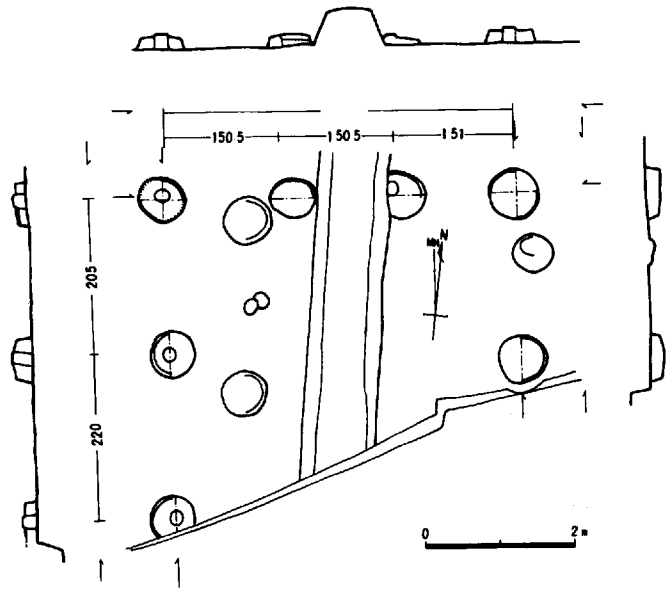

第27図　Ⅲ区建物11．2土層断面図



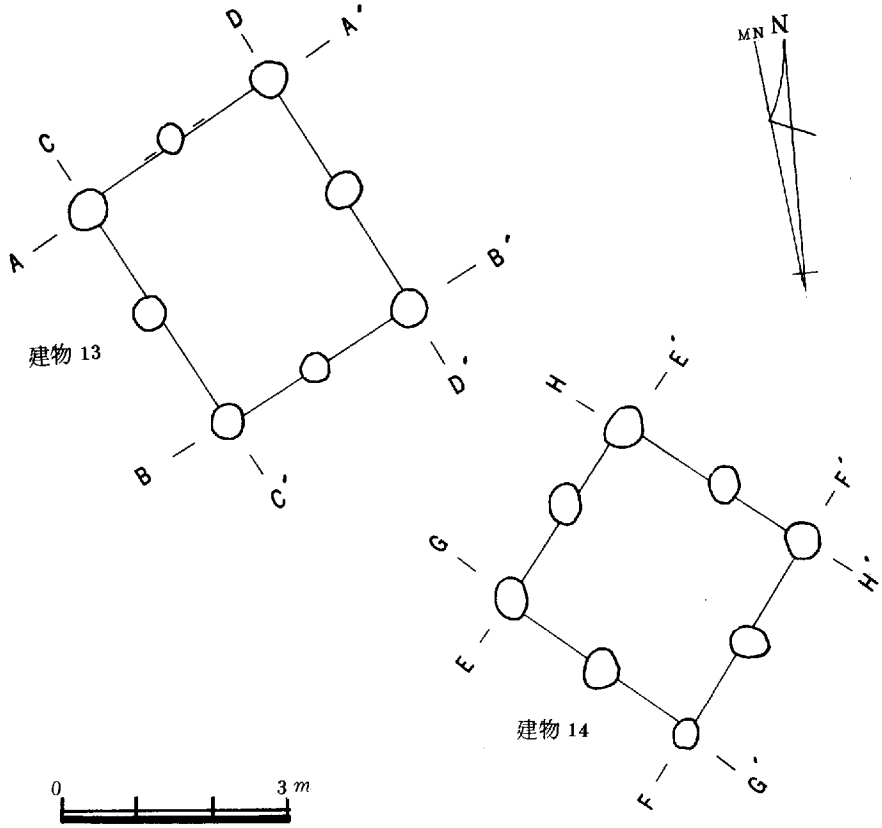

第28図　Ⅳ区建物12実測図（L.124.90m）



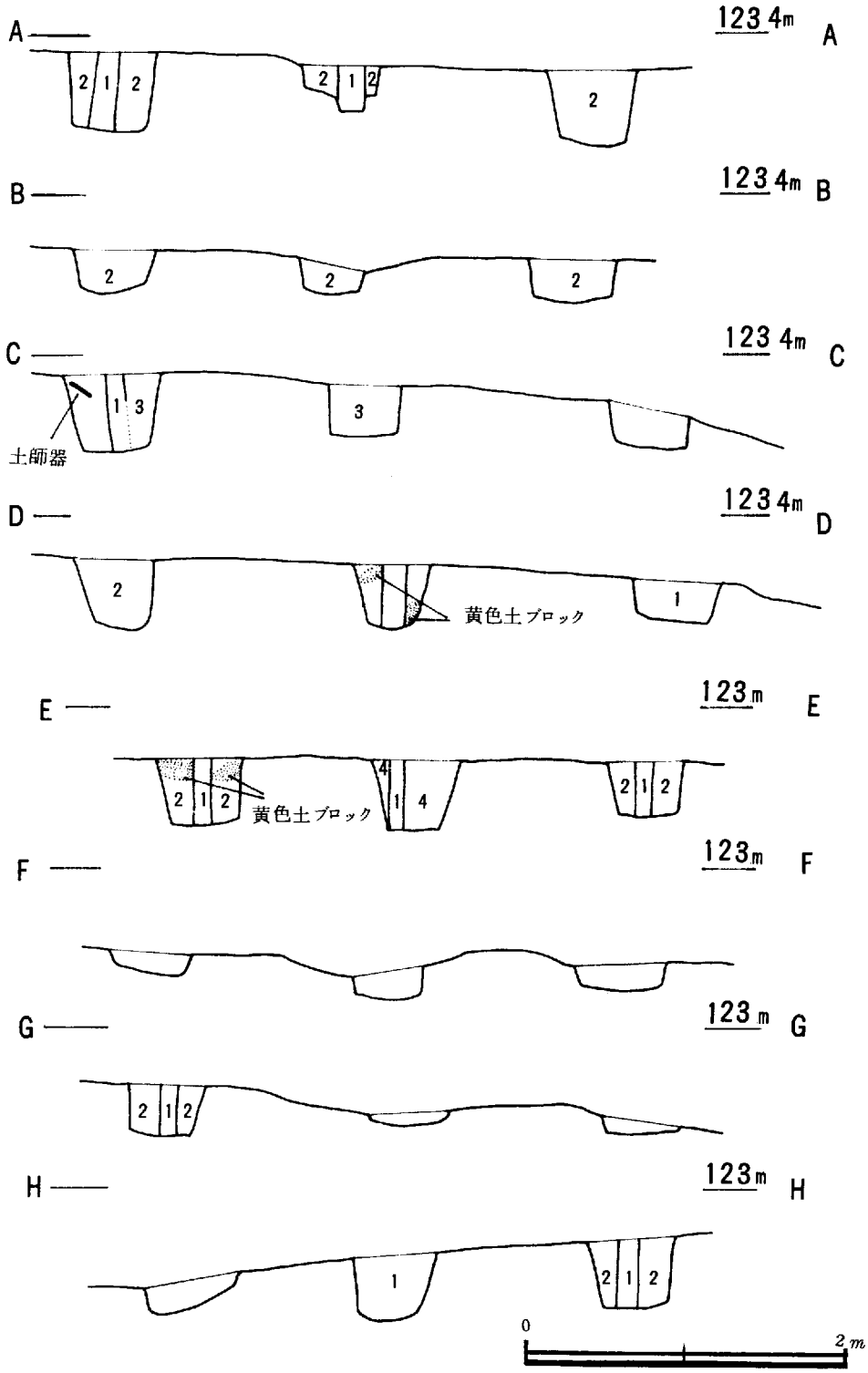

第29図　建物12土層断面図（L.124.90m）



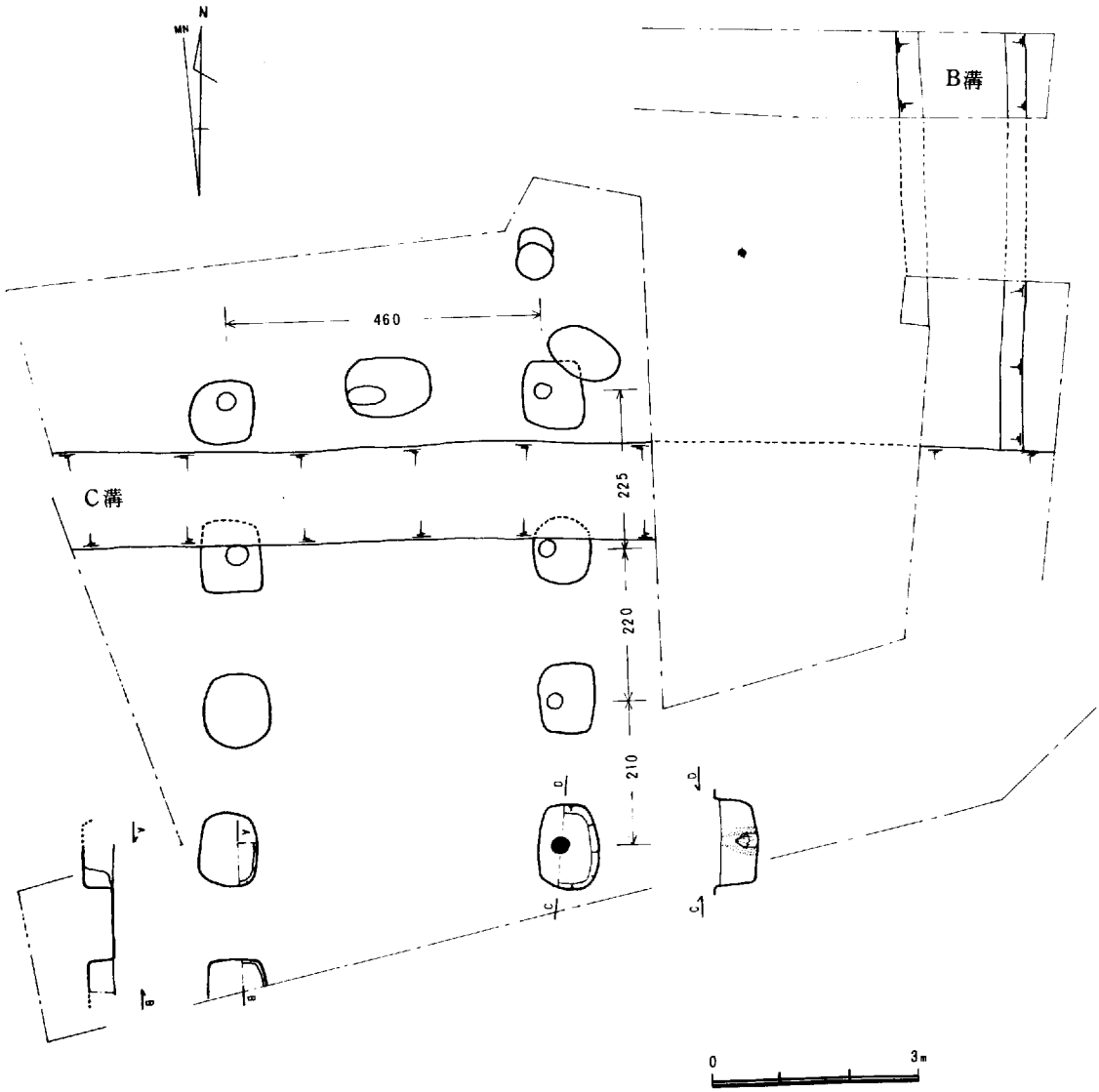

第２３図　Ⅱ区建物７実測図（Ｌ．１２５$m$）



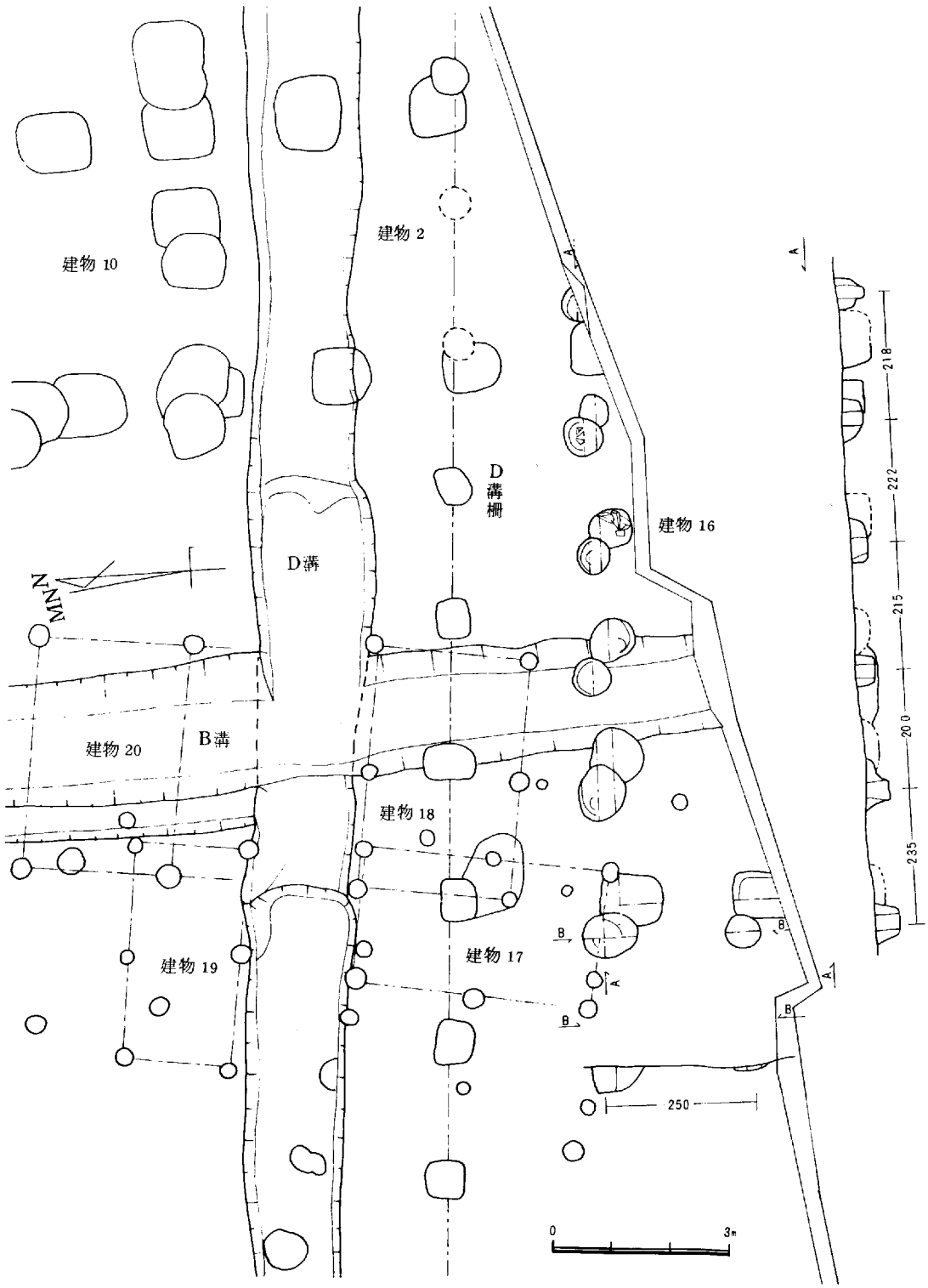

第３０図　Ⅱ区建物１３．１４平面図



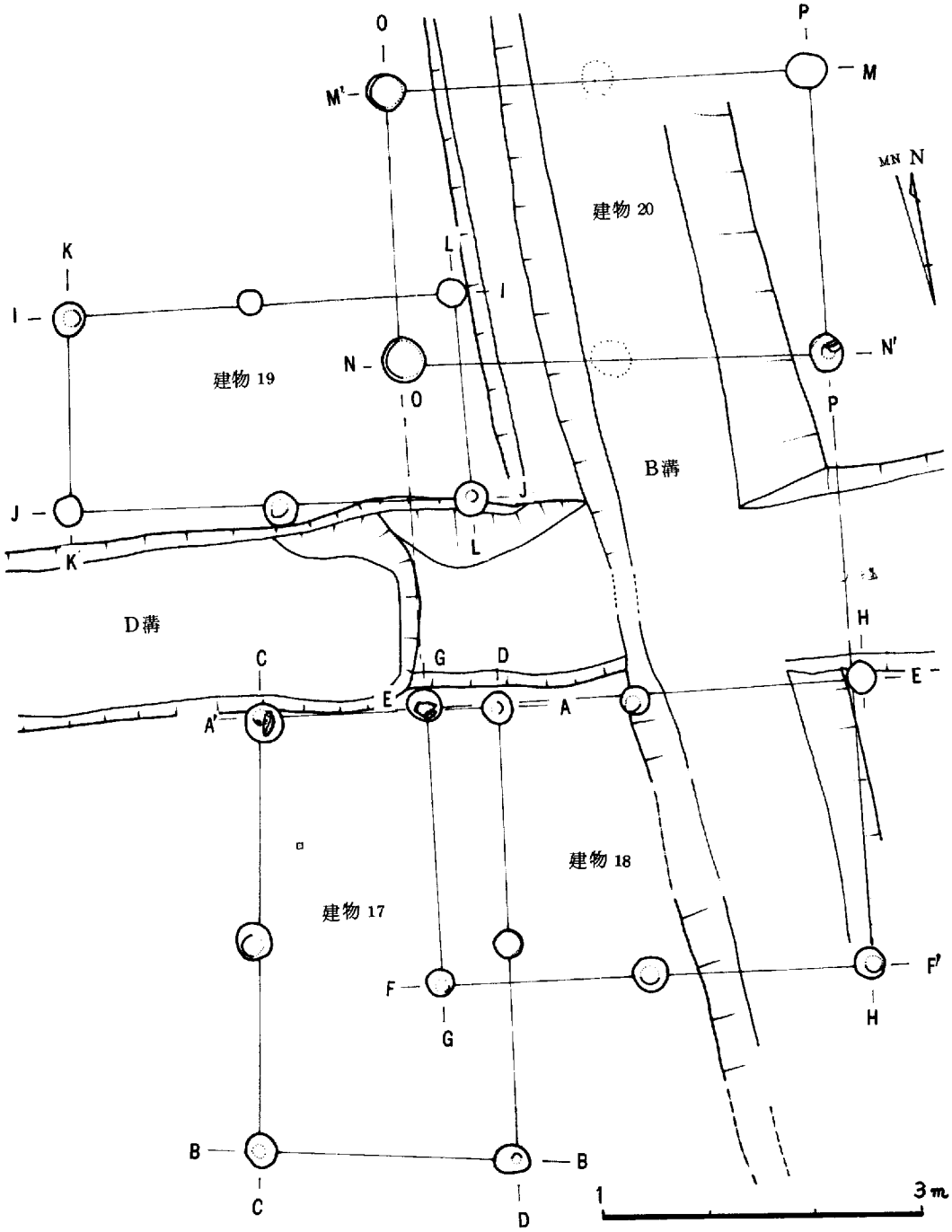

第31図　Ⅱ区建物13．14断面図



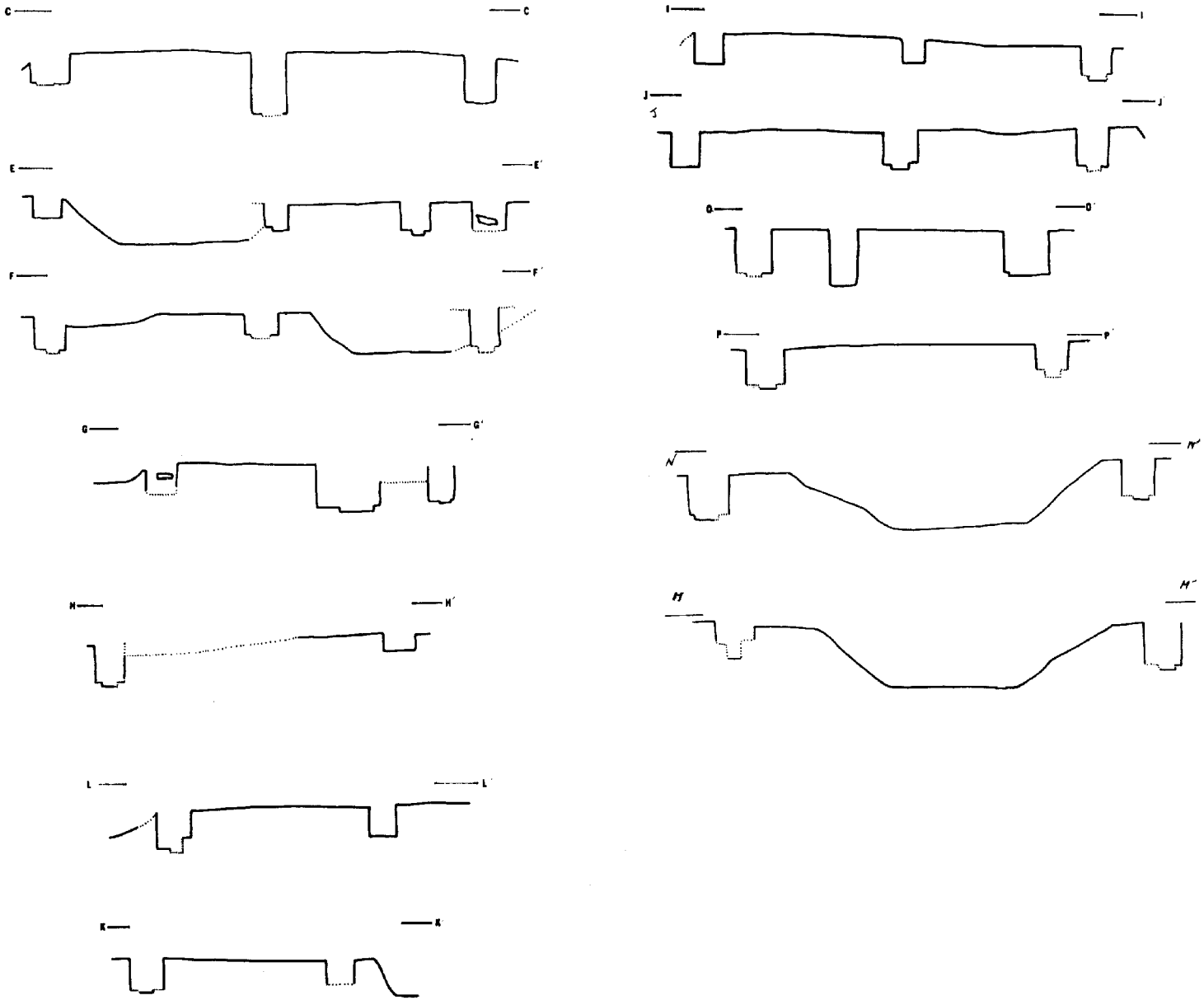

第32図　建物15実測図（L.123.80m）



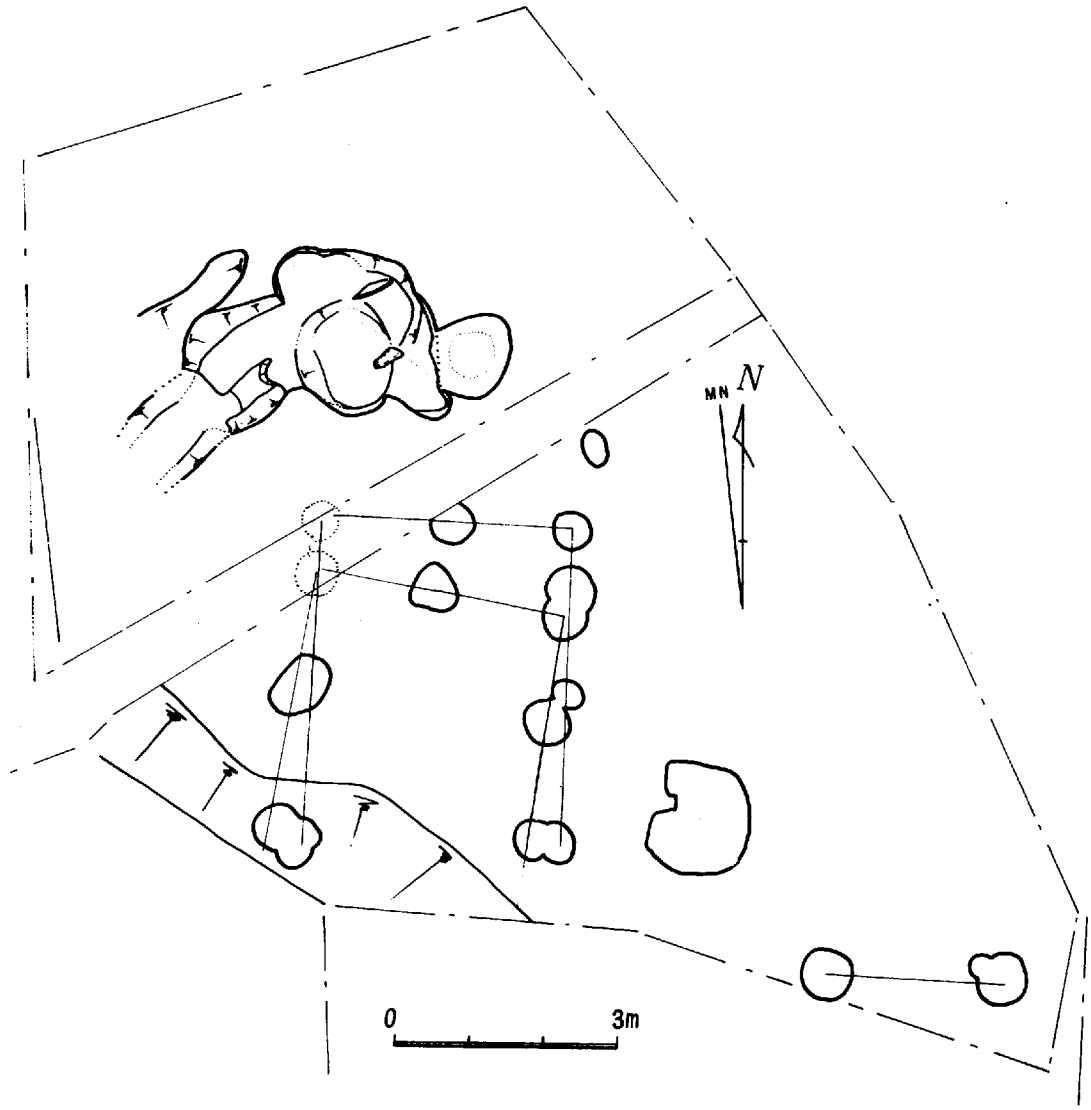

第33図　Ⅲ区建物16付近実測図（L．124.30m）




第34図　Ⅲ区建物17．18．19．20平面図



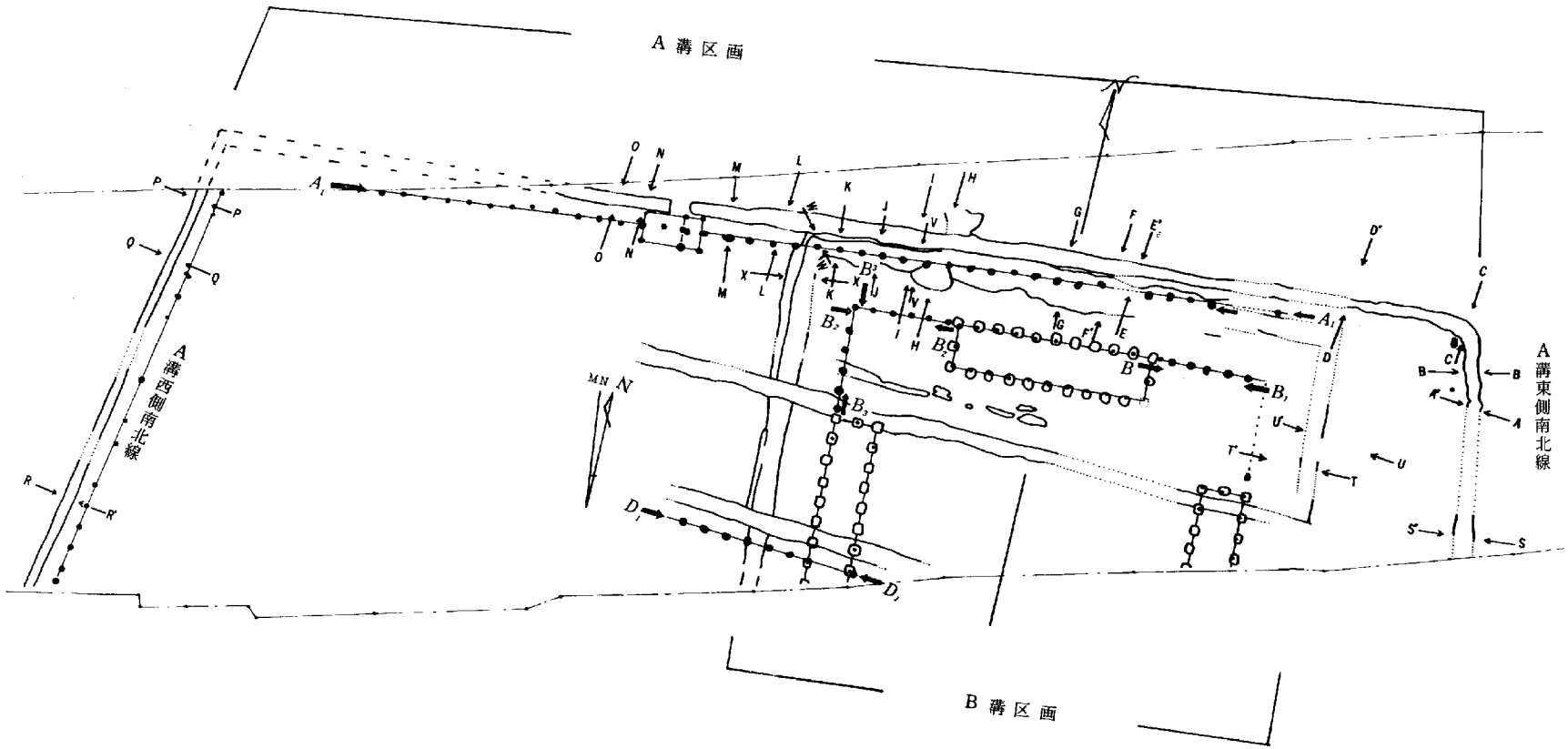

第35図　Ⅲ区建物17.18.19.20断面図



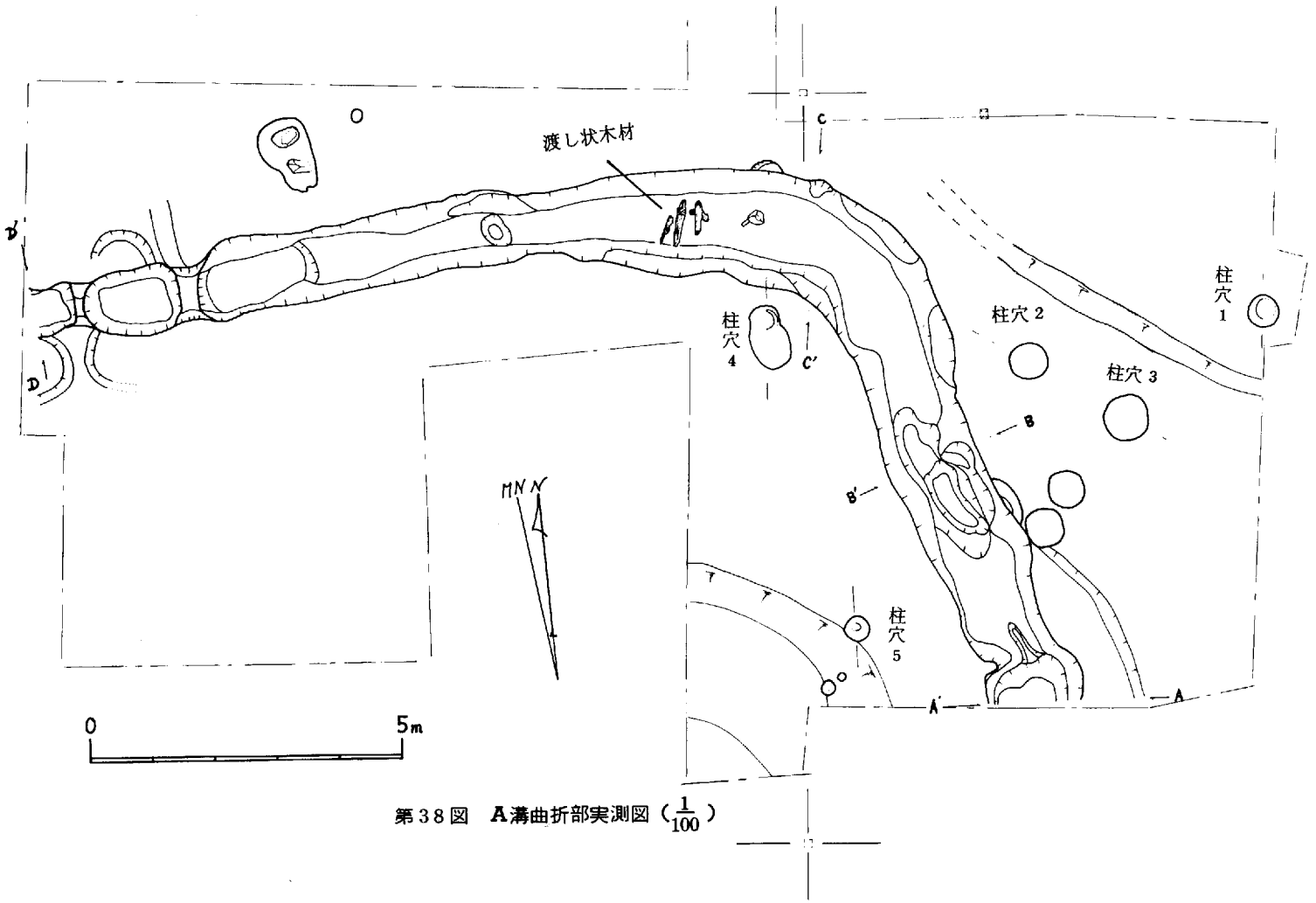

第36図　N区建物21．22及び土壙3平面図

# 表 1 建 物 一 覧 表

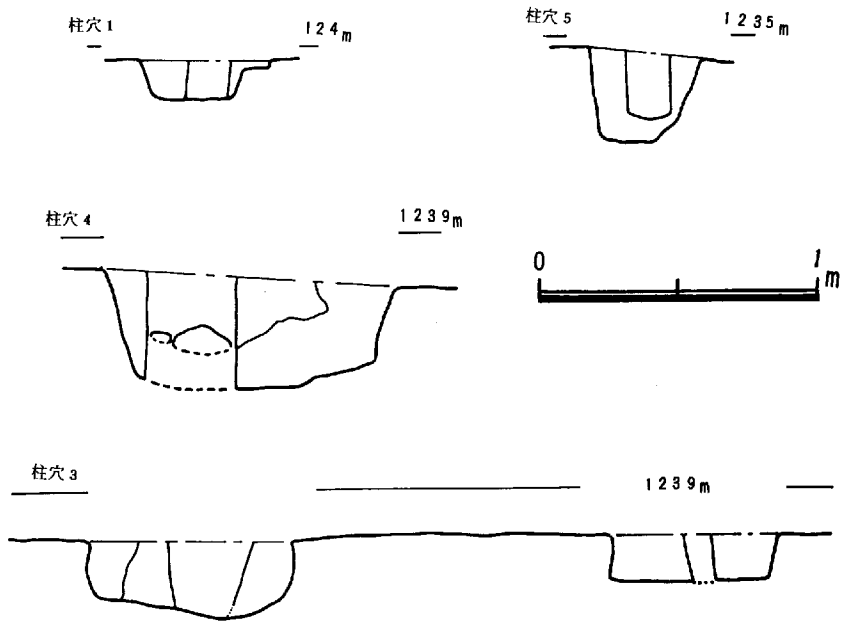
| 建物 | 検出地区 | 規模 | 柱間寸法 桁行 (cm) | 梁行 (cm) | 桁行(m) | 梁行(m) | 中間梁行(m) | 面積($m^2$) | 棟方向 | 真北に対し方位 | 柱穴掘方 | 柱,柱痕径 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 建物 1 | Ⅱ区 | 12 × 2間 | 182～244 | 238～252 | 26.14<br>26.22 | 4.88<br>4.92 | 4.70～4.85 | 129 | N－S | 0° | 方形 | | 柱抜き取り |
| 〃 2 | Ⅲ区 | 8以上× 2間 | 205～233 | 229～232 | — | 4.61 | 4.50～4.60 | — | 〃 | N 2°40'W | 方形 | 20～26cm | 柱残存 |
| 〃 3 | 〃 | 11 × 2間 | 210～235 | 旧163～194<br>新255～290 | 24.51<br>24.31 | 5.39<br>5.45 | 5.40～5.60 | 133.6 | E－W | N 92° E | 方形 | 20～25cm | 梁行 3→2間に |
| 〃 4 | Ⅱ区 | 6 × 2間 | 221～256 | 300 | 14.34<br>14.44 | 6.00 | 6.00 | 86.6 | N－S | N 7°15'E | 方形,円(一部) | — | 柱抜き取り |
| 〃 5 | 〃 | 8(以上)×2間 | 272～333 | 300～304 | — | 6.04 | 5.90～6.10 | — | E－W | N 90°50'E | 方形 | — | |
| 〃 6 | 〃 | 6以上× 2間 | 230～270 | 260～310 | — | 5.70 | 6.40 | — | N－S | N 4°30'E | 円形 | 20 | |
| 〃 7 | 〃 | 2以上× 3間 | 205～220 | 150.5,151 | — | 4.52 | — | — | 〃 | N 4°30'E | 〃 | — | |
| 〃 8 | 〃 | 5 × 2間 | 226～250 | 300 | 12.06 | 6.38 | | 76.9 | 〃 | 0° | 〃 | — | |
| 〃 9 | 欠 | | | | | | | | | | | — | |
| 〃 10 | Ⅲ区 | 8 × 2間 | 278～319 | 312 | 23.50<br>23.64 | 6.24 | 平均 6.30 | 148.9 | E－W | N 91°20'E | 方形→円形 | — | 建直し |
| 〃 11 | 〃 | 10 × 2間 | 200～212 | 217～245 | 20.74 | 4.47 | 4.45～4.70 | 92.7 | 〃 | N 92°50'E | 方形,円(一部) | 20～23 | 柱残存 |
| 〃 12 | Ⅳ区 | 4(以上)× 3間 | 145～156<br>165～189<br>204 | 500 | 6.60<br>6.70 | 5.09<br>5.00 | 5.0 | 34.1 | N－S | N7°30'W | 方形 | — | 束柱を残し一部建直し倉庫 |
| 〃 13 | Ⅲ区 | 2 × 2間 | 170 | 140 | 3.5 | 2.9 | 2.9 | 10.2 | NW－SE | N 26°W | 円形 | 15 | |
| 〃 14 | 〃 | 〃 | 140 | 140 | 2.9 | 2.9 | 2.9 | 8.4 | NW－SE | N50°W | 〃 | 10 | |
| 〃 15 | 〃 | 4以上× 2間 | 210～225 | 230 | — | 4.60 | 4.5～4.6 | — | N－S | N 3° W | 方形 | — | 柱残存 |
| 〃 16 | 〃 | 5以上×1間以上 | | | | | | — | E－W | N 90° E | 方形→円形 | 20 | 建直し |
| 〃 17 | 〃 | 2 × 1間 | 200～224 | 226～244 | 4.12～4.26 | 2.26～2.44 | 2.40 | 9.4 | E－W | N 7°40'E | 円形 | 10cm前後 | |
| 〃 18 | 〃 | 〃 | 200～210 | 260 | 4.10 | 2.60 | 2.60 | 10.9 | E－W | N 84°10'W | 〃 | 10～17cm | |
| 〃 19 | 〃 | 〃 | 170～200 | 180～192 | 4.00 | 1.80～1.92 | 1.95 | 6.7 | N－S | N 83°30'W | 〃 | 12～16cm | |
| 〃 20 | 〃 | 〃 | 200 | 255～265 | 4.00 | 2.55～2.65 | 2.60 | 10.4 | E－W | N 81°25'W | 〃 | 13cm | |
| 建物20＋18 | 〃 | 3 × 2間 | 255～330 | 200～210 | 8.45 | 4.00～4.10 | 4.05 | 33.6 | N－S | N 7° E | 〃 | 10～17cm | |
| 〃 21 | Ⅳ区 | 2(以上)×2間 | 210 | 165～170 | — | | | — | N－S | N 2° E | 〃 | — | |
| 〃 22 | 〃 | 2(以上)×2間 | 150 | 170～180 | — | | | — | N－S | N 9° E | 〃 | — | |




第37図　A溝．B溝土層断面図，柵列A．柵列B断面図位置図




第38図　A溝曲折部実測図（$\frac{1}{100}$）




第39図　Ⅲ区A溝曲折部付近柱穴断面図

A溝

本遺跡で検出した最大の遺構であり，ほかに検出した溝および溝状遺構の中でもむろん最大・最長のものである。このA溝の位置する部分は台地A・谷B・台地B・谷Cにまたがり，A溝東曲折部は台地Cの縁辺に沿って南方向きに向かっている。A溝の北辺はⅡ区からⅢ区にかけての東西約135m（未掘部分を含めての推定数値）の範囲に位置し，Ⅲ区東端（EⅤNⅡ区）でやや開いて曲折し南方向に向かっている。Ⅱ区曲折部分は縦貫道道路敷内では検出できず，第37図のように，曲折することを前提とすれば，曲折部を推定することができる。東・西曲折部の曲折角度は東西線（北辺）に対して直角ではなく東曲折部は95°，西曲折部は 105° を測る。このことによって整然たるコの字形の溝と異なり，地形による制約が考慮され，地形にさからわないという企画が認められる。それがために，ややいびつな印象を与えるものである。

A溝は本遺跡において，B溝区画に対するA溝区画と形成している。B溝よりも時期的に新しいA溝が，B溝と並行して検出されたことはその方向性においてほとんど意識的踏襲が為されていることも認められる。平面的にみれば，A溝区画すなわちA溝によって区画され，囲繞された区域の中にB溝区画が包括されるということもわかる。

※B溝は単純な土層で埋没している。最終埋没を示す上層の土は，第2次造成（宮尾遺跡の全体―谷部・丘陵部―は埋めたて・整地・削平を2～3次にわたっておこなっている。）の土であり，ある時点で埋められた可能性が強い。B溝埋めたて，まもなくA溝が企図され掘り上げられている。

(1) A溝の付属設備

a 柵列A（別項参照）

A溝の内側に約2.4 m間隔で並ぶ。A溝とこの柵列Aとの間にはおそらく土塁のように土が盛り上げられていたのであろう。A溝が排水，つまり防水的な用途のほかに防護的な役割も果すとすれば，この柵列Aと共に存在することはその一方の役割を補強するものであろう。

b 門状遺構

Ⅲ区西端（ＥＩＮⅡ）でA溝が途切れる部分がある。（第１３図）この部分には簡単な構造の門が置かれその通路として巾２mの部分を堀り残したものであろう。

c 渡し

Ⅲ区東端曲折部（ＥⅤＮⅡ）の部分で３本の木材が出土した。（第３８図）これは溝の東西線に直行する方向を示しているところから，渡しあるいは簡便な架け橋が存在したことを物語っている。おそらくその木材が，そのまま腐蝕落下し，遺存したものであろう。

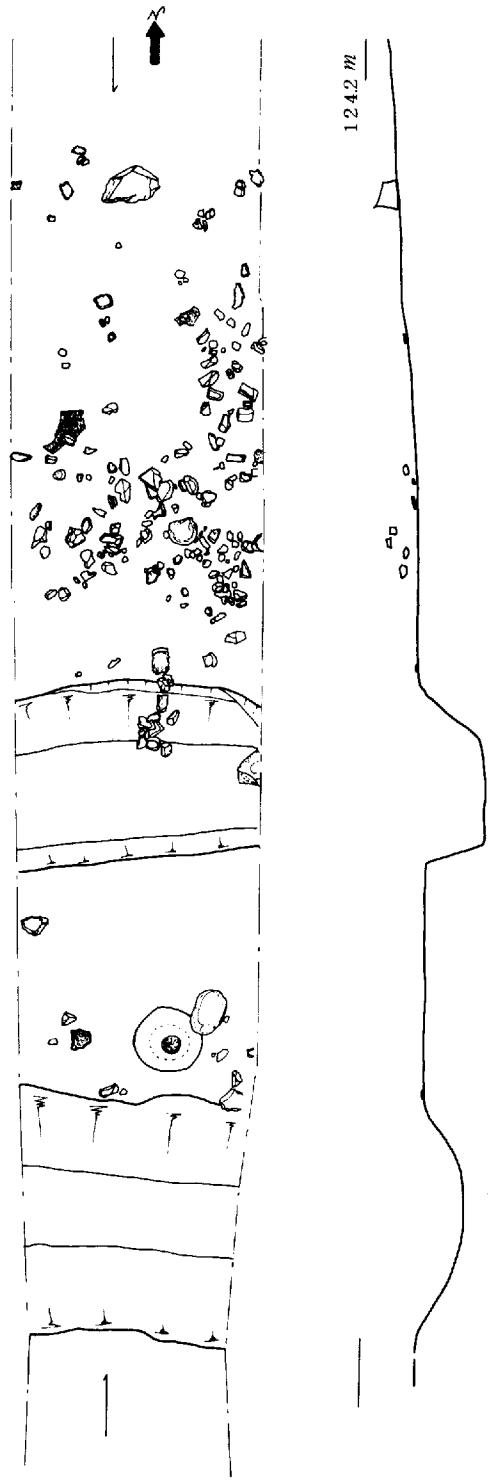
d 仕切り状遺構（第38図）

Ⅲ区東端曲折部（ＥⅤＮⅡ）の西数mの部分は溝を仕切るがごとく，溝の掘り上げがおこなわれている。掘り残し部分は巾50cmの土手となっている。また掘りくぼめられた部分は３か所となっている。流水の緩衝的役割を果していると考えられる。（A溝レベル参照）

A溝土層断面の観察によると中層の部分は，V字を成し流水が大なり小なりあったことを示している。ただ，Ⅱ区では立地上明確ではない。A溝西辺はさほど地形にあった位置を占めず，単なる区画にすぎないとみることもできる。A溝西辺南北線と北辺東西線がつながると推定しているが，なお疑問の余地がある。

※A溝レベル表（付B溝レベル）--レベル数値は標高。測定は最深部地山面。

| | | |
|---|---|---|
| A—A′ | ～A溝 | 122.66m |
| B—B′ | ～A溝 | 122.34m |
| C—C′ | ～A溝 | 123.32m |
| D—D′ | ～A溝 | 123.0m |
| E—E′ | ～A溝 | 123m |
| | B溝 | 123.41m |
| F—F′ | ～A溝 | 123.16m |
| | B溝 | 123.53m |
| G—G′ | ～A溝 | 122.93m |
| | B溝 | 123.61m |
| H—H′ | ～A溝 | 123.18m |
| | B溝 | 123.70m |
| I—I′ | ～A溝 | 123.21m |
| J—J′ | ～A溝 | 123.27m |
| | B溝 | 123.87m |
| K—K′ | ～A溝 | 123.32m |
| | B溝 | 123.80m |
| L—L′ | ～A溝 | 123.35m |
| M—M′ | ～A溝 | 123.49m |
| N—N′ | ～A溝 | 123.68m |
| O—O′ | ～A溝 | 123.64m |
| P—P′ | ～A溝 | 123.88m |
| Q—Q′ | ～A溝 | 124.1m |
| R—R′ | ～A溝 | 123.76m |

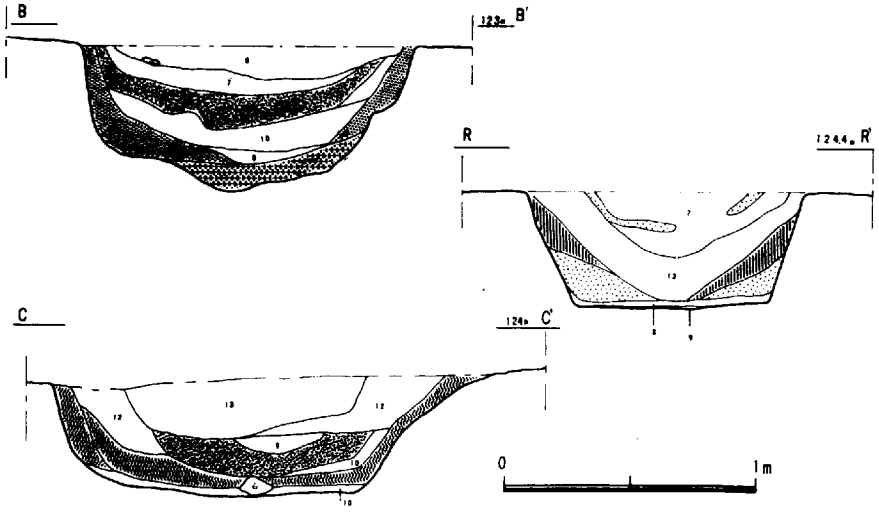



第40図　南北トレンチ実測図

(2) A溝の出土遺物（第４９・５０図）

遺物は土器類を中心として，本遺跡でもっとも多く出土している。須恵器は甕・壺・坏・高坏などの出土をみた。ことに坏蓋・坏身は，形質共に良好で，特定の窯から供給されたかのような印象を与える。壺（第４９図―１５）もやはり秀逸な焼成を認めることができる。土師器は，丹塗りの坏身がN区中央部分で集中して出土している。うち１点は墨書土器であるが，文字は判読しかねている。木器として，板状（羽子板状）木器が出土している。用途は不明である。（第５０図―５）

以上のような遺物のほかに，炭化物・鉄滓・木炭片・ワラ状繊維遺体などがみられる。紙数の関係上すべてとりあげることが不可能である。御了承願いたい。　　（岡　田）

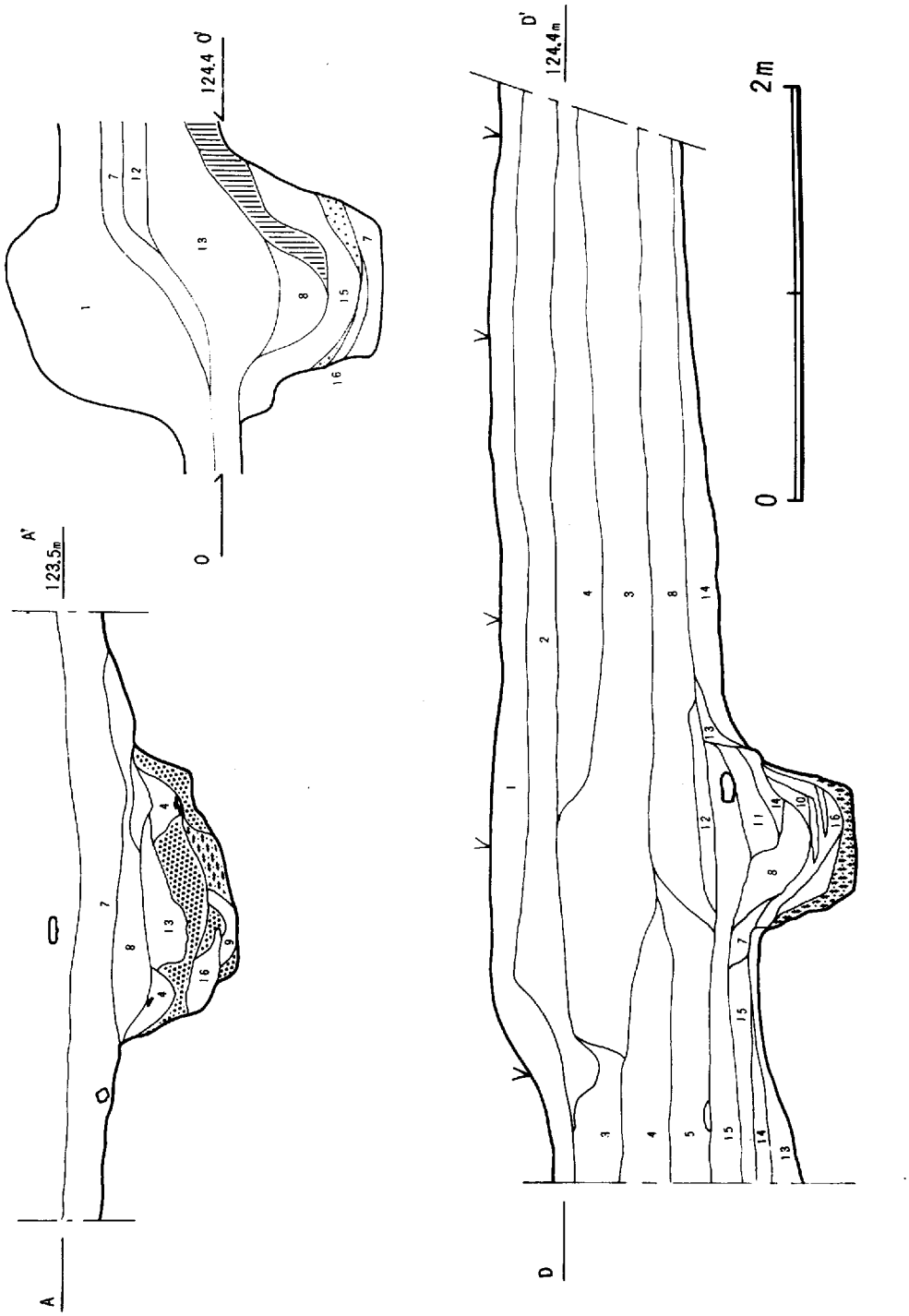



1 ▨ ‥地山土（黄色土）　2 ▨ ‥黒色粘質土（地山土黄色土ブロックまじり）
3 ▨ ‥黒褐色土（地山土黄色土ブロックまじり）　4 ▨ ‥灰黒色土（地山土黄色土ブロックまじり）　5 ▨ ‥灰色土～灰褐土（地山土黄土ブロックまじり）　6 ▨ ‥褐色土～暗褐色土（地山土黄色土ブロックまじり）　7 ▨ ‥灰青色土（地山土黄色土ブロックまじり）

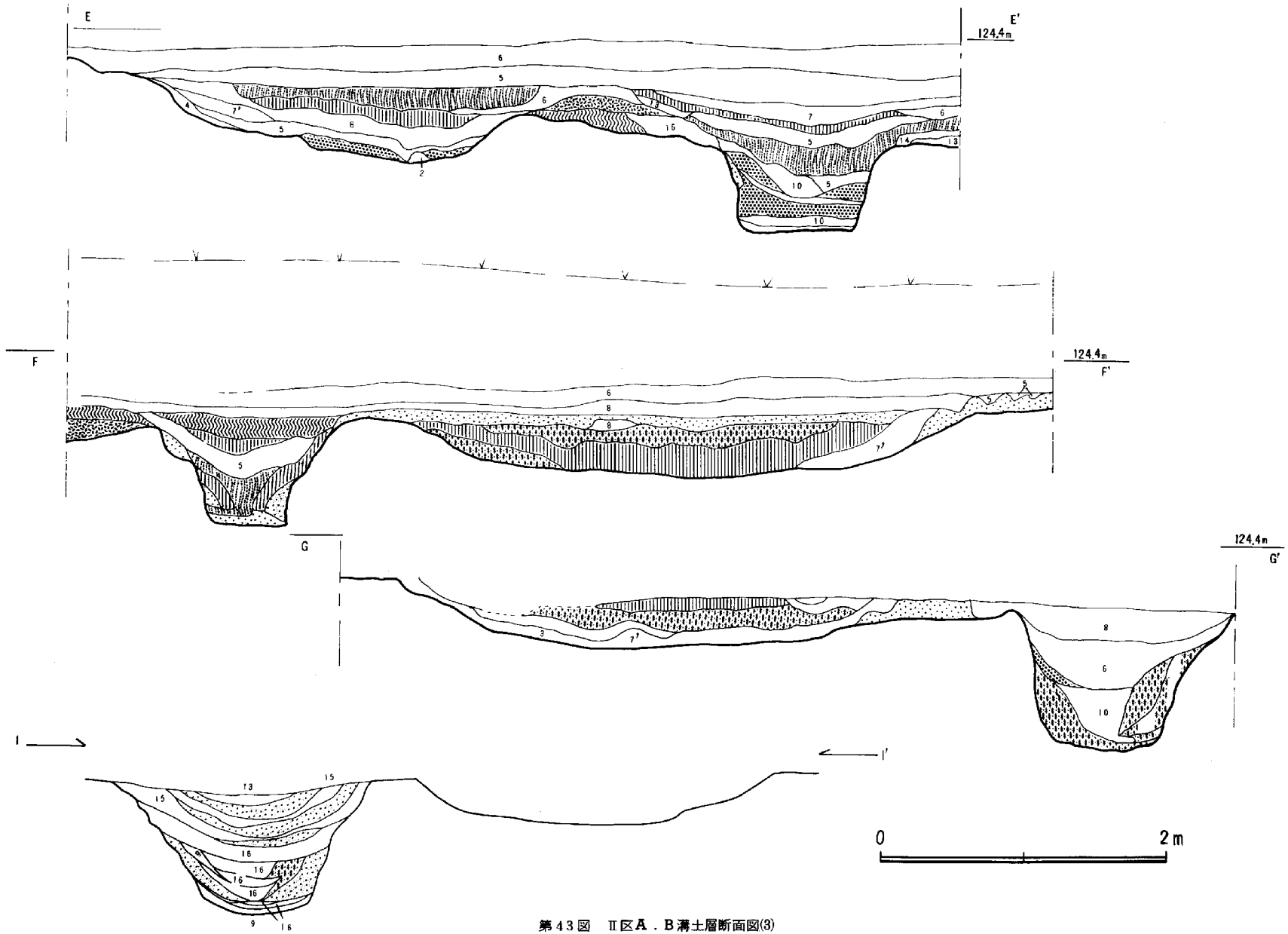
第４１図　A溝土層断面図 (1)

①……表土（耕土）　②……明灰色粘質土　③……灰色粘質土　④……暗灰色粘質土
⑤……青灰色粘質土　⑥……暗青灰色粘質土　⑦……灰黄褐色土　⑧……暗灰褐色土
⑨……灰色砂層　⑨……灰白色土（砂質）　⑩……灰黒色土　⑪……灰黒褐色土
⑫……茶褐色土　⑬……暗褐色土　⑭……黒褐色土　⑮……暗黒褐色土　⑯… 黒色粘質土

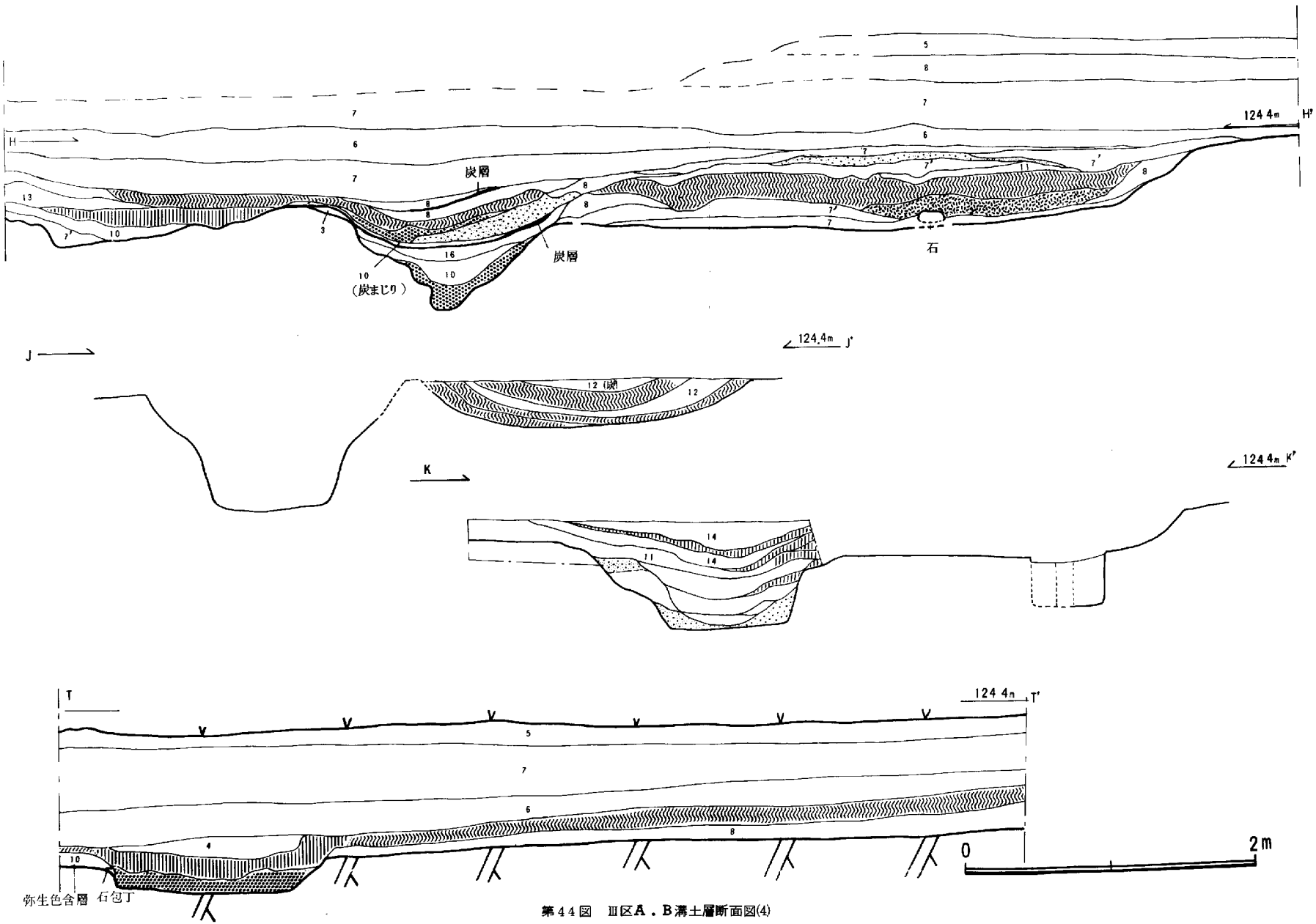
なお上記の１～７の土層区分文様と①～⑯の土層名は第４１図から４７図に共通するものである。



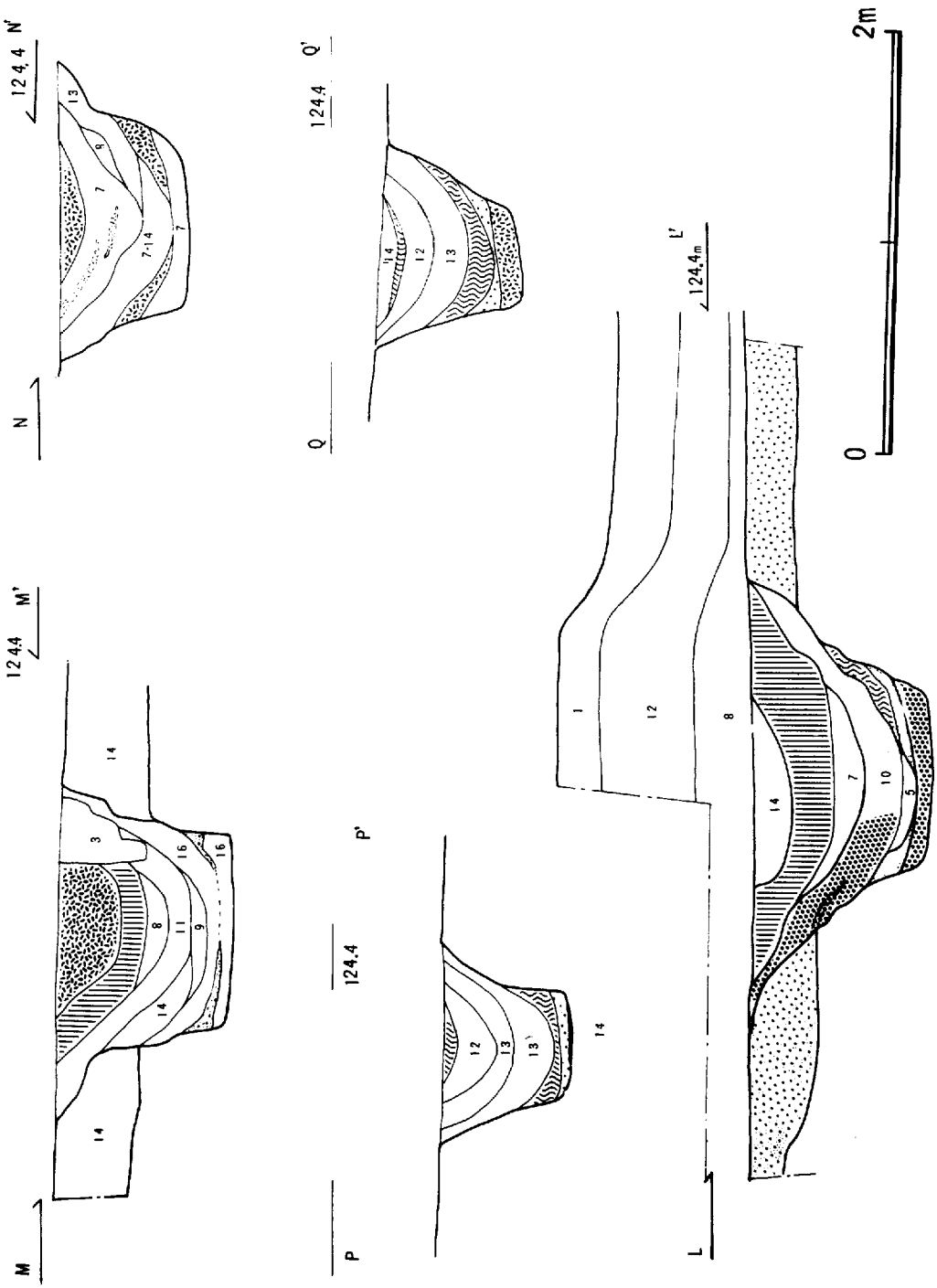

第42図　Ⅱ区A溝土層断面図



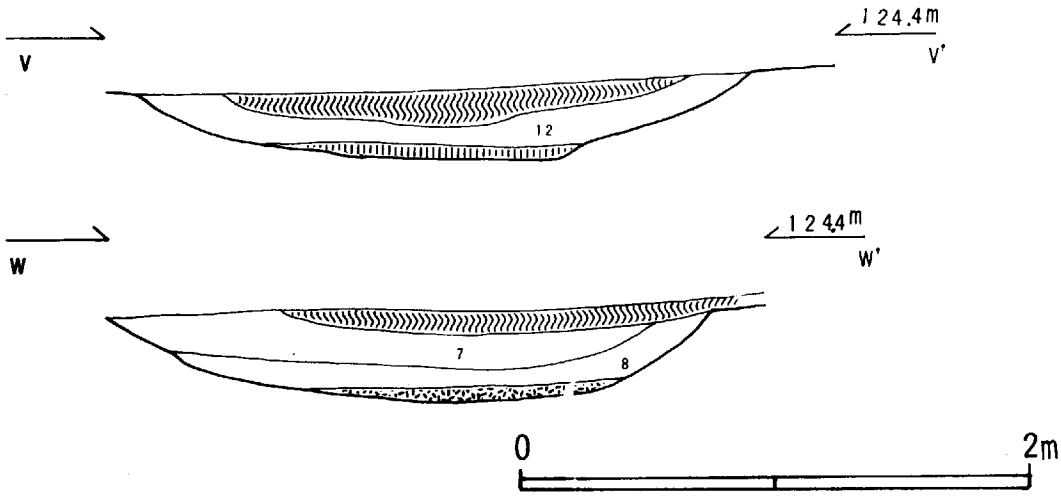

第43図　Ⅱ区A．B溝土層断面図(3)




第44図　Ⅲ区A．B溝土層断面図(4)




第45図　Ⅱ．Ⅲ区A溝土層断面図(5)




第46図　Ⅲ区B溝土層断面図 (6)

柵列A

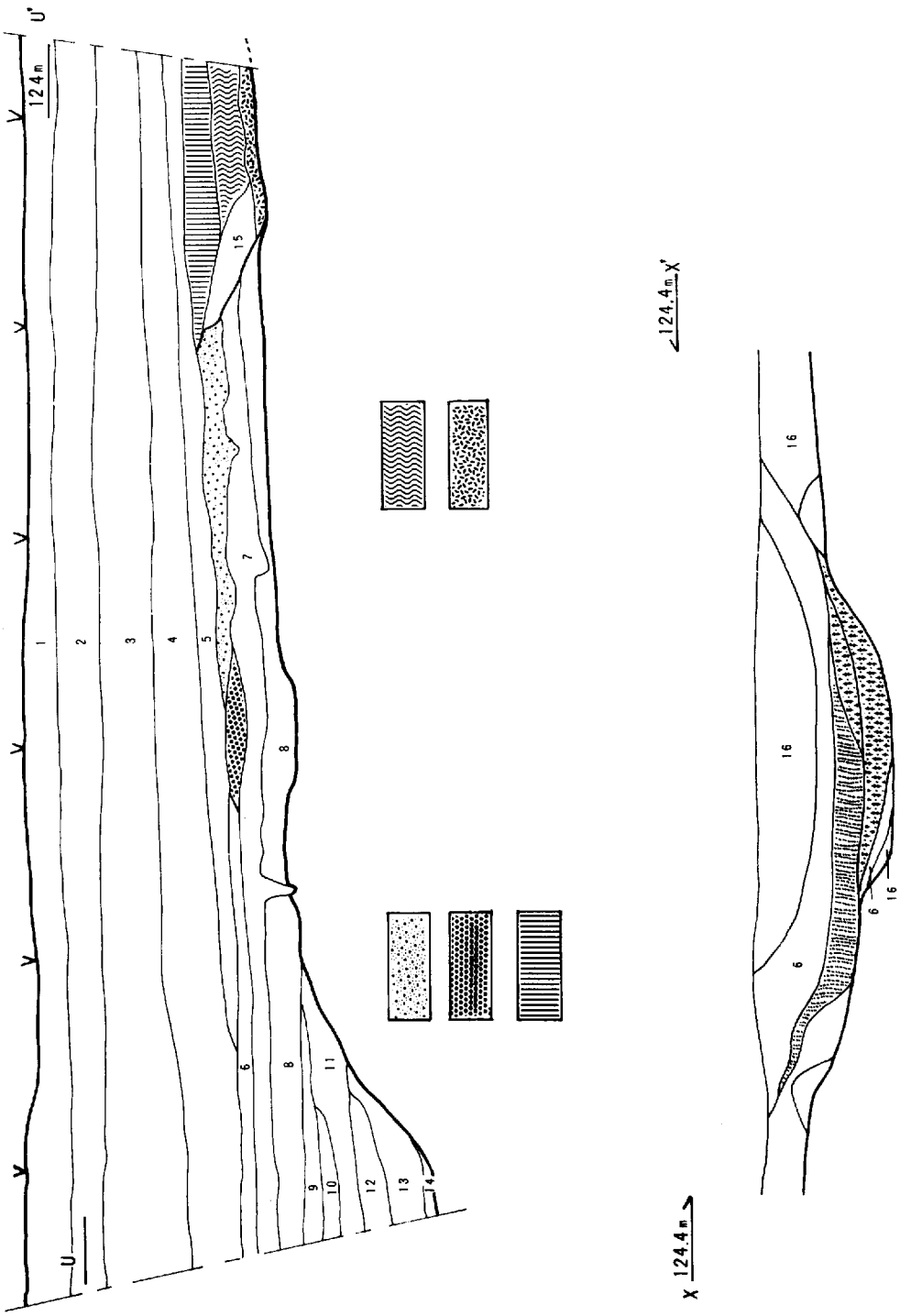
Ⅱ区からⅢ区にかけてA溝内側に平行して検出した総延長160mにも及ぶA溝に次ぐ宮尾遺跡の大規模な遺構の1つである。柱穴間はほぼ2.4m等間で掘られ，A溝と柵間の巾もほぼ2.4mである。

Ⅱ区南北方向内側では全長45m，検出柱穴個数13，柱穴径40～50cm，深さ15～20cmを測る。建物5付近では攪乱と切合により消滅している箇所がある。東西方向は総延長115m，検出柱穴個数40，柱穴径40～80cm，深さ20～60cmを測る。東西方向EⅢ・NⅡ，付近の柱穴では径20cm前後の丸柱が残存していた。又，Ⅲ区北西部分でA溝は上端巾2mにわたり途切れており，この部分の柵は北方への出入口とみられる門状の柱穴を伴い検出された。

出土遺物は，須恵器，土師器，鉄滓，炉壁片が少量出土しているが小破片で図化不可能である。須恵器は，甕破片で体部外面に格子の叩目，内面には同心円の叩目が施されている。土師器は，甕破片，カマド片が出土している。

B溝

Ⅲ区の中央に位置する建物2・11・15をコ字形に囲繞した素掘溝である。溝の北東コーナー部分及び東側南北部分は一部未掘であるが総延長117mを測り，なお両南北方向の溝は南の用地外へへと進向している。東西方向の溝は検出総延長50m，推定延長56m，上端巾2～4m，底面巾1～3m，深さ20cm前後を測り，平面は不規則な蛇行を示し，断面はレンズ状を呈している。両南北




第47図　Ⅲ区B溝土層断面図(7)

方向の溝は上端巾1.7～3m，深さ40～70cmを測り浅い逆台形を呈しほぼ直進している。溝底面は平担で，レベルは，北西隅より，東に10m付近を最高とし，西側の南北方向南端で－65cm，東西方向の南北トレンチで－71cm，東側の南北南端まででで－79cmと南方へと下降している。溝堆積土層は上，下層に大別でき，上層は黄褐色，黒褐色，灰褐色混りの整地土が堆積し，下層では灰色～灰褐色の粘質土で一部グライ化がみられる。

B溝との重複遺構は，東西方向の北側でA溝と接し，一部で切り合っている。B溝検出上面でA溝柵列の柱穴が掘られており，A・B溝及びA溝柵の前後関係が把握できた。西側南北方向では北より井戸状遺構・C溝・建物3・18・20・D溝・D溝柵・及び建物16と重複関係にある。しかしその前後関係はB溝が最も古く，他は全てB溝以後の遺構である。東側南北方向は南端部でC溝が切っている。

B溝出土遺物

須恵器，土師器，弥生式土器，鉄滓，吹子口等が出土している。ほとんどが破片であり，図示できたのは少量であった。

須恵器は坏，高坏，甕，平瓶の器形が見られる。坏(1)・(2)は高台がシャープな造りで外に斜き内側稜線のみが，接するもので，(3)は高台底が平で底部から口縁にかけて丸味をおび，口縁はゆるく外反するものである。後者は溝整地土（上層）の上面出土であり，直接B溝に伴うものとは考えられない。高坏は全て脚部の破片で図示出来るものは6点であった。(4)(5)(6)(7)は短脚で裾は大きく開き脚端に(5)(6)では一本の稜線が見られる。(8)(9)はやや脚が長く後者は脚上端に一本の沈線が施されている。高坏出土層位は(4)が，整地土内であり他は下層から溝底面に接しての出土である。甕(10)は口縁部が大きく外反して丸味を持った器形である。(11)は径40cmの体部外面に格子の叩目・内面に同心円の叩目を施している器形である。他の甕破片では体部外面に平行の叩目を内面には同心円の叩目を施した破片が多く出土している。平瓶(11)は整地土層内より出土の口縁部のみを欠損した整形良好なものである。胴最大径15cm，底部径8cmを測り，底はやや上底の造りである。肩はややはっており，底と胴下半部でヘラ切り痕が明瞭に認められる。他に図示できなかったが，甕・壺片の出土がみられた。

土師器は甕，かまど，鍋等の器形がみられる。全て小破片であり，図化不可能なものであった。

鉄滓，本遺跡では全般にわたりかなりの出土量がみられる。B溝内よりは径2～4cm大の鉄滓が，数10点と吹子口小破片が，2点出土している。

柵列B

東西半丁のB溝区画内には，建物11を中心とした3棟の建物が溝に平行に配列されている。この3棟の建物外側柱列を延長して建物11・2間，建物11・15間にそれぞれL状に柱穴列を配している。建物11・2間で東西5間（10.08m），南北5間（10.87m）で柱穴は円形を呈し径30cm～70cmを測る。建物11・15間では未掘部分があるが東西6間約11.5mとみられ西側より1間分多い。南北は大部分が未掘ではあるが西側と同様の配列をなしていると考えられる。

出土遺物は柱穴内より少量の須恵器が出土している。（山　磨）

C溝

Ⅲ区の中央に東西にのびる巾1.2～2m，深さ0.1～0.3mの皿状を呈する溝である。真北に対し

てほぼ直交するが建物２・３・１５を切って掘られ，溝には灰色粘土が充塡していた。

中央部の北に断続的な溝状遺構がC溝と３mの間隔を保って，約２４m検出された。築地の基底部が残存していると思われる。溝からは紐状突帯を円形にはりつけた蓋が出土した。この遺物は混入と思われる。A・B・D溝のいづれよりも新しい。建物１０と平行している。C溝は西へのびて建物１の北端の東西溝につながるか否かは不明である。

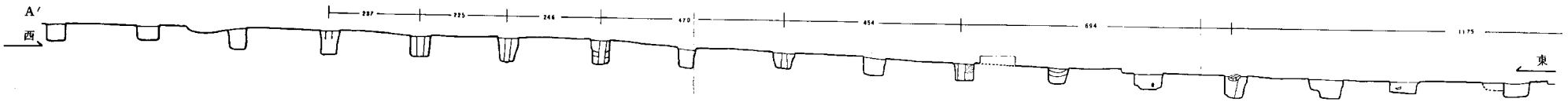
柵列D

D溝の南に存在する方形の掘り方を呈する。柱間は２３０～２４０cmである。方位は真北に対して９０°をなす。削平が著るしく，掘り方はあまり深しくない。A溝柵，B溝区画内柵が円形の掘り方であるのに対して，方形であることは注目すべきで，D溝と柵の南側には主要な建物の存在をうかがわせる。

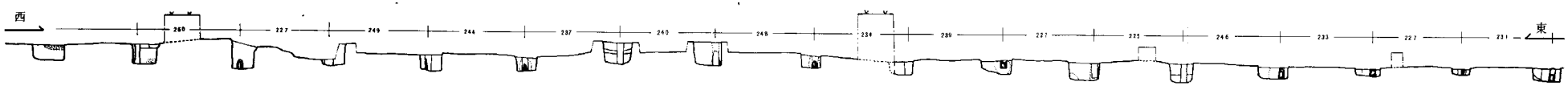
D溝

１区の南を東西に走る溝で上巾１７０～２００cm下底，１３０～１４０cm，深さ２０～７０cmの皿状もしくは逆台形を呈する。約３０m検出した。建物２，B溝を切っており，１７０～１８０cm南に柵が平行している。したがってD溝は南に存在する建物群の北側を画する機能をもつと考えられる。遺構面は造成土であり，カマドの破片が出土し，上層からは須恵器坏が出土した。溝は西へのび建物１の中央を横断し，南へ折れる浅い溝に続く可能性があるが明らかでない。

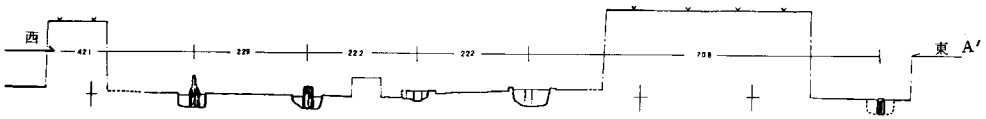
（橋　本）




A溝東西柵(1)

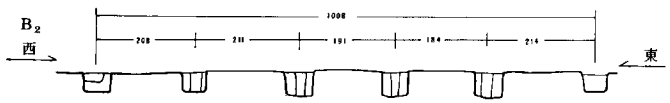



A溝東西柵(2)

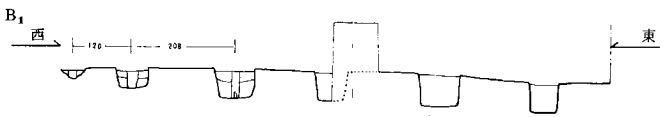



A溝東西柵(3)

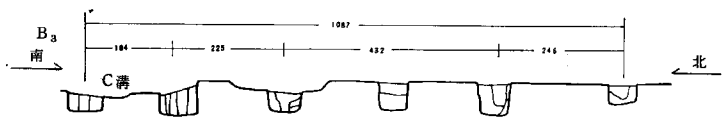
Ⅱ区A溝南端南北柵



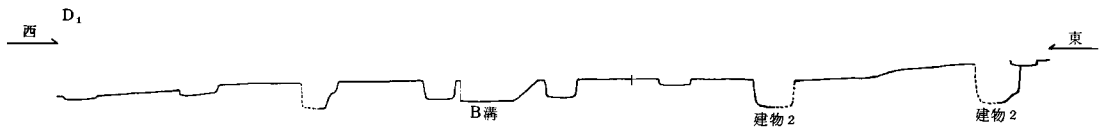

建物11東側東西柵




建物11西側東西柵

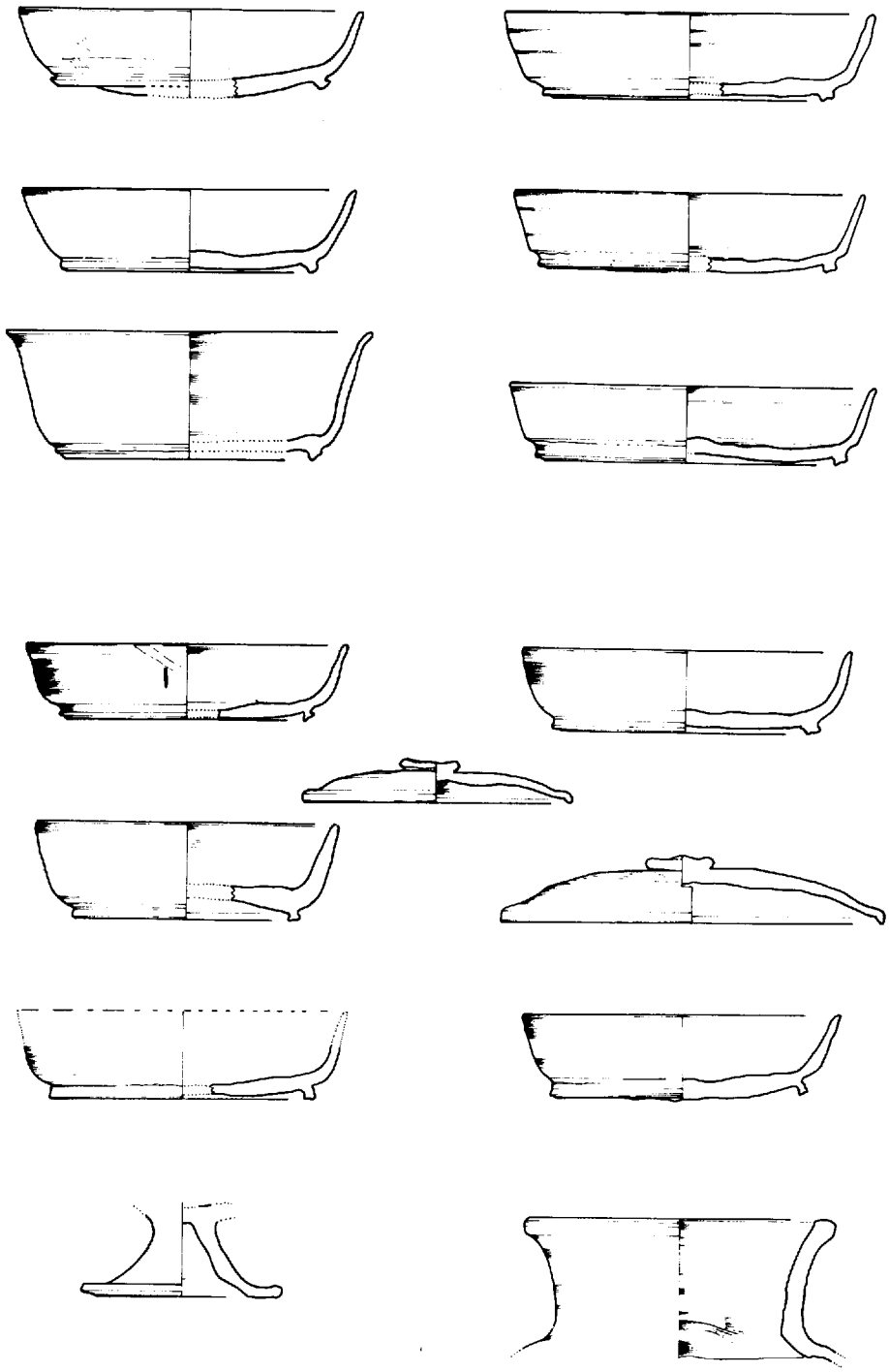



建物2北側東西柵

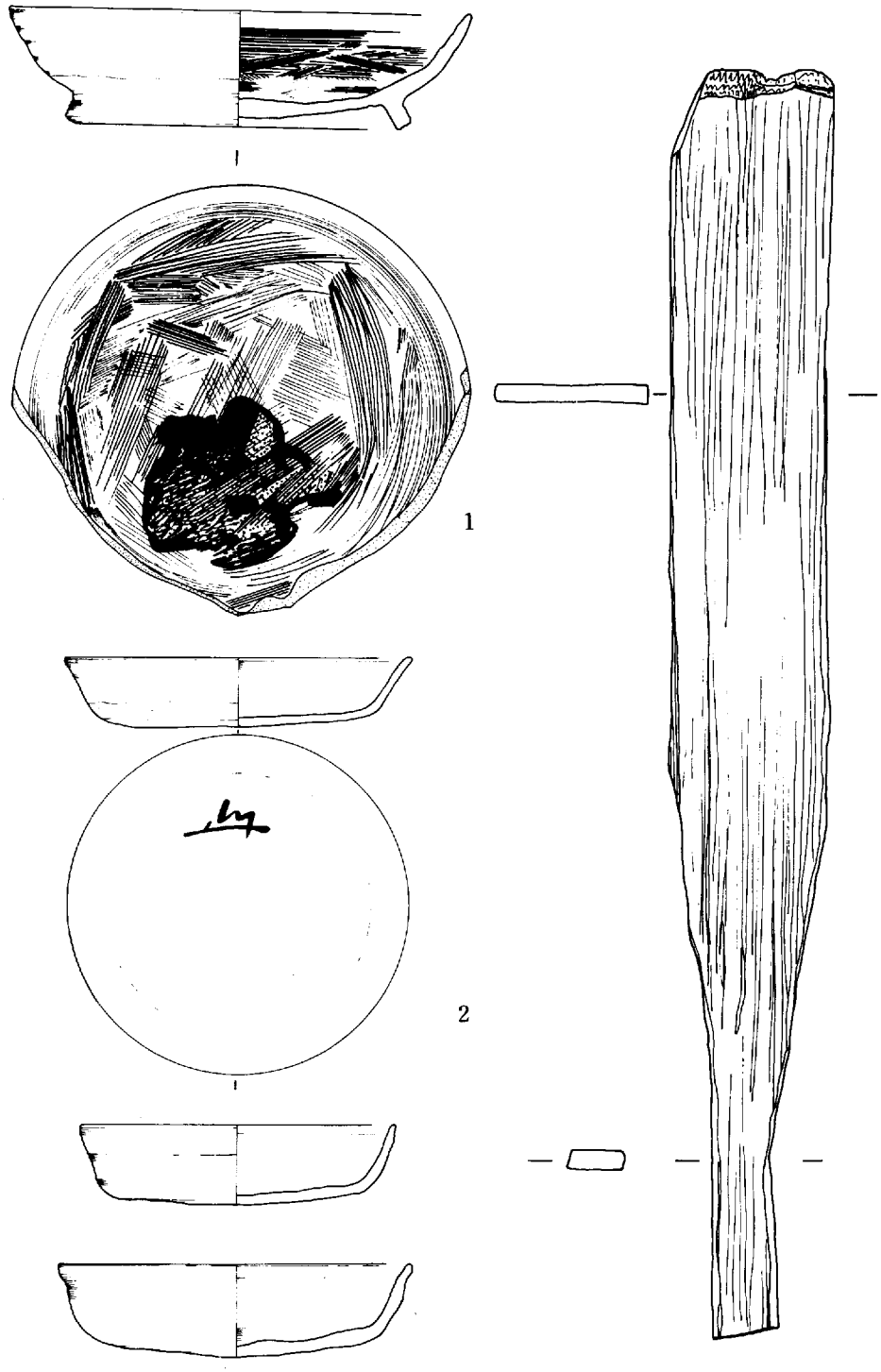



D溝柵

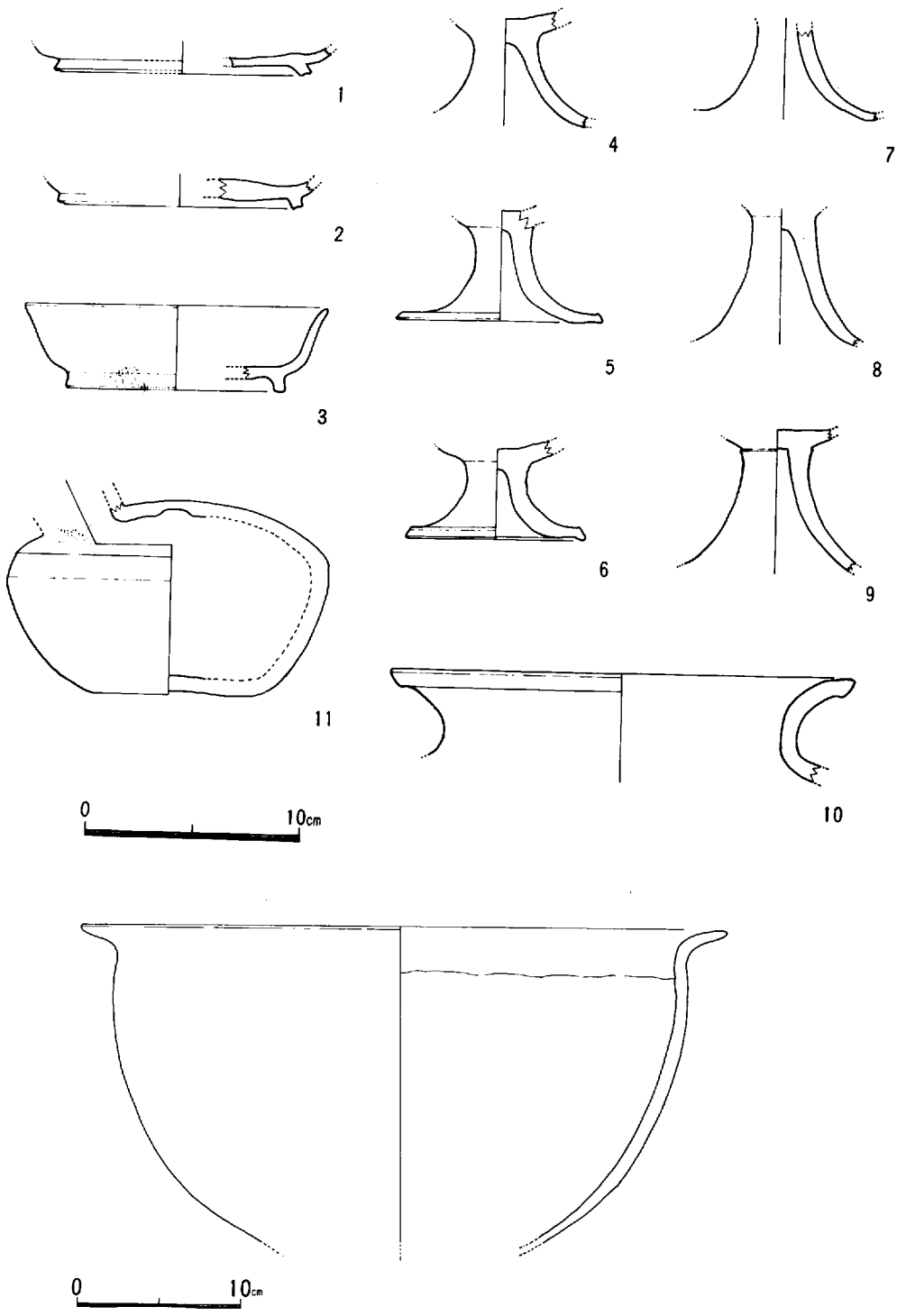
第48図　Ⅱ・Ⅲ区柵断面図（L　124.40m）



第49図　A溝出土遺物




第50図　A溝出土遺物




第51図　B溝出土遺物実測図

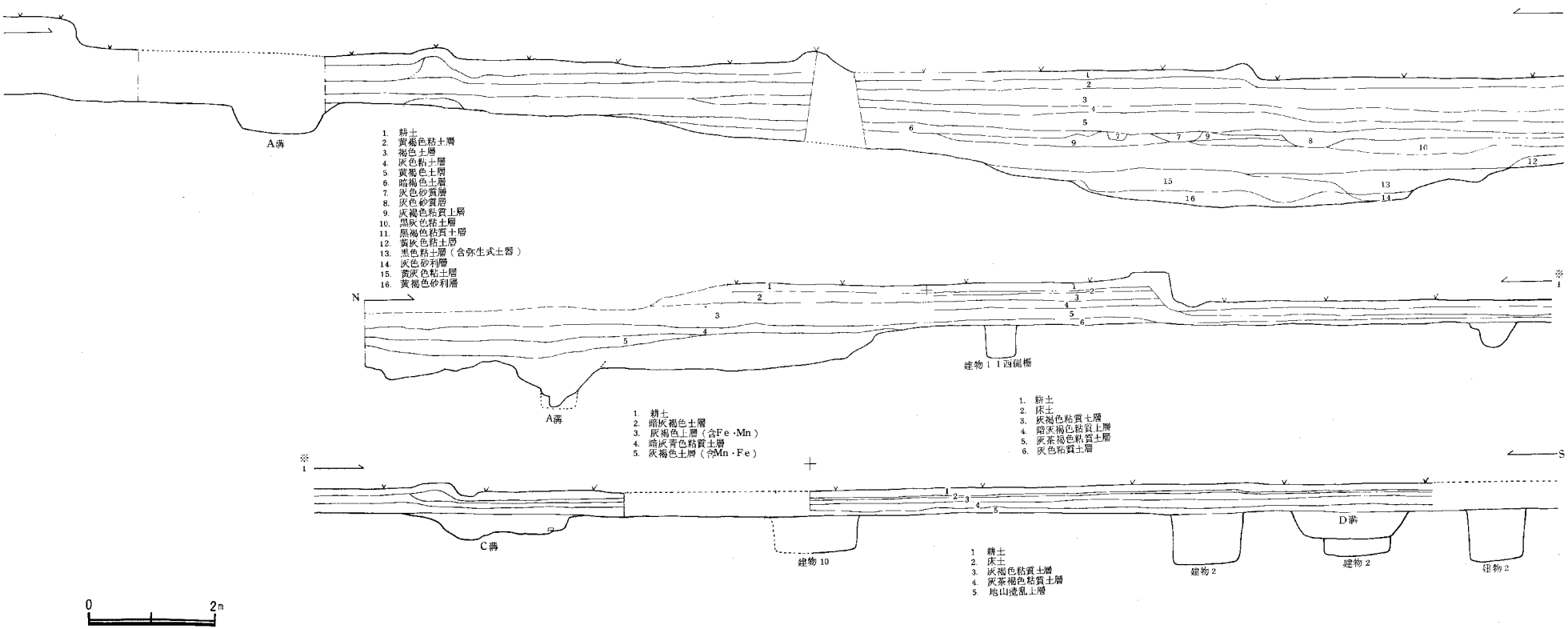
# 第6章　各区の遺構と遺物

Ⅱ区　宮尾遺跡の立地する台地の西端に位置する区で第一次調査で建物1を検出し，宮尾遺跡が奈良時代の建物群であることを明らかにした地区である。掘立柱建物8棟，溝1，溝状遺構7，土壙1，柱穴多数が存在する。台地の西端の溝状遺構と柱穴は築地の痕跡とも思われる。土壙1は南北4mx東西2.5mの変形の楕円形を呈する皿状の遺構で時期不明である。建物1の北端を横断する溝状遺構は皿状の断面を呈する。方向からみるとC溝につながることも考えられる。また建物1の西に存在する長さ1.0m巾1.5mの溝状遺構につながることが考えられる。さらに建物1の東柱列を切って，中央で東折する溝状遺構は後世の掘削によるものと思われる。建物1の南に存在する南北の溝状遺構は埋土の状況から奈良時代以前の遺構と考えられる。Ⅱ区は北端で最高124m86cm，南端で124m13cmと地山が緩斜面をなしている。Ⅲ区の地山面の最高位124m36cmに比べてやや高く，建物1・5は遺跡の最高位に位置している。表土からの遺物は須恵器，土師器がほとんどで，建物1付近から緑釉陶器片が1点，建物6の柱穴からは平瓦1が出土した。

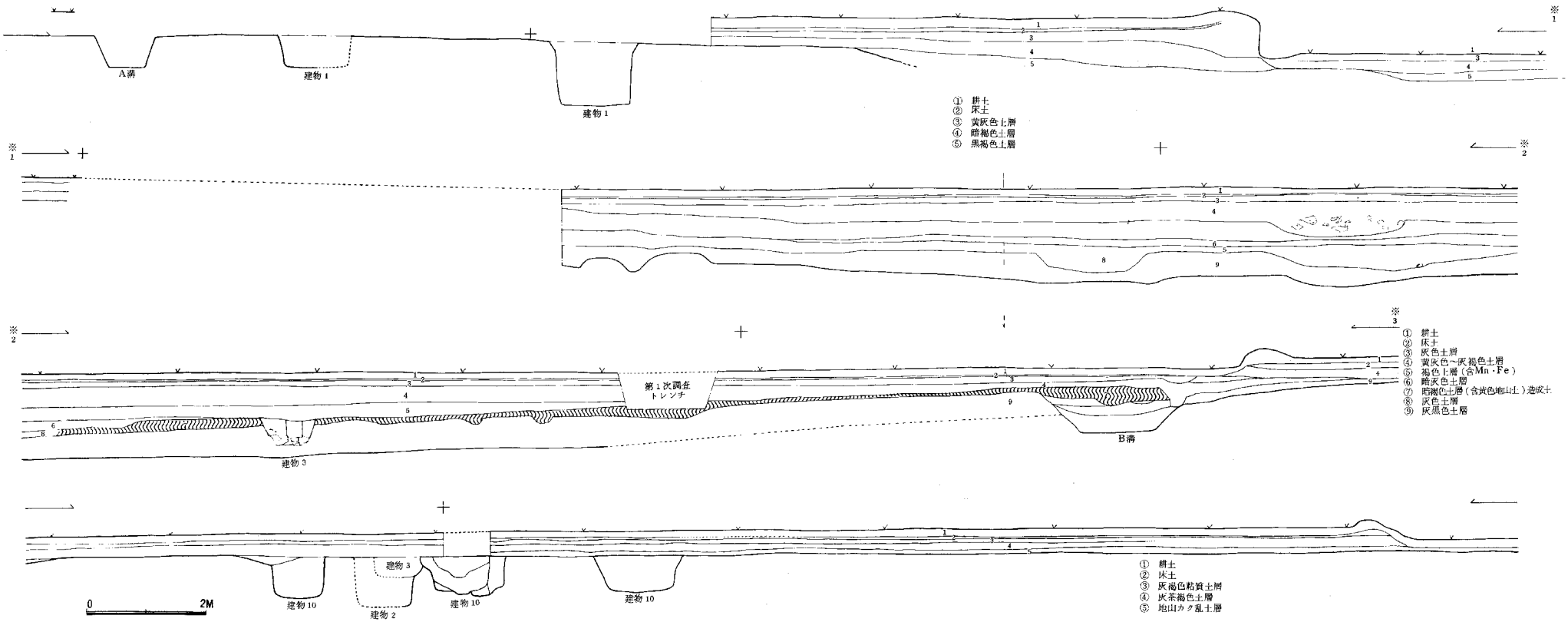
建物13・14は，谷への斜面に位置し，自然堆積層である暗褐色土より検出した。検出面より土師器が出土したが時期は明らかでない。中央を直線で横断する溝は検出時は南北溝としていたが，溝の東に平行する柱穴列（柵列）があることや，用地北でA溝は南へ折れることを確認したこと，埋積土の状態が類似していることなどから，この南北溝はA溝につながると考えられ，A溝と呼称することにした。出土遺物は須恵器坏，土師器などの他に丸瓦が上層より出土した。丸瓦は久米廃寺のものである。

Ⅲ区　宮尾遺跡の中央に位置し，第1次調査で建物2（東柱と3間分）とそれとそれを切る柱穴（本格調査で建物3の東部分であることが判明）B溝，建物3などが検出されていた。

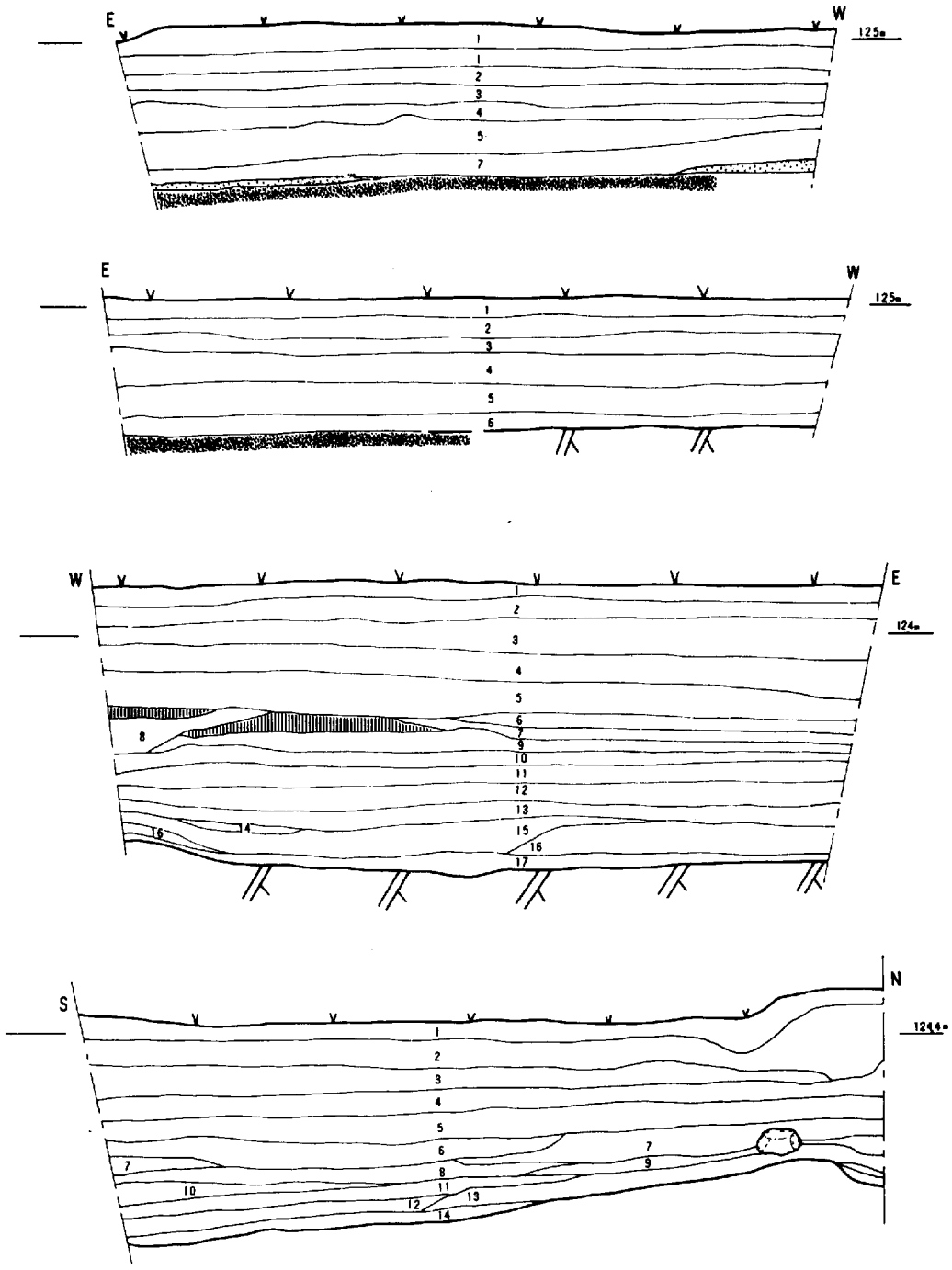
大規模建物5棟（建物2・3・10・11・15・16），溝4条（A・B・C・D溝）でA溝D溝には南側に柵が平行して存在する。C溝の北には断続的な溝状遺溝が築地基底部の存在をうかがわせる。小規模な建物4棟（建物17・18・19・20）があるが建物18と20は1棟になる可能性がある。Ⅲ区の検出最高面は建物11の西で124.35mを示し，南へやや傾き建物10付近が124m10cmである。東西へもゆるやかに傾斜し，B溝北西コーナー，建物11の東で124mを測る。建物15付近は50～60cmの削平が考えられ，B溝区画は124mの等高線上の平担面に造営されたことが考えられる，地山面はB溝付近から西へ傾斜し，谷の中央で123mを測る。土層断面を観察すると（第52図）B溝は暗褐色の造成土で埋められ，造成土は10～15cmの厚さで谷の中央付近までひろがり，建物3は造成後建てられている。またB溝北東コーナーから柵列B付近には造成土がひろがっている。これは柵，B溝を造るための第1次造成と思われる。（第43図）A溝はB溝を埋めて掘り込んでおり，その断面形も皿状のB溝に比較して，巾は狭く，深さのある逆台形を呈し，上巾1m～1.4m，下巾0.5m～0.8m，深さ0.8m～1mを測る。最下層には砂の堆積がみられ，滞水があったと思われる。A溝の南に柵列が平行している。柵列Aと呼称する。柵列は部分的に建てなおしがある。A溝は2mの長さ途切れ，柵列も3間1戸の門状を呈する部分があり，A溝，柵列Aの防禦的性格が強いことを示唆している。A溝が掘られる前に谷を造成し，かなり広い平担面




第52図　Ⅲ区南北土層断面図（L　125m）




第５３図　Ⅱ・Ⅲ区東西土層断面図（L　125m）



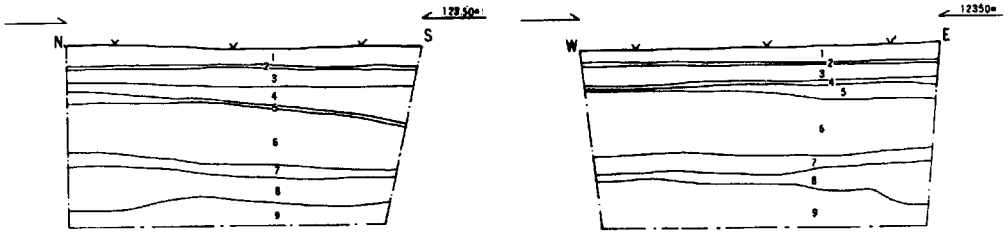

第５４図　Ⅲ区グリッド土層断面図

1 耕土
2 灰褐色土（粘質）
3 灰褐色土
4 黄灰褐色土（マンガンを含む）
5 茶褐色土
6 褐色土（鉄滓・砂利を多く含む固質の面）
7 暗褐色土（鉄滓を含む）
11 暗炭褐色土層（マンガン含む）
12 暗褐色土層
13 灰黒色土層（下層は砂まじり）
14 灰黒色砂利
15 黒色粘質土層
16 灰黄褐色粘質土層（黒っぽい）
17 灰色砂礫層

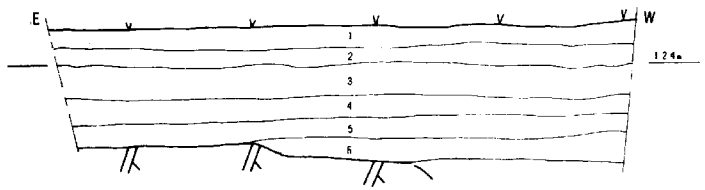
1 耕土
2 灰褐色土
3 灰茶褐色土
4 灰褐色土
5 暗灰褐色粘質土
6 灰褐色粘質土

1 耕土
2 灰褐色粘質土
3 灰褐色粘質土（鉄分多し）
4 暗灰褐色粘質土（淡）
5 暗灰褐色粘質土（濃）
6 灰褐色土層（鉄分多し）
7 暗灰褐色土層
8 灰褐色土層（鉄分・炭を含む）
9 黒褐色土層
10 灰褐色土層（マンガン含む）

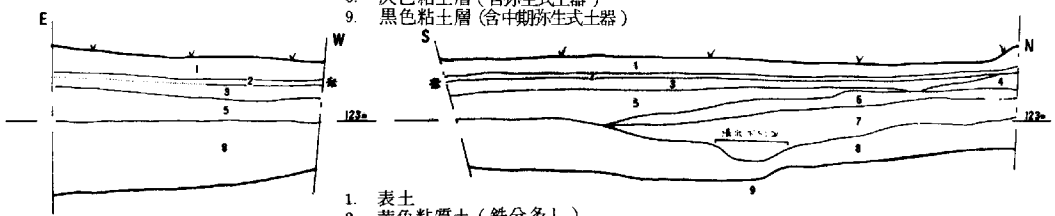
1 耕土
2 白灰色粘質土
3 灰色粘土層
4 灰色粘土層（鉄分多し）
5 暗灰色粘質土
6 暗灰黒褐色土（マンガン多し）
7 暗灰褐色土（砂・炭まじり粘土）
8 灰黒褐色粘質土
9 灰黒色粘質土（砂まじり）
10 暗灰褐色土層（マンガン含む）
11 灰黒褐色粘質土（マンガン多し）
12 暗灰褐色粘質土（マンガン多し）
13 暗灰褐色土（砂まじり）須恵器片出土
14 灰黒褐色粘土層



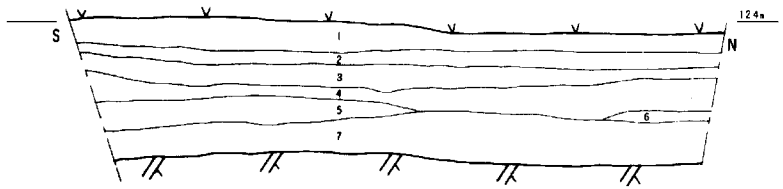

1. 耕土
2. 床土
3. 灰褐色土層
4. 灰茶褐色粘質土層
5. 淡茶褐色土層
6. 茶褐色土層（マンガン含）
7. 褐色土層（マンガン含）
8. 灰色粘土層（含弥生式土器）
9. 黒色粘土層（含中期弥生式土器）



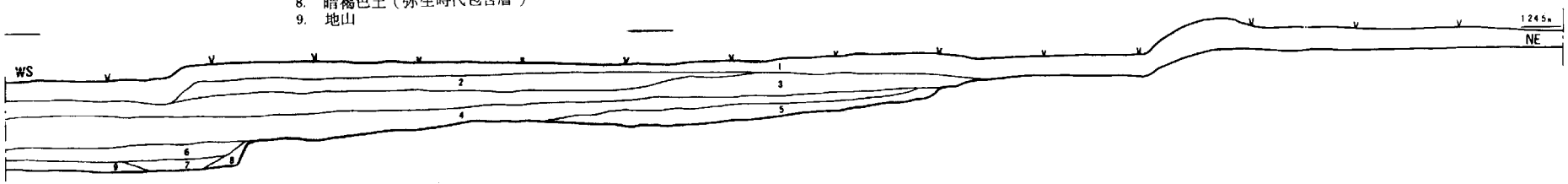

1. 耕土（灰褐色粘土）
2. 灰色粘質土（鉄分含む）
3. 灰褐色土層（鉄分・マンガン含む）
4. 灰色粘質土（鉄分含む）
5. 暗灰色粘質土（鉄分含む）
6. 暗褐色土層（鉄分，須恵器含む）



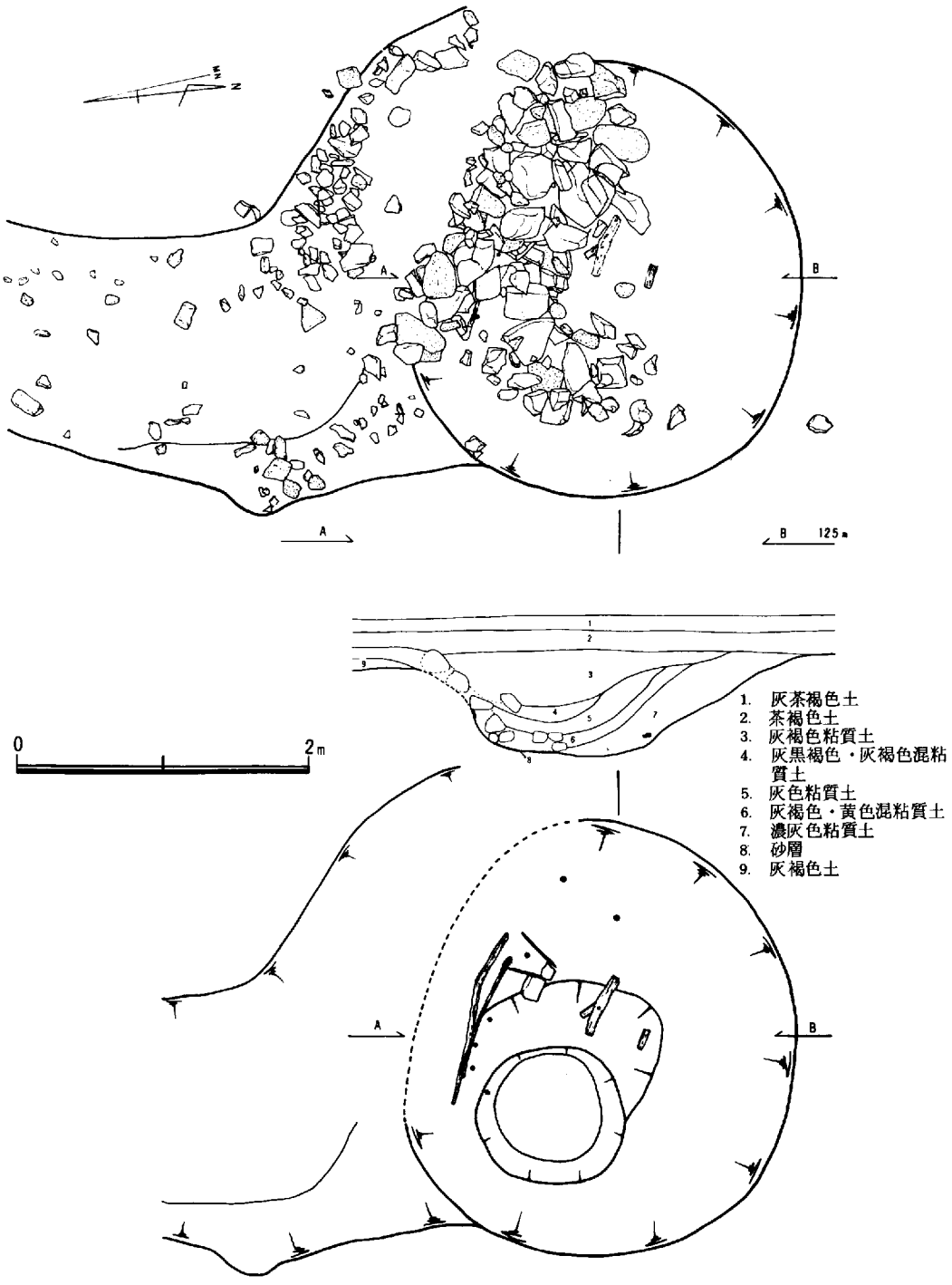

1. 表土
2. 黄色粘質土（鉄分多し）
3. 灰色土（マンガン多し）
4. 灰褐色土（Ｆｅ，Ｍｎ）
5. 灰褐色土
6. 暗褐色土（Ｍｎ）
7. 茶褐色土（固くしまっている）
8. 暗褐色土（弥生時代包含層）
9. 地山




1. 床土
2. 灰褐土（床土）粘質土
3. 灰褐土
4. 黄灰褐土（Ｍｎ）
5. 銘沢を多量に含む固質の面（Ｆｅ）（砂利を多く含む）
6. 暗褐土層




第55図　Ⅱ．Ⅲ．Ⅳ区グリッド土層断面図




第56図　Ⅲ区井戸実測図

をつくったことが考えられる。A溝の北東コーナー付近に第二，第三次の造成土が広がっている。

出土遺物は表土を除くと，4条の溝から最も多く出土している。それらの遺物や切り合いから古い順にB・A・D・C溝と考えられるがD溝とA溝との時期差は不明である。

建物の時期差を考えてみよう。建物2・11・15，が同時期で最も古く，B溝にともなう。つぎが建物3が建てられている。そして，建物10が建てられている。建物16はD溝，柵列Dとの同時差が考えられ，B溝，建物2より新しいが方向からみると建物3と共存することも可能性がある。建物10は建物2・3より新しく，方形掘り方から円形掘り方の建てなおしがあり，C溝と方向が一致する。

D溝とB溝の交点付近に直径約20cmの掘り方をもつ2間×1間の小規模な建物が4棟存在する。建物20からは瓦器が出土しており鎌倉時代に比定できる。表土から政和通宝（北宗　1111　）が出土しており，宮尾遺跡の性格の変化が考えられる。なお造成土から土師質のカマド破片がかなり出土している。　（橋　本）

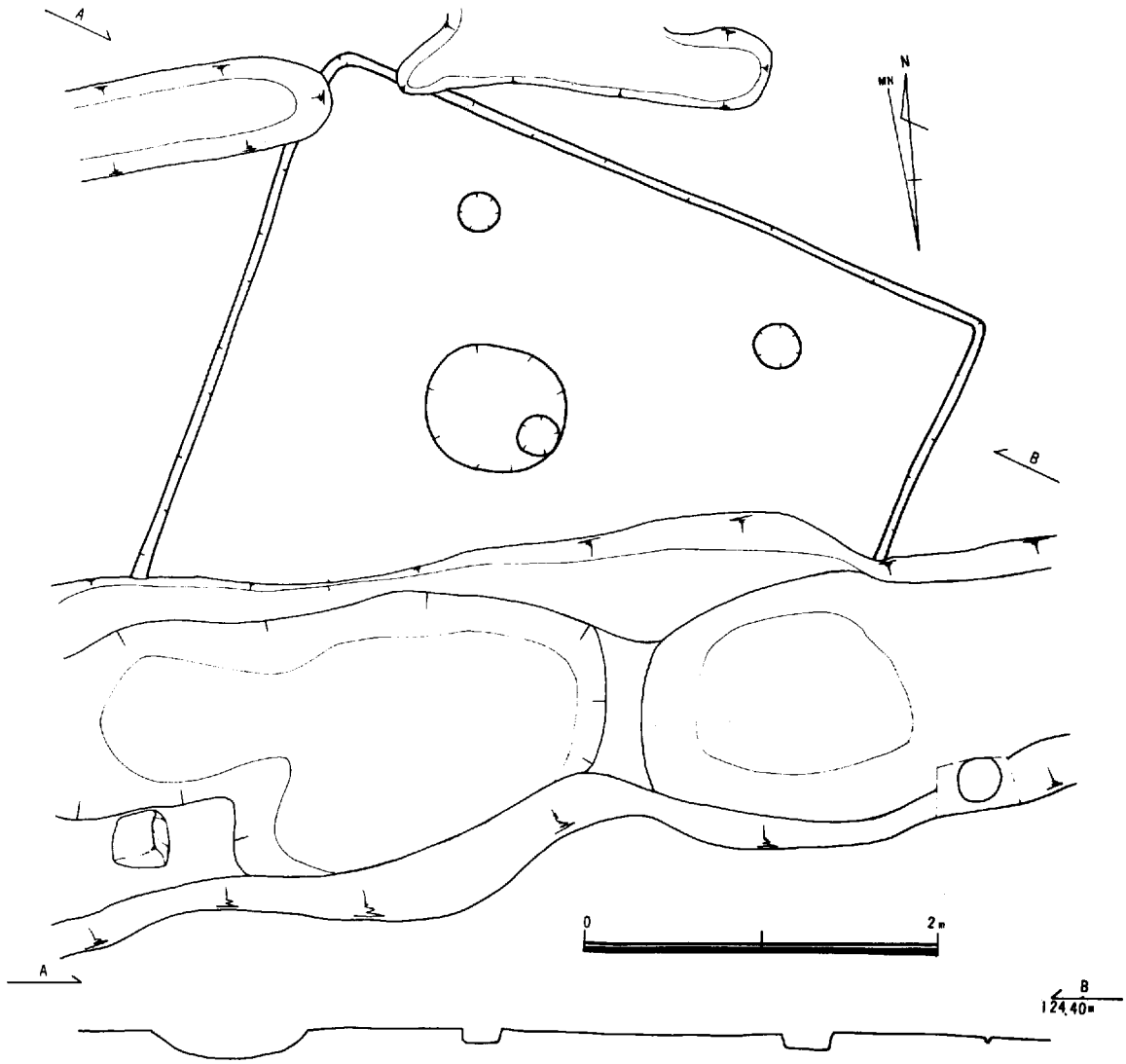
井戸址（第56図　図版26）

Ⅲ区，北よりのB溝北西隅付近でB溝と重複状態で発見した。最大径3m，深さ70cmを測る擂鉢状の井戸址である。遺構検出面は黒褐色（含黄褐色）土の谷B整地土上面であり，B溝との重複状況は井戸内掘り下げ後に確認した。井戸掘り込み内には南側より直径10～40cm程度の石が落込んだ状態であった。石除去後の底面及び南壁部分に接し，8本の杭を検出した，又，底面及び南壁に接した杭の間に壁に平行に上下2本の板状の木材が残存し中央部には板材を杭で止めた状態がみられた。井戸址の南側には，浅い排水路状の溝を検出していた。この部分は南西よりゆるくカーブして南に向っており，溝内には礫が部分的に多く出土し敷きならべた状態であった。井戸出土遺物は，井戸掘り込み内ではほとんどなく南側の石敷き付近より須恵器，瓦器の出土がみられた。須恵器は甕・坏の2種類の器形である。甕片は体部内外面に平行の沈線を施したものと，内外面ともにナデ整形のものとがある。坏口縁部小片は，器壁が薄く，外面にはロクロの凹凸が顕著な造りである。この小片は他の包含層出土の類似器形より，おそらく底部糸切り痕と考えられる。

竪穴住居址（第57図，図版53－1）

Ⅲ区中央部のやや南よりに検出した一辺3.9～4.0mの方形住居址である。住居跡上面は削平により掘込壁は存在していない。又，南半分はC溝により，北端の一部はC溝共存の溝状遺構により切断されている。周溝はかろうじて残存しており上巾5cm，深さ3cm前後の断面V字形を呈している。柱穴は住居址内北半に2本検出し共に径25cm，深さ8～9cm前後を測り，埋土は濃灰色粘質土であった。他に住居址中央に径70～80cm，深さ5cmの浅い掘込みと掘込内に径23cm，深さ30cmの柱穴を検出した。埋土は前述の柱穴と同様であり住居址に伴うものと考えられる。遺物は遺構面の削平により皆無で時期も確定しがたい。　（山　磨）

Ⅳ区　谷Cの東の台地でトレンチを主体として遺構部分拡張の方法をとった。丘陵の縁辺部の標高126mから南へゆるやかに傾斜している。トレンチで遺構を検出したのはA溝北東コーナーの北で建物21・22と建物12である。他のトレンチからも須恵器片，土師器片，鉄滓など歴史時代の遺物が多く出土した。また弥生時代の土器片，石鏃も出土している。




第57図Ⅲ区竪穴住居址実測図

第５７図　Ⅲ区竪穴住居址実測図

建物１２は３間×４間と考えられ，束柱をもつ倉庫ではなかろうか。A・B溝の外に位置し，北束柱は建物１・１１と一直線上に位置し，建物１１の中心から９０mが本建物の束柱列であることもB溝区画内の建物を意識しており，宮尾遺跡で最も古い建物群と時期を同じくする可能性が強い。建物１２の付近はやや低くなっており，造成土が分布している。このことから，建物１２に類似する建物が南に存在することも考ええられる。表面採集による遺物の散布はⅣ区全域にひろがり，宮尾遺跡の東限が東の低丘陵までおよぶと考えられる。（橋　本）

Ⅴ区（蔵人地点）

宮尾遺跡第Ⅴ区は，当初の宮尾遺跡には含まれていなかった。１９７２年１１月１９日，ブルドーザによる除土・整地作業中発見されたものである。（註１）工事中発見の新規遺跡として「野辺遺跡」と命名し手続きをとる予定であった。しかし乍ら，宮尾遺跡，日南遺跡との関係から宮尾遺跡調査行程に組みこまざるを得なかった。それには，更に縦貫道工事の速度，工程と微妙に関連していた。

このⅤ区の小字は蔵人（くらんど）といわれ，奇しくも嵯峨天皇朝弘仁元（８１０）年に創設された令外官の名称である。（註２）その事実と直接結びつけるべきではないが，一応その名称に注目しておきたい。

Ⅴ区は発見順序と遺構の存在する部分とをかみあわせてA・B・Cの３地点に分けている。A地点は，竪穴遺構，数条の溝から成り，B地点は方形ピットを伴う竪穴遺構，溝状遺構，C地点は，柱穴群，溝状遺構，３時期に分けることができる鍛冶炉を検出している。

以下，各地点について述べる。

＜A地点＞

本区発見の端緒となった地点である。Ⅴ区では遺構面のレベルが最も低い。当初，黒色包含層が露出し土師器片が散乱しており住居址の存在を指定していたが結果的に竪穴住居址と断言できないために，第５８図は竪穴遺構としている。また，溝については人為的に掘られたものではないかと推定していたが，後に自然溝の可能性の強いことを認識している。

(1)　竪穴遺構

長辺約４m，短辺約２mを測る。図のごとくややいびつな形態をしている。上面の黒色土中には数１０個体の土師器（甕）が散乱していたが，ブルトーザ走行の影響で大半はおしつぶされてしまっていた。須恵器も高坏を主体として１０数個体出土している。貼床面からは数個の鉄滓が出土している。又，a溝が貫流している部分で砥石，釘が出土している。竪穴遺構の東半部に掘られた，柿の木を植えたと伝えられる穴の中からはカマド片，平瓶片が出土しているが，おそらくこれからも竪穴遺構に伴う遺物であろう。この竪穴遺構には柱穴が検出されず，どのような構造をもった遺構であるか判然としない。北辺には長辺１m，短辺0.5mの舟底状に掘られたピットが存在するが，竪穴遺構に伴うものである。

数１０個体にのぼる土師器甕（こしきと思われる破片もみられるが底部が残存していないため便宜的に甕と総称しておく），数個体の須恵器高坏，鉄滓などの出土は住居址と断定はできず，また工房址とするもその確証はない。砥石，鉄滓，釘の出土も安易に工房址との結論を出すに到らぬと考えられる。

(2) 溝

主な溝5条が結節をもちながら合流，分流して流れている。a溝は竪穴遺構の中を貫流するもので，おそらく竪穴遺構埋没後の流水によってできた自然溝であろう。いずれも断面はv字に近く，流水を裏付けている。遺物としては，土師器片，須恵器片，鉄滓が顕著にみられる。いずれも，竪穴遺構出土土器とは大差ない時期を示している。なお，溝中よりタタキ石状の石器が出土している。(第58図)

＜B地点＞

竪穴遺構と推定される暗褐色土包含層が露出していた。B地点とし地点は，A地点が位置する浅い谷状平担面を扇形に囲むかのように，一段高いレベルに位置している。このB地点の竪穴遺構は，その全容が路線内に入っていないため，詳細な規模は明らかではない。竪穴遺構に付属する方形ピットは，地山を掘り込み一辺約　m深さ　mを測り，更に排水溝状の溝が約　m南に向けてのびている。底面は剝離性に富む地山で，降雨時には自然湧水が観察された。すなわち，湧水源としてかつては使用されたものと考えられ，剰余水の排水のために溝を付属させていると考えられる。この方形ピット内および竪穴全面から，遺物が多量に出土している。鉄滓，鉄器の出土が比較的顕著である。特に鉄器は鎹，釘，円板状鉄器が出土している。溝状遺構は竪穴遺構の南約2m，東西方向に検出された。カマド片，土師器片が出土している。更に，南へ6mの地点には南北方向の溝状遺構がある。

＜C地点＞

A地点の北約15m，B地点の東約15mに位置する。時期的にはA・B地点と異なりやや巾があり，遺構面は多層的に検出された。遺構的に時期を分類すれば，以下の如くまとめることができる。

Ⅰ期……壁溝1・鍛冶炉

Ⅱ期……壁溝2・鍛冶炉

Ⅲ期……鍛冶炉・柱穴の大半

Ⅳ期……南北溝状遺構

この地点で最も重要な遺構は鍛冶炉である。(註3)鍛冶炉　の南約1.5mの部分まで木炭の小片と鉄滓の小片(　mm×　mm)が散布して出土しているが，おそらく鍛冶炉操業使用中に残された鍛冶炉に伴う遺物であろう。このことによって実は，焼土面を鍛冶炉と断定することが可能となった。壁溝1・2はいずれも竪穴住居址ないしは工房址に伴うものと考えられるが，完全に検出することはできなかった。おそらく壁溝1を伴う住居址の中で鍛冶炉　は使用され，壁2を伴う住居址の中で鍛冶炉はは使用されたものと考えられる。最終期の鍛冶炉には壁溝は伴わない。存在していても後世の削平で消失したのか，柱穴の何本かがまとまって仮小屋的な屋内で操業されたものであろう。

遺物は少なく，鉄滓・木炭小片・須恵器片・土師器片が出土している。時期的には，B地点とほぼ同時期と考えられる。

＜まとめ＞

このV区は今まで述べたⅡ～Ⅳ区に比べるとその趣を一変している。遺構の性格・時期も異にするものである。すなわち7世紀代全般にわたる遺構で構成されている点が注目される。Ⅲ区においてもA溝・B溝いずれよりも古い生活面が確認されており(第　図)，かつては宮尾遺跡の全域にわたっ

てC地点のごとき鍛冶炉が存在し，その操業が為されたものと推定される。A溝内，B溝内あるいは掘立柱建物の柱穴埋土の中にも多々鉄滓の出土をみたが，宮尾遺跡=郡衙とするならば，その前段階には鉄生産という基盤がこの地域一帯に成立していたことを物語っている。

＜遺物＞（第６２図）

図に揚げた以外，多量の土器，鉄器が出土している。総じて７世紀代のものである。しかし，報告書作成期間に恵まれなかったため，本報告に掲載できなかった。後日，稿を改めて，すべての遺物を，写真と共に報告したい。これは，他の発掘区においても同様である。A溝については実に１０％しか報告できなかった。また，遺構に伴わぬ多量の遺物については，全く報告できなかった。

＜註＞

(1) 「野辺遺跡発見と対策の経過」というパンフを係会議の席上配布した。公団・請負業者・県教委三者で話しあった確認事項（文書はかわしていない）のみ記しておく。

① 日南遺跡は１１月いっぱいで引き渡し

② 宮尾遺跡は１２月某日航空写真撮影終了後，工事用道路建設の便宜をはかる。

③ 宮尾遺跡の全面明け渡し期限は１月２０日とする。月末までは撤退猶予期間とする。

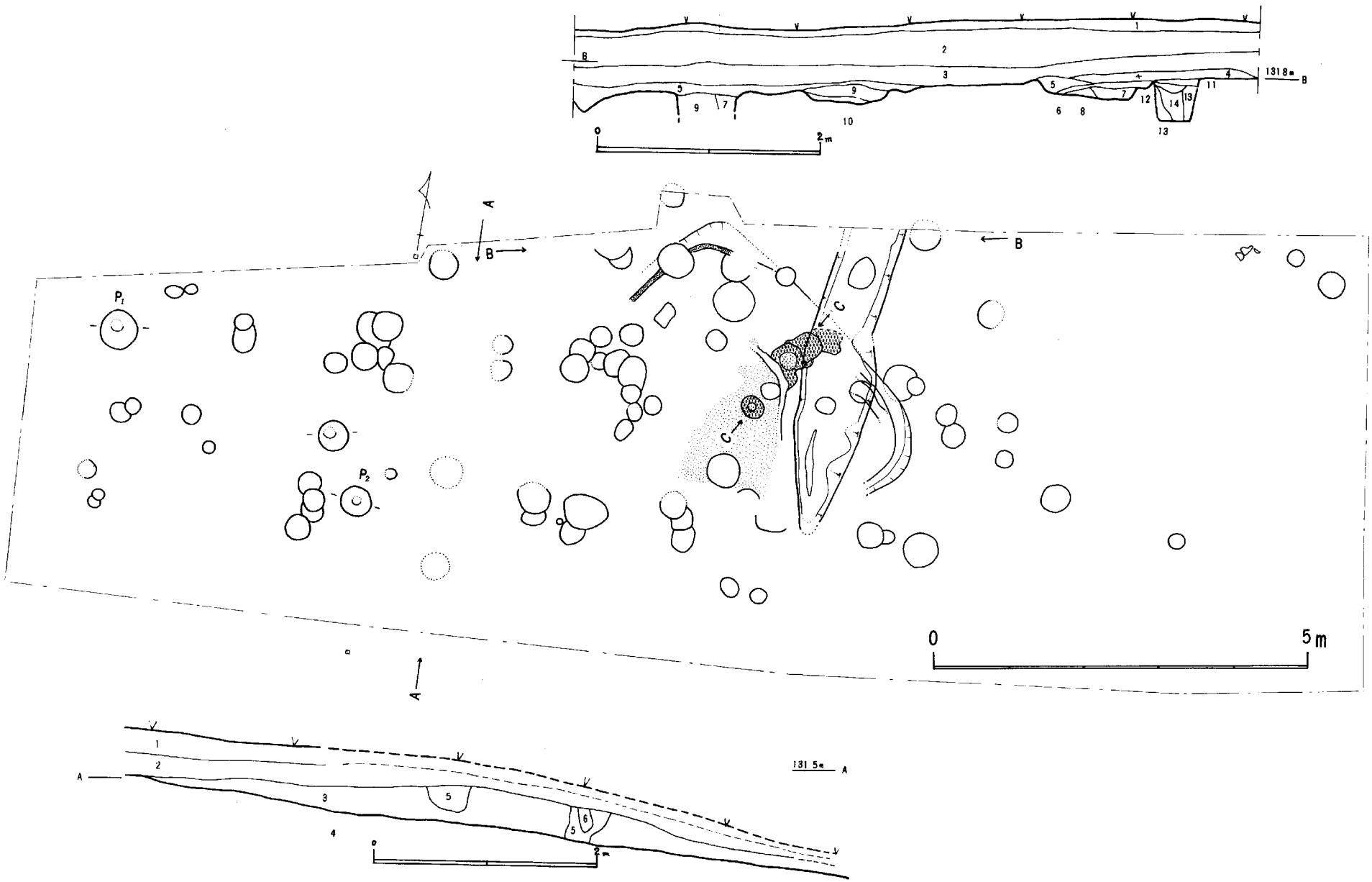
④ 野辺遺跡は，一部ブルドーザによって表土はぎをすること。宮尾遺跡担当調査員が立ちあい，指示する。（遺跡範囲の早期確認）

以上，不平等条約を結んだ。口頭で以上を確認した。

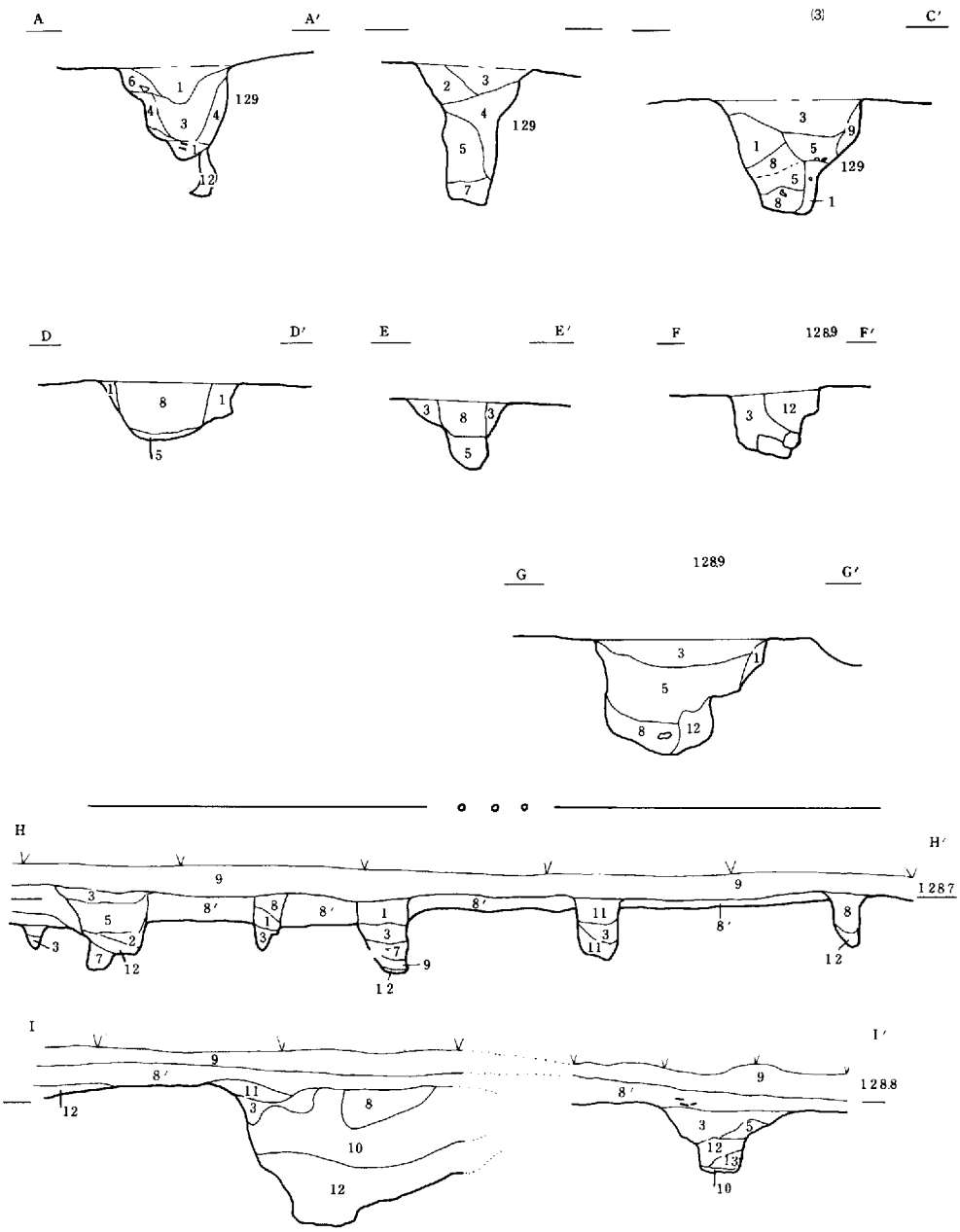
(2) 直木孝次郎「奈良時代の蔵人」―奈良時代雑考―奈良時代史の諸問題所収

(3) 安来市和鋼記念館館長住田正男氏の有益な御教示をいただいた。記して謝意を表する。

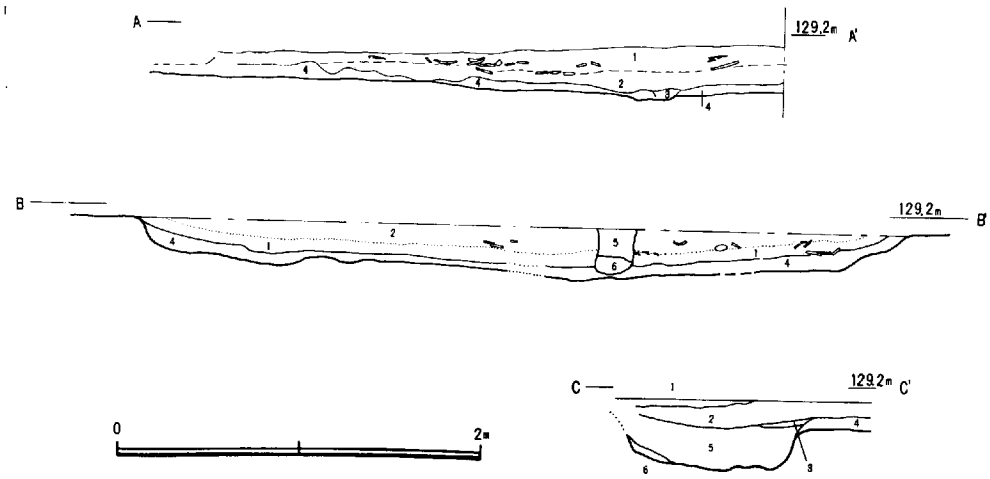
（岡　田）



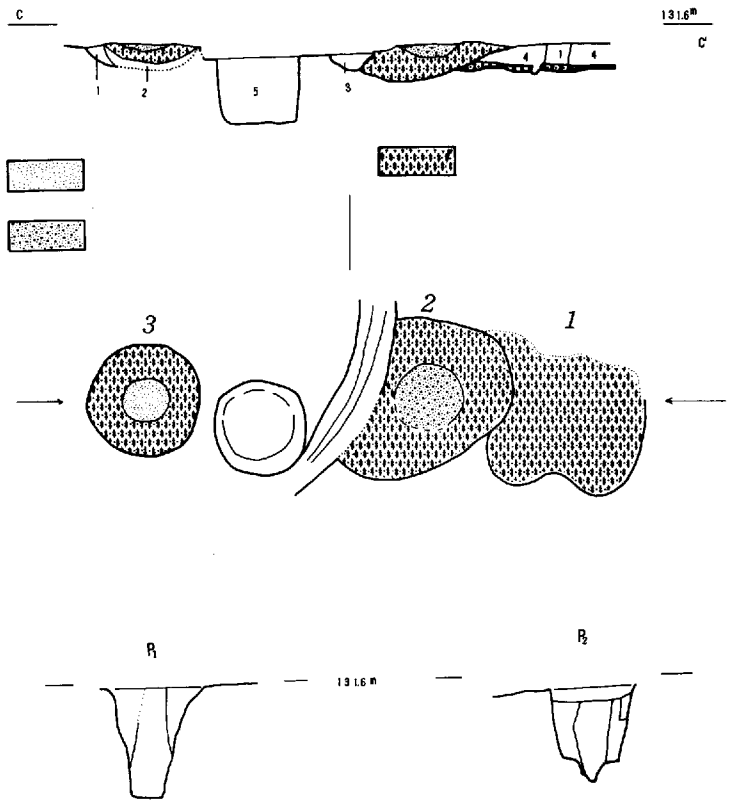

第58図　V区C地点実測図



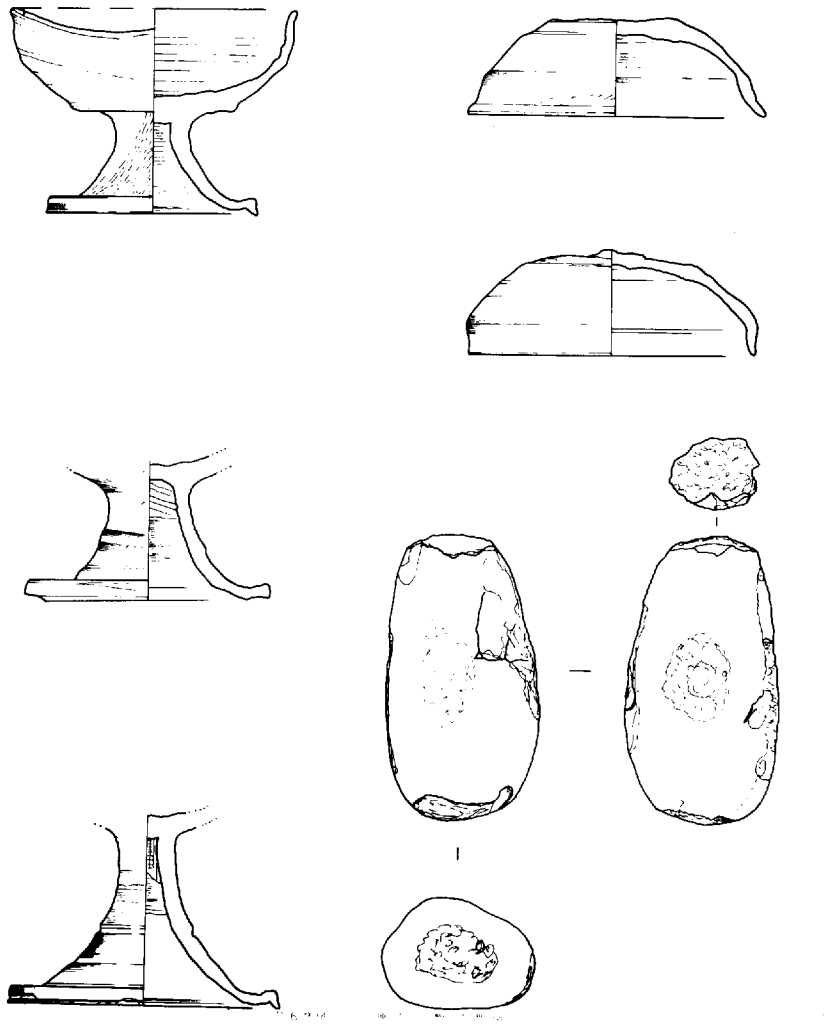

第59図　V区B地点実測図



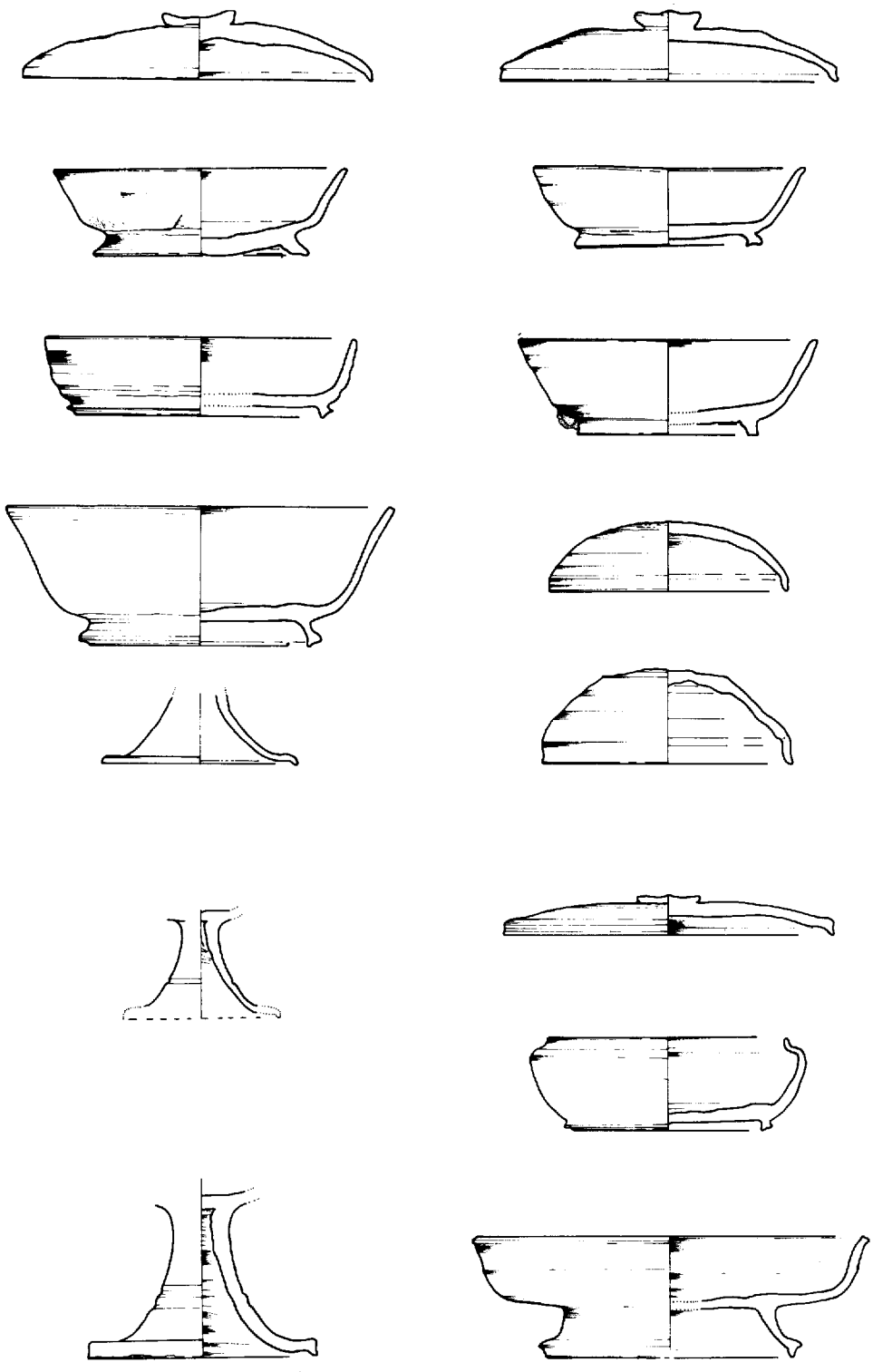

第60図　V区A地点実測図



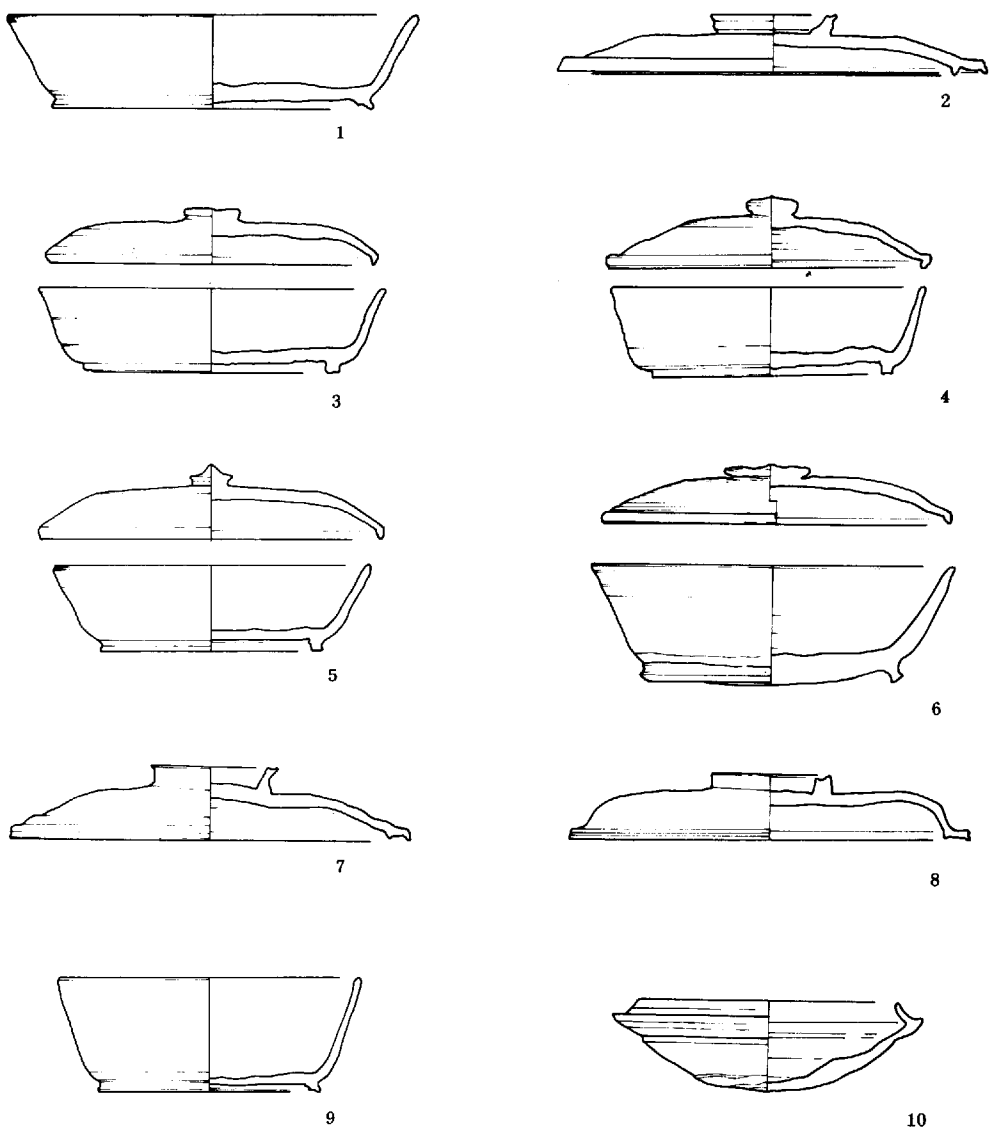

第61図　V区C地点実測図



第62図　A地点遺物実測図



第63図　V区出土遺物




① 美作国府跡（津山市）
② 平遺跡（勝央町）
③ 下市瀬遺跡（落合町）
④ 美作国府跡
⑤ 平遺跡
⑥ 高本遺跡
⑦ 美作国府
⑧ 宮尾遺跡
⑨ 宮尾遺跡（A溝上層）
⑩ 宮尾遺跡（Ⅲ区）

第64図　美作地方出土の須恵器

# 第７章　種子分析と木材鑑定

## 宮尾遺跡（１区）より出土した植物種子の同定について

笠原安夫，黒田耕作（岡山大学農業生物研究所）

はじめに

本遺跡は岡山県津山市の西方７Km，久米郡久米町宮尾にあり，白鳳時代に建立されていたという久米廃寺遺跡とその付近は，縄文，弥生期を経て奈良，平安時代とつづいた遺跡がある。中国縦貫道建設工事に先立って，昭和４６年９月から岡山県教育委員会文化課によって，宮尾遺跡の発掘調査が開始された。その調査中遺構としての建物跡，墓，杭や水田跡の地層など，遺物としては石器，木器の他に弥生中期の土器を含む溝から炭化玄米（小型丸粒）や植物種子が見出された。

著者は１９６８年以来，岡山市津島および雄町遺跡で発掘された弥生前期から古墳，奈良，平安，鎌倉，室町，江戸期の各地層よりの作物および雑草種子を検出，同定を行ない今日までに古墳以前だけでもモミ，マクワウリ，スイカ，センナリビョウタン，アズキ，モモ，ウメなどの栽培植物と約４０科１８０種の雑草や草木，樹木の種実を同定した。それらの中で多く出土した種は，ザクロソウ，アカザ，ノミノフスマ，タデ類，コナギ，ホタルイ，カタバミ，コゴメガヤツリ，カナムグラ，タカサブロウ，シソ類，イヌビエなどであった（一部発表）（注２）。これら岡山県南部の海抜５mの平担地における両遺跡と標高１００～２００mにある山間，盆地にある本遺跡の水田跡から出土する種類とを比較したいため，１９７１年１１月５日に図１のような地層で，１５ヶ所から発掘現場の係員各位の指示で図４の各層から土塊を採集した。次に述べる方法で，植物種実の検出，同定を行なった結果，３２科４３種の植物種実が得られたので，ここに概要を報告する。

調査方法

同年１１月８日～１６日間に，前述１５サンプルの各々から５００gずつの土をとって水洗で，土砂，有機物をよりわけ，種子を実体顕微鏡下で検出し，血清管ビンに水中保存しておき，今日までに，それらの種子の同定および描図を行なった。

調査結果と考察

調査結果は，表１および図１～３のようである。弥生前期より下の土層からのサンプルはNo.８，１０，１５のように，その粘土層には，樹木の葉片，小枝，根の残存物を多く含んでいて，イネに同伴するコナギ，イヌビエなどの水田雑草種子は見出すことができなかった。そしてそれら農耕以前の土層からは，縄文時代の人々が山野に自生の果実を採集して食し残した種子と考えられるトチノキ，ツブラジイ，各種イチゴ類９０粒，ヤマグワ，マタタビとサルナシ６３，茎葉を食べたヒカゲミズ，タラノキ，またとりもちに使ったかと思われるモチノキなども出土したのは興味がある。サルナシなどは野生ザルも食用するが，古代人は食用以外のそれら利用価値のあるものを採集したようである。その他平担な農耕地では出土しないアオツヅラフジ，ヒサカキ，その他不明の樹木，山野草の種子が多く見られた（図１，２）。一方，津島の弥生前期の遺跡では，表１上段のうちエビヅル，キイチゴ，サルナシなどが少数見られたが，その他は出土しなかった。

またサンプルNo.１４は前述３つのサンプルと同様に１０数種の山野生の食用果実と樹木種子をもち，

また茎葉を食べるヒカゲミズの他に，人里植物のカタバミ，カラスノゴマ，湿った畑にも生えるノミノフスマなど，水田の畦や溝，湿田に生えるコアカソ，ミズオトギリ，ミズハコベ，ハリイ，ヒロハノイヌノヒゲなど数種類が少数ながら見られた。それでこの地層は弥生期以前？とされているが他の3層よりはやや後代で稲作が始った弥生前期のものかとも思われた（図2中段）。

次の弥生中期の地層サンプル№6，7，13では，前述の実を食べる種類と共にまだ少数ながら本格的な水田雑草であるコナギが検出され，他にはホタルイのみで．この地層は水田雑草の種類がわずか2種である。意外なことは人里植物で畑生のザクロソウの出土が多いことである（図2下段）。この傾向は南部の遺跡でも見られ，津島，雄町遺跡でもきわめて多くのザクロソウが出土した。また，カラスノゴマも津島では比較的多く，そして津島で最初のイネ作りの遺跡と見られた弥生前期の水田，溝では，水田雑草や人里植物の他に，カナムグラ，セツブンソウ，ヤブジラミ，カラムシ，コアカソなども出土し，その水田の近くまで林縁のマットやソデ群落がせまっているが弥生中期以後の津島，雄町，川入，上東ではそれらがなく広い水田地帯であることを物語っていると思われた。

この遺跡で弥生後期から古墳期のサンプルは№12，5，9であるが，それらではキイチゴ類は見られたが，サルナシなどと山野の樹木，山草の種類の種子が見られなくなった。まだモミの検出はなかったが，きわめて多くのコナギ，ハリイが出土し，本格的な稲作の始った時代のようで，その他もっぱら年中湛水してイネを作る湿田雑草や水草のホタルイ，オモダカ，ミズオトギリ，イバラモ，スブタ，ヌマトラノオと畦畔雑草のヒメクグ，アゼオトギリなどが出土した(図3上段)なお№9（溝）からコバイの蛹のぬけがら437の多数が出土した。

次代の奈良則の地層のサンプル№3，4，11と奈良，平安期の№2，それ以後の№1では，モミはわずか一粒ずつ2例しか検出できなかったが，水田雑草のコナギ（8,430粒），イバラモ（187）ハリイ（147），スブタ（50），ヤナギスブタ（80）などが南部の遺跡に比べてきわめて多く，またホタルイ（143），オモダカ（33）も多く出土した。それらは湿田栽培が長くつづき，山間盆地での谷合いの稲作の特徴を示している。湛水田雑草のそれらにノミノフスマ（82）を加えて500gの土塊から平均約1900粒も出土した。その粒数は南部の各遺跡の3～100倍も多いのである。（図3中下段）

ここに比較のために南部の4遺跡で多い種類を粒数の順に記述して見よう。300粒以上はザクロソウ，200粒以上はアカザ，100粒以上はノミノフスマ，イヌホオズキ，50粒以上はコナギ，コゴメガヤツリ，イヌダテ，カタバミ，コオニタビラコ，30粒以上はタカサブロウ，ホタルイ，セツブンソウ，ナズナ，ハコベ，スベリヒユ，カナムグラ，ヒデリコ，スズメノカタビラ，20粒以上のものはハナイバナ，ヤナギタデ，サナエタデ，ハルタデ，アゼスゲ，8粒以上は，カラスノゴマ，タガラシ，エノコログサ，ギシギシ，カラムシ，エノキグサ，メハジキ，ヤマグワ，キツネノボタン，メナモミ，ヒメクグ，ヤブジラミ，ヒメジソ，コアカソ，アキノゲシ，キランソウ，キイチゴ，エビヅルなど43種で，うち7種が本遺跡では見られたのみである。

弥生期ではこの遺跡の出土植物遺物はまだ山野からの採集食料の種子が多くて，水田雑草は少ないのでイネ作りが南部とはかなりおくれ，その始りが弥生中期で，普及は弥生後期から古墳期にかけての時期のようである。また乾田や裏作栽培は奈良，平安期それ以後にも全くなかったと推定され，そ

れらの導入はさらにおくれたように思う。なおNo.1から蛹？のぬけがらと思われるもの１９４が出土した。

まとめ

中国山脈の南面の津山盆地にある本遺跡の弥生期以前，弥生中期，後期，奈良，平安期とそれ以後の各地層から土塊を採取し，植物種実の検出，種類同定を行った結果，１５サンプル４５００gの土から不明を除いて３２科４３種約１５,４００粒の植物種実が認められた。

弥生期以前の有機物，植物破片を多く含む粘土層から当時の人達が果実を食べ残した種子と思われるエビヅル，ヤマグワ，トチノキ，ツブラジイと特に粒数の多い４種の野生イチゴ，マタタビ，サルナシならびに若葉を食べたヒカゲミズ，タラノキまたとりもちに使ったように思われるモチノキ，付近に自生のヒサカキ，アオヅヅラフジなどの山野植物の種子が発掘され，弥生初期の地層では，それらの種子と共に水田やその畦，溝に生えるミズオトギリ，ヒロハイヌノヒゲ，ミズハコベ，ホタルイ，ハリイ，その他弥生中期からは本格的な水田雑草のコナギ，ホタルイの２種の種子が少数ながら出土した。

また弥生後期，奈良，平安期の地層からはモミの出土は，わずか２粒のみであったが，きわめて多数のコナギ，ハリイの他にイバラモ，スブタ類，ホタルイ，ヌマトラノオ，ミズオトギリ，アゼオトギリ，ミゾハコベ，オモダカなど年中湛水してイネ作りする湿田雑草が多く出土し，山間の谷合のイネ作りの特徴がよく示された。しかしサンプル７・１３にはザクロソウ，No.4にはノミノフスマが多数出土したのを除いて南部の遺跡に多い人里植物および畑地雑草のメハジキ，シソ，イヌホオズキ，エノキグサ，ハナイバナ，カタバミ，アカザ，スベリヒユ，イヌビユ，タデ類，クワクサ，スズメノカタビラ，エノコログサなどやイネの乾田雑草であるタカサブロウ，ヒデリコ，カヤツリグサ類，イヌビエ類，また裏作田雑草のコオニタビラコ，タネツケバナ，ナヅナ，ハコベ，ノミノフスマ，スズメノテッポウなどが見られない。それは当時の本遺跡では湿田での稲作であって，イネの乾田作りや裏作栽培も畑地もなかったと考えられる。ただ南部の遺跡でも津島で平安期以後の水田跡で現在武道館が建てられている付近のみは，溝を除いてコナギ，オモダカ，ホタルイ，などが多数出土し，乾田や畑地雑草が見られないので，この場所では何らかの理由で湿田栽培が長くつづいたようである。その他の津島遺跡，雄町，川入，上東遺跡では，前述のようにコナギなどの他にイネの乾田栽培や裏作栽培の雑草がともに多く出土し，イネの乾田栽培および裏作栽培が推定できた。

いま久米廃寺付近の遺跡で，弥生後期から平安時代以後までの地層の８ケ所で，各５００gの土塊（水分５０％）からコナギなど平均１９００粒の検出は，それを風乾土１ℓ中の埋土数に換算し，その土を1cmの厚さで1,０００cm²の面積に拡げた場合，そのａ当りの含有粒数は８１０万粒，約１０ケ年の蓄積とみても，コナギの１株約2,０００粒とし，ａ当り４００株が生えていることになる。

著者らが当研究所での調査で現在の田畑の表層近くの埋土数は，含水量約２０％の畑土の５００gで１０５０粒，同約５０％の田土で３８８粒，うちコナギ７０粒が検出された。それを前述 同様に考え，風乾土１ℓの土に換算し，1cmの厚さで1,０００cm²面積に拡げた時のａ当りの全粒数は畑で279万粒，田土で１６３万粒，うちコナギは約３万粒となる。よって本遺跡の総粒数は現在の田畑の3～5倍あり，コナギは現在の２７倍も多く，イネ１０株当り４～５株の割合に多発していたと見ることがで

き雑草の多い湿田が相像される。

なお別報，川入，上東遺跡でモミ，アワなど作物果実はピット内で１００ℊの土からモミで多いものは２９３粒，同じく土器中５０ℊの土でモミ３６４粒，アワ１０８粒の多数が検出された。それらは，a当り換算した時に，それぞれ６１９万，１５２９万，４５４万粒となり，元来，作物種実の自然落下は少ないことから考えて，それらは自然に落下し集中したものではなく，別報のように土器やピットに貯えられていたものと推定したのである。

なお津島，雄町，川入，上東および本遺跡から出土した種類のうち水田雑草の多数はイネと同じ南方の原産地から，畑地雑草の大部分も東アジア，およびユーラシア大陸からの古代に渡来した史前または旧帰化植物との著者の推定は一連のこれら遺跡調査の結果からほぼ確認されたと見てよかろう。

参　考　文　献


1　笠原安夫，西克久，上山良人：〝５０年間埋土したイグサ種子および水田雑草種子の発芽と生育〟農学研究，５１(1) ７５－１０１，１９６５年

2　笠原安夫，黒田耕作：〝岡山市津島遺跡の作物および雑草種子について，日作，第１５０回講演会要旨，９７頁，１９７０年

3　笠原安夫：〝日本雑草図説〟養賢堂，１９６８年

4　岡田たえ：〝日本の果実と種子〟南江堂，１９６４年

5　A，C，Martin and W. D. Barkley：〝Seed Identification Manual〟 Univ. Calif. Press，１９６１年

6　北村四郎，村田源，その他：〝原色日本植物図鑑〟草本編Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，保育社，１９５６，６１，６４年

7　里見信生，鳴橋直弘：〝日本産キイチゴ属の種子の，形態〟金沢大学理学部付属植物園年報第四巻１－１７，１９６１年

8　里見信生：〝下北のサルの食草(1)(2)(3)〟モンキー，１２０～１２２，１９７２年


謝　辞


本調査のサンプルを送られた岡山県教育委員会文化課およびサンプルの検出分折，描図に助力せられた武田満子，木村美智子氏など各位に対して深謝の意を表します。


後記：本遺跡の植物遺物には著者らが専問とする雑草種実以外に多くの山野生植物種子が出土したため，同定の困難のものがかなり多い，それは図Ａ～Ｊで示しているので，種名について御判明の方には御教示いただければ幸です。

# 表 2　出土木材一覧表

| | 種類 | 材質 |
|---|---|---|
| 建物 2　No. 5 | ヒノキ | 大木より加工した硬く保存度　中 |
| No. 6 | ヒノキ | 良　材軟く　〃悪く所々に虫による穿孔しあり |
| No. 9 | ヒノキ | 〃　〃　〃　〃 |
| No. 10 | ヒノキ | 〃　〃　〃　〃 |
| No. 13 | ヒノキ | 〃　硬く材質保存上良 |
| No. 14 | ヒノキ | 〃　〃 |
| No. 16 | ヒノキ | 〃　軟く保存度中 所々に虫による穿孔あり |
| 建物 11　No. 4 | ヒノキ | 〃　硬く保存良好 |
| No. 9 | ヒノキ | 〃　〃　〃 |
| No. 13 | ヒノキ | 〃　〃　〃 |
| No. 14 | ヒノキ | 〃　〃　〃 |
| No. 18 | ヒノキ | 〃　〃　〃 |
| No. 21 | ヒノキ又はスギ（未確認） | 材部が炭化または，泥土などの浸漬度多く材質までは見分けられなかった。外観的特性より，ヒノキ又はスギであろう |
| 建物 15　No. 1 | ヒノキ | 大材より加工軟かく保存度悪し |
| A 溝柵　No. 20 | コナラ | 炭化し　軟かい |
| No. 26 | アラカシ | 〃 |
| No. 28 | アベマキ | 〃 |
| No. 31 | クリ | 〃 |
| No. 32 | アベマキ | 〃 |
| No. 34 | アキニレ | 〃 |
| No. 36 | クヌギ | 〃 |
| No. 37 | ヤナギ | 〃 |
| 中層 | コナラ | |
| 中層 4 区 | ヒノキ | |
| 1 区下層板 | ヒノキ | |
| 1 区弥生溝杭 | クヌギ | |
| 弥生溝横木 | クリ | |
| 第1トレンチ弥生溝東側杭列 | クヌギ | |
| 第3トレンチ弥生溝杭 | クヌギ | |

全体に材は軟かく風化が進んでいる。集落周辺の雑木林の中の木をそのまま使ったものらしい。

全体に炭化度大で相当に古い時代のもの

岡山大学農学部　畔柳鎮教授による。

# 表1　宮尾遺跡（Ⅰ区）より出土植物種子の種類と粒数

| トレンチと地層の土と色およびサンプル名 | 全粒数 | ○コナギ | ○ハリイ | ○ホタルイ | ○ミズハコベ | △ミズオトギリ | ○ヒロハイヌノヒゲ | △ヌマトラノオ | △ヒメクグ | △ゴウソ | キク科？ | □ノミノフスマ | □ザクロソウ | □カタバミ | □タデsp | コアカソ | ヤマグワ | ヒカゲミズ | エビヅル | □カラスノゴマ | キビナワシロイチゴ | フユイチゴ | クサイチゴ | マタタビ | サルナシ | モチノキ | ヒサカキ | タラノキ | フジアオツヅラsp | ネコノメソウ | ツブラジイ | トチノキ | 図（種名不明） A | B | C | D | E | F | G | H | I |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| T3 弥生期以前粘土層　№8 | 100 | | 3 | | | | | 5 | | 2 | | | | | | | | 1 | | 8 | 18 | | 2 | | 18 | 1 | 2 | 1 | 1 | | | | 13 | 5 | 2 | 4 | 13 | | | | |
| T3 弥生期以前（古墳時代溝の下）　№10 | 151 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | 6 | 1 | 3 | | 3 | 1 | 3 | | 20 | 1 | 5 | | | | 2 | | 35 | 11 | | 10 | 46 | | | | |
| T3 弥生期以前，青灰色砂層下の有機物を含む層　№15 | 85 | | | | | | | 1 | 3 | | 1 | | | | | | | | | 1 | 6 | 2 | 5 | 6 | 4 | 9 | 4 | | 1 | | | 1 | 16 | 3 | 1 | 4 | 2 | 4 | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 弥生期以前(?)　青灰色粘土層　№14 | 119 | | 3 | | 21 | 7 | 15 | | | | 5 | 2 | | 1 | 3 | 2 | 2 | 13 | | 7 | 2 | | 4 | 2 | 4 | 2 | 2 | | | 1 | | | 4 | 3 | | | 3 | | 1 | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 弥生中期，青灰色砂層　№7 | 334 | 49 | | | | | | | | | | | 217 | | | | | | | 3 | 30 | | 2 | 3 | | | 2 | | | | | | | 4 | | 8 | 25 | | | | |
| T1 弥生中期土器層溝，灰黒色粘土層　№13 | 50 | 10 | | | | | | | | | | | 25 | | | | | | | | 1 | | | 2 | 3 | | | | | | | | | | 4 | 5 | | | | |
| T3 弥生期（中期？）　№6 | 36 | 8 | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 7 | | 4 | | 1 | | | | | | | | | 3 | | | 9 | | | | |
| | | ●モミ | ○コナギ | ○オモダカ | ○ハリイ | ○ホタルイ | ○イバラモ | ○スブタ | ○ヤナギスブタ | ○タガラシ | △アゼオトギリ | ○ミズオトギリ | ○ヒロハイヌノヒゲ | ○ホシクサ | △ヌマトラノオ | △ヒメクグ | △ウシクグ | キク科？ | △ノミノフスマ | □ザクロソウ | □イヌタデ | □タデsp | □ヤブタビラコ | キビナワシロイチゴ | クサイチゴ | 図（不明） C | D | E | J |
| T3 弥生中期以後古墳以前，黒色砂礫層（弥生後期？）　№12 | 1,048 | | 1034 | 8 | 5 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 弥生期から古墳時代　№5 | 1,325 | | 1300 | 3 | 2 | 5 | 5 | 2 | | | 5 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| T3 古墳時代（溝），淡黒色粘土　№9 | 3,257 | | 49 | 11 | 3093 | 1 | 2 | | | | 28 | 11 | | | 3 | 17 | 1 | | | | | | | 6 | 4 | | 28 | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 奈良時代　№4 | 2,370 | 1 | 1992 | 7 | 27 | 50 | 136 | 4 | 38 | 3 | | | | | 6 | 1 | | | 72 | 2 | 1 | 2 | 1 | | | | | | 18 |
| T3 奈良時代，暗茶褐色粘土　№3 | 1,949 | | 1900 | 16 | 14 | 16 | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T1 奈良時代，灰黒色粘土　№11 | 2,555 | | 2531 | 6 | 6 | 6 | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 奈良，平安時代，茶褐色粘土　№2 | 1,805 | | 1792 | 2 | 4 | 3 | | | 3 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| T3 平安時代以後　№1 | 551 | 1 | 215 | 6 | 98 | 68 | 51 | 25 | 74 | | | | | | | | 2 | 2 | 8 | | | | | | | | | | |

備　考

○　水田雑草

△　湿生，畦畔雑草

□　人里植物または畑生雑草

●　栽培植物

無印　山原野生植物

目下　種類同定困難なもの

図A～Jで示した

図以下のもの81粒

混虫の羽　数ケ

混虫の蛹のぬけがら

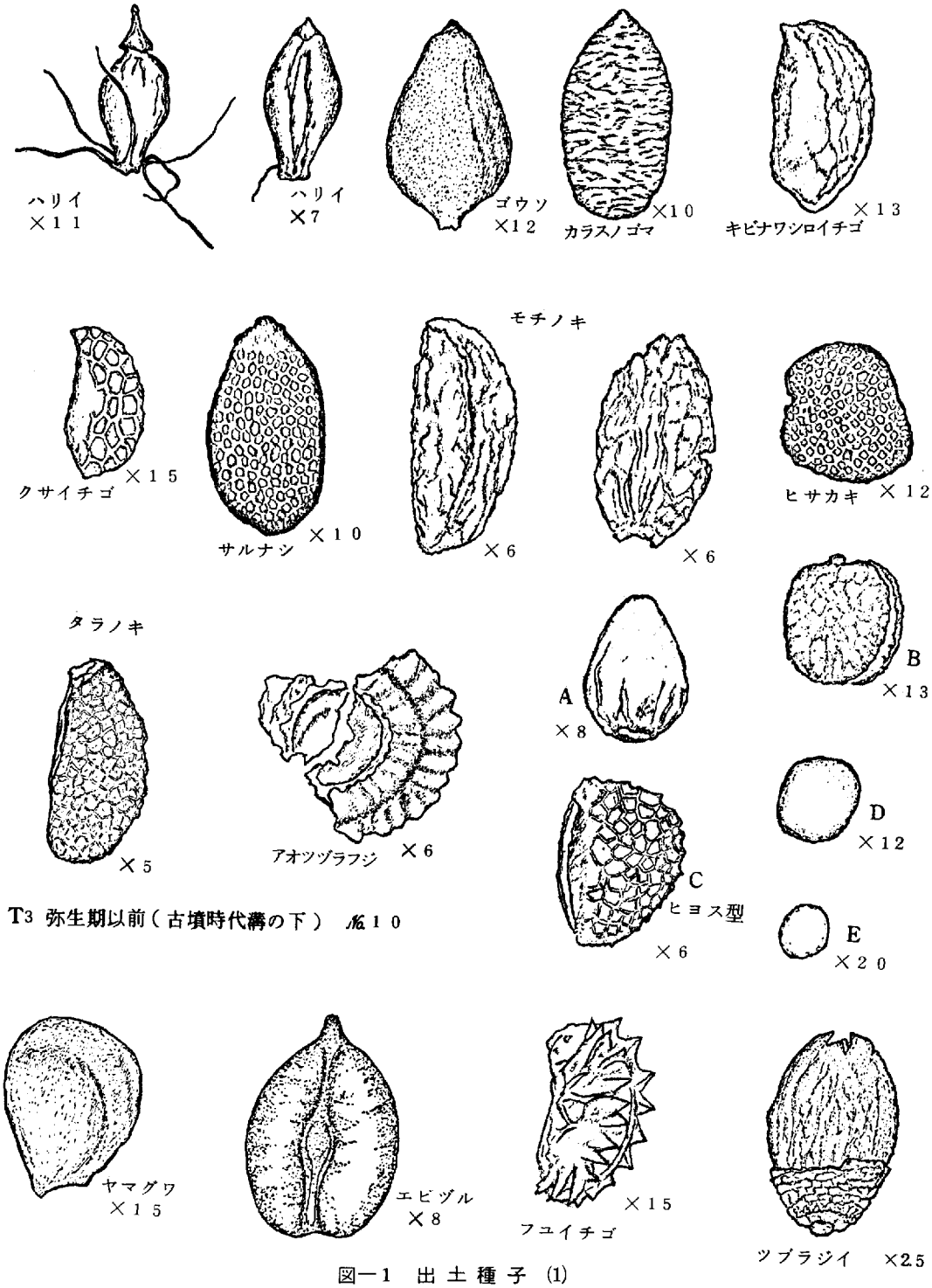
こばい　№9 …… 437

〃　№3 …… 2

不　明　№1 …… 194

〃　№10 …… 1

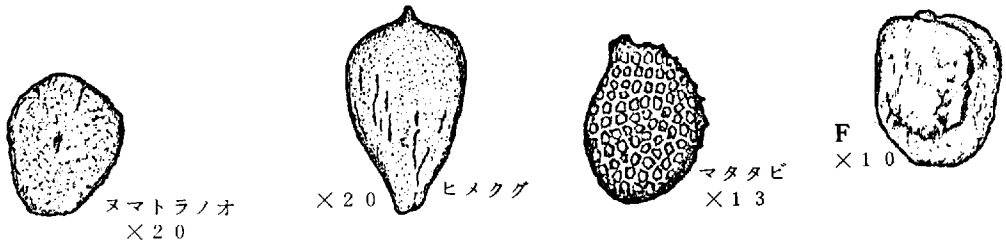
T3 弥生期以前粘土層　№8



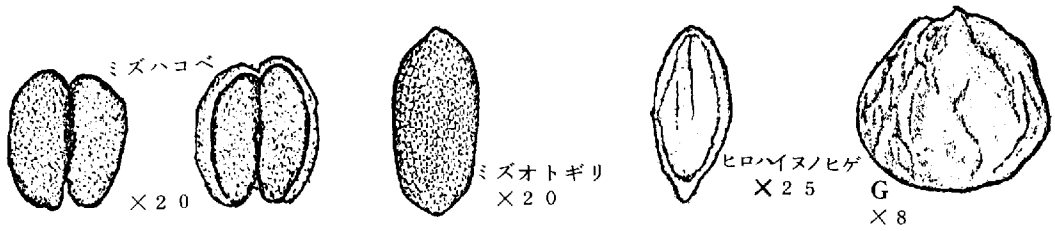

T3 弥生期以前（古墳時代溝の下）　№10

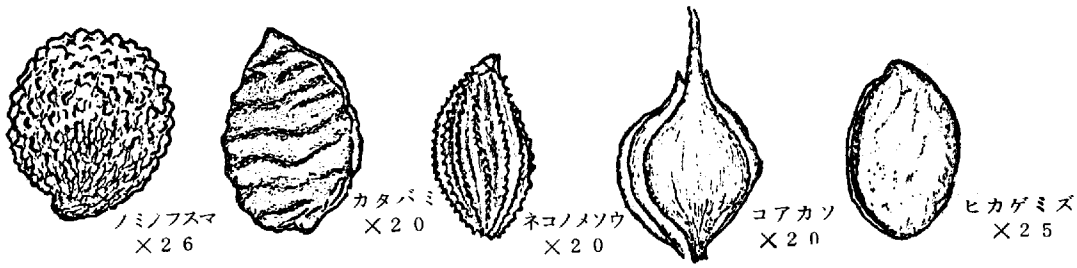
図—1　出土種子 (1)

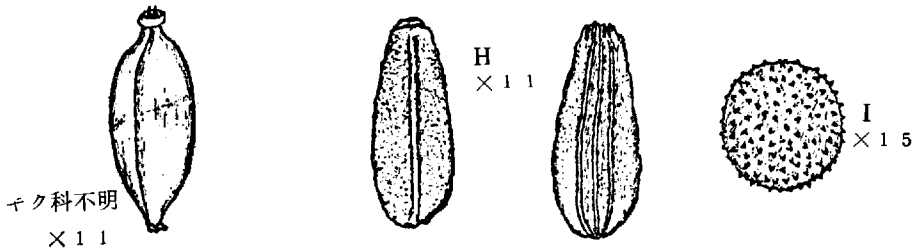
T3 弥生期以前青灰色砂下層下の有機物を含む層　№15




T3 弥生期以前(?)青灰色粘土層　№14

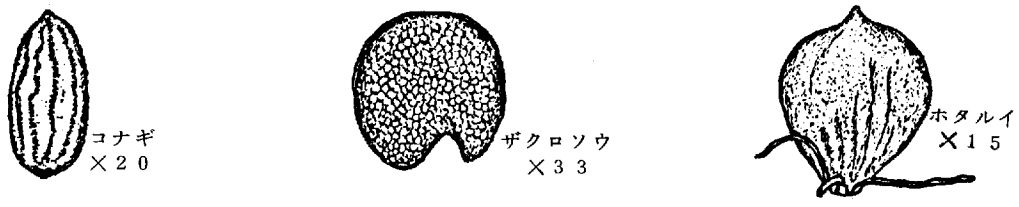



T3 弥生中期 青灰色砂層　№7

T3 弥生期（中期？）№6




図—2　出土種子 (2)

T3 弥生期から古墳時代 №5

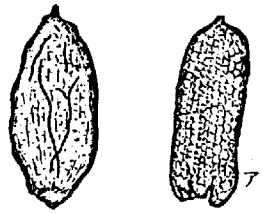
スブタ

×２０

(中)

×１７

T3 古墳時代（溝）淡色粘土 №9



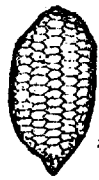
アゼオトギリ
×３０

ウシクグ
×１５

×２８

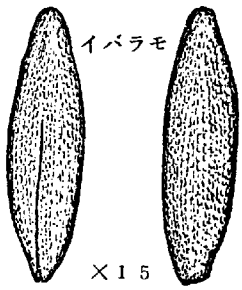
こばいの蛹ぬけがら

T1 奈良時代灰黒色粘土 №11

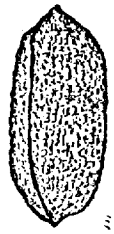


ホシクサ
×４４

イバラモ



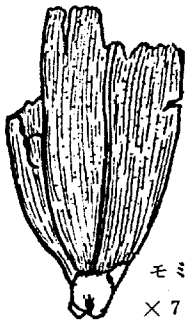
×１５



ミズオトギリ
×２０

T3 平安時代以後 №1

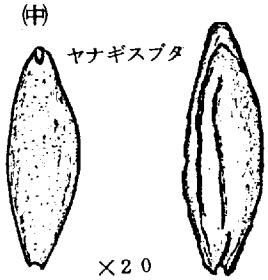
T3 奈良時代 №4



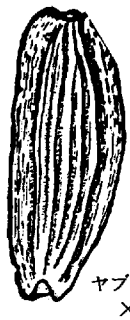
モミ
×７

(中)

ヤナギスブタ



×２０



ヤブタビラコ
×１２

蛹のぬけがら
×４０

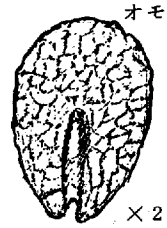
T3 奈良時代暗茶褐色粘土 №3

J
×３.５

イヌタデ
×１３

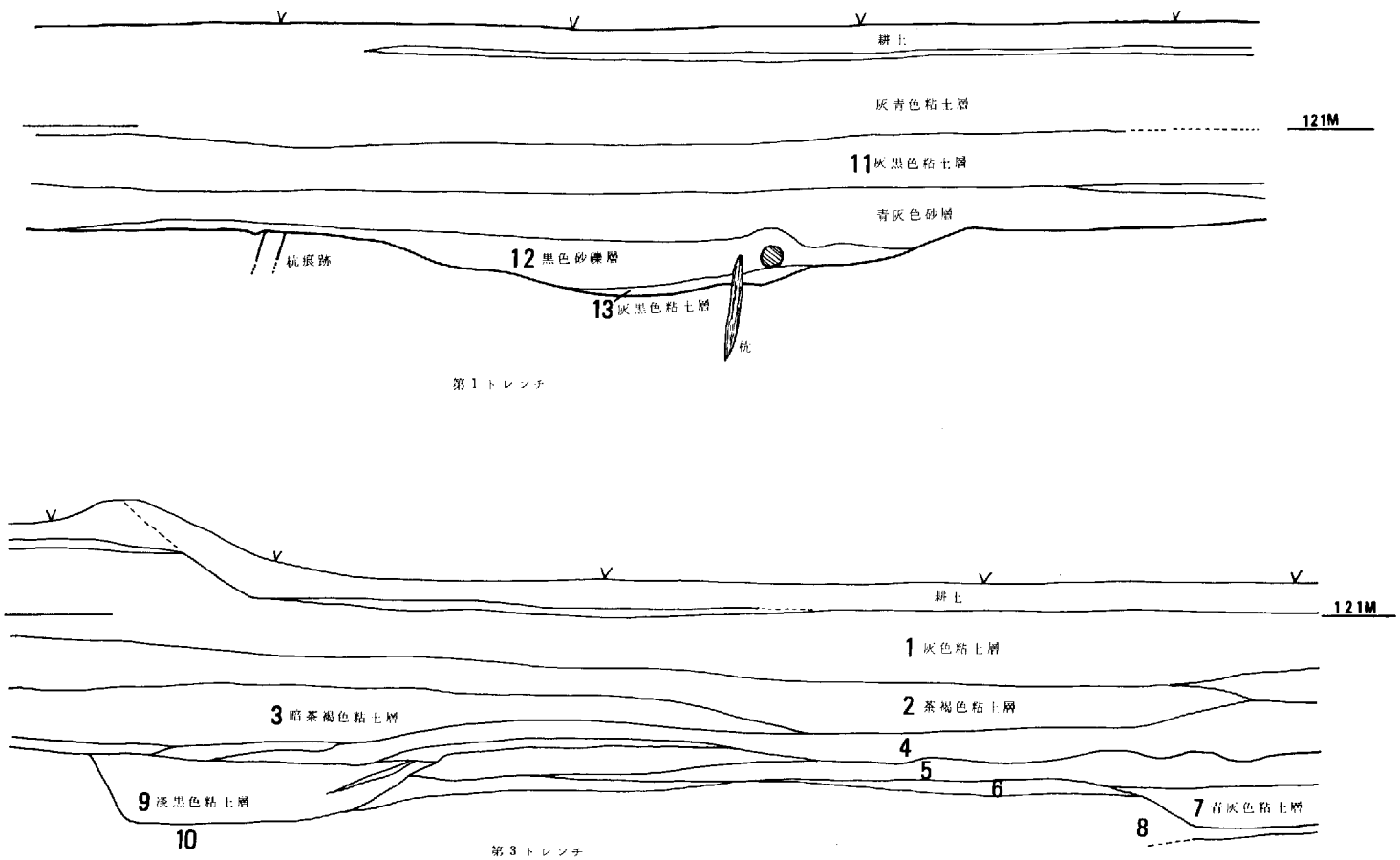
タガラシ
×１７

オモダカ (中)



×２６

図－3 出土種子 (3)


耕土
灰青色粘土層
121M
11灰黒色粘土層
青灰色砂層
杭痕跡
12黒色砂礫層
13灰黒色粘土層
杭
第1トレンチ
耕土
121M
1灰色粘土層
2茶褐色粘土層
3暗茶褐色粘土層
4
5
6
7青灰色粘土層
8
9淡黒色粘土層
10
第3トレンチ

図—4　宮尾遺跡1区

# 第８章　建物と遺物からみた宮尾遺跡の時期

## 第１節　建物の配置と計画性

建物，溝の重複，複合と前後関係

Ⅱ区は主要建物が６棟検出され，Ⅱ，Ⅲ区にわたるA溝がⅡ区中央部を南北につらぬき，建物と重複，複合している。

北半建物５付近の前後関係は建物５が建物１，A溝柵の柱穴を切り，A溝と重複している。A溝及びA溝柵と建物１の関係はA溝が単独であれば，共存も考えられる。しかし柵を伴い北端では柵列と建物１北西隅の柱穴と接する状況であり疑問も残る。南端建物７付近の前後関後は，建物７が，建物６と重複し，A溝と一部切合っている。以上Ⅱ区での主要遺構の重複，複合状況から，最低３時期の差が認められる。

Ⅲ区の主要遺構は建物が６棟，溝が４本，溝付属の柵が２列，建物付属の柵を２列検出した。Ⅲ区の主要配置をなすB溝区画（B溝及び建物２，１１，１５）は，重複，複合状況から他遺構に先行し，最も古い時期にあたる。すなわち，建物２付近では建物３，１０，１６，C，D溝が建物２を切っており，建物１０は建物２，３を切っている。A溝，B溝接触部分では，A溝がB溝の堆積土を切り込み，A溝柵はB溝面より切り込みが確認できた。

建　物　規　模

Ⅱ区の建物柱間寸法の類似は建物１，７が桁行柱間で７尺を測る。梁では２間と３間の差はみられるが梁行で１５尺と同一寸法である。建物４，６，８、桁行柱間８尺，梁行でほぼ１０尺を測る。他に建物５は桁，梁行柱間とも１０尺等間である。

Ⅲ区の建物ではB溝区画内の建物１１，２，１５が，桁行柱間で７尺，梁行で７尺半等間で同一に設計された建物群としてとらえることができる。建物３は桁行７尺～７尺半等間，梁行は９尺である。建物１０は桁行，梁行ともに１０尺等間である。建物１６は検出が一部のため明確ではないが，桁行，梁行柱間ともほぼ７尺とみられる。以上Ⅲ区の建物寸法は４種類として捕えることができる。

Ⅵ区の建物１２は桁行柱間で６尺（一部５，７尺）梁行柱間で６尺を測る。又建物内に束柱を有すことより他の建物とは構造的に異なる。

柵はB溝区画内の柵が７尺等間，A，D溝柵が８尺等間と異なっている。

建物配置はⅡ区では西端建物４より東に建物８，６と３棟が南北に約７度程度の差があるが平行して位置している。柱間寸法もほぼ同一である。建物５の柱通りは真北に対しほぼ東西である。これに直交して南に４０尺間隔を置き建物８が位置しており，むしろ建物５，８を一群として捕えるのが妥当とみられる。建物７は柱間寸法ではⅡ区の建物１に最も近く，柱方向では建物６に近い。しかし検出が建物北端の一部であり断定しがたい。A溝との共存は建物４，８を単独とみた場合は可能であるし，建物４，６，８を一群とみた場合にはA溝との共存は考えられない。以上のことからⅡ区遺構群の新旧は建物１→A溝（A溝柵）→建物５，８か建物６，４（又は建物４，５，６，８－群）と３～４時期が考えられる。

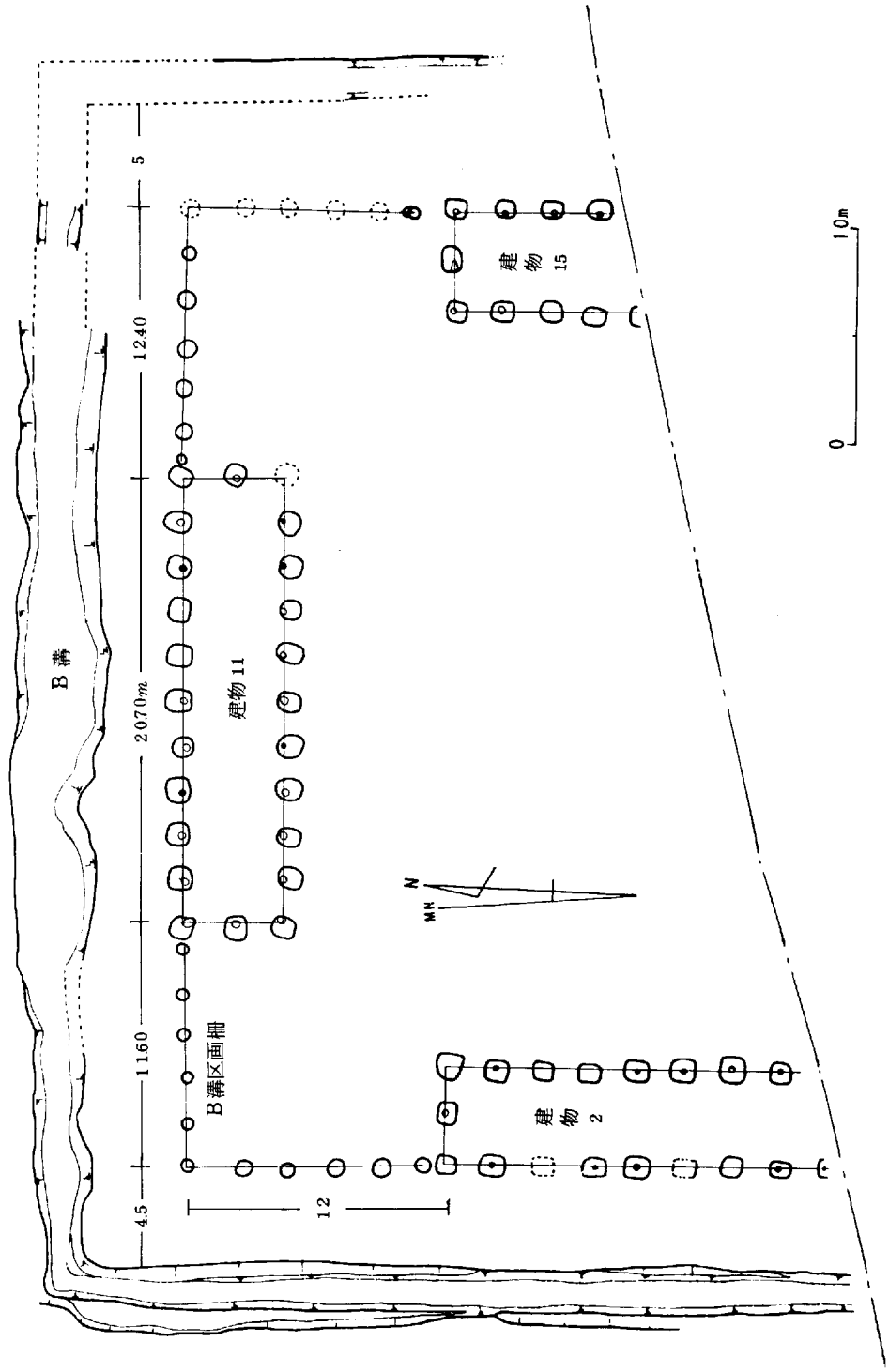
Ⅲ区の建物配置は東西半町のB溝区画と区画内の建物１１，２，１５の３棟が一群としてとらえら

表 3

# 主要建物，柵寸法一覧表

（１尺３０cm前後として概算）

| 区 | 建物 | 規模 | 柱間寸法 | | 桁行 | 梁行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 桁 | 梁 | | |
| Ⅱ | 建物 1 | １２ × ２間 | ７尺 | ７尺半～８尺 | ８４尺 | １５～１６尺 |
| | 〃 4 | ６ × ２間 | ８尺 | １０尺 | ４８尺 | ２０尺 |
| | 〃 5 | ８以上 × ２間 | 平均１０尺 | １０尺 | — | ２０尺 |
| | 〃 6 | ６以上 × ２間 | ８尺 | 妻 ９尺半<br>中間10尺半～11尺 | — | 妻 １９尺<br>中間21尺～22尺 |
| | 〃 7 | ２以上 × ３間 | ７尺 | ５尺 | — | １５尺 |
| | 〃 8 | ５ × ２間 | ８尺 | 10尺～10尺半 | ４０尺 | ２０～２１尺 |
| Ⅲ | 〃 2 | ８以上 × ２間 | ７尺 | ７尺半 | — | １５尺 |
| 〃 | 〃 3 | 新１１ × ２間<br>旧１１ × ３間 | ７尺～７尺半 | 新９尺<br>旧６尺 | ７７尺 | 新 １８尺<br>旧 １８尺 |
| 〃 | 〃 10 | ８ × ２間 | 新・旧１０尺 | １０尺 | ８０尺 | ２０尺 |
| 〃 | 〃 11 | １０ × ２間 | ７尺 | ７尺半 | ７０尺 | １５尺 |
| 〃 | 〃 15 | ４以上 × ２間 | ７尺 | ７尺半 | — | １５尺 |
| 〃 | 〃 16 | ５以上×１間以上 | ７尺 | ７尺 (?) | — | — |
| Ⅵ | 〃 12 | ４以上 × ３間 | ６尺（一部５尺・７尺） | ６尺 | (２４尺) | １８尺 |
| Ⅱ・Ⅲ | A 溝柵 | | ８尺等間 | | | |
| Ⅲ | D 溝柵 | | ８尺等間 | | | |
| Ⅲ | B溝・区画内柵 | | ７尺等間 | | | |




第65図　B溝区画建物配置図

れ，他にB溝区画に伴う建物は存在していない。

建物3は切り合いから，C溝とは共存せず，方向からすればD溝に平行しており，共存が考えられる。A溝との切り合いはなく，共存はありうる。C溝は建物10の柱穴堆積土と類似しているし，方向もほぼ同一でそれらの共存は可能である。D溝は南側の柵列D，建物16との共存が考えられる。したがって，Ⅲ区における配置と切り合いは，B溝区画内（建物2，11，15がコの字形をなして配置する）→A溝掘削（B溝のみ埋めて大造成後，三棟は，A溝と共存することは十分考えられる。）→建物2，11，15の廃絶→建物3，D溝，柵列D，建物16の造営（A溝は外郭として存在することも考えられる。）→方形掘り方の建物10，C溝の造営（C溝は築地の基底部と考えられる。とすれば柵から築地への変化をみることができる）→建物10の建てかえ．という変遷をたどることができよう。

ま と め

宮尾遺跡の立地は東西300m，南北150mの台地上と考えられそのうち調査対象地域は北半の約1万$m^2$で遺跡全面積の$\frac{1}{4}$程度と推定される。調査を行った地域のみで全体の計画性と配置の把握は困難であるが，概略的にほぼ4時期の設定が可能であった。

第1期　建物1，2，11，12，15及びB溝がこれにあたる。

第1期は台地Bの削平と谷Cの整地を行い，B溝区画建物群を造営している。Ⅲ区中央に位置するB溝区画は東西半町を測り中心的な建物群である。区画内建物11の南北中軸線を基準とすると建物1，11（柵列B）建物12の北柱列が一直線上に並ぶ。さらに建物12（Ⅳ区）の東側南北柱列まで90mを測り，西側建物1（Ⅱ区）の西側南北柱列まで同様に90mを測る。

第2期　建物1，2，11，12，15及びA溝，柵がこれにあたる。

B溝を短期間に廃棄し，谷B及び谷Cを大規模に造成しA溝及びA溝柵をⅡ，Ⅲ区にかけて築造している。建物群は1期の存続であり，他では西端に位置する建物4がこの時期に存在する可能性もある。

第3期　建物3，4，6，16及びA，D溝がこれにあたる。

1，2期とは造営にかなりの変化があり建物，溝の配置にも検討の余地がある。B溝区画建物及び建物1，2が廃棄され，新たにD溝を伴う配置がなされていたと考えられる。A溝は最終時期にB溝区画北側で多量の炭を含む堆積土が互層で観察された。第2期の建物1，12は柱抜取りであるがB溝区画建物は全て柱，柱痕が残存していた。これらの事から第2期廃絶がB溝区画周辺の火災によるとも考えられる。A，D溝は共存として扱ったが方向に差が見られ，又前述の炭の埋土等よりA溝廃絶後にD溝を造った可能性も考えられる。

第4期　建物5，8，10及びC溝がこれにあたる。

C溝は巾3mの間隔で北側に浅い溝状遺構を伴う築地状の遺構と考えられる。C溝はⅡ区では確認できなかったが，C溝南側に建物10（Ⅲ区）建物5（Ⅱ区）が北側柱列をほぼ一直線上に載せて位置している。Ⅱ区では建物5に直行に建物8（南北棟）が位置している。

（山　磨）

ものとしてみられない。第５１図のA溝，B溝のいずれよりも古いとみられる遺物が出土しているがその時期は，V区でみられる鍛冶炉工房群の存在が推定される時期である。Ⅱ区からV区にかけての鉄滓・吹子口・炉壁片の出土がみられることがその事実を裏付けている。

B溝区画内の建物３棟（建物２・建物１１・建物１５）および柵列Bは，B溝廃絶後も存続している。B溝は，ある時期に意識的に埋められたことが観察され，その後A溝がつくられている。

以上の推定，およびその他の事実を整理しておく。

(1) B溝区画は，大化改新後その造営がなされた。大化以前の遺構はA溝と共に破壊している。

(2) B溝東辺ではすでに第１次造成（註７）が谷Cにおこなわれている。

(3) B溝は意識的に埋めたてられている。それは場所によっては整地を兼ねている。

(4) A溝はB溝埋めたて後の造営である。土層からみると，B溝廃絶直後である。しかし，B溝区画内の建物とは共存する可能性がある。

(5) A溝は８世紀前半から８世紀中葉にかけての遺物を出土している。

(6) A溝区画は，B溝区画のように整然たる区画を示していない。単なる防水としても心もとない。A溝の北約３５m付近から東西線を設定することができる。おそらく，その位置に最大の防水施設＝溝があったとみてよいだろう。それは本遺跡の北限線であろう。

(7) A溝・B溝が存在せねば，当然Ⅲ区の建物群は防水上危険にさらされる。

(8) V区の遺構群は，B溝区画あるいは久米廃寺と関連する。V区でも久米廃寺の瓦が表採されている。釘・かすがい（註８）等の供給工房の存在が推定される。

(9) 宮尾遺跡は，備前国から美作国に至る吉備国分国期に位置づけることができる。

(10) 久米廃寺が郡司の氏寺と仮定すれば，郡司＝在地豪族の政治的地位，社会的地位が保障された時点，すなわち宮尾遺跡B溝区画成立後あるいは成立と時機を一にしているのではないかと推定される。（註９）

（掘立柱建物の存続期）

大規模掘立柱建物は倉庫とみなされる建物１２を含めて１４棟検出している。小規模掘立柱建物は，建物１３・１４は時期不明であるが，建物１７～２０が時期の明らかなもので平安末～鎌倉期とみなされる。その時期に本遺跡が官衙的機能を果していたとは考えられない。建物１０・建物１６は柱穴掘方を方形から円形に変わっているが，おそらくその時期が本遺跡の最終期と考えられる。Ⅱ区では建物５・８などがA溝廃絶後のもので，奈良時代後半にあてることができる。本遺跡では緑釉陶器片はわずか１片しか出土しておらず，全般に遺物の出土量は少ない。奈良末～平安初期の官衙的印象はとぼしい。茫然とした表現であるが，８世紀後半まで官衙的な掘立柱建物が存在したことは明らかであろう。掘立柱建物などを時期的に以下まとめてみたい。

大規模建物造営前　（７世紀前半～中葉）

本遺跡では，V区でその時期の遺物がみられるほか，Ⅱ区（６世紀後半の須恵器も出土している。古墳が立地していた可能性も強い），Ⅲ区・Ⅳ区でもやはり，鉄滓・炉壁片が出土している。かなり大規模な，製鉄工房集団が存在していたことは明らかである。（註１１）本遺跡南方の久米川流域の

狭小なことを前提にすると，製鉄のような専業的・経済的生産形態は最も有効かつ，経済基盤の定着性を得やすかったとみることができる。「国造」的豪族の依拠する経済基盤として，製鉄は美作地方においては特に顕著な産業であったはずである。おそらく，その「国造」的豪族が後の郡司に成長するとすれば，そのもつところの土着性故に強大な労働力を動員して本遺跡の造営，久米廃寺の建立を成し遂げることができたであろう。（註１２）

B溝区画建物群造営期　（７世紀後半～８世紀初）

B溝区画造営のため谷B・Cの埋立て，台地A・Bの削平により初期の造成が行われている。久米廃寺とその建立造営の相前後する時期と想定する。

A溝区画拡張期　（８世紀前～８世紀中葉）

政治的には律令政権の体制が強化され，諸法令の充実する時期である。その半面，律令政治の諸矛盾が露骨に表面化する時期でもある。前期からこの時期に至る間に，第２次の官衙としての本遺跡整備・造成が行われている。Ⅱ区・Ⅲ区にその中心が集まる。

D溝設定期　（８世紀中葉～８世紀後半）

前期からこの時期にかけては，さらに細分化することは不可能ではない。しかし，層序的・遺物的な確実性を重視すれば，大ざっぱに分類する以外本遺跡の時期を推察する手だてはない。

C溝設定期　（８世紀後半以後）

建物群及び溝の切合いにより宮尾遺跡の大規模建物群造営の最終時期と考えられる。C溝内の出土遺物は少なく時期決定の資料としては乏しい。

小規模建物出現期　（平安～鎌倉期）

官衙的機能消失期である。本遺跡では風字硯は１片も出土していない。そのことが，ある視点官衙否定の根拠ともなる。

※　円面硯片はⅡ区～Ⅳ区で出土している。Ⅲ区A溝北側造成面で秀逸な円面硯片を出土した。長方形透かしを脚部に施し，シャープでほとんど直立するタイプのものである。（図版第５１－２）Ⅳ区出土のものは脚部がやや開くもので，同様に長方形透かしを有する。径はやや小さい。前者はB溝区画～A溝区画の時期に限定される。後者は不明である。

以上が本節の骨子である。全般にわたる大まかな把握は今後是正されるべき点もあるが取り上げることができなかった遺構・遺物については，写真はむろんのこと実測図を公表しなければならないと考えている。限られた調査期間，わずかな報告書作成，遺物整理期間では本報文の作成が精一杯であった。　（岡　田）

（註）

(1)　「少目」墨書土器伴出の須恵器と同形態のものを掲げた。美作国府発掘区では，８世紀後半の須恵器のセット関係が把握される。

(2)　私　　見。

(3)　現在，その実在は確認されていない。勝田郡勝央町にその時期の窯址があると推定されている。（栗野克巳氏の御教示による。）また，津山市佐良山でも，やや古い時期の窯址があり，あるいは奈良時代の窯址が存在するのではないかとみられる。高度な陶棺焼成技術が高く評価される現

## 第２節　宮尾遺跡の時期

本遺跡の時期的巾は，上限縄文時代，下限は鎌倉時代に置くことができる。本遺跡の主要遺構のほとんどは７世紀から８世紀にかけてのもので，その中心時期を主に述べたい。

時期的メルクマールとなる遺物は，その大半をA溝出土土器に依拠している。A溝は他の遺構との前後関係が比較的把握しやすい。また，B溝はA溝より古いB溝区画を形成しているが，遺物の量は極めて少ない。加えて，B溝の時期を明示する遺物の抽出は困難である。以上の前提をふまえてA溝の時期を推察したい。

＜A溝の時期＞

第６４図に掲げるのが，美作地方歴史時代遺跡出土の坏（須恵器）である。中でも美作国府出土の坏は８世紀後半における確実な例とみることができ，（註１）下市瀬遺跡出土坏は８世紀末～９世紀にかけての奈良末～平安初期という時期におくことができる。型式的にみれば，A溝出土の須恵器坏はそれらの遺跡出土坏よりも古いと考えられる。A溝出土坏の形態は坏身に関しては平均的に口径が大きく，立ち上がりはシャープである。そして高台はていねいかつしっかりしたものである。整形・焼成・胎土等はいずれをとっても均一で秀逸であり，特定の供給窯の存在を推定することができる。（註３）坏蓋は量的には少なかったが，整形・焼成等はすぐれている。さほど肩は張らず全体的に優美な形態を示している。これらの坏はほとんどがA溝中層・上層より出土したもので，A溝存続期と廃絶期を示している。この時期を推定するひとつの手がかりはA溝東曲折部上層で出土した平瓦がある。宮尾遺跡では，ほとんど瓦葺の建物はみられず，瓦そのものもごくわずかしか出土していない。この平瓦は久米廃寺よりもたらされたものと考えるべきで，久米廃寺創建期の平瓦ではなく，８世紀前半に比定されるものである。（註４）このことから，A溝廃絶期を８世紀前半もしくはその後と限定することができる。

土師器については，A溝東西部分（Ⅲ区）で丹塗り坏が出土している。いずれも口径は大きく，暗文はみられない。（註５）美作国府出土のものとは，その口径において若干の差異が認められ，国府出土のものよりやや口径を大にしている。

以上の事柄をまとめると，A溝は８世紀前半から中葉という時期に使用され廃絶されたとみることができよう。その時点ではすでに官衙的な機能は整備されていたとみてよい。坏身転用硯（第５０図－１），坏蓋転用硯（第４９図）の出土をみても明らかである。また，墨書土器は一点しか出土しなかったが，A溝上層から出土している。（第５０図－２）文字の判読は明らかでない。（註６）

以上のことから，B溝区画は８世紀前半以前ということになる。その上限はやはり大化改新以降で，改新の詔の第２に示されている軍事・交通の制によるものとみてよいだろう。大化改新から大宝令発布にかけての吉備国の分国が進められたのも中央集権国家への推進政策の一環であり，一種の吉備国動乱の時期とみてよいだろう。

本遺跡の立地も津山盆地から西の備中，あるいは山陰にぬける重要な幹線ルートを見下ろす位置を占めることがやはりその当時の「関塞」・「防人」・「駅伝」を設置するという交通網整備政策の一環とうけとめられる。

遺物からみると本遺跡では７世紀前半～中葉のものが，多々出土しているが，B溝の中では確実な

在，やはり土器生産集団の存在を推定させねばならない。（渡辺健治，河本清氏の御教示による。

(4) 栗野克巳氏の御教示による。

(5) 美作国府でも暗文をもつ土師器は少なく1片のみである。

(6) 第50図に掲げた見方では「皿」とも読める。筆致から図の方向で実測したが，逆の方向から見ることもできる。

(7) 大ざっぱに第1次・あるいは第2次と表現しているが，谷B，谷Cでその造成は軌を一にしていないかもしれず，その場合は3次・4次もありうる。

(8) 実測図は掲げていない。円板状鉄器，刀子状鉄器（鎌か）も出土している。

(9) 久米廃寺創建は白鳳期とされている。

(10) 平安末～鎌倉期という表現は，もはや定着しつつある表現であるが美作地方における古代～中世窯業の実態・生産物の編年が可能になった時点で解消さるべき言語表現である。

(11) 東は日南遺跡，西は領家遺跡までその間の平面では鉄滓が出土する。久米廃寺でも同様である。

(12) 律令体制内の労役は，国までの段階は確かにあったろうが，郡に対するそれは明確でない。すでに郡衙であれば国に対する労役の配分でまかなえるかもしれぬが，いざ郡衙を造営するという時点では前時代的な古墳築造を想起させる。

(13) 勝田郡勝央町所在勝田（かつまだ）遺跡（勝田郡衙推定遺跡）出土遺物に形質共に似る。

⑤　歴史的背景があること。

⑥　本遺跡が久米郡久米郷に位置すること。

⑦　郡衙と考えられている遺跡と類似点があること。

久米郡衙としての否定的要素

1.　文献的資料に欠け，郡衙の実態が詳らかでないこと。

2.　倉庫が少ないこと。

3.　正殿が発見されていないこと。

4.　豪族の館

以上の項目について考えてみよう。

①　時期的に最も古いB溝区画内は５４ｍを測り半町の巾をもっており，区画内の三棟（建物２，１５，１１）はB溝の各辺より６ｍ内側に建てられ建物相互は外柱列を延長した柵で結ばれている。また建物１は建物１１の中心より西へ９０ｍに，建物１２は東へ９０ｍに位置し建物１１の北側柱列と直線上にそれぞれの束柱がのっている。すなわちB溝区画を意識して建てられB溝区画と東西に建物群が共存していたと思われる。

つづいて，宮尾遺跡が立地する台地上の浅い谷は大造成がおこなわれ，B溝は埋められて，それに接して北側に巾約１ｍ，深さ0.５～１ｍのA溝が造られたのである。A溝は明らかにB溝を意識して造られており，長さも北辺をB溝の約1.５倍の長さ（約１３５ｍ）とし南がしだいに広がる台形の溝としたのである。この時，B溝にかこまれていた建物２，１１，１５の３棟が存在していたと考えるべきであろう。A溝の内側に柵が存在し，北辺の中央やや西よりは溝の長さ２ｍ間を掘り残し，柵に門を設けた状態が検出された。さらに，建物２廃絶後掘られたD溝も内側に柵を設け，建物１６と密接な関係がある。このように整然と配置された大規模な建物群，谷部分の造成など郡衙と考えるべきであろう。

②　「平安遺文」第９巻，上野国交替実録帳は平安時代の文献であるが郡衙の建物配置を知ることができる。それによると庁屋，副屋，向屋，東屋，西屋，公文屋，納屋などで構成される郡庁館，宿屋，副屋，納屋，厩屋，厨屋等から館，酒屋，窯屋，備屋，納屋などからなる厨家，郡内から納められる稲穀を入れる正倉があるといわれている。宮尾遺跡の建物群にあてはめてみると，B溝区画内の建物１１を副屋，建物１５を東屋，建物２を西屋と考えることができる。また建物１２は３間×４間で束柱を縦横に通した高床式の倉庫と考えられる。すなわち正倉の一部ではなかろうか。文献にみられる建物の規模が明らかでない以上正確にあてはめることはできないがそれぞれの名称などから考えると宮尾遺跡はまさしく郡衙であろう。

③　出土遺物は全体的に少ないが，官衙的な性格をもつ円面硯の破片９点がある。また，A溝最下層出土の大型坏は墨痕が観察でき内側が磨研されており転用硯と考えられる。A溝中層より墨書のある土師器坏が出土した。丹塗りの坏の裏に一字が書かれている。さらに一点であるが緑釉陶器片が表土から出土している。近年美作において国府跡の調査で２００数十点の緑釉陶器，蹄脚硯をはじめ多くの円面硯，墨書土器が出土している。（報告書予定）勝田郡平遺跡からも円面硯，緑釉陶器などが多く出土し，勝田郡衙に関係する遺跡と考えられている。久米廃寺からも円面硯，墨書土器，

緑釉陶器片が出土している。建物２，１１，１５は倒される時は柱を地表面近くで切断したと考えられる。三棟で１５本の柱根が遺存していた。保存の良好な柱根は手斧のあともあざやかに残っており直径２０cm～２６cmを測る。太い丸太の芯を利用しているらしく，すべてが檜材である。宮尾遺跡から出土した円面硯は執務のためには必需品であり，墨書土器に残された文字こそ，郡の官吏の筆跡であろう。また莫大な建築用材の檜の巨木がおしげもなく使われていることから郡衙と考えることができよう。

④ 宮尾遺跡が立地する比高３～４mの台地は総面積約４５,０００m²の広さである。久米川流域において他には見られない地形であり，南に面した一等地ということができる。谷をへだてて西に存在する久米廃寺は山麓斜面に建てられており，講堂は山側をL字形に削って敷地を造成しているほどで，久米廃寺は宮尾遺跡を意識して建てられたと考えられ，宮尾遺跡の重要性を示唆している。宮尾遺跡は地形的立地と同時に地理的位置もすぐれている。吉井川は水上交通路として重要な役割を果していたと考えられる。旭川河畔の下市瀬遺跡で少くとも奈良時代と考えられる川舟の模型が発見され高瀬舟の存在が奈良時代までさかのぼることが明らかになっている（第一分冊既刊）。

しかし，吉井川の左岸にひろがる院庄の低地は氾濫原であり，低地の西半分には河跡をみることができるほどである。また久米川を遡って大庭郡，真島郡をへて出雲街道が存在しており，宮尾遺跡の台地末端部に道路と思われるような地割が久米廃寺付近まで追求できる。また日南遺跡にも古道が発見されている。つまり宮尾遺跡は交通路吉井川と出雲街道をおさえる要衝に位置することになる。古代末には院庄の低地に美作国守護職が居館をかまえたことはその位置の重要性を実証するものであろう。したがって久米郡の最も北に偏在する宮尾遺跡は郡の政治的中心として最もふさわしい位置に存在するといえる。

⑤ 郡司のうち大領，少領に任用されるのは国造であったといわれることから当然郡衙も有力な豪族の支配地域に置かれたと考えられる。宮尾遺跡に接して久米廃寺が存在することはすでにのべた。最も注目すべきは，宮尾遺跡の南にある糠山の山麓に点在するカンナ流しなど古代の製鉄遺跡である。７，８世紀を通じて鉄は銀，銅とは異なり政府の手では開発されず専ちその生産の中心は私採であり，製鉄経営者は郡司層にあったといわれている。また宮尾遺跡からは鉄滓，羽口，V区からは鉄，釘，かすがい，砥石，鉄滓，鍛冶炉が出土している。久米廃寺からも多量の鉱滓（銅の鉱滓も含めて）とともに多くの鉄，銅製品が出土している。久米郡で最も広い耕地とともに鉄や銅の製生産者として久米郡に君臨していた豪族がやがて郡司に任用されていたと考えられないであろうか。

⑥ すでにのべたように，久米郡久米郷に存在し，郷名が郡名と同一であることは郡の中心であり郡衙が置かれて当然であろう。

⑦ 全国で郡衙に比定されている遺跡も数を増してきた。常陸国新治郡衙跡は５１棟の建物が，北群２５棟，東群・１３棟，西群・９棟，南群・４棟に分かれて整然と配置し，東群からは焼籾が出土し正倉と考えられる。（注２）福岡県三井郡小郡遺跡は３０棟以上の掘立柱建物が検出された。コの字形に配置された建物群，柵を境して３間×４間の正倉からは焼籾が多量に出土した。

筑後国御原郡衙と郡倉と推定されているが，軍団関係の遺跡とする可能性もあるといわれている。（注３）京都府城陽市，正道遺跡は寺院址と考えられていたが，６棟の掘立柱建物が，大規模に，

# 第9章　結　　語

宮尾遺跡の特徴は歴史時代に属する２０棟の掘立柱建物が溝，柵と組みあわされて計画的に造営されていることにあり，その性格は官衙的である。調査員として，この宮尾遺跡は美作国久米郡の郡衙の可能性がきわめて強いと考えている。その時期を7世紀後半から8世紀と考えている。

美作国は和銅6年4月（７１３年）備前国の六郡を割いて新設されたことは第2章でのべた。すなわち，六郡とは英多郡１２郷・勝田郡１５郷・苫田郡１５郷・久米郡7郷・大庭郡6郷・真島郡１０郷，でありそのなかで久米郡は大庭郡とともに下郡である。久米郡は美作国において中央に位置し，東と北は吉井川を境として，英多郡，勝田郡と接し北西は領家丘陵の分水界で苫田郡と境を接し，久米川と旭川水系の分水界で大庭郡，西と南は旭川で真島郡，備前国と接していたと考えられている。美作国の耕地については和名抄に１１,０００町歩余と記されており，山陽道8ヶ国では備前国につぐ広い耕地を持っており旭川，吉井川の本流，支流が形成した沖積低地が耕地として利用されていたのである。また，中国山地から切り出される「美作国檜木箐」は美作の「調」としては重要な位置を占めていたかもしれないし，鉄は神亀5年4月，美作国大庭，真島の二郡で庸米を鉄，綿にかえるという記事が「続日本紀」に記載されていることから，米以外の経済的基盤をもつ国であったことが想像できる。

久米郡は久米川，吉井川，倭文（シトリ）川，佐良川，誕生寺川の流域に低地がまとまって存在するほかは小規模な谷水田である。したがって，郷も久米川流域に久米，大井，倭文川流域に倭文（シトリ）・錦織（ニシコリ），佐良川流域に賀美（カミ），誕生寺川流域に弓削（ユゲ），吉井川右岸に長岡の各郷が推定されている。もちろん，これらの郷域を知りうる資料はないが，水田可耕地を中心に郷が存在すると考えられるものが多い。しかし，口分田のみではなく倭文郷や錦織郷は織物に関係する郷名であり，延喜式にみる白絹，緋帛（ヒハク），緋絁（ヒシ）などの絹製品の生産地であったかもしれない。宮尾遺跡は久米郷に属すると考えられるが，郡内で条里制地割が見られるのは久米川流域の領家と宮尾の低地だけである。換言すれば，久米郷は郡内で最も広い低地が存在する郷である。しかし久米郷は久米郡の北端に位置し，その郷内に存在する宮尾遺跡を郡衙と考えるとき，久米郷が地理的な中心ではない。

しかし，美作国府は苫田郡苫田郷（現在の津山市総社）に存在することが昭和４６年に岡山県教育委員会の調査で明らかになった。したがって，国府への距離は8Km以内であることが律令体制の徹底という点から考えてその位置の適正さは肯首できよう。

さて，宮尾遺跡で検出した奈良時代前期以後の大規模な掘立柱建物群はいったい何なのか。果して，郡衙か豪族の館か，軍団か，もっとも可能性の強い久米郡衙と考える肯定的要素と否定的要素をあげて考察を試みてみたい。

まず久米郡衙としての肯定的要素

① 大規模な掘立柱建物が溝，柵と組み合わされて，計画的に造営されていること。

② 建物配置が文献資料による郡衙のそれと類似していること。

③ 出土遺物に官衙的性格があること。

④ 地理的立地にすぐれていること。

整然と配置されており，山城国久世郡衙と考えられている。（注４）最近，調査が行われた鳥取県倉吉市伯耆国分尼寺推定地は，一辺約１５０mの濠と柵列によって，区画された地域に１１棟の掘立柱が検出され，南・東・北門をもつことが，明らかになり，国府以外の官衙跡と推定されている。（注５）結果の報告が待たされる。

これらの例から考えて，宮尾遺跡と共通する点が多い。溝，柵による区画があること。新治郡衙をのぞいて，すべて掘立柱建物であること。瓦葺でないことなどである。宮尾遺跡はこれらの諸遺跡よりもっと明快に久米郡衙と考えられる。つぎに久米郡衙としての否定的要素について考えてみよう。

1. 郡衙の実態を詳述した文献が少なく，郡司には土着豪族が，任用され，郡の大小もあり，少ない資料からすべてをあてはめるのは危険である。国府，国分寺でさえ，国によって規模も異なっており，郡衙まで全国的な規準はないと考えられる。したがってより確実な資料－郡名の墨書，刻印，木簡の出土があり，同類の遺構の発掘例の増加によって明らかにされるであろう。
2. 今回の調査は中国縦貫道の建設にともなう緊急発掘調査であり調査範囲は限定されているため，すべての遺構が検出されてはいない。したがって，東端に検出された建物１２を正倉の一部と考え，地形的にみて倉庫群は南につづく台地上に存在するのではないかと思われる。

また正殿に比定できるような建物が発見されていないが，上述の理由によるものである。ただB溝区画の南側が土地所有者において耕地の区画がえが行われたとき礎石らしい板石がならんでいたといわれており，正殿に比定できる建物であった可能性がある。

以上宮尾遺跡を久米郡衙と考えることが，最も妥当であるといえる。今後の調査例増加がこれを明らかにするであろう。

宮尾遺跡で最も古いB溝と柵列Bの関係をみると柵列Bは建物に伴うもので，B溝はそれらを囲繞する形態をとっている。A溝の場合は柵列Aとセット関係を示し，B溝の場合とは異なる。D溝の場合もA溝と同様である。したがってA・D溝と柵で建物群を囲むことになる。C溝は北側にみられる断続的な溝状遺構とが築地の基底部と考えられ，前二者とは異なった形態を示している。すなわち，溝による囲繞から柵をともなう溝による囲繞，そして築地による囲繞という変遷があるのではなかろうか。その変化がいかなる原因によるものかについては言及できない。今後の研究を待ちたい。なお宮尾遺跡から出土する瓦類は数点しかなく軒丸瓦は，破片が１点ある。それは久米廃寺のもので複弁７葉，天平期のものである。したがって建物は板葺もしくは檜皮葺であったと思われる。

宮尾遺跡で検出された遺構のなかで，竪穴式住居址が，最も古く，古代末の建物１７・１８・１９・２０，土壙墓１が最も新しく，そのほとんどが，７世紀後半～８世紀平安初期の比較的短期間のもので，その間3～4回の建なおしが行われている。掘立柱の耐久年数２０年～３０年として約１００年～１２０年この地に存在した久米郡衙はこつ然と消え，久米郡の他の地へ移されたのであろうか。貞観４年（８６２）久米郡に始めて主政を置くという続日本紀の記事は下郡であった久米郡が中郡になったことを示しており，どのような事情があったか知るよしもないが，久米郡の中心が他に移ったとすれば，地方において郡司層の相剋が，はげしかったことをものがたっているといえよう。久米郡内における奈良時代建立の寺院址は久米廃寺以外に弓削郷に弓削廃寺の存在が明らかであるが，それ

以外には発見されていない。ともあれ，宮尾遺跡は久米廃寺とともに7世紀～8世紀にかけての律令体制の徹底が強力にすすめられる中で，とらえるべきであろうし，地方における古代史の究明に貴重な資料となると考える。

久米廃寺は主要部を交架橋で保存することになり現在その工事が進行している。しかし，宮尾遺跡には6～7mの盛土で道路が走り，再び見ることもなく埋められてしまった。宮尾遺跡の南側は現在なお水田化されているが開発の波は容赦なくせまり，土地所有者も宅地化の準備をすすめているともきく。久米廃寺の前面は埋めたてられ，道路公団から買いあげた旧用地内のみが開発からとりのこされるという皮肉が生じている。宮尾遺跡も郡衙の実態を把握するにも南側を破壊から守るべき努力を惜んではなるまい。本稿は調査の結果に基づいて，事実から引き出される第1次的推察までにとどめた。限られた期間の調査で未調査地域も多いなかで組み立てられるものにはおのずから限界がある。ご批正を乞うものである。

（橋　本）

注1　原島礼二「日本古代社会の基礎構造」未来社１９６８

注2　高井悌三郎「郡衙跡」　新版考古学講座6　昭和４５年

注3　福岡県教育委員会「福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報」　１９６８，１９７１

注4　城陽市教育委員会「正道遺跡」　城場市埋蔵文化財調査報告書　第1集　１９７３

注5　倉吉市教育委員会「伯耆国分尼寺推定地発掘調査　現地説明会　資料　１９７３

参考文献　　津山市史　第1巻・原始・古代　１９７２.

宮尾遺跡全景（航空写真）

図版 2

1. 宮尾遺跡全景（手前久米廃寺） 西より

2. 宮尾遺跡全景（東より）

1. 宮尾遺跡全景（南東より）

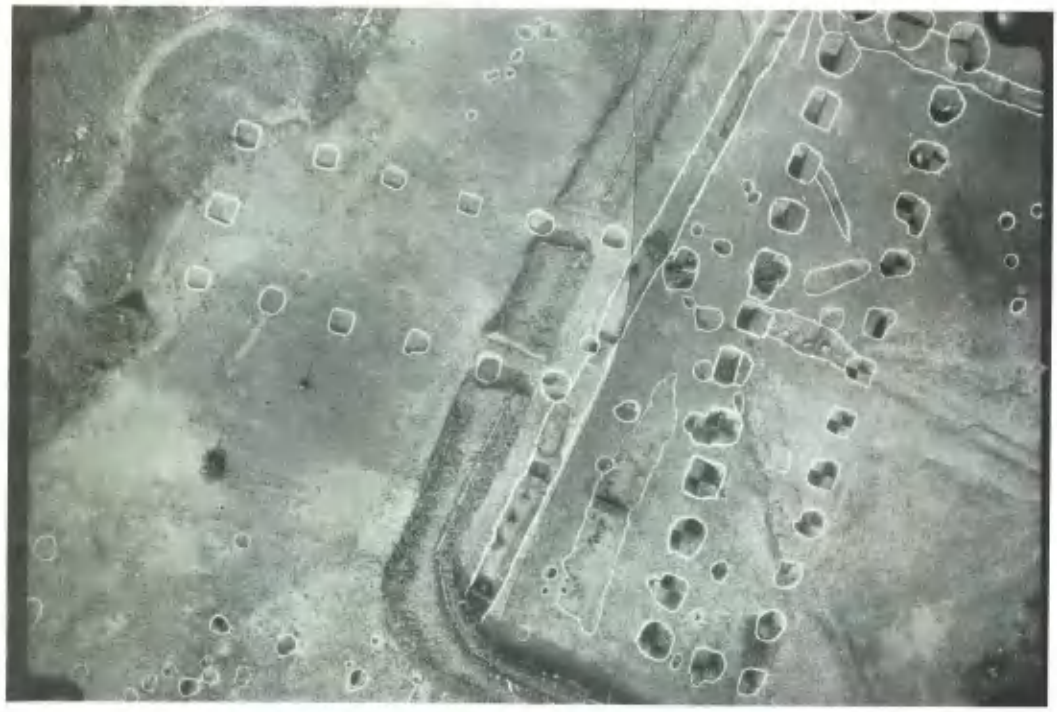
2. 宮尾遺跡全景（南西より）

図版4

1.　宮尾遺跡全景（南西より）

2.　宮尾遺跡Ⅲ・Ⅳ区全景（南より）

1. 宮尾遺跡Ⅰ・Ⅱ区（航空写真）



2. Ⅱ区建物 1.5付近（航空写真）

図版 6

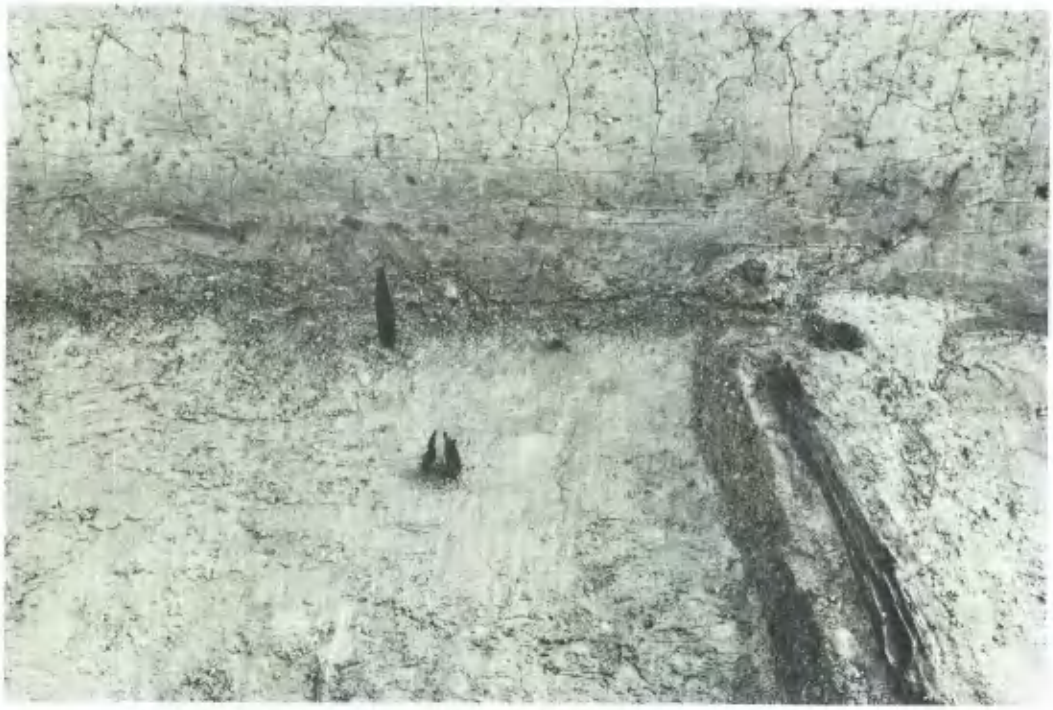
1. 宮尾遺跡Ⅲ・Ⅳ区（航空写真）

2. 宮尾遺跡Ⅲ区（航空写真）

7－1　Ⅰ区　第1トレンチ　弥生時代中期水路

7－2　Ⅱ区　第1トレンチ　弥生時代中期水路

図版 8



1. Ⅰ区　第4トレンチ　弥生時代水路

2. Ⅱ区　建物1　検出状態

Ⅰ区　出土遺物（1）

図版10

Ⅰ区　出土遺物（2）

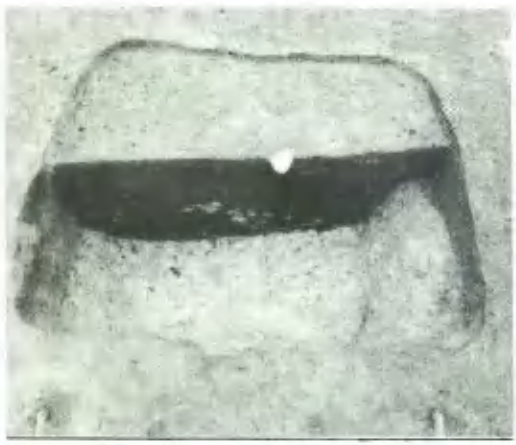
1. Ⅱ区　建物1　検出状況（北より）

2. Ⅱ区　建物1付近（北より）

図版12

建物1 —28

建物1 —26



建物1 —25

建物1 — 2

建物1 —16

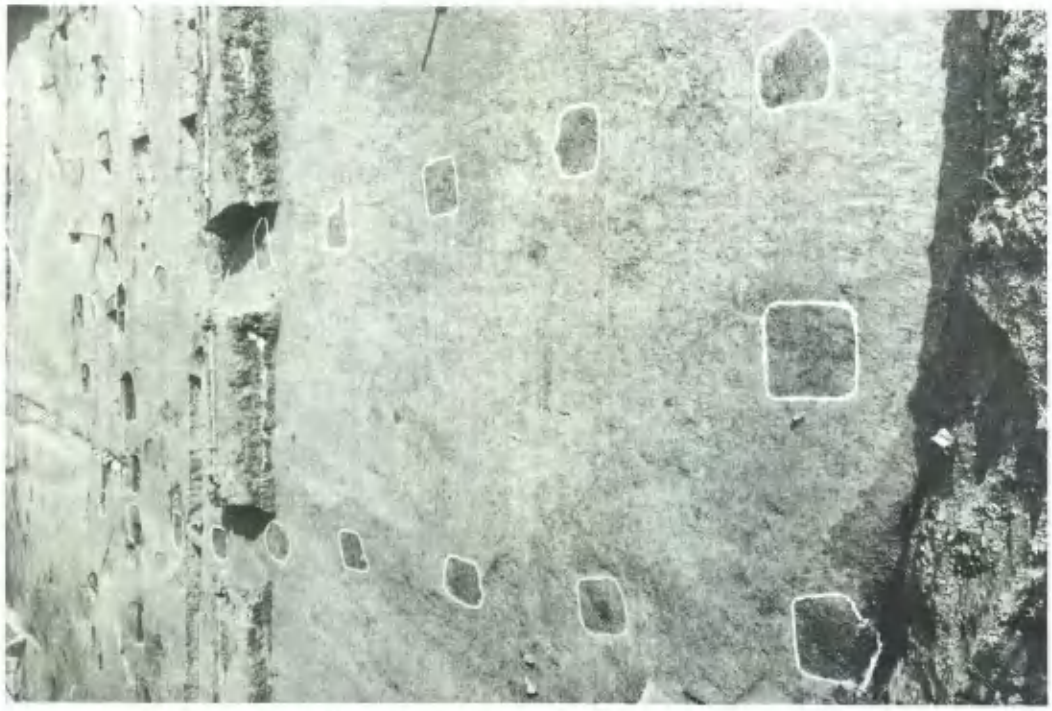
建物1 —10

建物1　　柱穴断面

1. Ⅱ区西端建物4付近検出状況（北より）

2. Ⅱ区建物4（北より）

図版14



1. Ⅱ区建物5検出状況（西より）

2. Ⅱ区　建物6（北より）

1. Ⅱ区建物8（南より）

2. Ⅱ区建物7（北より）

図版16

1. Ⅱ区建物6 ・ 7 付近全景（北西より）

2. Ⅱ区　A溝　柵（北より）

1. Ⅱ区　西端溝状遺構

2. Ⅱ区　西端土坑

3. Ⅱ区　建物13

4. Ⅱ区　建物14

図版18

1. Ⅲ区　建物11付近（西より）

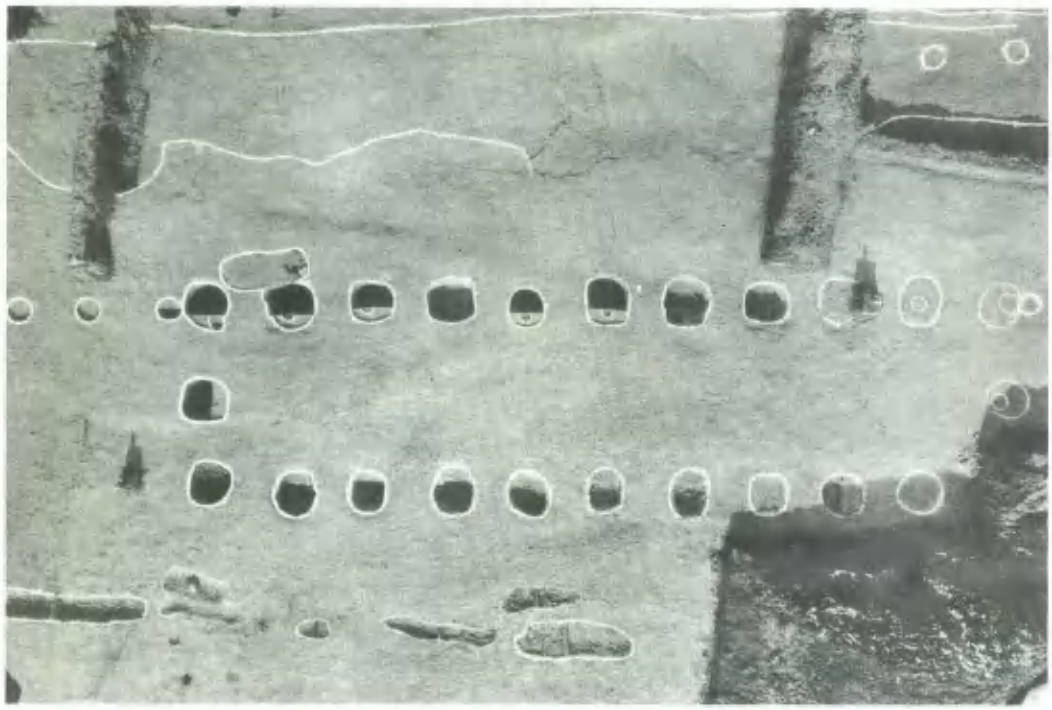
2. Ⅲ区　全景（西より）

1. Ⅲ区　建物２・３・10検出状況（北より）

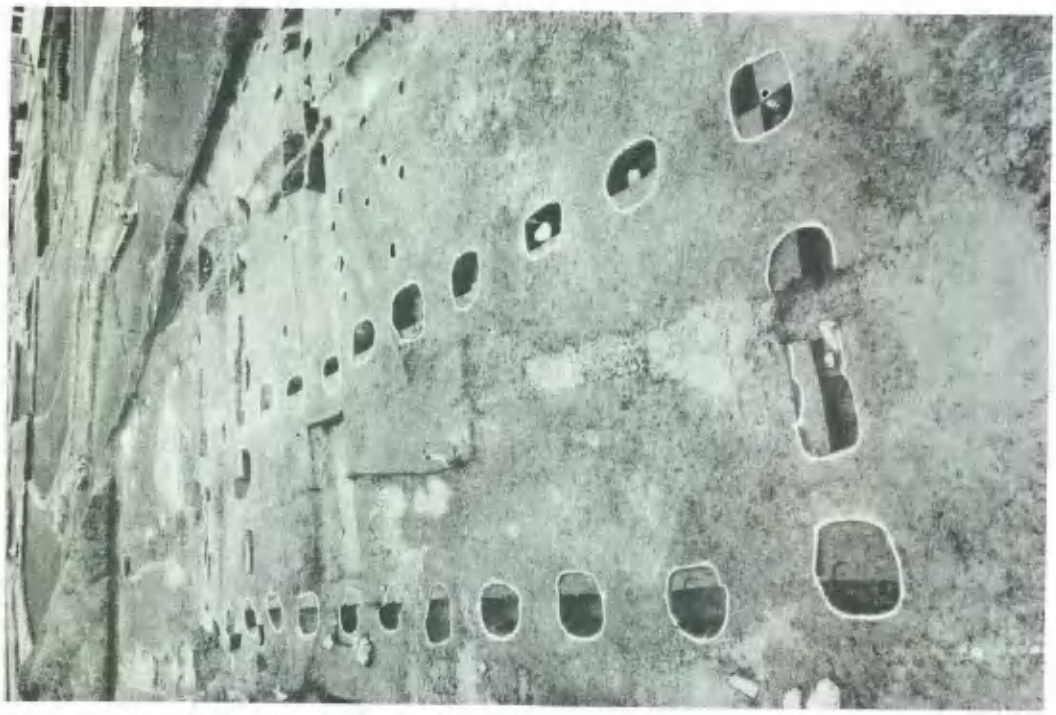
2. Ⅲ区　建物２（北より）

図版20

1. Ⅲ区　建物２・３付近（航空写真）



2. Ⅲ区　建物11（航空写真）



1. Ⅲ区　建物3（西より）

2. Ⅲ区　建物11　検出状況（東より）

図版22

13

10

14

11

16

4

建物2柱穴

26

18

20　　29　　28

4

西　側　東　柱　14

建物3柱穴

図版24

柱穴No－2

柱穴No－3

柱穴No－4

柱穴No－5

柱穴No－18

柱穴No－21

建物11　断面

1. Ⅲ区　建物15（北より）

2. Ⅲ区　建物15　南端（西より）

図版26

1. Ⅲ区　井戸状遺構検出状況（北より）

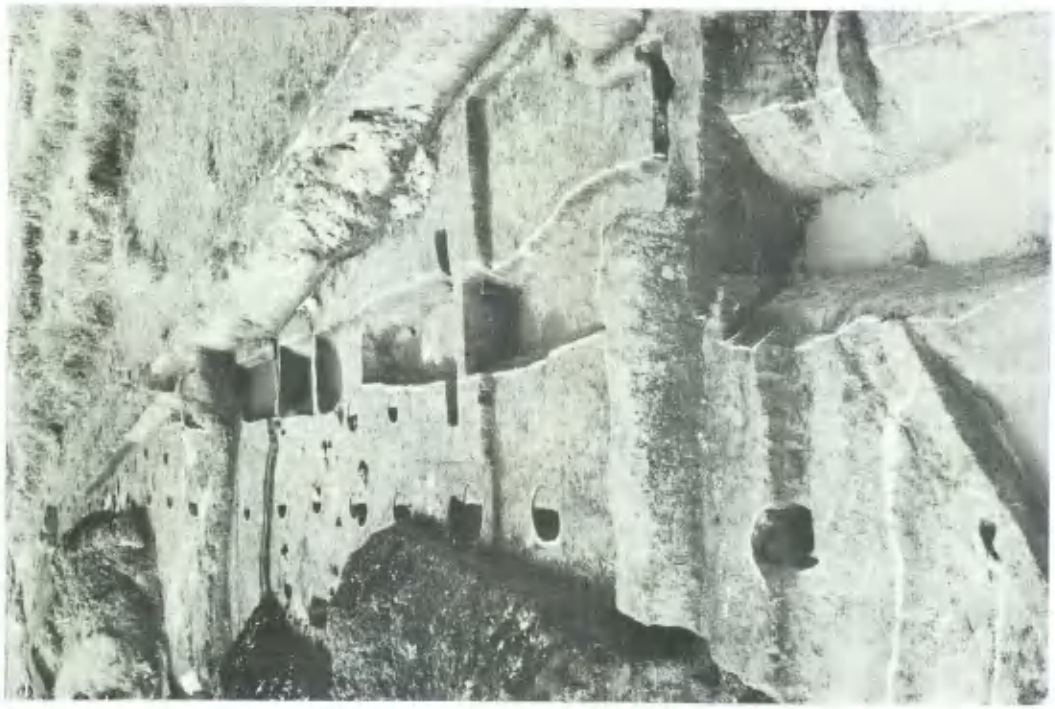
2. Ⅲ区　井戸状遺構（北より）

1. Ⅲ区　D溝付近（北西より）

2. Ⅲ区　B溝断面（北より）

3. Ⅲ区　D溝断面（東より）

図版28



1. Ⅲ区　A溝および柵列（東より）

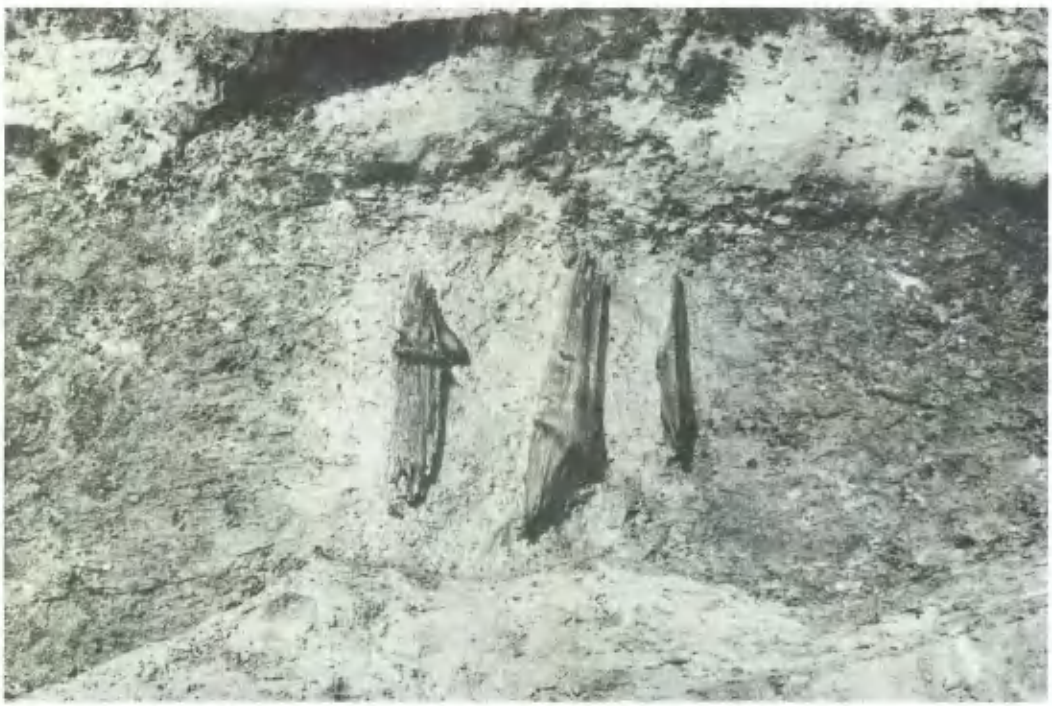
2. Ⅲ区　A溝および柵列・門状遺構　（西より）

1. Ⅲ区　A溝コーナー（東より）

2. Ⅲ区　A溝コーナー・仕切り掘りの部分（北より）

図版30

1. Ⅲ区　A溝コーナー（北東より）



2. Ⅲ区　A溝コーナー渡し状腐触材木片（南より）

1. Ⅲ区　B溝・A溝柵列検出状況（西より）

2. Ⅱ区　A溝発掘状況（北より）

図版32

1.　Ⅲ区　A溝上面炭層面・B溝および柵列A（西より）

2.　Ⅲ区　A溝・B溝掘り上げ状態および柵列A（南西より）

1. Ⅲ区　A溝断面（A－A′）（北より）

2. Ⅲ区　A溝断面（B－B′）（北より）

図版34

1. Ⅲ区　A溝断面（C－C′）（西より）

2. Ⅲ区　A溝断面（D－D′）（東より）

1. Ⅲ区　A溝・B溝断面・柵列A（E－E'）（東より）

2. Ⅲ区　B溝断面（E－E'）（東より）

図版36

1. Ⅲ区　A溝断面，左は整地土断面（F－F'）（西より）

2. Ⅲ区　B溝断面（F－F'）（西より）

1. Ⅲ区　A溝・B溝断面（H－H′）（西より）

2. Ⅲ区　A溝断面（H－H′）（西より）

図版38

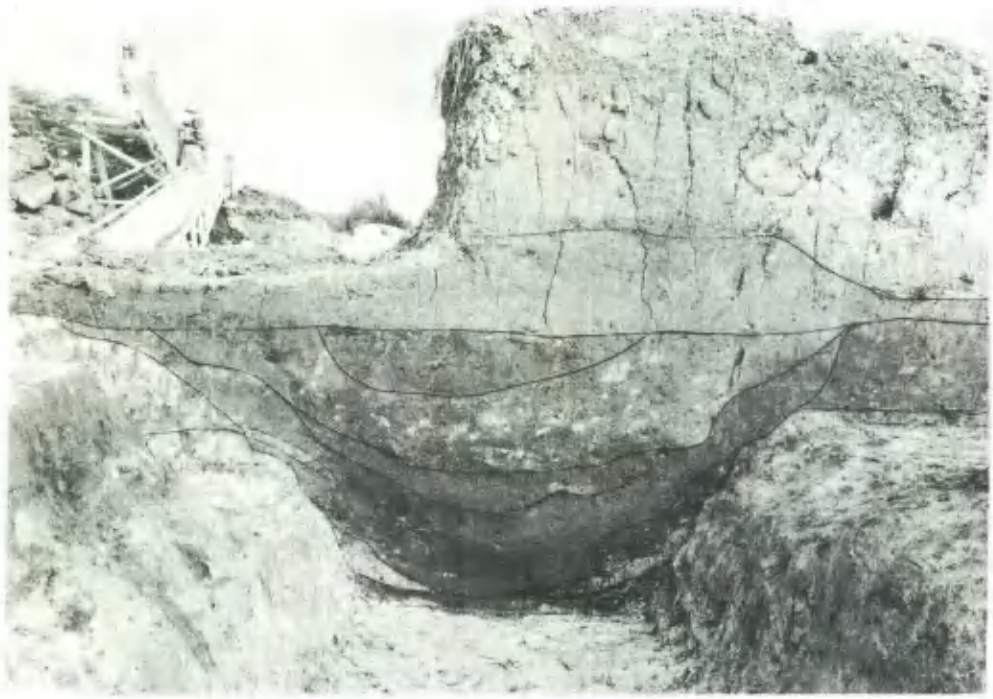
1. Ⅲ区　B溝断面（H－H′）（西より）

2. Ⅲ区　A溝断面（I－I′）（西より）

1. Ⅲ区　B溝断面（J－J'）（西より）

2. Ⅲ区　A溝断面（K－K'）（西より）

図版40



1. Ⅲ区　A 溝断面（L — L'）（西より）

2. Ⅲ区　A 溝断面（M — M'）（西より）

1. Ⅲ区　A溝断面（N—N'）（東より）

2. Ⅱ区　A溝断面（R—R'）（南より）

図版42

① Ⅲ区　A溝・B溝周辺の検出状況（東より）

② Ⅲ区　A溝（S－Ś）断面および抗列（北より）

① Ⅲ区　E Ⅳ N Ⅱ南北トレンチA溝（右）B溝（左）・柵検出状態（西より）

② Ⅲ区　E Ⅳ N Ⅱ南北トレンチA溝・B溝（手前）・柵検出状態（南より）

図版44

1. Ⅲ区　北端A溝・柵・構検出状況（南東より）

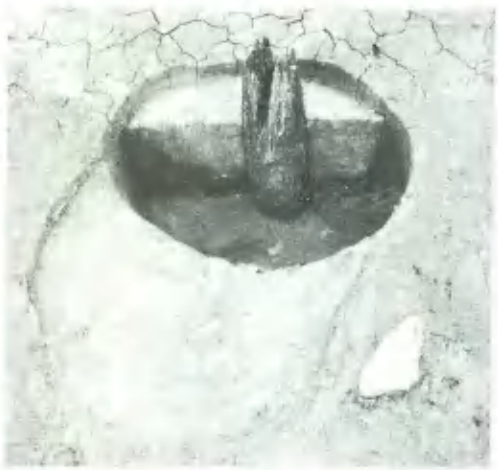
2. Ⅲ区　門址付近（北より）

1

2

3

4



5

6

5. A溝柵柱穴断面

図版46

① Ⅲ区　ＥⅤＮⅡ南半グリッドＢ溝検出状態（南より）

② Ⅲ区　ＥⅤＮⅡ南半グリッド整地（造成）面（北より）

① Ⅲ区　A溝およびB溝西側曲折部分（南東より）

② Ⅲ区B溝西側曲折部より南直線部分（北より）

図版48

① Ⅱ区　A溝瓦（上層）出土状態

② 須恵器（中層）出土状況

③ Ⅱ区　A溝須恵器（上層）

④ Ⅱ区　A溝土師器（上層）出土状態

① Ⅲ区　ＥⅣＮⅡ西端部Ａ溝下層木器出土状態（南より）

② Ⅲ区　ＥⅣＮⅡＡ溝最下層杯身転用硯出土状態（南東より）

図版50

① Ⅲ区　A溝土師器出土状態

② Ⅲ区　A溝上層須恵器出土状態

③ Ⅳ区EⅣNⅢ北西コーナー
A溝北側凹地土師器出土状態

④ Ⅲ区　A溝上層須恵器出土状態

1.　Ⅲ区東　A溝上層須恵器出土状態

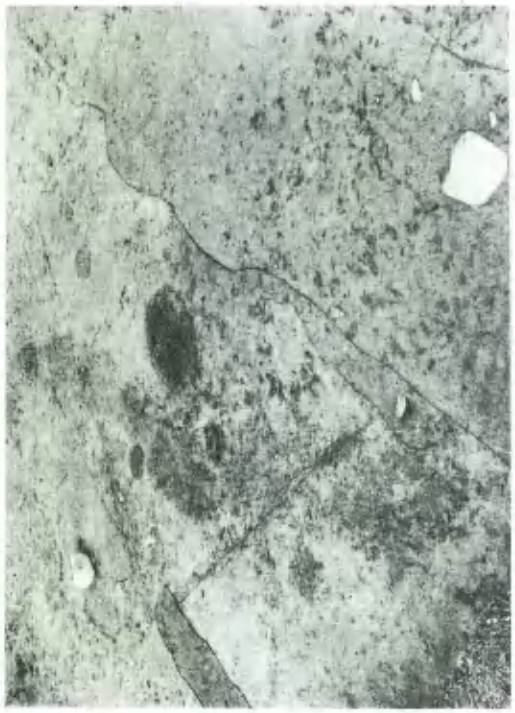
2.　Ⅲ区　A溝北側谷部造成面円面硯片出土状況

図版52

① Ⅲ区　B溝中層須恵器出土状況

② Ⅲ区　B溝下層須恵器出土状態

③④ Ⅲ区　C溝上面杯蓋出土状態



1. Ⅲ区　竪穴住居址（南西より）

2. Ⅲ区　土坑（西より）

3. Ⅲ区　建物２・３・10重複状況

4. Ⅲ区　溝状遺構

図版54

Ⅳ区　北端遺構検出状況

Ⅳ区　建物12（南より）

1. Ⅳ区　建物12発掘状況（東より）

2. Ⅲ区　B溝検出グリット発掘状況（北より）

図版56

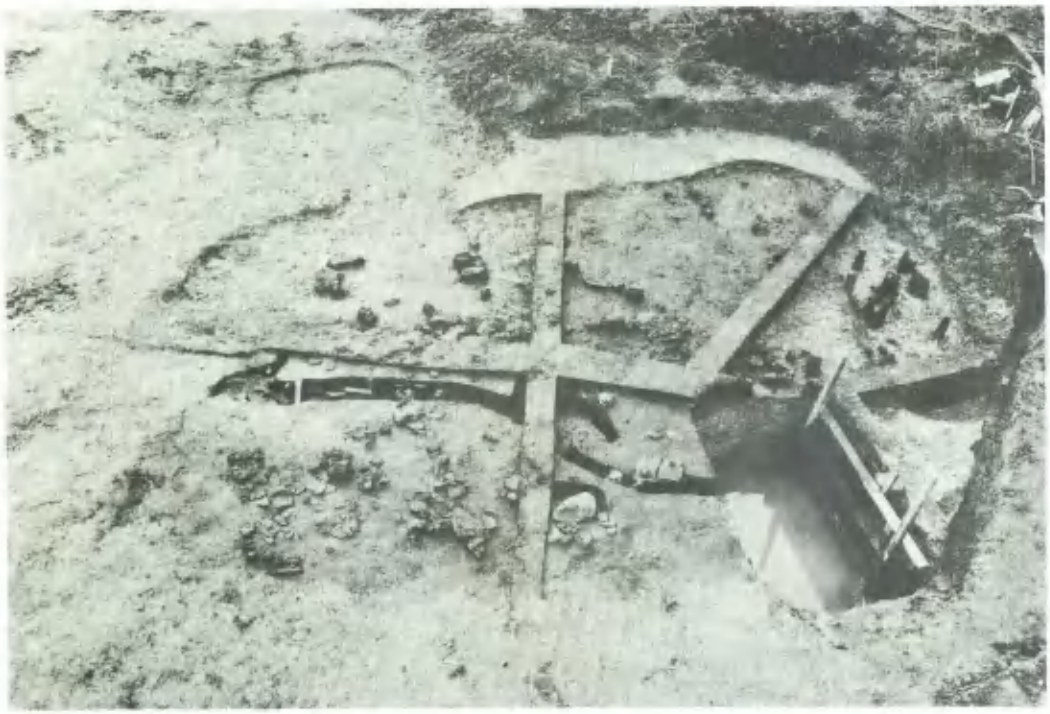
① Ⅴ区　A地点全景（左ー竪穴・右ー溝）（西より）

② Ⅴ区　A地点竪穴遺構発掘状況（南西より）

① V区　A地点竪穴遺構遺物出土状態

② V区　A地点竪穴遺構及び溝

図版58



① V区　A地点竪穴掘り上げ状態（東より）

② V区　A地点溝断面

① V区　A地点竪穴遺構内須恵器高杯出土状態

② V区　A地点竪穴遺構内土師器出土状態

図版60

① V区　B地点全景（南より）

② V区　B地点掘り上げ状態（南より）

① V区 B地点方形ピット

② V区 B地点鉄器出土状態

図版62

① Ⅴ区 B地点方形ピット掘り上げ状態（北より）

Ⅴ区 B地点円形ピット

V区　C地点全景

V区　C地点竪穴遺構・溝・柱穴

図版64

① V区　C地点鍛冶炉断面

② V区　C地点柱穴検出状態

A－S－1

A－S－2

A－S－3

A－S－4

A－S－5

A－S－6

A－S－7

A－S－8

A－S－9

A溝　出土遺物

図版66

A－H－1

A－H－1

A－H－2

A－H－3

D－S－1

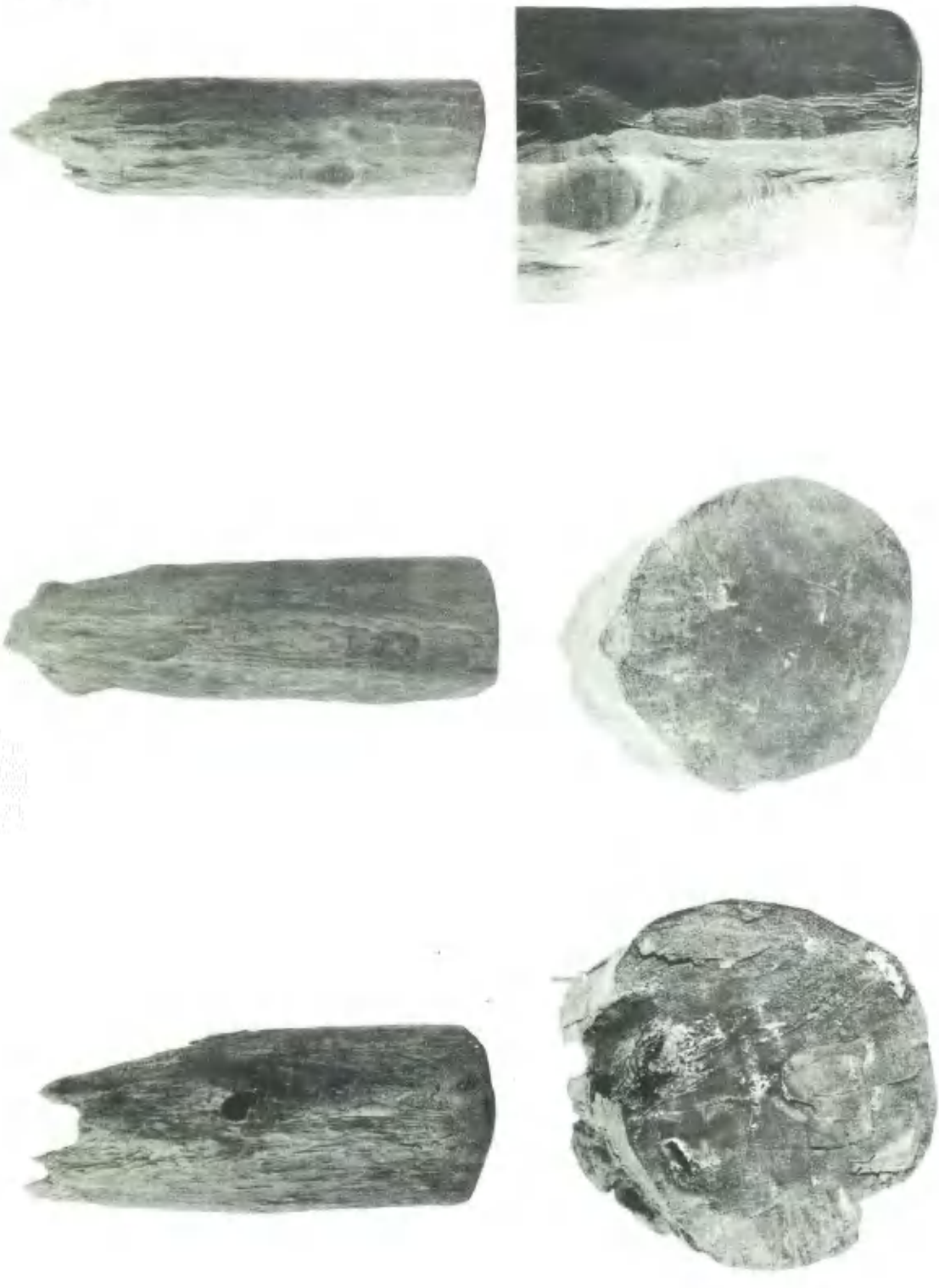
C－S－1

円面鏡

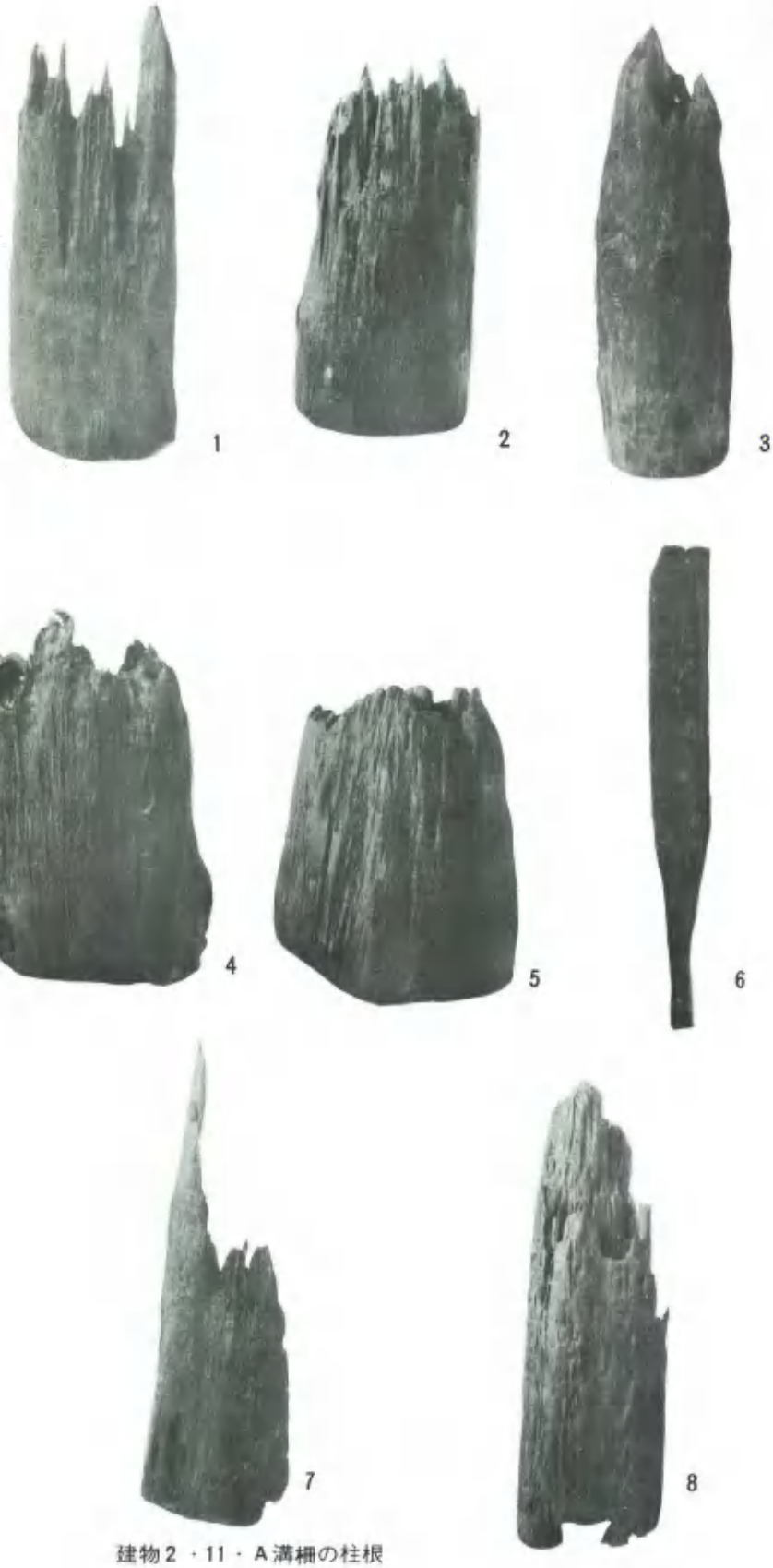
A・D・C溝・土坑3・円面硯出土遺物

B溝出土遺物

図版68

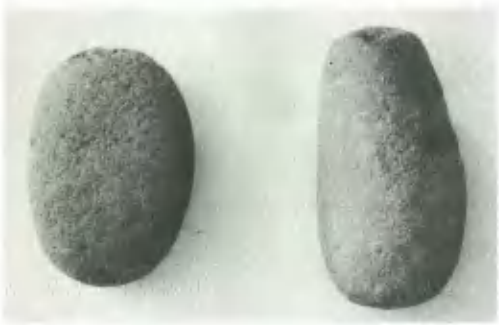


建物11の柱根




建物2・11・A溝柵の柱根

図版70



V区　出土遺物

1. 現地説明会（建物12付近）津山朝日新聞提供

2. 現地説明会（建物１付近）

# 日南（ひな）遺跡 (17)

目　　次

第1章　遺跡の位置と調査に至る経過…… 259
第2章　遺　構…… 260
(1)　箱式石棺…… 260
(2)　古　　道…… 263
(3)　ピ　ッ　ト…… 265
結　　語…… 265
(付　記)

目　　次

(実測図)

第1図　日南遺跡全体図（実測：橋本・岡田，整図：岡田）…… 261
第2図　箱式石棺実測図（実測・整図：岡田）1／20…… 263
第3図　古道横断面図（実測：橋本・山磨，整図：岡田）1／60　ピット断面図（実測：山磨，整図：岡田）…… 264
第4図　古道出土遺物実測図（実測・拓本：岡田，整図：岡田）…… 265

(写　真)

図版第1　(1)ブルトーザ走行後の縄張り作業（撮影：山磨）
図版第1―(2)発掘風景（撮影：岡田）
図版第2―(1)古道全景（撮影：山磨）
図版第2―(2)箱式石棺（北より）（撮影：岡田）
図版第2―(1)ピット断面（東より）（撮影：山磨）
図版第3―(2)古道断面（西より）（撮影：山磨）

# 第1章　遺跡の位置と調査に至る経過

吉井川西岸，平野との比高約20m，標高約 130mの低丘陵に位置する。この低丘陵は東西に走りり宮尾遺跡の背後丘陵に連らなる。この低丘陵上，および南側の舌状丘陵部分には10数基の古墳群，を形成している。（久米廃寺報文中第2図参照）また，この丘陵の北側の東西に走る平野との比高約20mの丘陵上にも7基の円墳から成る古墳群が存在している。丘陵をひとつの単位とする古墳群の存在が顕著に認められる地域である。（註1）

「日南古墳群」の中心的位置を占めるのは，やはり大日（だいにち）古墳であろう。この古墳は一辺34m，高さ5m強の美作地方最大の方墳で，葺石・周溝を伴うものである。（註2）久米川流域の狭小な平野を南に見下ろす好位置を占めており，この地域でも有数の古墳である。

大日古墳の北40mには以前から箱式石棺が露出しており，明らかな封土を有するものか否か明らかではないがその周辺には小封土状の高まりも認められ，群集的な箱式石棺の存在が推定されていた。そして，封土状の地形を古墳とすれば古墳そのものは縦貫道路線にはかからないが墳端部がかかるのではないかという判断のもとに緊急調査の対象遺跡「日南古墳」としてとりあげられた。（先述のごとく，当初は古墳の一部と判断していたため「日南古墳」として呼称していたが，後に箱式石棺・古道・ピットが発見されたため「日南遺跡とするのが妥当と考え，本稿でも「日南遺跡」としている。これは発掘調査中より用いてきた呼称でもある。）

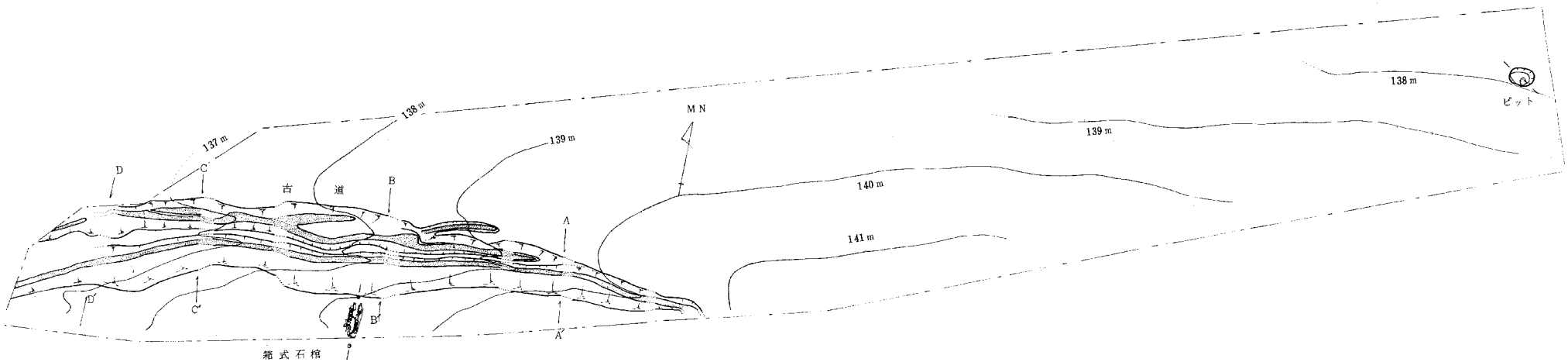
本遺跡の調査は，1972年度中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査行程・計画からすれば，単独で行うことは不可能であり当初より宮尾遺跡の発掘調査とあわせて実施することとなった。

4月より宮尾遺跡を担当した3名の調査員は津山市河辺所在，天神原遺跡・真庭郡落合町所在，赤野遺跡（4月～6月）・久米郡久米町所在，領家西古墳（7月）を，あわせて発掘調査を実施しなければならないという強行スケジュールのもとで，本遺跡の発掘調査実施時期について検討した。

その結果，あくまで宮尾遺跡の性格を明らかにし得た時点で――宮尾遺跡の発掘調査終了に近い時点――実施するという結論に達した。

1972年8月17日，道路公団，鉄建建設，県教委三者立ち会って発掘調査区域の設定縄張りを行なった。ところが8月31日，鉄建建設は突如ブルドーザでもって調査予定区域に侵入，ほぼ全域を削平した。その際，箱式石棺の露出をみ，推測されていた古墳の墳端どころか古墳そのものの存在が明らかになったのである。（8月25日頃には，日南遺跡東方にブルドーザが進入しており，そのエンジン音は調査員の耳に達していた。）9月1日，各方面にその事実を連絡し，午後，道路公団工事長，鉄建建設所長が陳謝のため本遺跡に訪れた。更に，道路公団庶務課も訪れたが，その席上「日南遺跡」の調査が遅れているのが悪いという発言を調査員に向け，調査員は極めて心外かつ「公団は遺跡を一体何と思っているのか」という憤りをおぼえた。9月4日，本庁文化課にて日南遺跡の処遇について協議，契約等を再点検した。後日，鉄条網でもって再度，発掘予定区域の縄張りを行なった。その後調査員は，当初の予定通り宮尾遺跡の発掘調査に専念した。

1972年11月19日，宮尾遺跡の東端（Ⅳ区）より東約50mの地点＝縦貫道路線内にて，ブルドーザ




第1図　日南遺跡全体図（1／200）

整地作業中住居址らしい黒色包含層部分を発見した。鉄建建設に直接連絡一時工事中止を申し入れ，ただちに杭打ちを行った。翌20日，津山教育事務所次長・主任および道路公団久米工事区工事長・鉄建建設係員および宮尾遺跡発掘調査員の三者で協議を行なった，その結果，日南遺跡は11月いっぱいで調査終了明け渡しという前提条件のもとにこの新発見のこの地点（後の宮尾遺跡第Ⅴ区である。当初は野辺遺跡と呼称していた）と宮尾遺跡をあわせて1月20日まで調査期間を延長することとなった。結果的に，日南遺跡は宮尾遺跡との軋轢・諸矛盾を背負った形で調査が為されねばならなかったのである。

〔日誌抄〕

11月21日　野辺遺跡縄張り。遺構のある所，ない所を早くつかむためにブルドーザの使用を強いられ，指示。日南遺跡トレンチ設定。

11月22日～11月24日，トレンチ発掘。古道検出。ピット検出。測量ポイント設定。

11月25日　対策委員会見学。

11月27日　道路公団所長見学。

11月25日～28日　古道およびシストの全容を検出。

11月29日～30日　シスト実測。古道および発掘区域の地形測量。写真撮影。

12月1日　古道断面実測。ピット断面実測。

12月2日　シスト全景写真。古道断面写真。日南遺跡全景写真撮影。シスト石材とりあげをもって調査をすべて終了した。

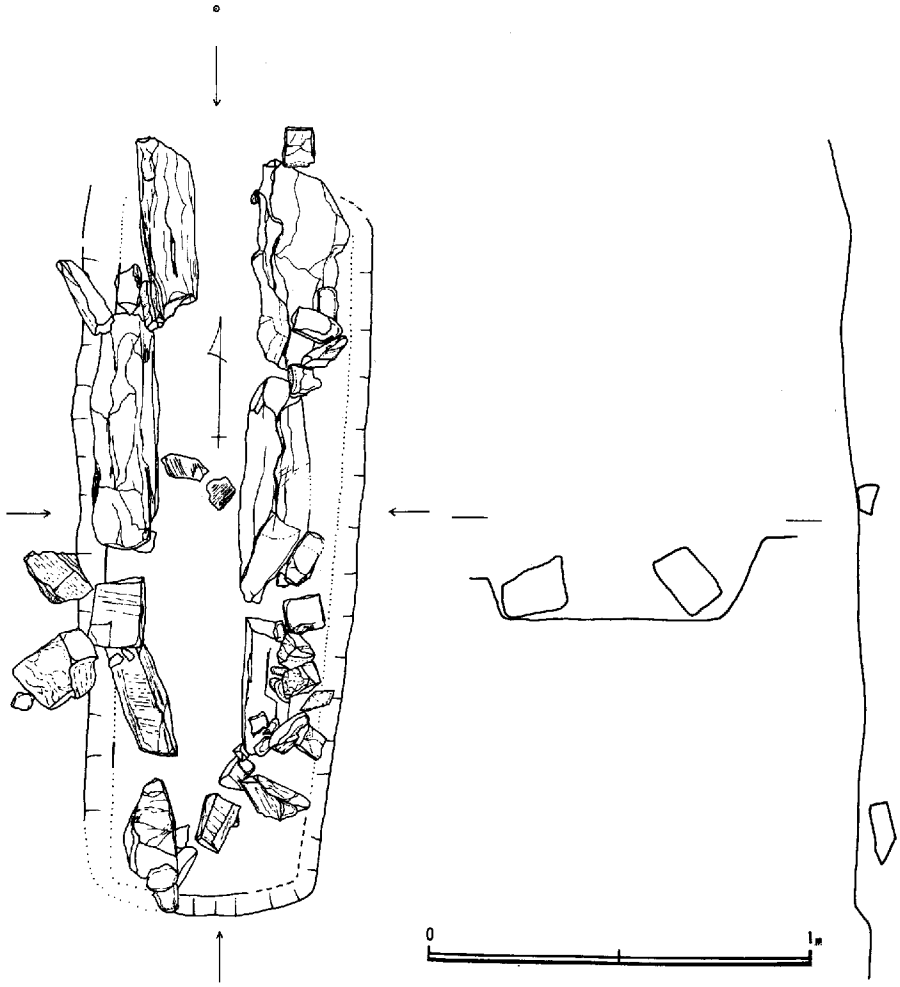
# 第2章　遺　　構

## (1)　箱式石棺

片岩質の板状石を用いた通例のものである。蓋石および小口石（ツマ石）は消失しているが原形を復元考察できる状態である。樹木の根が石材の間隙にくいこんでいるため石材の若干の移動をみる。

側石は板状石3枚を用いている。

全長2ｍ，巾 0.6ｍを測り，掘り方全長約2ｍ巾 0.7ｍである。遺物は皆無である。この箱式石棺の南側部分の側石周辺には小児頭大あるいは挙大の岩礫が積まれており，箱式石棺を組み立てた後，補強あるいは埋土と共に被覆したものかもしれない。時期的なものに関しては一切不明である。

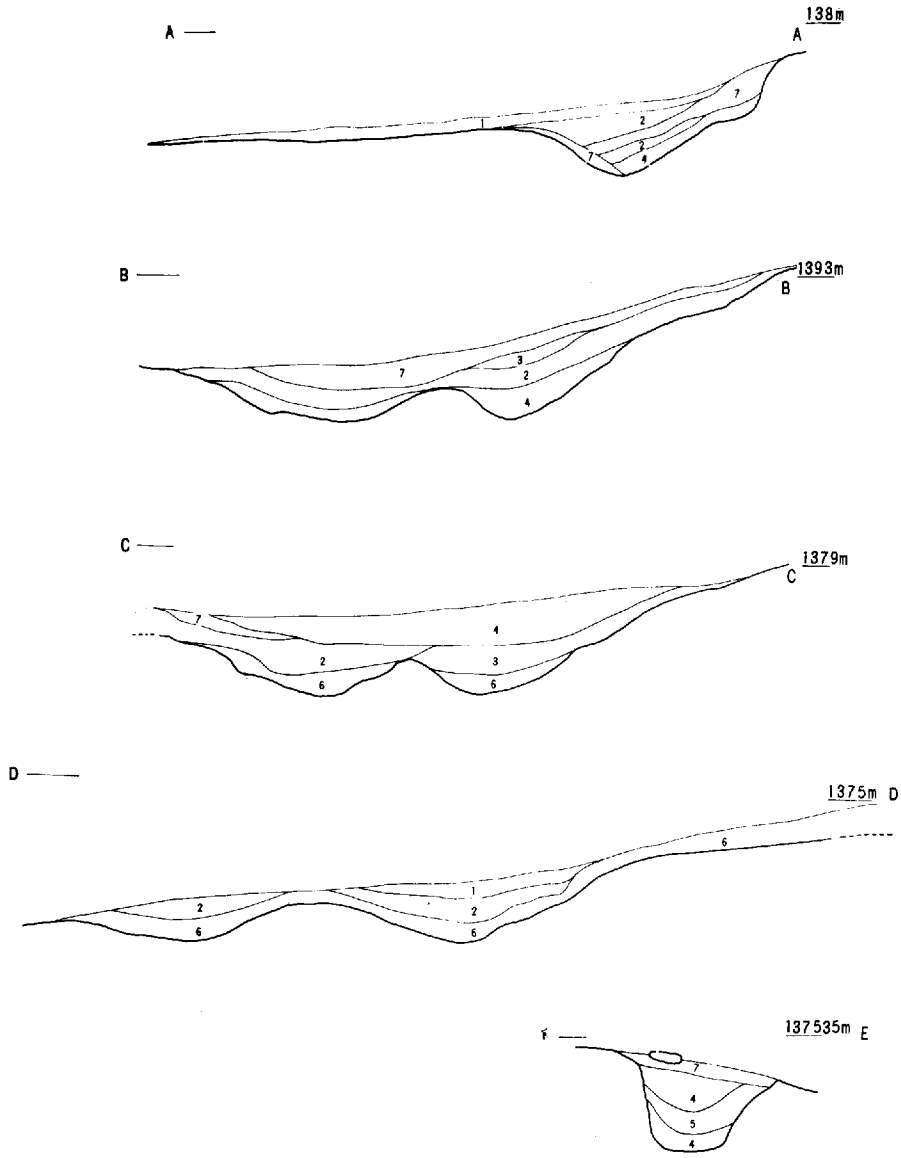



**第2図　箱式石棺実測図（1／20）**

## (2) 古　道

発掘着手前の地表観察によって溝状に凹地が続くことを認め，当初より古道の痕跡ではないかと推察していた。（註4）表土除去の結果，第1図の如く数条の断面逆台形を示す溝状凹みを検出した。

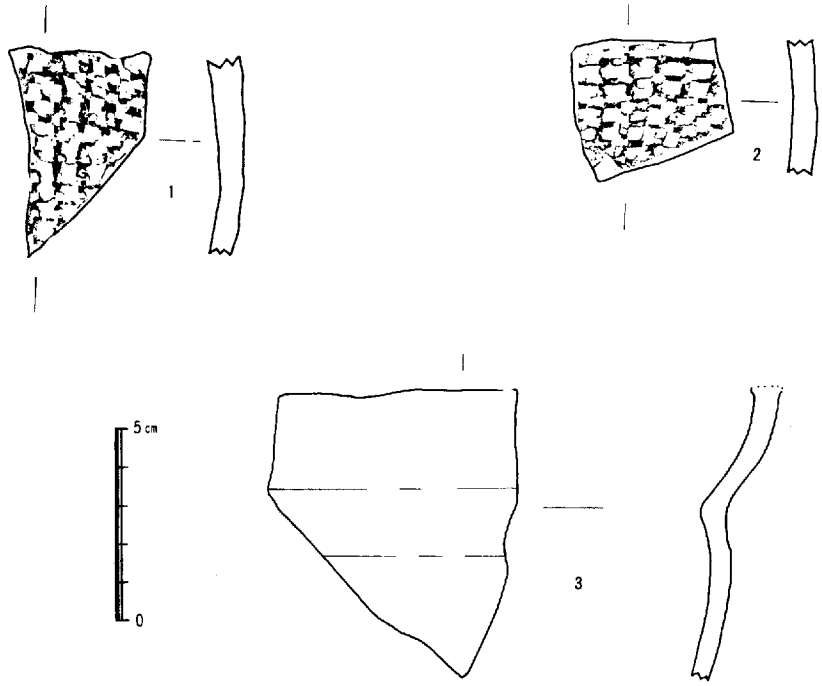
底面は剝離性に富む第3紀層の地山である。当初，自然流水による流路とも考えられたが，東側は縦貫道用地外に凹みは続いており，更に西に向けても延びる可能性がある。その点から「古道」との結論を出すにいたった。西側部分については後世の攪乱，ブルドーザーの走行による攪乱，期日の切迫等で精査し得なかった。




**第3図　古道・ピット断面図（1／60）**

〔遺　物〕

古道埋没土中より若干の遺物の出土をみた。土師器片，須恵器片，瓦器片，鉄滓1個である。第4図－1・2は須恵器片で，外面格子目のタタキ，内面ヨコナデを施している。古代末～中世的な様相を示している。第4図－3は瓦器片である。甕あるいは土鍋の類の雑器であろう。外面にはススが付着している。古道の廃絶期を示す遺物がほとんどである。




**第4図　古道出土遺物（1 / 2）**

### (3) ピット

長径 1.4m・短径1 m・深さ約60cmを測る。褐色の良質の土が埋まっている。埋没後，扁平な河原石（35cm×40cm）が置かれている。遺物は皆無であり時期は明らかにし得ないが，近世から中世にかけての土葬墓的な様相を強く感じる。

## —結　語—

調査に至る経過で述べた如く，極めて困難かつ限定された状況の中で本遺跡の発掘調査を行なった。

宮尾遺跡という大遺跡と日南遺跡という小遺跡との対比は，現在普遍的に行なわれている文化財行政が直面し，決断を迫られている問題である。一方，我々調査員自身も大遺跡の小遺跡の間にある，目に見えぬ線を乗り越えることが今直面している課題であろう。

(註)

(1) 栗野克己氏作成の久米町古墳分布図を参考にした。

(2) 土居徹・河本清「美作の方墳」古代吉備第7号所収　1971年刊

(3) 領家遺跡の西約 200mの丘陵上に小封土の存在が知られており，その調査を行なった。その結

果，古墳ではないことを確認した。

(4) 勝央町所在の小中遺跡（縦貫道建設に伴う発掘調査）の発掘が進められており，古道の検出作業を行なっていた。その知見から，調査員も従来の埋蔵文化財に含まれぬものに注意を払った。

〔付　記〕

箱式石棺の南部分の精査にあたつては，土地所有者近藤太融氏の御好意によってはじめてそれが可能となった。また，生末久米町教委課長の手をわずらわせた。記して謝意を表したい。

一方，発掘調査にあたっては終始，宮尾遺跡の現地作業員の方々のお世話になった。特に，池田登・三船安江・飛山照一・安藤克己・広島海三の各氏には終始宮尾遺跡第Ⅴ区と並行してその手をわずらわせた。衷心より謝意を表したい。　　（岡田　博）

1. ブルドーザー走行後の繩張り作業（西より）

2. 発掘風景（西より）

図版 2

1. 古道全景（西より）

2. 箱式石棺（北より）

1. ピット断面（東より）

2. 古道断面（西より）

# 久　米　廃　寺

# 目　　次


1. 調査の経過 ---------- 1

○発掘調査に至るまで ---------- 1

○第一次発掘調査 ---------- 1

○第二次発掘調査 ---------- 2

○第二次発掘調査（後半期） ---------- 4

○久米廃寺その後 ---------- 8

○調査協力者 ---------- 10

○久米廃寺調査員 ---------- 11

2. 発掘調査の概要 ---------- 12



図　目　次　　98図

付表目次

写真目次

図　　110

写　　真

# 1. 調　査　の　経　過

## 発掘調査に至るまで

中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査に至るまでのいきさつについては，第一分冊「I 調査の経過」の項に，詳しくのべられているので参照されたい。ここでは久米廃寺に直接関係ある事項についてのべる。

寺域の中心部を中国縦貫自動車道が東西に通過することになったため日本道路公団に対して路線変更を求めたが，実現しなかった。「発掘調査を行なった結果重要な遺構が発見されたら保存する」という条件をつけて行なわれた。

津山Ⅰ・C～落合Ⅰ・C間が最初に工事着手が予定されていた。用地買収が済んでいなかったが，昭和43年度事業として久米廃寺発掘調査の予算が組んであり，年度内に調査を行なわなければならないということで第一次トレンチ調査に入った。当時山陽新幹線「雄町遺跡」の調査中ではあったが，葛原克人主事，枝川陽主事の二名が，調査体制が整わないまま入ることになった。

発掘調査の準備として，久米町教育委員会，久米町企画課，岡山県北部振興連絡協議会，津山教育事務所，日本道路公団津山工事事務所と連絡をとる。関係用地の面積，住所，地目，地番，所有者の確認をする。用地買収が済んでおらず，発掘調査のための立入補償費（反当10,000円）を支払って調査に入る。作業用器材の調達を行なう。塔心礎中心孔北側を基点に3 m巾のトレンチ設定。鍬入式を行なう。出席者，久米町教育委員会教育長水田多実夫・同社会教育主事生末久幸・日本道路公団津山工事事務所所長辻益永・岡山県教育庁社会教育課長富張昇・同主事葛原克人・同主事枝川陽・久米町文化財保護委員・久米町内に住む発掘調査作業員など。

昭和44年4月トレンチ発掘によって発見された遺構の計測。トレンチの方位とは別に，主軸を塔東側雨落溝を基準にしてグリッド設定を行ない，全面発掘調査のための表土はぎを開始した。――トレンチ調査の結果をまとめると

## 第一次発掘調査

昭和44年3月，トレンチ1,068㎡，崖面切削242.8㎡を行なった。

(1) すでに露出していた塔心礎は原位置を動かされておらず，版築された基壇が存在し，東側雨落溝等により，一辺約10 m程度，軒の出3 mの塔と考えられる。

(2) 塔東側の雨落溝が，周辺の田面に残る条理地割線の南北畦畔とほぼ平行する。

(3) 寺院造営にあたって丘陵末端の傾斜地を整地している。

(4) 塔以外に瓦だまりや，土層の変化がみられるところから，何ケ所かの遺構の存在が予想される。

以上のように，ここは奈良時代寺院址が存在することが確認されたにもかかわらず，道路公団との交渉では，これだけの調査結果では保存に関しては不十分だとして，全面発掘調査及び一部トレンチ調査を行なうことになった。

## 第二次発掘調査（前半期）

昭和44年４月～昭和45年３月までの予定で開始されたが，新たな調査体制が組まれなかった。調査体制が整うまでの期間，露出された遺構を放置するわけにもいかず，２名の調査員は引続き４月中も調査にあたった。

５月，枝川主事はそのまま残り，葛原主事は，山陽新幹線雄町遺跡の調査に戻ることになった。新たに河本清主事が調査主任として赴任した。さらに栗野克己主事を加えて３人のメンバーで，久米廃寺の発掘調査員が組まれた。５月の作業はグリッド設定の杭打ち作業と表土はぎが引続き行なわれた。また塔心礎の西側を切断した断面を精査して基壇の状況を観察し断面図を作成した。

中国縦貫自動道車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会（以下対策委員と称す）が開催された。５月11日，久米廃寺の発掘調査現場を視察したのち，会議がもたれた。ここで久米廃寺の発掘調査はすでに始まっているのに，対策委員会の設置が遅れたことについて問題となった。これは昭和42年５月山陽新幹線の発掘調査の対策委員会を設置した折に岡山県考古学研究者の会からの申し入れ事項にあった「④将来生ずる類似のケースについては同じ内容と構成をもつ諮門機関が設けられること」に照して納得がいかない。また岡山県考古学研究者の会に相談がなく，対策委員を選定した。以上の２点により承諾書を提出しないということであった。しかし話し合いの結果「岡山県考古学研究者の会」にあらためて事後承諾を求めるということになった。当日は「美作国府の調査について」・「落合町以西の分布調査を急ぐべきだ」・「岡山県内工事とその付帯工事（土取・付け替え道路など）に関する文化財調査の対策と処理などについて」話があった。久米廃寺に関しては①この調査に関連して久米町文化財保護委員が対策委員会へ出席させて欲しいとの話があった。そこで対策委員会は地元の人にも公開されるものとして扱うということになった。②発掘調査用器材の整備＝写真機は個人のものを使用しており，大型カメラもないので早急に揃えるように。また梅雨対策としてポンプなどの機材の調達なども必要ではないかとの指摘があった。③調査内容についてはけずり足りない部分の精査を進めることを指摘されたが，全体として現在の進め方について問題はなかった。最後に対策委員会は定期的に開くことが決められた。毎月一回第三土曜日午後，また定例以外に臨時に開くこともあるということになった。

６月，今月は農繁期のため作業員が少ない。先月に引続き，表土はぎ，梅雨に備えて農業用水路の整備などの作業を行う。

６月21日，第２回対策委員会，軒丸瓦２種類・軒平瓦１種類・その他の遺物をみてもらい，瓦については，①東回廊線上の柱穴列の延長を確認すること，②トレンチ調査で東金堂と推定された地点(トレンチ調査Ｂ地点）の確認をすること，③瓦の再堆積したものと包含層を区別すること，④包含層を含めて保存を考えながら調査すること。⑤カメラ・ベルトコンベアー・ポンプについては，発掘調査にとって基本的に必要なものなので，ただちに取りそろえるよう，との指摘があった。また中国縦貫自動車道の対策委員会は各県毎に開かれているので，兵庫県・広島県・山口県などと連絡をとって全線にわたっての対策委員会を開きたいとの話もあった。全線にわたる分布調査具体化のための調査計

画を開きたい。また発掘調査をする他の遺跡について，調査方法・調査体制についての原案を示して欲しいとの要望があったが，今回の対策委員会には，県教委から調査員だけの出席なので次回は係長以上の人に来て欲しいということになった。

7月，永山卯三郎氏が岡山県通史の中で，建物の存在を指摘していた，塔の西方麦畑の刈り入れも終り，トレンチを入れたところ，礎石を検出する。そこでこの麦畑全体にわたりグリッド設定を行い掘り下げる。（のちに1区とする），土砂の捨場は東南方の一区画（のちに6区とする）に限定されているので，一輪車で運ぶのはなかなか時間がかかる。

7月12日，対策委員会，今回は桐野係長が出席し，昭和44年度の発掘調査予算は約1,600万円，久米廃寺の全面発掘調査・西原遺跡のトレンチ調査という話があった。しかし西原遺跡の調査員はまだ決っていないということであった。

7月31日～8月1日，奈良国立文化財研究所・平城宮跡発掘調査部の沢村仁氏を招いて，建築遺構の調査についての指導を願う。久米町城道小学校において「奈良時代について」の講演をしていただく。久米町文化財同好会会員や作業員など50余名程で盛会だった。また当日，塔西側瓦溜りの発掘指導の折に塼仏（独尊如来座像）が発見された。

8月以降は，第二次発掘調査が変則的になっていく。今までの調査の概要をのべると約5,000㎡を全面発掘調査，約2,000㎡に対してトレンチ発掘調査の予定で，調査員3名，まず塔東側雨落溝を基準にして全体のグリッド割を行なった。そして全面の表土はぎと併行して，第一次調査で成果のあったといわれる崖面切削を行なった。排土場所は後に6区とした所へ集中して行なわれた。発掘調査はまず，調査対象地全域にどのように遺構が存在するかの確認であった。のちに1区とした部分からは礎石五～六ケを発見して，抜き取り穴の状態などから建物の存在が明らかとなり建物Ⅱとした。またのちに4区とした部分で崖面切削をトレンチ状に掘って行き，掘立柱柱根にあたったので，この部分を拡張し，南北に長い六間×二間の建物Ⅲを検出した。またのちに3区とした部分で，柱穴列および溝状遺構の検出を行なった。その他に建物Ⅰ（塔）西側雨落溝の確認。塔西側から7区につながる千枚岩暗渠の発見。次に遺物の点では，今まで知られていた軒丸瓦（3類）に加えて，新たに二種類の瓦（1類・4類）を発掘，仏像（塑像仏・塼仏），緑釉陶器，相輪など久米廃寺全域にわたり遺構の広がりが確認され，様々な遺物が発掘されていく途中で，種々の要因により発掘調査の縮少・中止という事態になった。次はその要因を順にのべる。①津島武道館事件の影響，昭和43年5月岡山県は岡山市津島遺跡に武道館建設をはじめた。ところがこの遺跡は文化庁発刊の遺跡台帳にも登録された遺跡でもあり，三次にわたる発掘調査の結果等初の予定地は史跡指定保存することになり，昭和44年8月岡山県では同グランド内，テニス・バレーコートに，代替地を求め事前発掘調査をすることになった。その調査メンバーの一人として，河本清主事が行くことになった。この調査体制の変更は8月16日(土)の対策委員会で問題となり，同意を得られないまま，調査員が一人ぬけることになった。8月～9月まで約一ケ月半程の間の久米廃寺の調査をどうするかということになった。発掘調査の運営は，調査員が個々にもつ興味，関心にかたよらないような調査にするため，あるいは見落しがないようにする

ために，複数の調査員が必要であり，作業員の管理，器材の管理，出土遺物の管理，写真，渉外などのの事務量は相当な量であり，最少限３人で一パーティーという原則が立てられていた。そこで調査員がぬけることは好ましい調査体制ではないので作業内容を検討した結果，遺構検出までの土量は深い所では１ｍ～1.5ｍに達するところもあり，河本主事が帰ってくるまでの間は，遺構検出面までの土砂の排土作業を行なうことにした。対策委員会でも調査内容についての縮少案について了解を得た。

②日本道路公団は昭和44年度内着工の方針を打ち出し，真庭郡落合町の新旭川橋から着工することになった。新旭川橋の東に接して『西原遺跡』があり，落合町の道路事情などから，工事用道路として「西原遺跡」の発掘調査を求めてきた。そこで，岡山県教育委員会では10月１日付で指導主事となった神原英朗氏（元対策委員，当時久米郡旭町旭第５小学校教諭）と共に，河本主事がトレンチ調査をすることになった。昭和44年10月18日の対策委員会で了承を求め，10月20日から西原遺跡の調査に入った。トレンチ調査の結果，瓦土採取によりかなり遺構が破壊されている部分もあるが，約2,000㎡にわたり，遺構が広がっているので全面発掘調査の必要がでてきた。日本道路公団の要望では久米廃寺の発掘調査は急ぐ必要はない。新旭川橋を急ぐので，西原遺跡を至急調査してくれということであった。ここで久米廃寺では，雇用作業員との関係から発掘調査をまったく中止することができなかった。そこでまず西原遺跡で弥生時代の遺構検出面までの土砂の厚い１区の排土作業を行なうため11月から枝川主事が西原遺跡の調査へ入った。河本主事は，久米廃寺・西原遺跡，両遺跡を半々で進行させる。12月から枝川主事と共に栗野主事が西原遺跡の調査に入った。ところが栗野主事は作業中骨折１ヶ月入院となった。そこで12月の調査は河本＝久米廃寺・枝川＝西原遺跡，久米廃寺では１区建物Ⅱ南溝の全掘を行なうと同時に，瓦の洗滌作業を行なった。

１月からの調査体制は次のように決められた。久米廃寺は一時中止し，西原遺跡に集中する。久米廃寺を中止するにあたり，検出した遺構の保護のためビニール張りや，覆屋を作る。作業員の方は１月中は，上記作業を行なうと同時に，瓦の洗滌を行なうことで，２月からは作業を一時中止してもらうことにした。以上昭和45年１月までの調査を第二次発掘調査（前半期）とする。

### 第二次発掘調査（後半期）

昭和45年５月西原遺跡の発掘調査も終了し，新年度事業にとりかかることになった。

５月16日（土）対策委員会の席上，道路公団の工事行程は津山Ⅰ・Ｃ部分から急ぐことになり，文化課としては急ぎ津山市，野介代遺跡，押入飯綱神社古墳群の調査を実施したい旨の説明をした。対策委員会では久米廃寺の現況からみて早急に久米廃寺の調査に入り，その後，津山市内の遺跡の調査に入るべきだとの指摘があった。文化課でも発掘調査を中断したままでは，検出した遺構が崩壊する危険があり，またトレンチ断面などは剝離冠水しているので，土層観察に悪影響を与えるおそれがあることから，早急に調査再開を要望していた。

６月24日から久米廃寺の調査を再開することになった。調査員は河本・泉本・栗野の三名であるが，調査主任の河本は，久米廃寺の遺構の精査に入るまでは，押入飯綱神社古墳群の調査をしたり，事務連絡にあたることになった。

6月27日（土）対策委員会が開かれた。

①中国縦貫自動車道の昭和45年度，埋蔵文化財発掘調査計画について，道路公団は工事行程がすぐ変り計画性がないのではないか。工事計画の内容を揃み，年間計画をはっきりたてて発掘調査を進めてもらいたい。②久米廃寺の建物Ⅱ溝の西北コーナー部分は，用地外ではあるが調査すべきであるとの指摘があった。文化課からはなるべく調査できるようにするとの回答をした。

6月の作業は発掘調査を再開するための準備として，草刈り，事務所の屋根のふき替，ベルトコンベアーなど，西原遺跡で使用した器材の搬入など。

7月，先月に引続き，排水，草刈り，清掃など調査再開のための二重手間が多いうえに，大型カメラが無いために，記録写真が撮れずに作業のきりがつかなかった。1区の作業，覆いにしていたビニールをはがし，排水と排土作業を作なう。建物Ⅱの瓦溜りの一部を掘り下げた。遺構検出面までに堆積している土層断面の観察を行なったが，記録写真が撮れないので作業は中途半端であった。2区の作業，建物Ⅰ（塔）北半部表土はぎ開始，基壇の検出を行なった。礎石ぬきとり穴さえ検出されない。上面がけずりとられているためだろう。北側雨落溝の上層部分掘り下げる。焼土（壁土）などと共に相輪の破片・漆膜に金箔のついたもの・塑像仏の破片などが出土する。建物Ⅴの東側雨落溝の堆積土発掘，緑釉破片出土。

7月18日（土）対策委員会，発掘現場の視察ののち久米廃寺に関しては建物Ⅰ・建物Ⅱの北限の確認の徹底を指摘された。

8月，1区建物Ⅱの基壇西北端部と雨落溝の一部が用地外に広がっていたが，調査としては重要な部分なので土地所有者甲本俊充氏のご協力により発掘できるようになった。

2区建物Ⅰ（塔）西側の瓦溜り掘り下げ。塔北側の雨落溝から北側は用地外であるが，この部分にまずトレンチを入れてみて必要ならば，拡張してみるということで話が決り，トレンチ発掘調査を開始した。建物Ⅴの東側をほぼ地山面まで掘り下げ浅い溝を検出した。

4区＝草刈り開始，ベルトコンベアー移動，設置，排水，建物Ⅲの南側拡張区表土はぎのあと包含層の上面までの約80cm程の排土作業。

8月29日，対策委員会，発掘現場状況の説明をした。

9月，1区建物Ⅱ北側用地外部分草刈りののち表土はぎ，到着がおくれていた大型カメラが揃ったので，東西センター壁実測と写真撮影ののち土手取りはずし。建物Ⅱ北側雨落溝の瓦掘り上げ作業。そこで軒丸瓦2類の全形がわかるものを発見する。2区塔の北側部分トレンチより西側拡張する。塔西方の瓦溜り部分の土手はずし，塑像破片等出土。4区，建物Ⅲは東西二間まで確認していたが，その東西の延長をトレンチにより追求したが確認できなかった。東西二間より大きくならないと思う。

5区，E1・2，S9・10掘り下げ，軒丸瓦取り上げ終了。

10月，久米廃寺遠景写真撮影を南方の丘陵（久米レジャーセンター予定地内）より行なう。

1区建物Ⅱ西溝の瓦一部取り上げ。南端部まで瓦検出，土拡より灯明皿出土。西溝瓦出土状態写真撮影，基壇面掘り下げ，平安期の溝を検出。

2区建物Ⅰの西方瓦溜り部分の断面観察用土手はずし，鉄製矛，九輪破片などが出土する。

10月31日（土）対策委員会では農繁期のため作業が遅れているようだが，建物Ⅱの雨落溝について層位細分・時期の確定をするよう指摘があった。

11月，1区建物Ⅱ西溝瓦掘り上げ作業完了させる。西溝より古い凹み発見，四ヶ所程あり掘り上げる。建物Ⅱ，基壇内にある溝より糸切底の土師質の土器が出土する。

2区　塔北西部の一段高い所に溝が検出される。塑像溜りが発見された。これは塔基壇上面を削平した所に運ばれたものらしく，壁土などの焼土と共に，頭髪，顔面，腕の部分などが発見される。北東部全域を瓦包含層まで掘り下げる。

11月28日（土）対策委員会，①久米廃寺の新たに発見された遺構や遺物を発掘現場で見学した。文化庁文部技官田中琢氏が岡山県の文化財保護行政現状視察に来られた，途中11月26日久米廃寺に立ち寄った。その時の話を要約すれば「遺構・遺物について個々にくわしい問題を指摘され，寺院として立派なものが出土している。保存問題については，現在までに調査された場所だけを保存の対象とするのではなく，付近にある遺跡との関連を考えた上でやらなければならない。特に久米廃寺の東側にある台地上の遺跡（宮尾遺跡）も中国縦貫道にかかっており，この遺跡のトレンチ調査をして見通しを立てた上で，文化庁と日本道路公団の間で保存接衝をしたいと考えている」というような内容だった。この問題については昨年度の対策委員会で，久米廃寺と関連する東側台地上の遺跡の調査を学術的に一貫して早急にやる必要があることをいっているが，なかなか実行されない。他の遺跡の調査予定がいろいろあるが，それより先に，久米廃寺東側台地上の遺跡を調査すべきだ。このように久米廃寺の保存問題の決着がつくまで時間がかかることも考えられることから，久米廃寺の遺構の一時的保存処置をとるべきだとの要望があった。②今後の調査予定について昭和45年度調査計画を提示した時は，押入西古墳・押入西弥生遺跡の調査終了後は，沼斎神社古墳群を調査する予定だった。そこで現地をみたり，用地事務所と連絡をとったところ，まだ用地買収未了で発掘調査に入れない状態である。やむをえず予定を変更して用地買収の終了している天神原遺跡の調査に入りたいがどうか。天神原遺跡は，古墳三基・弥生遺跡についてはトレンチ調査する予定であると説明した。このことについて対策委員会からは，久米廃寺とも関連させて，昭和44年度に久米廃寺発掘調査中断→西原遺跡の発掘調査などのように道路公団の工事行程の変更に，岡山県教委はあまりふりまわされすぎる，一ヶ所の調査は始めたら最後まで行ない，完了させてから他の遺跡の調査に移るべきだ。例えばトレンチ調査をやったら引続き全面調査に移るべきで，押入西弥生遺跡はやむをえないが，天神原の弥生遺跡の調査には，トレンチ調査のあと間をおかずに，全面調査をやる見通しを立ててから調査に入ること。このように昭和45年度中にトレンチ調査だけして全面調査に入らない遺跡があったりするので，昭和46年度の調査計画を出して欲しいとの要望が出た。この問題について文化財係はすでに天神原遺跡の作業員の段取りもついていることであるので，対策委員の要望された方向で努力しながら天神原遺跡の調査を始める。来年度の計画については具体的には決ってはいない。道路公団の予算の配分が決るのは毎年7月なのでその頃にならなければはっきりしないと回答した。

12月．1区建物Ⅱ全景写真撮影，礎石とその抜き取り穴個別撮影，2区塔北東部掘り下げ，石帯出土。3区回廊線上にかけたビニールなどの除去作業，5区W7・S8～10の部分トレンチ掘り下げ，

整地層より東端部地山まで検出，８区西境界線確認のため農道の付近に任意に東西方向トレンチ設定，（12月17日久米町文化財保護委員会で久米廃寺保存要望の決議をする）。

昭和46年１月，正月の雪で遺跡は埋れていた。雪かきを行なう。１区凹み（Ｐ３）の西半分掘り下げ，遣り方設定，測量用の基準線を建物Ⅱ西端部礎石列に置く。平面図作成開始，２区建物Ⅰ北東部最下層まで掘り下げ作業，４区東西トレンチを東方に向けて発掘，川を検出，掘り下げ始める。建物Ⅲ全体にわたりけずり出し二間×六間で中間の柱がない。北東部で掘り方の切り合いを検出，方形が古く円形が新しい，他の掘り方も注意する。建物Ⅲの東を一部拡張，南北方向に柱穴列が検出される。沢村仁氏建築遺構について，御指導を仰ぐ。

２月，二宮大東遺跡の調査が急がれ，栗野・泉本２名の調査員は交替で第一次トレンチ調査にあたる。久米廃寺の作業は瓦洗いと，８区トレンチ続行，４区東西トレンチ，川の部分掘り下げ，さらに北への延長を確認するため，８ｍ程北側に東西トレンチ設定。

２月20日（土）対策委員会に久米廃寺は実測をしているが作業員・天候等の都合で２月中に二宮大東遺跡トレンチ調査を実施したと報告する。

３月，１区建物Ⅱの実測継続調査員２名で細々と行なう。１月以来寒さもありはかどらず。４区川の北への延長確認トレンチ調査，下層の砂利層より縄文後期の土器片出土。建物Ⅲ中央東西壁とりはずし，清掃ののち，全景写真撮影，遣り方設定ポイント落し，５区用地南端部に東西トレンチ設定発掘開始。８区トレンチ続行，平板測量でトレンチの位置記入，遺構保護のための砂運び作業。「久米町里公文（さとくもん）」にて林道工事により壺棺が出土する。久米廃寺調査員が処置に行く。

３月24日，久米町城道小学校で「久米廃寺を守る会」結成式（岡田孝子会長）

３月31日（水）対策委員会では，久米廃寺の実測図を見ながら検討したいとのことだったので次回行なうことにした。久米町里公文弥生墳墓群の緊急調査は対策委員会にはかるべきだった。林道工事がわかっていたのに処置できなかったのはなぜか，これは土器片の散布がそこまで広がっていなかったからであると回答した。

４月，領家遺跡発掘調査開始・杭打ち・トレンチ設定発掘開始。久米廃寺は実測作業が残るので補足調査を行なう。岡田博主事・池畑耕一主事・山磨康平主事等断続的に応援，１区建物Ⅱ実測継続，４区建物Ⅲ平面図作成，柱穴掘方断面掘り下げ，実測開始，５区東西トレンチ実測。８区西境界線トレンチ断面実測，写真撮影ののち埋め戻し。

５月，調査員は泉本・栗野・山磨が他の遺跡とかけもち。１区建物Ⅱ断面図実測，小柱穴および建物Ⅵ断面実測写真撮影ののち砂で埋め戻し，建物Ⅳ平板測量，４区建物Ⅲ断面図実測，柱根取り上げ。東西トレンチＥ11・12・13断面実測。５区トレンチの一部埋め戻し。

５月22日，各遺跡の発掘調査の検討，久米廃寺は$\frac{1}{20}$実測図を検討する。

６月，実測の応援体制の段取りをする。泉本・栗野・山磨に加えて，伊藤・柳瀬・池畑・岡田・葛原・下沢・井上・各調査員が，雨が降る中でもテントを張り実測を行なう。２区ポイント落し平面図作成，レベリング，３区ポイント落し遣り方設定実測開始，４区発掘範囲平面図に補足測量，５区平

板測量，礎石部分の写真撮影・レベリング，８区６断面７断面拡張区平面図作成補足。

７月，３名の調査員は他の遺跡とかけもちで調査を行なう。２区建物Ⅳ断面図作成・建物Ⅴ北側南北断面図作成・２区全体の写真撮影，３区小柱穴断面図作成，平面図補足とレベリング，５区断面図補足，７区暗渠平面図作成，南北トレンチ掘り下げ，今月は作業員も増え砂による埋め戻しを行い，ここに久米廃寺の調査終了。

## 久米廃寺その後

昭和46年９月＜久米廃寺跡高架橋保存決る＞日本道路公団，岡山県土木部，県教委文化課，久米町教委などの関係者が協議した。県教委側からは，久米廃寺の東側台地にあたる宮尾遺跡を含めて250 ｍの高架橋を要望した。日本道路公団側は調査の終了した久米廃寺の東西130 ｍのうちの80ｍだけについて高架橋にしたいとのことで両者にくい違いがみられた。そこで11月末までに未調査の東側台地＝宮尾遺跡にトレンチを入れてみる。その結果により再度協議することになった。

昭和46年９月～12月。宮尾遺跡の第一次トレンチ発掘調査が行なわれた。久米廃寺に隣接する谷部分で弥生時代中期の農業用水路が発見された。また東側の台地からは二間十二間，の掘立柱建物などが発見された。この建物は規模も大きく普通の建物と違うことから郡衙遺構であると考えられた。この時点では保存問題は決着がつかなかった。

昭和47年２月，県教委と道路公団の協議の結果，高架橋は174 ｍと決定した。これは久米廃寺の発掘された遺跡の遺構のうち，建物跡を中心として宮尾遺跡の農業用水路を含めた範囲に限定された。久米廃寺は８区西境界線（築地），４区川と東側境界線が保存対象からはずされた。また宮尾遺跡の主要な建物郡については久米廃寺より一段高いので道路面のレベルの関係から技術的に高架にふみきれない面もあるとのことだった。

昭和48年３月，県議会で久米廃寺の保存整備事業の予算が通る。総額176万９千円。

昭和48年10月，中国縦貫自動車道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第二分冊としての整理が開始される。これまでにも他の遺跡の調査のあいまに，部分的に図面の整理が行なわれ全体図の作成や，遺物の洗浄，日誌の整理などが行なわれてはきたが，正式に整理期間がとれたのは初めてのことである。しかし整理にたずさわれる人員，期間の少ないことなどが問題点となる。特に今年度事業からは大規模な遺跡を除き，ほぼ一遺跡一名の調査員が３ヶ月交替で調査に入るという合理化案が採用された。そして報告書の整理期間についても遺跡の大小，調査期間の長さ，遺構の量，遺物の量などにかかわらず一率に３ヶ月の整理期間が予定された。しかも年次が古いほど，移動などで調査員がすでに分散している遺跡もあり，五年も前のことを思い出すには不都合な状況となっている。このような中で久米廃寺の整理が行なわれた。作業員など発掘協力者名簿，調査員一覧表，見学者などの整理，金(かな)くその重量を計測したり，窯壁を分類してみるがなかなかむずかしい。地区別出土量一覧表作成。

勝央町「勝田遺跡」にて七曜の蓮華文軒丸瓦発見。二種類あり中房１＋８の方はやや古い感じ，中房

1＋6のものは弁の感じ，中房のまわりの圏がめぐる部分が，断面かまぼこ形をしている点など，久米廃寺軒丸瓦3類と類似する勝田遺跡の瓦も桶造りのものが多く格子目の叩目(たたきめ)も久米のものに似ているので，あるいは，勝田遺跡（勝田郡家）の瓦と同一工人集団の手になるものかも知れない。

昭和48年11月。相輪破片実測，トレース終了。金くそはやっと重量計測終了。鉄製品処理開始，泥サビを落し，接着剤で接合，実測。釘だけではなしに鉄斧，鏃先，鎹状のものなどいろいろある。鉄器は他の遺物にくらべ今のうちに処理しておかねば崩壊する恐れがあるから優先したのだった。

昭和48年12月，鉄器のサビ落し総数約500点ほどでそのうち176点を実測する。久米廃寺保存整備事業予算変更。建設資材高騰のため県議会で244万3千円に補正される。

昭和49年1月。遺物の処理をしていたのでは前に進まず，遺構のトレースを始める。3区，4区，8区のトレースを行った。

昭和49年2月，2区，5区，7区，1区などのトレース。

昭和49年3月，1区の残りと全体図のトレース。今回の報告書は原稿がこれ以上遅れることは許されないとの話により，50ページ程度の予定で考えていた本分はとりやめることにする。以前に出した概要をまとめる程度にする。報告書の作成は昭和48年10月から昭和49年3月までの期間，調査員一名で行なわれた。報告書作成の時点で，調査員は分散してしまい，資料整理を十分行うことができなかった。整理期間の前半は鉄製品の処理を主体とした。500点にも達する鉄製品は除々に崩壊を始めているので優先したのだった。しかし鉄製品を全部処理しきれなかった。そこで整理期間の後半は遺構のトレースに主体をおいて作業を進めた。同時に写真の整理を行ったので今回の報告書は遺構の図面と写真が主体である。さらに調査の経過は，不十分ながらもメモをたよりに書きあげた。発掘調査の概要については年度毎に作成した実績報告（タイプ）をまとめたにすぎず今回新たに原稿を書くまでに至らなかった。

久米工事区が二車線から四車線に変更された。そこで12月中には終了する予定であった建設工事も49年6月まで延長されることになった。工事終了後に，県教委の保存整備事業をする予定だったので変更せざるをえなくなった。3月の定例県議会でくり越しが決り，昭和49年度事業として行なうことになった。

## （発掘調査参加者及び協力者）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 浅田愛逸 | 安藤克実 | 安藤待郎 | 石賀芳枝 |
| 池田啓子 | 池田寿賀子 | 池田澄江 | 池田竹夫 |
| 池田登 | 井上準子 | 井上秀子 | 岡崎昌 |
| 尾埒知津子 | 栗野淳子 | 髙下弘代 | 甲本俊充 |
| 甲本美智 | 小林清子 | 小山幸子 | 小山能会 |
| 榊原文子 | 坂下富江 | 佐々木修一 | 実成充雄 |
| 田中知行 | 飛山照一 | 飛山裕 | 中村節子 |
| 野条克己 | 野条静枝 | 野条末子 | 野条住子 |
| 野条敬義 | 灰原輝代子 | 灰原信子 | 灰原保子 |

原田次郎　広島海三　広島文江　真名子育世
真名子栄一　真名子清一　三船公平　三船春江
三船安江　山崎利市　山田重夫　山磨康平

## （調査協力者）

○中国縦貫自動車道文化財保護対策委員

今井　堯（津山市教育委員会）
植月荘介（会社員）
土居　徹（津山市北小学校）
渡辺健治（美作考古学研究会会長）
(元)神原英郎（岡山県教育庁社会教育課／岡山県山陽町教育委員会）

○旧地権者

井上一一，井上範雄，井上唱甫
甲元俊充，田中　清，谷口孝太郎
谷口春吉，野条克己，野条忠一郎
広瀬己三郎
宮尾地区（岸川　清）

○その他

甲元俊充，小山幸子，原田次郎
灰原三郎

○久米町

町長　藪木久太郎
助役　重松健治

○久米町教育委員会

委員長　井上　佐
片島　清，田村譲平，牧野照子
教育長　水田多実夫
田淵次雄，生末久幸，松永好光
武村和子，西尾公良

○久米町文化財保護委員

委員長　山岡矩雄
甲元真志，実成義弘，原田軍平
村上方二，山田克己

## 久米廃寺調査員

○久米廃寺にて調査　△他の調査と久米廃寺半々ぐらい

| | 葛原・枝川 | 河本・栗野 | 泉本・(山磨) | 応援 |
|---|---|---|---|---|
| 44年3月 | ○ ○ | 雄町 | (雄町) 雄町 | |
| 4月 | ○ ○ | 雄町 | 雄町 | |
| 5月 | 雄町 ○ | ○ | ○ | |
| 6月 | ○ | ○ | ○ | |
| 7月 | ○ | ○ | ○ | |
| 8月 | ○ | 久米津島遺跡△ | ○ | |
| 9月 | ○ | 津島 | ○ | |
| 10月 | ○ | 久米西原△ | ○ | |
| 11月 | 西原 | 久米西原△ | ○ | |
| 12月 | 西原 | ○ | 労災病休み | |
| 45年1月 | ○ | 西原 | 西原 | |
| 2月 | 西原 | 西原 | 西原 | |
| 3月 | 西原 | 西原 | 西原 | |
| 4月 | 南方 | 西原 | 西原 | |
| 5月 | 〃 | 西原 | 西原 | |
| 6月 | 山陽団地 | 押入 | 押入△ | |
| 7月 | 〃 | 押入△久米 | ○ ○ | ○アルバイト |
| 8月 | 〃 | 穴塚 | ○ ○ | ○アルバイト |
| 9月 | 〃 | 穴塚9.25まで | ○ ○ | |
| 10月 | 〃 | 天神原△ | ○ ○ | |
| 11月 | 〃 | 天神原△ | ○ ○ | |
| 12月 | 〃 | | ○ ○ | |
| 46年1月 | 〃 | | ○ ○ | |
| 2月 | 〃 | | 二宮大東△ 二宮大東△ | |
| 3月 | 〃 | | ○ ○ | |
| 4月 | 〃 | | △領家 △ | △ 岡田，池畑，近井 |
| 5月 | 〃 | | △ △国府 | △ |
| 6月 | △ 〃 | | △領家 △ | △ 伊藤，柳瀬，岡田，井上，葛原，下沢 |
| 7月 | | | △領家 △国府 | △ |

# 2. 発掘調査の概要

岡山県久米郡久米町大字宮尾字唐臼に所在する寺院址である。寺域は東西約130 m，南北約110 mであり，塔，金堂が東西にならび，従来考えられていた定形化した伽藍配置にはみられない独特のものを示している。

＜建物Ⅰ（塔）＞2区調査前から露出していた塔心礎は花崗岩製で東西21m，南北1.5m，厚さ0.8m以上の大きさで，礎石全形の中央よりやや東に偏して平担面がありその中心に，直径22～23cm，深さ15cmの孔があけられている。塔心礎は，地山を整地した上に版築，基壇が築かれている。その基壇に埋め込まれていてしかも移動していないことが確認された。基壇は一辺11.20m，高さ約1.5m，周辺には約1 mの雨落溝がめぐる。

＜建物Ⅱ＞1区建物Ⅰの西方にあり，北側は地山岩磐を削り崖となっている。基壇は東西約15m，南北約21 mを計る。雨落溝は巾0.4m～1.2mである。基壇上面には原位置を保つ礎石7個，礎石設置のための根石と穴が13ヶ所検出された。五間×四間の南北に長い建物である。

＜建物Ⅲ＞4区掘立柱建物で方形の掘り方のあとに円形の掘り方をもつ建物が，原位置で建直しされている。東西二間（5.2m）南北六間（14.4 m）です。柱根がそのまま残存しているのもある。

＜建物Ⅳ＞2区塔基壇の一部をけずって雨落溝をつくり，塔西側瓦溜りの上に礎石を二個置いている。塔と建物Ⅱの北側中間地点で溝を確認しているが，一部コーナー状のところもあり，もしそこが，西北部だとすれば，東西12m，南北4 m以上の建物と推定される。

＜建物Ⅴ＞2区塔のすぐ東に接して，溝と削り出し基壇が検出された。東西約16m，南北10m以上の基壇で，上面は削平されて礎石は確認できなかった。周囲に雨落溝がある。

＜建物Ⅵ＞1区建物Ⅱの基壇内の中央よりやや南に東西五間（約15m），南北四間（6 m）の柱穴がならんでいる。柱穴の直径が20m前後であるが，柱のならびが不揃いなのでまとめにくい建物である。

＜建物Ⅶ＞3区の南北に連なる連続した瓦溜りの中央部分に建てられた掘立柱建物である。南北五間（12m），東西二間（9 m）の身舎に，東側と西側に廂のついた建物である。瓦溜りより寺院址に関係する建物では後半に造られたものである。

＜建物Ⅷ＞4区建物Ⅲの東南の方向に発見された二間×二間の建物で，北側と西側に雨落溝が検出された。北側の雨落溝の東端に接して，さらに北へのびる浅い溝がある。

4区＜柱穴列＞建物Ⅲの東側3.5m程の距離をおいて，巾約1.5m 2列の柱穴列が南北方向にならんで発見されている。

4区＜川と溝＞巾約5 m南北方向の川がある。これはE断面としてある東西トレンチ部分でも確認できた。割に多くの遺物がみられ，土器が多かった。墨書土器はここから発見されたものである。またこの川のすぐ東に，巾約1.8mの溝があり南北方向に流れている。

＜東回廊線＞3区塔心礎から東へ29ｍ～33ｍまでの巾で南北にピットの連続した溝状遺構が検出された。この溝は瓦溜りとなっている。この溝の東は崖状に地山を整形し一段低くしている。この遺構は　　などで発見された回廊下の瓦溜りと同じ性格のものと思われる。また3区には，この溝状に連続するピットと同様南北方向に柱穴が27本発見されている。これはうまくまとめることはできなかった。何らかの施設と思われる。

＜南回廊線＞5区塔心礎より南へ24ｍ～29ｍのところに千枚岩の暗渠のものが東西にある。さらに塔心礎より南へ33ｍのところに巾1ｍ程の溝がある。これらが，南回廊線の遺構と考えられる。またこの溝と暗渠状の遺構の間には凹みがあり，ここに小石と，礎石2点が転落したような状態で発見された。原位置ではないと考えられるが，あるいはこの礎石が中門のものと考えられる。

＜土拡＞1区講堂建物の西雨落溝とその西側に4つの土拡が発見された。いづれも径3～4ｍのもので溝の使用より古い。黒色と黄色の土で埋められている。8区にも第4断面の位置に一ケ所発見された。いずれも黄色（一部白色）の粘土を掘り下げており，この粘土を採掘する目的の土拡だろう。以上は粘土採掘と考えられる土拡であるが，各地区毎に不明の土拡がある。以下列挙する。

1区土拡3の東南に一ケ所建物Ⅱ西雨落溝南端部，東側に一ケ所，また建物Ⅱ基壇内№45 と№47がありこれらは糸切底の灯明皿などがでており，平安期後半以降のピットと考えられる。また2区にも，塔北側雨落溝の北辺，西方に，土器が入った土拡がある。また2区西南部にもあり，これらは1区のものと一連のものと考えられる。

＜寺院創建前の遺構＞①弥生時代の遺構，5区で弥生中期～後期の土器と，柱穴が発見された。②古墳時代の遺構，4区Ｆ地点，7世紀初頭の住居址の一部をトレンチで確認した。

## 出　土　遺　物

①瓦，出土量はリンゴ箱に概算して約1,600箱軒丸瓦四種類，1類―複弁蓮華文八葉，中房1＋5＋8，外区線鋸歯文内傾，2類―複弁蓮華文八葉，中房1＋6＋8，外区線鋸歯文内傾，3類―複弁蓮華文七葉，中房1＋8，外区平線，4類―単弁蓮華文十六葉，中房1＋8，外区二重圏。

軒平瓦1類－裏面に凸帯三本。朱線あり。2類－重弧文。裏面に朱線あり。3類－三重弧文。4類―均正唐草文。5類－扁行唐草文。丸瓦二種類以上玉縁のない行基葺に用いられたものばかり。平瓦六種類以上。隅切瓦，熨斗瓦など。以上のうち軒丸瓦1，2類と軒平瓦1類が対応する。また軒丸瓦3類と平瓦2類が対応する。これは出土点数のパーセントと，瓦の作り方のうえからいえるが，くわしいことはいずれ発表することにしたい。

②土器，須恵器，土師器。施釉陶器＜緑釉＞。

③仏像，塑像仏と塼仏がある。塑像仏は如来1体以上。菩薩3体以上。天部1体以上。塼仏は密印如来座像2個以上。三尊仏1個以上，その他破片。

④硯，須恵質，円面硯の破片が1点出土している。

⑤墨書土器，4区川から出土したもので，正確に判読できない，惣，嶋，鳥，為などいろいろに解釈

できる。

⑥文様瓦，四点ある。指先で書いたもの二点と，ヘラ書のもの二点。

⑦水晶，七角形柱状，塔基壇より北東部の再堆積土中より出土した。

⑧　金泊，漆膜に付着している。

⑨相輪，青銅製鋳造製品で，鋳型の砂が付着しているものがある。水煙，九輪，樗，露盤の部分とみられるものですべて破片となって出土した。すべて塔の周辺部から出土している。

⑩鉄製品，鉄製矛，釘，鎹状鉄器，斧，鏃先などがある。

⑪鉱滓。窯壁の破片と共に，全量39.642kg。そのうち鉱滓と考えられるもの34.081kg。窯壁5.561kgである。

⑫木材。掘立柱の柱根。流木。けずりくず，その他。

⑬種子，くるみ，もも，とち。

⑭壁土。

⑮石帯。

⑯縄文式土器，後期～晩期。

⑰弥生式土器，中期～後期。

⑱石器，環状石斧，石鏃，サヌカイト原石。

⑲古墳時代，須恵器，土師器。

（栗　野　克　己）

# 久　米　廃　寺

## 図　目　次


第1図　久米廃寺周辺地形図　（作成　栗野克己）
第2図　久米廃寺，宮尾遺跡周辺地形図　（作成　栗野）
第3図　久米廃寺，領家遺跡地形図　（製図　永田勢津子）
第4図　久米廃寺，第1次発掘調査トレンチ設定図　（作成・製図　栗野）
第5図　久米廃寺，第2次発掘調査地区分け　（作成・製図　栗野）
第6図　発掘グリッド設定と測量基準線　（作成・製図　栗野）
第7図　遺構配置図①　（製図　栗野）
第8図　遺構配置図②　（製図　栗野）
第9図　久米廃寺高架橋　（製図　栗野）
第10図　久米廃寺建立のための土地造成状況　（作成・製図　栗野）
第11図　久米廃寺復元想像図　（作成・製図　栗野）
第12図　久米廃寺周辺地籍図　（製図　橋本雅子）
第13図　1区実測図　（実測　泉本・栗野・山磨・岡田・池畑，製図　栗野）
第14図　1区建物Ⅱ礎石実測図集成①　（実測・製図　栗野）
第15図　1区建物Ⅱ礎石実測図集成②　（実測　13·14栗野，15-22泉本・山磨，製図　栗野）
第16図　1区土拡実測図　（実測　泉本・栗野・山磨，製図　栗野）
第17図　1区柱穴断面集成図　（実測　泉本・栗野・岡田・山磨，製図　栗野）
第18図　1区建物Ⅱ西側雨落溝断面①　（実測　栗野・泉本・山磨，製図　栗野）
第19図　1区建物Ⅱ東側雨落溝断面集成図②　（実測　栗野・泉本・山磨，製図　栗野）
第20図　1区建物Ⅱ北側雨落溝等断面図③　（実測・製図　栗野）
第21図　1区建物Ⅱ南側雨落溝等断面図④　（実測　泉本・山磨．製図　栗野）
第22図　1区東西断面①グリッドセンターより南25cm　（実測・製図　栗野）
第23図　1区東西断面②グリッドS2より南25cm　（実測　泉本，製図　栗野）
第24図　1区南北断面①グリッドW7　（①実測　泉本・山磨，②実測　河本，製図　栗野）
第25図　1区南北断面②グリッドW10　（①実測　山磨・泉本，②実測　河本，製図　栗野）
第26図　1区建物Ⅱ北東部分より東西トレンチ　（実測　栗野，製図　栗野）
第27図　2区実測図　（実測　栗野・伊藤・柳瀬・岡田，製図　栗野）
第28図　2区塔心礎実測図　（実測　栗野・柳瀬，製図　栗野）
第29図　2区塔基壇断面図　（実測　栗野，製図　栗野）
第30図　2区A断面建物Ⅳ東西断面図①　（実測　山磨，製図　栗野）
第31図　2区B断面建物Ⅳ東西断面図②　（実測　山磨，製図　栗野）

第32図　2区C断面建物Ⅳ南北断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第33図　2区D断面　（実測　山磨，製図　栗野）
第34図　2区塔北側断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第35図　2区塔西側雨落溝断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第36図　2区塔西暗渠断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第37図　2区塑造仏だまり南北断面図　（実測　池畑・泉本，製図　栗野）
第38図　2区E断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第39図　2区F断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第40図　2区G断面図　（実測　山磨，製図　栗野）
第41図　2区塔西北部土拡実測図　（実測　山磨，製図　栗野）
第42図　2区金堂北側北断面図　（実測　泉本，製図　栗野）
第43図　2区塔北西角柱穴断面図　（実測　泉本，製図　栗野）
第44図　2区建物Ⅰ（塔）西北部実測図　（実測　伊藤・岡田・栗野・山磨，製図　栗野）
第45図　2区塔基壇東北角・金堂基壇西北角の柱穴　（実測　栗野・柳瀬・泉本，製図　栗野）
第46図　2区建物Ⅴ（金堂）東北角柱穴　（実測　栗野・柳瀬，製図　栗野）
第47図　2区建物Ⅴ（金堂）東南角柱穴　（実測　栗野・柳瀬，製図　栗野）
第48図　2区建物Ⅰ塔，建物Ⅴ金堂東西断面図L断面　（実測　泉本・葛原，製図　栗野）
第49図　2区塔南北断面図M断面　（実測　井上・山磨・葛原・池畑・泉本，製図　栗野）
第50図　2区建物Ⅴ金堂東西断面図N断面　（実測　泉本，製図　栗野）
第51図　3区実測図①　（実測　栗野・山磨・柳瀬，製図　栗野）
第52図　3区実測図②建物Ⅶ　（実測　山磨，製図　栗野）
第53図　3区実測図③　（実測　山磨・栗野，製図　栗野）
第54図　3区建物Ⅶ柱穴断面集成図　（実測　山磨・栗野・井上・下沢，製図　栗野）
第55図　3区柱穴断面集成図　（実測　栗野・山磨，製図　栗野）
第56図　3区G断面　（実測　栗野，製図　栗野）
第57図　3区A断面　（実測　栗野，製図　栗野）
第58図　3区B断面　（実測　栗野，製図　栗野）
第59図　3区C断面　（実測　枝川，製図　栗野）
第60図　3区E断面　（実測　枝川，製図　栗野）
第61図　3区F断面　（実測　栗野，製図　栗野）
第62図　3区D断面　（実測　河本，製図　栗野）
第63図　4区平面図①　（実測　泉本・山磨・池畑・井上・岡田・栗野，製図　栗野）
第64図　4区実測図②　（実測　井上・岡田・泉本・山磨・池畑・栗野，製図　栗野）
第65図　4区建物Ⅲ掘方断面図①　（実測　1，2，3泉本，4～8栗野，製図　栗野）
第66図　4区建物Ⅲ掘方断面図②　（実測　9～11山磨，12，13栗野，14～16泉本，製図　栗野）
第67図　4区柱穴断面集成図　（実測　1～9，12～22，29泉本，10～11栗野，23葛原，24～28，30

～32山磨，製図　栗野）
第68図　4区A断面実測図　（実測　山磨・泉本，製図　栗野）
第69図　4区建物Ⅷ柱穴断面集成図　（実測　A，B，C葛原，D，E山磨，製図　栗野）
第70図　B断面実測図　（実測　泉本，製図　栗野）
第71図　4区C断面実測図　（実測　泉本，製図　栗野）
第72図　4区D断面実測図　（実測　泉本，製図　栗野）
第73図　4区E断面実測図　（実測　泉本，製図　栗野）
第74図　5区実測図　（実測　栗野・山磨，製図　栗野）
第75図　5区千枚岩溝断面図A～F　（実測　栗野，製図　栗野）
第76図　5区G断面実測図　（実測　山磨，製図　栗野）
第77図　5区H断面実測図　（実測　山磨，製図　栗野）
第78図　5区Ⅰ断面実測図　（実測　山磨，製図　栗野）
第79図　5区J断面S13南壁　（実測　池畑・岡田・泉本，製図　栗野）
第80図　5区K断面S12北壁　（実測　岡田・池畑・泉本，製図　栗野）
第81図　5区L断面S13北壁　（実測　池畑・岡田・泉本，製図　栗野）
第82図　5区M断面　（実測　泉本・岡田・池畑，製図　栗野）
第83図　7区E断面　5区N断面　5区O断面　（実測　山磨，製図　栗野）
第84図　5区P断面　（実測　泉本，製図　栗野）
第85図　7区実測図　（実測　泉本・山磨・井上，製図　栗野）
第86図　7区A断面　2区との境　東西方向　（実測　井上・山磨，製図　栗野）
第87図　7区B断面東西トレンチ　（実測　池畑・岡田，製図　栗野）
第88図　7区C断面　5区との境　東西方向　（実測　山磨，製図　栗野）
第89図　7区D断面　1区との境　南北断面図　（実測　山磨・泉本，製図　栗野）
第90図　8区トレンチ発掘実測図　（実測　栗野，製図　栗野）
第91図　8区6，7地点実測図　（実測　栗野，製図　栗野）
第92図　8区7断面実測図　（実測　池畑・山磨，製図　栗野）
第93図　8区6断面実測図　（実測　岡田・池畑，製図　栗野）
第94図　8区5断面実測図　（実測　岡田，製図　栗野）
第95図　8区4断面実測図　（実測　栗野，製図　栗野）
第96図　8区3断面実測図　（実測　栗野，製図　栗野）
第97図　8区2断面実測図　（実測　岡田，製図　栗野）
第98図　8区1断面実測図　（実測　栗野，製図　栗野）

## 付　表　目　次

第1図付表　久米廃寺周辺遺跡①　（作成　栗野）
第2図付表　久米廃寺周辺遺跡②　（作成　栗野）

第14図付表　（作成　栗野）
第15図付表　（作成　栗野）

## 写　真　目　次

写真１　久米廃寺付近の空中写真　（撮影　アジア航測株式会社）
写真２　久米廃寺遠景①　（撮影　栗野）
写真３－１　久米廃寺遠景②　（南々西より）（撮影　栗野）
写真３－２　久米廃寺より宮尾遺跡をのぞむ　（西より）（撮影　泉本）
写真４－１　１区　建物Ⅱ全景　（北西より）（撮影　泉本）
写真４－２　１区　建物Ⅱ全景　（北西より）（撮影　泉本）
写真５－１　１区　建物Ⅱ全景　（西南より）（撮影　栗野）
写真５－２　１区　建物Ⅱ西北部　（撮影　栗野）
写真６－１　１区　建物Ⅱ全景　（東北より）（撮影　栗野）
写真６－２　１区　建物Ⅱ全景　（東南より）（撮影　栗野）
写真７－１　１区　建物Ⅱ北溝　（西より）（撮影　栗野）
写真７－２　１区　建物Ⅱ北溝　（東より）（撮影　栗野）
写真８－１　１区　建物Ⅱ　（東北より）（撮影　栗野）
写真８－２　１区　建物Ⅱ南溝附近　（東より）（撮影　栗野）
写真９－１　１区　建物Ⅱ西溝上層全景　（南より）（撮影　栗野）
写真９－２　１区　建物Ⅱ西溝と畦畔　（北より）（撮影　栗野）
写真10－１　１区　建物Ⅱ西溝掘り上げ状況　（南より）（撮影　泉本）
写真10－２　１区　建物Ⅱ西溝掘り上げ状況　（北より）（撮影　栗野）
写真11－１　１区　建物Ⅱ西溝北半部分下層　（南より）（撮影　泉本）
写真11－２　１区　建物Ⅱ西溝上層　（北より）（撮影　栗野）
写真12－１　１区　建物Ⅱ北半部　（東南より）（撮影　泉本）
写真12－２　１区　建物Ⅱ西北部　（北より）（撮影　栗野）
写真13－１　１区　南端溝状遺構　（西より）（撮影　河本）
写真13－２　１区　建物Ⅱ南端部　（西より）（撮影　栗野）
写真14－１　１区　建物Ⅱ南端部溝状遺構　（西南より）（撮影　河本）
写真14－２　１区　建物Ⅱ南端部溝状遺構　（南より）（撮影　河本）
写真14－３　１区　建物Ⅱ南端部溝状遺構　（南より）（撮影　河本）
写真15　１区　建物Ⅱ礎石集成１　①～⑥　（撮影　栗野）
写真16　１区　建物Ⅱ礎石集成２　⑦～⑩　（撮影　栗野）
写真17　１区　建物Ⅱ礎石集成３　⑩～⑯　（撮影　栗野・泉本）
写真18　１区　建物Ⅱ礎石集成４　⑱～㉒　（撮影　栗野・泉本）
写真19－１　１区　建物ⅡW12西溝の断面　（南より）（撮影　栗野）

写真19－２　１区　第１次調査Ｄ地点Ｗ７・Ｗ６　（南より）（撮影　栗野）
写真20－１　１区　建物Ⅱグリッド発掘状況　（東北東より）（撮影　栗野）
写真20－２　１区　建物Ⅱグリッド発掘状況　（西より）（撮影　栗野）
写真21－１　１区　建物ⅡＷ７　南北断面　北溝断面　（西より）（撮影　栗野）
写真21－２　１区　建物Ⅱ南北断面　Ｗ７　礎石④北側　（西より）（撮影　栗野）
写真22－１　１区　建物Ⅱ北溝断面　Ｗ10Ｎ１　（西より）（撮影　栗野）
写真22－２　１区　建物Ⅱ北溝断面　Ｗ10Ｎ１　（東より）（撮影　栗野）
写真23－１　１区　建物Ⅱ西溝断面　Ｓ２　（東南より）（撮影　栗野）
写真23－２　１区　建物Ⅱ西溝断面　Ｎ０　（東南東より）（撮影　栗野）
写真23－３　１区　建物Ⅱ西溝　東西断面　Ｓ３　（南より）（撮影　泉本）
写真24－１　１区　Ｓ２東西断面　Ｗ６～Ｗ10　（南より）（撮影　泉本）
写真24－２　１区　Ｗ７南北断面　センターからＳ３　（西より）（撮影　泉本）
写真24－３　１区　Ｗ10南北断面　Ｓ３～Ｓ４　（西より）（撮影　泉本）
写真24－４　１区　Ｗ７断面　Ｓ５～Ｓ７　（西より）（撮影　泉本）
写真25－１　１～２区　東西断面　（南から）　Ｗ４～Ｗ７　（撮影　泉本）
写真25－２　１区　建物Ⅱ東溝断面センター　（南より）　Ｗ６～Ｗ７　（撮影　泉本）
写真26－１　１区　建物Ⅵ　（東より）（撮影　泉本）
写真26－２　１区　建物Ⅵ　（東より）（撮影　泉本）
写真27－１　１区　建物Ⅵ全景　（東より）（撮影　泉本）
写真27－２　１区　建物Ⅵ柱穴⑥・⑮・㉔・㉕　（撮影　泉本）
写真28　　１区　建物Ⅱ外周柱穴集成　①～⑯　（撮影　栗野・泉本）
写真29－１　１区　Ｗ５Ｓ１礎石　（東より）（撮影　栗野）
写真29－２　１区　Ｗ５Ｓ１礎石　（北より）（撮影　栗野）
写真29－３　Ｗ５Ｓ１礎石　（西より）（撮影　栗野）
写真30－１　１区　建物Ⅱ柱穴42　（南より）（撮影　栗野）
写真30－２　１区　建物Ⅱ西北部崖の角　（撮影　栗野）
写真30－３　１区　建物Ⅱ中央部ｐｉｔ 45　（東より）（撮影　栗野）
写真30－４　１区　建物Ⅱ中央部ｐｉｔ 46　（撮影　泉本）
写真30－５　１区　建物Ⅱ中央部ｐｉｔ 48　（東より）　むこうは47　（撮影　泉本）
写真30－６　１区　建物Ⅱ中央部ｐｉｔ 48　（北より）（撮影　泉本）
写真31－１　１区　凹みⅡ全景　（東南より）（撮影　泉本）
写真31－２　１区　凹み全景　（北より）（撮影　泉本）
写真32－１　１区　凹みⅠ全景　（東より）（撮影　泉本）
写真32－２　１区　西方凹みⅠ全景　（西南より）（撮影　泉本）
写真33－１　１区　凹み全景　（東より）（撮影　泉本）
写真33－２　１区　凹みⅢ南北断面　（東から）（撮影　泉本）

写真34－1　1区　建物Ⅰ軌瓦Ⅰ－A出土状況東北部溝の中　（東より）（撮影　栗野）
写真34－2　1区　グリッド発掘中　畑のうね　（撮影　栗野）
写真34－3　1区　平瓦出土状況　（南より）（撮影　栗野）
写真34－4　1区　建物Ⅱ南端部溝状遺構底部出土軒丸瓦　2類　（撮影　河本）
写真35－1　2区　建物Ⅰ（塔）心礎　（真上より）（撮影　栗野）
写真35－2　2区　建物Ⅰ（塔）塔心礎西側面　版築の状況　（西より）（撮影　栗野）
写真36－1　2区　建物Ⅰ（塔）塔心礎　（北より）（撮影　栗野）
写真36－2　2区　建物Ⅰ（塔）塔心礎　（東南より）（撮影　栗野）
写真36－3　2区　建物Ⅰ（塔）心礎の土壇　（東より）（撮影　栗野）
写真37－1　2区　建物Ⅰ（塔）基壇　（北より）（撮影　栗野）
写真37－2　2区　建物Ⅰ（塔）建物Ⅴ全景　（北西より）（撮影　栗野）
写真38－1　2区　建物Ⅰ（塔）基壇全景　（北東より）（撮影　栗野）
写真38－2　2区　建物Ⅰ（塔）建物Ⅴの間　基壇及び雨落溝　（北東より）（撮影　栗野）
写真39－1　2区　建物Ⅰ（塔）基壇北東部　（北東より）（撮影　栗野）
写真39－2　2区　建物Ⅰ（塔）北溝　（西より）（撮影　栗野）
写真40－1　2区　建物Ⅰ（塔）建物Ⅵ基壇北西部　（北西より）（撮影　栗野）
写真40－2　2区　建物Ⅰ（塔）西南部　（南より）（撮影　泉本）
写真41－1　2区　建物Ⅰ（塔）西溝東西断面　（南より）（撮影　泉本）
写真41－2　2区　建物Ⅰ（塔）西溝東西断面　（南より）（撮影　泉本）
写真42－1　2区　建物Ⅰ（塔）西側石組部分　（西より）（撮影　栗野）
写真42－2　2区　建物Ⅰ西溝北半部　（北より）（撮影　栗野）
写真43－1　2区　建物Ⅰ（塔）北側南北壁　（西北より）（撮影　泉本）
写真43－2　2区　建物Ⅰ南北断面の部分　版築断面　（西より）（撮影　栗野）
写真44－1　2区　建物Ⅰ（塔）東溝・建物Ⅴ西溝検出状況　（南より）（撮影　栗野）
写真44－2　2区　建物Ⅰ（塔）建物Ⅴ雨落溝　（南より）（撮影　泉本）
写真45－1　2区　建物Ⅰ（塔）基壇北辺東半部　瓦出土状況　（北東より）（撮影　栗野）
写真45－2　2区　建物Ⅰ（塔）基壇北辺東半部　瓦出土状況　（東より）（撮影　栗野）
写真46－1　2区　建物Ⅰ（塔）北辺基壇東半部　瓦出土状況　（北西より）（撮影　栗野）
写真46－2　2区　建物Ⅰ（塔）北辺基壇東半部　瓦出土状況　（北西より）（撮影　栗野）
写真47－1　1区～2区の間瓦だまり出土鉄製矛柄部　（撮影　泉本）
写真47－2　2区建物Ⅰ北側九輪破片出土状況　（撮影　泉本）
写真47－3　1区～2区の間，瓦だまり出土鉄製矛刃部　（撮影　泉本）
写真47－4　2区　西側瓦だまり出土水煙破片　（撮影　泉本）
写真48－1　2区　建物1（塔）西北角雨落溝内ｐｉｔ　（南より）（撮影　山磨）
写真48－2　2区　建物1（塔）西北角雨落溝内ｐｉｔ土器出土状況　（南より）（撮影　山磨）
写真48－3　2区　建物1（塔）東南部ｐｉｔ　（南西より）（撮影　井上）

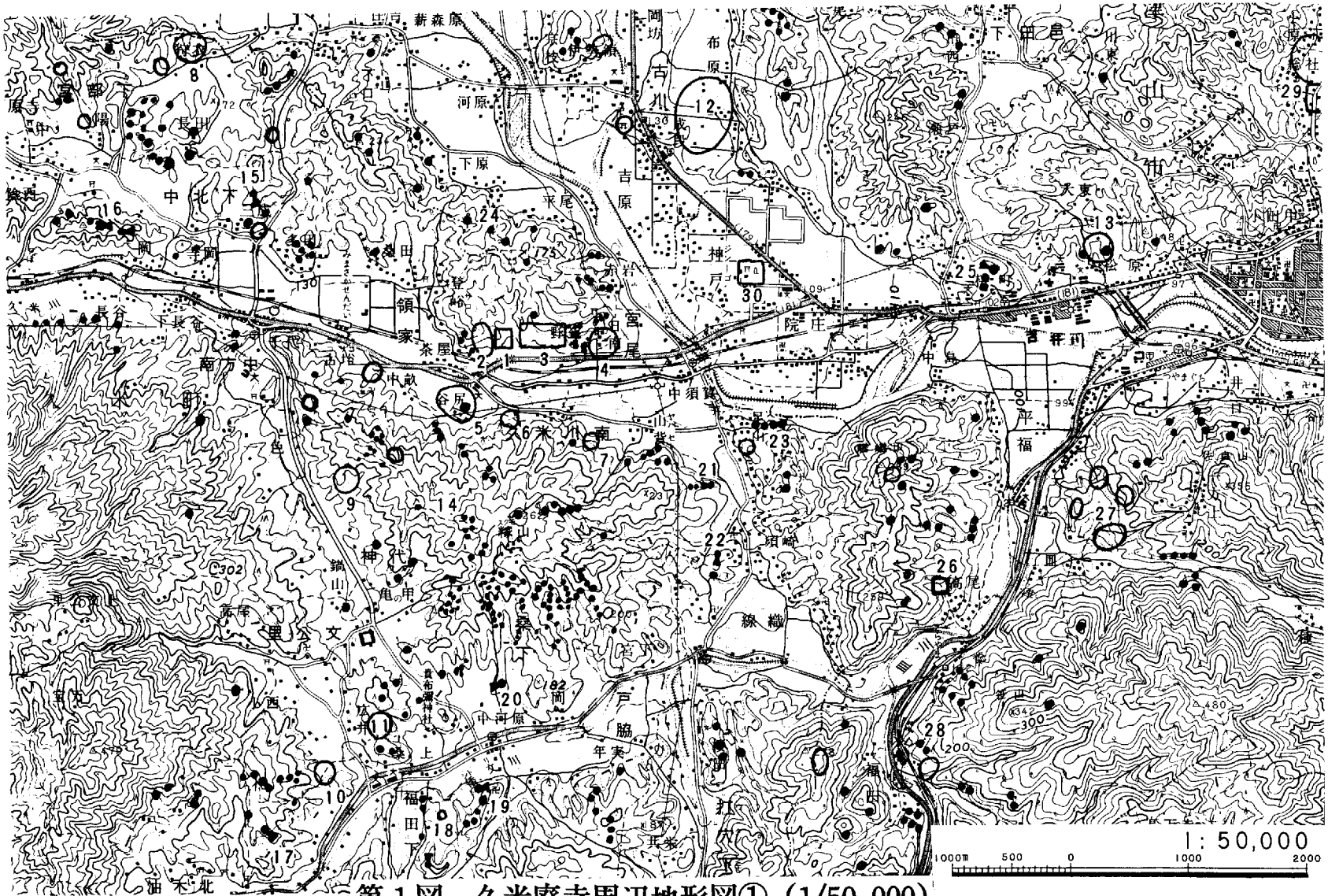
写真48－4　2区　建物1西側瓦だまり　（北より）（撮影　河本）
写真49－1　2区　西北部仏像だまり　（西より）（撮影　泉本）
写真49－2　2区　西北部仏像だまり　（北より）（撮影　泉本）
写真50－1　2区　西北部仏像だまり顔出土状況　（北より）（撮影　泉本）
写真50－2　2区　西北部仏像だまり頭髪出土状況　（撮影　泉本）
写真51－1　2区　西北部仏像だまり　（東より）（撮影　泉本）
写真51－2　2区　建物Ⅰ（塔）北東部C層石帯出土状況　（南東より）（撮影　栗野）
写真52－1　2区　建物Ⅴ　東西断面基壇裾部分　（南より）（撮影　泉本）
写真52－2　2区　建物Ⅰ（塔）基壇西北部角柱穴　（撮影　泉本）
写真53－1　2区　建物Ⅴ南北断面　（西より）（撮影　泉本）
写真53－2　2区　建物Ⅴ南北断面　（北西より）（撮影　泉本）
写真53－3　2区　建物Ⅴ東西断面　（北より）（撮影　泉本）
写真54－1　2区　建物Ⅴ全景　（東北より）（撮影　栗野）
写真54－2　2区　建物Ⅴ全景　（西北より）（撮影　栗野）
写真55－1　建物Ⅴ東北隅部分及び北溝　（西北より）（撮影　栗野）
写真55－2　建物Ⅴ東南部分　（南より）（撮影　栗野）
写真56－1　2区　建物Ⅴ基壇北西角　（北西より）（撮影　栗野）
写真56－2　建物Ⅴ北溝　（東より）（撮影　栗野）
写真57－1　3区　D断面西端部　（南より）（撮影　河本）
写真57－2　3区　D断面全景　（南より）（撮影　河本）
写真58－1　3区　D断面　（西南西より）（撮影　河本）
写真58－2　3区　C断面　（東より）（撮影　栗野）
写真59－1　3区　溝北端部瓦出土状況　（北より）（撮影　栗野）
写真59－2　3区　溝北端部瓦出土状況　（南より）（撮影　栗野）
写真60－1　3区　A断面　（北より）（撮影　栗野）
写真60－2　3区　B断面部分　溝から出土状況　（南より）（撮影　栗野）
写真61－1　3区　建物Ⅵ全景　（北西より）（撮影　栗野）
写真61－2　3区　建物Ⅵ全景　（南より）（撮影　栗野）
写真62－1　3区　F断面　（南より）（撮影　栗野）
写真62－2　3区　F断面とその南側全景　（南より）（撮影　栗野）
写真63－1　3区　南端部　（東北東より）（撮影　栗野）
写真63－2　3区　南端部　（西より）（撮影　栗野）
写真64－1　4区　南西部トレンチF地点柱穴　（東より）（撮影　栗野）
写真64－2　4区　南西部トレンチF地点土器出土状況　（南より）（撮影　栗野）
写真64－3　4区　南西部トレンチF地点　（南より）（撮影　栗野）
写真65－1　4区　南北トレンチ建物Ⅲ掘立柱発見状況　（東より）（撮影　栗野）

写真65－2　4区　南西部トレンチF地点柱穴　（東より）（撮影　栗野）
写真65－3　4区　南西部トレンチF地点　（北北西より）（撮影　栗野）
写真66－1　4区　トレンチ建物Ⅲ発見状況　（南南東より）（撮影　栗野）
写真66－2　4区　建物Ⅲ掘立柱6　（東より）（撮影　栗野）
写真66－3　4区　建物Ⅲ掘立柱5　（東より）（撮影　栗野）
写真66－4　4区　建物Ⅲ掘立柱4　（東より）（撮影　栗野）
写真66－5　4区　建物Ⅲ掘立柱8　（南西より）（撮影　栗野）
写真67－1　4区　南北トレンチ　最初に発見した掘立柱7　（撮影　栗野）
写真67－2　4区　建物Ⅲ　上面を覆う礫と土器片　（撮影　栗野）
写真68－1　4区　建物Ⅲ全景　（南より）（撮影　泉本）
写真68－2　4区　建物Ⅲ全景　（北東より）（撮影　栗野）
写真69－1　4区　建物全景　（東より）（撮影　泉本）
写真69－2　4区　建物Ⅷ柱穴　（北西より）（撮影　泉本）
写真70　4区　建物Ⅲ掘立柱掘方1　①～④　（撮影　栗野）
写真71　4区　建物Ⅲ掘立柱掘方2　⑤～⑨　（撮影　栗野）
写真72　4区　建物Ⅲ掘立柱掘方3　（撮影⑩・⑪　山磨・栗野　⑫　栗野）
写真73　4区　建物Ⅲ掘立柱掘方4　（撮影⑬～⑭　栗野）
写真74　4区　建物Ⅲ掘立柱掘方5　（撮影⑮～⑯　栗野）
写真74　その他－1　4区　建物Ⅲ　東側柱穴列19　（東南より）（撮影　泉本）
写真74　その他－2　4区　建物Ⅷ　柱穴A　（東より）（撮影　泉本）
写真75－1　4区　川全景　（南より）（撮影　泉本）
写真75－2　4区　川全景　（北より）（撮影　泉本）
写真76－1　4区　川・木材　（北より）（撮影　泉本）
写真76－2　4区　溝全景　（南より）（撮影　泉本）
写真77－1　4区　建物Ⅲ東側柱穴列　（南より）（撮影　泉本）
写真77－2　4区　川岸西側の木材　（東より）（撮影　泉本）
写真78－1　4区　B断面　（東南より）（撮影　泉本）
写真78－2　4区　B断面　（西より）（撮影　泉本）
写真79－1　4区　A断面　（北より）（撮影　泉本）
写真79－2　4区　建物Ⅲ発掘中　（北より）（撮影　栗野）
写真80－1　5区　千枚岩溝　（東より）（撮影　栗野）
写真80－2　5区　全景　（西より）（撮影　栗野）
写真81－1　5区　凹み　（東より）（撮影　泉本）
写真81－2　5区　凹み内　礫石　（北東より）（撮影　栗野）
写真82－1　5区　凹み内　小石　（南より）（撮影　泉本）
写真82－2　5区　凹み内東側礫石　（北東より）（撮影　栗野）

写真82－3　5区　凹み内西側礎石　（北東より）（撮影　栗野）
写真83－1　5区　J断面　（南より）（撮影　岡田）
写真83－2　5区　K断面　（北より）（撮影　池畑）
写真84－1　5区　L断面　（東南より）（撮影　岡田）
写真84－2　5区　L断面　（西南より）（撮影　岡田）
写真85－1　5区　M断面センターよりE1まで　（東南より）（撮影　泉本）
写真85－2　5区　M断面E2　（東南より）（撮影　泉本）
写真86－1　5区　M断面E2～E3　（東南より）（撮影　泉本）
写真86－2　5区　M断面E3～E4　（西南より）（撮影　泉本）
写真87－1　5区　N断面S9～S10　（北西より）（撮影　栗野）
写真87－2　5区　O断面S11～S12　（西南より）（撮影　泉本）
写真88－1　5区　P断面S8～S9　（西北から）（撮影　泉本）
写真88－2　5区　P断面S10溝の部分　（西北から）（撮影　泉本）
写真89－1　7区　A断面　（南より）（撮影　山磨）
写真89－2　7区　A断面千枚岩暗渠など　（南より）（撮影　山磨）
写真90－1　7区　千枚岩暗渠平面　（南から）（撮影　山磨）
写真90－2　7区　C断面　（西から）（撮影　山磨）
写真91－1　7区　C断面　（南より）　手前は5区　（南より）（撮影　山磨）
写真91－2　7区　C断面千枚岩暗渠など　（南より）（撮影　栗野）
写真92－1　7区　D断面（手前のトレンチはB断面）　（東より）（撮影　泉本）
写真92－2　7区　B断面千枚岩暗渠　（東南より）（撮影　泉本）
写真93－1　8区　北端部　（北西より）（撮影　泉本）
写真93－2　8区　北端部の柱穴　（南東より）（撮影　泉本）
写真94－1　8区　北端部　（北より）（撮影　栗野）
写真94－2　8区　北端部　（北より）（撮影　栗野）
写真94－3　8区　北端部　（北より）（撮影　栗野）
写真94－4　8区　北端部　（北西より）（撮影　栗野）
写真95－1　8区　7断面　（南より）（撮影　栗野）
写真95－2　8区　6断面　（南東より）（撮影　栗野）
写真96－1　8区　6断面南側地区全景　（北西より）（撮影　栗野）
写真96－2　8区　6断面南側地区全景　（南東より）（撮影　栗野）
写真97－1　8区　6断面南側地区　（南より）（撮影　栗野）
写真97－2　8区　5断面　（東より）（撮影　栗野）
写真98－1　8区　4断面　（北より）（撮影　栗野）
写真98－2　8区　5断面及び凹み　（北より）（撮影　栗野）
写真98－3　8区　5断面西側　（北より）（撮影　栗野）

写真 99－1　8区　2断面西側　（西より）（撮影　栗野）
写真 99－2　8区　2断面西側　（西北より）（撮影　栗野）
写真 99－3　8区　2断面東側　（北より）（撮影　栗野）
写真100－1　久米廃寺グリッド全景（昭和44年8月）（西より）
写真100－2　鍬入式（昭和44年3月）（西より）
写真100－3　中止状態（昭和45年1月～6月）
写真100－4　東西第1トレンチ（昭和44年3月）（西より）
写真101－1　ベルトコンベアー運搬
写真101－2　第2次調査後半再開
写真101－3　1区　発掘　（西より）
写真101－4　写真撮影のため水とり
写真101－5　雪かき
写真101－6　瓦の発掘，建物Ⅱ西溝　（南より）
写真101－7　沢村仁氏指導
写真101－8　見学者　（北から）
写真102－1　瓦洗い
写真102－2　4区　発掘風景
写真102－3　写真撮影
写真102－4　4区　発掘風景
写真102－5　1区　北側崖の発掘
写真102－6　調査事務所
写真102－7　3区　埋め戻し状況
写真102－8　7区　実測風景
写真103－1　塑造仏①頭髪　（撮影　栗野）
写真103－2　塑像仏②顔面　（撮影　栗野）
写真104－1　塑造仏③菩薩像　瓔珞・裳・裙　（撮影　栗野）
写真104－2　塑造仏④菩薩像　裳・裙　（撮影　栗野）
写真105－1　塑造仏⑤菩薩像　垂髪・頭髪・台座の反花　（撮影　栗野）
写真105－2　塑造仏⑥菩薩像　指先　（撮影　栗野）
写真105－3　塑造仏⑦天部か？　（撮影　栗野）
写真106－1　塑造仏⑧如来像　螺髪　（撮影　栗野）
写真106－2　塑造仏⑨菩薩像　臂釧　（撮影　栗野）
写真107－1　塼仏　（撮影　栗野）
写真107－2　文様瓦　（撮影　栗野）
写真107－3　墨書土器　（撮影　栗野）
写真107－4　円面硯　（撮影　栗野）

写真108－1　釘　右下三本は仏像留り出土　（撮影　栗野）
写真108－2　青銅製金具　（撮影　栗野）
写真108－3　鉄製　鏃先　（撮影　栗野）
写真108－4　鉄製矛？　（撮影　栗野）
写真109－1　相輪破片　（撮影　栗野）
写真110－1　軒丸瓦2類（撮影　栗野）
写真110－2　軒丸瓦3類・軒平瓦2類（撮影　栗野）
写真110－3　軒丸瓦4類（撮影　栗野）

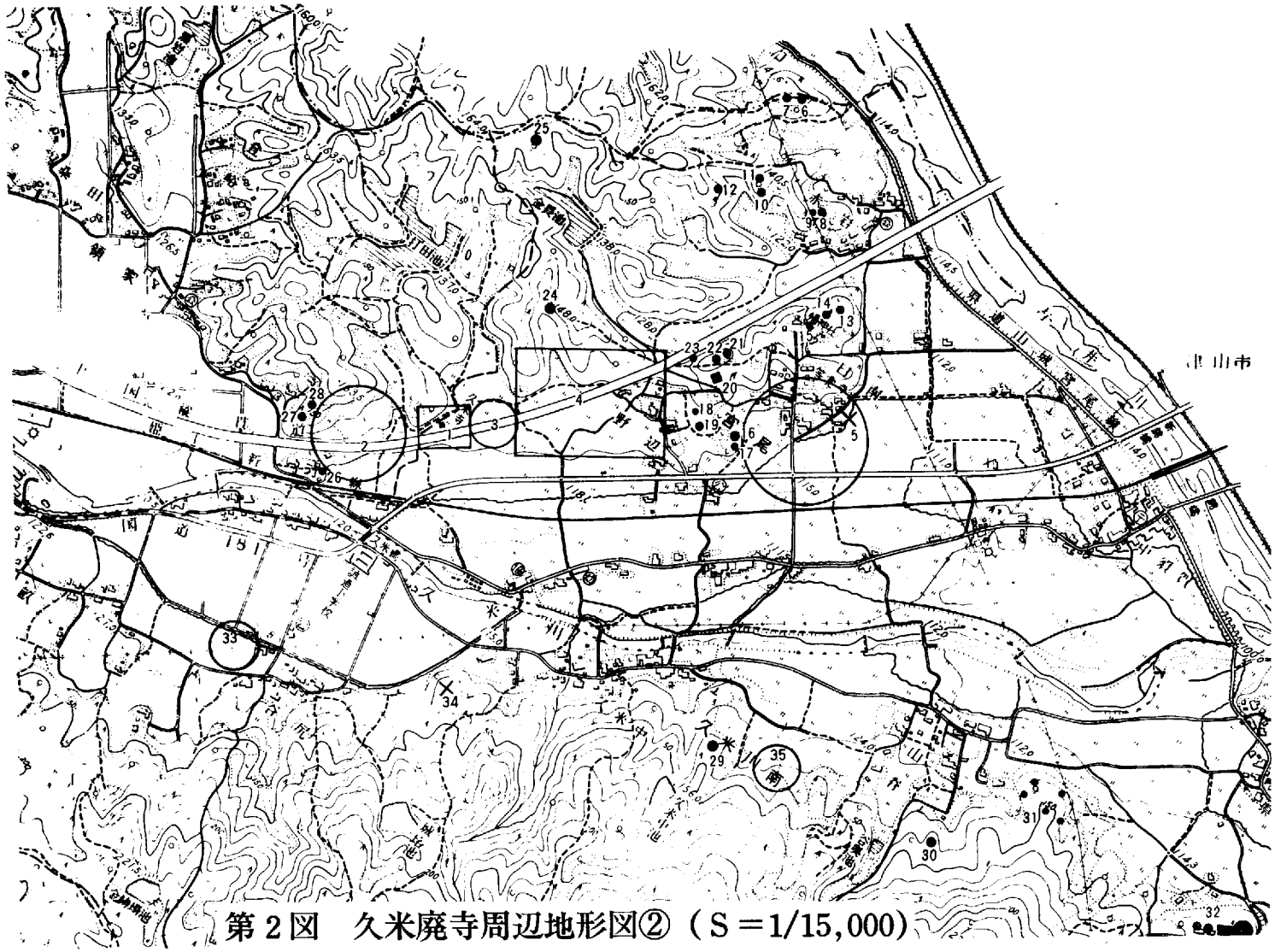



第１図　久米廃寺周辺地形図①（1/50,000）

第1図　付　　表

| 遺跡名 | 所在地 | 時期・その他 |
|---|---|---|
| 1. 久米廃寺 | 久米町・宮尾・唐臼 | 縄文・弥生・古墳・奈良・平安・集落・寺院址。中国縦貫自動車道建設にて記録保ののち破壊一部高架保存 |
| 2. 領家遺跡 | 久米町領家・才の鼻 | 先土器・弥生・古墳・奈良・平安・集落。中国縦貫自動車道建設に伴い大半は記録保存調査ののち破壊 |
| 3. 宮尾遺跡 | 田京<br>久米町宮尾野辺<br>蔵人 | 縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・集落・郡家<br>中国縦貫自動車道建設に伴い一部記録保存ののち破壊 |
| 4. 日南遺跡 | 久米町宮尾 | 弥生・古墳・奈良・平安期の集落（「久米町の文化財」久米町1973，背後に大日古墳・方墳（一辺30cm）を中心とした10基の古墳群がある。 |
| 5. 谷尻 | 久米町 | 古墳・奈良・平安，須恵器・土師器 |
| 6. 若幸寺 | 久米町久米川南・若幸寺 | 弥生　石庖丁　「久米町の文化財」久米町1973 |
| 7. 山背 | 久米町久米川南 | 弥生　器台　「久米町の文化財」久米町1973 |
| 8. 狩衣遺跡 | 久米町宮部 | 弥生　石庖丁　「久米町の文化財」久米町1973 |
| 9. 大上遺跡 | 久米町神代大上 | 弥生　器台　「久米町の文化財」久米町1973 |
| 10. 六番組遺跡 | 久米町里公文 | 弥生　昭和45年開墾のとき住居址土器片出上　「久米町の文化財」久米町 |
| 11. 里公文墳墓 | 久米町里公文 | 昭和46年林道開通のため壺棺発見，酒津併行期の土拡墓群一部緊急調査，一部破壊。「久米町の文化財」 |
| 12. 布原 | 鏡町町布原 | 弥生～奈良平安　昭和48年農業構造改善のため記録保存せずに一部破壊 |
| 13. 二宮大東遺跡 | 津山市・二宮 | 弥生時代の集落および古墳があった。中国縦貫自動車道により大半は記録保存のうえ破壊 |
| 14. 三菱レジャーセンター建設地 | 久米町鴨山一帯 | 昭和48年3月現在までの分布調査の結果では弥生，その他16ヶ所，古墳129，鉄穴流し32ヶ所が発見されている |
| 15. 三成古墳群 | 久米町中北下・三成 | 全長30mの前方後円墳及び円墳2基 |
| 16. 岡北古墳群 | 久米町松峪岡 | 全長54mの前方後円墳岡大塚・全長27mの岡西塚 |
| 17. 奥の前古墳 | 久米町油木北 | 久米町最大の前方後円墳で全長70m高さ6m，鉄鏃・銅鏃・刀・短甲・鎌・鋸・玉類・鏡が出土しているという。「久米町の文化財」 |
| 18. 九日場古墳群 | 久米町福田下 | 方形に近い古墳が掘られた折に馬具（轡，辻金具，雲珠）直刀，須恵器，人骨が竪穴式石室より出土している。「岡山県埋蔵文化財報告4」1974 |
| 19. 慈恩寺古墳群 | 久米町桑上 | 前方後円墳1基円墳4基 |
| 20. 瓢箪山古墳群 | 久米町桑下 | 前方後円墳，全長48m，高さ5m |
| 21. 狐塚古墳 | 久米町久米川南 | 前方後円墳，全長60m高さ5m，西側にある円墳2基が町営住宅建設の折破壊され，須恵器出土 |
| 22. 高塚古墳 | 中央町綿織 | 前方後円墳1および円墳1 |

| 遺　跡　名 | 所　在　地 | 時　期　・　そ　の　他 |
|---|---|---|
| 23. 龍王塚古墳 | 久米町足山 | 前方後円墳 長64m,高さ6m，他に岩ヶ鼻古墳・三畝古墳などがある。 |
| 24. 観音山古墳 | 鏡野町下原 | |
| 25. 美和山古墳群 | 津山市二宮 | 美作最大の全長92mの前方後円墳胴塚をはじめ，直径　mの蛇塚，耳塚などがある。 |
| 26. 高尾廃寺 | 津山市高尾 | 平安期の瓦が出土したという |
| 27. 佐良山古墳群① | 津山市皿 | 寺池東古墳群，寺山古墳群，煙硝庫古墳群，門山古墳など47基の古墳群 |
| 28. 佐良山古墳群② | 津山市福田 | 中央古墳群をはじめ剣戸古墳群，小屋谷古墳群など「佐良山古墳群の研究」 |
| 29. 美作国府 | 津山市総社 | 推定国府域方6～8町の北西隅を中国縦貫自動車道が通るので記録保存の調査　1970～72年 |
| 30. 院庄館跡 | 津山市院庄 | 2町四方と推定される中世館跡，1973～74年，発掘調査，国指定 |

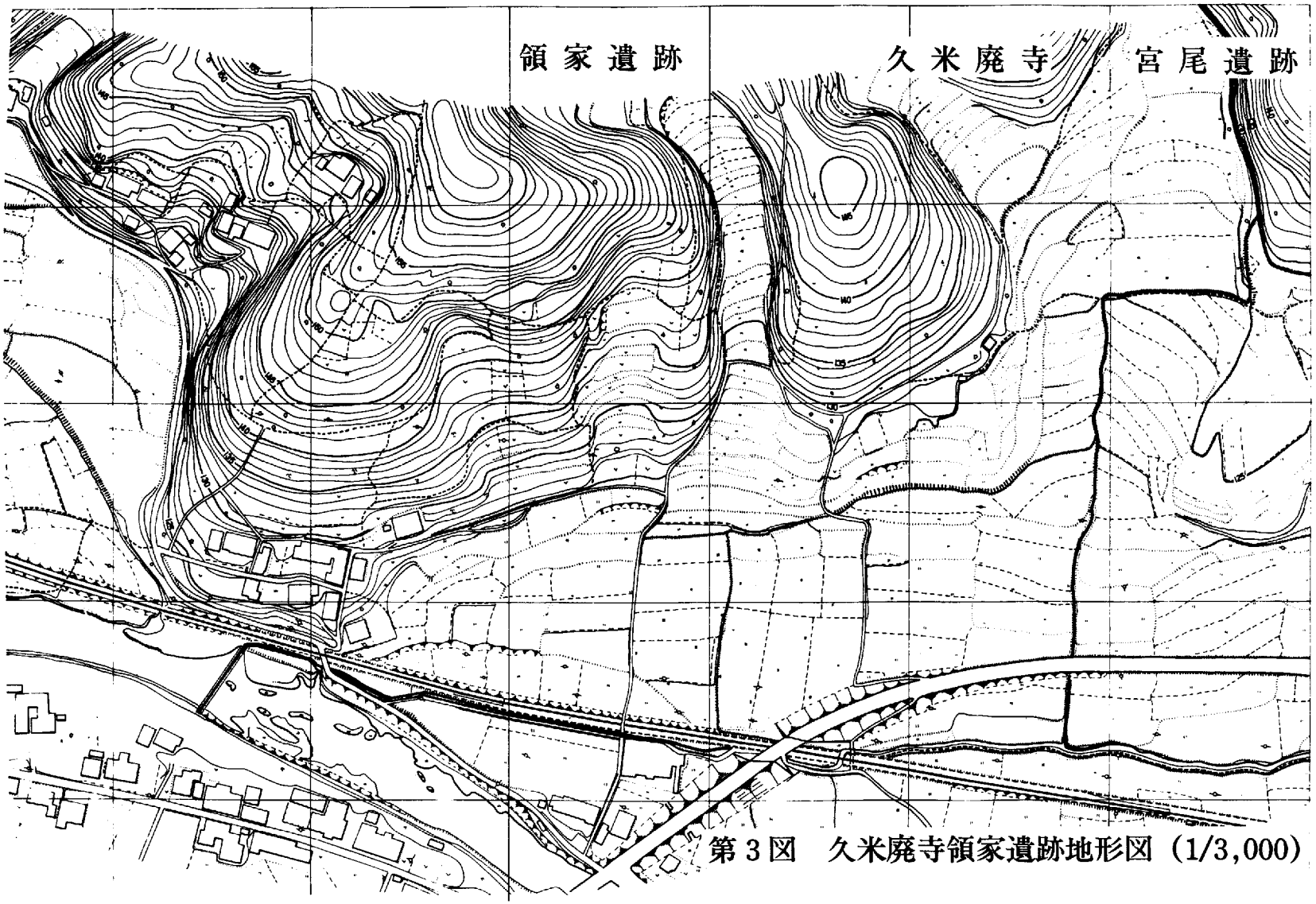


第２図　久米廃寺周辺地形図②（Ｓ＝1/15,000）

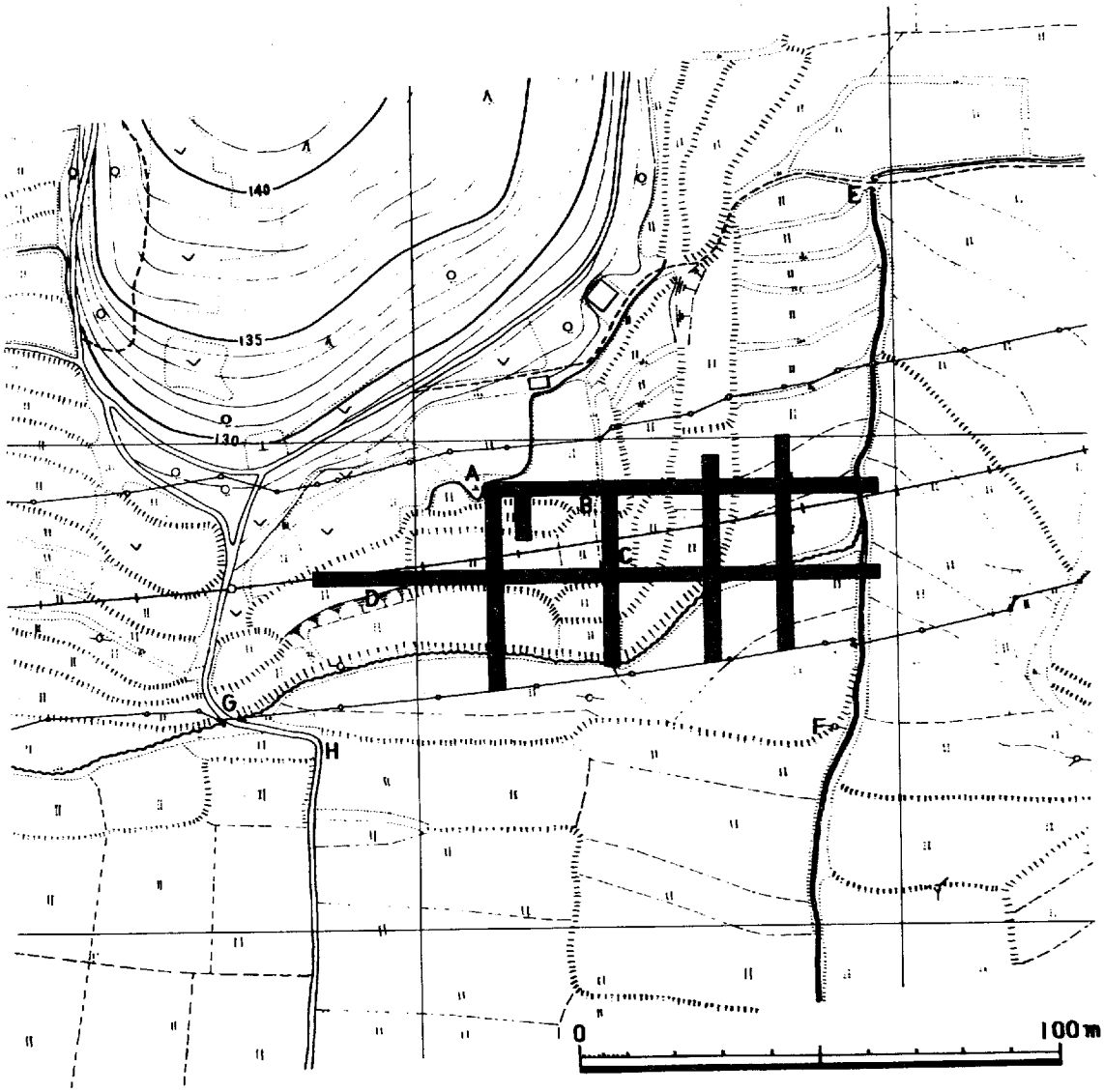
## 第2図　付　　表

| 遺跡名 | 概要 |
|---|---|
| 1. 久米廃寺 | |
| 2. 領家遺跡 | |
| 3. 宮尾遺跡1区 | 昭和46年トレンチ調査の折。縄文晩期～弥生 |
| 4. 宮尾遺跡 | 久米郡家 |
| 5. 日南遺跡 | 昭和46年溝改修工事の折。弥生時代甕が出土。「久米町の文化財」，この一帯から，須恵器，土師器，柱穴などがある。 |
| 6. 北谺1号墳 | 径6m，高15m，円墳 |
| 7. 北谺2号墳 | 径5m，高1m，円墳 |
| 8. 盛上1号墳 | 径15m，高2m，円墳。昭和44年10月箱式石棺，人骨を発見したが埋め戻した。 |
| 9. 盛上2号墳 | 径2m，高1m，円形。古銭100枚以上，木炭，骨粉，河原石2～30個「久米町の文化財」に森上出土としてある。火葬墓か？ |
| 10. 鎧塚古墳1号 | 径15m，高15m，円墳 |
| 11. 鎧塚古墳2号 | 径15m，高15m，円墳 |
| 12. 鎧塚古墳3号 | 墳丘破壊，鎧・刀出土「久米郡誌」 |
| 13. 訪諏古墳1号 | 径15m，高3m，円墳。墳丘半壊河原石（ふき石か？） |
| 14. 訪諏古墳2号 | 径30m，高4m，円墳。箱式石棺 |
| 15. 若宮古墳 | 径10m，高2m，円墳 |
| 16. 丸山古墳1号 | 径25m，高3m，円墳。ふき石あり |
| 17. 丸山古墳2号 | 径15m，高3m，円墳 |
| 18. 野辺古墳1号 | 径6m，高1m，円墳 |
| 19. 野辺火の釜古墳 | 径15m，高2m，横穴式石室・刀・鉄鏃「久米郡誌」 |
| 20. 大日古墳 | 一辺30m，高5m，方墳。ふき石箱式石棺，「久米郡誌」 |
| 21. 日南古墳1号 | 径15m，高2m，円墳，墳丘一部破壊 |
| 22. 日南古墳2号 | 径5m，高0.5m，箱式石棺露出 |
| 23. 日南古墳3号 | 箱式石棺。中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査　1972～73年 |
| 24. 野辺古墳2号 | 墳丘破壊，陶棺出土，石室あり |
| 25. 金長上古墳 | 径20m，高2.5m，墳丘一部破壊，円筒埴輪 |
| 26. 鞆塚古墳 | 径5m，高0.5m，円墳 |
| 27. 領家二ツ塚古墳1号 | 径13m，高2m，円墳 |
| 28. 領家二ツ塚古墳2号 | 径10m，高2m，円墳 |
| 29. 久米中大日古墳 | |
| 30. 国富古墳 | 径15m，高2m，円墳，横穴式石室陶棺 |
| 31. 山背古墳群 | 径4～10mの円墳5基 |
| 32. 狐塚古墳群 | 全長60m高6mの前方後円墳，前方部・墳端部けずられ箱式石棺出土。また，前方部四方に円墳2基存在したが，町営住宅建設のため破壊。須恵器出土。木棺直葬か？ |
| 33. 谷尻遺跡 | 須恵器，土師器散布地。6世紀後半～奈良・平安時代 |

| 遺　跡　名 | 概　　要 |
| --- | --- |
| 34. 若幸寺遺跡 | 石庖丁単独出土。「久米町の文化財」 |
| 35. 山背遺跡 | 弥生後期。「久米町の文化財」 |




第3図　久米廃寺領家遺跡地形図（1/3,000）




A　塔心礎

B　東側建物　当初版築状の土層や瓦だまりやグリ石が見られたところから建物の存在が予想されていたが，後の調査で水田造成土と確認された。3区D断面参項

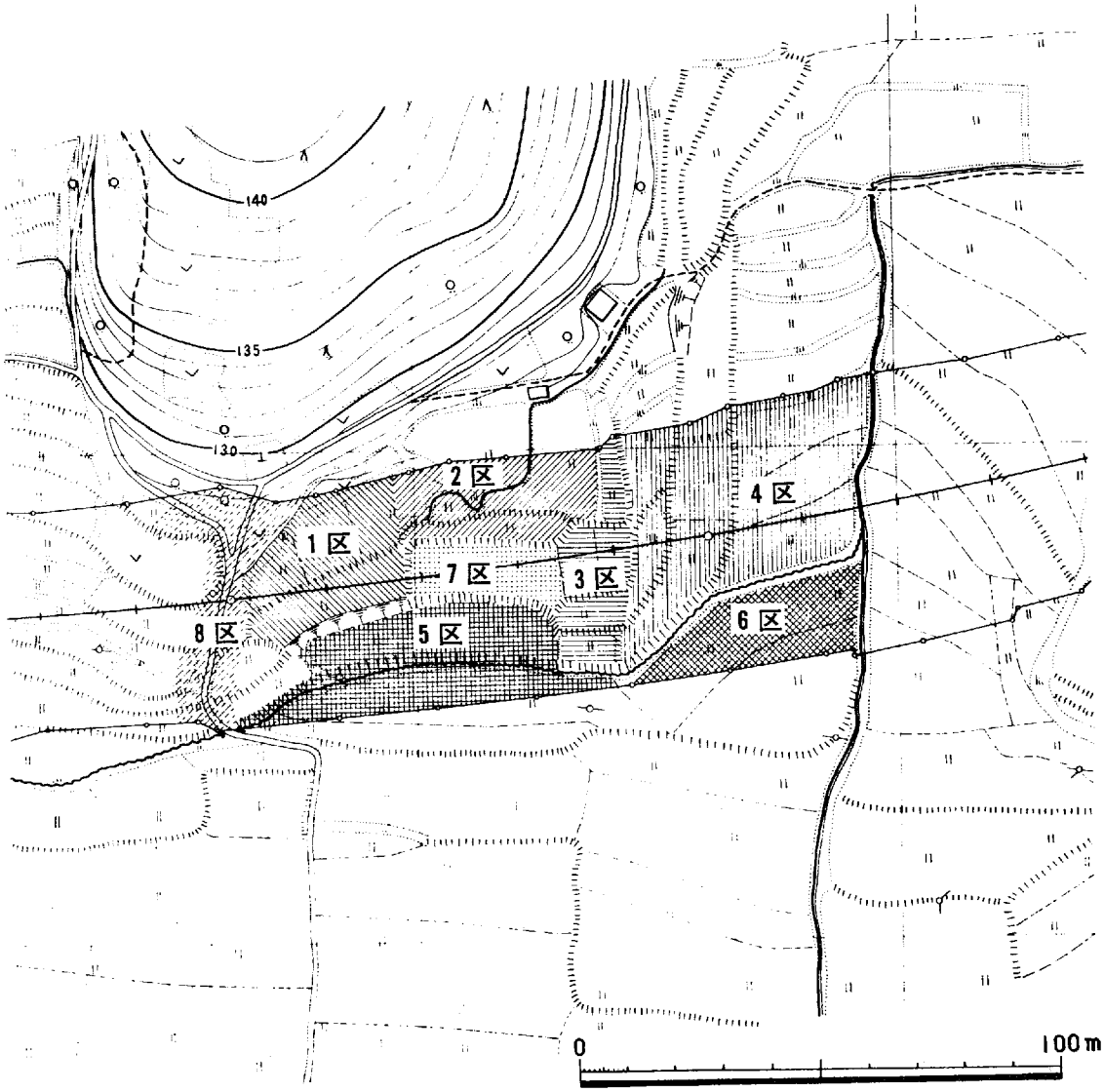
C　瓦留り　3区ピットの連続した溝状遺構の瓦留りにあたった。

D　盛土がみられる。

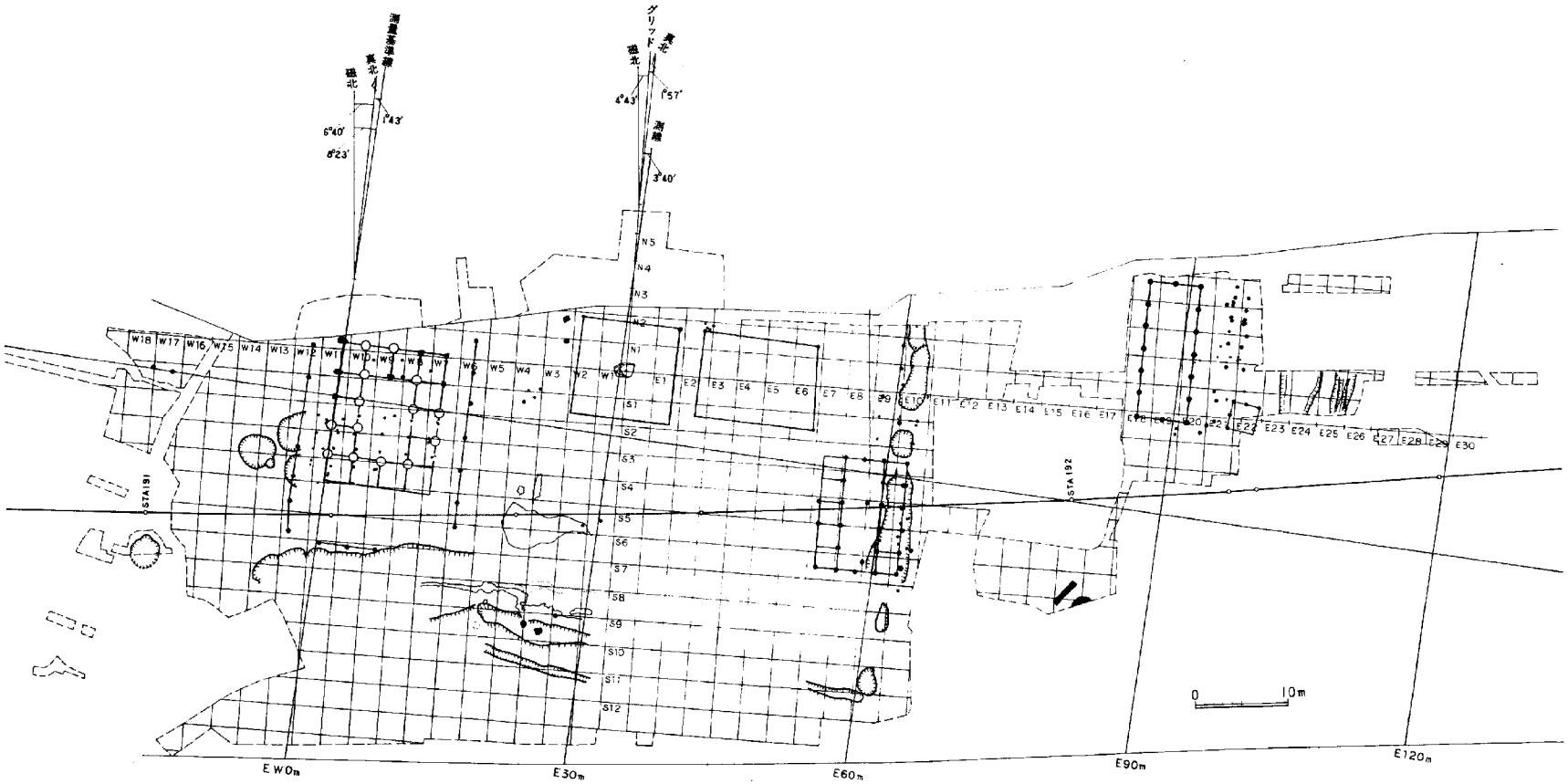
E　久米廃寺　東北隅　　G　久米廃寺　西南隅

F　〃　東南隅　　H　条理の線・G地点とこれだけくい違う。

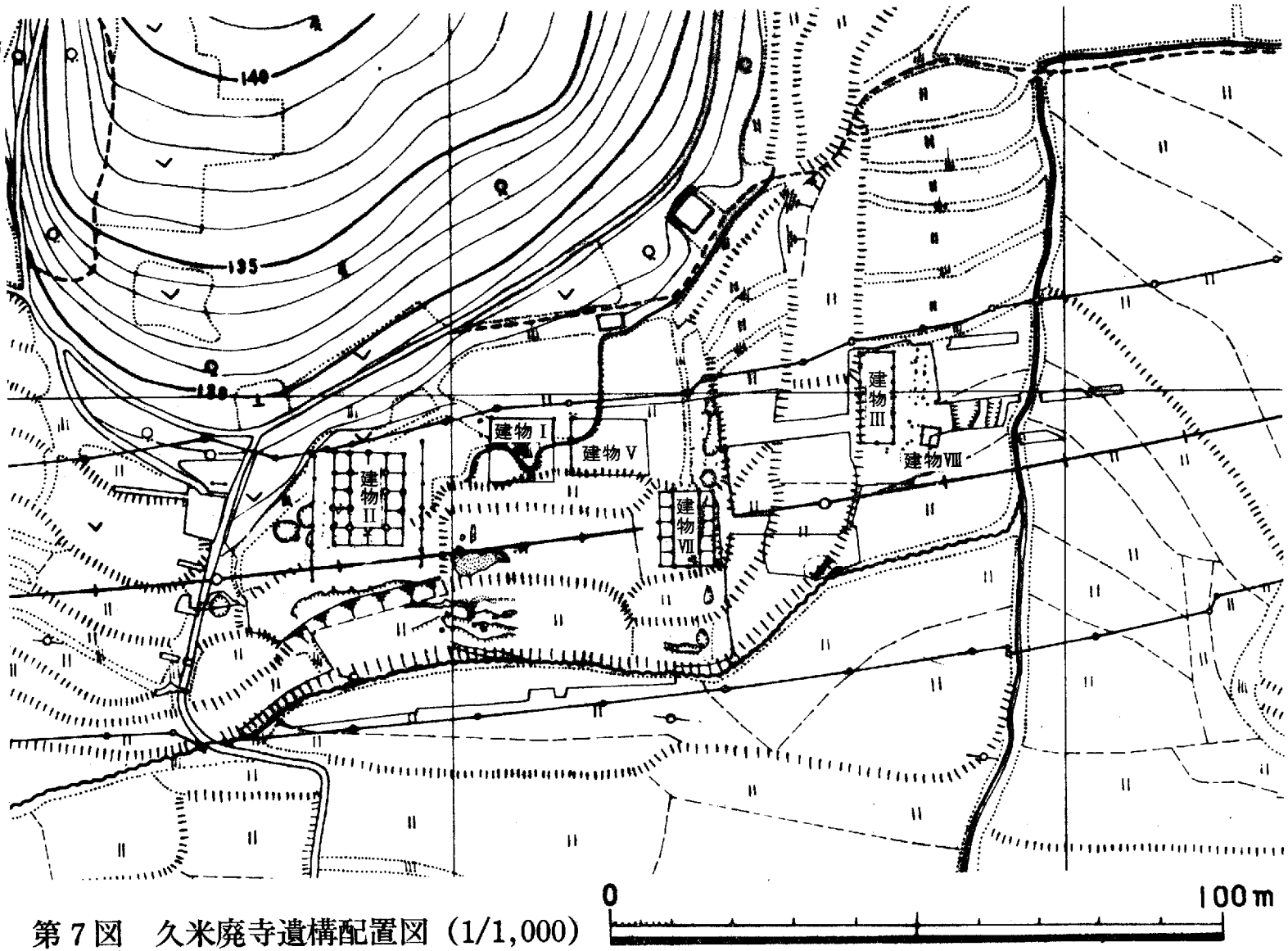
**第4図　久米廃寺第一次発掘調査トレンチ設定図（1/1,500）**



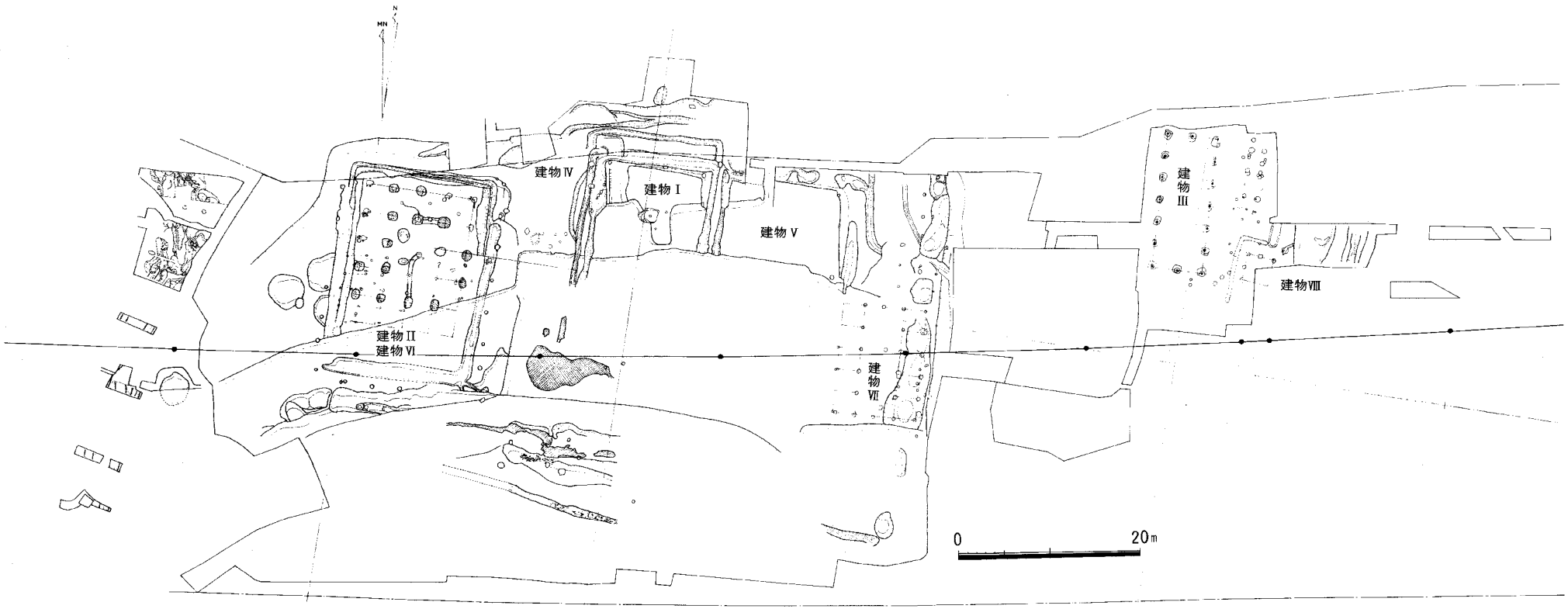

第5図　久米廃寺第2次発掘調査地区分け（1/1,500）



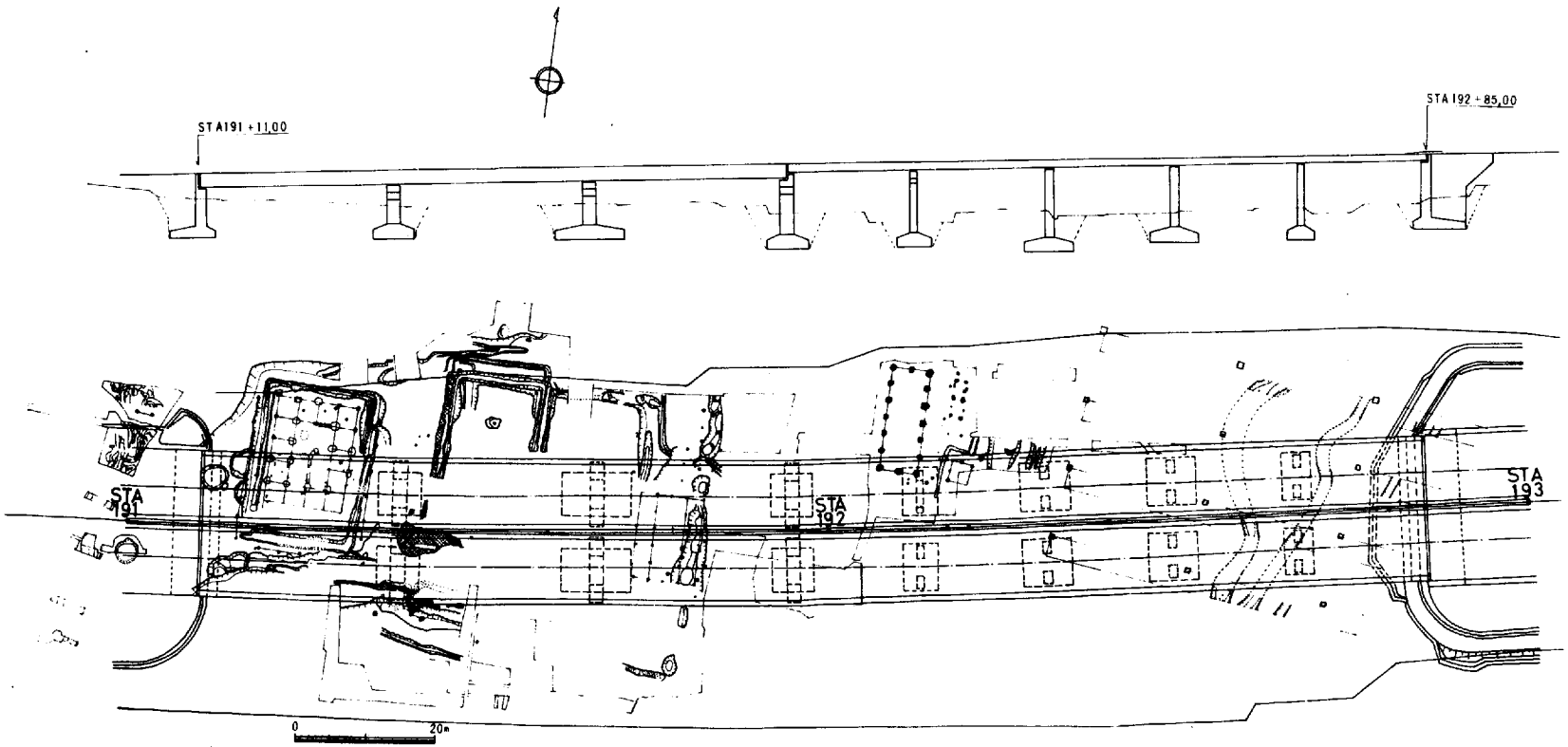

第6図　発掘グリッド設定と測量基準線（1/600）



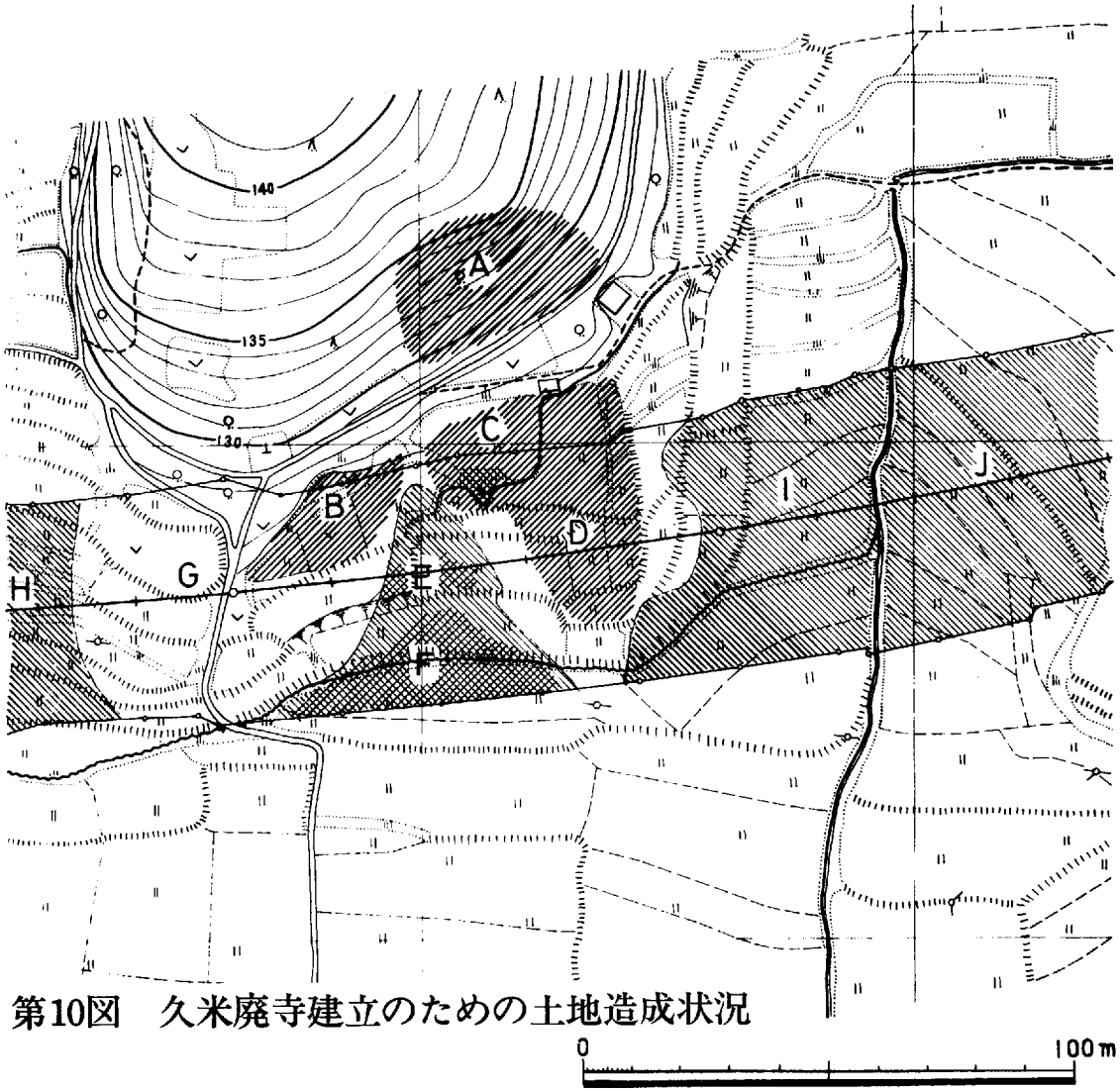

第7図　久米廃寺遺構配置図（1/1,000）




第8図　遺　構　配　置　図　（S＝1/400）



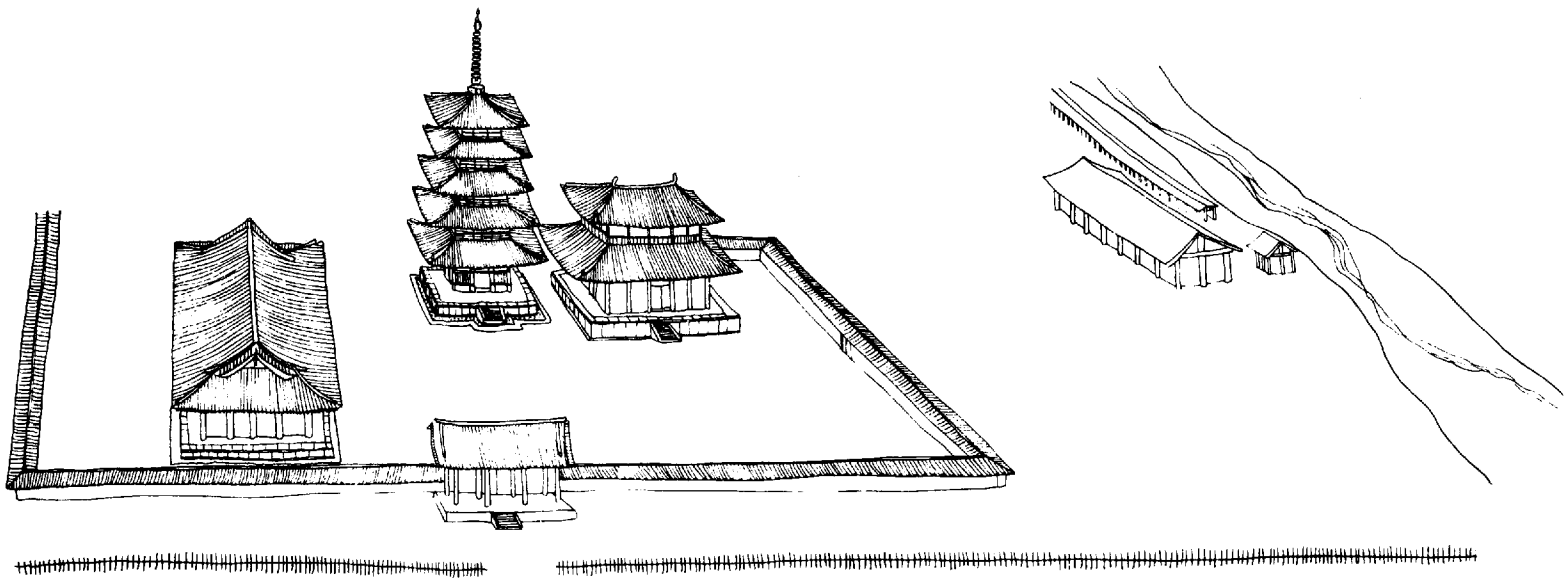

第９図　久米廃寺高架橋（Ｓ＝1/1,000）




A　山林・土取をしてあり，ややゆるい斜面の凹地
B　建物IIのための切土
C　建物Ⅰ・Ⅴのための切土
D　寺院建立前の尾根切土をして回廊を造る。
E　寺院建立前の谷，B地点から千枚岩を盛る。
F　寺院建立前の谷，かなり多量の造成土あり
G　尾根すじにあたり，西側境界線を送る
H　黒色土が広がる谷，領家遺跡１区
I　黒色土層が広がり，Ⅰ地点では建物が建てられている。
J　宮尾遺跡１区

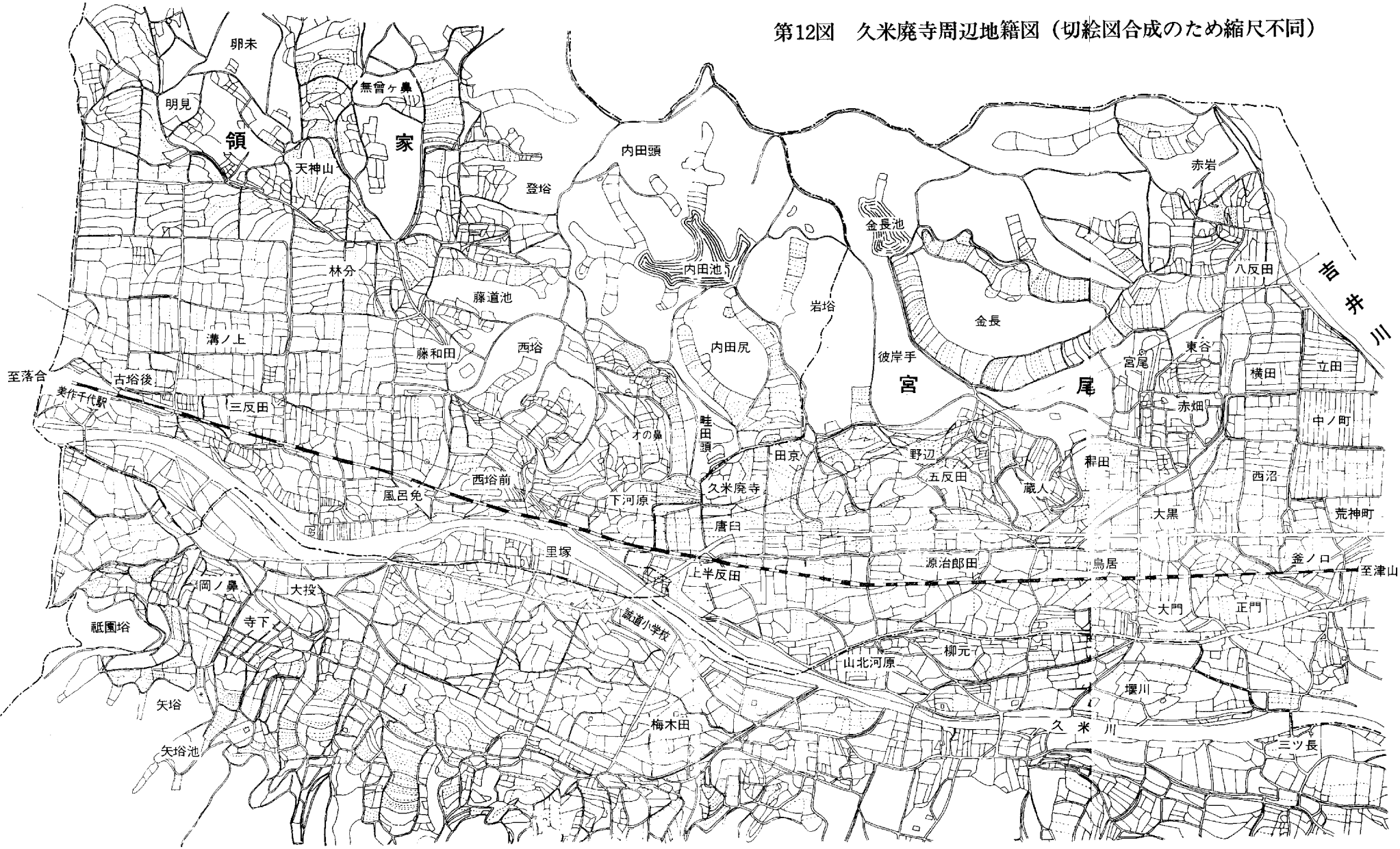
地　土　　黒色土　　盛　土

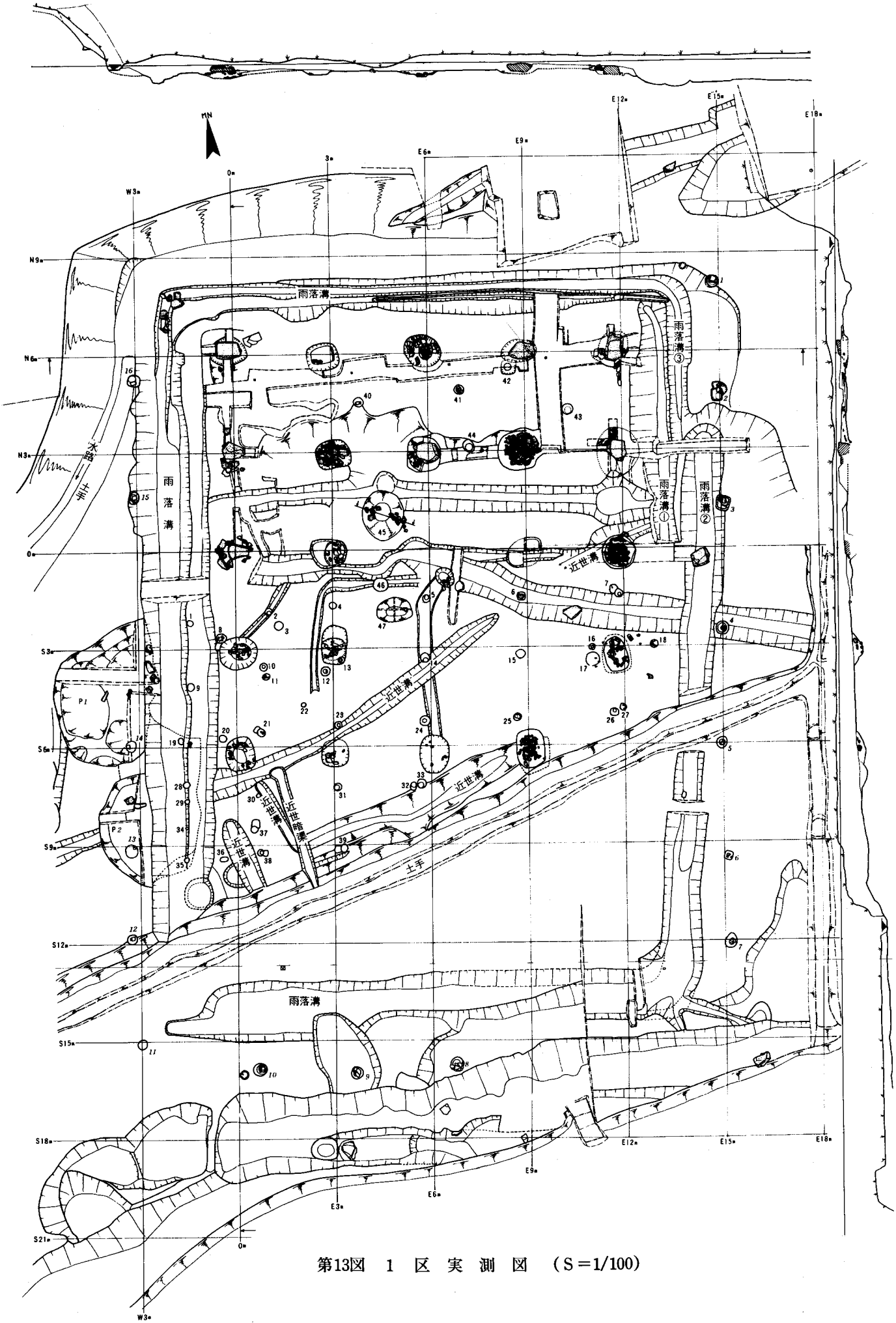
**第10図　久米廃寺建立のための土地造成状況**



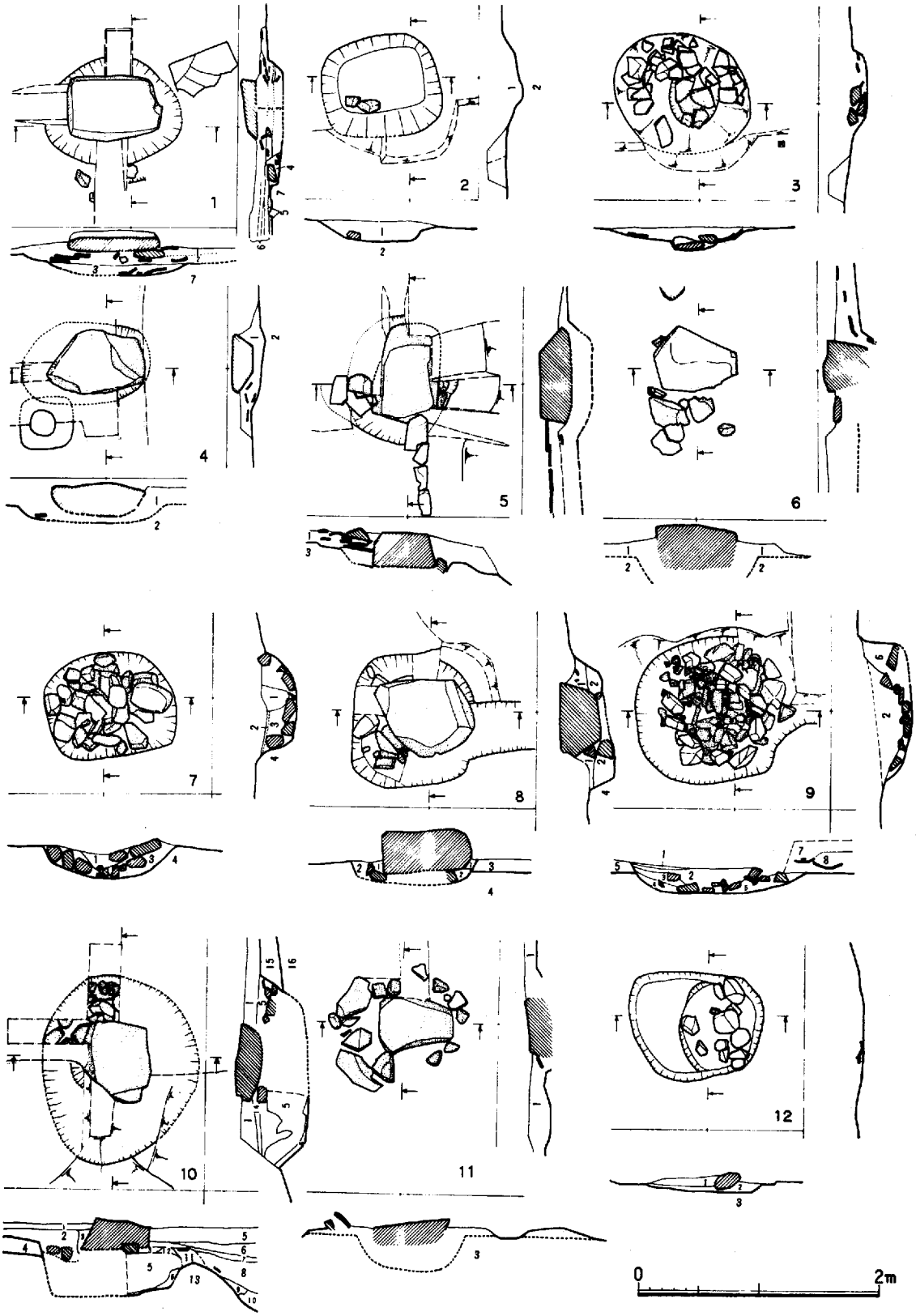
第11図　久米廃寺復元想像図

# 第12図　久米廃寺周辺地籍図（切絵図合成のため縮尺不同）






第13図　1　区　実　測　図　（S＝1/100）




第14図　1区建物II礎石実測図集成①（S＝1/50, 水糸L＝125.00m）

## 第14図　付　　表

① 1. 瓦と黄褐色粘土に灰色粘土混り
2. 灰色粘土
3. 灰白色粘土
4. 黄色粘土（部分的に灰色粘土混る）
5. 黄色粘土
6. 灰白色粘土・灰色粘土・黄色粘土混在し水平にたたきしめている。版築か？

② 1. 茶褐色粘土瓦混りで掘りあげた。
2. 千枚岩地山

③ 茶褐色粘土・瓦と石が混る。

④ 1. 瓦の入った茶褐色と黄色混り
2. 千枚岩地山

⑤ 1. 茶褐色粘土
2. 黄色粘土
3. 黄色千枚岩地山
※ 南側に四枚の瓦が並んでいる。地覆座の役をする。

⑥ 1. 瓦混り黒褐色土黄色粘土。版築か？
2. 地山黄色粘土

⑦ 1. 灰色粘土
2. 茶褐色粘土混り灰色粘土
3. 黄色粘土（地山と区別しにくい）
4. 黄色粘土地山

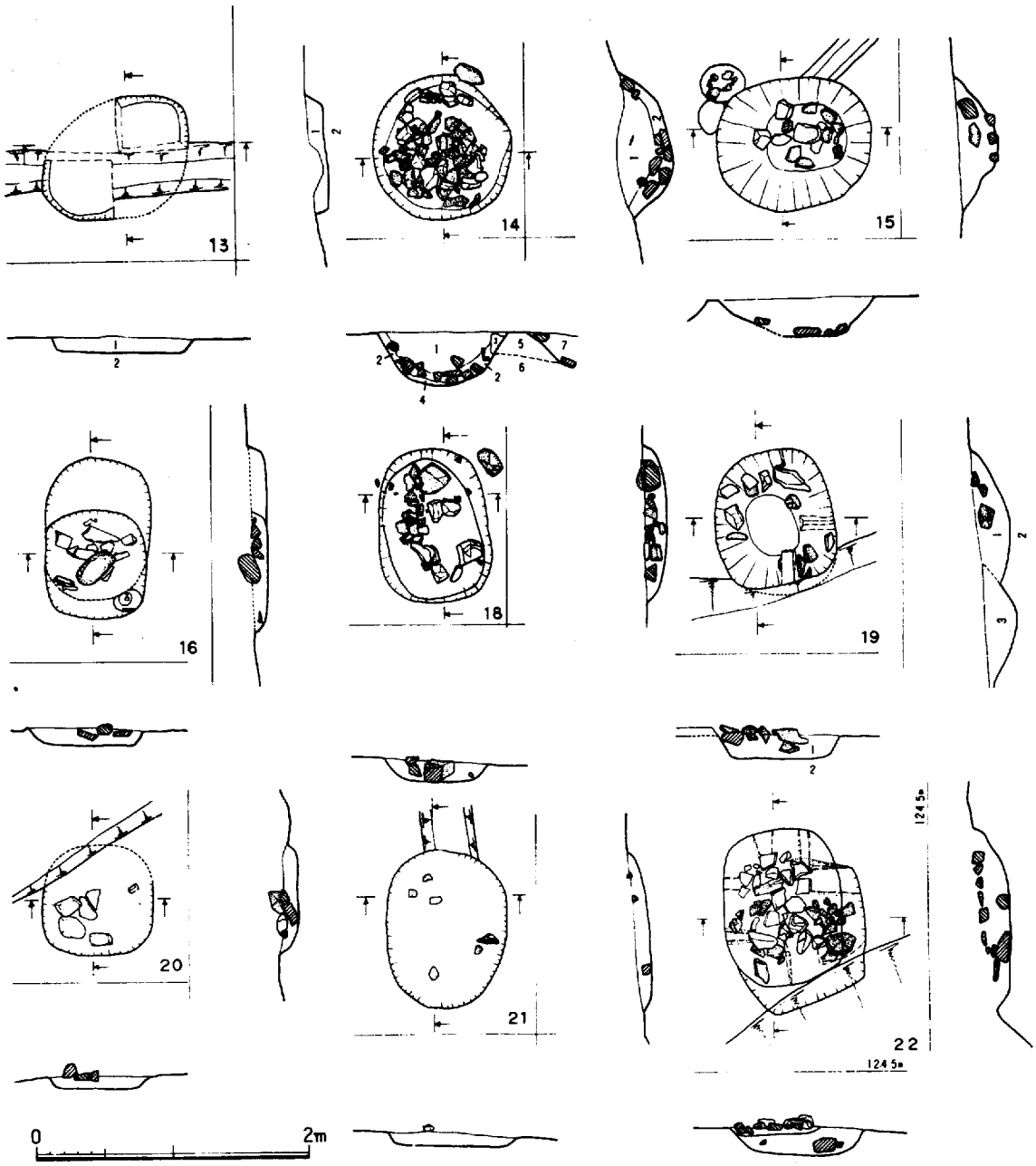
⑧ 1. 黒褐色土
2. 黄色粘土
3. 黒褐色・黄褐色混粘土この部分は溝になる。礎石掘方より古い。
4. 地山黄色粘土

⑨ 1. 黄色粘土
2. 黒褐色粘土
3. 黄色粘土
4. 黒褐色粘土
5. 黒褐色・黄褐色混粘土（溝）
6. 黄色粘土
7. 黒褐色土・千枚岩片が混入
8. 灰白色粘土
※ 白ぬきの石は下の石を敷いたあとに置かれたもので一段高くなっている。

⑩ 1. 茶褐色粘土・千枚岩混り
2. 黄色粘土
3. 黒褐色土
4. 黒褐色粘土マンガン質
5. 黄色粘土と黄色千枚岩少し
6. 黒色粘土
7. 灰色粘土
8. 灰褐色粘土
9. 灰色強い
10. 灰色粘土混り黒褐色粘土
11. 灰褐色粘土やや黒みが強い
12. 茶褐色
13. 茶灰色粘土地山
14. 茶褐色粘土
15. 千枚岩混り暗茶褐色粘土
16. 黄灰白色粘土地山
※ 14と5の間は茶灰色粘土

⑪ 1. 茶褐色土
2.
3. 地山，黄色・白色粘土

⑫ 1. 黒灰色粘土
2. 黄色粘土
3. 黄色粘土（地山）




第15図　建物II礎石実測図集成

（S＝1/50，水糸L＝125.00m，22を除く）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |
| ⑪ | ⑫ | | ⑬ | ⑭ |
| ⑮ | ⑯ | | 17 | ⑱ |
| ⑲ | ⑳ | ㉑ | ㉒ | 23 |
| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |

◀礎石番号一覧，○印は確認できたもの。

## 第15図　　1区建物礎石
## 実測図②

⑬ 1. 黄色粘土層
2. 黄色粘土

⑭ 1. 黄色粘土
2. 黒色粘土
3. 灰褐色粘土
4. 黄　　色
5. 黒褐色粘土
6. 茶色粘土地山
7. 黒色粘土混り灰褐色粘土（瓦土器あり）

⑮ 上層に灰褐色砂質粘土
下層に灰白色粘土

⑯

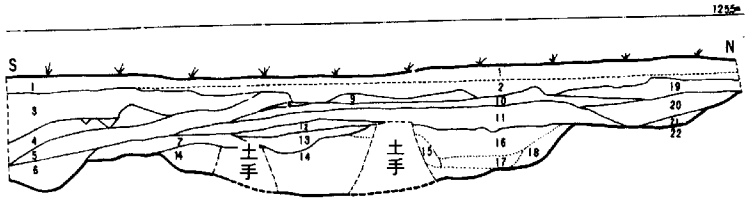
⑱ 掘り方周辺部は黒褐色がいく分濃い。マンガン多い

⑲ 1. 黒褐色土
2. 黄灰褐色粘土質（地山）
3. 淡茶褐色土

⑳

㉑

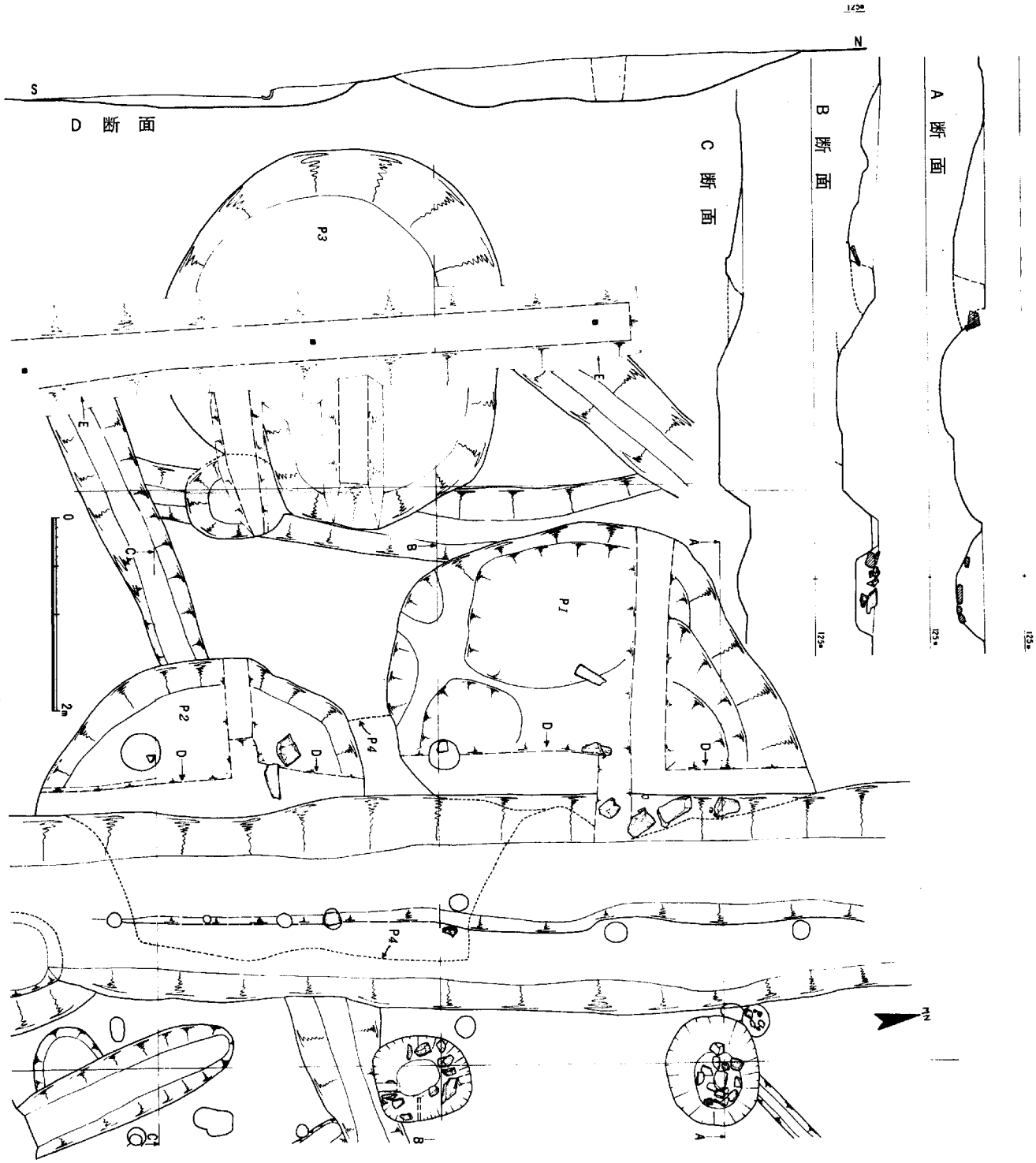
㉒ 上層　黄灰色砂質粘土
下層　黄色砂質粘土，これはふちに暗茶褐色マンガン層あり



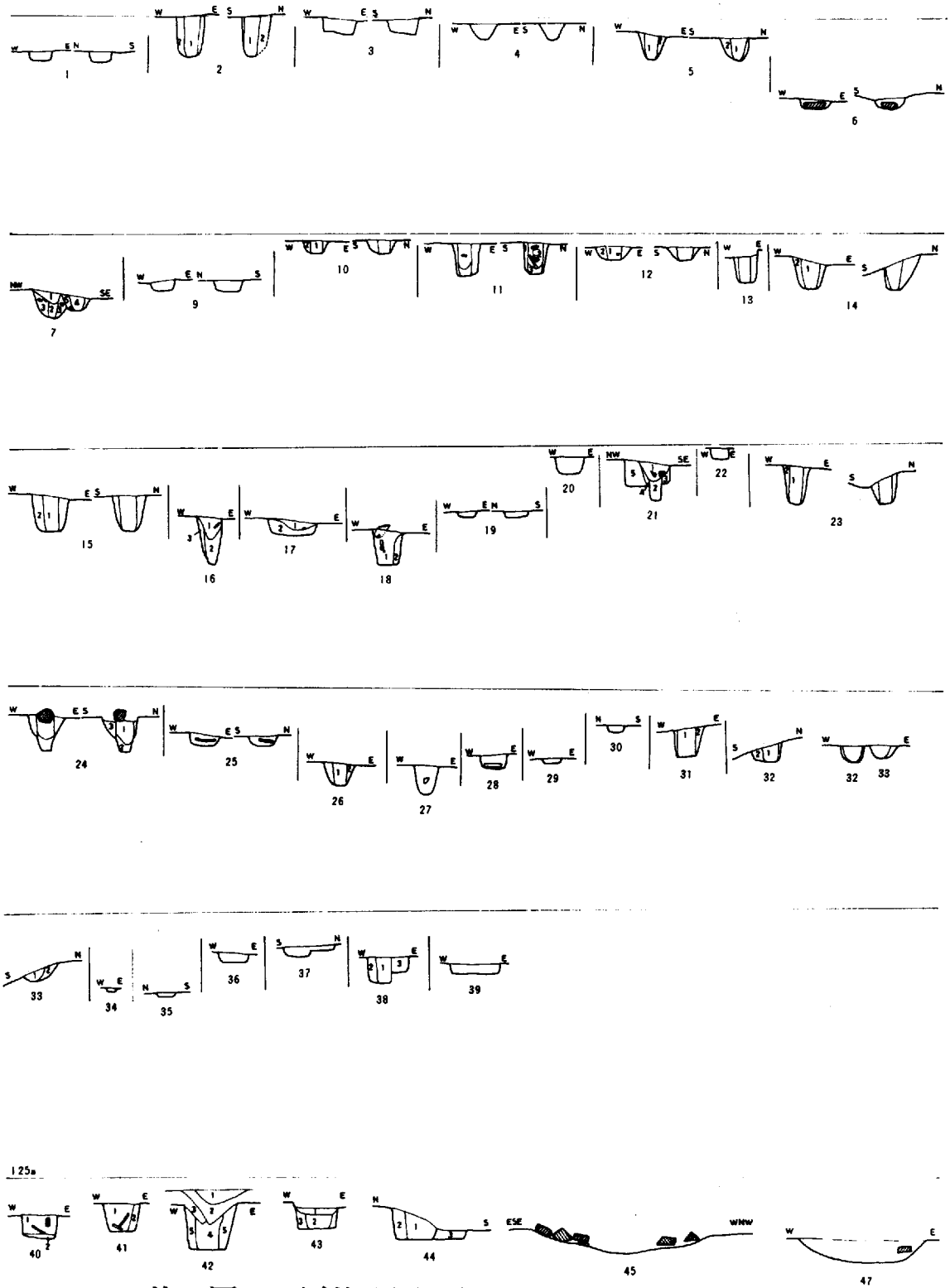

P 3　南北断面（E断面）

## 1 区 凹 み 実 測 図

1．耕作
2．黄茶色泥土
3．黄灰色泥土
4．黄色粘土
5．黄灰色砂質粘土
6．黄茶色砂質粘土
7．茶褐色粘土
8．黄色砂質泥土
9．黄白色粘土
10．淡茶褐色粘土
11．黄灰色砂質粘土
12．黄茶色砂質粘土
13．黄褐色砂質粘土
14．黄褐色砂質粘土
15．茶褐色粘土
16．黄色粘土（やや褐色）
17．淡茶色砂質粘土
18．黄灰色粘土
19．淡黄褐色砂質粘土
20．黄褐色砂質粘土
21．黄灰色砂質粘土
22．黄白色砂質粘土層（地山）




第16図　1区土坑実測図（S＝1/50）



第17図　1区柱穴断面集成図（S＝1/50）

（1～39までの水糸L＝124.6m）

第17図

① 

② 1. 灰黄色砂質粘土
2. 黄 褐 色

③ 瓦2片あり

④ 茶 褐 色

⑤ 1. 茶 褐 色
2. 黄 褐 色

⑥ 淡茶褐色

⑦ 1. 灰 褐 色
2. 茶 褐 色
3. 黄 褐 色
4. 淡茶褐色

⑨ 

⑩ 1. 茶 褐 色
2. 黄 褐 色

⑪ 1. 黄 褐 色
2. 茶 褐 色
3. 黄 灰 色

⑫ 1. 茶 褐 色
2. 黄 褐 色

⑬ 中, 茶 褐 色
外, 黄 褐 色

⑭ 1. 茶 褐 色
2. 黄 褐 色

⑮ 1. 灰褐色粘土
2. 黄 褐 色

⑯ 1. 茶 褐 色
2. 灰色粘土
3. 黄 褐 色

⑰ 1. 茶 褐 色
2. 黄 褐 色

⑱ 1. 褐色砂質粘土
2. 淡茶黄色粘土

⑲ 

⑳ 茶 褐 色

㉑ 1. 灰 褐 色
2. 茶 褐 色
3. 黄 褐 色
4. 暗黄褐色
5. 黄 褐 色

㉒ 

㉓ 1. 淡黄褐色
2. 黄 褐 色

㉔ 1. 茶 褐 色
2. 灰 色
3. 黄 褐 色

㉕ 灰 黄 色

㉖ 1. 淡茶褐色
2. 茶 褐 色

㉗ 淡茶褐色

㉘ 褐色土底に花崗岩をしく

㉙ 褐色粘土層（生焼け瓦小片1）

㉚ 

㉛ 1. 灰 褐 色
2. 黄 褐 色

㉜ 1. 茶 褐 色
2. 黄 灰 色

㉝ 1. 茶 褐 色
2. 黄 灰 色

㉞ 

㉟ 

㊱ 茶 褐 色

㊲ 茶褐色（瓦小片1）

㊳ 左から黄褐色・褐色・茶褐色

㊴ 茶 褐 色

㊵ 1. 黒灰色粘土
2. 地山千枚岩と黒灰色粘土（うめ土だろう）

㊶ 1. 灰色粘土
2. 黄色土埋土

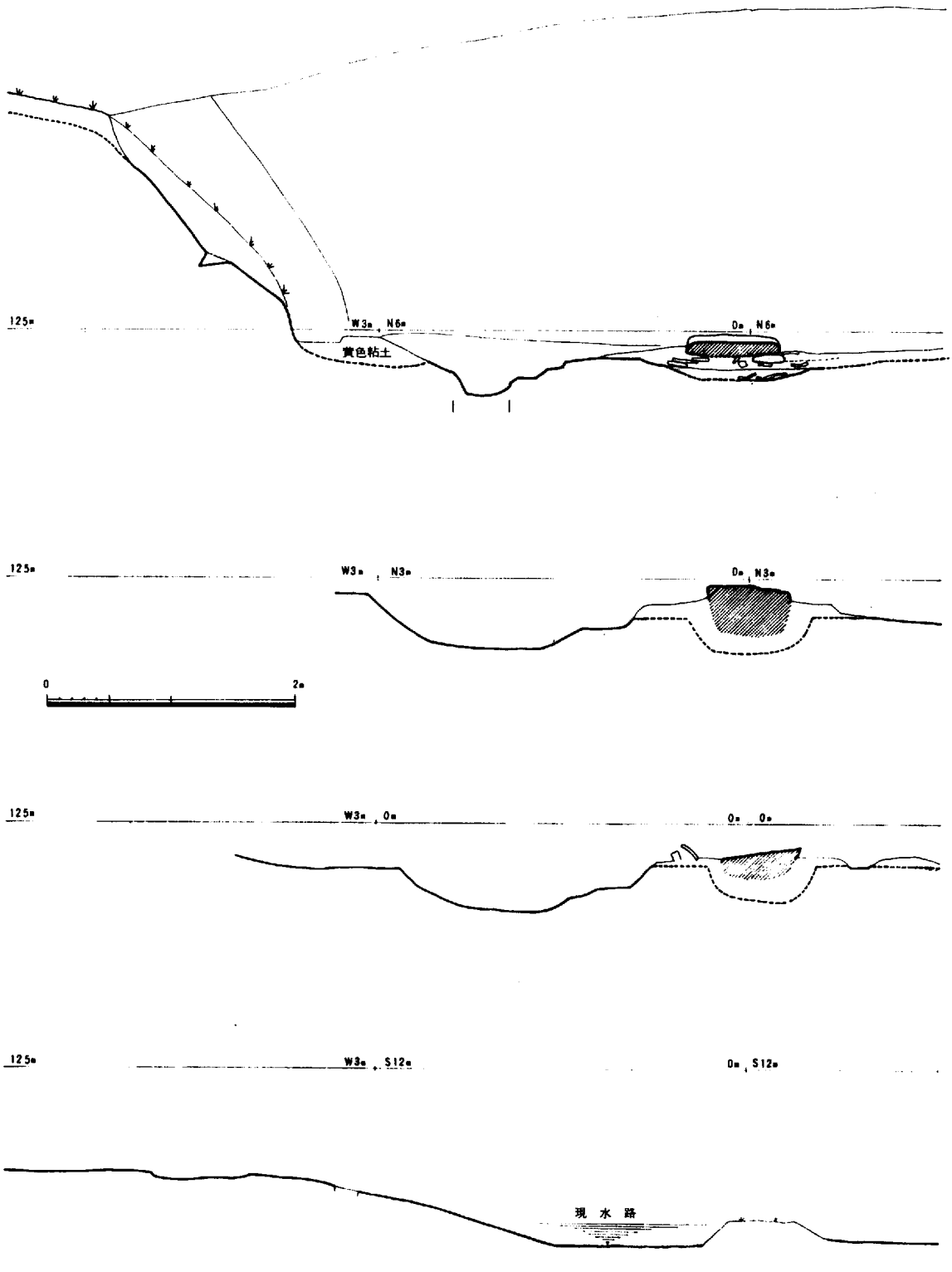
㊷ 1. 茶褐色粘土
2. 黒 灰 層
3. 黄色粘土
4. 灰色粘土
5. 黄褐色粘土

㊸ 1. 黒茶褐色粘土
2. 灰色粘土
3. 黄色混り灰色粘土

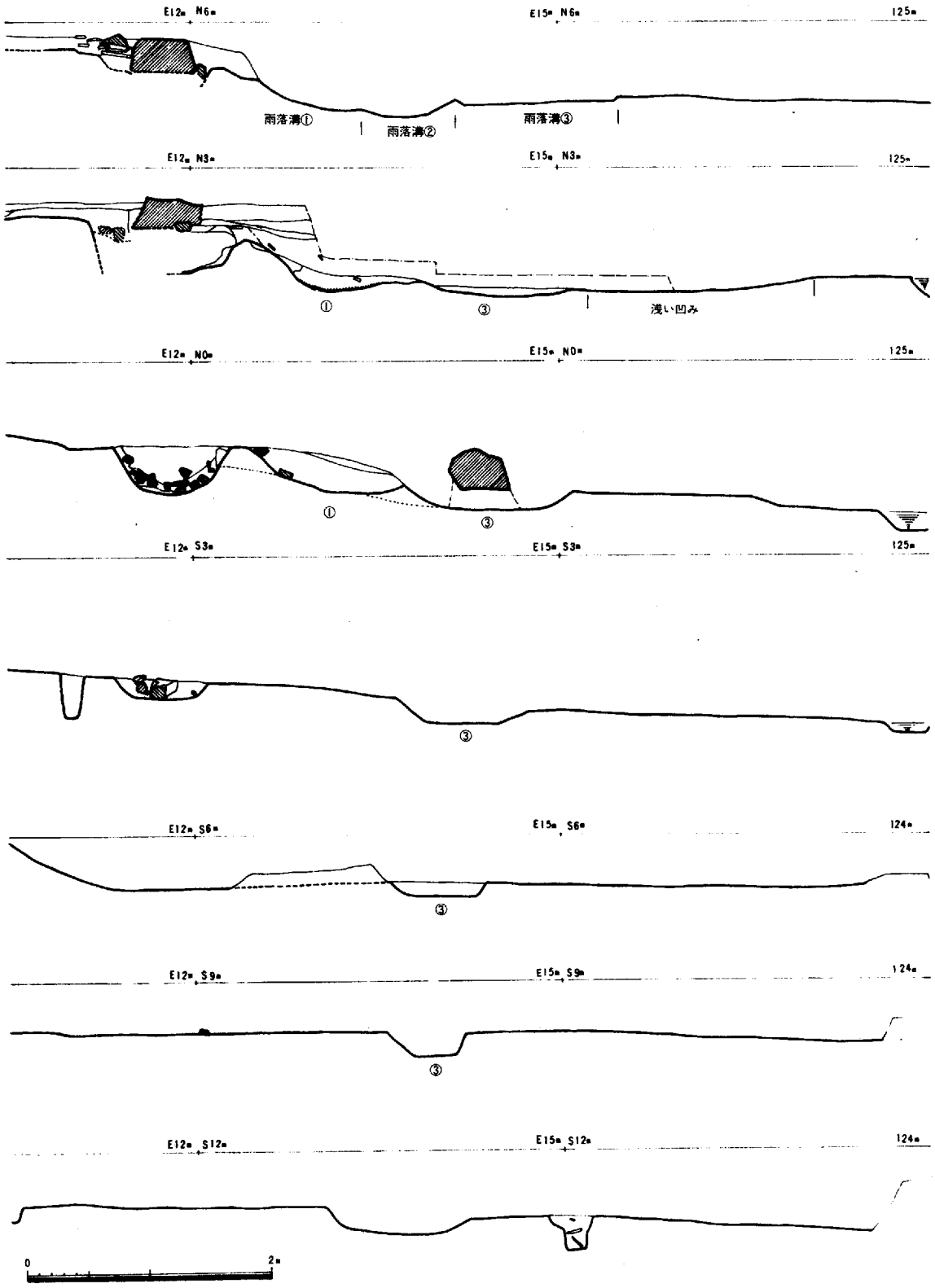
㊹ 1. 灰色粘土
2. 黄色粘土混り灰黒色粘土層
3. 黄色粘土・黒色粘土混在

㊺ 茶褐色土

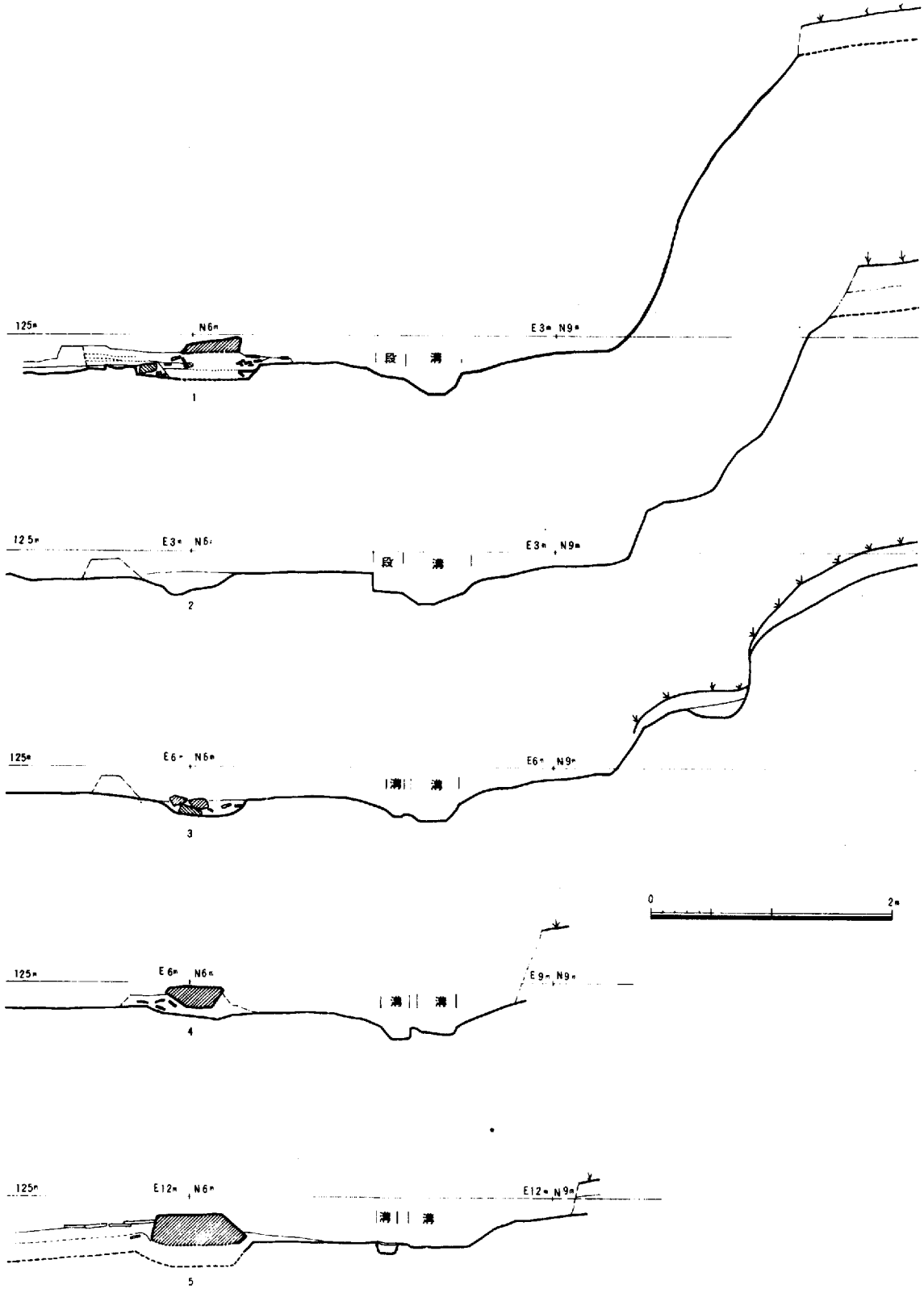
㊼ 茶褐色砂質粘土，赤く焼けた石あり



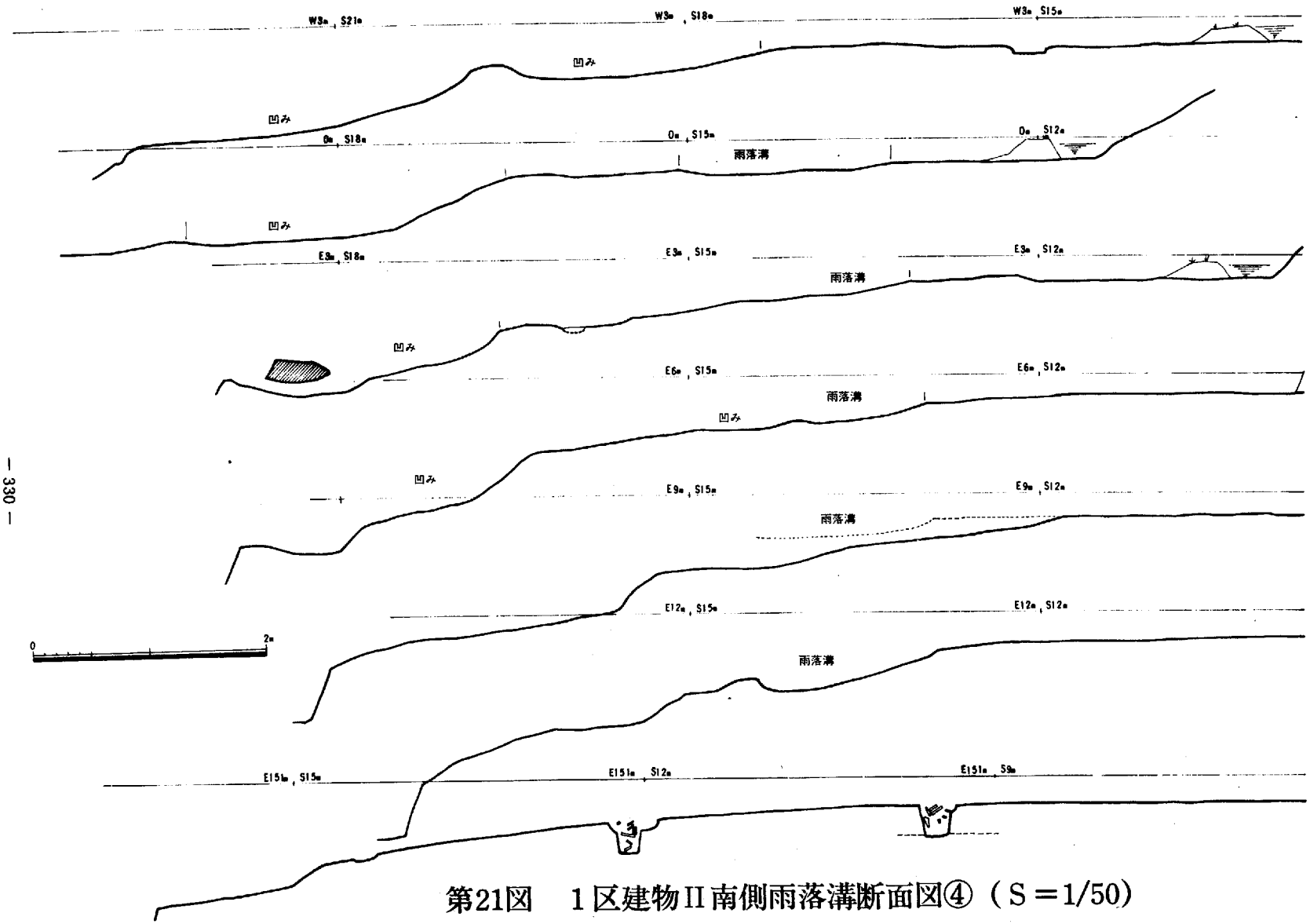

第18図　建物II西側雨落溝断面図①（S＝1/50）



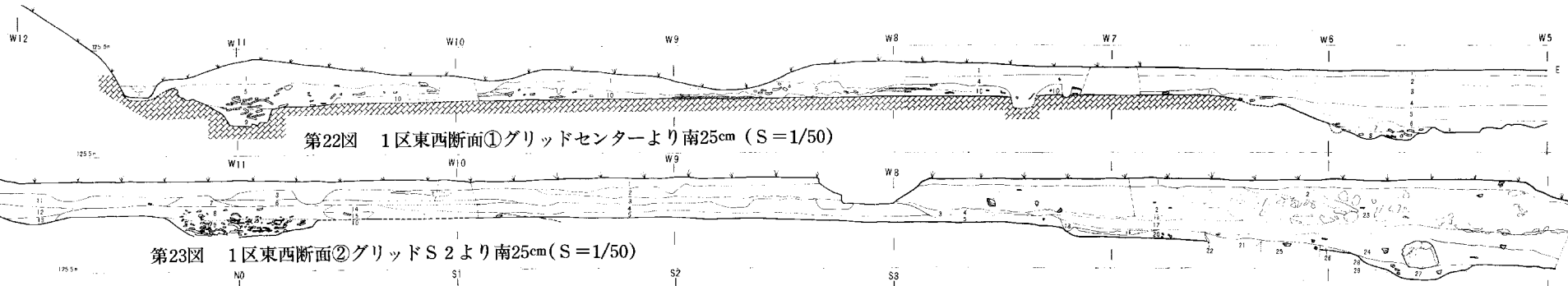

第19図　1区建物II東側雨落溝断面図②（S＝1/50）




第20図　1区建物II北側雨落溝断面図③（S＝1/50）



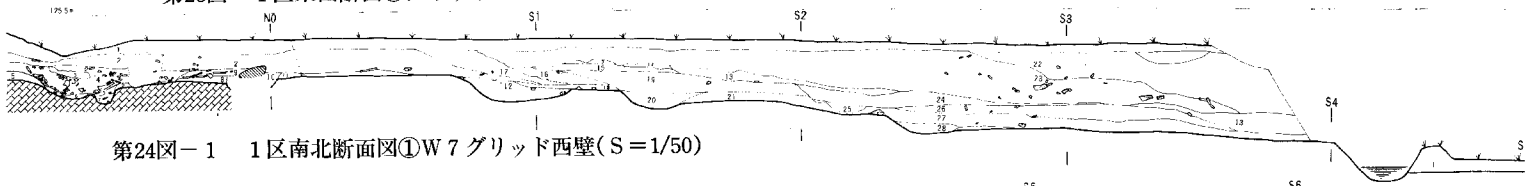

第21図　1区建物II南側雨落溝断面図④（S＝1/50）



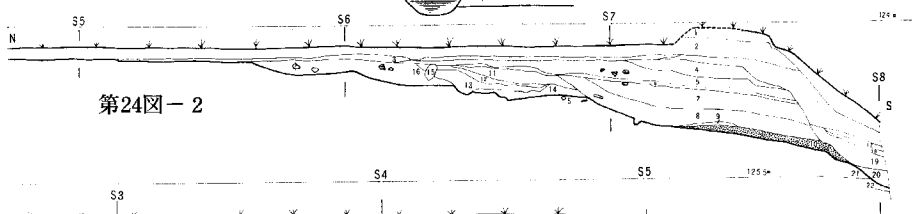

第22図　１区東西断面①グリッドセンターより南25㎝（Ｓ＝1/50）



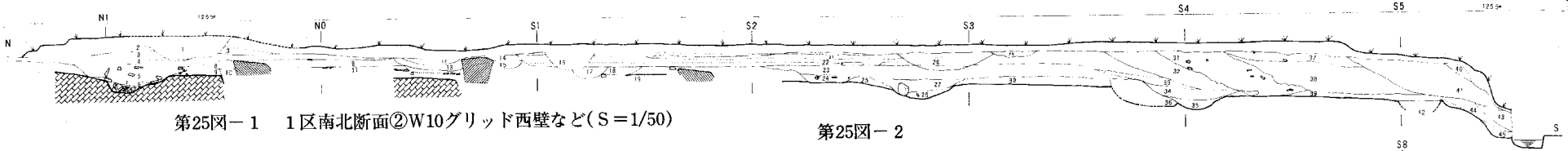

第23図　１区東西断面②グリッドＳ２より南25㎝（Ｓ＝1/50）




第24図－１　１区南北断面図①Ｗ７グリッド西壁（Ｓ＝1/50）

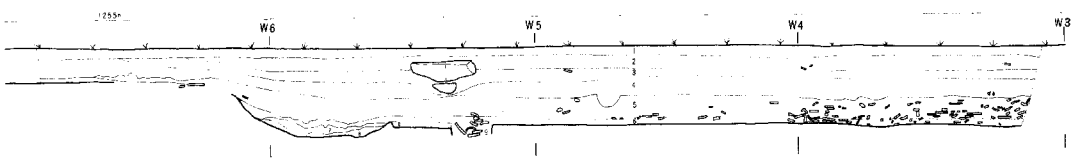


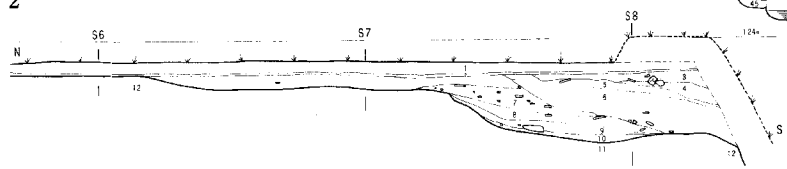

第24図－２




第25図－１　１区南北断面②W10グリッド西壁など（Ｓ＝1/50）

第25図－２




第26図　１区建物Ⅱ北東部分より東西トレンチ（Ｓ＝1/50）

## 第22図　1区建物Ⅱセンター東西断面図　①

1. 表土茶褐色
2. 茶　　色
3. 千板岩黒褐色粘土
4. 黒褐色粘土層
5. 茶褐色粘土層
6. 灰褐色粘土層
7. 灰色粘土
8. 上層が黄色粘土下は砂質灰色土
9. 灰色味強い粘土（明確に分離できない）
10. 黄色粘土
11.

## 第23図　1区建物ⅡS2東西断面図　②

1. 表土層
2. 茶褐色粘泥（混黄灰泥土）
3. 黄色泥土層
4. 淡茶褐色粘泥層（混薄灰色）
5. 淡茶褐色粘泥層（泥灰色小Mn）
6. 淡茶色泥土（鉄分）
7. 灰茶褐色砂泥
8. 茶褐色粘泥（混細砂礫Fe分）
9.
10. 地山千枚岩
11. 黄色泥土層（混細砂礫）
12. 灰黄色砂泥（混礫）
13. 灰白色粘泥（混小礫）
14. 淡褐色泥土層（混礫）
15. 溝？
16. 黄色泥土層（混細砂礫　左が明るい黄色）
17. 黄色泥土層（混細砂礫　左が明るい黄色（南北壁$B^{1\prime\prime}$と同一層））
18. 淡黄褐色細砂層
19. 淡茶灰色粘泥（江戸期？　溝底部浸透層）
20. 茶褐色粘土層（含Mn結核）
21. 黄色砂泥
22. Mn結核
23. 黄色泥土．茶褐色粘土．淡黄色粘土混土層
24. 淡茶褐色粘泥層
25. 茶褐色粘土層（ピット）
26. 黄色泥土（Kか）
27. 茶褐色粘土層（混瓦礫）
28.
29. 地山（黄色）

## 第24図－1　1区建物ⅡW7南北断面図　①

1. 表　　土
2. 茶褐色砂質粘土層（含Mn結核）
3. 黄色粘土塊
4. 茶褐色粘泥（@より少し明るい）
5.
6. 黄灰色砂土
7. 灰黄色砂質粘土（第1次基壇）
8. 茶褐色粘泥（やや黒味多し）
9. 灰白色砂質粘土
10.
11. 茶褐色粘土（黄灰色混り）
12. 灰黄褐色粘泥（溝？）他所では茶褐色これは抜取り跡内か？
13. $B_1$ 黄色泥土層
14. $B_1$ 黄色泥土層と$B_1'$ 淡茶色泥土（含Fe）の中間色泥土
15. 淡茶色泥土（含Fe）
16. $B_1'$ 黄褐色砂質混土（溝か？）
17. $B_4$ 灰茶色砂泥（含4枚岩）
18. 灰黄色細砂層
19. 淡茶褐色粘泥層（含細砂）
20. 茶褐色粘泥（含細砂）
21. 灰黄色粘土（含Mn結核）$B_5$ ？
22. $A_8$ 淡黄灰色泥土（泥細砂）
23. 茶褐色粘泥（混黄灰色泥土．瓦礫．細砂）
24. $B_1''$ 黄灰色砂泥
25. $B_1'''$ 灰黄色粘土層
26. $B_2$ 淡茶褐色粘泥層（含細砂）
27. $B_3$ or $B_5$ 淡茶褐色粘泥層（$B_2$ よりやや黒み）
28. 灰茶褐色粘土層（平安期溝か？）（含瓦細片）

## 第24図－2　1区建物ⅡW7
## 南北断面図②

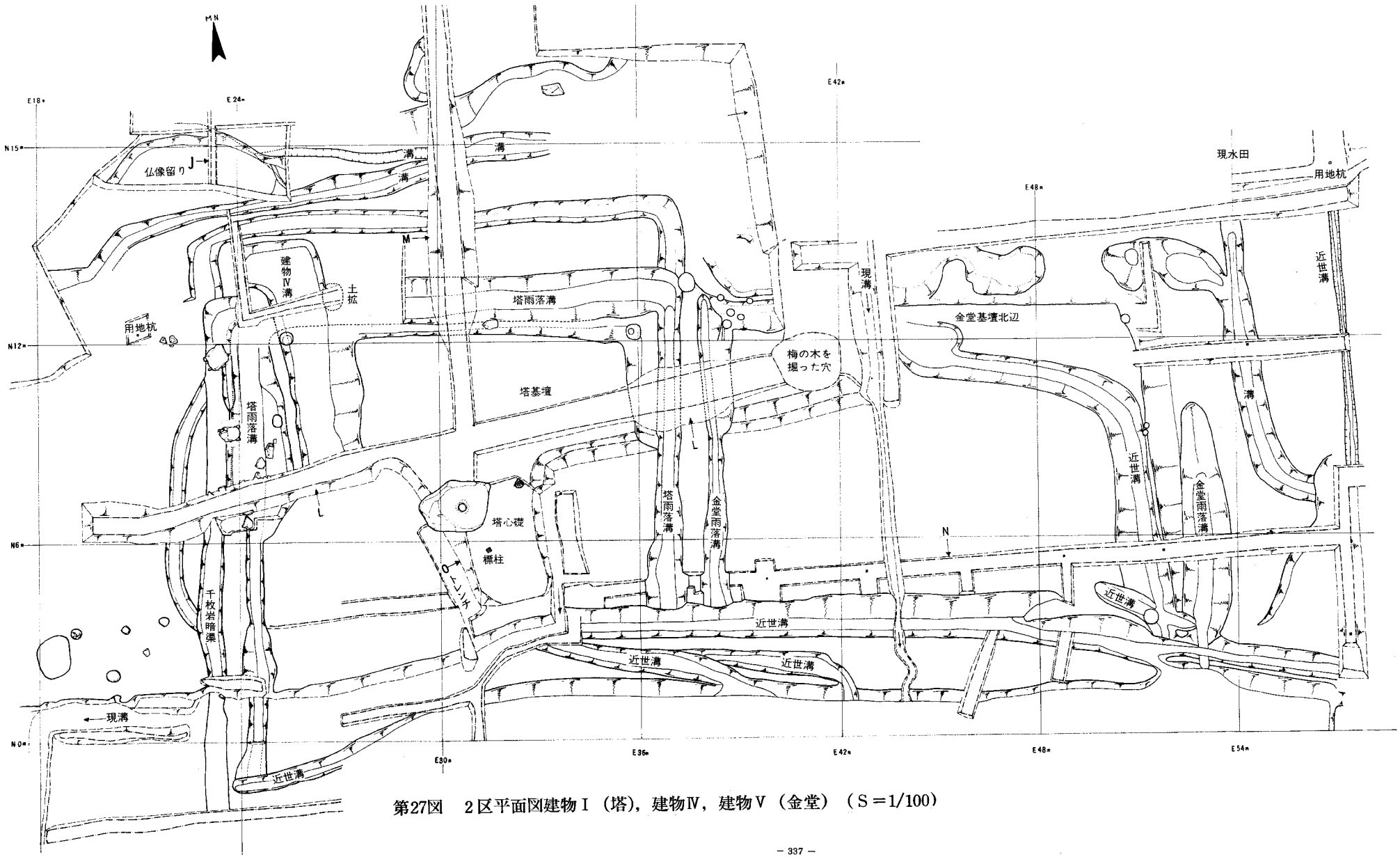
1. 畝
2. 灰　色　土
3. 酸　化　鉄
4. 灰色黄ブロック混入土
5. 灰色黒黄ブロック混入土
6. $B_1$ 灰色微砂層
7. $B_1'$ 褐色土層
8. 灰褐色土（含マンガン少々）
9. 灰褐色土層（含マンガン）
10. 灰色千枚岩$B_4$
11. 茶灰褐色土（含マンガン粒）$B_5'$
12. 茶褐色土層$B_5^2$（含黒色土ブロック．マンガン粒）
13. 淡黄褐色土層（含マンガン粒）$B_5^3$
14. 茶褐色土層（含マンガン粒）$B_5^4$
15. 暗　　渠
16. 基壇か？
17. 褐色黄ブロック混入土
18. 灰色黒ブロック混入土
19. 灰色土（含マンガン粒多数）
20. 灰色土（小礫混入）
21. 黒灰色土（含マンガン粒粗砂小礫混入）
22. 黒色土（粗砂混入）

## 第25図－1　1区建物ⅡW10
## 南北断面図　①

1.
2. $A_1$
3. 灰黄色粘泥層
4. 黒灰色粘泥層（混入物ほとんどなし）
5. 黒灰色粘泥層（瓦片千枚岩小塊混り）
6. 灰黒色砂層　（千枚岩極小片混り）
7. 千枚岩の小塊層
8. 暗褐色粘泥
9. 暗灰色砂泥
10. 黄色粘土
11. 黄褐色粘泥
12. $A_1'$ 灰白色砂泥
13. 灰黒色粘泥
14. 淡茶褐色砂泥
15. 攪乱層（平安）
16. 黄白色砂泥
17. 暗茶褐色砂泥
18. 茶褐色砂泥
19. 黄　　色
20.
21. $A_3$ 茶褐色
22. $B_1$ 黄白色泥土（Fe分多し）
23. 淡茶褐色粘泥層$B_2$
24. 灰茶褐色砂泥（含Mn結核）平安末溝か？
格子目叩き．須恵質土器出土
25. 茶褐色砂泥（混黄色）基壇？
26. 灰黄色砂泥
27. 灰褐色砂質粘土
28. 灰白色粘土
29.
30. 淡茶褐色泥土層$B_3$ 又は$B_5$
31. $A_3$ 茶褐色（混瓦礫）
32. 黄褐色砂泥（混細礫）
33. $B_1'$ 黄灰色砂混
34. 灰黄色砂質粘土
35. 灰白色粘土
36. 灰褐色砂粘（混黄色）
37. $A_3$ 黄白色砂泥
38. $A_3$ 淡黄灰色砂泥
39. 淡灰黄色粘泥
40. 黄白色砂泥$A_3$
41. $A_3$ 茶褐色（混瓦礫）
42.
43. $A_3'$ 暗灰黄色泥土
44. 暗灰色砂泥$A_3'$ 又は$B_1'$
45. 灰白色粘土（$A_3'$）又は$B_1'$ ？

## 第26図　1区建物Ⅱ
## 東西トレンチ

1. $A_1$
2.
3. $B_4$
4. $B_5$

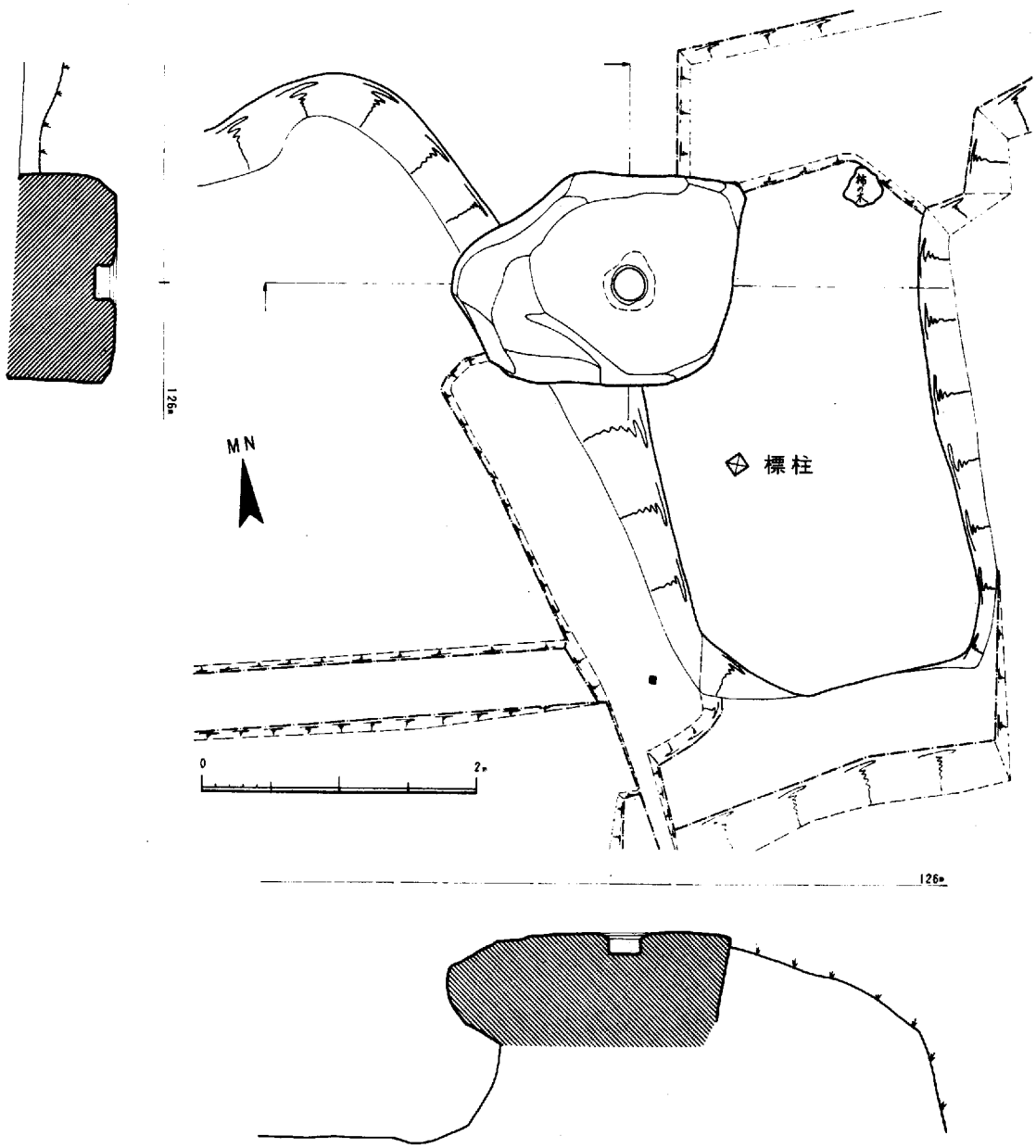



第27図　2区平面図建物Ⅰ（塔），建物Ⅳ，建物Ⅴ（金堂）（S＝1/100）

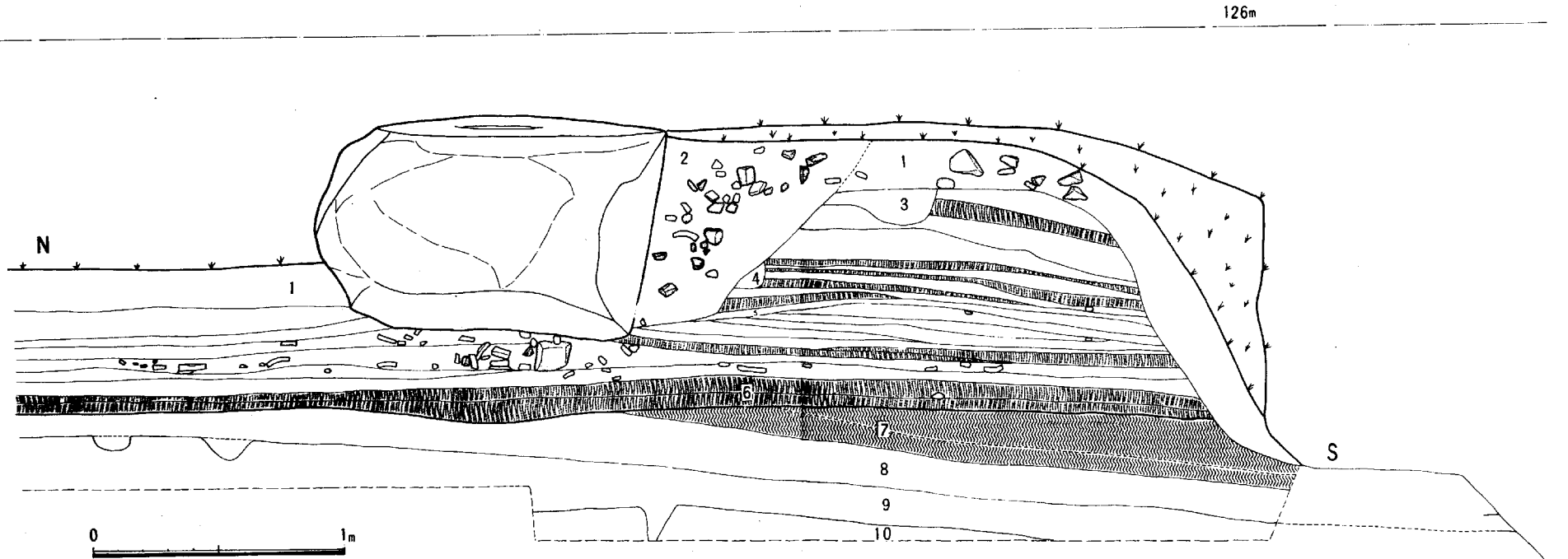
5.
6. 茶褐色混灰色微砂層
7. 黄色粘土
8. 灰色砂層

## 第25図－2　1区建物ⅡW10
## 南北断面図　②

1. 水田面
2. 酸化鉄層
3. 黄褐色土層（含礫．地山ロック）地山を削って盛土とした層である。
4. 灰褐色微砂層（含粗砂小礫）
5. 灰色微砂層（含粗砂）
6. 褐色微砂層B層（5㎜前後の粗砂を多く含んっとも多い層）
7. 茶褐色土層$B_3$（こまかいマンガン粒．粗砂礫．瓦片．瓦片粒を含んでいる．マンガンがもとも多い層）
8. 灰黄褐色土層（マンガン粒を含む）
9. 灰褐粘質土層$B_5^2$（大きいマンガン粒がみられる）
10. 灰色粘土層（小まかいマンガン粒を含む）
11. 地山は黄色粘土
12. 地山は礫



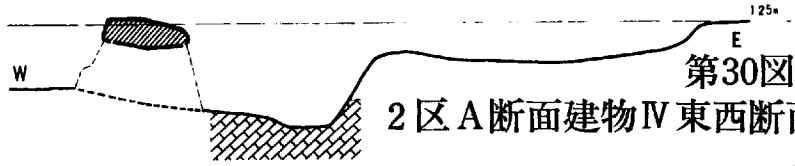

第28図　2 区 塔 心 礎 実 測 図



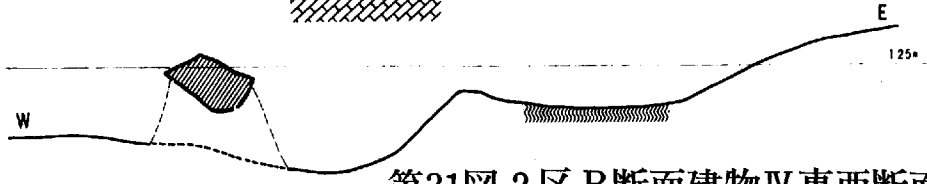

## 第29図　2区塔基壇断面図（S＝1/20）

第29図　2区塔基壇断面図

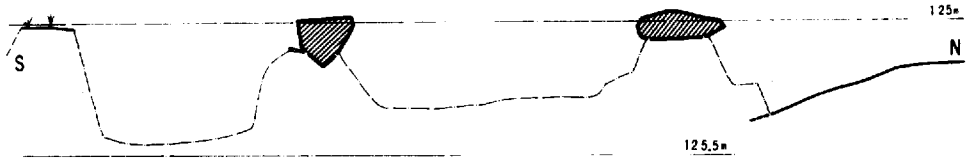
1. 表土（茶褐色）
2. 近代攪乱，掘り方（茶褐色土）
3. 攪　　乱
4. 攪　　乱
5.
6. 最初の整地土層
7. 黒色土層（表土）｛上部は真黒色をする。下部は茶褐色をする未分解の土？
8. 黄褐色土層（茶褐色　土が混在するマンガン　地山漸移層
9. 黄褐色土層（マンガン結晶地　山
10. 黄色土層（地山）

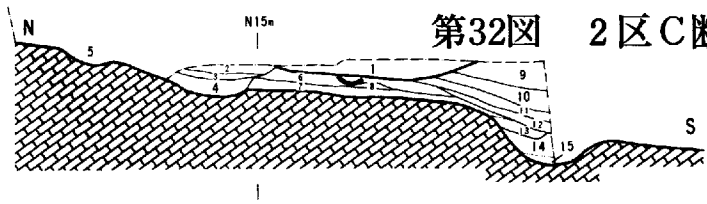



第30図
2区A断面建物Ⅳ東西断面図



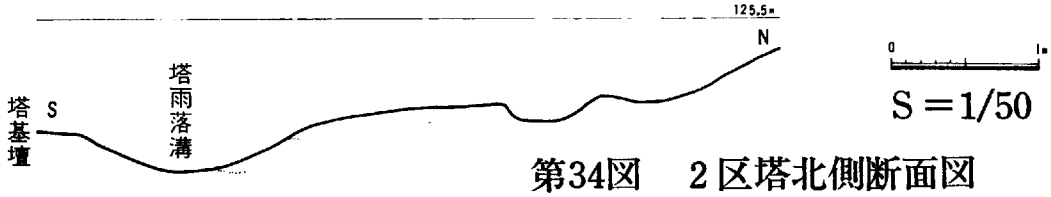

第31図 2区B断面建物Ⅳ東西断面図



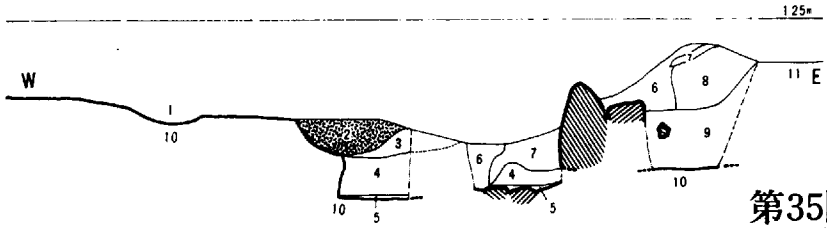

第32図　2区C断面建物Ⅳ南北断面図

第33図　2区D断面図

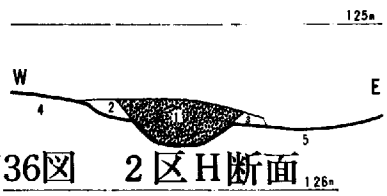



S＝1/50

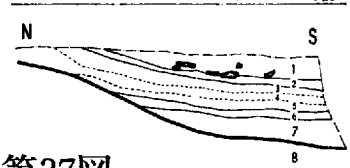
第34図　2区塔北側断面図



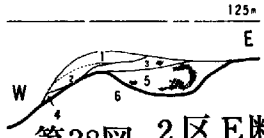

第35図　2区Ⅰ断面



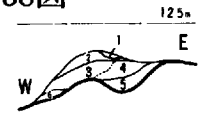

第36図　2区H断面



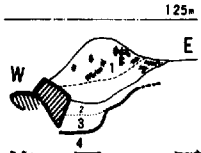

第37図
2区塑像仏留り南北断面図



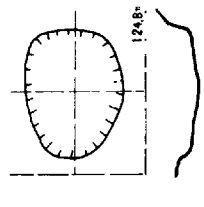

第38図　2区E断面




第39図　2区F断面




第40図　2区G断面




第41図
2区土拡実測図

## 第32図　2区C断面図

1. 茶褐色土層（瓦炭含）
2. 暗茶褐色土層
3. 淡黄褐色（黄色土混）土層
4. 黒褐色マンガン質土層
5. 
6. 茶褐色土層（瓦含）
7. 茶褐色（黄色地山，土混）土層
8. 黄　色　土
9. 暗茶褐色風化千枚岩，瓦混土層
10. 茶褐色（瓦炭含）
11. 茶褐色（瓦炭含）　} ほとんど差なし
12. 灰茶褐色（マンガン質結核とやや砂質）土層
13. 黄色千枚岩主体土層
14. 黒褐色マンガン質土層
15. 下層（岩盤の直上）は千枚岩混りの灰黒色のグライ化した土層である

## 第35図　2区I断面

1. 溝
2. 千　枚　岩
3. 黄茶褐色ジャリ混り土層
4. 黒灰色グライ化土層
5. 灰色砂質土質
6. 黄褐色土層（ジャリ）このジャリ化は部分的なもの
7. 黒茶褐色粘質土層
8. 淡黄褐色土層（黄色土混）
9. 黒茶色グライ化土層
10. 黄褐色地山土
11. 黒色土層（マンガン質）

## 第36図　2区H断面

1. 千枚岩溝
2. 
3. 黒（褐）色マンガン質土層
4. 黄褐色地山
   黄褐色岩盤地山

## 第37図　2区塑像仏留り南北断面図

1. 茶褐色有機土（仏像含，瓦多し）
2. 灰茶褐色土
3. 
4. 幾分暗い
5. 明黄茶褐色土
6. 灰茶褐色土
7. 黄茶褐色土（瓦含む）
8. 岩　　磐

## 第38図　2区E断面

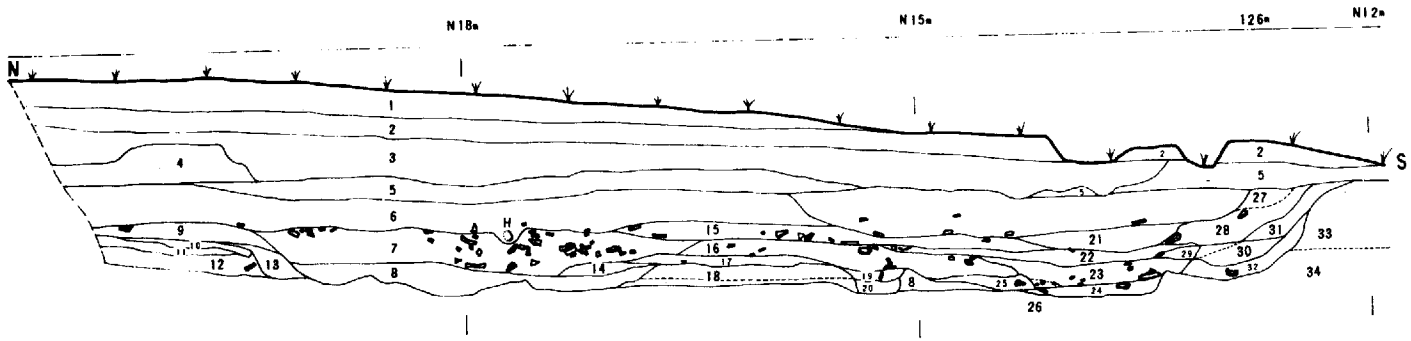
1. 淡黄褐色土層（瓦含）
2. 淡黄褐色土層（やや砂質）
3. 黒褐色土層（土器含）
4. 黒褐色土層（炭含）
5. 黒色マンガン質土層（黄色地山土混り）
6. 黄色土層（地山）

## 第39図　2区F断面

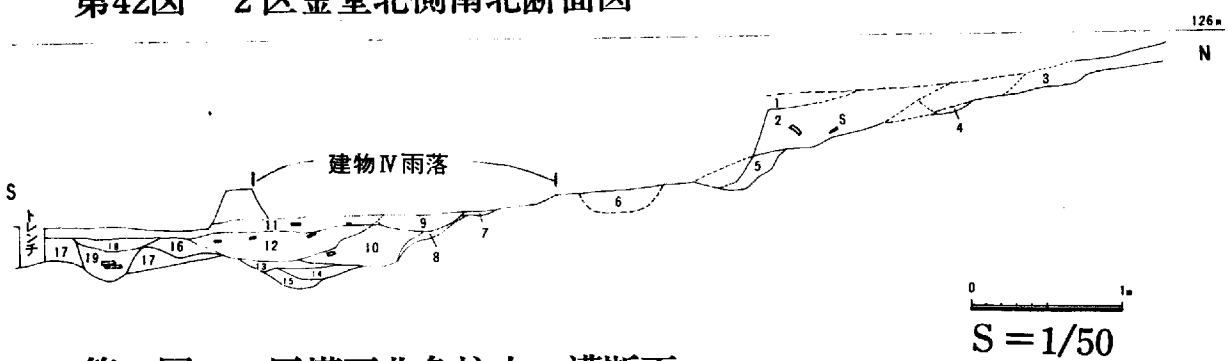
1. 黒褐色土層（マンガン質）
2. 黄褐色土層（瓦含）
3. 淡茶褐色土層（土器含）
4. 黒褐色土層（マンガン質）
5. 暗黒褐色マンガン質土層
6. 暗黒褐色土層

## 第40図　2区G断面

1. 全体として淡黄褐色土層（混）
2. 黒褐色土層（マンガン質）
3. この辺は灰黒色でグライ化している
4. 黄茶褐色土層（地山か？）




第42図　２区金堂北側南北断面図



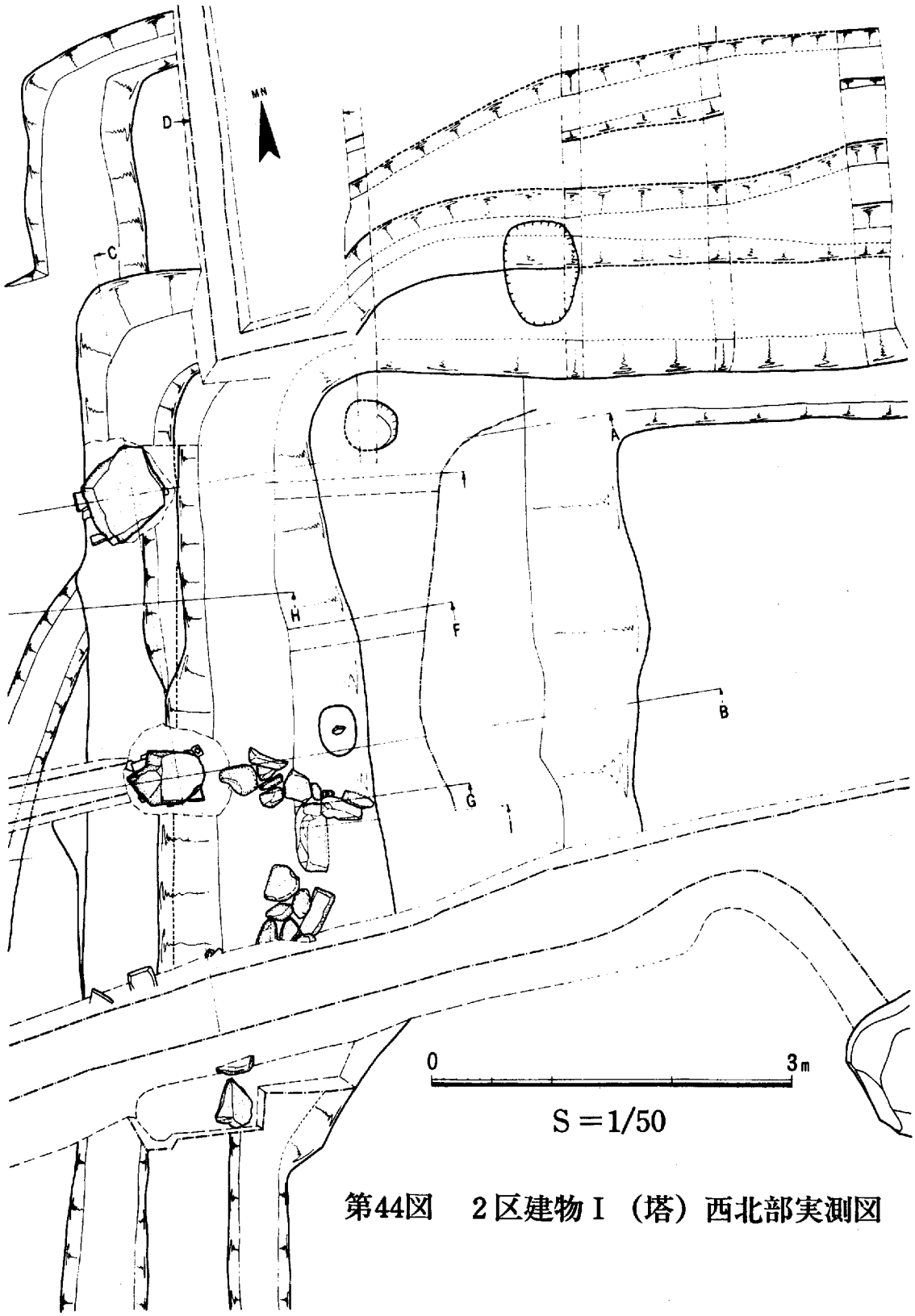

第43図　２区塔西北角柱穴・溝断面

## 第42図　2区金堂北側南北断面図

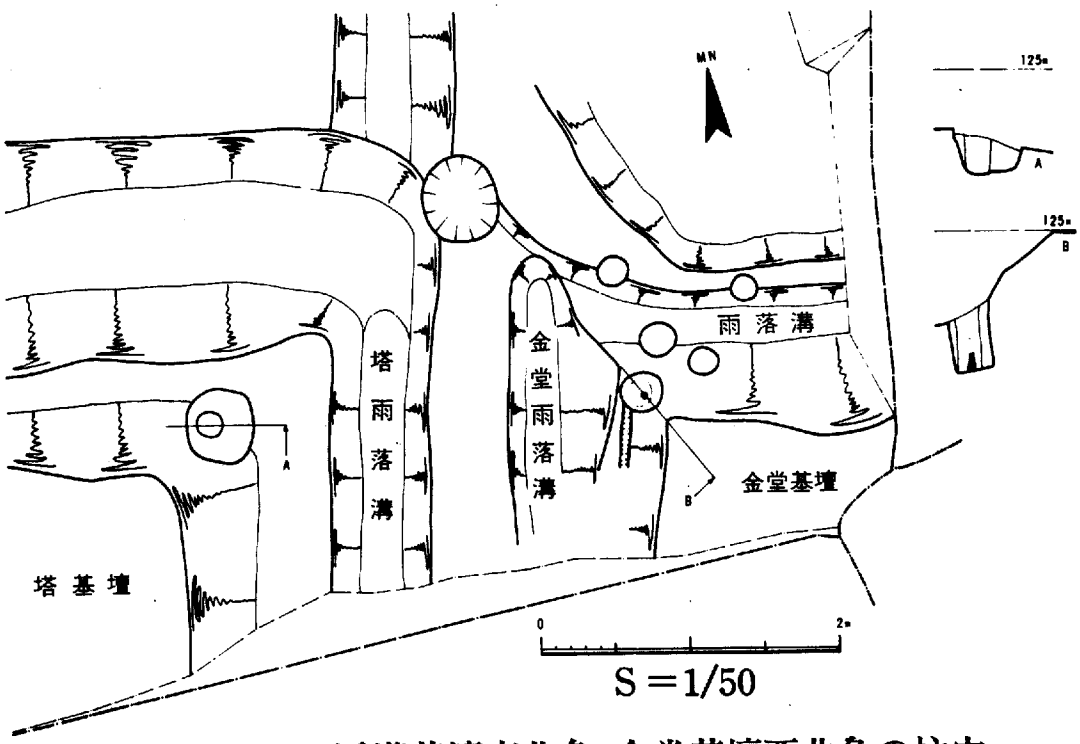
1. 新　耕　土
2. 旧　耕　土
3. 暗茶黄色粘質泥土
4. 淡黄茶色粘土
5. 淡茶黄色粘土
6. 茶褐色砂質粘土（混焼土少量）（平安期）
7. 黄茶褐色粘土（含Mn小斑点）
8. 灰褐色粘土
9. 淡茶黄色砂質粘土
10. 茶褐色粘土
11. 黄褐色粘土
12. 淡茶褐色粘土
13. 淡茶色粘土
14. 灰褐色粘土
15. 淡茶黄色砂質粘土
16. 黄茶色砂質粘土
17. 黄茶灰色粘土
18. 黄灰褐色粘土（版築？）
19. 灰黄色粘土
20. 褐色粘土
21. 淡黄褐色砂質粘土（焼土層）（混炭細片）
22. 淡茶褐色砂質粘土
23. 灰黄色粘土
24. 黄褐色粘土
25. 黄褐色粘土
26. 黄褐色粘土（やや明るい）
27. 焼　土　層
28. 暗茶黄色砂質粘土
29. 灰黄色粘土（やや砂質）
30. 淡黄褐色粘土
31. 淡黄茶色粘土（暗い）
32. 淡黄茶色粘土（やや明るい）
33. 版　　築
34.

## 第43図　2区塔西北角柱穴・溝断面

1. 塑像仏溜り

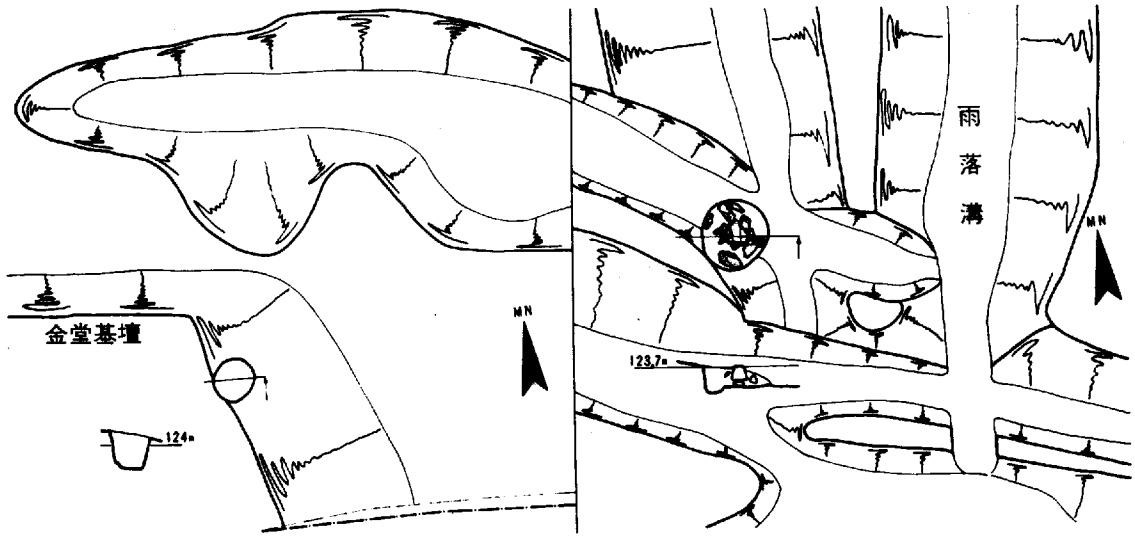



第44図　2区建物Ⅰ（塔）西北部実測図




S＝1/50

第45図　2区塔基壇東北角・金堂基壇西北角の柱穴

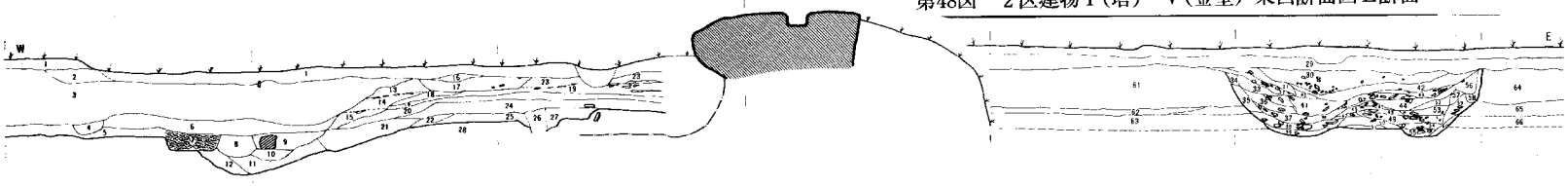


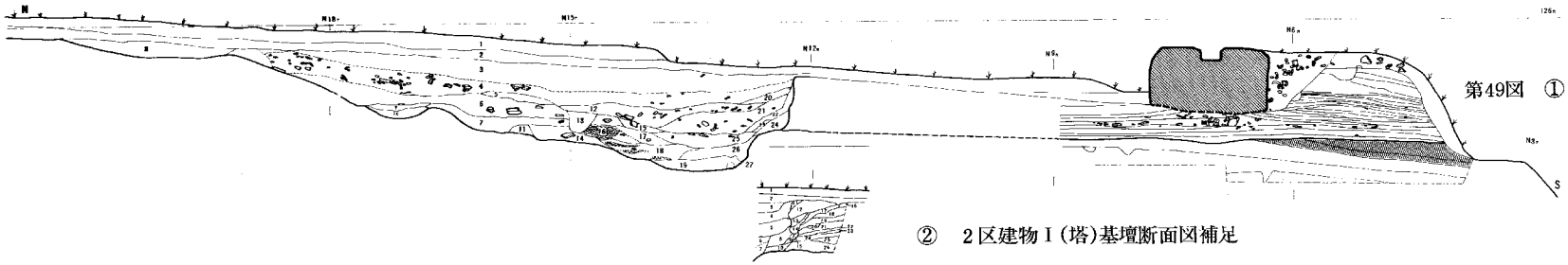

第46図
2区建物Ⅴ(金堂)東北角柱穴




第47図
2区建物Ⅴ(金堂)東南角柱穴

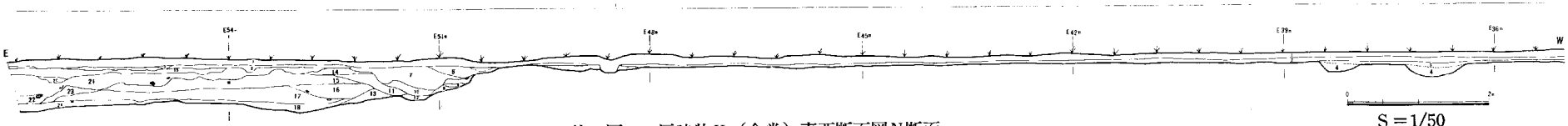
第48図　２区建物Ⅰ（塔）・Ⅴ（金堂）東西断面図Ｌ断面





第49図　①　２区建物Ⅰ（塔）南北断面図Ｍ断面

②　２区建物Ⅰ（塔）基壇断面図補足



第50図　２区建物Ⅴ（金堂）東西断面図Ｎ断面

S＝1/50

## 48図　建物Ⅰ（塔）建物Ⅴ東西断面　L断面

1.
2. 淡茶灰色砂質泥土
3.
4. 暗灰色粘土
5. 暗褐色粘土（含千枚岩小班点）
6. 淡茶黄色砂質粘土（含瓦小片）
7. 千枚岩暗渠
8. 黄茶褐粘土
9. 黄茶色粘土（雨落溝）
10. 灰黒色粘土（黄色小班点あり）
11. 黒灰色粘土
12. 黄茶色砂質粘土
13. 黄色粘土
14. 黄色粘土
15. 淡茶色粘土
16. 淡茶色泥土
17. 茶色砂質泥土（建物Ⅳ雨落溝）
18. 褐色粘土
19. 淡黄茶色砂質粘土
20. 褐色粘土層
21. 淡茶黄色細砂土
22. 淡黄茶色粘土
23. 淡黄茶色砂質粘土（黄色班点千枚岩小片）
24. 淡褐色粘土
25. 黄色粘土（暗くよごれている）
26. 褐色粘土
27. 黄褐色粘土
28. 黄色粘土（含Mn小結核）
29. 暗黄色砂質泥土（やや明るい）
30. 暗茶褐色焼土層（混炭片，瓦片）
31. 淡茶色砂質粘土
32. 淡黄茶色粘土（やや暗い）
33. 黄色粘土（含千枚岩小片）
34. 淡黄茶色粘土
35. 淡黄茶色粘土
36. 黄茶灰色粘土
37. 黄褐色砂質粘土
38. 黄灰色粘土層
39. 黄褐色粘土層
40. 黄灰色砂質粘土（やや暗い）
41. 黄灰色砂質粘土
42. 淡茶色砂質粘土
43. 淡茶黄色砂質粘土
44. 黄色粘土
45. 淡黄色茶色粘土（上やや暗い）
46. 黄茶色粘土
47. 灰黄色粘土
48. 淡黄茶色粘土（上やや暗い）
49. 灰黄色粘土
50. 淡茶黄色粘土
51. 淡茶色細砂層
52. 淡黄茶色粘土
53. 黄色粘土
54. 淡黄褐色粘土
55. 灰黄色粘土
56. 褐色粘土
57. 淡茶褐色粘土
58. 淡茶黄色粘土
59. 淡茶褐色粘土（Mn）
60. 黄褐色粘土
61. 塔基壇版築部（黄色粘土）
62.
63. 黄白色粘土（地山削り出し）
64. 金堂版築
65. 地山削り出し
66. 黄白色粘土

## 49図－1　1区建物Ⅰ（塔）南北断面　M断面

1. 新耕土
2. 旧耕土
3. 淡茶色砂質泥土（含　焼土片）
4. 淡茶黄色砂質泥土（含　炭小班点，焼土）
5. 黄色粘土（やや暗い）
6. 淡黄茶褐色粘土
7. 黄褐色粘土（炭を含む）
8. 淡茶褐粘土（混炭，焼土，黄色班点少量）
9. 黄白色粘土

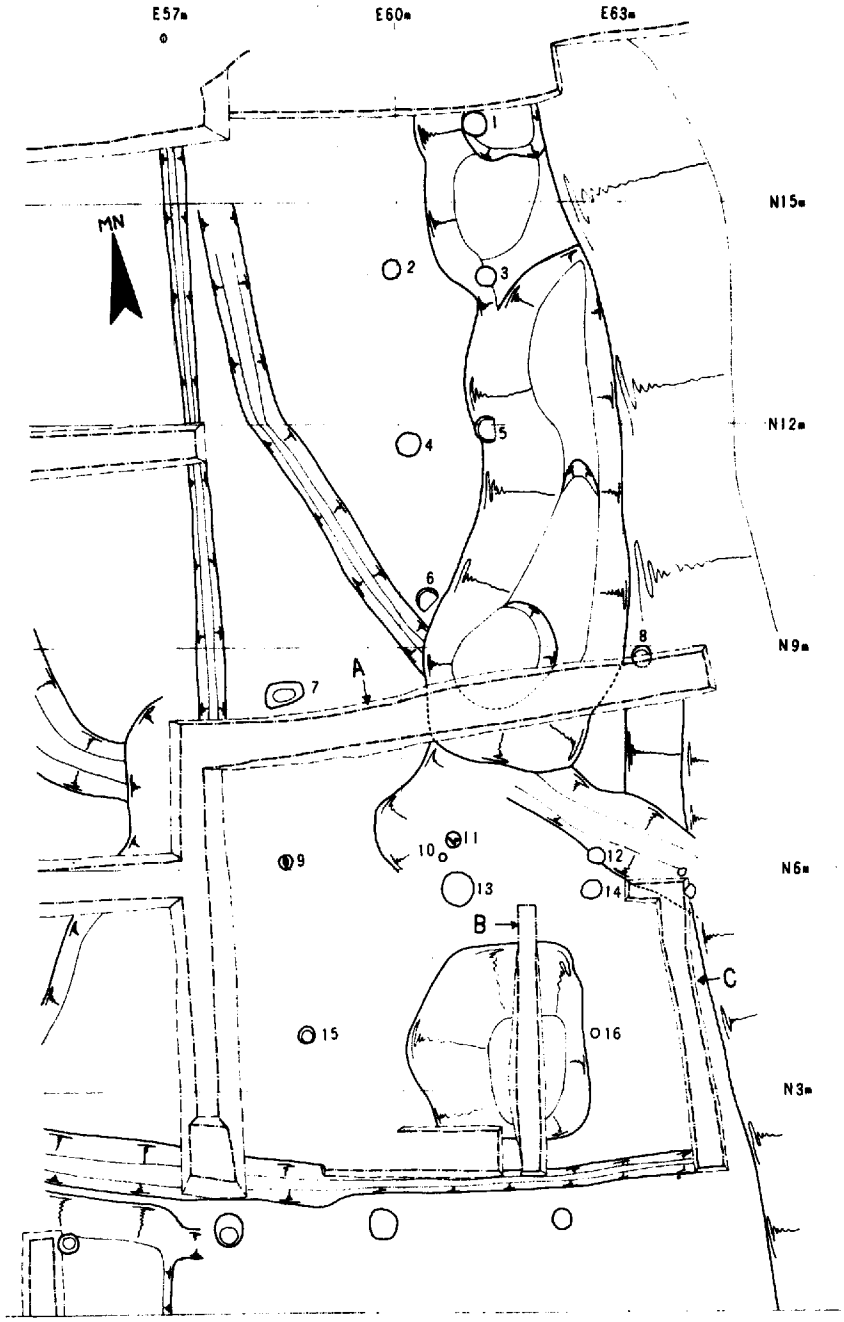
10. 黄褐色粘土
11. 黄色粘土
12. 淡黄茶色粘土
13. 黄灰茶色粘土
14. 黄褐色粘土
15. 灰黄褐色粘土
16. 黄色千枚岩
17. 灰褐色粘土
18. 褐色粘土
19. 暗褐色粘土
20. 淡茶黄褐色砂質泥土
21. 黄色粘土
22. 黄色粘土（暗い）
23. 黄灰色砂質粘土
24. 淡黄褐色砂質粘土
25. 灰白色細砂層（雨落）
26. 黄色粘土（含　千枚岩，小片）
27. 黄色粘土（地山）

## 49－2　久米廃寺2区建物 Ⅰ南北断面　基壇 部分補足

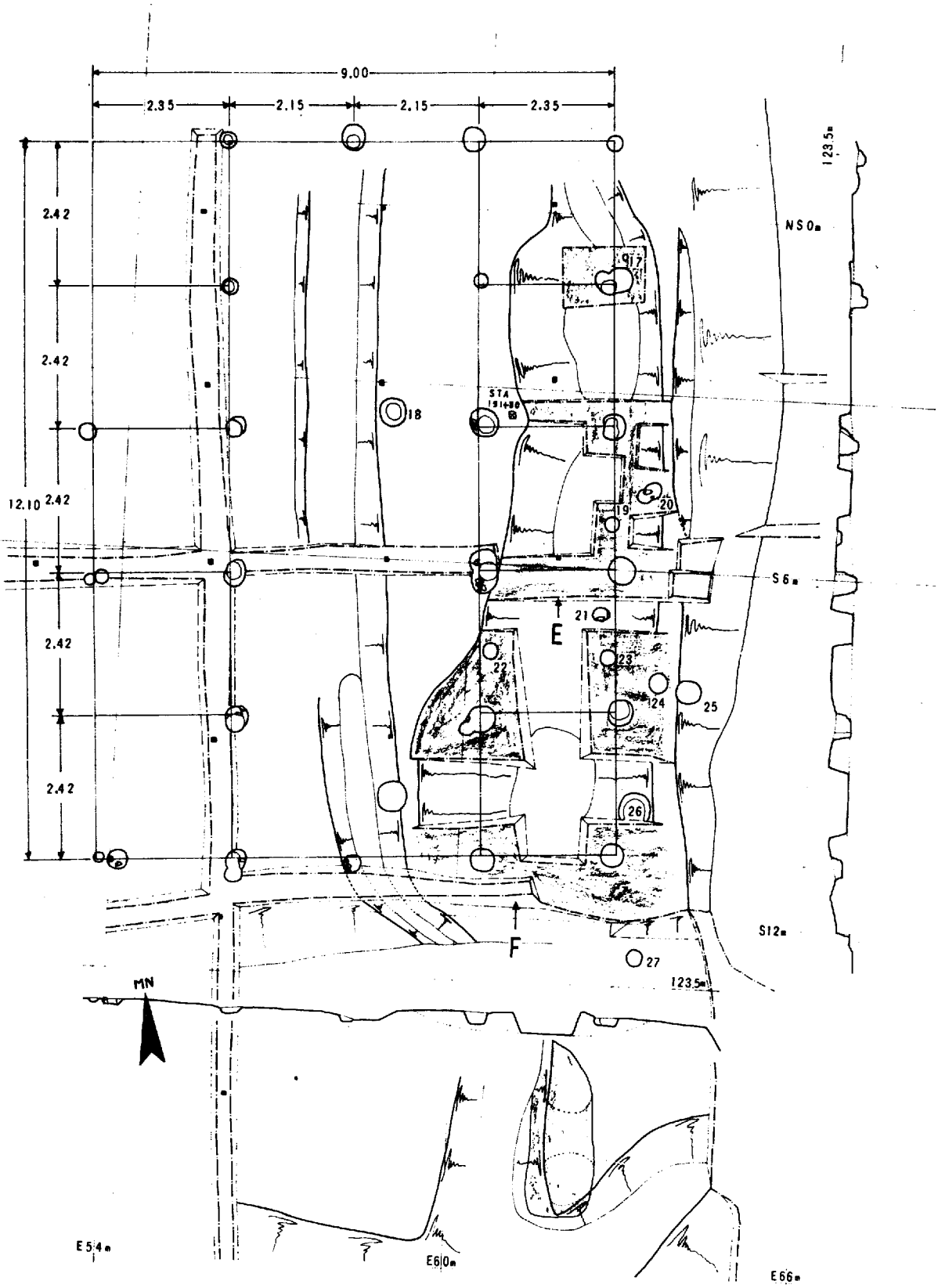
1. 灰茶色土層　すぐ乾く
2. 茶褐色土層（焼土，炭混り）
3. 茶褐色粘土（やや黒色強し）焼土，炭混り
4. 茶褐色粘土　黄色混り
5. 黄茶色粘土
6. 茶色粘土
7. 灰色粘土（雨落溝）
8. 黄褐色粘土（左の格子目の方にはマンガン結晶多し）
9. 黄褐色粘土　黒味強し
10. 灰黒色粘土　マンガン多し
11. 黄色4：茶褐色6
12. 黄色粘土がほとんど白色粘土少し
13. 黄色8：黒色2
14. 黒色粘土9：黄色1
15. 黄褐色粘土　やや明るい色
16. 黄色粘土
17. 黄色粘土5：茶色粘土5（細い粒になっている）
18. 黄色粘土4：黒色粘土2：茶色粘土4
19. 黄色粘土
20. 
21. 黒色粘土6：黄色4
22. 黄色9：黒色1
23. 黒茶色8：黄色2
24. 黄色6：黒茶色4
25. 黄色1
26. 黄茶褐色粘土（すぐ下の地山）6：黒茶色粘土4

## 50図　建物Ⅴ　東西断面図　N断面

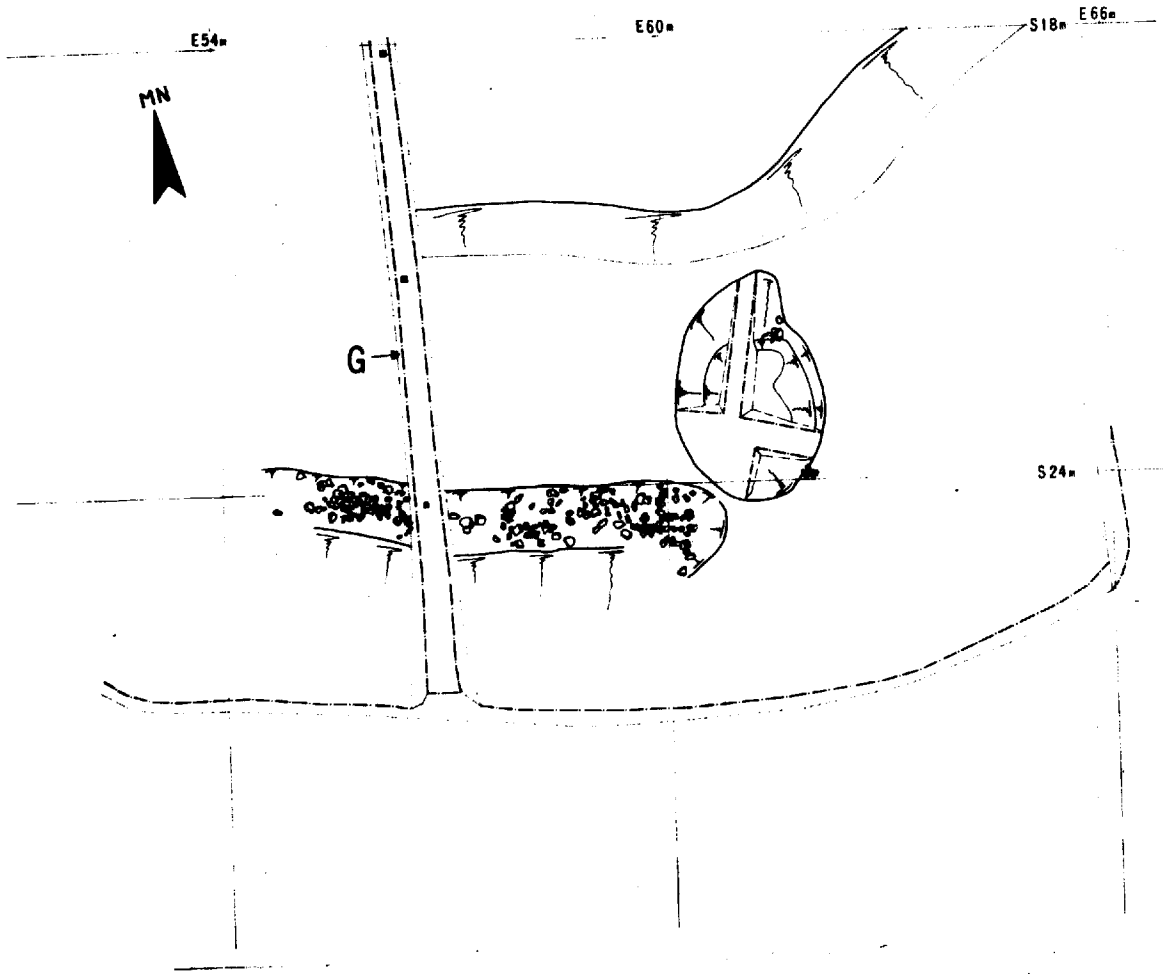
1. 耕土
2. 茶褐色鉄分層
3. 淡茶褐色砂質粘土
4. 
5. 灰色泥土
6. 黄白色粘土
7. 茶褐色粘土層（混，瓦細片，炭，焼土）
8. 淡茶色粘土
9. 黄白色粘土
10. 淡茶褐色粘土
11. 暗茶黄色細砂
12. 淡灰茶色粘土
13. 淡茶黄色焼土層
14. 灰色砂質泥土
15. 淡茶黄灰色砂質粘土
16. 暗茶灰色砂質粘土
17. 淡茶黄色砂質粘土
18. 淡茶灰色粘土
19. 灰色砂質泥土
20. 黄茶色細砂（地山をほってきている）
21. 茶褐色粘土層
22. 淡黄色粘土ブロック
23. 暗茶黄色細砂



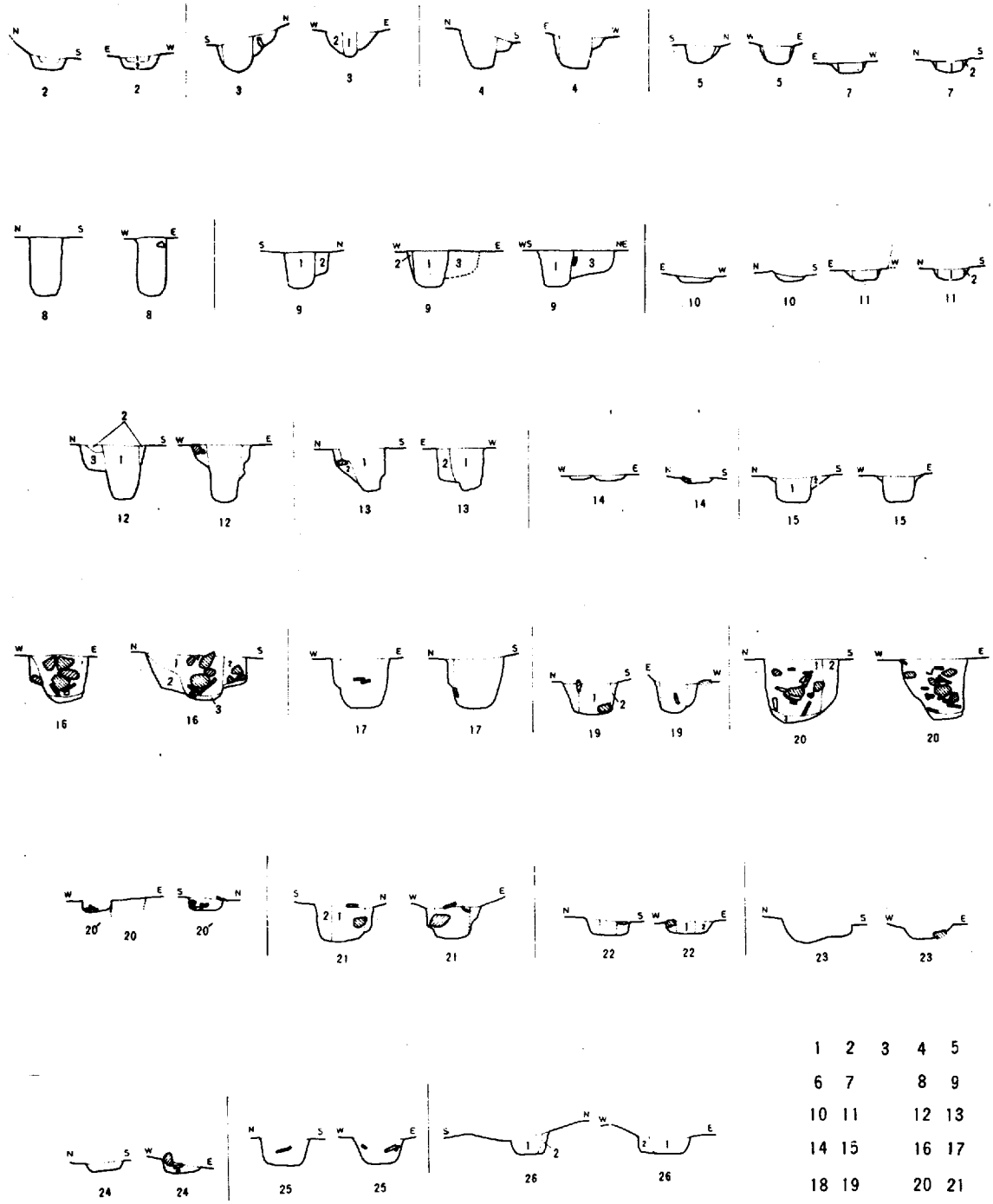

第51図　3 区 実 測 図 ① (S＝1/100)




第52図　3区実測図②建物Ⅶ（S＝1/100）



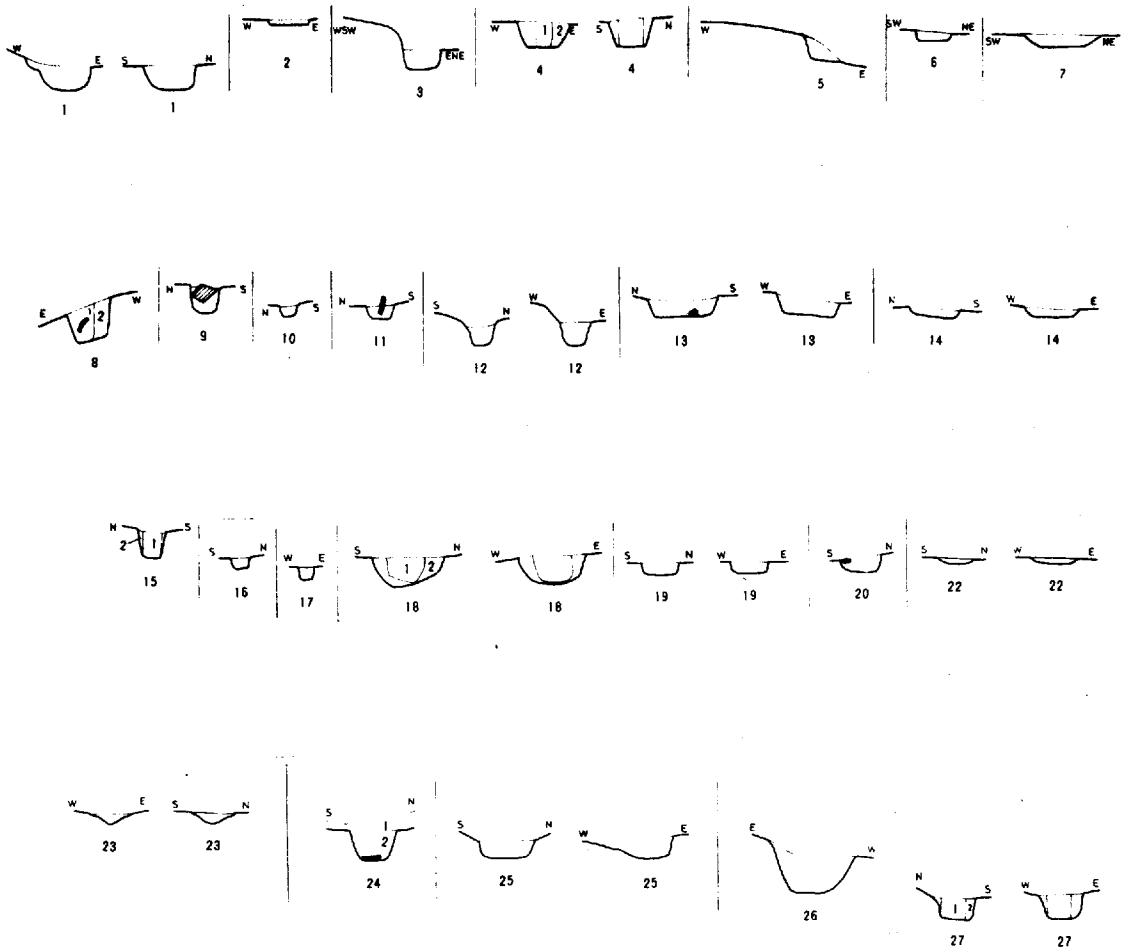

第53図　3 区 実 測 図 ③（S＝1/100）



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6 | 7 | | 8 | 9 |
| 10 | 11 | | 12 | 13 |
| 14 | 15 | | 16 | 17 |
| 18 | 19 | | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |

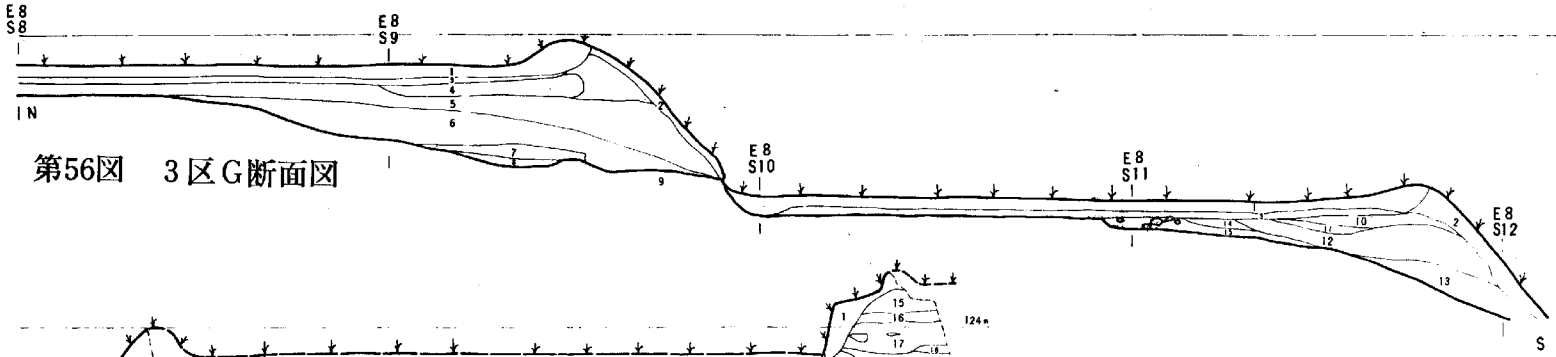
**第54図　3区建物Ⅶ柱穴断面集成図**

（S＝1/50，水糸L＝123.50m）

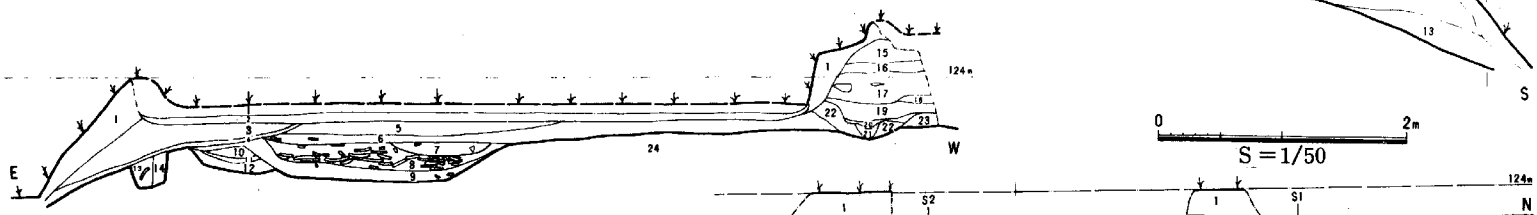


第55図　3区柱穴断面集成図

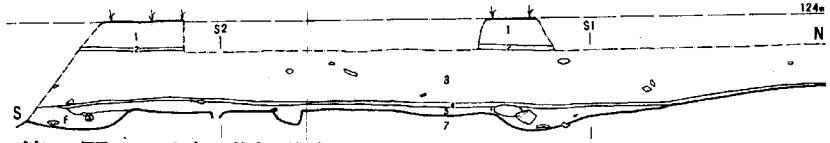
（S＝1/50，水糸L＝123.50m）



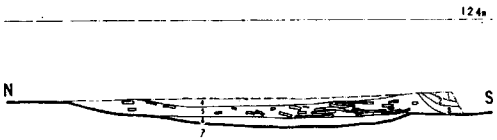

第56図　3区G断面図



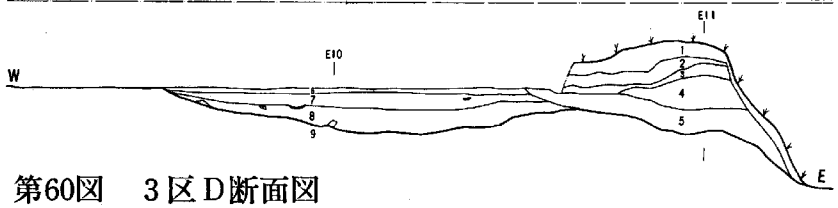

第57図　3区A断面図



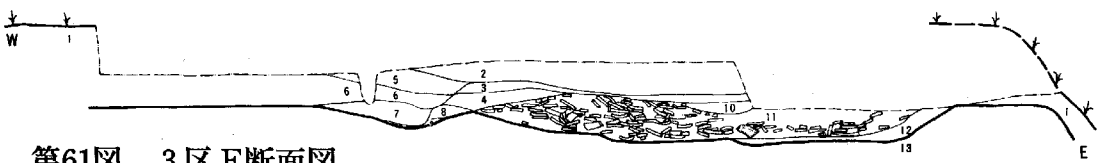

第59図　3区C断面図



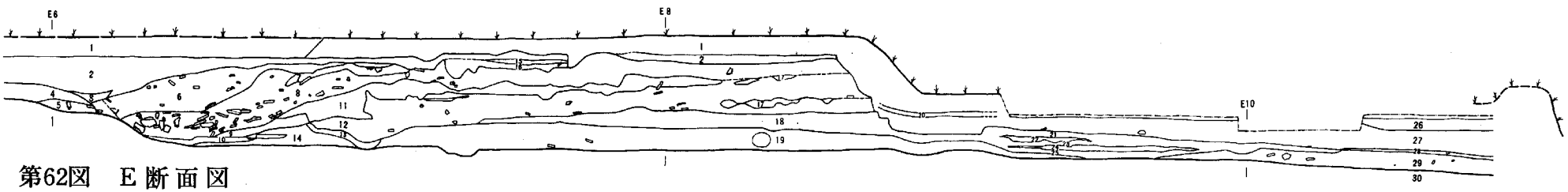

第58図　3区B断面図




第60図　3区D断面図




第61図　3区F断面図




第62図　E断面図

## 第54図　久米廃寺 3区建物Ⅶ柱穴断面図

1.
2.－①　淡灰黒粘土（炭含）
2.－②　白灰色粘土（混炭褐色土）
3.－①　柱穴灰褐色
3.－②　灰色
4.
5.
6.
7.－①　灰茶褐色やや粘質土（炭含）
7.－②　淡茶褐色土
8.　焼土，炭混り暗茶褐色粘土（柱痕？抜きとり？）
9.－①　暗茶褐色粘土，焼土炭混り（柱痕）
9.－②　黄褐色粘土（堀り方）
9.－③　黄褐色砂礫層
10.　淡灰黒色粘土質土
11.－①　茶褐色マンガン質（瓦炭含）
11.－②　淡茶褐色土
12.－①　暗褐色粘土，焼土炭混り（柱痕？）
12.－②　黒褐色粘土　炭化物焼土混り
12.－③　暗黄褐色粘土礫と炭混り
13.－①　暗茶褐色粘土　焼土炭混り(抜きとり？)
13.－②　黄褐色砂礫層（掘り方）
14.　灰黄褐色粘質土
15.－①　茶褐色マンガン質土（瓦炭含）
15.－②　淡茶褐色土
16.－①　抜きとり穴に石や瓦をつめた感じ，暗茶褐色粘土と粗砂，混り土層　灰黒色炭や焼土混り
16.－②　黄褐色粗砂混り茶褐色土層（掘り方）
16.－③　灰色砂質土層
17.　黒褐色土層（炭瓦を含）
18.
19.－①　茶褐色マンガン質土（瓦炭含）
19.－②　淡茶褐色土
20.－①　暗茶褐色粘土層　黒炭　灰混り
20.－②　茶褐色土層
20.－③　灰色砂質土層
20.′　灰黒色炭混り暗褐色粘土層
21.－①　黒茶褐色（瓦炭含）土層
21.－②　黄茶褐色土層（ジャリ混り）
22.－①
22.－②
23.
24.　茶褐色マンガン質土（瓦炭含）　上部分がとばされている　掘り方不明　柱痕のみ
25.　茶褐色土（瓦炭含）
26.－①　暗茶褐色炭まじり土層
26.－②　茶褐色

## 第55図　久米廃寺　3区　柱穴断面集成

1.
2.
3.　茶褐色粗砂層
4.－①　やや明るい茶褐色土
4.－②　やや黒みをおびた茶褐色土層
5.　茶褐色
6.
7.
8.－①　黄茶褐色砂質土層（柱抜きとり痕）
8.－②　黒茶褐色砂質土層
9.　（土器，炭含）茶褐土層（下層は灰褐色にてグライ化している）
10.　淡茶褐色土（土器炭含）
11.　（淡）黒茶褐色土（土器炭含）
12.　茶褐色土層（瓦・炭含）
13.　淡黄褐色土（上面に瓦含）
14.　淡黒褐色土（マンガン質）
15.－①　茶褐色土層（土器炭含）
15.－②　淡茶褐色土層
16.　灰褐色炭混り土
17.　暗茶褐色粘土　焼土炭まじり
18.－①　茶褐色粘土　炭・焼土混り
18.－②　黄色　白色　粘土
19.　暗茶褐色粘土　炭混り
20.　暗茶褐色粘土　炭混り
21.
22.　黒灰混り暗茶褐色粘土層
23.　茶褐色（炭含）土
24.－①　黄褐色　千枚岩混り土層（この柱穴は一層上に土層がかぶっている）
24.－②　黄茶褐色土（瓦炭含）
25.　茶褐色やや粘質土層（炭，瓦含）
26.　茶褐色　瓦混り土（上面の瓦包含の土層の変化なし）
27.－①　黄茶褐色粘質土層
27.－②　茶褐色粘質土層

## 第56図　3区G断面図

1.　表土，灰色粘土層
2.　表土，
3.　床土，黄色土
4.　黒褐色粘土ブロック
5.　黄褐色，大礫まじり，砂礫層
6.　茶灰色粗砂・小礫層
7.　黄灰色細砂層
8.　黄褐色微細層
9.　地山（黄色砂礫層）
10.　灰褐色粘土
11.
12.　茶褐色砂礫層
13.　茶褐色粘土層
14.　黒灰褐色粘土層
15.　黒褐色灰色っぽい粘土

## 第57図　3区A断面図

1.　耕作土（除いてある）灰色粘土
2.　床土　黄褐色土層
3.　茶褐色土層（よく乾く）
4.　灰色砂層　畑土
5.　黄茶褐色土層
6.　茶褐色土層（炭化物，焼土，仏像片混り）
7.　溝
8.　黄茶褐色土層　下層に黄色粘土ブロックあり
9.　黄褐色砂層
10.　黄褐色土層
11.　黒色粘土混り茶褐色土層
12.　黄褐色土層
13.　黄茶褐色砂質土層（柱抜きとり痕）
14.　黒茶褐色砂質土層
15.
16.　黄褐色土
17.　茶色粘土層
18.　黄色粘土ブロック
19.　茶褐色粘土層（マンガン多し）
20.
21.　灰色粘土層
22.　黄色微細層
23.
24.　地山　黄色砂利

## 第58図　3区B断面図

1.　灰色粘土
2.　黄色細砂
3.　灰褐色土
4.　上層は茶褐色土層　少し砂の粒大きい
5.　黄褐色土層
6.　黄色粘土多し，瓦細片少し
7.　地山砂利層

## 第59図　3区C断面図

1.　耕土（灰色）
2.　床土（黄色）
3.　褐色土層（やや赤みを）瓦辺，小石まじりやや荒い土層
4.　灰色微砂層
5.　黒褐色土層，溝内はスミ瓦，土器（土師）片等を含む
7.　粘質砂利層

## 第60図　3区D断面図

1.　耕土層，灰色
2.　黄色床土層（粘質土）
3.　やや荒い黄褐色層
4.　やや荒い黄白土層，石片を含む
5.　黒褐色土層，スミ，瓦，土器(土師，須恵)を含む大小の岩石も入る
6.　スミ，瓦．土器片を含みややあらい石片土層
7.　スミ，瓦，土器片，石片を含む

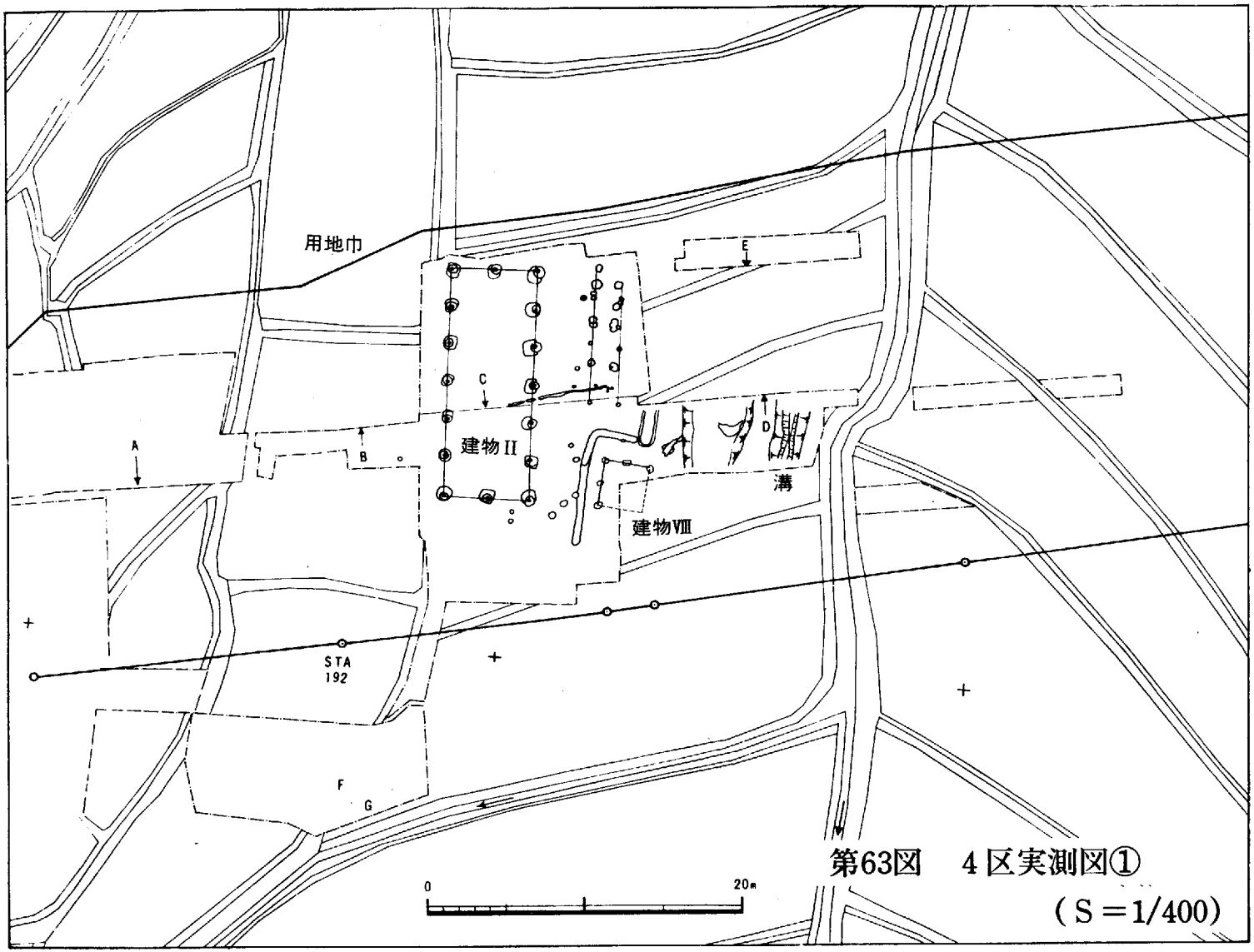
8. スミ，瓦片を含む，黄褐色土，地山に近い部分粘質に近い微砂を含む
9. 地山

## 第61図　3区F断面図

1. 表土
2. 黄色砂礫混り黄色粘土層（埋め土）
3. 灰茶褐色土層（表土，畑耕作時の表土）
4. 
5. 黄褐色砂礫層
6. 黒褐色砂礫層
7. 灰色粘土混り黄褐色砂礫層
8. 黄色土混り灰褐色粘土層
9. 灰褐色粘土層
10. 茶褐色砂礫層
11. 暗黄灰色粘土（たたきしめたものか？）
12. 暗茶褐色砂礫層
13. 黄褐色砂利層（地山）

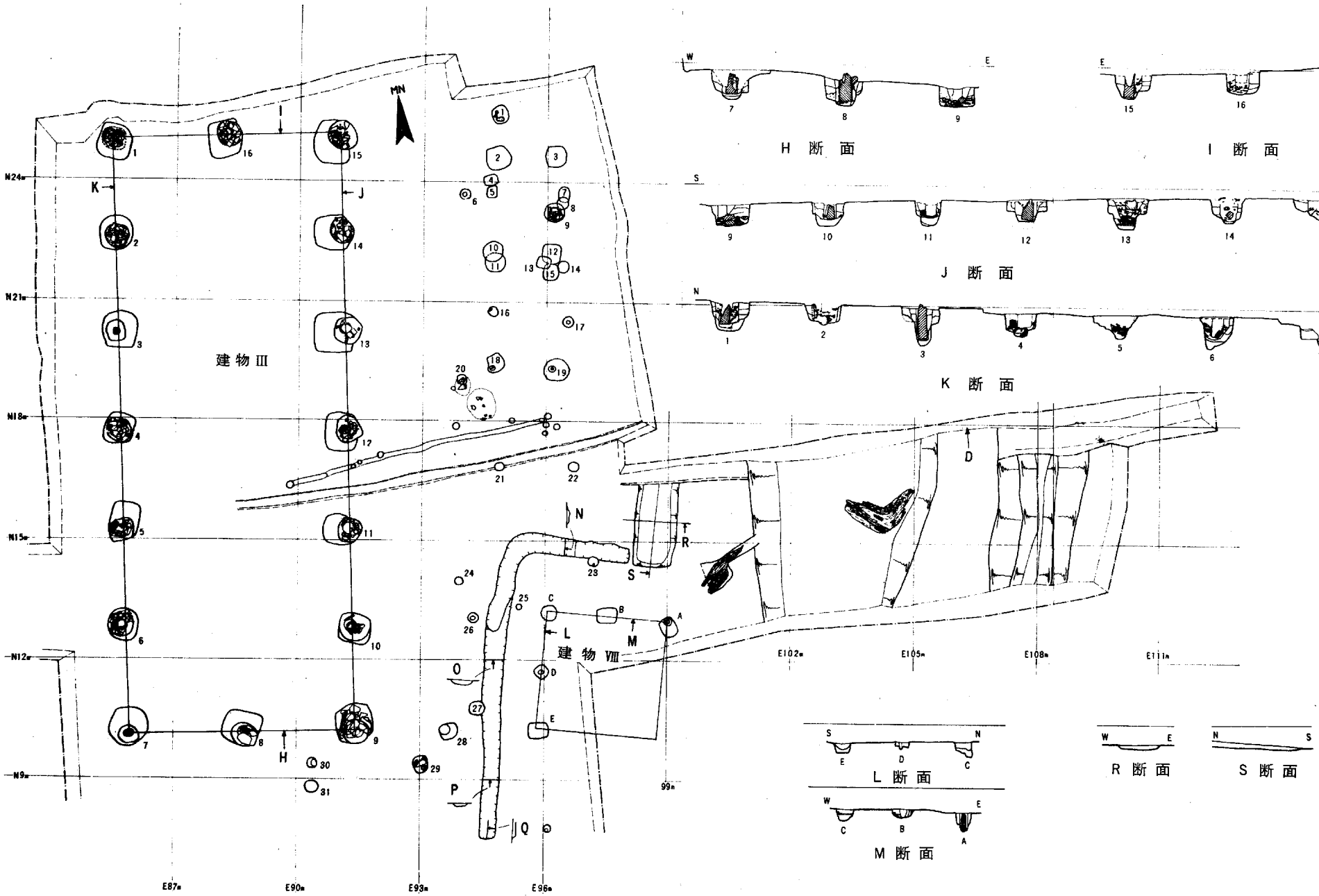
## 第62図　3区E断面図

1. 耕土
2. 黄色粘土
3. 灰褐色
4. 暗褐色粘土
5. 暗黄褐色粒質土（3㎜大の粗砂を点々とみる）
6. 茶褐色（濃），瓦（赤）の細片（3㎜～1㎝）を多く含む
7. 黄色粘土
8. 淡茶褐色（やや灰色をおびている粘質土）
9. 淡褐色（やや黄色をおびている）
10. 灰色粘土
11. 黄色（地山土を入れたものか，砂粒を含む）
12. 黄褐色（土をよく精選している）
13. 灰色粘土
14. 淡茶褐色（やや灰色ぎみ）
15. 茶褐色土
16. 黄色粘土
17. 黄色ブロック
18. 淡黄色土（よく精選された土）
19. 淡灰褐色土（よく精選された土，微砂質）
20. 黄褐色土
21. 淡黄色
22. 褐色
23. 淡黄色
24. 褐色
25. 淡黄色
26. 黄褐色
27. 暗褐色（黄色地山土？の混入をみる）
28. 淡黄灰色土
29. 灰褐色土
30. 地山，黄褐色礫岩盤

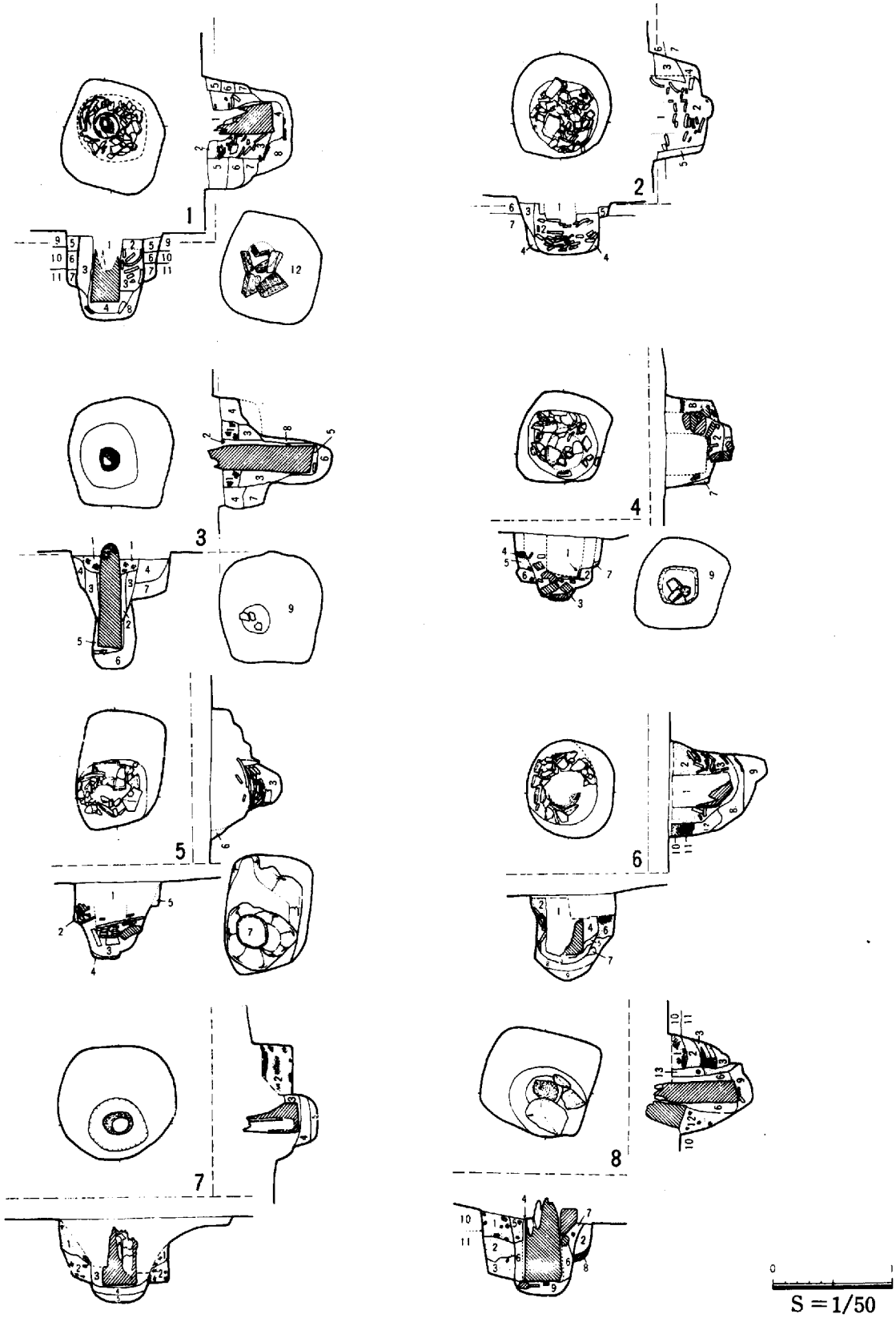



第63図　4区実測図①

(S＝1/400)




第64図　4 区 実 測 図 ②（S＝1/100，水糸L＝121m）




第65図　4区建物III掘方断面図①（S＝1/50）

## 第65図　4区建物Ⅲ掘方断面図①

① 1. 灰色粘土
2. 灰褐色砂質粘土
3. 灰色粘土
4. 黒青色粘土
5. 褐色粘土
6. 褐黒色粘土
7. 黒灰色粘土
8. 青灰色細砂土
9. 灰黒色砂質粘土層
10. 黄褐色砂質粘土層
11. 黄青色粘土層
12. 掘り下げ状況

② 1. 灰黒色粘土
2. 黒灰色粘土
3. 灰黒色砂質粘土
4. 青灰色細砂
5. 灰青色砂質粘土
6. 黒灰色砂質粘土（グライ化）
7. 灰黄色砂質粘土（Fe・Mn斑点混り）

③ 1. 黒灰色砂質粘土黄色
2. 灰色粘土
3. 黒灰色粘土
4. 灰黒色砂質粘土
5. 黒灰色粘土
6. 灰青色砂質粘土
7. 淡茶灰色砂質粘土
8. 灰黄色砂質粘土
9. 掘り下げ状況

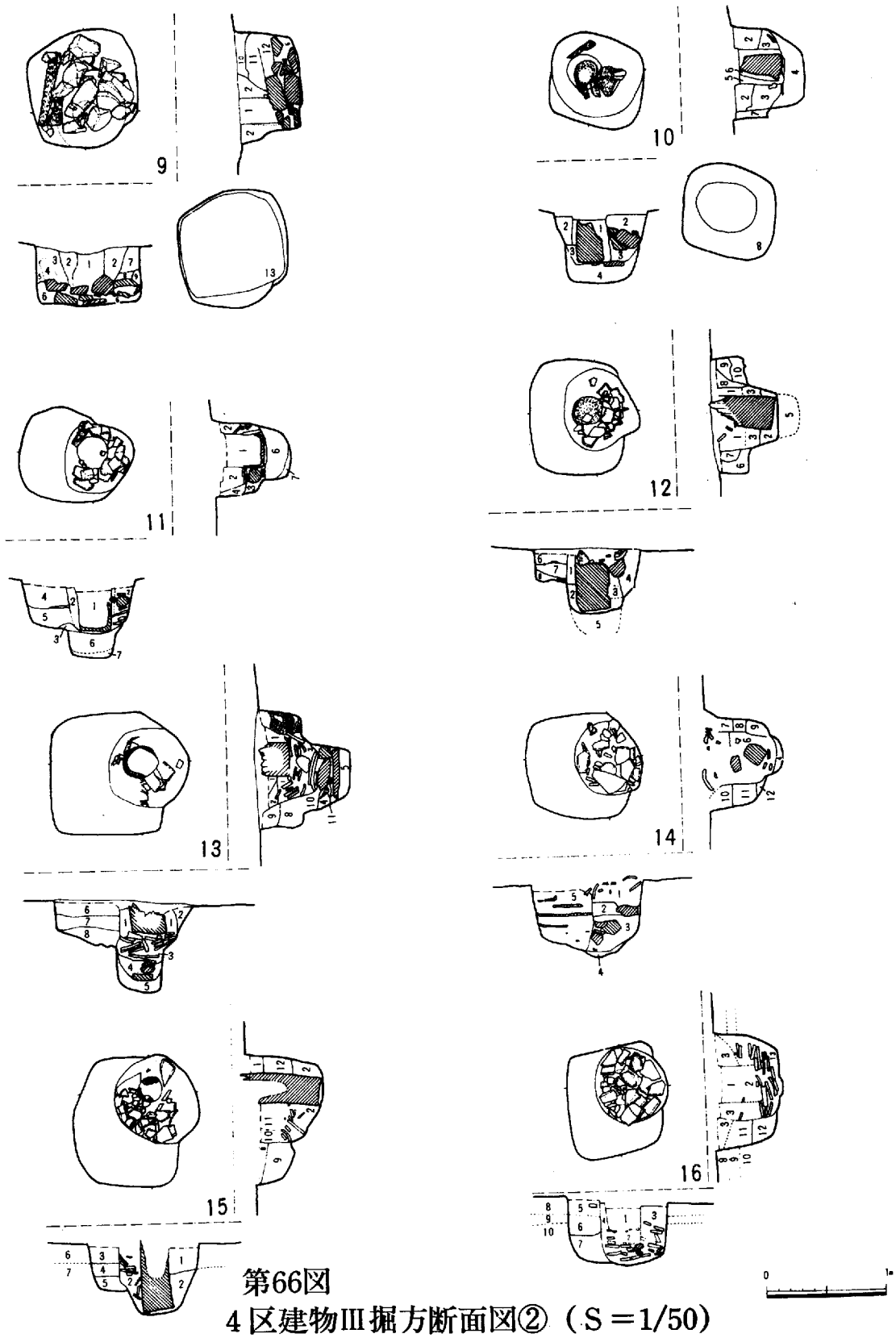
④ 1. 灰色粘土　矢印は木片
2. 灰黒色粘土
3. 灰色粘土
4. 黄色粘土
5. 茶色・黄色粘土混在
6. 黄色混り灰色粘土
7. 灰色粘土
8. 黄色茶色灰色粘土混在
9. 掘り下げ状況

⑤ 1. 灰色粘土
2. 黄色・黒色粘土混在（古い掘方）
3. 黒色粘土
4. 灰白色粘土
5. 古い掘方の一部
6. 掘りすぎ
7. 掘り下げ状況

⑥ 1. 灰色粘土（やや黒みがある）
2. 茶色粘土
3. 黒色粘土
4. 黒色粘土（灰色粘土ブロック）
5. 灰色粘土
6. 黒色・黄色・茶色粘土混在
7. 黒色粘土ブロック
8. 灰色粘土
9. 青灰色粘土，青色小石混り
10. 茶色粘土
11. 黄色粘土

⑦ 1. 黄色・茶色・灰色粘土混在
2. 黄色・灰色粘土に茶色粘土少量
3. 灰黒色粘土
4. 灰色粘土
5. 青灰色粘土・砂利・砂まじり

⑧ 1. 黄色・茶色・灰色粘土混在
2. 茶色粘土
3. 灰黒色粘土炭混り
4. 灰色粘土
5. 黄色・茶色・灰色粘土混在
6. 灰黒色粘土
7. 茶色・灰色粘土混り，黄色土少し
8. 黄色粘土
9. 青色粗砂混り粘土層
10. 暗灰色粘土（地山上）
11. 黄色粘土層（地山）
12. 茶色が多い灰色・黄色混在
13. 黄色




第66図
4区建物III掘方断面図②（S＝1/50）

## 第66図　4区建物Ⅲ掘方断面図②

⑨ 1. 灰色粘土
2. 黄色・茶褐色混在
3. 黄色混り灰色土
4. 灰茶褐色マンガン質
5. 黄色土
6. 青灰色砂質粘土
7. 茶色マンガン質土
8. 灰色粘土
9. 淡黄色土
10. 黄色・茶褐色土混在
11. 灰色グライ化粘土
12. 炭混り茶褐色砂質土
13. 掘り下げ状況
※　石＝大中が17個，小が8個・木1本・瓦数十

⑩ 1. 濃灰黒色粘土
2. 茶褐色・黄褐色混在
3. 灰黒色粘土
4. 青白色砂質粘土
5. 炭混り灰色粘土
6. 灰色粘土
7. 淡茶褐土
8. 掘り下げ状況

⑪ 1. 灰色粘土
2. 茶褐色土
3. 灰黒色粘土
4. 炭混り茶褐色土
5. 黒褐色砂質土
6. 青灰色粘土
7. 青灰色粘土砂混り

⑫ 1. 灰黒色粘土
2. 灰黒色粘土
3. 灰白色粘土に白色粘土ブロック混り
4. 茶色粘土に黄色・灰色粘土混り
5. グライ化している。あるいは古い柱根のものか。
6. 茶色粘土
7. 茶色粘土，6よりも灰色粘土が多い
8. 灰色粘土・茶色粘土混り
9. 黄色・灰色粘土混在層
10. 茶色粘土に黄色粘土ブロック混り

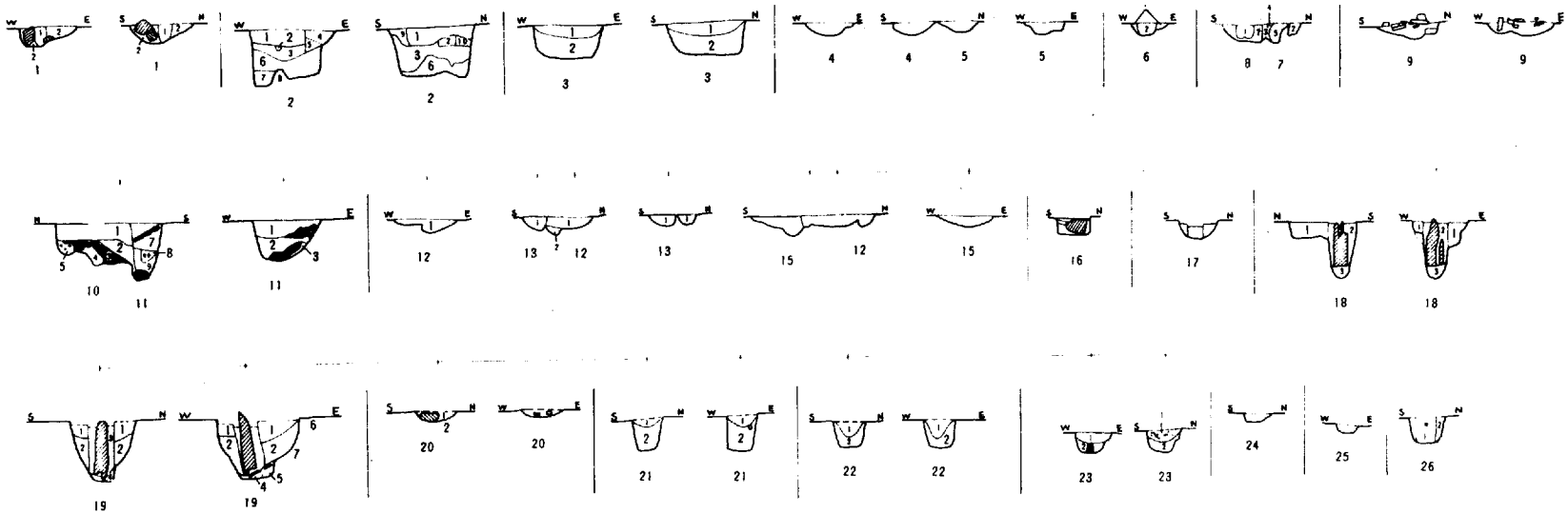
⑬ 1. 灰黒色粘土・灰白色粘土ブロック混り
2. 黄色・茶色粘土混在
3. 灰黒色粘土
4. 青灰色粘土・砂混在
5. 青灰色粗砂層
6. 茶色粘土に黄色ブロック，7はやや灰色粘土混り，版築状に水平に入っている
7. 
8. 灰色粘土に黄色粘土ブロック，炭・灰混り
9. 茶色粘土に黄色ブロック
10. 黒色粘土
11. 木片・全部で五片あり最初の柱根の下に置いたものか。

⑭ 1. 灰茶色砂質粘土
2. 灰色粘土
3. 灰黒色粘土（すごく粘い）
4. 青灰色細砂
5. 灰黒色粘土（黄色粘土が水平に入っている）
6. 灰色砂質土
7. 灰色粘土
8. 灰黄色粘土
9. 黒灰色粘土
10. 灰青色粘土
11. 黄灰色粘土
12. 黄色粘土

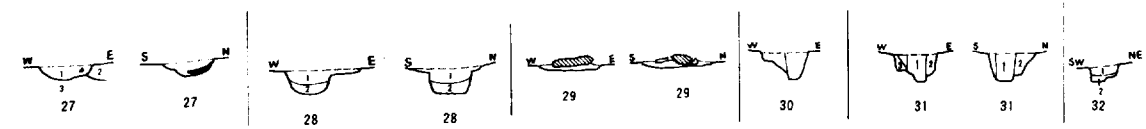
⑮ 1. 灰黄色砂質粘土
2. 灰黒色粘土
3. 黄色粘土
4. 灰黄色粘土
5. 灰黒色粘土
6. 黄褐色砂質粘土層
7. 黄色粘土層
8. 褐色粘土
9. 黒色粘土（黄色斑点あり）
10. 茶灰色砂質粘土
11. 黒灰色砂質粘土
12. 灰黒色粘土（白い小斑点あり）

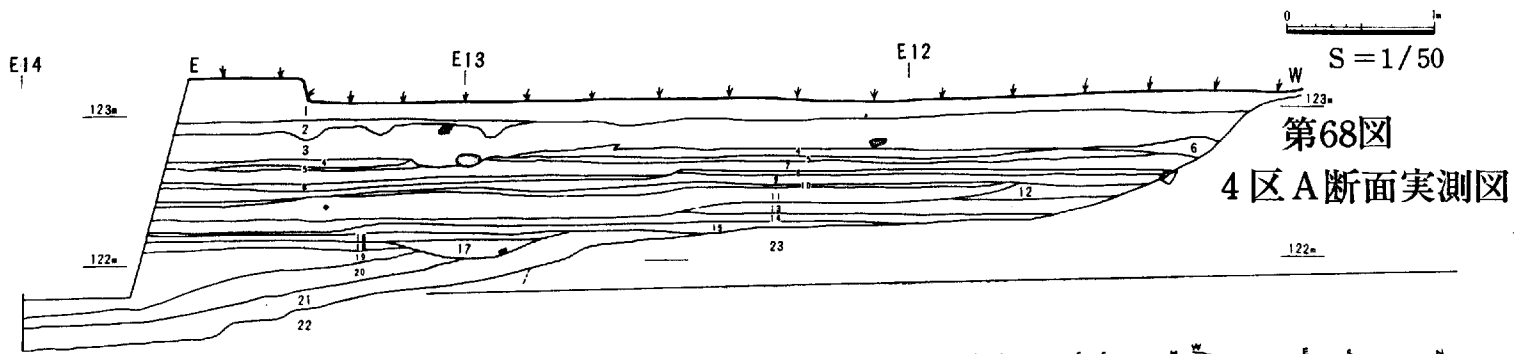
⑯ 1. 黒青色砂質粘土（炭混）
2. 黒灰色粘土
3. 黄灰色砂質粘土

4. 灰黒色砂質粘土
5. 黄色粘土
6. 灰黄色粘土
7. 黄色粘土中に灰黒色粘土の塊あり
8. 灰黄色砂質粘土
9. 黄色粘土
10. 淡褐色砂質粘土
11. 灰茶色粘土
12. 灰青色粘土（グライ化）
13. 灰青色粘土

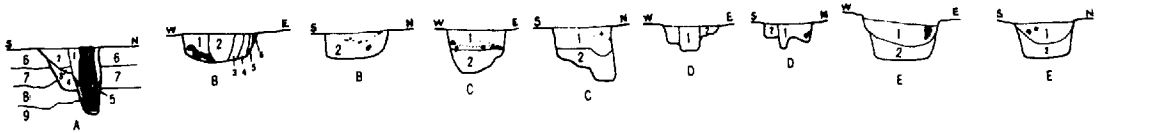


第67図　4区柱穴断面集成図(S＝1/50, 水糸L＝121m)






第68図
4区A断面実測図



第69図
4区建物Ⅷ柱穴断面図

## 第67図　4区柱穴断面集成図

① 1. 暗灰茶褐色
2. 灰茶褐色

② 1. 灰茶褐色
2. 淡灰茶褐色
3. 茶灰色粘土
4. 灰茶褐色（幾分淡い）
5. 淡黄褐色
6. 青灰色細砂
7. 灰色粘土
8. 青灰色砂層

③ 1. 灰茶褐色土
2. 茶灰色

④ 灰茶褐色

⑤ 灰茶褐色

⑥ 1. 灰茶褐色土
2. 暗灰茶褐色土

⑦ 1. 濃灰茶褐色土

⑧ 2. 灰茶褐色土
3. 淡灰茶褐色土
4. 黄褐色土
5. 灰茶褐色土

⑨ 灰茶褐色土

⑩ 1. 茶色粘土，灰色粘土，混在層

⑪ 2. 灰色粘土層
3. 灰黒色粘土
4. 灰黒色粘土
5. 灰色粘土多い，黄色，茶色粘土混在
6.
7. 茶褐色粘土
8. 灰色粘土，茶色粘土，黄色粘土混在

⑫ 1. 灰茶褐色

⑬ 2. $R_5$ プランにはなし

⑮ 灰茶褐色層

上から

⑯ 1. 灰茶褐色土
2. 青灰色粘土
3. 灰黄色粘土

左から

⑰ 1. 茶灰色砂質粘土
2. 濃青灰色粘質土

⑱ 1. 灰茶褐色
2. 青灰色粘土
3. 灰色粘土

⑲ 1. 灰茶色砂質粘土
2. 灰色粘土
3. 灰黒色粘土
4. 青灰色細砂
5. 黄色細砂
6. 黄茶色砂質粘土
7. 黄色砂質粘土

⑳ 1. 黄灰色（細砂）
2. 黄色粘土

㉑ 1. 茶黄色砂質粘土
2. 灰黄色粘土

㉒ 1. 黄灰色粘土
2. 黄色粘土

㉓ 1. 灰黒色木炭混入土
2. 灰黒色土

㉔ 濃茶褐色マンガン質土

㉕ 濃茶褐色マンガン質土

㉖ 1. 炭混り淡茶褐色土
2. 茶褐色土

㉗ 1. 黄色土混黄褐色土
2. 黒褐色マンガン質土（溝と切合っている）
3. 淡黄褐色地山土

㉘ 1. 炭混り茶褐色マンガン質土
2. 灰褐色グライ化土

㉙ 灰茶褐色

左から

㉚ 黄褐色土
灰褐色土

㉛ 1. 黒褐色炭混り土
2. 茶褐色マンガン質土
3. 濃茶褐色土

㉜ 1. 灰褐色グライ化土
2. 淡褐色土

## 第68図　4区A断面実測図

1.
2. 黄灰色砂質粘土層

3. 黄褐色砂礫層（褐色レキ包含層）
4. 灰色砂質粘土層
5. 灰色砂質粘土層（ねずみ色粘土質層）
6. ねずみ色粘土質層
7. 淡黄茶色微砂混り粘土層
8. 淡黄茶色砂質粘土層（Fe 分あり）
9. 淡褐色砂質粘土層
10. 淡黄茶色砂質粘土（Fe 分あり）
11. 淡黄褐色砂質粘土
12. 淡茶褐色砂質粘土層
13. 灰褐色砂質粘土層
14. 黄色砂質粘土層
15. 灰褐色砂質粘土
16. 褐色砂質粘土層
17. 淡茶褐色砂質粘土
18. 茶黄色粘土層
19. 黒褐色粘土層
20. 淡褐色粘土層
21. 黄茶色粘土層
22. 淡黄茶色粘土層
23. 黄茶色砂礫層

## 第69図　4区建物Ⅷ柱穴断面図

A 1. 灰黒色粘土（ねん着力強い）
2. 黄茶褐色土
3. 灰黒色粗砂混入土
4. 灰黒色茶斑混入土
5. 灰黒色微砂混入土
6. 茶褐色土
7. 黄褐色土
8. 灰黒色土
9. 青灰色粗砂

B 1.
2. 灰黒色土
3. 茶褐色土（Mn 多）
4. 灰黒色
5. 茶褐色土（Mn 多）
6. 灰黒色

C 1. 焼土，炭混り
2. 黒灰色

D 1. 濃茶褐色マンガン質土
2. 炭混り濃茶褐色マンガン質土

E 1. 茶褐色炭混りマンガン質土
2. 灰褐色グライ化土

第70図　4区東西土層断面図B

1. 耕土
2. 淡茶褐色粘土層（少し砂質）
3. 淡茶褐色砂質粘土層（Fe 分沈澱）
4. 灰白色粘土層
5. 灰白色砂質粘土層
6. 灰黒色粘土層
7. 黒色粘土層（黒い）
8. 灰黒色粘土層（明るい）
9. 黒褐色砂質粘土層
10. 褐色粘土層
11. 黒褐色粘土層
12. 黒褐色砂質粘土層
13. 淡褐色粘土層
14. 黒褐色粘土層
15. 灰黒色粘土層
16. 黄色粘土層

第71図　4区東西土層断面図C

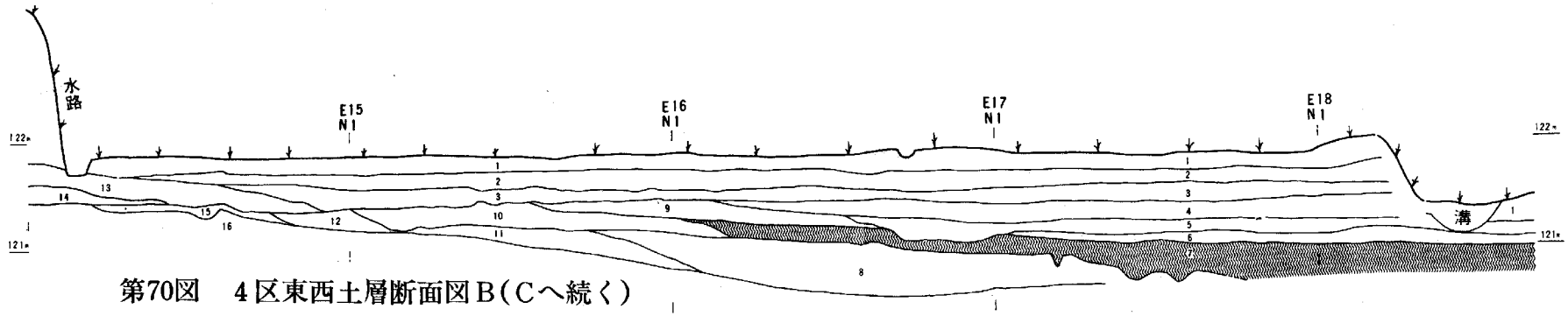
1. 耕土
2. 淡褐色砂質粘土
3. 灰褐色砂質粘土
4. 灰白色粘土層
5. 黒褐色粘土層
6. 黄褐色砂質粘土
7. 灰褐色砂質粘土層
8. 茶褐色

第72図　4区東西土層断面図D

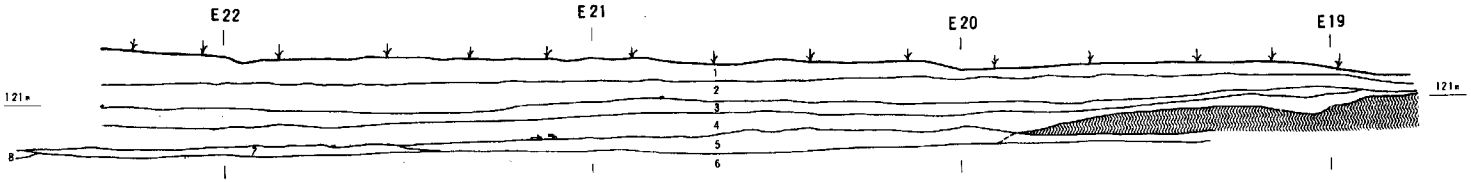
1. 耕土（畦）
2. 淡褐色砂質粘土
3. 灰褐色砂質粘土
4. 灰白色粘土層（黒っぽい炭斑点多し）
5. 灰緑色砂質粘土層（管鉄多し）
6. 灰白色粘土層（明るい）
7. 茶褐色砂質粘土層（Fe 分多し）
8. 灰色粘土
9. 茶褐色砂質粘土
10. 黒灰色砂質粘土層
11. 灰黒色砂質粘土層
12. 黒灰色粘土
13. 灰緑色砂礫層
14. 淡緑色砂層
15. 黄緑色砂層
16. 灰緑色砂層（混ピート）
17. 灰緑色砂層
18. 灰緑色砂礫層
19. 淡緑色砂層
20. グライ化
21. 青灰色粘土層
22. 黄色粘土層
23. 灰青色粘土層
24. 灰黒色粘土層（炭まじり）
25. 灰青色砂層（Feを含む）
26. 黒灰色砂質粘土層
27. 灰黒色粘土層
28. 黄色粘土層
29. 灰青色粘土　Pit?
30. 灰青色粘土層（部分的にグライ化）
31. 黄褐色砂質粘土
32. 黄緑色砂層（混小礫）
33. 淡灰色粘土層
34. 淡緑色砂層（混ピート）

第73図　4区北側トレンチ土層断面図E

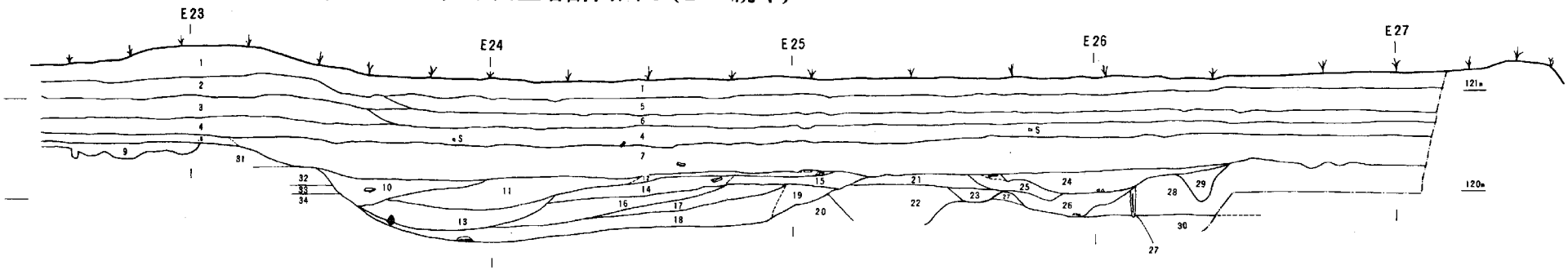
1. 耕土
2. 灰色粘土層
3. 灰褐色粘土層（含Mn結核）
4. 灰色粘土層（Mn結核Fe多し）
5. 灰色粘土層（Mn結核Fe少量）
6. 灰黒色粘土層
7. 茶色砂質粘土層
8. 灰白色粘土層（Fe,Mn結核中量）
9. 茶褐色粘土層（Mn小粒多し）
10. 褐色粘土層（Fe多し）（旧畦？）
11. 褐色粘土層（Mn多し）
12. 灰黒色砂質粘土層
13. 黒灰色粘土層
14. 黒色粘土層
15. 灰黒色粘土層
16. 黄茶色砂質粘土層
17. 灰緑色細砂層
18. 灰緑色粘土層
19. 灰緑色細砂層
20. 灰白色粘土層
21. 細礫層
22. 灰青色細礫層
23. 灰青色細礫層（砂あり）
24. ピート層
25. 灰青色砂礫層（礫3～5 cm大多し）
26. 黄色粘土層
27. 黒灰色粘土層
28. 砂層
29. 黒灰色粘土層
30. 灰茶色砂質粘土層
31. 灰青色砂礫層（礫1～3 cm大）（明るい）



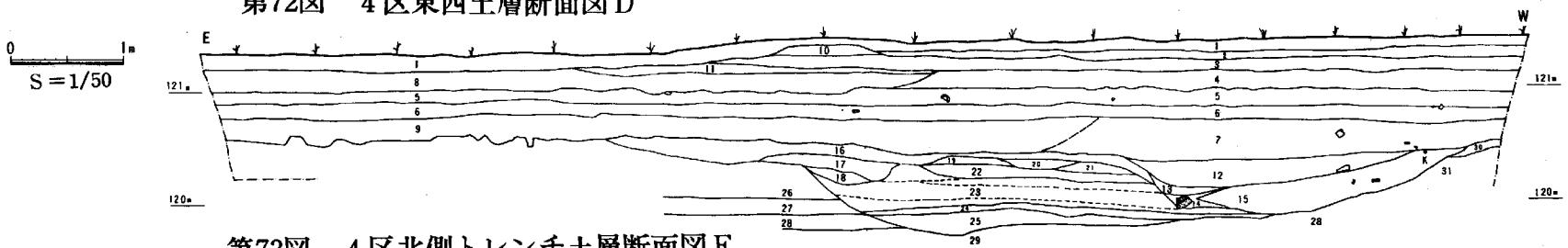

第70図　4区東西土層断面図B（Cへ続く）



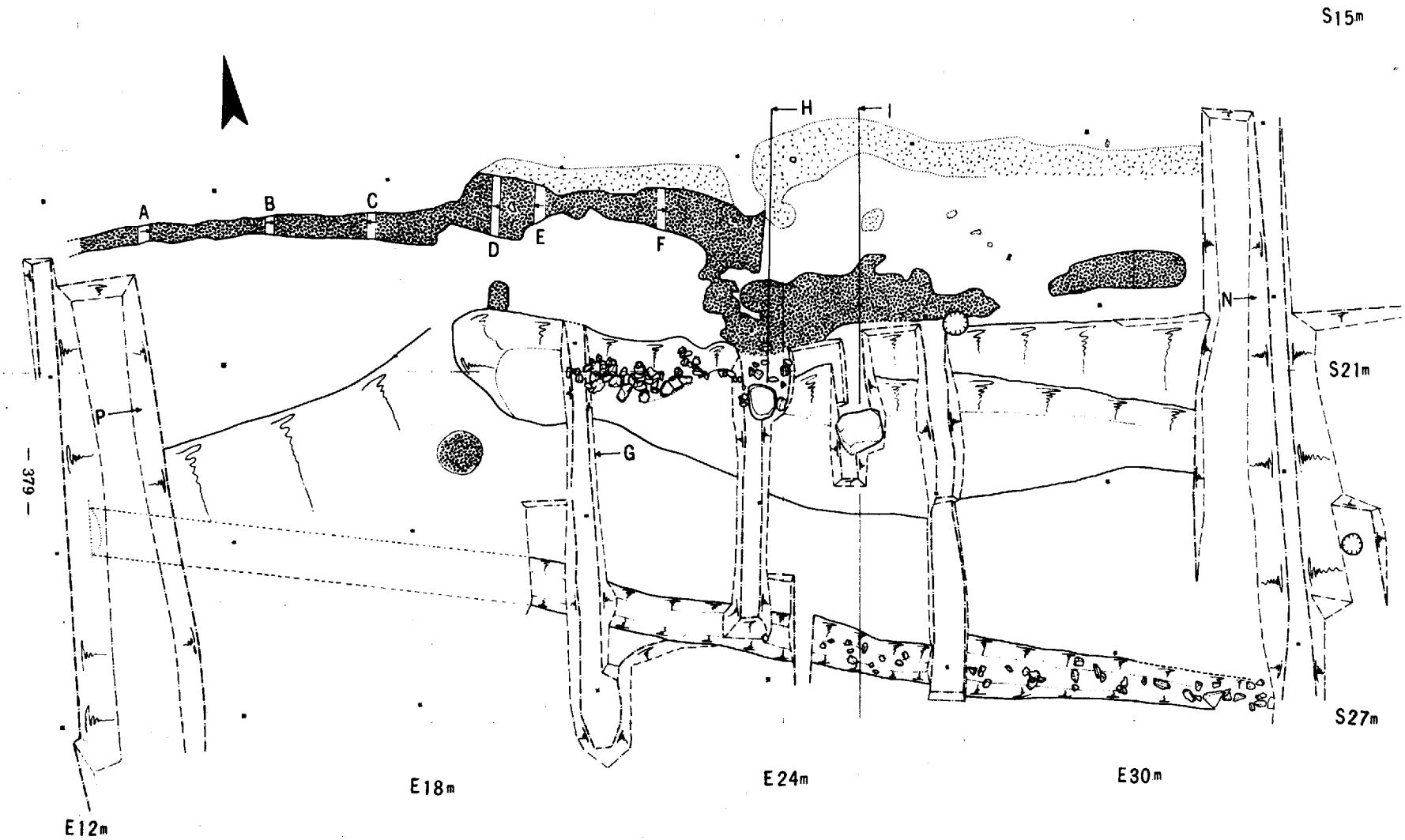

第71図　4区東西土層断面図C（Dへ続く）



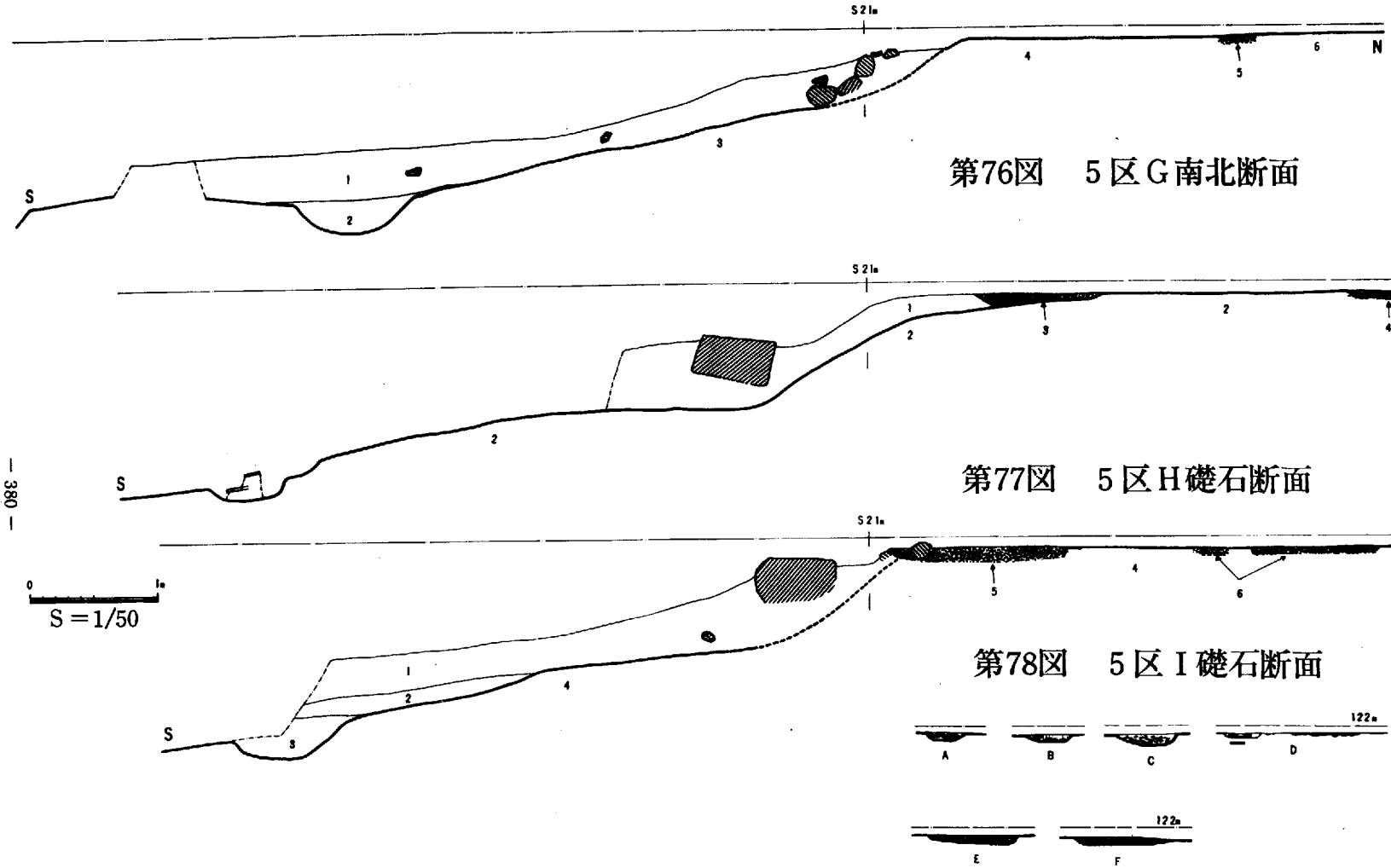

第72図　4区東西土層断面図D




第73図　4区北側トレンチ土層断面図E




第74図　5　区　実　測　図　(S＝1/100)

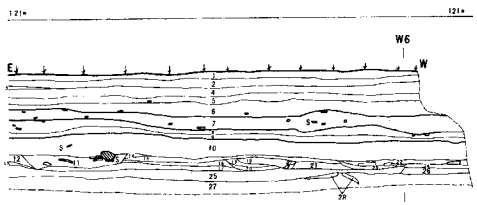



第76図　5区G南北断面

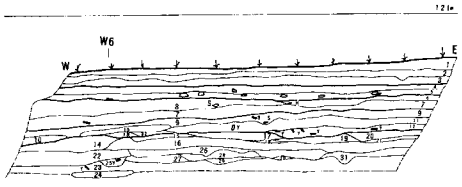
第77図　5区H礫石断面

第78図　5区I礫石断面

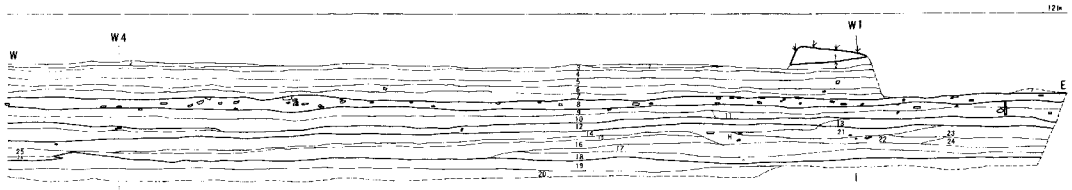
第75図　5区千枚岩溝断面A～F



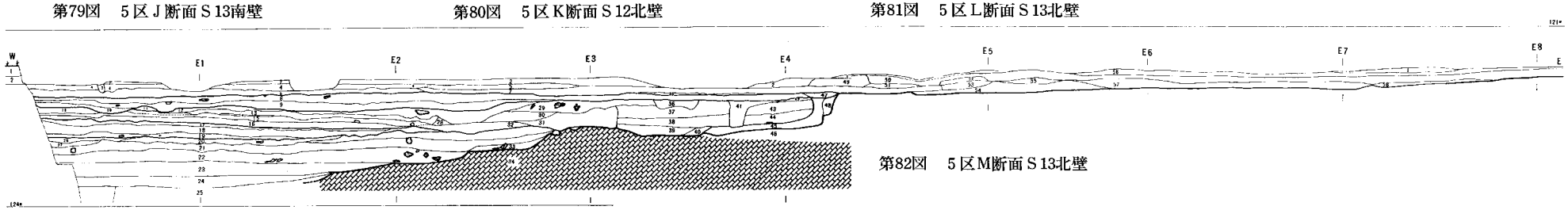
第79図　5区J断面S13南壁



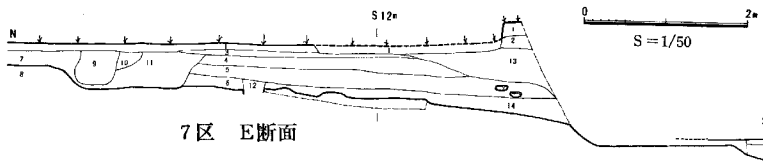
第80図　5区K断面S12北壁



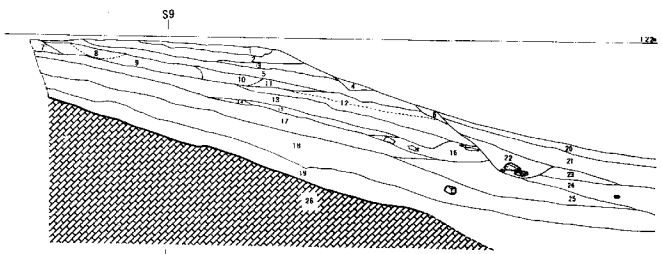
第81図　5区L断面S13北壁



第82図　5区M断面S13北壁



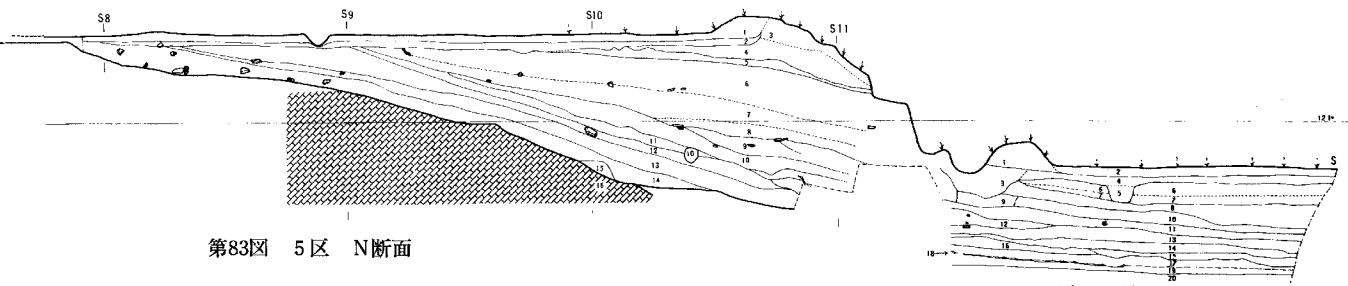
7区　E断面



第84図　5区　P断面



S＝1/50



第83図　5区　N断面



5区　O断面

第76図　5区南北断面G

1. 褐色土
2.
3. 黒色土
4. 淡黒褐色土に混黄色土
5. 黒色混黄色土
6. 黒褐色土

第77図　5区礎石断面H

1. 黄褐色土
2. 黒（褐）色土
3. 黄色千枚岩土
4. 千枚岩黄色土混淡黒褐色土

第78図　5区礎石断面I

1. 千枚岩瓦混褐色土
2.
3.
4. 黒褐色土
5. 黄色千枚岩土
6. 黄色混黒褐色土

第75図　5区千枚岩溝断面A～F

A　黄色千枚岩層
B　黄色千枚岩
C　黄色千枚岩
D　黄色千枚岩（溝といえるしろものではない）
E　黄色千枚岩
F　混千枚岩，黄色土

## 第79図　5区 S 13
## 南壁断面図J

1. 表　　土
2. 灰褐色土層（下部に鉄分）
3. 灰褐色土層（Fe分）（下部に鉄分）
4. 灰褐色土層（下部に鉄分）
5. 灰褐色土層（下部に鉄分）（Fe分多し）
6. 黄褐色土層（礫を多量に含む）
7. 黄褐色土層（礫を多量に含む）
8. 淡灰黒褐色土層（礫を含む）
9. 灰黒褐色土層
10. 
11. 灰色土層（粘質）
12. 黒灰褐色土
13. 黒褐色粘質土層
14. 黒灰褐色土層
15. 黒灰褐色土層（砂を含む）
16. 灰黒褐色土層（砂質）
17. 黒灰褐土層（砂質を含む）
18. 黒色土（粘質）
19. 黒灰褐色土層（礫を含む）
20. 灰褐色土層
21. 黒褐色土層
22. 灰色土層
23. 灰色土層（粘質）
24. 灰褐色土層
25. 灰黒褐色粘土層
26. 黒褐色土層
27. 黒色粘土層
28. 茶褐色土層

## 第80図　5区 S 12
## 北壁断面図K

1. 灰青色粘質土層
2. 灰褐色土層
3. 灰褐色土層（礫，瓦片を含む）
4. 黄褐色土層（下層はやや黒色を呈す）
5. 黄褐色含礫土層（瓦片が上層に多くみられる）
6. 茶褐色土層（整地の際埋置したと思われる）
7. 灰黒褐色土層（砂質層を含む）
8. 灰黒褐色土層（礫を含む）
9. 黒褐色土層（礫多し）
10. 黒褐色土層（礫が密に含まれている所）
11. 暗褐色土層
12. 暗褐色土層（砂質かつ礫，土師，須恵器片を含む）
13. 暗褐色土層（炭を含まない）
14. 暗褐色土層
15. 黒褐色土層（砂質土ブロック炭片を含む）
16. 黒褐色土層（炭を含む粘質）
17. 暗褐色土層
18. 黄褐色土層（砂質）
19. 黒色粘質土層
20. 黄灰褐色土層
21. 黄褐色土層（黄色土ブロックを含む）
22. 茶褐色土層（礫含）
23. 黒色粘質土層（炭片，青緑色の小礫，弥生式土器を含む）
24. 黒色砂層（ブロック状）
25. 黒色砂質土層
26. 暗褐色土層（やや赤味を帯びる）（砂ブロックを含む）
27. 黒褐色土層（砂質と粘質）
28. 黒褐色粘質土層
29. 暗黄褐色砂質土層
30. 暗黄褐色砂質土層
31. 
32. 黒褐色土（砂質）

## 第81図　5区 S 13
## 北壁断面図L

1. 盛土（灰色土層）
2. 青灰色粘土質層（耕土）
3. 褐色土層
4. 灰褐色土層
5. 灰褐色土層（礫含）
6. 灰褐色土層（礫含Fe分多し）
7. 黄褐色土層
7. 黄褐色土層（Fe分多し）
8. 黄褐色土層（礫，瓦大量含む）
9. 茶褐色土層（砂質）

10. 黒褐色土層
11. 濃茶褐色土層
12. 黒灰褐色土層（砂質）
13. 黒灰褐色土層
14. 灰黒褐色土層（砂質）
15. 黒灰褐色土層
16. 黒褐色土層
17. 黄褐色土層（黄色はんてん含砂質）
18. 黒灰褐色土層
19. 茶褐色土層
20. 黒色粘土層
21. 黒褐色土層（土師器多し）
22. 黒灰褐色土層（砂含む）（土師器多し）
23. 灰黒褐色土層
24. 黒褐色土層
25. 黒褐色土層
26. 灰黒褐色土層

## 第82図　5区　S 13 北壁断面図M

1. 耕　　土
2. 灰褐色砂質粘土層
3. 灰青色砂質粘土層
4. 灰茶色砂質粘土層
5. 灰色砂質粘土層
6. 灰茶色砂質粘土層（混小礫，千枚岩，小片）
7. 灰青色砂質粘土層（混小礫）
8. 茶褐色砂質粘土層（明るい）
9. 茶褐色砂質粘土層（黒っぽい）
10. 淡茶色粘土層
11. 明るい黒褐色粘土
12. 淡茶色粘土層
13. 黒褐色粘土層
14. 黒褐色砂層
15. 淡褐色粘土層
16. 褐色砂質粘土層（火事整理の土層）
17. 淡褐色砂質粘土層
18. 褐色粘土層
19. 灰青色砂質粘土層
20. 黒灰色粘土層
21. 灰黒色粘土層
22. 黒色粘土層
23. 灰黒色粘土層（混千枚岩小片）
24. 灰青色砂層
25. 黄青色粘土層（地山？）
26. 灰青色粘土層
27. 黒青色粘土層（混炭）
28. 褐色粘土層（明るい）
29. 茶褐色砂質粘土層
30. 褐色砂質粘土層
31. 茶褐色粘土層（やや暗い，混黄色小斑点）
32. 青灰色砂質粘土層
33. 黒色粘土層（混千枚岩小片）
34. 黄褐色千枚岩
35. 灰褐色粘土層
36. 褐色砂質土層
37. 褐色砂質粘土層（混黄色小斑点）
38. 褐色砂質粘土層（混黄色小斑点，やや暗い）
39. 灰褐色砂質粘土層
40. 灰色粘土層
41. 茶褐色粘土層
42. 茶褐色砂質粘土層
43. 褐色砂質粘土層（混黄色小斑点）
44. 褐色砂質粘土層（やや暗い）
45. 淡茶色粘土層（混黄色小斑点）
46. 黄色粘土層（千枚岩まじり）
47. 灰褐色砂質粘土
48. 黄色粘土
49. 灰黒色砂質粘土
50. 灰青色砂質粘土
51. 灰黒色砂質粘土
52. 灰褐色砂質粘土
53. 灰褐色砂質粘土（混小礫）
54. 灰青色粘土層（混小礫）
55. 灰黒色粘土層
56. 灰青色粘土層
57. 灰青色砂質粘土層（混礫）
58. 黄色砂質粘土層（地山？）

## 第83図　7区E断面

1. 灰白色耕作土層
2.

3. 茶褐色鉄分を含む
4. 茶褐色粘質土，黄褐色粘土の混土層（炭，瓦を含む）
5. 黄色（粘土）土，茶褐色粘質土層（炭，瓦を含む）
6.
7. 黒茶褐色
8. 黄褐色地山（礫を含む）
9. 黄褐色地山土（礫を含む），暗褐色土（礫を含む）混土層
10. 淡茶褐色
11. 淡茶褐色粘土質土，黄褐色地山土，瓦を含む土層
12. 濃茶褐色粘土質土層（ピットの端）
13. 黄褐色土（含瓦）上部にマンガン質あり
14. 暗黒茶褐色土層（粘土質）

## 第83図　5区N断面

1. 白灰色水田耕作土（グライ化）
2. 黄褐色土
3. 灰褐色土（表土）
4. 混千枚岩褐色土層
5. 灰褐色土層
6. 淡褐色土（千枚岩，瓦を含む）
7. 淡褐色土
8. 淡褐色土（千枚岩混がやや多い感じ）
9. 褐色土
10. 黒色マンガン質層
11. 淡茶褐色土層（粘質）
12. 茶褐色土層（粘質）
13. 千枚岩混茶褐色土層
14. 濃茶褐色千枚岩一部混土層（粘土質）
15. 千枚岩混濃茶褐色土
16. 千枚岩の地山
17.

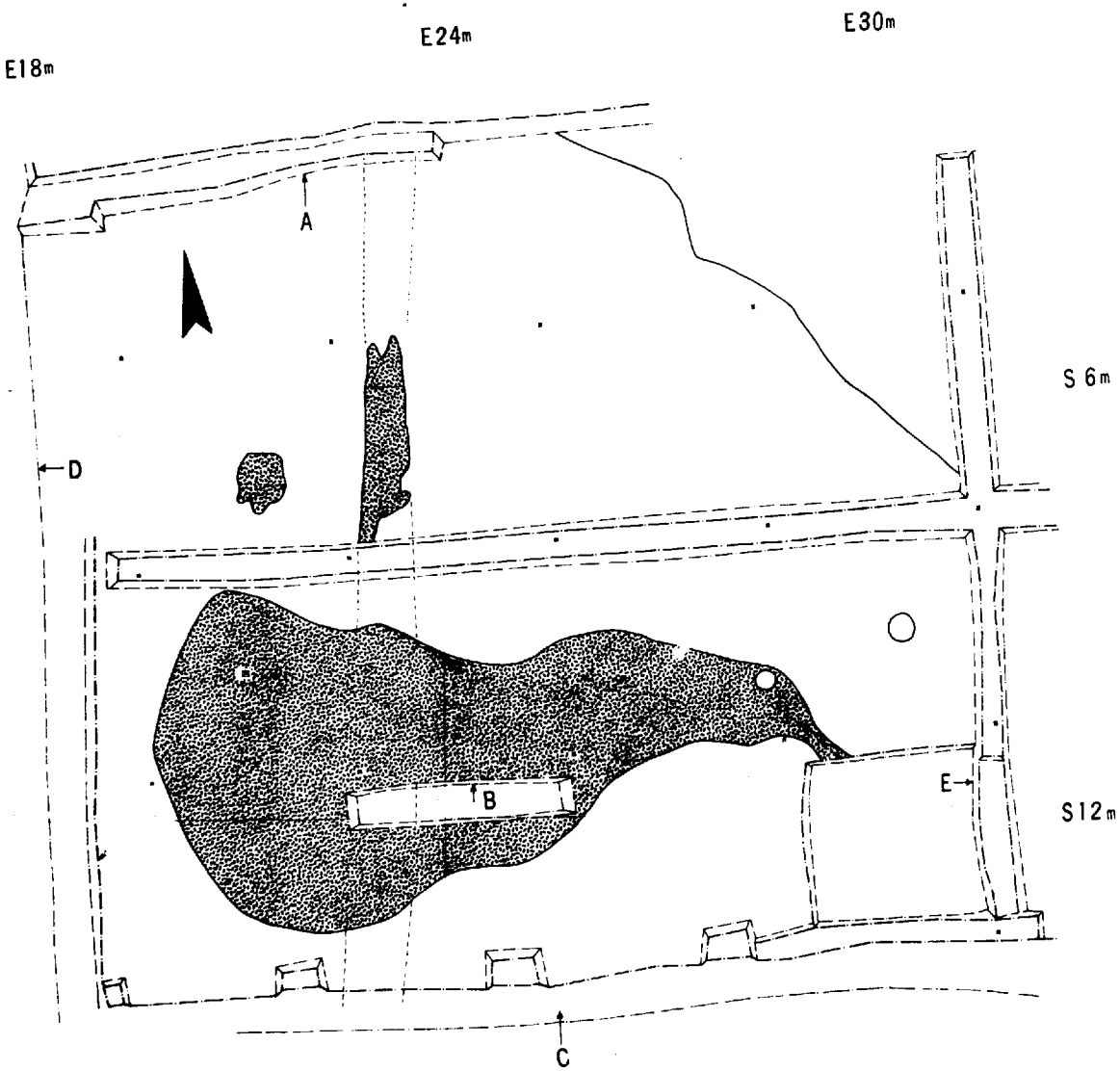
## 第83図　5区O断面

1. 畦
2. 耕土
3. 青灰白色粘土（水路の為グライ化）
4. 青灰白色粘土
5. 暗渠
6. 淡茶灰色砂質粘土層
7. 灰青色砂質粘土（混礫）
8. 茶色砂質粘土
9. グライ化
10. 暗褐色粘土
11. 茶褐色砂質粘土
12. 灰褐色粘土
13. 暗褐色砂質粘土（混焼土細片）
14. 灰黒褐色砂質粘土（混焼土細片）
15. 黒褐色砂質粘土
16. 黄茶色砂質粘土
17. 灰黒色粘土
18. 灰黒色粘土（炭）
19. 灰黒色粘土
20. 黒灰色粘土層

## 第84図　5区P断面図

1. 黄青色千枚岩層
2. 暗褐色粘土（含焼土片）
3. 灰褐色砂礫層
4. 淡黄茶色千枚岩
5. 淡茶褐色砂質粘土
6. 淡黄色粘土
7. 褐黒色粘土（黄色斑点）
8. 淡褐色砂質粘土（含焼土，やや砂質）
9. 淡褐色砂質粘土（含焼土）
10. 黄褐色砂質粘土（含千枚岩小片）
11. 淡茶褐色砂質粘土
12. 茶褐色砂質粘土（含焼土片）
13. 茶褐色砂質粘土
14. 黄白色千枚岩
15. 褐黒色砂質粘土（含黄白色千枚岩片）
16. 褐色砂質粘土（黄色粘土斑点）
17. 褐色砂質粘土
18. 灰褐色砂質粘土
19. 灰黒色粘土（含青白色千枚岩片）
20. 茶黄色粘土
21. 淡黄茶色粘土（含千枚岩小片）

22. 黄茶色粘土（含千枚岩小片多量）
23. 淡茶黄色粘土
24. 茶褐色砂質粘土
25. 暗褐色砂質粘土層
26. 地山（黄青色千枚岩）




第85図　7　区　実　測　図　（S＝1/100）

第86図　7区A断面実測
図2区との境東
西方向

1. 灰白色（表土）泥土
2. 淡黄褐色泥土
3. 淡黄茶色泥土
4. 暗黄褐色泥土（含Mn小斑）
5. 淡黄茶色砂質粘土（含Mn小斑点）
6. 淡黄褐色砂質粘土（含Mn小斑点）
7. 淡黄茶色砂質粘土（含Mn小斑点）（明るい）
8. 千枚岩黄色土
9. Mn結核多し
10. 暗黒褐色粘土
11. 淡黄茶色砂質粘土（含Mn小斑点）
12. 淡褐色砂質粘土
13.
14. 暗黄茶色砂質粘土（地山で浸透をうけている?）
15. 黄色土地山のことか？

第87図　7区B断面実測
図東西トレンチ

1. 黄褐色土層，掘り方上部の上層である
2. 黄褐色礫層（白っぽい）掘り方上部の上層である
3. 白黄褐色土層
4. 白褐色層（千枚岩の風化した礫層）
5. 黒褐色土層（炭，土器片を含む）
6. 暗褐色土層（炭，土器片を含む）
7. 灰褐色土層（粘質）
8. 暗黒褐土層（粘質）
9. 褐色土層（白っぽい）掘り方上部の上層である
10.
11. 灰黒褐色土層
12. 灰褐色土層（礫層）
13. 黒褐色砂質上層
14. 千枚岩堆積の溝（暗渠）

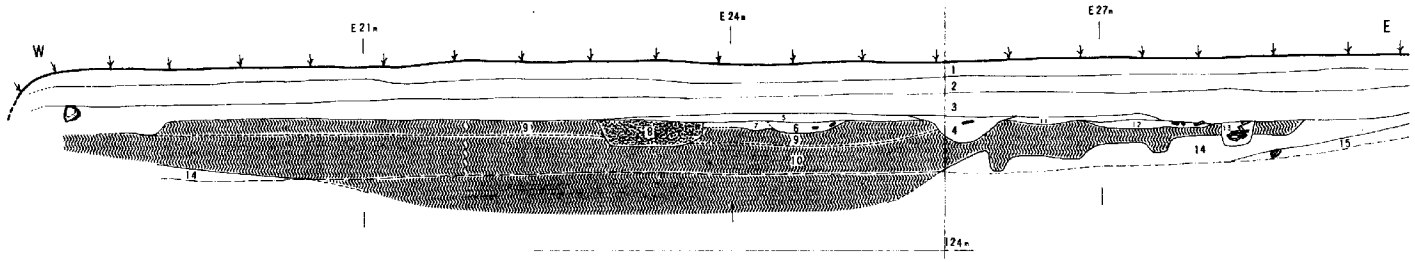
第88図　7区C断面実測
図5区との境東
西方向

1. 灰白色耕土
2. 茶褐色小石，瓦を含む土層
3. 淡茶褐色小石，瓦を含む土層
4. 淡（茶）褐色微砂混り土層
5. 淡茶褐色千枚岩（を主に含む）土層
6. 淡黒褐色土層（千枚岩を含む）
7. 黄色千枚岩（を主に含む）淡褐色土層
8. 淡黒褐色土層
9. 黒色マンガン質土層
10. 暗黒褐色土層（瓦炭を含む）
11. 淡黒褐色土層（瓦炭を含む）
12. 風化千枚岩暗渠
13. 灰褐色粘質土層
14. 黒色土層（マンガン質）
15. 淡褐色風化千枚岩土層
16. 暗黒褐色（マンガン質）
茶褐色（粘土質）＞混土層
17. 千枚岩及び礫を上面に含む黄褐色岩磐地山

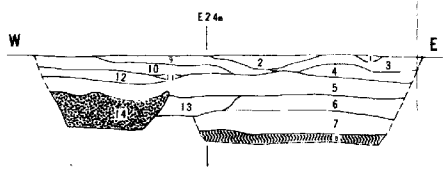
第89図　7区D断面実測
図1区との境東
西方向

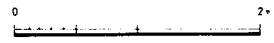
1. 灰白色耕作土
2. 淡黄褐色土層（ジャリを含む）
3. 茶褐色土層
4. 淡黄褐色土層（砂利を含む）
5. 淡茶褐色土層
6. 淡黄褐色風化千枚岩層
7. 黄色千枚岩層（土のような）
8. 暗褐色砂質粘土（混千枚岩，小礫）
9. 茶褐色砂質粘土層
10. 暗褐色粘土層（混りけなし）
11. 暗褐色粘土層（混千枚岩小斑点）
12. 暗灰青色粘土（整地か否か？）
13. 黒灰色粘土
14. 黒灰色砂質粘土
15. 千枚岩（地山）
16.
17. 茶褐色泥土層（瓦を含む炭）
18. 黄褐色千枚岩，混りの褐色土層
19. 褐色砂質粘土層
20. 暗褐色マンガン質粘土層
21. 暗褐色砂質粘土層
22. 黒褐色粘土層
23. 黄灰色砂質粘土（混小礫）
24. 黒褐色粘土層
25. 黒褐色粘土層
26. 黒色粘土層（混黄色千枚岩片）
27. 淡茶色土層（攪乱）
28. 黒褐色粘土

第86図　７区Ａ断面実測図２区との境東西方向

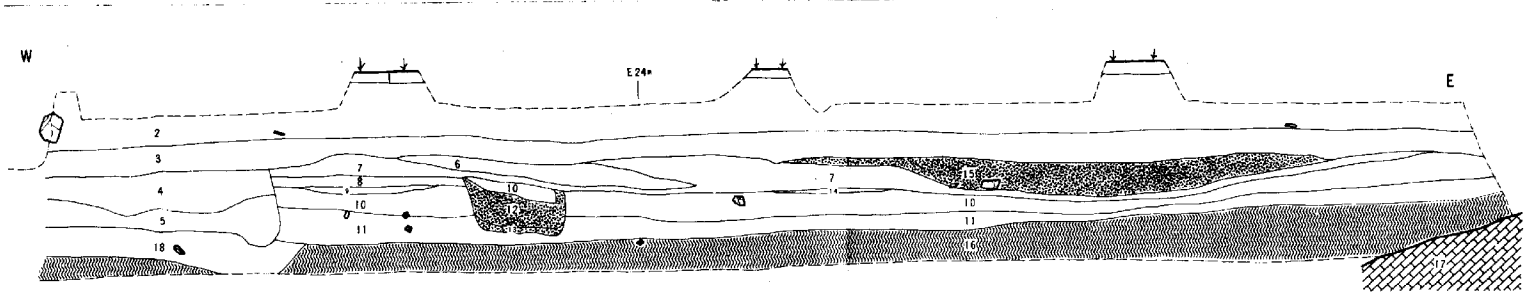



第87図　７区Ｂ断面実測図東西トレンチ

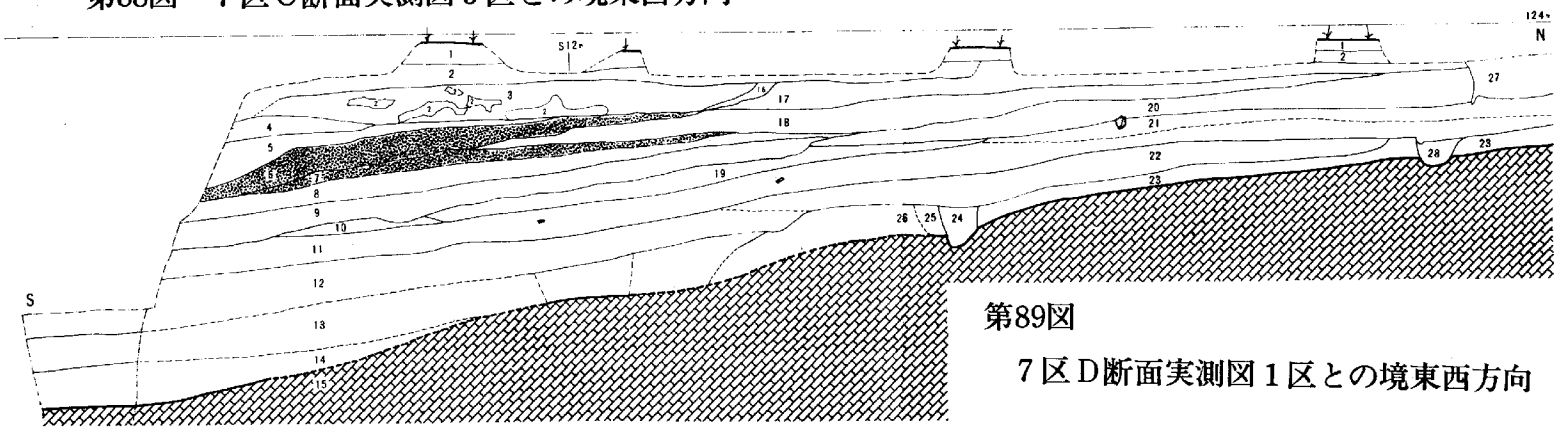



S＝1/50

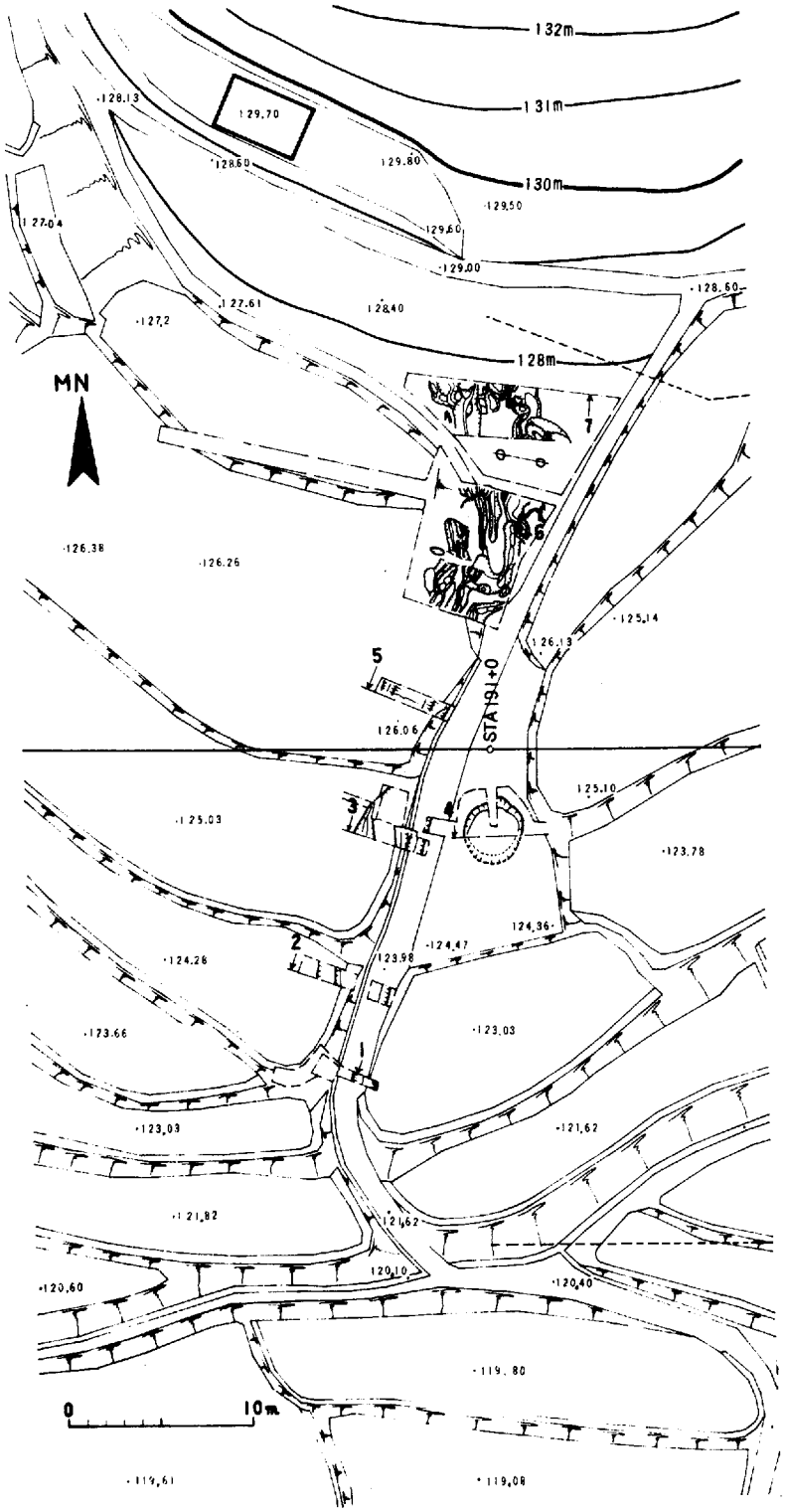



第88図　７区Ｃ断面実測図５区との境東西方向

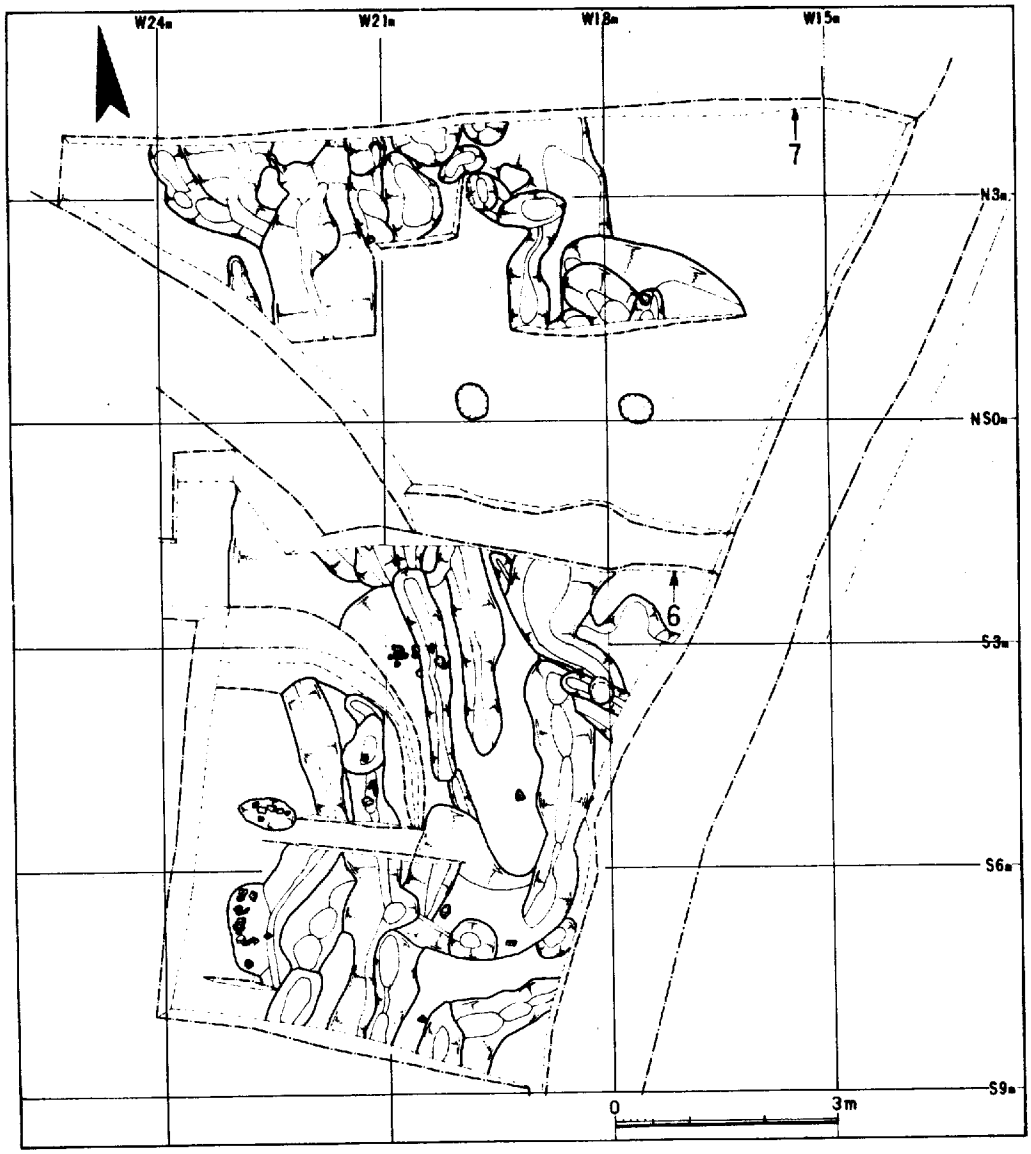



第89図

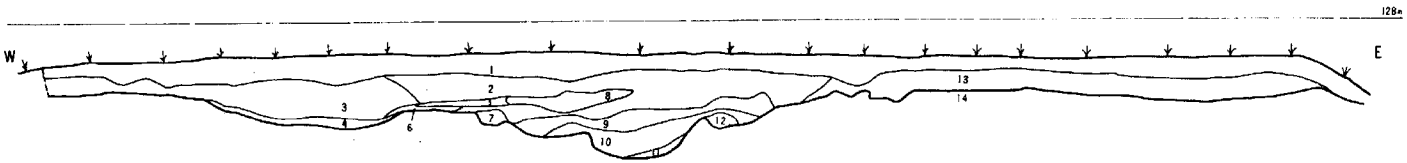
７区Ｄ断面実測図１区との境東西方向



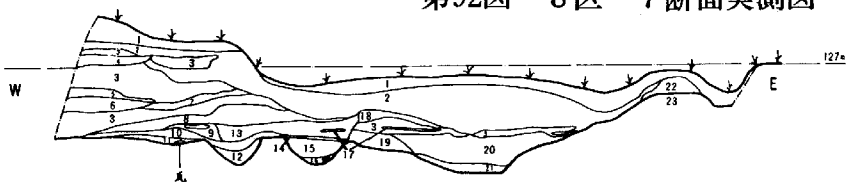

第90図　8区トレンチ発掘実測図（S＝1/400）

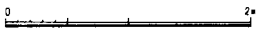



第91図　8区6・7地点実測図（S＝1/100）

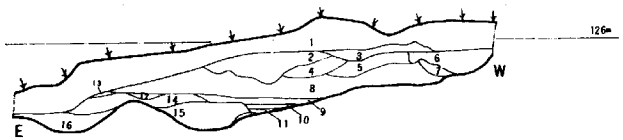



第92図　8区　7断面実測図

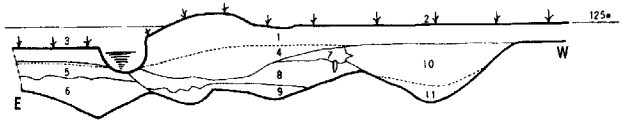


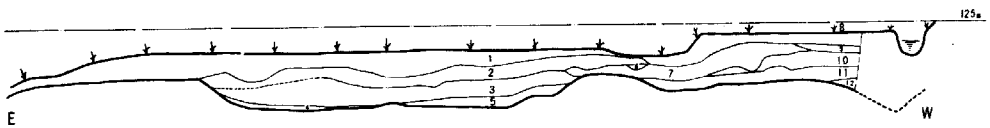

第93図　8区　6断面実測図



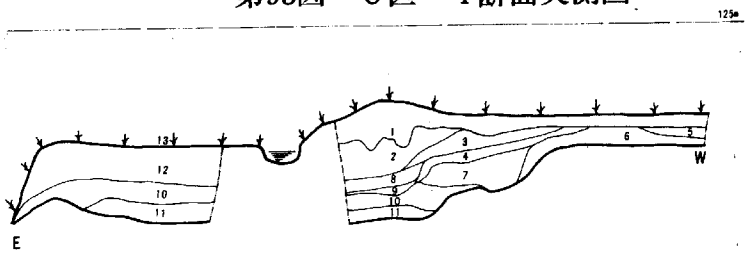

第94図　8区　5断面実測図



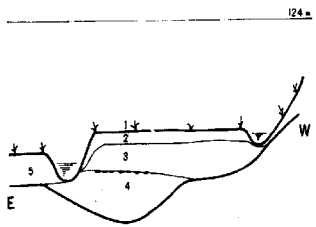

第96図　8区　3断面実測図




第95図　8区　4断面実測図




第97図　8区　2断面実測図




第98図　8区　1断面実測図

第92図　8区久米廃寺西端築地トレンチNo.7北壁土層断面図1/20

1. 表土（黒色腐蝕土）
2. 茶褐色土層（礫含）
3. 褐色土層（小礫を少し含む）
4. 灰褐色土層
5. 灰褐色土層
6. 淡赤褐色土層
7. 灰褐色土層
8. 黄灰色土層（礫含）
9. 白灰色粘質土層（地山土類似）
10. 茶褐色土層
11. 黄褐色粘土層
12.
13. 褐色土層（小礫を少し含む）
14.

第93図　8区西端築地トレンチNo.6北壁土層断面図1/20

1. 表土（黒色腐蝕土）
2. 褐色土層（礫を含む）
3. 灰褐色粘質土層
4. 暗褐色砂質土層
5. 黒褐色砂質土層（小礫を含む）
6. 黄褐色粘質土層（土質及び色調は①とほとんど同じであるが，やや暗い色を呈す）
7. 暗褐色砂質土層
8. 黄褐色粘土層（土質及び色調は①とほとんど同じであるが，やや暗い色を呈す）
9.
10. 灰褐色粘質土層（礫を含む）
11. 灰褐色礫層（小礫から成る）
12. 礫まじり褐色土層
13.
14. 黄褐色粘質土層
15.
16. 黄褐色粘質土層
17. 暗褐色砂質土ブロック
18.
19.
20. 黄褐色土層
21. 黒褐色礫層
22. 褐色土
23.

第94図　8区西端築地トレンチNo.5南壁土層断面図1/20

1. 耕土，暗褐色
2. 黄褐色土層（灰黄色粘土ブロックを含む）
3. 黄褐色土層（(2)層よりやや黒っぽい）
4. 灰褐色土
5. 暗褐色土　}（いづれも砂質で小礫を含む）
6. 灰褐色土層
7. ⑤とほぼ同じであるが粘土（灰黄色）が含まれない。
8. 灰褐色土層
9. 黄褐色土層（粘質）
10. 灰褐色土層（粘質）
11. 黄褐色土層（粘質）
12. 褐色土層（赤味を帯び砂質）
13. 褐色土層（赤味を帯び砂質）
14. 灰褐色土層（粘質）
15. 暗褐色土層（小礫を含み砂質でザラザラである）
16. 灰褐色土層（粘質でなく良質の土層）

第95図　西端築地トレンチNo.4

1. 表土灰褐色砂礫層
2. 埋土層，山石少ない茶褐色細砂層
3. 山石（千枚岩ぬめら）混り多い
   灰色粘土まじり茶褐色土層，埋土層
4. 茶褐色微砂層
5. 茶褐色細砂層
6. 灰褐色粘土層
7. 黒色土層
8. 道路面
9. 礫混り茶褐色土（道路のための埋土）
10. 黄色細砂
11. 黄褐色粗砂（小石混）
12. 黄褐色粗砂

第96図　8区久米廃寺西境界線No.3遺物小屋付近東西断面図1/20

1. 表土灰色粘土（水田耕土）
2. 水田面
3. 路面
4. 埋土
5. 黄褐色細砂（小石多し）
6. 黄褐色粗砂
7. 茶褐色粗砂層（小石混り）
8. 埋土（水平にたたきしめたような土層／硬い／白と黄色の互層／砂層が主で径0.5cmの小石が少しまじり）
9. 黄褐色粗砂（小石混）
10. 粗細砂が強い砂混
11. 粗砂　茶色　自然堆積

第97図　8区西端築地トレンチNo.2南壁土層断面図

1. 耕土……灰褐色土層
2. 耕土……灰黒色土層
3. 黄褐色土層　小礫（粘板岩？）を含む
4. 粘質土層（灰黒色）
5. (2)とほぼ同様である。
6. 黄褐色土層（やや固い）
7. 褐色土層（さらさらとしていて良質な土層である）
8. (3)とほぼ同じであるが礫は少し大きい
   やや黄色を帯びている。
9. 灰褐色粘質土層
10. 灰褐色土層……やや黒っぽく固め
11. 灰褐色土層……礫まじり
10′ (10)に対応する
11′ (11)に対応する
12. 黒褐色攪乱土層（礫を含む）
13. 道路

第98図　8区西端築地トレンチNo.1北壁反転断面図1/20

1. 路面
2. 表土
3. 攪乱
4. 黄褐色微砂層と黄色粘土層
5. 灰色粘土（旧水田）

写真1

久米廃寺付近の空中写真　（アジア航測株式会社撮影）

3　久米廃寺遠景　①　鋳場古墳群より左から領家，久米，宮尾遺跡むこうは鏡野平野

領家遺跡　　久米廃寺

1　久米廃寺遠景　②　南々西より

宮尾遺跡　　嵯峨山

2　久米廃寺より宮尾遺跡をのぞむ　（西より）

写真4

1　1区建物Ⅱ全景　北西より

2　1区建物Ⅱ全景　北西より

1　1区建物Ⅱ全景　西南より

2　1区建物Ⅱ　西北部

写真6

1　1区建物Ⅱ全景　東北より

2　1区建物Ⅱ全景　東南より

1　1区建物Ⅱ北溝　西より

2　1区建物Ⅱ北溝　東より

写真8

1　1区建物Ⅱ　東北より

2　1区建物Ⅱ南溝附近　東より

1　1区建物Ⅱ西溝上層全景　南より

2　1区建物Ⅱ西溝と畦畔　北より

写真１０

1　１区建物Ⅱ西溝掘り上げ状況　南より

2　１区建物Ⅱ西溝掘り上げ状況　北より

1　1区建物Ⅱ西溝北半部分下層　南より

2　1区建物Ⅱ西溝上層　北より

写真１２

１　１区建物Ⅱ北半部　東南より

２　１区建物Ⅱ西北部　北より

1　1区南端溝状遺構　西より

1区建物Ⅱ南端部　西より

写真14

1区建物Ⅱ南端部溝状遺構　西南より

1区建物Ⅱ南端部溝状遺構　南より

1区建物Ⅱ南端部溝状遺構　南より

① ① 南より
北より

② ③ 北より
北より

④ ⑤ 北より
北より

⑤ ⑥ 北より
東より

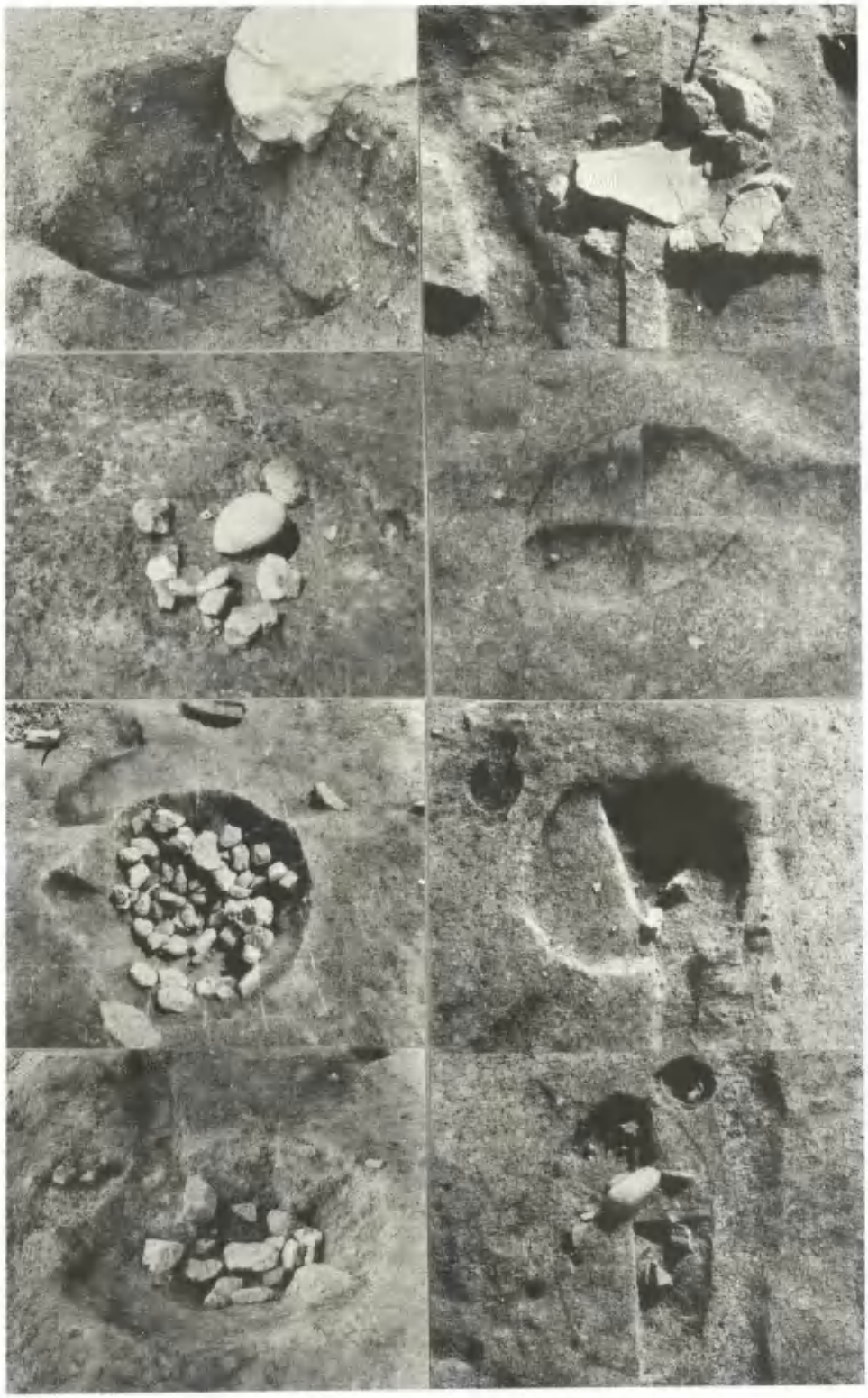
1区建物Ⅱ 礎石集成1

写真１６

⑦ 北より
⑧ 北より
⑧ 南西より
⑨ 北より
⑨ 北東より
⑩ 北より
⑩ 南西より
⑩ 南より

１区建物Ⅱ礎石集成２

写真17



⑩ ⑪ 北より
南東より

⑫ ⑬ 北より
南東より

⑭ ⑮ 北より
北より

⑲ ⑯ 北より
南より

1区建物Ⅱ礎石集成3

写真１８

⑱ ⑱ 南東より
⑱ 北より

⑲ ㉑ 北より
⑲ 南より

㉒ ㉒ 西より
㉒ 北より

㉒ ㉒ 北より
㉒ 北東より

１区建物Ⅱ礎石集成４

1　１区建物Ⅱ　　Ｗ１２西溝の断面　南より
最初に発見された溝

2　１区第一次調査Ｄ地点Ｗ７．Ｗ６　南より

写真２０

1　１区建物Ⅱグリット発掘状況　東北東より

2　１区建物Ⅱグリット発掘状況　西北より

1　1区建物ⅡW7南北断面北溝断面　西より

2　1区建物Ⅱ南北断面W7磁石　④　北側西より

写真２２

1　1区建物Ⅱ北溝断面W10N1　西より

2　1区建物Ⅱ北溝断面W10N1　東より

１　１区建物Ⅱ西溝断面Ｓ２　東南より

１　１区建物Ⅱ西溝断面ＮＯ　東南東より

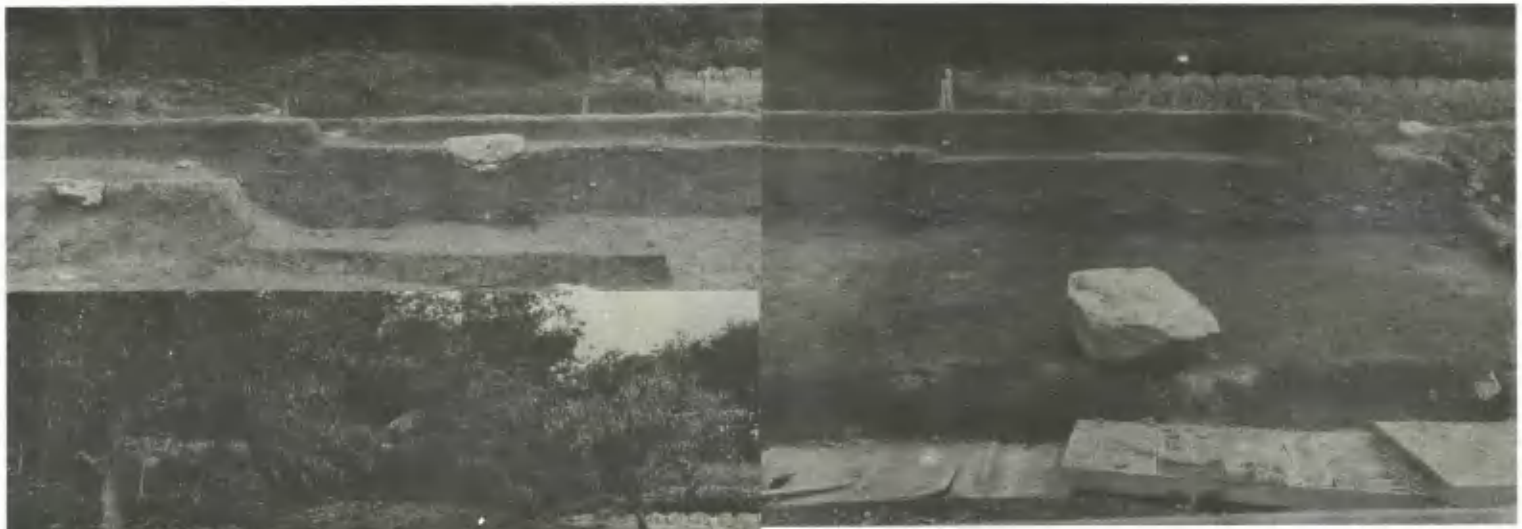
２　１区建物Ⅱ西溝東西断面Ｓ３　南より

▲1　1区Ｓ２東西断面Ｗ６～Ｗ１０　南より

▲2　1区Ｗ７南北断面センターからＳ３　西より

▲3　1区Ｗ１０南北断面Ｓ３～Ｓ４　西より

▲4　1区Ｗ７南北断面Ｓ５～Ｓ７　西より



1　1～2区東西断面　南からW4～W7



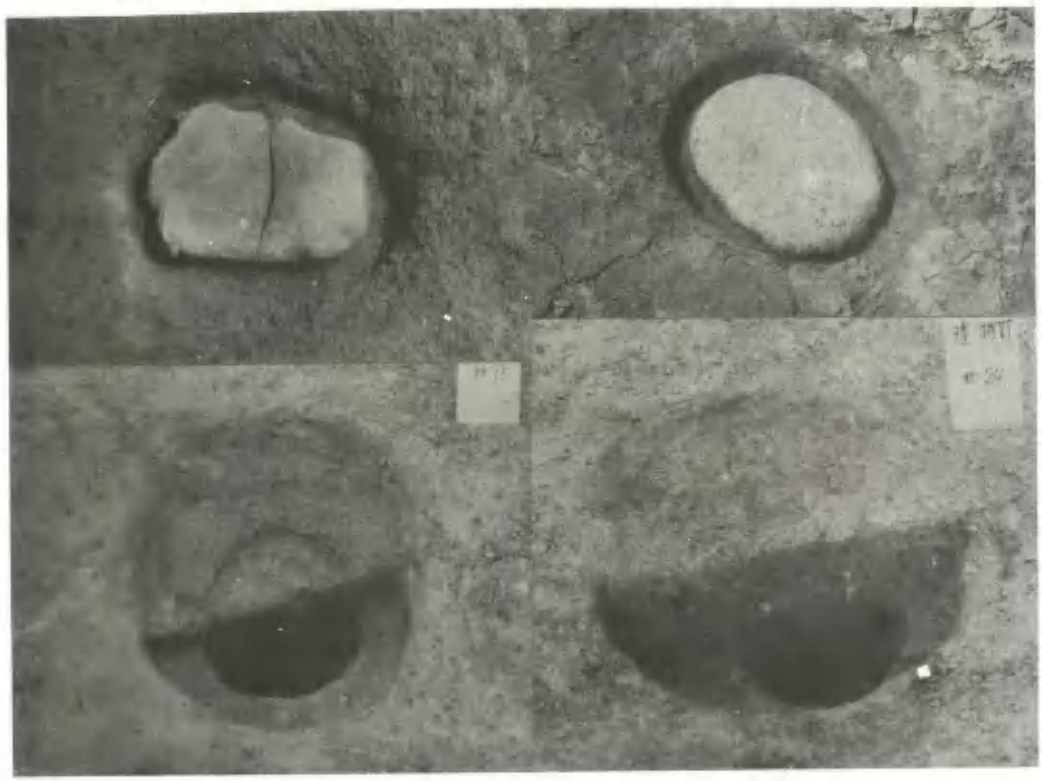
2　1区建物Ⅱ東溝断面センター　南よりW6～W7

写真２６

1　1区建物Ⅵ　東より

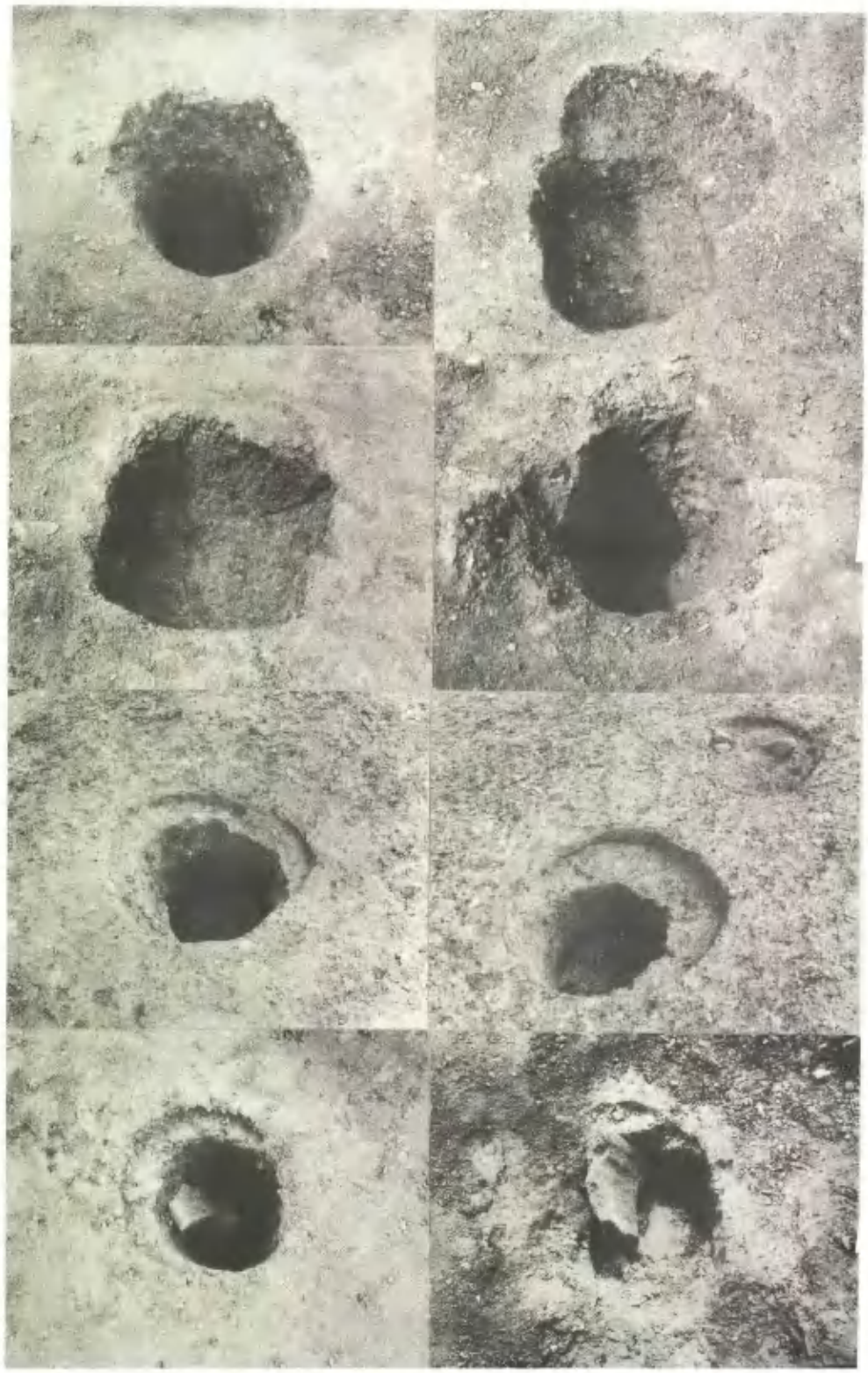
2　1区建物Ⅵ　東より

▲1　１区建物Ⅳ全景　東より



１区建物Ⅳ　㉓　北より
柱穴　　⑮　北より
⑥　南東より
㉔　東より

写真28



①②南より
①南より

⑧南より
③西より

⑩北東より
⑨北東より

⑯東より
⑫北より

1区建物Ⅱ外周柱穴集成

1　1区W５S１礎石　東より

2　1区W５S１礎石　（北より）

1区W５S１礎石　（西より）

写真３０

１区建物Ⅱ柱穴４２　（南から）

１区建物Ⅱ西北部崖の角

１区建物Ⅱ中央部ｐｉｔ４５　東より

１区建物Ⅱ中央部ｐｉｔ４６

１区建物Ⅱ中央ｐｉｔ４８　東より
むこうは４７

１区建物Ⅱ中央部ｐｉｔ４８　北より

1　１区凹み全景　東南より

2　１区凹み全景　北より

写真３２

1　1区凹みⅠ全景　東より

2　1区西方凹みⅠ全景　西南より

1　１区凹みⅡ全景　東より

2　１区凹みⅢ南北断面　（東から）

写真３４

1　1区建物Ⅰ　軒丸瓦Ⅰ－A出土状況
東北部溝の中　東より

2　1区グリッド発掘中畑のうね

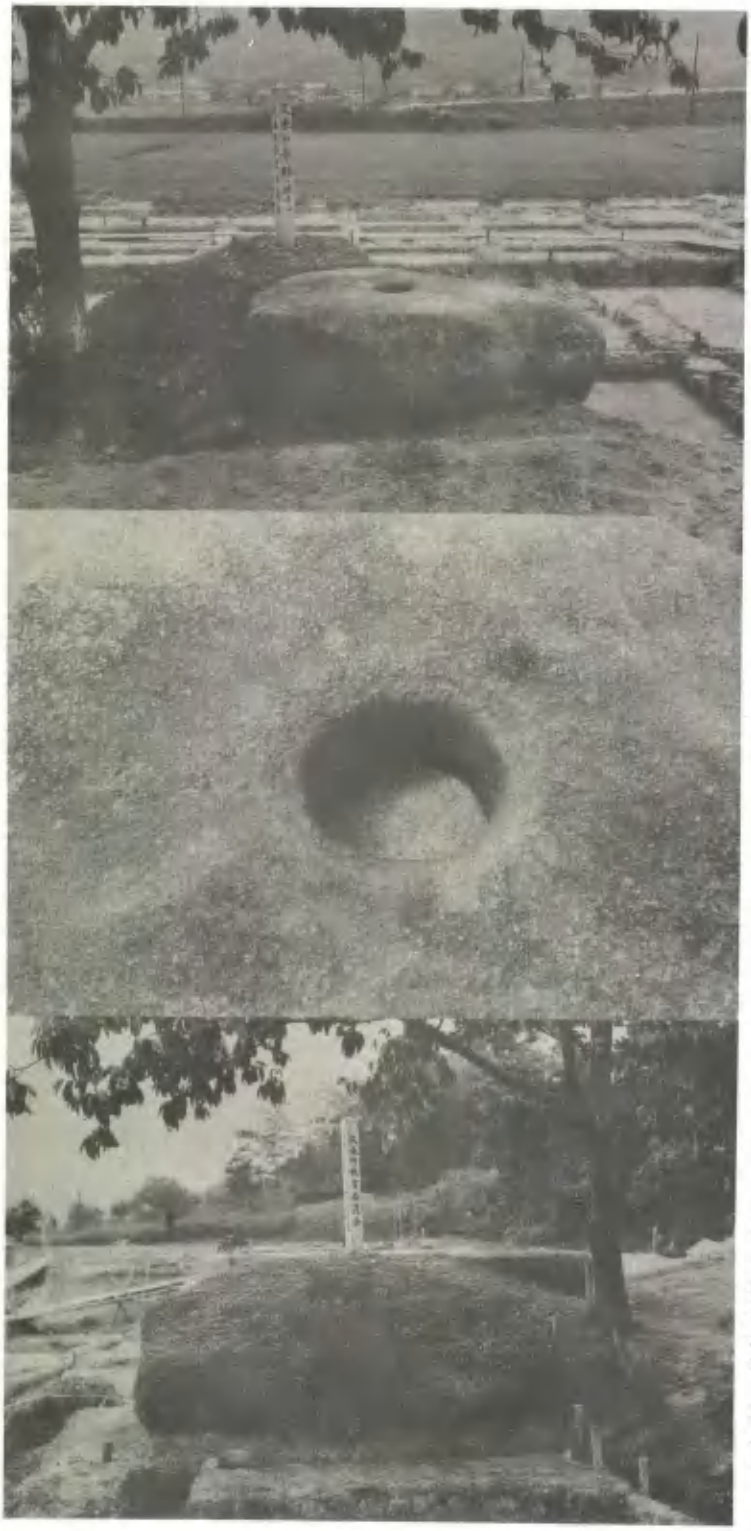
3　1区平瓦出土状況　南より

4　1区建物Ⅱ南端部溝状遺構底部
出土軒瓦Ⅰ－B

1　2区建物1（塔）心礎　真上より

2　建物1（塔）塔心礎西側断面，版築の状況　西より

写真36



2区建物1（塔）塔心礎　北より

2区建物1（塔）塔心礎　東南より

2区建物1（塔）心礎の土壇　東より

1　2区建物1（塔）基壇，全景　北より

2　2区建物1（塔）建物V，全景　北西より

写真38

1　2区建物1（塔）基壇，全景　北東より

2　2区建物1（塔）建物Vの間，基壇及び雨落溝　北東より

写真39

1　2区建物Ⅰ（塔）基壇、北東部　北東より

2　2区建物Ⅰ（塔）北溝　西より

写真４０

1　２区建物１（塔）建物N基壇北西部　北西より

2　２区建物１（塔）西南部全景　南より

1　2区建物1（塔）西溝東西断面　南より

2　2区建物1（塔）西溝東西断面　南より

写真42

1　2区建物1（塔）西側石組部分　西より

2　2区建物1西溝北半部　北より

1　2区建物1（塔）北側南北壁　西北より

2.　2区建物1 南北断面の 部分版築断面　西より

写真４４

1　２区建物１（塔）東溝・建物Ｖ西溝検出状況　南より

2　２区建物１（塔）建物Ｖ雨落溝　南より

1　2区建物Ⅰ（塔）基壇北辺東半部　瓦出土状況　北東より

2　2区建物Ⅰ（塔）基壇北辺東半部　瓦出土状況　東より

写真４６

1　２区建物Ⅰ（塔）北辺基壇，東半部，瓦出土状況　北西より

2　２区建物Ⅰ（塔）北辺基壇，東半部，瓦出土状況　北西より

1　1区～2区の間瓦だまり出土鉄製矛柄部

2　2区建物Ⅰ北側九輪破片出土状況

3　1区～2区間瓦だまり出土鉄製矛刃部

4　2区西側瓦だまり出土水煙破片

3　2区建物Ⅰ（塔）東南部ｐｉｔ　南西より

1　2区建物Ⅰ（塔）西北角雨落溝内ｐｉｔ　南より

4　2区建物Ⅰ西側石だまり　（北より）

区建物Ⅰ（塔）西北角雨落溝内ｐｉｔ土器出土状況　南よ

1　２区西北部仏像だまり　西より

2　２区西北部仏像だまり　北より

写真５０

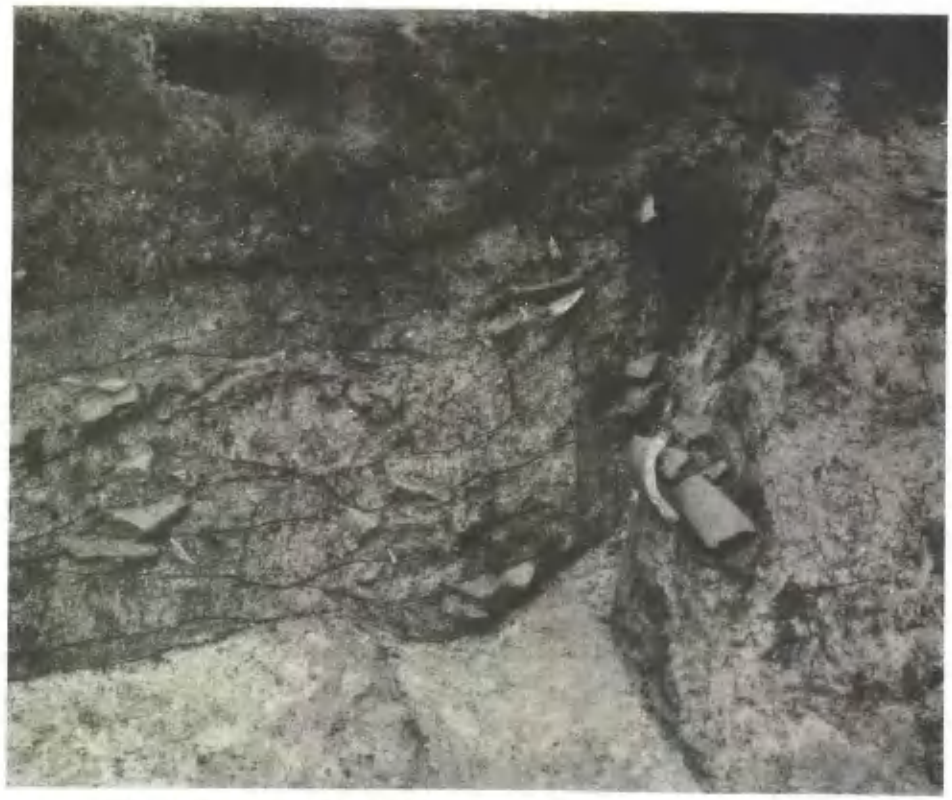
1　２区西北部仏像だまり，顔出土状況　北より

2　２区西北部仏像だまり，頭髪出土状況

1　２区西北部仏像だまり　東より

2　２区建物Ⅰ（塔）北東部Ｃ層，石帯出土状況　南東より

写真５２



1　２区建物Ⅴ東西断面基壇裾部分　南より

2　２区建物Ⅰ（塔）基壇西北部角柱穴

▲1　2区建物Ⅴ南北断面北側　西より

▲2　2区建物Ⅴ南北断面南側　西より

▲3　建物Ⅴ東西断面　北より

写真５４

1　２区建物Ｖ全景　東北より

2　２区建物Ｖ全景　西北より

1　建物V，東北隅部分及び北溝　西北より

2　建物V，東南部分　南より

写真５６

1　２区建物Ｖ基壇北西角　北西より

2　建物Ｖ北溝　東より

1　３区　D断面，西端部　南より

2　３区　D断面全景　南より

写真５８

1　3区　D断面　西南より

2　3区　C断面　東より

1　3区　溝，北端部瓦出土状況　北から

2　3区　溝，北端部瓦出土状況　南より

写真６０

1　3区A断面　北より

2　3区B断面部分 溝から出土状況　南より

1　3区建物Ⅱ全景　北西より

2　3区建物Ⅳ全景　南より

写真62

1　3区　F断面　南より

2　3区　F断面とその南側全景　南より

1　３区南端部　東北東より

2　３区南端部　西より

1　4区南西部トレンチF地点　柱穴　東より

2　4区南西部トレンチF地点　土器出土状況　南より

3　4区南西部トレンチF地点　南より

1　4区南北トレンチ建物Ⅲ掘立柱発見状況　東より

2　4区南西部トレンチF地点
柱穴　東より

3　4区南西部トレンチF地点　北北西より

写真66

1　4区トレンチ建物Ⅲ発見状況　南南東より

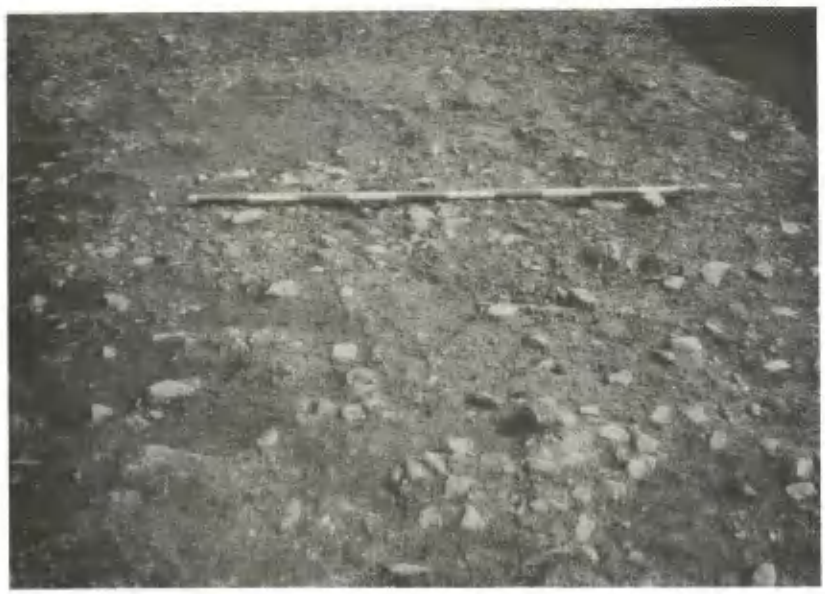
2　4区建物Ⅲ，掘立柱6　東より

3　4区建物Ⅲ，掘立柱5　東より

4　4区建物Ⅲ，掘立柱4　東より

5　4区建物Ⅲ，掘立柱8　南西より

1　４区南北トレンチ，最初に発見した掘立柱7



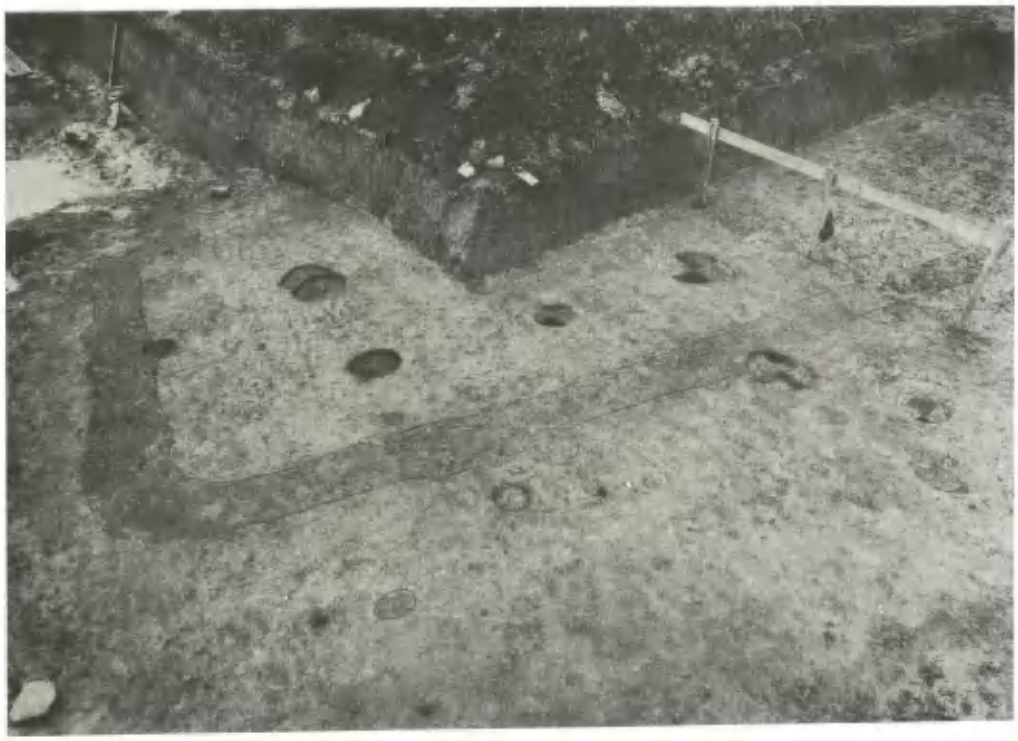
2　４区建物Ⅲ，上面を覆う礫と土器片

写真６８

1　4区川全景およびD断面　南より

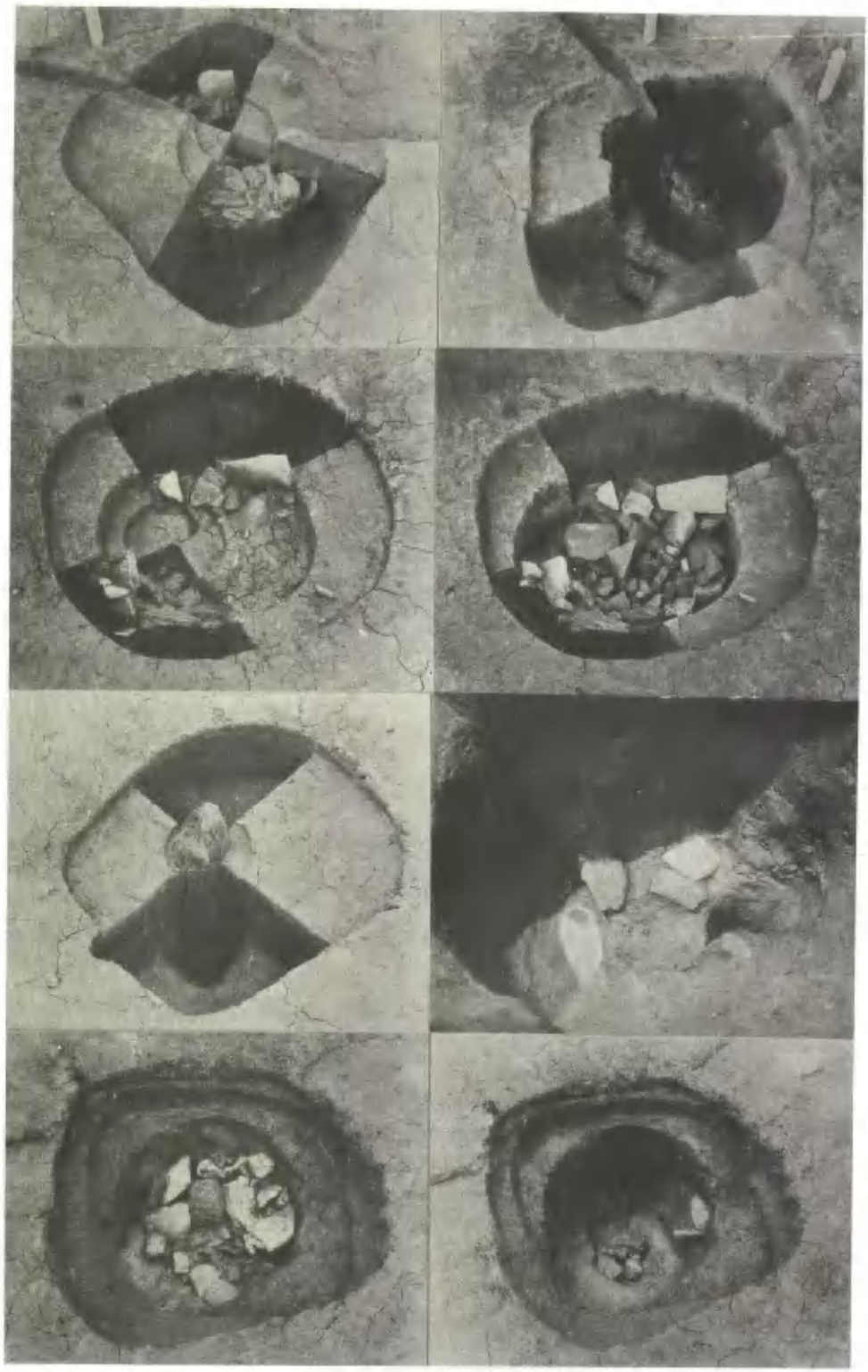
2　4区川全景　北より

1　4区建物Ⅲ，全景　東より



2　4区建物Ⅷ，柱穴　北西より

写真７０



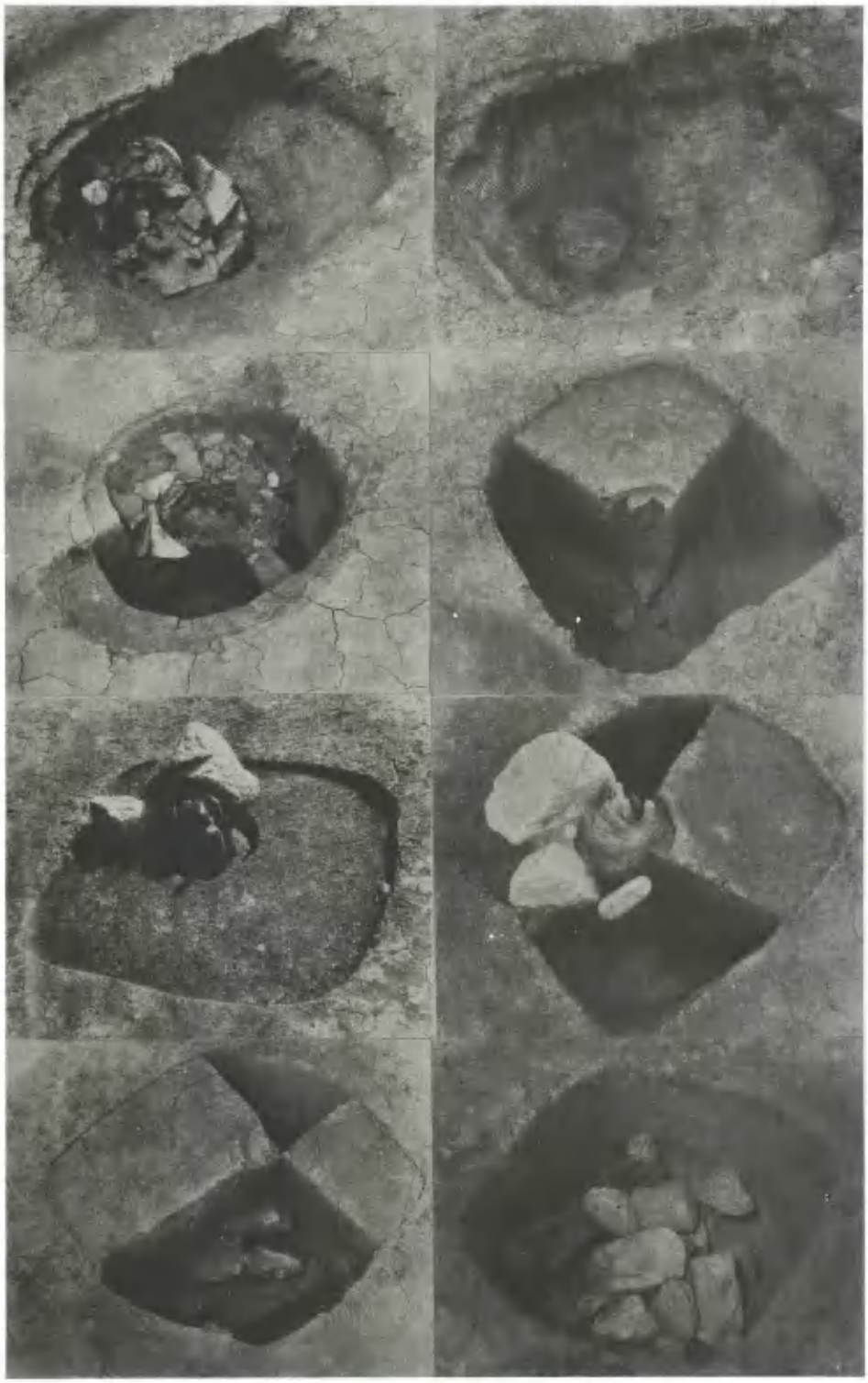
①　①　南東より
南東より

②　②　南東より
東より

③　③　北東より
南東より

④　④　東より
東より

4区掘立柱掘方1



⑤ ⑤ 東より
南東より

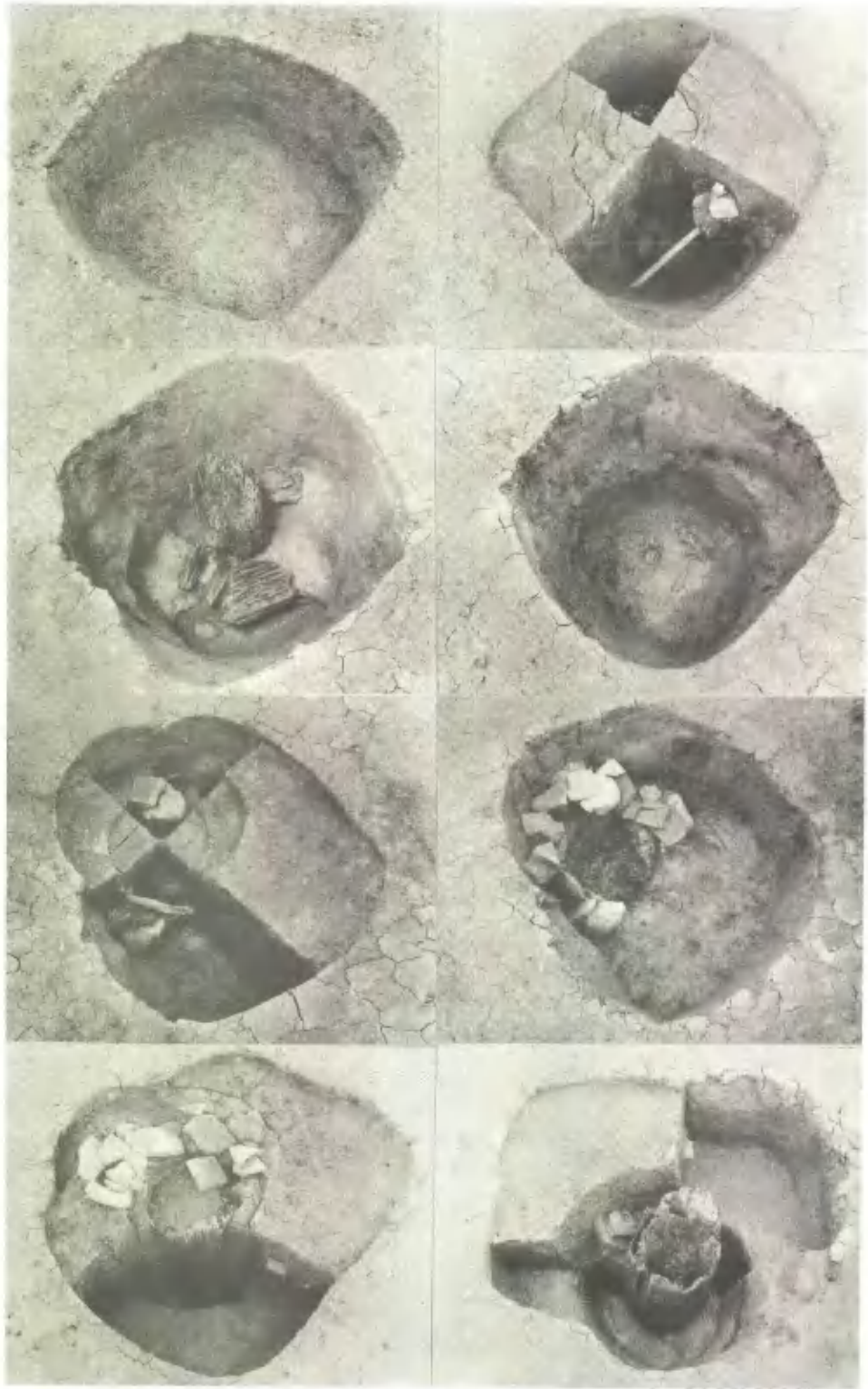
⑥ ⑧ 南東より
南東より

⑧ ⑧ 北東より
北西より

⑨ ⑨ 南東より
南東より

4区建物III 掘立柱掘方2

写真72



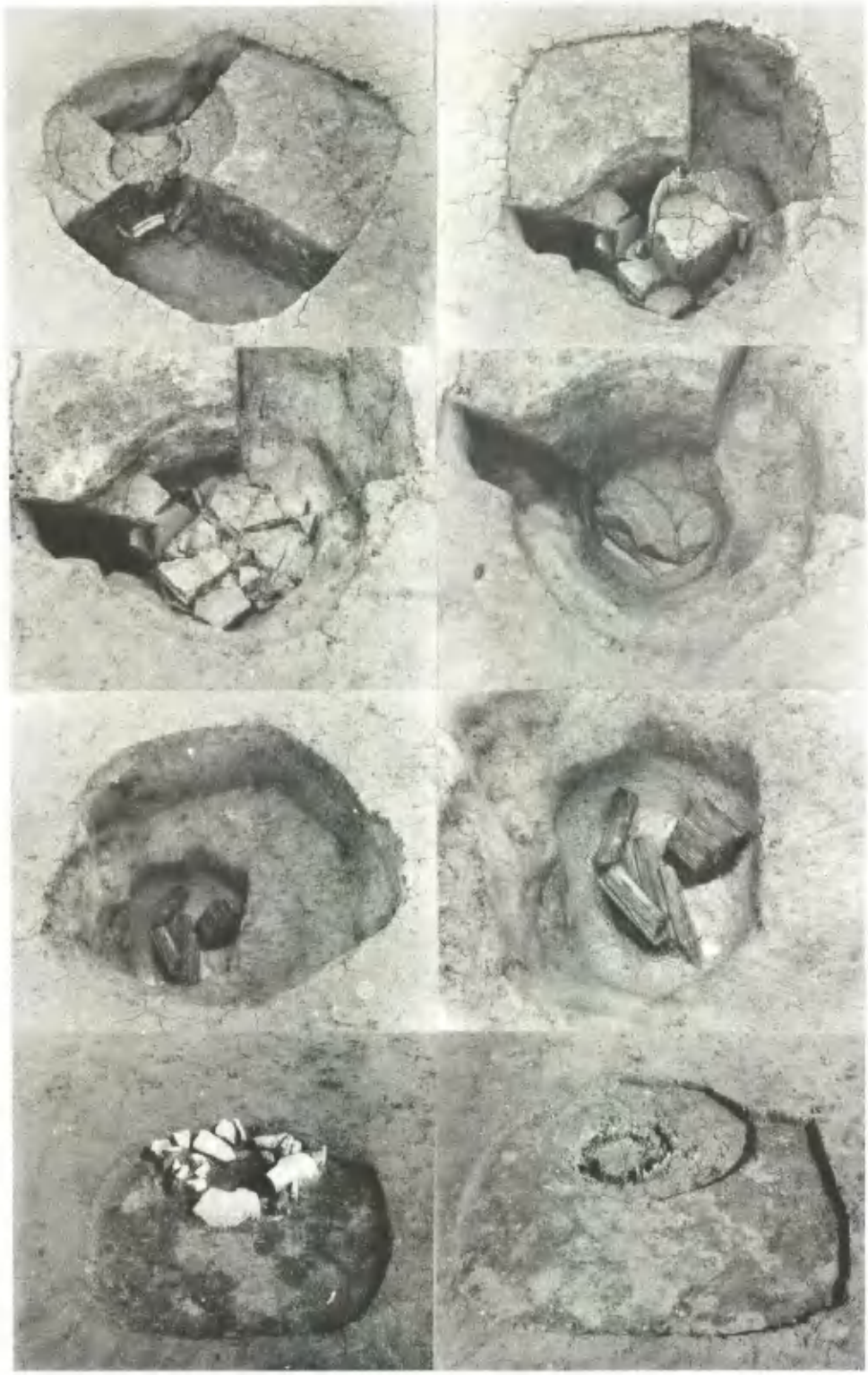
⑩ ⑩ 南東より
⑩ 南東より

⑩ ⑩ 南東より
⑩ 南東より

⑪ ⑪ 西より
⑪ 北西より

⑫ ⑫ 東より
⑫ 北西より

4区 建物Ⅲ 掘立柱掘方3



⑬ ⑬ 東より
南西より

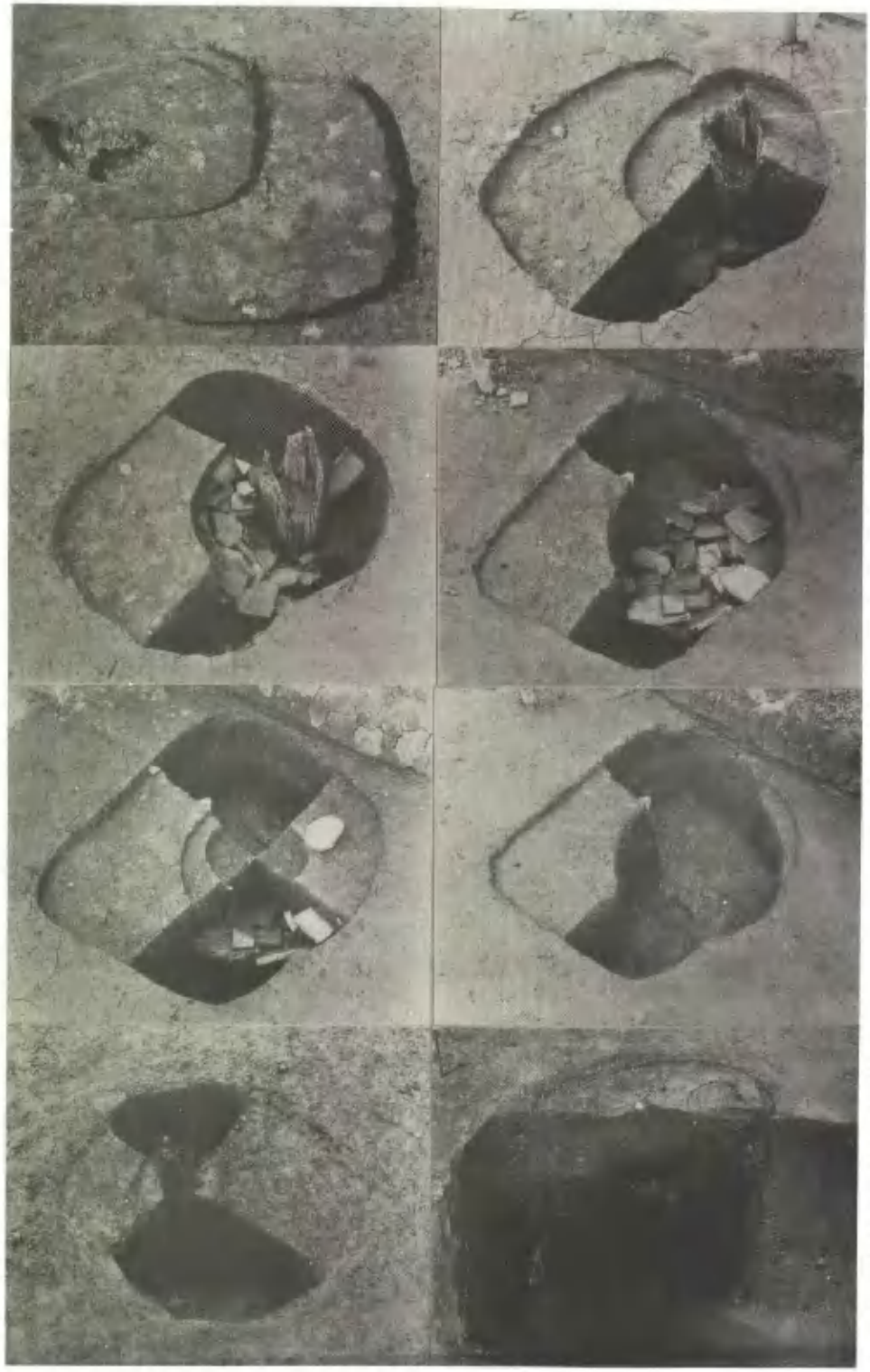
⑬ ⑬ 東より
東より

⑬ ⑬ 北東より
北東より

⑭ ⑭ 西より
西より

4区建物Ⅲ掘立柱掘方4

写真74



⑮ 南東より

⑮ 南東より

⑮ 南東より

⑮ 西より

⑯ 南東より

⑯ 南東より

4区建物Ⅷ柱穴A 東側より

4区建物Ⅲ東側柱穴列19 東南より

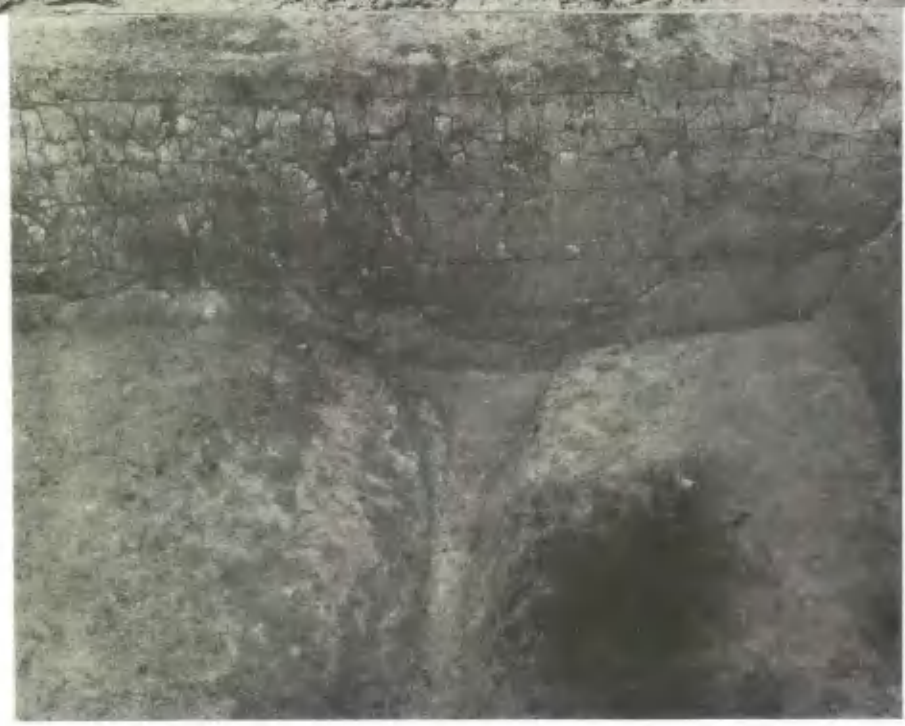
4区建物Ⅲ掘立柱掘方5その他

1　4区川全景およびD断面　南より

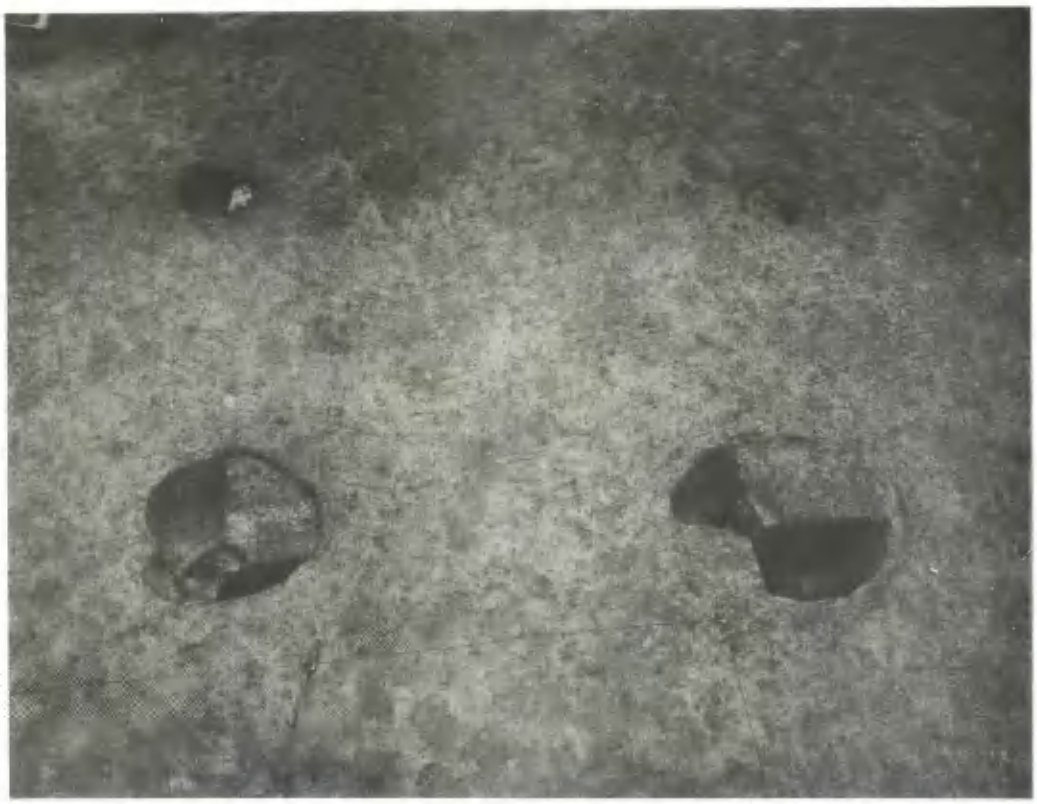
2　4区川全景　北より

写真76

1　4区川木材　北より



2　4区溝全景　南より



1　4区建物Ⅲ東側柱穴列　南より

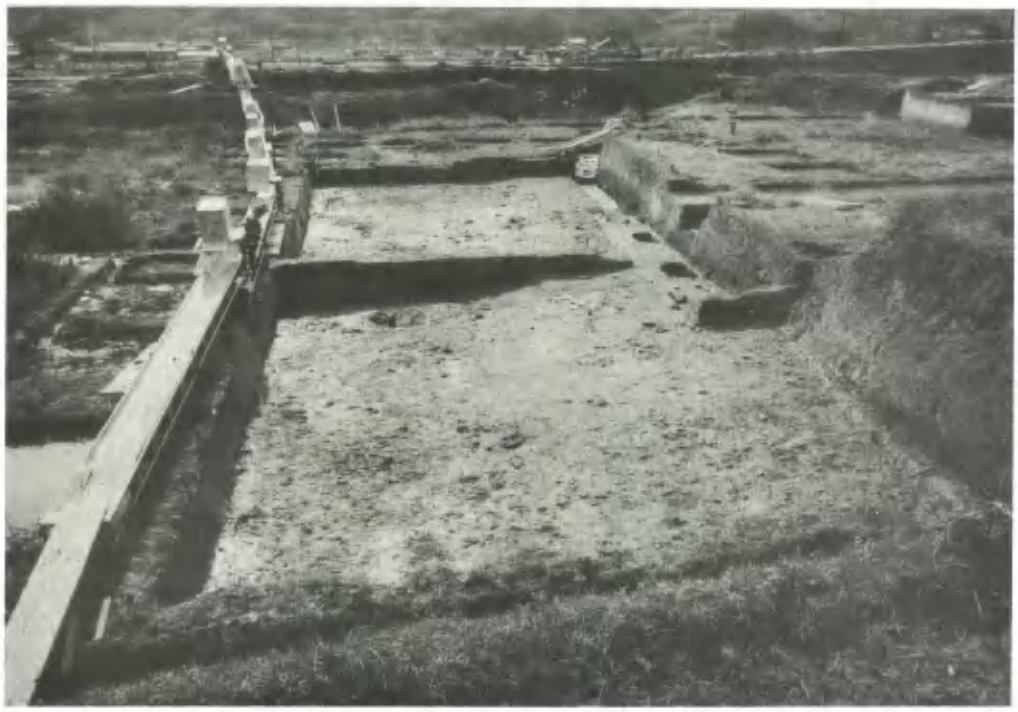
2　4区川岸西側の木材　東より

写真78

4区B断面　東南より

4区B断面　西より

▲４区Ａ断面　北より



▲４区建物Ⅲ検出状態　北より

写真８０

５区千枚岩溝　東より

５区全景　西より

5区凹み　東より

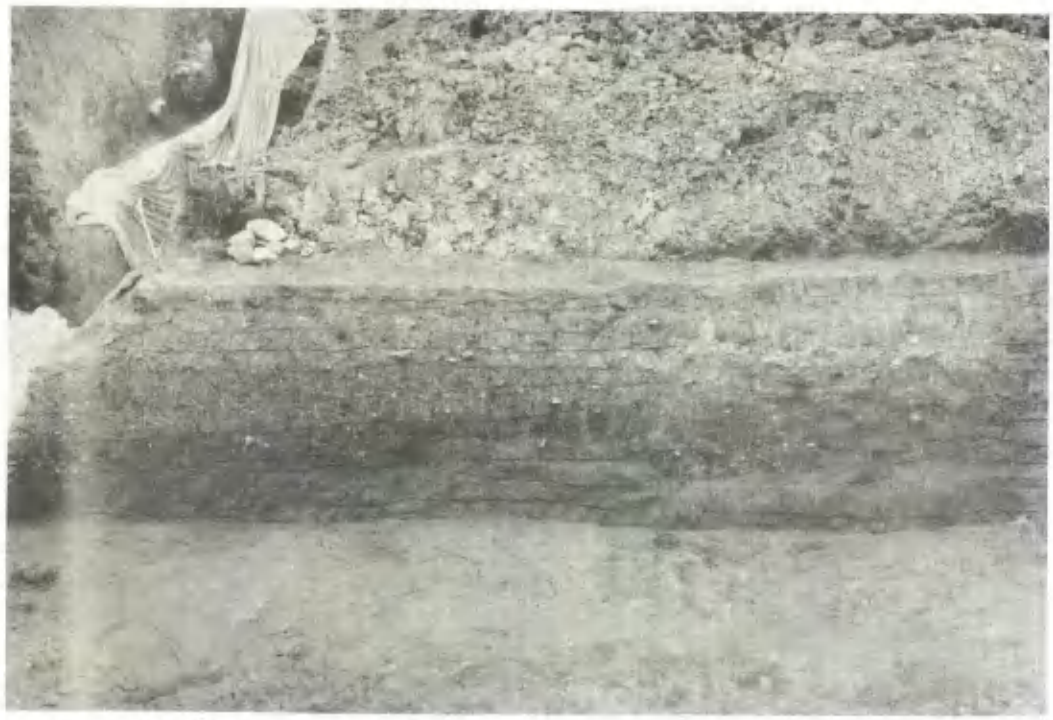
5区凹み内礎石　北東より

写真8 2

5区凹み内小石　南より

5区凹み内西側礎石　北東より

5区凹み内東側礎石　北東より



▲1　５区Ｊ断面　南より

▲2　５区Ｋ断面　南より

写真８４

1　S区L断面　東南より

2　S区L断面　西南より

1. ５区Ｍ断面センターＥ１まで　東南より

2. ５区Ｍ断面Ｅ２　東南より

写真８６

1. ５区M断面Ｅ２～Ｅ３　東南より

2. ５区M断面Ｅ３～Ｅ４　西南より

1 S区N断面（S9～S10）北西より

2 S区O断面（S11～S12）

写真８８

1. ５区Ｐ断面Ｓ８～Ｓ９　西北から

2. ５区Ｐ断面Ｓ１０溝の部分　西北から

7区A断面　南より

7区A断面千枚岩暗渠など　南より

写真９０

1　7区千枚岩暗渠平面　南から

2　7区C断面　西から

1　7区C断面、手前は5区　南より

2　7区C断面、千枚岩暗渠など　南より

写真９２

1 7区D断面（手前のトレンチはB断面） 東より

7区B断面、千枚岩暗渠 東南より

８区北端部　北西より

８区北端部の柱穴　南東より

1　8区北端部　北から

2　8区北端部　北から

3　8区北端部　西から

4　8区北端部　北西から

8区7断面　南より

8区6断面　南東より

写真９６

８区６断面南側地区全景　北西より

８区６断面南側地区全景　南東より

1　8区6断面南側地区　南より

2　8区6断面南側地区　南より

▲1　8区4断面　北より

▲2　8区5断面西側および凹み　北より

▲3　8区5断面西側　北より

▲2　8区2断面西側　西北より

◀1　8区2断面西側　西より

▲3　8区2断面東側　北より

写真１００

宮尾遺跡　　鯰蛾山

▲久米廃寺グリッド発掘全景（昭和４４年８月）　西より

▲鍬入式（昭和４４年３月）塔心礎付近　西より

▲東西第１トレンチ発掘風景　西より

（昭和４４年３月）

発掘調査一時休止状況（昭和４５年１月～６月）

1　ベルトコンベア運搬

2　第二調査，後半再開

3　1区発掘

4　写真撮影のため水とり

5　雪かき

6　瓦の発掘，建物Ⅱ西溝　南から

7　沢村仁氏指導

8　見学者　北から

写真１０２

▲1　瓦洗い

2　4区発掘風景

◀3　写真撮影

4　4区発掘風景

5　1区北側壁の発掘

6　調査事務所

7　3区埋め戻し状況

8　7区実測風景

塑造仏①頭髪（一点）（$\frac{1}{2}$）

左下は下からみたもので心棒を通した穴

心棒には縄状のものが巻いてあつたらしく螺旋がついている

塑像仏②顔面（三点）（$\frac{1}{2}$）

写真104

塑造仏③菩薩像　瓔珞・裳・裙（$\frac{1}{2}$）

塑造仏④菩薩像　裳・裙（$\frac{1}{2}$）

塑造仏⑤菩薩像　垂髪（上左）・頭髪（四点）
台座の反花（下左二点）　（$\frac{1}{2}$）

塑造仏⑥菩薩像　指先（十点）　$\frac{1}{2}$

塑造仏⑦天部か？（$\frac{1}{2}$）

写真１０６

塑造仏⑧如来像　螺髪（十五点）（$\frac{1}{2}$）

塑造仏⑨菩薩像　臂釧（四点）$\frac{1}{2}$

塼仏（実大）

2

3

文様瓦（$\frac{1}{4}$）1

2

3

墨書土器（$\frac{1}{2}$）

円面硯（$\frac{1}{2}$）

写真１０８

釘（$\frac{1}{2}$）右下三本は仏像留り出土

青銅製金具（$\frac{1}{2}$）

鉄製矛？$\frac{1}{2}$

鉄製鏃先（$\frac{1}{2}$）

相輪破片

写真１１０

軒丸瓦２類

軒丸瓦３類

軒平瓦２類

軒丸瓦４類

軒先瓦（$\frac{1}{3}$）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (4)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 2

昭和49年3月10日 印刷
昭和49年3月31日 発行

発行 岡山県教育委員会